野阿弥全集

第四巻

黙阿弥全集

第四巻

青年期の筆蹟

これは默阿彌の青年時代（二十五六歳の頃）に筆寫した正本（臺本）の一部である。鶴屋南北の世話物「當穐八幡祭」を手寫したもので、表紙の勘亭流も、中の本文もさうである。頭書きが役名でなく、役者の名前になつてゐるのは、ずつと後年までの正本の形式であつた。

東郷

東都
目黒
時頼
馬士小佛喜八
九

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第四卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第四卷目次

挿繪目次

茂呂宿の棒鼻に

ても珍らしき馬方の問答

佐野荘の侘住に

むかしゆかしき教訓の鉢木

佐野常世放下面授

「鉢の木」は安政五年十月、作者四十三歲の時市村座へ書卸した作で、原名題を「小春宴三組杯觴(こはるのえんみつぐみさかづき)」と呼び、白石噺、鉢ノ木、鈴ケ森の順序で、三つ組にしたものであつた。豐芥子の「花江都歌舞伎年代記續編」に、「この興行大出來大當りにて‥‥馬士問答鉢の木大評判、最明寺、佐野源左衞門夫婦の仕打その情合、まことに狂言とは思はれず、奇にして妙なり」とある如く時賴に扮した海老藏の腹藝と小團次の自由自在なる科白術とによつて、その頃にあつては實際澁い此の狂言も、相當の成果を收めたらしい。而して、この狂言の中大向うの見物が馬士問答の場で三千兩と褒め辭をかけたので、海老藏の機嫌が惡くなり、翌日になつて、お天道樣(海老藏)、お月樣(小團次)、すつぽん(與六)とどならせて、褒めなほしたので機嫌がなほつたといふ事や、佐野のある寺の僧侶が感激して、鉢の木の場で舞臺へ、五百疋の褒美を投げたなどといふ逸話が、この作には殘されてある。

書卸しの時の主なる役割は市川海老藏(最明寺時賴)、市川小團次(馬士小佛藤六、佐野源左衞門常世)、四世尾上菊五郎(源左衞門妻白妙)、淺尾與六(二階堂信濃守)、中村歌女之丞(源左衞門妹玉笹)等である。

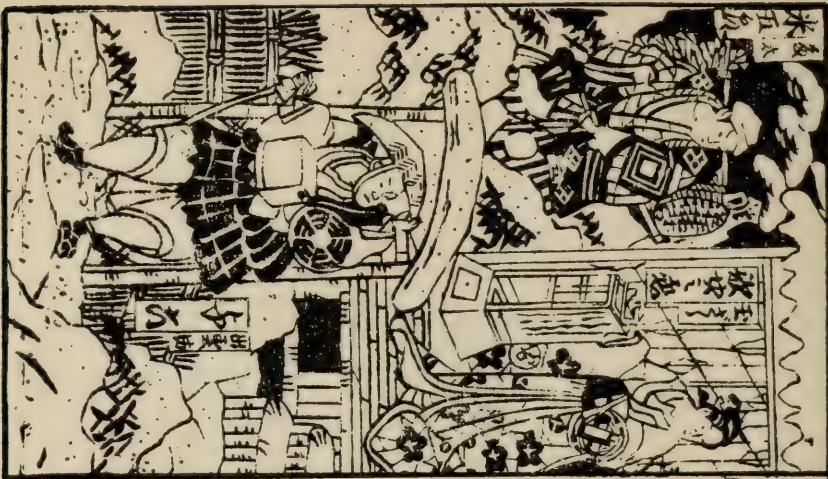
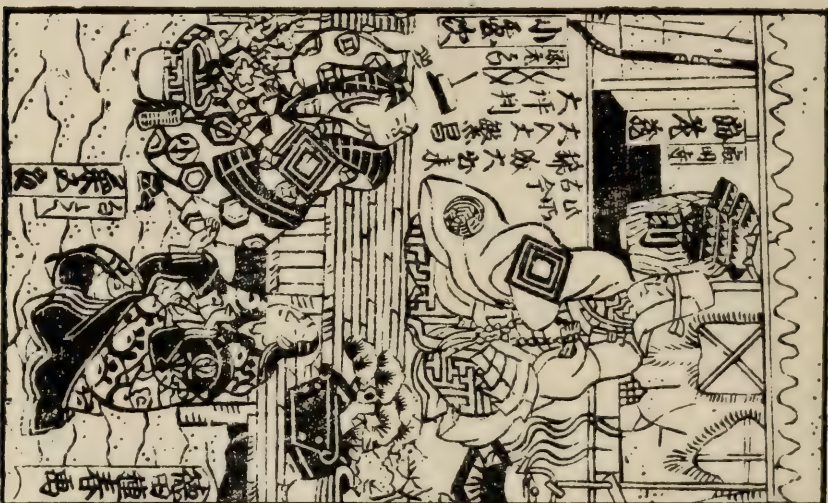
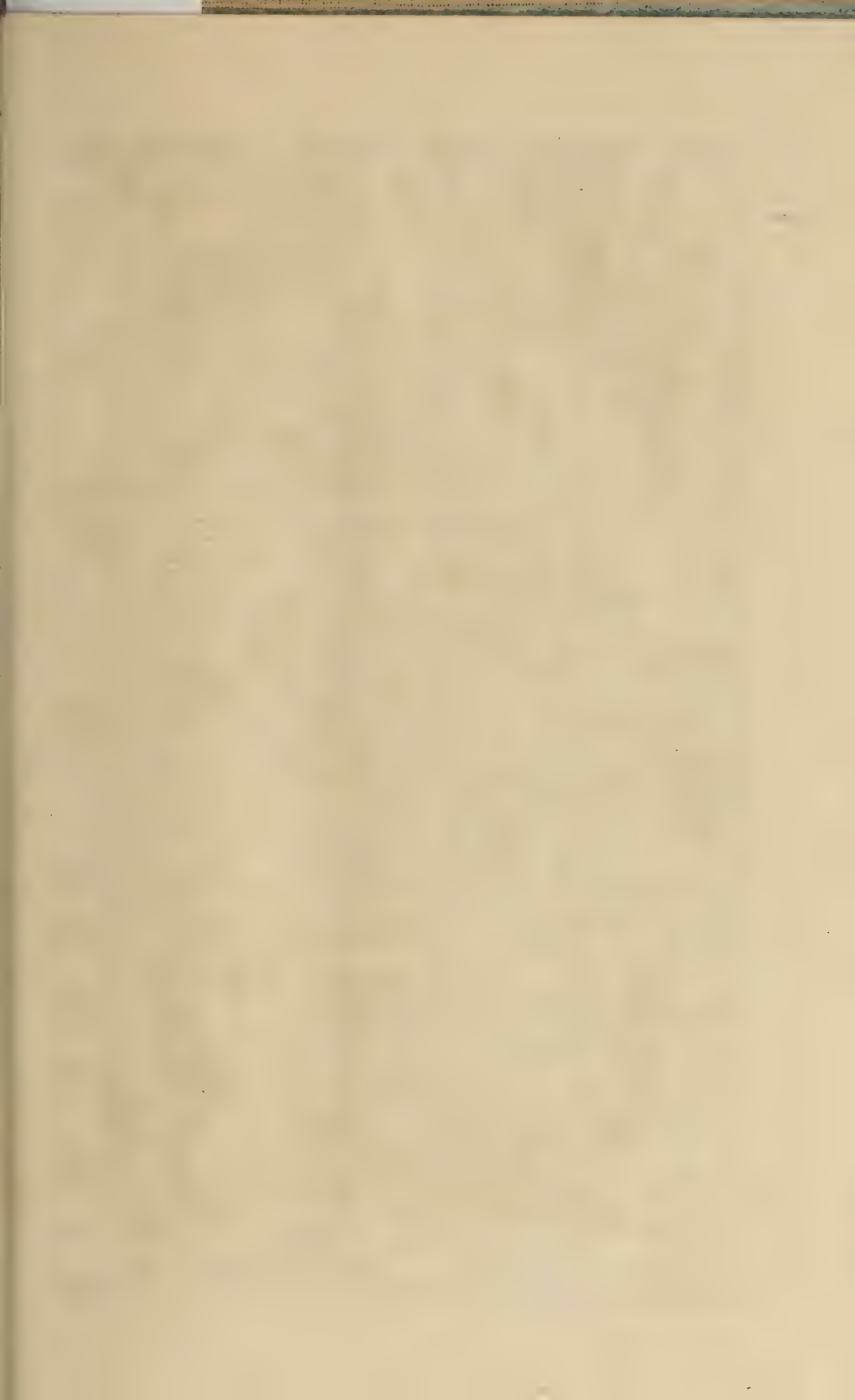
口繪にしたのは龜戶豐國筆の錦繪であり、挿繪にしたのは、繪草紙の繪の一部分である。

大正十三年十月

編者誌す

馬之図春の萬鈴 の の木の 揚

佐野經世譽免狀（鉢の木──二幕）

上の卷

茂呂宿馬士問答の場

〔役名──最明寺時頼、馬士藤六、出雲坊、百姓三人。〕

（茂呂宿の場）──本舞臺眞中に枝振りよき雪の積りし松の大樹、上手に藁葺の出茶屋、上下ともに雪の積りし山々。正面は雪降りし在體の遠見。總て下野國茂呂の在一里塚の體。こゝに○△□の三人百姓姿にて蓑笠脚絆草鞋の打扮にて息杖を腰にさし、助郷の歸りの體にて、出茶屋の下にて枯枝を集め焚火をし煙草を喫んでゐる、追分節にて幕明く。

○ 何とよく降る雪ぢやあねえか、さつきから小止なし、今夜はしつかり積るだらう。

△ 天氣のいゝ時は苦にもならねえが、雨や雪の降る時は助郷も難儀だな。

□ 然し今日は佐野まで故、僅三里でしまつたは、三人ともに儲けものだ。

○ 隣り村と隔番故、いくら降つても明日は樂。ゆつくりと寐られるわえ。

△ 談義もいゝがそれよりは、濁酒でも呑みながら、ほら市が祭文でも聞かうか。

○そりやあいゝ思ひ附た、談義なぞは面白くもねえ、小栗判官でも聞きてえもんだ。
□勿體ねえことを言はねえがいゝ、手前などはころりと行くと、塞河原へ行く身體だ。
○べらぼうめ、子供ぢやあなし、なんで塞河原へ行くものだ。
△それでも手前は、まだ鳥居數をたんと潜らなからう。
○なあに、鳥居數なんざァ幾らも潜つた。
□ふむ、鳥居數とは何のことだか知つてゐるか。
○知つてゐるとも、去年笠間へ行つた時、鳥居はいくらでも潜つてゐるわい。
△おほかたそんなことだらうと思つた。
○いや、地藏馬鹿(人を馬鹿)にした奴だ。
皆々　はゝゝゝ。

ト雪おろしになり、花道より時頼鼠の衣、白の手甲脚絆頭陀袋を掛け草鞋を穿き、網代笠を冠り、藜の杖を突き、出雲坊墨の衣同じ裝にて如意をさして出來り、

出雲　率爾ながら百姓衆、ちと物が尋ねたうござる。
○　はいゝ、尋ねたいとは。

三人　なんでござるな。
出雲　いや、外のことでもござらぬが、かの船橋のある佐野の渡りまでは、よほどの道程でござるかな。
□　佐野の渡りといふは知らないが、渡しなら三里半あります。
出雲　渡しまで三里半ござるとか。して、此處は何と申すな。
△　こゝは茂呂(諸)宿と言ひます。
出雲　それでは、これから疊ケ岡、その次が佐野でござるか。
○　左樣でござります。あら町、犬伏、天明と、佐野の中にも小名があります。
出雲　御親切に忝うござる。
△　ときに、もう出かけようではないか。
□　さうさ、澤山降らぬ内に行きませう。
○　もしお前方、當らつしやるなら、この火を消さずに行きませうか。
出雲　それは何より忝い、一休みしてまゐれば、そのまゝにしておいて下され。
△　そんなら旅の、
三人　御出家樣。

出雲　百姓衆。

三人　ゆるりと休んで行かつしやれ。

　　ト雪おろし追分節にて三人上手へはひる。時頼笠を上げ向うを見て、

時頼　出流岩船の山々より富田、駒場の田野まで皆白妙の銀世界、花よりは又一しほに風情の勝る雪景色、なんと、言へぬ詠めではないか。

出雲　左樣でござります。これで雪が寒くなければ、猶更よろしうござりませう。

時頼　實に西行の歌の如く、寒風肌を冒すわい。

出雲　いま百姓共に承りますれば、佐野までは三里あまり、最早未の下刻に近し、よほど急がねばなりませぬ。斯樣なことなら富田の大長寺へ、今宵のやどりをいたせばよろしうござりました。定めてお勞れなされましたらうが、今に馬か駕籠を雇ひ佐野までお乘せ申しますれば、必ずお案じなされまするな。幸ひそこに焚火がござりますれば、暫時御休息なされませ。

時頼　いかさま、これにて休息いたさん。

出雲　まづこれへお掛けなされませ。（ト出雲坊床几の雪を拂ひ、時頼に腰をかけさせ、焚火を繕ひなどして、）此間に佐野に歸り駕籠か、歸り馬があればよいが。（ト向うを見て、）あれ〳〵、向うに驛鈴の音が

いたしますが、これへ馬がまゐると見える。

ト馬士唄になり、花道より馬士の藤六竹笠を阿彌陀に冠り、雪のつきし琉球蓙を肩へかけ、少しく酒に醉ひたるこなしにて、鞍附の赤馬を曳き出來り、

藤六 あゝ降るわく、庄屋どんの牡丹餅のやうなでつけえ雪が降つて來た。これでなくちやあ豐年にならねえ、今角酒屋で濁酒を二杯ひつかけて來たお蔭に、おらあさつぱり寒くねえが、然し馬あ寒かんべえ。今に裾湯をつかつてやつて、豆を喰はせるから辛抱しろ。それ石だぞ、辷るわく、はい、はい、はい。

ト本舞臺へ來る。出雲坊これを見て幸ひなといふ思入にて、

出雲 こりや馬士、そちはどこへ歸るのぢや。

藤六 私かえ、私は栃木まで旅人を乘せて、佐野の天明へ歸るものさ。

出雲 それは幸ひ、佐野へ歸る馬とあれば、その天明とやらまで乘せてはくれまいか。

藤六 そりやあ折角の頼みだが、馬も栃木まで行つたので、今日の役は濟んだから、歸りまで苦しませるも殺生故、氣の毒ながら乘せられねえ。

出雲 至極尤もなことながら、この大雪に甚だ困れば、どうか佐野まで乘せてくりやれ。

藤六 困るとあれば何も後生、どうで歸る途だから、乘せて進ぜめえものでもねえが、見りやあ御出家だね。

出雲 いかにも佛法修行の爲め、諸國を廻る沙門でござる。

藤六 （思入あつて、）御出家ぢやあ乘せられねえ。

出雲 そりやまた何故に。

藤六 何故とは知れたこと、出家とはどう書きます、家を出ると書くぢやあねえか、而も捨身の行といつて、樹下石上の厭ひなく難行苦行なすが行、それを馬に乘りてえなぞとは、見りやあいゝ年をしてゐさつしやるが、出家の行を知らつしやらねえか。

出雲 それはそちが申さずとも、捨身の行は存じをれど何をいふにもこの大雪、佐野までは三里あまり最早夕景近ければ、甚だ路次も難儀故、それでそちを賴むのだ。

藤六 なに、この大雪が難儀だからそれで馬に乘りてえとか。いやはや、たはけもえゝ加減に言はつしやい。これ、お前等が宗祖と賴む、釋迦牟尼世尊も元は天竺檀特山にて、阿羅羅仙人に仕へた時は、薪水の勤めをなし、また雪山といつて四季ともに雪の絶えねえ高山に、身を裂かるゝ寒さも厭はず、難行苦行さつしやつて終に佛の正覺を得、在世四十九年の間普く佛法を世界へ弘め、衆生

を教化したではないか。それは及ばぬことなれど、この雪位を難儀に思ひ馬に乗らうなんぞとは、あんまりの違ひで横ッ腹が痛い。こなたも生涯味噌摺り坊主だな。

ト出雲坊を尻目にかけてせゝら笑ひ、焚火で煙草を喫む。出雲坊むつとし、氣を替へて、

出雲　いや、そちは田夫野人には珍らしき理窟者ぢやが、我も出家の身の上故、さほどのことを存ぜぬではなけれども、あれにござるは我師の坊、不知案内の山道に殊の外御難儀なされど、難行苦行に較べては何程のこともなしと、御逗留もなさらずかく御歩行なされど、扨弟子の身として、師の坊の苦しみたまふが痛はしく、それ故そちに馬を頼むも、愚僧が馬に乗るではない、師の坊を乗せまゐらせん爲め。

藤六　むゝなるほど、弟子の身で師匠の難儀を見てゐられぬとは尤もだ、こりや味噌摺りがでかしたわえ。さういふことなら乗せようが、そちらの師の坊は乗らつしやる氣か。（ト時賴へ思入あつて、）よもや、乗らうとは言はつしやるまいな。

出雲　そりやまた何故に。

藤六　雪が降つて歩きにくいは、同じ人間の身の上だから弟子も師匠も同じこと、それを、おれは師匠だと言つて馬に乗り、弟子だといつて歩かせて難儀をさせる師匠なら、名僧知識とは言はれねえ。

譬にもいふ通り師匠は針弟子は絲、師匠が曲れば弟子も曲る、こゝの道理を思つたら、よもや乘らうとは言はれめえ。それを構はずに乘らつしやりやあ、師匠どんも味噌摺坊主だ。

出雲　なんと。

藤六　いやさ、味噌摺坊主と言はれても、一言半句もあるめえが。

ト藤六きつといふ、出雲坊恢へ兼れし思入にて、

出雲　やあ、言はしておけば、さまぐ\な物知り顏の似而非理窟、我は兎もあれ師の坊を蔑なす上は、このまゝには。（ト出雲坊立ちかゝるを、時頼思入あつて、）

時頼　こりや出雲坊、控へい。

出雲　でも、あまりと申せば、にツくき雜言。

時頼　はて、控へいと申せば、まづく\控へい。

出雲　へゝい。（ト控へる。）

藤六　あゝ師の坊は師の坊だけ、今の理窟が分つたと見える。

時頼　（思入あつて、）君子賢人曠野にあり、田家に必ず知るものゝあるもの。我二ケ年のその間諸國修行致せども、汝如き者に出逢はず。餌かふ馬をいたはりて、歸り馬には乘せざると利慾に耽らぬの

みならず、樹下石上に辛苦なすべき出家に馬は貸されじと、釋迦になぞらへ止めしは、一々に理の當然ながら、それはいろはのいろはにして、この雪中に願うても乘せべき出家を乘せざるは、未だ汝は佛法の三世の利益を存ぜぬな。

藤六 むゝ、なるほど、それは知りましねえ。三世の利益といふことは、どういふ事か言はつしやい。

時頼 むゝ、知らずば言つて聞かさん。そも三世の利益といふは、過去、現世、未來なり、それを即ち三世といふ、過去にて惡行なしたる者は、現世にて畜生に生れ、あらゆる苦患に苦患を重ね、惡行の罪消滅し、來世は成佛得脫なす、これを三世の利益といふ。汝が馬も前世にて惡行をなせし故、この世にて畜生に生れ、かく雪中に小荷駄を背負ひ、又は旅人を乘せるのも、皆前世の約束ごと、苦患に苦患をいたさねば、成佛得脫は致さじ、汝が飼ひおく馬故にいたはり使ふは情なれども、却てそれが仇となり、前世の惡業滅せざれば來世までも畜生道、その馬の爲めを思はゞ、行くも歸りも厭はずに使ふが即ち何より情、ましてや三衣を身にまとふ佛法修行の出家をば、乘せなば馬の功德にならん。かゝる三世の利益があつても、汝は我をば乘せざるか。

藤六 むゝ。(ト思入)

出雲 有無の返事は、いかゞなるぞ。

藤六（感心せし思入にて手を拍ち、）なるほど師匠は師匠だけ、三世の講釋感心しました。此の世で苦患を受けるのも、前世の業を消滅し來世の爲めになることなら、こりやあ乘せにやあならねえわえ。
時頼　すりや三世利益の道理を辨へ、我を佐野まで乘せるとか。
藤六　馬の爲めになることなら、唐天竺までも乘せますべい。
時頼　それは何より忝い。
出雲　いや、乘せるとあれば、天明まで馬の駄賃はいかほどだな。
藤六　はあ、天明までは三里あるから、やみでやりますべえ。
出雲　やみとはいかほどのことぢや。
藤六　やみといふのは三百のことさ。
出雲　三里三百とは、歸り馬にしては高いな。して仕立馬ではいくら取るぞ。
藤六　仕立馬なら一里六十四文、三里二百さ。
出雲　仕立馬が二百にて歸り馬が三百とは、さりとは分らぬことだ。駕籠に致せ馬に致せ、復りは往より安いものだ。
藤六　そりやあ世間の馬方や、駕籠舁はさうでもあらうが、身には布子を着てゐれど、私は淸貧を樂し

みに無慾故、復り馬が高い。

出雲　いや、そちは小理窟をいふやうにもない、復り馬が直が高いとは分からぬ奴だ。

藤六　なに、私よりはこなたが分からねえのだ。

時頼　いや、あの者の申すことは、一々凡人と相違して理に當る。なれども復り馬が高いと申すは、愚僧いまだその意を得ず、いかなる譯か言うて聞かしやれ。

藤六　三世の利益は説かつしやつても、復り馬の高い譯を知らぬとあらば言つて聞かせう。同じ馬に生れても、大名に飼はるゝ馬は三度々々飼葉を喰ひ、馬屋に樂にしてゐれど、わし等に飼はるゝ馬は不便さ、朝の六つから荷を附けたり又は旅人を乘せたりして、樂といつては一日もない、それ故一日だけ使つたらば早く家へ連れて歸り、裾湯でも遣つて豆でも喰はし、樂をさせるが卽ち情、それをおのれが慾に迷ひ、往くにも重き荷をつけさせ、又復りにも人を乘せ働かすれば、常よりもよけいに腹のへる道理、それに同じ食を喰はすれば、えゝ人使ひの惡い主人と、人なら惡く言ひますが、口を利かぬ畜生の悲しさ、だまつてそれを喰つてゐますが、いかに口を利かぬとて、そのまゝにしてはおかれねえ、骨を折らした替りには、三日が間よけいの物を喰はしてやりますから、それで往より復り馬は、直を高く貰はにやあならぬ。

時賴　なるほど、これは尤も至極、一々もつて理の當然。罪の疑しきは刑せず、恩の疑はしきは賞す、天下の政事に用ある事、出雲坊、いかほどなりとも彼れに取らしやれ。
出雲　かしこまつてござる。
藤六　それ承知なら乘らつしやい。
　ト藤六馬の支度をする、雪又降つて來るを出雲坊見て、
出雲　まただいぶ降つて來たが、もうよい加減に止めばよいのに、この雪も難儀なことぢや。
藤六　なんだ、この雪が難儀だから、止んでくれゝばよいと言はつしやるのか。
出雲　さればさ。
藤六　さういふことを言はつしやるから、こなたは味噌摺坊主だといふのだ。この雪が降らねえで見さつしやい、麥作の根へ蟲が附き、來年百姓の喰物はねえ。譬にもいふ豐年の貢、日待をして祝ひます。難儀どころか結構な雪だ。
出雲　それは百姓などは悅ばうが、愚僧などは甚だ難儀だ。
藤六　この雪を難儀だといふ人が多いから、兎角天下がおだやかでねえ。今鎌倉の執權を始め領主地頭も、百姓の苦しむをも顧ず、年々よけいな年貢を取り上げ、榮耀榮華をさつしやるが、それに

引替へ百姓は、暑さ寒さも厭はずに眞黑になつて農業なし、御領主樣へ年貢ををさめ、殘つた米を賣つた金で、やう〳〵一年の暮しを附け、汗水になつて作り儲けた米といつては見たばかり、三度の食は粟か稗、いゝところで麥がせい〴〵、煩ひでもせにやあ米を喰ふことはねえ、その米がまづいの、やれ菜がまづいのと榮耀をさつしやるその詰りは、みんな百姓の難儀となる。下の難儀になるをば知らず、天下の政事を執らるゝから、下々は行きたちませぬ。これについても惜しいのは、前の北條時頼樣、上から下まで行渡りお慈悲深いお方故、御改革を樂しんだその甲斐もなく、御病氣で御代を讓られ天下は闇、然し、惜しい〳〵と人の思ふ精力でも、御本復のありさうなもの、まだ死なつしやつたといふ噂もないから、どうぞ御全快のあるやうにと、私等さへ祈つてをりまする。

ト これを聞き、時頼出雲坊額を見合して思入。

時頼　はてさてそちは下賤に似合はず、仁義の道を失はず理非明白なる志し、馬追ひにはをしきもの、して、そちは何處の者で、名は何と申すぞ。

藤六　わしやあ天明と犬伏の境で、小佛の藤六といふ佛氣質の馬方だが、私等のやうな無學な者が、こんなしち難しいことをいふのは、みんな聽取法問で、無法無體の私等を集めて敎訓をして下さる

有難いお人があるので、佐野の周邊の百姓、雲介は、みんな五常の道を守り、惡いことをする者は藥にし度くも一人もねえ。こればつかりは佐野の自慢さ。

出雲　フウ、すりや、そち達に教訓を致すものがあると申すか。

藤六　あい、而も天明の在にゐさつしやるが、名詮自稱とやら、天明といふ字を二つに割れば、天は二人、明は日月、その日月のやうな明かな御夫婦がありまして。

出雲　むゝ、して又それは何者だな。

藤六　元は佐野の御領主で、佐野源左衞門常世樣とて、それは〳〵お慈悲深いお方、今ではお家も沒落なし、山際に微なお暮し、又麻につるゝ蓬とやらで奥樣も結構なお人、たしか下總の住人立石三郎常俊樣のお娘御、御夫婦が村の者を、日待などに家へ呼び、忠信孝悌の御教訓をなさるゝ故、私等のやうなものまでも、ほんの聽取法問ながら、和漢の故事の少し位は、小耳にはさんでをります。

時頼　扨は下野佐野の住人常世が教訓致すとか、して〳〵それは如何なることで、家沒落はなしたるぞ。

藤六　話しをすりやあ長いことだが、伯父源藤太といふ惡人が鎌倉殿へ讒言なし、つひに所領を沒收され、今では私等も同じやうに御夫婦ともに下賤の交り、見るかげもない哀れなこと。斯く善人が

衰へて悪人のはびこるも、元はといへは鎌倉の御政事が行屆かぬ故、あゝ天下に眼の明いた人はなく、盲目ばかりと見えるわい。

時頼　いかさま、そちが申す如く、鎌倉の政事行屆かず、さある善人世に落ちて、よしや埋れ木になるとても、天道まことを照したまへば、世に出でざることのあるべきや。

藤六　どうぞ、元の御領主にならるゝのを待つてをります。

出雲　なるほど、諸國を遍歴なせば、未だ天下の御政事の、行屆かぬところがござる。

時頼　嘸や佐野の常世とやら、時頼を恨みつらん、ムウ。

ト時頼は歎息の思入、本釣鐘鳴りわたり、雪頻りに降る。藤六は馬の足を結へし手綱を解き引いて來る、時頼空を見上げて、

白妙の雪に心は慰まで、うきこと積る旅枕かな。

出雲　これは感服仕りまする。

藤六　さあ、支度がよくば乘らつしやい。

時頼　むゝ。（ト鞍に手をかけ、侍の乘るやうにひらりと乘る。藤六これを見て）

藤六　はて、御出家には珍らしい、武家も及ばぬ馬の乘り方。

時頼　や。
藤六　心得たものだなあ。(ト此時馬の嘶くを制して、)えゝ、どう畜生め。
ト手綱を持つて馬を打つ、と馬驚いて跳上り、出雲坊飛返く拍子に雪に辷る、時頼は馬上にてしやんと構へる、藤六は馬の口をきつと取る。これを木の頭。
時頼　急いでくりやれ。
藤六　合點だ。
ト馬の方へ振向く、時頼出雲坊顔を見合せ頷く。雪おろし馬士唄にてよろしく、
トこの幕雪幕にて、雪おろしのつなぎにて引返す。

ひやうし幕

下之巻

佐野鉢の木の場

〔役名――佐野源左衞門常世、最明寺時頼、出雲坊、五郎藏。常世の妻白妙、常世の妹玉笹。〕
(源左衞門佗住居の場)――本舞臺三間の間二間常足の二重、丸太の柱、藁葺屋根。正面暖簾口、上手押入戸棚、下手の壁に獸の皮釣しあり。上手に附屋體、この前に筧の樋、木の皮の手水鉢、いつも

の所竹簀戸。下の方に馬部屋、馬部屋と屋體との間に簀の子の植木棚ありて梅、松、櫻の鉢植を載せ、よき所に草井戸あり。上下とも山。一面に雪の降り積りたる樣にて軒口には氷柱下りゐる。總て下野國佐野天明在、源左衞門侘住居の體。屋體の内に玉笹屋敷模樣の娘裝にて俎板にて大根を刻んでゐる。五郎藏山達附、草鞋にて柴を負ひ立つてゐる見得にて、雪おろしにて幕明く。

五郎　玉笹樣、えらい雪ぢやあござりませぬか。なんぼ信濃に近いとて、こんなに降ることはない。

玉笹　ほんに、女子などは近所へも行くことがならぬわいな。

五郎　いやもう、私等でさへ、此の雪では出歩くことはできませぬ。今日ばかりは旦那樣も定めてお内でござりませうな。

玉笹　いえ〳〵、お兄樣は今朝早く山へ獵においでなされ、まだお歸りなされませぬわいな。

五郎　へゝえ、この雪にも山獵に今朝からおいでなされましたか、それは嘸お寒うござりませう。いやも此方の旦那樣が物知故、この天明の者は仕合せ、日待々々に村中を寄せて、仁義禮智信の御教訓、有難いことに私等がやうな無筆の者も眼が明いて、御高札の文句が分かり、親を大事にする氣になります。これといふのも旦那樣のお蔭、何ぞお禮をしようと思へど、禮をというては受けさつしやらぬ故、そこでせめての御恩送りと、この大雪のお寒さ凌ぎに、柴を持參いたしました。

たんと焚いて下さりませ。（ト柴をおろす。）

玉笹　それは何よりよいものを、この雪が降らうかと柴も刈つておいたれど、急には雪も消えまいほどに、澤山あれば猶更に心丈夫でよいわいな。

五郎　田舍住ひの氣散じは、喰物と焚木さへ澤山あれば、幾日降つても案じることはござりませぬ。

玉笹　ほんに、さうであるわいの。

五郎　見れば白妙樣がお見えなされませぬが、お内でござりますかな。

玉笹　あい、明日はお母樣の御命日故、御姉樣は御佛間で御回向なされてぢやわいな。

五郎　へゝえ、奧の御佛間においでなされますか。（ト奧へ思入あつて、）この冷たいのに大根を刻んで、何のお料理ができますな。

玉笹　もうお兄樣のお歸り時分故、お寒さ凌ぎに大根を入れ、粟のお粥を炊くのぢやわいな。

五郎　この寒いに、大根がよくすもできず凍りませんな。

玉笹　圍爐裏の内へ入れておく故、少しも凍りはせぬわいな。

五郎　何にいたせ、お冷たうござりませう、私が刻んで上げませう。（ト玉笹の傍へ寄り庖刀を取らうとする。）

玉笹　それには及ばぬわいなあ。

五郎　えゝ、御遠慮なされますな。

ト言ひながら玉笹に心ありげに、寄り添はうとするを、玉笹振拂つて、

玉笹　何をしやるぞいなう。

五郎　いえ、なんでございます、旦那樣に五常の道を教へてお貰ひ申すそのお禮に、あなたに私が大根の刻み方を、教へて上げるのでござります。（ト又寄り添はうとするを振拂ひ、）

玉笹　えゝ、何をしやるぞいなう。

ト飛退くを五郎藏追ひ廻さうとする。この時奧より白妙やはり切織裝にて出來る、玉笹この蔭へかくれるを、五郎藏捉へようとして白妙を見てびつくりし蹲まる。

白妙　五郎藏どの、ようござんしたの。

五郎　これはどなたかと存じましたら、白妙樣でござりますか。扨今日はお暑う、いやなに、お寒うござります。まことに汗が出まして、殊のほか感じます。（ト汗を拭ひ術なき思入。）

白妙　然し、寒さは寒いが、この雪は麥の爲めにはよからうわいの。

五郎　左樣にござりまする。

白妙　（薪を見て、）玉笹、この柴は誰が持つて來たのぢやぞいの。

玉笹　それは、この五郎藏面が持つて來をつたのぢやわいな。
白妙　これはしたりどうしたものぢや、五郎藏面の何のと。
玉笹　いえ、言うてもようござんすわいな。
白妙　何のよいことがあるものかいの。五郎藏殿、堪忍して下さんせ。
五郎　いえ〳〵だいじござりませぬ、五常の道をお教へ下さるお師匠樣のお妹御、何んとでもおつしやりませ。
白妙　さうしてこの柴は、こなたから下さんしたさうなが、忝なうござるわいの。
五郎　いえ、ほんのお禮の印しばかりでござりまする。
白妙　村の衆も多くあるが、このなたのやうな親切な人はない、雪が降れば寒からうと、このやうに柴をくれ。
五郎　へい〳〵。
白妙　その上聞けば妹に、何やら敎へてやらうとのこと。
五郎　へい〳〵。
白妙　定めて田畑の耕しやうか。

五郎　へい〳〵。

白妙　よもや、みだらなことではあるまいの。

五郎　へい〳〵、へい。

ト五郎藏だん〳〵後退りをして門口へ出ようとする。

玉笹　いえ〳〵お姉様、私をとらへて。

白妙　はて、そなたが口を出すには及ばぬ。さあ五郎藏殿、何を教へて下さるのぢや。

五郎　へい〳〵。何でござりましたか、とんと失念、ちよつと考へてまゐりませう。（トこそ〳〵門口へ出て）

えゝ、びつしよりと汗になつた。

ト汗を拭きながら花道へ行きかけ、思入あつて引返し、下手へはひる。

玉笹　お姉様、よい氣味でござんしたわいな。

白妙　いづくの者か此村へ近頃越して來て、舊い者よりなれ〳〵しう、此方の家へ入込んで、どうも合點の行かぬ者、いつぞは〳〵と思うてゐたが、よい折故恥ぢしめてやつたれば、あれで當分來まいわいの。

玉笹　どうぞ、來てくれねばようござんすわいな。

白妙　それはさうと、お粥の支度はして下さんしたか。

玉笹　あい、ちやんとしかけておきましたわいな。

白妙　そんなら私が焚きつけるから、お前は奥で母上樣へ、御回向をしなさりませ。

玉笹　あい〳〵、そんならお姉樣お賴み申しますわいな。（ト奥へはひる。）

白妙　雪明りで明るいので、今日は日暮がおそいさうな、暮れたら主人も戻られよう。どれ、焚附けておきませうか。

ト時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽駒止めて袖打拂ふ影もなき、佐野の渡りの雪の暮、その大和路もいつしかに、越路に續く下野の佐野の渡りへやう〳〵と、時賴主從辿り來て、

トこの內白妙古行燈へ火を灯し、自在へ鍋をかけ、柴を焚きゐる。花道より時賴、出雲坊出來り、花道にて、

時賴　こりや出雲、最前馬士に物語りし佐野の常世が茅屋は、向うに見ゆる小家であらうな。

出雲　左樣にござりまする。佐野の渡りを左りへとり、大樹の樟の後と申せば、たしかに相違ござりませぬ。

時頼　然らば我はそちに別れ、行き暮れたる體にもてなし、今宵は彼處へ宿りを求め、家内の樣子常世が心底、とくと試し見るであらう。

出雲　左樣なれば私は、最前の馬士を尋ね、彼れが宅にて一夜を明し、四方山の話にかこつけ、源藤太が惡事を聞出し、明朝未明にお迎ひに參るでござりませう。

時頼　目印しには軒口へ、我笠をかけおくぞよ。

出雲　畏つてござりまする。

時頼　暮れぬ先に急いで行きやれ。

出雲　はッ。（トつか〳〵と行き辷る。）

時頼　あゝこれ、辷らぬやうにいたせ。

出雲　いえ、大丈夫でござりまする。

〽すべる足元踏みしめて、元來し路へ立返る、最明寺は後見送り、垂木まばらに傾きし羽生の門に佇みて、

ト出雲坊は引返して花道へはひる、時頼は舞臺へ來り門口にて、

時頼　この家の内へ御案内申す。

〽訪ふに聲に立出で〻、（ト白妙門口へ出て、）

白妙　御案內とおつしやりますは、どなた樣でござりまする。（ト竹簀戸を明ける。）

時頼　我は陸奥より鎌倉の本寺へ通る旅の僧、連なる者にはぐれし上、思ひがけなき大雪に行き暮して、甚だ難儀、一夜の宿りを御無心申したい。

白妙　それはお安いことながら、折あしく主人の留守、殊には御覽なさるゝ如く、住荒したる賤の伏家、雨はもとより雪は尙、外より內が餘計に降ります。おいたはしうはござりますが、どうもお宿はなりませぬわいな。

時頼　いや、その斟酌には及ばぬこと、今日は陸奥明日は越路と、身は雲水の世捨人、草の筵も我が爲めの玉の臺と有難し、是非に一夜の宿りをば。

白妙　左樣ではござりませうが、住ひなれたる者さへも侘しく思ふ羽生の小家、お泊め申さんやうもなし。おゝそれ〳〵、これより十八町彼方に山本の里と申しまして、よい泊りがござりますれば、それへお越しなされませいなあ。

時頼　ではござらうがこの大雪、後へも前へも參り難し、是非とも御無心申したい。

白妙　お氣の毒にはござりまするが、荒れたる上のその上に、主人の留守にござりますれば、假令御出

時頼　家樣にもせよ、留守にはお泊め申されませぬ。（思入あつて、）江口の君が假の宿に心とむなと申せしは、それは色ある優法師、炭の折か木の端かといふやうなこの旅僧に、その御遠慮には及びませぬ。

白妙　いえ〳〵如何なる御出家でも、男體せしお方をば、留守にお泊め申しては、女子の操が立ちませぬ。さゝ、それよりは暮れぬ內。

〽急がせたまへと言ひすてゝ、門の戶はたと立切れば、天下を裁く御身にも、この返答に行きくれて佇みたまふぞ殊勝なる。

ト白妙戶を締めて內へ入り火を焚きゐる、時頼よろしく思入あつて、

時頼　操たゞしき妻が言葉に猶々ゆかしき源左衞門、留守とあらば是非もなし、今宵は邊りへ宿りを求め、夜明けて再び此の家を訪ね、源左衞門に對面なさん。

〽吹雪烈しき山風を、笠に厭うてそこはかと元來し道へ立歸る、（ト時頼烈しく降る雪の下なしづしづと花道へはひる、）〽始終窺ふ玉笹が、一間の內より立出て、（ト奧より玉笹出來りて、）

玉笹　もしお姉樣、樣子は奧で承りましたが、おいたはしいは今の御出家、お兄樣がお留守故お泊めなされぬは御尤もながら、今宵は母上樣のお逮夜にて御追善にもなりますれば、お泊めなされて

お上げなされませ。あなたお一人といふではなし、私がをりますれば、御遠慮には及びませぬわいな。

白妙　お丶優しう言うてたもつた。この樣におちぶれしも前の世の皆因果、願うてもない御出家樣、お泊め申したことならば、やがて夫の武運も開き、後世の爲めにもならうほどに、そんならお泊め申さうかいな。

玉笹　お兄樣へは私がお詫をいたしませうから、お泊めなされて下さりませ。然しもう餘程おいでなされましたらうわいな。

白妙　いやく\この大雪故、たんとおいでもなさるまい。

〽遠くはよもやと表へ出で、（ト白妙門口へ出で、竹笠を翳し向うへ思入あつて、）

なうく\旅のお僧、お宿をお貸し申しませう。え丶、この大雪に聞えぬか。

〽御いたはしの有さまや、元降る雪に道を忘れ、今降る雪に行方を失ひ、一つ所に佇みて袖なる雪を打拂ひく\したまふけしき、

ト此雪頻りに降る、白妙向うを見て思入あつて、

見苦しきを御承知なら、一夜のお宿いたしませう。旅の御僧なう、お丶いく\。

〽竹笠とつてさしまねけば、（ト白妙竹笠を上げてまねぐと、花道揚幕の内にて）

時頼　おゝい〳〵。（ト時頼出來りて）

〽おゝい〳〵と聲かけ合ひ、雪踏み分けて旅僧は、軒端間近く立戻り、

すりや一夜の宿りを、お貸し下されんとな。

白妙　あまりの雪に御難儀を、見兼ねてお宿いたしませう。

時頼　それは嬉しき志し、假の浮世に假の宿、

白妙　假初ながらこのやうに、お泊め申すも値遇の緣、

時頼　一河の流れ、一樹の影、

白妙　それは雨の宿りにして、

時頼　これは雪の軒ふりて、

〽浮世ながらの草枕、

白妙　さあ〳〵これ〳〵これへ。

〽これへとこそは請じけれ。

ト白妙内へはひり、時頼も續いてはひる。

まあ〳〵、お草鞋をといてあげませう。

時頼　いや〳〵それには及びませぬ。

白妙　はて、よろしうござりまする。これ玉笹、溫湯があらば持つておぢや。

玉笹　あい〳〵。（ト鑵子の湯を盥へ明け持來りて、）さあ〳〵、お出しなされませ。

時頼　これでは却て迷惑でござる。（ト此内玉笹は足を洗ひ、白妙は笠草鞋を片附ける。）若しはぐれたる我弟子が、尋ねまゐるまいものでもない、笠は印に軒口へかけておいて下さりませ。

白妙　畏りましたわいなあ。（ト網代笠を角の柱へかける。）さあ〳〵これへおいでなされませ。

時頼　然らば御免下さりませ。（ト圍爐裏の上手へ住ふ。白妙粗朶を焚きながら。）

白妙　嘸お寒うござりましたらう、焚木は澤山ござりますれば、ゆるりとお當りなされませ。

時頼　これはよい心持でござる。今朝よりの寒さをばこの焚火で取返しまする。

玉笹　（茶を汲み來りて、）あいにく微溫うござりますが、お一つお上りなされませ。

時頼　必ずお構ひ下さるな。（ト茶碗を取つて呑む。）

白妙　お泊め申した甲斐もなう、何を御馳走申さうにも。

時頼　あいや、この大雪には、何よりか此の焚火が馳走でござる、お心遣ひ下されな。

白妙　それぢやと申して、あまり風情がござりませねば、おゝそれ〳〵、此間村から貰うたお饅頭があらうがの。

玉笹　いえ〳〵、あれは疾うのこと。

白妙　ほんに一昨日子供が來て、みんなやつてしまひました。一昨日おいでなされましたら、お饅頭なと上げませうもの。玉笹、何ぞないかいの。

玉笹　何もござんせぬわいな。

白妙　ほんに、それ〳〵、あの井筒の水が、それは〳〵よい水故、方々から汲みに參ります、夏なら水を上げませうのに。おゝ玉笹、思ひ出したことがある、お寺から貰うた餅があらうがの。

玉笹　お姉樣何をおつしやります、あれは去年でござりますわいな。

白妙　ほんにさうであつたかいの、あゝ去年おいでなされればようござりましたに。

時頼　いや〳〵、そのお心遣ひは御無用に下されい。

白妙　これ玉笹、どうぞ仕樣はないかの。

玉笹　もし、幸ひの粟の粥、さもしいものではあるけれど、あれなとお上げ申さうかいな。

白妙　えゝわッけもない、あのやうなものを。折惡く九獻はなし、お菓子はないか。

時頼（氣の毒なるこなしにて、）あいや〳〵女性達、粟の粥があるならばそれを馳走にあづかりたい。
白妙　このやうなさもしいものを、あなたはお上りなさりまするか。
時頼　いやもう、ずんど愚僧好物でござる。
白妙　さやうなればお言葉に從ひ、
玉笹　どれ、お上げ申しませうか。
〽折敷に載せし土器に、萩の折箸とり添へしは、由緒ありげなるもてなしなり。
ト玉笹折敷の上へ載せて出す、
白妙　お口には合ひますまいが、お箸をお取り下さりませ。
時頼　然らば馳走になりませう。（ト一口喰つて、）これは日本一の醍醐味、至極よい鹽梅でござる。
玉笹　御意に入りましたらば、お替りなされて下さりませ。
時頼　忝なうはござれども、最前食事いたしたれば、一椀にて澤山でござる。
白妙　おいしうはござりませねば、御隨意になされませ。
時頼　いやも、お蔭で猶々暖まりました。承はれば明日は母御前の忌日とやら、佛間で御回向いたすでござらう。

白妙　有難うはござりまするが、夫が戻りましてからお願ひ申したうござりまする。里と違うて山家の寒さ、まづそれまでは一間にて、お休みなされて下さりませ。

時頼　いや御主人のお歸りまで、これにてお待ち申すでござらう。

白妙　左樣ではござりませうが、山稼ぎに出ましたれば、いつ戻りますことぢややら。

玉笹　戻りのほども知れませねば、お勞れ休めに奥の間で。

時頼　然らば仰せに從はん。

白妙　とはいへ夜の物とても。（ト當惑の思入）

玉笹　いえ、よい物がござりまする。

〽言ひつゝ立つて戸棚なる、葛籠の内より取出す昔模樣の古小袖。（ト女小袖を二つ出し）

これをお貸し申しては。

〽と差出せば打ちうなづき、

白妙　ようこれに氣が附きました。むさうはござりますれど、これをおかけ下さりませ。

時頼　これは／＼忝ない。見ますれば山家に稀なる小袖、扨はいよ／＼。

白妙　えゝ。

時頼　いや、よいおたしなみでござりますな。
玉笹　左様なれば御ゆるりと。
時頼　御造作になるでござらう。
〽明くる障子も紙破れて、古行燈の灯影さへ薄き小袖に身のしがを隠す筵の二枚折、
ト玉笹上手屋體へ小袖を敷き、一枚にひろげ置く、白妙行燈を置き、筵屏風を立てながら、
白妙　これはしたり、お枕を。
時頼　あいや〳〵、包みがござればよろしうござる。（ト風呂敷包みを見せる。）
玉笹　お火はこれへおきまする。
時頼　それには及び申さぬに。
玉笹　いえ〳〵、火の氣がこゝにござりませぬと、袖が凍つてなりませぬわいな。
時頼　それはきつい寒じでござるな。
白妙　木曾にも負けぬところでござりまする。
時頼　左様なれば女性達。
白妙　ゆるりとお休み、

兩人　なされませ。

へ閉める障子もしとやかに、昔ゆかしき姉妹。（ト上手の障子を閉める。）

白妙　お客樣で忘れてゐたが、御佛前へ供へたる、お香のもう盡きる時分、どれつぎ替へて來ませうか。

へ納戸へこそは立つて行く、あとに玉笹表を見やり、（ト白妙は奥へはひる。）

玉笹　ます〳〵雪は強う降るが、嘸お兄樣はお寒からう。然し今宵は母樣のお逮夜なれば、もう今にお歸りなさるであらうほどに、お湯もお粥も冷めぬやう、粗朶をくべておきませう。

謠ガヽリ　へそれ雪は鵞毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を着て立つて徘徊すとかや、へされば常世は古に替る姿の山獵師、空に月日もたつか弓、世を降る雪も身に寒く、歸る路さへ白妙に、

ト花道より常世庄内帽子、袖無、達附、山刀、藁沓の獵人の打扮にて出來る。白木の弓に兎を結びつけたるを擔ぎ、花道にて、

常世　あゝ降つたる雪かな〳〵、世にある人は詩歌連俳、おのがまに〳〵讀みつらね、嘸面白うありつらん。

へ今降る雪も元見し雪も、雪に替りはあらざれど、鶴氅を着て徘徊する、袂も朽ちて袖せまき、細布衣陸奥の今日の寒さをいかゞせん、あら面白からぬ雪の日ぢやなあ。

〽運も傾く門の口、雪打拂ふ音に立ちいで、
　　ト門口へ來り帽子の雪を拂ふ、玉笹門口へ來て、
玉笹　おゝ誰かと思へばお兄樣、今お歸りなされしか。
常世　母の逮夜に殺生は夜に入つてはしまいと思ひ、日暮限りに歸りしが、雪道故おそうなつた。
玉笹　近頃にないこの大雪に、嘸お寒うござりましたらう。
常世　いや、家で思ふほどにはない。
玉笹　まあおみ足をおすゝぎなされませ。
常世　沓故足は少しもよごれぬ。
　　〽沓脱ぎ捨てゝ內へ入る、折から妻は納戶を立出で、
白妙　おゝ、これは今お歸りなされたか、この大雪故最前から、お噂をしてをりましたわいな。
常世　おほかたさうであらうと存じ、暮れぬ內と思ひのほか、大きに歸りがおそくなつた。
白妙　嘸お寒うござりましたらう、さあ〳〵早う圍爐裏にお當りなされませ。
常世　おゝ、一あたり暖たまらう。（ト圍爐裏の側へ來る、玉笹茶を汲んで來る。）あゝいゝ心持になつた、山家は風呂が不自由故、火に當らねば暖まらぬ。

白妙　さうして今日はどの邊へ、獵においでになりました。

常世　打ち續いての不獵故黑髮山まで行たところ、穴籠りをしてゐるか兎一匹獲たばかり、問屋へ持つて行つたところが、僅の代故賣らずに來たわえ。

白妙　左樣でござりましたか。

玉笹　最前からお歸りを待兼ねて、炊いておいた粟のお粥を、お上りなされませぬかいな。

常世　なに、粟の粥を炊いてある、それは忝ない、空腹なれば早う粥を食はしてくりやれ。

玉笹　それは丁度ようござりました。（ト粥を椀へ盛り膳へ載せて出し、）さあ〳〵、お上りなされませ。

常世　おゝ賞玩りたさう。これは大根が入つてゐるな、暖かでよいわい。（ト喰ひながら、）まだ後に殘つてあるか。

玉笹　あい、一膳あまりござりますわいな。

常世　おゝ、そんならこれで止しにして、殘りは馬に喰はしてやらう。白妙灯を持つて來やれ。

白妙　はい。

〽はいとばかりに白妙が、焚くひでの火も哀れげに、源左衞門は馬小屋の破れし筵をかゝぐれば、浮世に落ちし栗毛の瘦駒いとも殊勝にゐたりける、

ト白妙松のひでへ灯を點して先に立ち、常世馬小屋の繩をひくと筵の戸上り痩せたる栗毛の馬ゐる、玉笹鍋を持ちて控へる。

常世　おゝ嘸そちも餓じからう、今日は常より遲うなつた。玉笹早く明けてやりやれ。

玉笹　はい。

〽玉笹粥を桶へ明け、出せば馬は待兼ねて、僅一椀あまりをばさも嬉しげに食む狀を、うち見やりて嘆息なし、

ト玉笹粥を馬小屋にある桶へ明けて出すを、馬嬉しさうに喰ふ、常世これを見て思入あつて、

常世　あれ、白妙あれを見やれ。中の貧福盛衰は人にのみと思ひしが、畜類の身にもあることか、我その以前當國の佐野の領主たりし時は、何不自由もあらざる故、飼ひおく馬も逞しく佐野栗毛と名を呼ばれ、かの宇治川の先陣に逆卷く水を乘越えし、磨墨池月にも劣らじと褒めそやされし駿足も、飼ひおく主人が衰へればかれも共に痩せ衰へ、見る影もなき今の樣、世にある人に飼はれなば三度の食も飽くほどに食まれんものを情なや、よしなき我に飼はれし故、僅一椀あまりの粥、身にも皮にもなるまじきに、悅んで食むその不便さ、これも前世の宿業と諦めてくれ、許してくれよ。

へ鬣分けて撫でさすれば、畜類ながら道理にせまり、首うなだれてしを〳〵と、泣かぬばかりの有樣なり。

ト常世馬の頸を擦る。馬首を垂れよろしく思入。皆々愁ひの思入にて、

白妙　今更いうて返らねど、世におちぶれし悲しさは、粟の飯をば糧となし、

常世　實にや蘆生が見しと聞く、榮華の夢の五十年、

白妙　せめて一睡の夢だにも、昔の狀を見るならば慰むこともあるべきに、

玉笹　住み荒したる賤ヶ家に、

白妙　松風寒く夜もすがら、

常世　寐られねばこそ夢も見ず、今は日蔭の山住に、身幅も狹き襤褸裝、

玉笹　時めく人が見るならば、

白妙　聞く馬よりも我々が、

玉笹　痩せ衰へて見えぬらん。

常世　あぢきなき世の、

三人　有樣ぢやなあ。

〽傾く軒の雪よりも憂事積る身の上に、夫婦同胞手を取り交し、吹雪に袖やしぼるらん。源左衛門涙を拭ひ、

常世　斯く我々が艱難辛苦も、元はといへば現在の我伯父佐野源藤太、千原平太が讒言故、思へば無念口惜しやなあ。

〽拳を握り歯を噛みしめ、遥かに遠き鎌倉の方を睨んで口をしげに、暫時憤怒の體なりしが、やう〳〵に氣を取りなほし、

あゝ我ながら愚痴の至り、他人にこれを聞かれなば嘸や未練と笑はれん、あゝ口は禍の門ぢやなあ。

白妙　あゝもし、今迄お話し申しませせなんだが、外に聞く人がござりました。えゝ心附かぬことといたしましたなあ。

常世　なに、外に聞く人がありしとな。

白妙　最前旅の御出家が、行き暮れて御難儀故、お泊め申しておきましたわいなあ。

常世　すりや我が留守に修行者を、そちが留めおいたるとか。

玉笹（前へ出て）いや申し、その御出家はお兄様がお留守故、男はお泊め申されぬとお姉様がおつしや

つたな、あまりおいとしうござりますから、私がお泊め申しましたわいな。

白妙　いえ〳〵玉笹ではござりませぬ、お泊め申したは、この白妙でござります。

玉笹　いえ〳〵私でござります。

白妙　いえ〳〵私が不調法、

玉笹　どうぞお許し、

兩人　下さりませ。（ト兩人爭ふを、）

常世　あゝこれ〳〵、その詫には及ばぬこと、假令誰が泊めようとも、今宵は母の逮夜なれば御出家をお泊め申すは願うてもなきよい追善。明けなば我もお目にかゝらん。

（へ言ふをりこなたの一間にて、

時頼　御主人のお歸りあらば、それへ參つてお禮を申さん。

（へ破れし障子を押開き、立出でたまふ最明寺、源左衛門は上座に請じ、

ト上手の屋體より時頼出來る、常世は下座へ下りて、

常世　これは〳〵旅の御僧には、いまだお目覺でござりましたか。まづ〳〵これへ。

時頼　然らば御免下されᵒ（ト圍爐裏の上手に住ひ、）これは此家の御主人でござるか、拙僧は諸國修行の

者、頼みに思ふ連にはぐれ、不知案内の山道に思はざる雪に逢ひ、ほとんと難儀いたせしところ、一夜の宿りをお貸し下され、忝なう存じまする。

常世　いやなう、御覧の如きこの茅屋、御馳走とても心に任せず、その御不自由さへお厭ひなくば山路の雪の消ゆるまで、幾日なりと御遠慮なく、御逗留なされませ。

時頼　それは千萬忝ない、斯く慈悲深き其許の、惠みに逢ふも佛の導き。

常世　して、御僧には何れより、何れへお越しなされますな。

時頼　拙僧ことは昨年より諸國修行に出でましたが、五畿七道を始めとして木曾路より奥羽を廻り、一度鎌倉へ參らんと、熊谷より平塚へ鎌倉道があると聞き、それ所當所へまゐつてござる。

常世　それは長の御道中、嘸お勞れにござりませう。

時頼　今一間にて承はれば、我を泊めたるその罪を互ひに庇ふ姉妹の爭ひ、これ主人の教訓よき故なり、かゝる山家に住居めされど正しく以前は由緒あるお方、昔しゆかしく存じ申す。何と言はれし武士なるや、その名をお明かし下されい。

常世　こは恐入つたる御僧のお尋ね、親の代より獵人なし、鳥獸を撃つて市に賣り、その日を送る果敢なき下賤、なか〳〵以て名乘るべき、姓名とてはござりませぬ。

時頼　いや、お隱しあるは御尤もながら、拙僧こそは鎌倉なる建長寺の使僧にして空月と申す者、金打替りに出家故、念珠の諸佛を誓ひにたて、決して他言は仕つりませぬ。いざ御姓名を、お名乘り下され。

〽餘儀なき言葉に源左衞門、包み兼ねて威儀を正し、

常世　斯くお尋ねの上からは何をか包まん、某は當國佐野の領主たりし佐野源左衞門常世。

白妙　また私は妻白妙。

玉笹　源左衞門が妹玉笹。

常世　讒者の爲めに領地を奪はれ、唯今にては下賤の交り。

白妙　かゝる姿でお名乘り申すは、

常世　面目次第もござりませぬ。

時頼　むゝ、すりや其許が當所の領主佐野源左衞門常世殿とな。あゝかゝる賢者をこのやうに、土民に下し捨ておくは、天下の政事疎故、これ鎌倉の執權たる北條時頼の越度なり、常世殿にも嘸かし時頼を恨みつらん。

常世　こは思ひもよらぬ事、前の執權時頼公は小松の內府に續きたる仁情厚き御方樣、賴みに思ふ甲斐

もなく、唯今にては御遁世、殊には又御所勞と聞き某も本地へ歸る賴りもなく、お恨みどころか明暮に、御本復を願ひをりまする。

時頼　左樣には仰せあれど、最前馬の述懷に、鎌倉の方へ向ひ憤怒の樣子こそ、時頼を恨むに相違なし。

常世　扨はそれを見られしか、あら面目もなきことなり、斯く零落に及びしも、我が伯父佐野源藤太、まつた鎌倉表に於て千原平太の讒言故、最前鎌倉の方へ向ひ憤怒なせしは、彼等を恨みに思ふ故にこそ、尙又時頼公を恨まぬ證據は、斯く困窮のその中にて三度の食を一椀與へ、あれなる馬を飼ひおくは、今にもあれ鎌倉に變ある時は、かれに跨がり第一番に馳せ參じ、御馬前に於て源左衞門忠勤を盡す所存、これにて御疑念お晴らし下され。

〽忠義一途に言ひ開く、言葉に誠や顯はれたり、

時頼　ほゝお、忠臣無二の貴殿の心底、嘸や北條時頼もそれを聞きなば後悔なさん。よしや一度民間に落下るとも、天道誠を照したまへば、やがて花咲く時節もあらん、それ樂しみに相待たれよ。

常世　はゝ忝きそのお言葉、假令いかほど貧苦なすとも、再び本領安堵なすやう、それのみ願ひをりまする。

時頼　その儀は拙僧お請合ひ申す。頓て花咲く時節と申せば、あれなる簀の子の棚にある、三つの植木は何でござるぞ。

白妙　あれは常世が祕藏いたしまする、梅、松、櫻にござりまする。

時頼　扨は常世殿には植木を好み、身の慰みにめさるゝか。

常世　いや貧苦に迫る身の上に、榮耀がましく樹木をば何慰みに眺めませうや、あれなる三つの鉢の木は、書籍に替へる心の學問。

時頼　なに、あれなる三つの鉢の木を、書籍に替へる學問とは。

へ問ふに常世は小膝を進め、

常世　先づ、梅は花の儒者と稱し好文木の故事あれば、聖賢の教へある文事を忘れぬ便りとなし、花は諸木の魁故、武門に取つての先陣に擬ふ。

時頼　して又松は。

常世　松はその葉青々として、四時とも色替へず、その操正しきは卽ち二君に仕へぬ心、雨露霜雪にも負けざるは、これ武士の大丈夫にたくらぶ。

時頼　して〳〵櫻は。

常世　櫻は花の美しく、その姿優美にして、又散る時には一點の餘念なきを、戰場にて一命惜しまぬ心によそふ。

時賴　むゝ、面白し〳〵。

常世　故に、培ひ水をやり丹精いたすも零落なし、貧苦に迫る某が書籍に替へて忘れざる梅、松、櫻は心の學問、など慰みに眺めませうや。

へ文武によそふ鉢の木に、常世が才智を感じ入り、

時賴　ほゝお、天晴なる主人が答へ、文武に譬へし三つの鉢の木、唯慰みと思ひしは返す〴〵も誤りなり、あら面目もなく覺え候。

常世　いや山家育ちのかたくなに、道理を附けし三つの鉢の木、斯く御賞美にあづかつては、我も面目なく候。

へをりしも告ぐる遠寺の鐘、

白妙　あの鐘は早夜半、今宵は最早御寢あつて、この雪故に明日も亦、御逗留なされまして、

玉笹　ゆるりとお話し遊ばしませ。

時賴　いかさま、話の面白さに、ついうか〳〵と夜を更かし、常世殿にも嘸お勞れ。

常世　いや某よりは長途のお勞れ、御足を延ばしお休みあれ。
白妙　玉笹、そなたも奥の間へ。
玉笹　左樣なれば御免を蒙むり。
時頼　愚僧も枕につくであらう。
常世　然らば御僧。
時頼　いづれ明朝。
兩人　御意得ませう。

ヘしづ〳〵立つて奥と口、心殘して入りにける。

ト時の鐘を冠せ、時頼は上手の屋體、玉笹は奥へはひる。常世、白妙殘り思入あつて、

常世　あゝ雪のせゐかしん〳〵と、今宵の寒さは身にしみるわえ。
白妙　まだ夜の明くるに間もあれば、早うお休みなされませ。
常世　いや、さう早くは寐られぬわえ。
白妙　そりや又何故。
常世　されば、旅の御僧を二三日お泊め申さば、何はなくとも三度の食、粟飯ばかりも上げられまい。

米の手當をせねばならぬ。

白妙　私もそれが心にかゝれど、何をいふにもこの大雪。

常世　折惡しく今日はまた獲物も兎一匹故、賣代なしても僅の價、とあつて母の逮夜なれば、今から獵にも出られず、何ぞ米に替へる品をと思へど替へる品もなし、はて何としたものであらうぞ。

〽どうしたものと一升か僅二升の米にさへ、せまる夫が艱難辛苦、これが佐野の領主にて何貫文の知行をとり、何暗からぬ身の果かと暫し涙にくれけるが、やう／＼に泣く眼を拭ひ、

ト常世は腕組をなして當惑の思入、白妙も共に愁ひの思入あつて、

白妙　いえ／＼その事ならお案じなされますな、代なす物がござりまする。

常世　フウ、まだ賣殘した物がありしか。して／＼それは、如何なる品ぞ。

〽問はれて白妙打しをれ、

白妙　外の品でもござりませぬが、この黒髪をふツつと切り、賣代なさば持成の、米の替りになりませう。

常世　すりや、そなたには黒髪を。

白妙　はい。

〽いかに糧に盡くればとて、髪は女子の飾りにて、

常世　額に波の寄る年まで、をしむは人の常なるに、（ト思入あつて、）その志しは忝ないが、そなたに髪を切らしては、舅御殿へ言譯なし。

白妙　何の私にその御遠慮、褒めこそすれ親達が、何しにあなたを恨みませう。

常世　思へば僅かな價なれど、苦勞黒髪切つてもと、

白妙　貧苦に迫る身の上は、

白妙　言ふに言はれず、

常世　實に結ぼれる、

白妙　夫婦の者の心の内。

常世　寐物語に、

兩人　致さうか。

〽野寺の鐘もかう〳〵と打連れてこそ、（ト兩人奥へいる。）〽入りにける、早明近く雲も霽れ、雪も小止みし山道を、尋ね戻りし出雲坊、軒の明りに目印の、網代の小笠打見やり、

ト花道より以前の出雲坊出來り、花道に止まり、

出雲　軒に印の網代笠、首尾よく此の家へ御止宿ありしか、先はこれにて我安堵、最早夜明に程近ければ、あれへ參つてお迎へ申ん。
　〽雪踏み分けて目印の、軒端の下へ歩み寄り、
あいや、此の家の內へ御案內申す。
　〽おとなふ聲に一間より、主は誰とも白妙が、（ト奧より白妙出來りて、）
白妙　この夜更に御案內とは、どなた樣でござりますな。（ト門口を明ける。）
出雲　はッ、某事は旅僧なるが、軒にかけたる目印の笠の主人は我師の坊、道におくれて尋ねしが、此の家へ止宿致されしか、迎ひにこれまで參りしもの。
白妙　それは夜道に嘸御難儀。いかにもお泊りなされてなれば、さあ〳〵これへ。
出雲　然らば、御免下されい。
　〽わらぢの紐もとく〳〵と、足を拭ひて座に通れば、（ト下手へ住ふ。）
白妙　最前からあなたをば、お待ちなされてござりました。
出雲　嘸かしお待ちなされてゞござらう。して師の坊には。
白妙　あれに御寢なつておいでなされば、圍爐裏へ粗朶を折りくべて、ゆるりとお休みなされませ。

出雲　それは千萬忝ないが、最早鷄鳴近ければ、師の坊の御供なし、これより出立致したうござる。

白妙　ではござりませうがこの大雪、一兩日御逗留なされてお立ちなされませ。

出雲　いやお志しを無にいたすが、鎌倉表に急用ござれば。

白妙　左樣なれば是非もなし。この由をお報せ申さん。

〽言ふに傍の一間にて、

時頼　あいやそのお報せには及び申さぬ。

白妙　そんなら、お目覺でござりましたか。

出雲　御用意よくば御出立。

〽斯くと聞くより源左衛門、破れし袴も折目高、

ト奥より常世袴を穿き、一本差にて出來りて、

常世　なに、御僧には御出立とな。

時頼　いかにも、出立いたすでござる。

〽立ちいでたまふ御姿、威あつて猛き御粧ひ、以前に替るいでたちに常世夫婦は心得ず。

ト上手の屋體より、時頼白綸子の着附、錦の直綴、小刀を差して出來る。

常世　やゝ旅裝束に引替へて、見れば美々しき御いでたち。
白妙　諸國を廻る修行者とは、浮世を憚る御僞り、
常世　まことは如何なる御方なるか。
　　へ威儀を正して問ひかくれば、最明寺は莞爾と打笑み、
時賴　はゝお不審な尤も、今おこと等が忠義に愛で、包みし我名を明し聞けん。諸國修行の旅僧と姿をやつせし某こそ、鎌倉五代の執權北條相模守時賴、剃髮なして最明寺道崇。
兩人　やゝゝゝ。
出雲　まつた附添ふ某は、二階堂信濃守、今入道なして出雲坊。
　　へ聞くに夫婦は打おどろき。
常世　扨は時賴公にてましませしか。
白妙　知らぬことゝは申しながら、
常世　最前よりの無禮の段、恐入つてござります。
　　へ身をへりくだり、三拜なして敬ひけり。
さるにても合點まゐらぬは、何故あつて時賴公には、

白妙　諸國を御修行遊ばしますぞ。

時頼　時頼依怙なく政事をなせど、六十餘州の隅々まで我政事行屆かず、さるによつて去年の春より所勞と言ひたて引籠り、ひそかに館をぬけいでゝ、これなる信濃とたゞ二人、諸國を廻り巡檢なすも、領主地頭の邪を見出し、民の歎きを救はん爲め、計らず今日忠信無二の佐野源左衞門が、埋もれありしを、見出したるは我悦び。

〽この上なしと悦びたまふ、折から妹玉笹が、破れし行燈たづさへ出で、

ト上手の家體より、玉笹御教書の認めある行燈を持ちて出來り、

玉笹　申し兄上樣、お枕頭の行燈に何やらお記しございまする。

〽言ふに行燈打見やり、

常世　なに、「加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松ヶ枝、右三ヶの莊、子々孫々に至るまで領地たるべきものなり、佐野源左衞門へ鎌倉執權時頼判、」

〽思ひがけなき御教書、

常世　すりや三ヶの所領を某へ。

時頼　あれなる三つの鉢の木に、よそへてそちへ我土産。

出雲　君鎌倉へ御下向あらば、大佐々木まで持參あれ。

常世　はゝツ、思ひがけなき御賜。

白妙　嘸や草葉の蔭にても、

玉笹　亡き父母の御悦び。

常世　ちえゝ有難う存じ、

三人　奉ります。

〽天を拜し地を拜し、悦び勇むぞ道理なる。

出雲　いざ、御用意よくば、

時頼　おゝ、出立なさん。

〽座をたちたまへば、（ト時頼立上るを、）

常世　暫くお待ち下さりませ。

〽言ひつゝ立つて傍なる、鉢木の梅をはつしと切り、扇に載せて差出す、

ト常世棚の上の梅の鉢をとり、扇にて梅の枝を打折り、直に開いて載せ、時頼の前へ出し、

かゝる尊き御身をば、獸の皮ある某がこの藁屋へ泊めまゐらせ、汚れし三衣を香木にて清めまゐる

らせたく思へども、貧苦にせまり心に任せず、梅は香りの高きもの故、伽羅栴檀とも思召され、
これにて三衣をお濟め下され。
〽火にうちくべてさしあふげば、
ト火鉢へ枝を入れ扇にてあふぐ、時頼感心の思入あつて、
時頼　いや、感心々々。
〽感じ入りたる折こそあれ、後に窺ふ怪しの曲者、
ト此の折下手へ五郎藏拔身を持ち窺ひ出で、
五郎　時頼、觀念。
〽切つてかゝるを源左衞門、襟上とつてづでんどう、起上るをぐつと引附け、
常世　此奴はたしかに、源藤太、千原平太が廻し者。
五郎　それ知られたら、（ト跳ね返すを投げ退ける。）
時頼　今四海泰平なれど、油斷ならぬは反逆謀叛。
出雲　もし鎌倉に變あらば、必ず忠勤盡されよ。
常世　はゝ、仰せにや及ぶべき。（トハツとなりて、）君御大事と聞く時は、

〽ちぎれたりとも重代の、黒革をどしの鎧を着し、錆びたりとも長刀かいこみ、痩せたりとも馬に鞍おき、たゞ一驅にて馳せ上り、

假令いかなる敵にもせよ、

〽縱横無盡に切たて薙ぎたて、忠義一途に御馬前にて、手柄なさんは手裏にあり、

トこの中常世五郎藏を相手に立廻りよろしくあつて、トゞ五郎藏をあて下手へ投げて、

御安堵あれや時賴公。

時賴　ほゝお、勇ましゝ〳〵、先づそれまでは穩便に、やはり宿りを借りし旅僧。

出雲　最早夜明に程近し、これより直に御發足。

ト本釣鐘鷄笛になり、正面打返しになりて雪の遠山になり、日の出になる。皆々思入あつて、

常世　實に山々のこの雪は、

白妙　よき事積る前兆なりしか、

玉笹　埋もれし名も世に出でゝ、

出雲　再び花咲く木々の枝、

時賴　雪にすゝぐの聲あれば、

常世 時にとつての、
皆々 會稽山。

〽末世末代色替へぬ、常磐の松の梅櫻、ほまれの花ぞ。

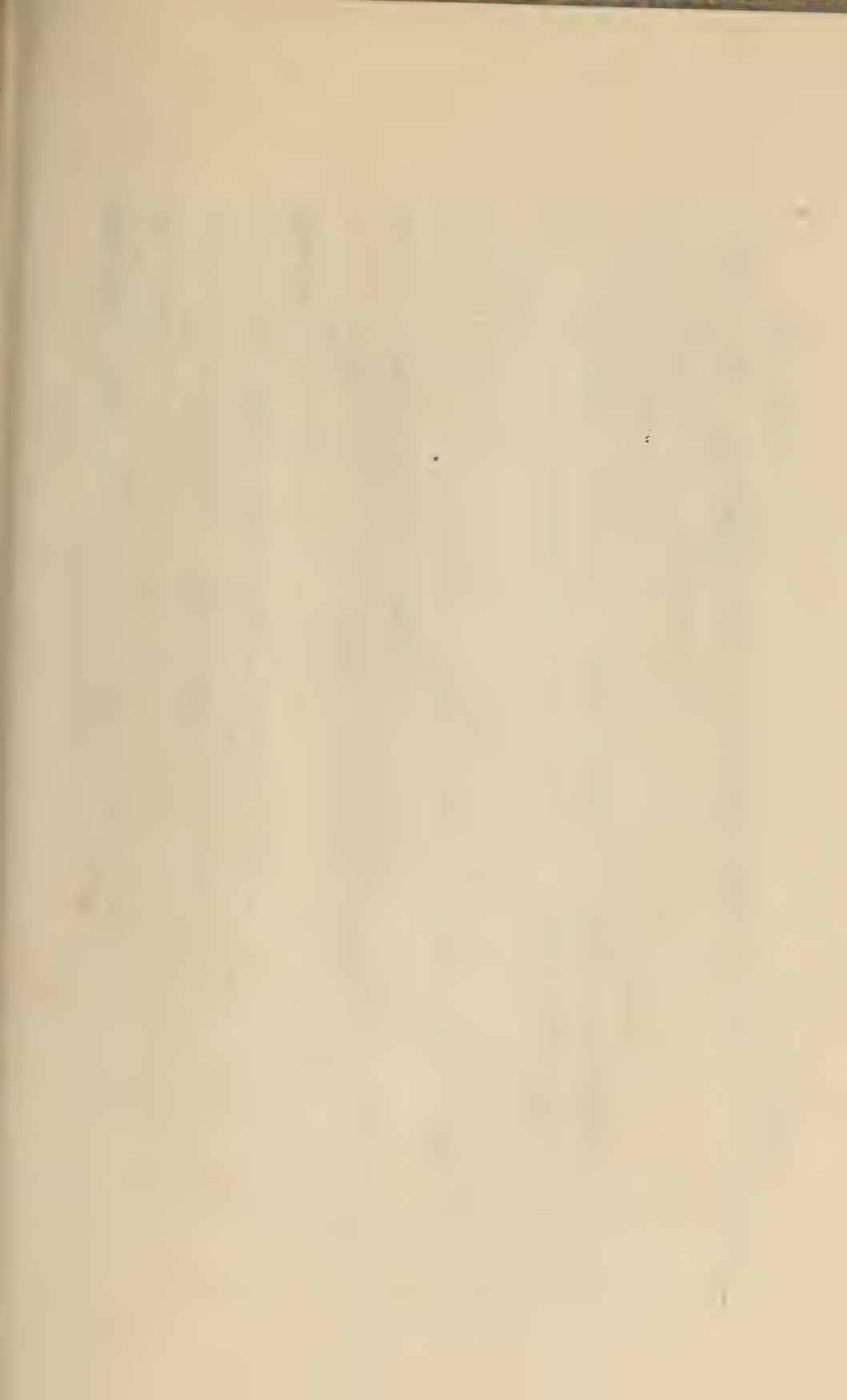
ト時頼立上る。以前の五郎藏かゝる內常世ぐつと踏まへる。

皆々 さらば、

〽殘りける。

ト皆々引張りの見得にてよろしく、

幕

鉢の木（終り）

此狂言の發端は上總の國の上行寺で先非を悔し宗次が自殺刄物は名譽の村正にて夫を尋ねに木更津の濱邊で出會正作に疑ふ傳七宗之助が又腹切も刄の祟りあぢに絡んだ因縁に水死を助し源左衞門が圍者とも夕まぐれ蝙蝠安に連られて廻る車の源氏店に横櫛お富が三歳の再會切れたる哉谿夫殺しに新島與三が四十五個所

茲鎌倉花水橋　赤間白瀧大喧嘩騷佃送船

此狂言の大切は下總の國の千葉殿へ汚名を雪新三が歸參土産は重器の香爐にて夫を筐にけなげにも妹背の道を切髪のお岸が心汲分て扨緣切のあいそづかし義理にしがらむ同胞とも知で殺しみよ吉と同じ其夜の宵の口お渚が最期に憂事の積異見の雪の下に念佛六兵衞が六字の教訓切つたるかな藝者殺しに越後新助が三十五人

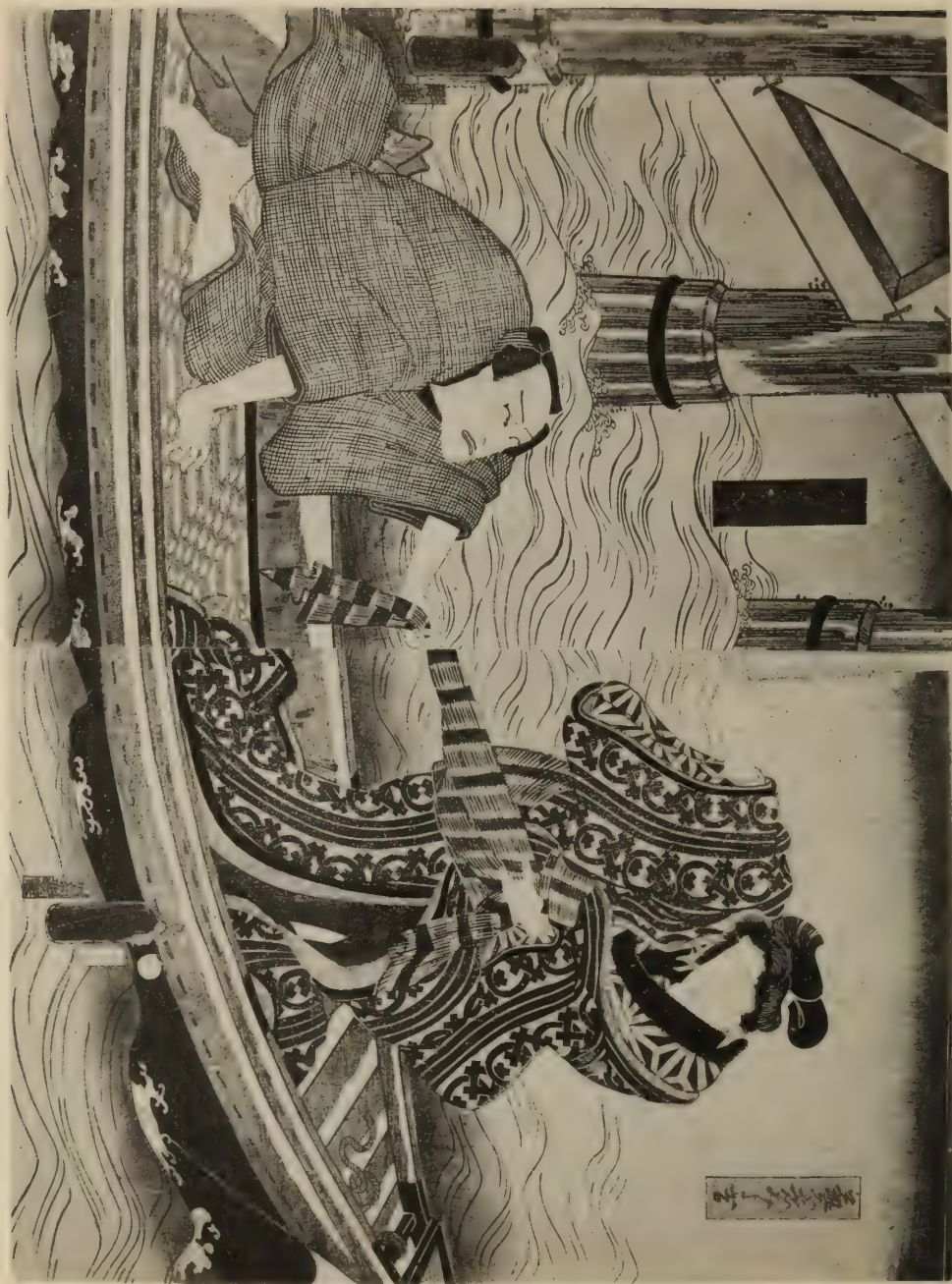
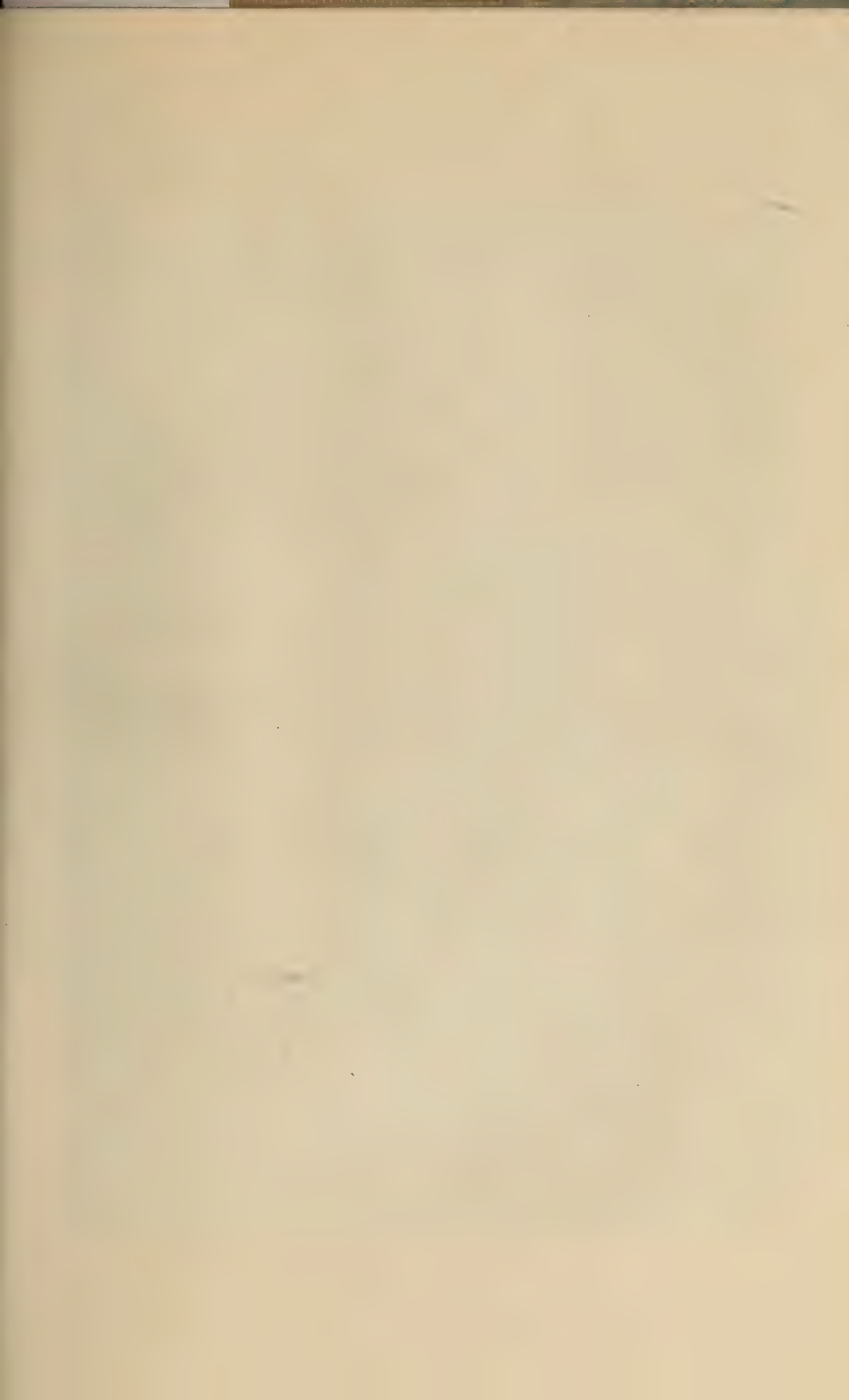
一刀救小天狗永代譽

八幡祭小望月賑

「縮屋新助」美代吉殺しは萬延元年七月、四十五歳の時市村座で稿下された。その時には前段へ「切られ與三」を置きそれと組合せになつてゐたから、作中へ赤間等の人物が取り入れられてゐるのである。この作は兩隣りの二座に立つてゐる幟を祭禮の幟に見立て、深川の祭禮に永代橋の落ちたのや、其當時の出來事なる美代吉殺し等をあて込み、旁々小團次の希望を實現して越後の縮賣を主人公として新作されたもので、異常の成功を收めた芝居であつた。殊に其の當時第一の人氣役者たる先代芝翫と對抗した關係などで、市村座は初春以來不況に陷つてゐたのが、この作によつてすばらしい大當りを得たのですつかり挽回したといふ。繁昌するに連れて樂屋内にも祭りの趣向が凝らされて藤棚ができる、揃ひの浴衣や首ぬきができる、幕間には馬鹿囃子をして景氣を添へるといつた有樣で、七月から九月までは打續けられると言はれてゐたのが八月の二十八日に三座とも類燒したのでそのまゝになつたといふ。この作の如きは作者の三題噺的頓才的趣向の才の顯著なる發揚を示したもので、この頃に至つて作者の地位も鞏固にされたのであつた。作そのものも特殊な戀愛を取扱つたものとして、出色の世話物たることは言ふまでもない。

書卸しの時の役割は、市川小團次(縮賣越後新助、劍術師小天狗正作)、關三十郎(赤間源左衞門、念佛六兵衞)、岩井粂三郎(藝者美代吉)、河原崎權十郎(穗積新三郎)、市村羽左衞門(白瀧の佐吉)、市川白猿(みるくひの松)、中村歌女之丞(正作妹おきし、藍屋おつる)、吾妻市之丞(おなぎ、野花屋女房おつゆ)、市川米十郎(若黨富津傳七、荷擔ぎ作助)、關花助(濱田宗之助)松本國五郎(山鹿毛平馬、縮賣九郎助)、嵐吉六(娘分徒葉おすゞ)等。

挿繪にしたのは龜戸豐國筆の錦繪で、浪除の船中に於て美代吉を口說くの場面である。

大正十三年十月　編者誌す

八幡祭小望月賑（縮屋新助――四幕）

序幕　　仲町野花屋の場

〔役名――縮賣越後の新助、赤間源左衛門、穗積新三郎、海松杭の松、荷擔ぎ作助、山鹿毛平馬、小道具屋利七、船頭乘切り長次、赤間の子分熊藏、虎松、丑助、豚八。藝者新藁おみよ、野花屋女房お露、笹葉おすゞ等。〕

（野花屋見世先の場）――本舞臺四間通し常足の屋體。上手に障子屋體。軒口へ巴の紋の幕を張り、巴の紋に雁木山形のある提灯を澤山に下げ、正面は奥座敷の遠見、これへも巴の紋の提灯を澤山に下げ、上下に金屏風、一面に毛氈を敷き、深川形の煙草盆を出しあり、下の方に風雅なる門、この前に床几二三脚ありてこれにも毛氈を敷きあり、總て仲町野花屋見世先、祭禮棧敷の體。こゝに○□△◎の四人娘分の打扮、金八世話役の打扮にてをり、酒肴を列べ酒宴をしてゐる模樣にて、賑やかに幕明く。と、上下よりお祭り番附、鬼灯賣など上下へ入違ひてはひる。

金八　なんと、久しぶりの本祭りで日和は好し、このやうな目出度いことはござりませぬ。

○　左樣でござりまする、大そう賑やかにできました。これと申すも、みんなお世話役さんのお骨折

りでござんすわいなあ。

△　それにこの仲町の羽織衆が手古舞に出なさるので、大評判でござりますわいなあ。

□　その内にもおみよさんの綺麗なこと、女でも見惚れるやうでござりますよ。

◎　早く練物が見たうござりますわいなあ。

金八　いやもう今に地走りの踊りが來るであらう。私アまた晩の俄のことで會所へ寄合に行かにやあならぬ。お上さんにもよういうて下さりませ。

○　まあよいではありませんか、お燗のよいのをもう一つ上つておいでなさりませ。

金八　いや、また後に來てゆつくりとやりませう。

△　それではもうお歸りでござりますか。

金八　どりや行つて來ようか、やれえらいことだ。（ト足早に下手へはひる。）

○　ほんにいつもながら、見番の金八さんは、氣輕な人でござんすわいなあ。

△　お祭りの御祝儀に、もう一つやらうぢやあないかえ。

三人　それがよいわいなあ。

ト皆々わや〳〵言つてゐる、花道より平馬侍裝にて出で、後より利助道具屋の裝にて出來りて、

利七　もし〳〵そこへおいでなされまするは、山鹿毛平馬様ではござりませぬか。
平馬　イヨウ誰かと思つたら道具屋の利七か、はゝあ、今日は祭り見物で命の洗濯だな。
利七　へい、先づ祭禮見物と號しまして、實はやつぱり慾張の方でござります。
平馬　いつも〳〵抜目のない錢儲けをする男だ。何しろ儲け口は耳寄だ、半口乘りてえの。
利七　あなたもあまり、慾のない方ではござりますまい、はゝゝゝ。
平馬　何しろ野花屋へ行つて一ぱいやらうか。
利七　左樣なら、お供いたしませう。

ト兩人舞臺へ來る。娘分皆々見く、

○　これは平馬さん、よういらつしやいました、御祭禮を御見物でござりまするか。
△　さあ〳〵此方へお上りなさりませ。
□　おや、道具屋の利七さん。
◎　まあこゝへおかけなさんせいなあ。
平馬　いつも〳〵全盛だの、今日はまた祭禮のせゐか別仕立に磨きたつたな。
利七　皆さんの顏を見ると、氣がせい〳〵するやうだ。

○　おや、きつい乘せやうでござりますよ。

平馬　利七、何にいたせこれへかけて一服いたさう。

利七　それがよろしうござりまする。（ト兩人床几に腰をかける。）

平馬　ときに、今日は赤間源左衞門はまだ見えぬか。

○　是非々々今日はいらつしやいますお約束でござりまするが、まだお見えなされませぬわいなあ。

△　もうおいでがありさうなものぢやわいな。

利七　今日は是非おいでゝござりませう、私も少々生業のことで用がござりまするが、野花屋へ行つて待つてゐるとおつしやいました。何にいたせおいでまで、これで待合してをりませう。

平馬　これ利七、して、赤間に何の用事だ。

利七　へい、別のことでもござりませぬが、村正の一腰をどうか欲しがる人があるなら、相談をしてくれとおつしやりました故、少々心あたりもござりますから、何にいたせ代物が正眞でござります故、そこを見込みに引受けまする積りで、今日は代金も持參いたしました。

平馬　それぢやあ今日は金方だな、ちつと浮かれるがいゝわな。

利七　イヤモその金も見たばつかり、行き拔けでござりまする、はゝゝゝゝ。

平馬　あの村正を手放すからは、赤間もお富がなくなつてから一人寂しく通ふのか、但しは自棄になつたのか。この江戸へ來ておれと一緒に辰巳通ひ、妙なとこから乘りこんだは、死んだお富に似てゐるとあの新藁のおみよを呼ぶが、これが眞の無駄骨だ、彼女はおれが同藩の穗積新三郎といふ奴と、二世までと言ひ替してゐる故に、無駄といつても聞入れず、兎角未練が殘るかして、大事にかけた村正まで手放すとは、金轡でおみよをば、手に入れる心と見えるわえ。

利七　はゝあそんならお前樣も、少し岡燒女郎衆でござりますね。

平馬　べらぼうめ、おれなぞは女に買はれる身分だ、はゝゝゝ。

トこの時花道の揚幕にて、大勢の聲にて「うしやあがれ〳〵」とどなる聲がして、赤間源左衞門一本差にて出來る、後より海松杭の松縮屋の裝の新助を引きずりて出來り、その後より赤間の子分熊藏、虎松、丑助、豚八出來り、荷物の作助縮の荷を擔ぎ、これも引張られ、長次船頭の裝にて出來る。

梅松　やい、この百姓め、人込の中へこんな物を持込みやあがつて、なんで親分に突當りやあがつたのだ。

子分　何でも此奴等あ了簡があつて、打ツつけやあがつたのだ。

海松　どうするか見やあがれ、こちとらが腕ツ節を見せてやるのだ。

長次　お祭りの前祝ひだ、ちつと痛え目をさせて、こり〳〵させてやるがようござりやさあ。

新助　全く供の者が土地慣れませぬ故の粗相でござります、御免なされて下さりませ、御免なされて下さりませ。(ト頻りに詫びる、源左衛門思入あつて、)

源左　やい〳〵〳〵、往來中で見つともねえ、向ふまで引きずつて行け。

子分　さあ〳〵、うしやあがれ〳〵。

(ト皆々本舞臺へ來る、娘分皆々これを見て、)

○　赤間さん、海松杭さんも御一緒で、

皆々　ようござんしたなあ。

平馬　お〻赤間先生、最前から待兼ねてをつたわえ。

利七　これは〳〵源左衛門樣、だいぶお手間がとれました、先刻よりお待受け申しました。

源左　今日の祭りを見物に、子分の奴等を連立つて來かゝる途中で縮屋めが、天秤棒の尖端をおれに突つかけやァがつて、あやまりやうが惡い故、例の氣早で海松杭が腹を立て、たうとうこゝまで引ずつて來たのだ。

海松　一人通るも人込ですれ合ふ中をこの野郎が、大きな物を擔ぎあがつて、親分にぶッつけた故、

子分　それで了簡しねえのだ。

長次　いつてえ此奴等アなまじツか、江戸へ來てゐやあがるものだから、生利で鼻持がならねえや。ねえもし旦那、

平馬　そりやあ憎い素町人め、越後ツぽうの癖をして縮屋なんぞといふものは、江戸者を馬鹿にしやあがるからだ。こんな奴は、こツぴどい目に逢はせるがいゝわ。

新助　あゝ申しお侍樣、つい人込で突當りましたはこの荷物でござりますが、何を申しても當年始めてこの江戸へ出ましたもの、不調法の段は幾重にも、お詫を仕りまする。どうぞとも〲お詫言をなされて下さりませ。

海松　やい〲〲、わりあ江戸慣れねえとぬかすが、何故そんな野郎に、人込の中を擔がせやあがつたのだ。

新助　いえ、これはかやうでござります、この居廻りは私の賣場でござります故、今日の御祭禮にお家主方のお揃ひを、仕立ぐるみ請合ひましたところ、つい仕立が間に合ひ兼ねまして、まだか〲の御催促が櫛の齒を引くやうでござります。それ故仕立がやう〲出來ました故、祭りのお間をかかせましては濟みませず、取るものも取りあへず心は急けどあの人込、聲を嗄らして、お賴み

申しますお頼み申しますと、やう〳〵通つたお祭り場所、氣の急きますまゝに思はぬ粗相、どうぞ御勘辨を以ちまして、お許しなされて下さりませうならば、へい〳〵有難うござります。

作助 (田舍漢のこなしにて、)これ親方、そんなに何も詫びさつしやるにやあ及ばねえわ、これが何もこつちから突當つたといふではなし、人込だから心配して避けて通るのに、あつちから突きあたつて言ひてえざんまいをまき出して、あんまりあやまりすぎるから、猶々つけ込みますわ。イケ馬鹿馬鹿しい、なんで詫びることがあんべい。

子一 何だ、詫びることがねえ、なに、ねえことがあるものか。

子二 イケ强情な椋鳥め。

子三 こんな奴はたゝきくじけ。

子四 さうだ〳〵、やツつけろ。(ト子分皆々して作助の横面をくらはす、作助むつと思入あつて、)

作助 こりや男體したものゝ面をぶつたな。こりや面白い。おれをたゞの荷擔ぎだと思ふか、これでも國ぢやあ家柄だ、一ヶ村で順序を爭ふ作助だ。さあぶたつしやい、さあぶてろ〳〵もつとぶて、サアぶて〳〵。(ト强情にいふ、新助もてあぐみて、)

新助 これ〳〵〳〵、どうしたものだ。あなた方に向つて、めつたなことを言ふではないぞ。

作助 何の構はつしやるな。さあぶてろ〳〵。おれも男だ、一番立入をやんべい。えゝ親方うつちやつておかつせえ。

新助 えゝ、おれがいふことを聞かぬのか。（ト新助作助をなだめる、利七中へはひつて）

利七 これさ〳〵どうしたものだ、お前が悪い〳〵。

作助 何で、私が悪いのだ。

利七 いゝといふことよ、何でもあやまらにやあ事が面倒だ、さあ〳〵あやまらッし〳〵。

長次 利七さん、うつちやつておきねえ、癖にならあ。

ト此時娘分四人とも前へ出て、新助を見て、

○ おや、誰かと思つたら、お前は縮屋の新助さん。

△ とんだことでござんしたなあ。

□ もし赤間さん、私等も知る人でござんす故、

◎ どうぞ堪忍してあげて、

四人 下さんせいなあ。

ト皆々源左衛門へ詫びてやる。源左衛門思入あつて、

源左　いゝやいやだ、了簡ならねえ。手前達が口々にさう詫びるほど依怙地になり、持つて生れた癇癪の蟲が猶々募つてくらあ。詫びをされゝばされるほど、そんならさうかと言はねえのが、ちつとこんな色里ぢやあ野暮とか不通といふだらうが、木更津生れのうぶすながらだ、入らざる口をたたかずと、待人でもつけてひつこんでゐねえ。

海松　さうだ〳〵、假令こんな野郎の一匹や二匹、たゝツ殺して下手人に、命を捨てるは何とも思はねえ。引込思案に了簡しちやあ上總産れの魂がすたらあ、まだ厄年にやあなるめえが、覺悟を極めて居やあがれ。

新助　さゝゝゝお腹立は御尤もでござりますが、どうぞこの所を幾重にも、御了簡なされて下さりませ。(ト詫びるを、又作助新助をかきのけるやうにして出で、)

作助　えゝ親方、お前さんの粗相ぢやござりませぬ。荷をぶツつけたのはこの私でござります。さあさあ了簡ができずば、私を存分にしたがいゝ。この親方に何にも科はない、さあ〳〵どうとも腹の癒えるやうにさつしやるがいゝ。

新助　あゝこれ作助、手前に怪我でもさしちやあ、おれが貴樣の親父から預かつて來た大事の身體だ、おれをかばつてくれるは忝いが、それぢやあ親父へ濟まねえ譯だ、そつちへ寄つてゐろ〳〵。

作助　いえ〳〵さうぢやあございませぬ。私がしでかしたことだ、お前は知つたことぢやあない。

新助　それでは、おれが濟まぬわい。（ト兩人爭ふ、源左衞門思入あつて、）

源左　やい〳〵〳〵、此奴等あ哀れッぽいことを吐かしやあがつても、そんなことを恐れるやうな根性で、旅から旅へごろついて盆蓙の胴をとつて歩けるものかえ。面倒だ、海松杭たゝきしめろ。

海松　合點でごんす、こんな奴にかゝつてるちやあ、祭り見物の邪魔にならあ。

長次　おいらもちつと持前の、彌次馬に出かけようか。

海松　長次、手前も慰みにやッつけろえ。

源左　えゝ、ぐづ〳〵せずと、早くやらねえか。

皆々　合點だ。

ト皆々立上ろ。とこの時花道の揚幕にておみよの聲にて「赤間さん、まあ〳〵待つて下さんせいなあし」と呼ぶ。

皆々　あの聲は。

トきやり崩しの端唄へ鳴物を冠せ、花道よりおみよ祭りの手古舞の打扮にて出來る、後より祭禮の縁子、揃ひの手拭を襟に卷き扇蝶に美代と紅にて書きたる大きなる團扇を持ち、その後より藝者三人手

古鉾の打扮にて出で、倘祭禮と印したる團扇を持ちたる若い衆大勢附き出來る。舞臺の娘分見て、

○　ほんにお前はおみよさん。

△　皆さんも暑いのに、

□　ようまあござんしたなあ。

◎　まあ〳〵こゝへ、

皆々　ござんせいなあ。

みよ　（思入あつて、）赤間さん、皆さん許して下さんせ。

藝一　そんならおみよさん、

三人　さあ行かうわいなあ。

トこれにて皆々舞臺へ來る、源左衞門思入あつて、

源左　誰かと思へばそなたはおみよ、譯も知らずにもの〳〵しく、何でこの場へ、

子分　留めに出たのだ。

みよ　さあ、譯は何にも知りませぬが、これが相手が達師とかお侍とかいふのなら、お前の男も立つまいが、見なさる通りの旅商人、弱いところを附込んで、打ち打擲をなさんしたとて、あんまり

見えにもなりますまい、情は人の爲めならずとやら、ちつと出すぎたやうなれど、私に免じて了簡して下さんせいなあ。

藝一 私とてもとも〴〵に、お詫を申しますほどに、

藝二 お腹立もあらうけれど、おみよさんの挨拶故、

藝三 今日のところはお祭りのことなれば、

藝一 堪忍してあげて、

三人 下さんせいなあ。

源左 (思入あつて)むゝ、ほかの奴が挨拶なら假令どんな顔役でも了簡ならねえところなれど、今仲町で名うての藝者、新藁おみよが挨拶故、魚心あれば水心、了簡してやらうわえ。

みよ そんなら私の言葉を立つて、

源左 この場は濟ますが此方にも、聞いて貰はにやあならねえ事が。

海松 でも親分、このまゝで濟ましちやあ。

源左 はて、何もおれが胸に。

平馬 いかさまこゝはあのおみよに、預けてやるも後の魂膽。

海松　そんなら親分、い丶かえ。

源左　え丶、い丶と言つたら、うつちやつておけといふに。

長次　こいつア後で、何か思案があると見えるわえ。

子分　そこは親分だ、そつがあるものか。（ト此時娘分〇△奥へ行つてゐたが出て來て）

〇　もし赤間さん、お肴の支度が出來ました。

△　奥座敷へおいでなさりませ。

源左　いかさま、奥で氣を替へて一ぱいやらうか。

平馬　然らば、身共も同道いたさう。

利七　左樣なれば、何かのお話は、奥でゆつくり。

源左　さあおみよ、おれと一緒に。（トおみよの手をとる。）

みよ　私は後から。

源左　そんなら奥で、待つてゐるぞよ。

海松　そんなら親分。

源左　皆もいつしよに。

皆々　さあ、おいでなされませ。

ト源左衛門先に皆々奥へはひる。後に新助、作助、みよ吉、藝者等殘る。新助思入あつて進み出で・

新助　よい所へおみよ樣、お前樣がおいでなされまして、危い難儀を脱れました。

作助　どうなることかと私なざあ・心の内で國の親父へ暇乞をしてをりました。

新助　實に命を拾ひまして、有難うござりまする。（ト兩人おみよに禮を述べる。）

みよ　なんのお禮に及びませう。あの赤間といふ奴は私の客でござんすが、たしか上總の道樂者、却々一筋繩では行かぬ人、まあ何にしろお怪我がなうてようござんしたなあ。

新助　なるほど、見受けました所が、なか／＼一りきみあるお方と見えまする。これ作助、手前もおれもいゝ日を喰つたのぢやの。

作助　ほんにさ　でござります。

藝一　私等もどうなることかと思うたわいな。

藝二　いつ來ても／＼、あの客人ほどむづかしい連中はござんせぬ。

藝三　強いことばつかりいうて、今の世界には合はぬわいなあ。

藝一　あれがあの衆達の自慢でござんすわいなあ。

二人　ほゝゝゝ、

　　　ト奥より野花屋の女房おつゆ、茶屋女房の裝にて出來り、

つゆ　おみよさん、今の樣子は蔭で聞いてゐたわいなあ。よくまあ新助さんの詫言をして上げて下さんした、私やほんたうに氣がせめたわいな。新助さんも災難を脫れたといふもの。

みよ　あんまり見兼ねた故、憎まれるも合點で、詫言をしたわいなあ。

新助　お上さん嘸おやかましうござりましたらう、御免なされて下さりませ。

つゆ　何のまあ、丁度お前にはいろ〳〵勘定も上げたし、今日は祭りのこと、一口やつて行つて下さんせいなあ。

新助　有難うはござりますが、又今の衆に逢ひましては、面倒でござりますれば、

作助　もし親方、御馳走ならば遠慮は失禮だ。

新助　えゝまた餘計な口をきくよ。

つゆ　そのことなればお案じでない、奥の小座敷で上げるわいな。

新助　左樣なれば御祭禮の御祝儀に、御造作にあづかりませうか。

作助　そんなら、私もお相伴いたします。

新助　おみよさん、御免なされませ。
つゆ　お前も奥で一口どうだえ。
みよ　有難うございますが、ちつとこゝに。
つゆ　そんなら、新助さん。
藝一　どれ、私等も奥で一休み。さあ、ござんせいなあ。
藝二
新助　どりや、御馳走になりませうか。
　　　トおつゆ先に新助、作助、藝者等皆々奥へはひる、おみよ殘り思入あつて、
みよ　思ふやうにはならぬが浮世、待つ人は來もせいで蟲の好かない赤間面、この新三郎さんは何をし
　　てござんすやら、あれほど今日は是非々々と約束したに、ぢれツたいことではあるわいなあ。
　　　ト此時奥より、娘分笹ッ葉のお鈴の聲にて「えゝも好かない壽樂さんだよ、覺えておいで」と言ひな
　　　がら、走り出來るをおみよ見て、
お鈴さん、いつもいゝ元氣だねえ、何を大きな聲をしなさんすえ。
お鈴　おみよさん聞いておくんなさいよ、あの壽樂ぢゝいがいつでも〳〵私を捉へて、からかつていけ
　　ないのだよ。

みよ　そりやあお前に、あたりをつけるのだわね。

お鈴　おやまあどうせうねえ、いやだねえ。そりやさうと今日はまだ新さんはおいでなさんせぬかえ。

みよ　今日は是非々々來ると言ひなさんしたが、どうしてこのやうにおそいことぢややら、實にぢれッたいのだよ。

お鈴　なあにお案じでないよ、ぬしのことだからきつと來なさいますよ。

みよ　此の頃ぢやあ當にはならないよ、どんなに性惡になんなすつたよ。それだから餘計に氣がもめてならないのだよ。（トお鈴おみよに水をむける思入にて、）

お鈴　おや〳〵さうかえ、道理で此間もね、粂本のかゝこ衆と矢倉下で話しをしてゐなすつたよ。

みよ　お鈴さん、そりやあいつの事だえ。

お鈴　四五日あとの事だがね、どこでもかしこでも、新さんにやあみんなが岡惚れだよ。おみよさん、お前うつかり油斷ができないよ。

トいろ〳〵おみよに氣をもませるやうにする。この中新三郎浪人の打扮にて奧よりいで、これを聞いてゐる、これに兩人心附かず、おみよは段々お鈴の傍へよりて、

みよ　ほんたうに男といふものは氣が多いから、それにあの新さんは女にやさしいものだから、つい引

かされるよ。

お鈴　男ぐらゐ氣の定まらないものはないよ、それだから都々逸の文句にもね、男心と木曾路の山は

いくら切つても木が多い、とさ。よく作るものぢやないかねえ。

新三（前へ出て）おみよ、もう惡口はそれぎりか。

トこれにておみよびつくりして、新三郎を見て、

みよ　おや、新さん、いつの間にござんしたえ。

お鈴　私あびつくりしたよ、胸がどき〳〵しますわいな。

新三　おりやさつきからこゝにゐたわえ。

みよ　噓ばツかり。

新三　いや〳〵噓ではない。この頃はだいぶ性惡になつた故、うつかり眼は放されぬ。

お鈴　おや〳〵、そんなら今の話を。

新三　さ、聞いたでもなし聞かぬでもなし、女といふものは氣が多い故、それにおみよなぞは男にやさ

しいから、誰でもつい引かされて。

みよ　えゝも憎らしい、又あんなことを。

新三　女ぐらゐ氣の多いものはない、都々逸の文句にも、女心と木曾路の山はいくら切つても木が多い。よく作つたものぢやなあ。

お鈴　おや憎らしい新さんだよ、私達が言つたことをみんな聞いてさ、どうせうねえ。

みよ　お鈴さん覺えておいでよ、たうとう私をすつかり乘せなんしたね。

お鈴　おみよさん、堪忍おしよ。

　　　トお鈴はそこくさと奥へはひる、後兩人思入あつて、

みよ　もし、新三郎さん。

新三　用ありさうに改まつて。これおみよ、いつ見ても美しいが、取分けかういふ打扮では、おれが慾目か知らないが、一際目立つて器量があがつたやうだ。

みよ　えゝも人にばつかり氣をもませ、あんまりなぶつて下さんすな。

新三　なに、なぶつていゝものか、おれのやうな浪人は粗末にすると罰が當るわ。

みよ　今日も祭りの會所へ行くと、みんなが私に聞けがしにお前の事を褒める故、いゝしんに私ァ氣がもめるよ。

新三　その氣のもめるはおぬしより、おれの方がよつぽど餘計だ。

みよ　そりや何故でござんすえ。
新三　はて知れたこと、おれはおぬし一人守つてゐれど、そなたは身體を賣る身の上、假令女郎でないにしろ藝者も勤めは同じこと、それぢやによつて氣がもめるといふことよ。
みよ　私の心を知らぬかなんぞのやうに、え丶憎らしい。

トおみよつんとする、この時以前のお鈴出て來て、

お鈴　おみよさん、今奥へお酒の支度をしておいたから、新三さんと一緒においでよ。
みよ　おや、さうでござんしたか。そんなら新さん、奥で一口呑みなさんせ。
新三　おぬしが行くなら一緒に行かう。
お鈴　早くおいでなさんせいなあ。
みよ　お鈴さん、頼みましたよ。

ト新三郎とおみよは思入あつて上手屋體へはひり、お鈴は奥へはひる。と海松杭の松先に平馬、長次娘分等出來りて、

海松　今親分が道具屋の利七と何だか話しがあるさうだ、その內眞面目でもゐられねえ、これからこ丶で祭りを見ながら酒とやらかさう。

長次　それがようござりませう。さあ〳〵酒だ〳〵、酒と肴をどし〳〵持つて來い〳〵。
娘一　はい〳〵、只今直ぐでござります。（ト手をたゝくと、奥より二人の娘分酒肴を持つて出る。）
娘二　さあ〳〵皆さん、お酒がまゐりましたわいなあ。
平馬　この所で踊りを見ながら、酒宴とは又一興、面白い〳〵。
長次　これで女にさへ惚れられりやあ、十分でござります。
娘二　おやまあ、お前さんなら誰でも惚れますよ。
長次　今までねえから、あんまり當にもならねえ。
子分　そりやあ間違へねえところだ、はゝゝゝゝ。
ト海松杭の松大きな盃を取上げ、
海松　長次、これへ注いでくれ。
長次　あんまりそれぢやあ、大きいぢやあござりやせんか。
海松　こんな時にやあ、醉つてしまはにやあ面白くねえ。
長次　そんなら注ぎやすぜ。（ト酌をする、平馬見て、）
平馬　いよウ、見事々々。

長次（花道の方を見て、）もし〳〵、向ふへ地走りの踊りが來やすぜ。

子分　違えねえ、踊りが來らあ、こいつあがうぎだ。

皆々　丁度ようござんした、こゝで見物なさんせいなあ。

海松　隨分祭りも野暮なものだぜ。

ト渡り拍子になりて、花道より大紋半纏股引の鐵棒引二人、その次へ家主三人簪護の打扮にて續き、その後より祭禮の衆大勢出で、一人大きなる拍子木を持ちたるが來てその後より松風、村雨、此兵衛の衣裳をつけたる者出で、附添ひの者日傘、團扇などを持ち、この後より清元連中袴裝にて順よく出で、囃子連中屋臺にて囃しながら出で、茶瓶一荷擔ひたるが續き、皆々並よく出て本舞臺へ來り、よきほどに拍子木を鳴らし、これより清元の『三五月須磨寫繪』の淨瑠璃になり、よろしくあつての人數上手へはひる。と二重に居りし者これを見送りて、

海松　今の踊り子は、みんな器量揃ひぢやあねえか。

娘一　あの衆は、水木歌春さんのお弟子でござりますわいなあ。

ト此内源左衞門奧より出來るを皆々見て、

子一　親分、もう用は。

皆々　濟みましたか。

源左　見りやあ、まだおみよが見えねえが、野郎ばかりの酒宴ぢやあ氣が浮かねえ、おみよを早く呼べ。
女等　はい〳〵畏りました、唯今直に參ります。（トうぢ〳〵する。）
源左　えゝぐづ〳〵と埒が明かねえ、早く呼べ〳〵。
皆々　おみよ〳〵。（ト頻りに呼びたてる、と上手屋體の内にて）
みよ　忙しない、今行くわいなあ。
　　トおみよ出來りてそしらぬ思入にて眞中へ住ふ。源左衞門思入あつて盃をおみよへさし、
源左　これおみよ、人ぢらしの小路隱れ、手前がゐにやあ座が白けらあ、まあ落着いて一つ呑みやれ。
みよ　有難うござんすが、私やちつと心願があつて願酒でござんす。どうぞ堪忍して下さんせいなあ。
海松　やいおみよ、親分もお前の來るのを待つてゐたのだ、野暮を言はずと祭りのことだ。
皆々　一つ呑め〳〵。
みよ　えゝも、靜にして下さんせ、氣のぼせがするわいなあ。
源左　これおみよ、手前がいくらぴんしやんと振りつけても、言ひ出すからは何處までも假令是が非であらうとも、後へ引かぬがおれが持前、一度は言はうと思つてゐたが、長くも來ねえが此中から雨の降る日も風の日ものろい奴だが通つても、つひに一度いゝ顏もせず、噂に聞きやあ情人があ

るといふことだ。してその男は何者だ、どんな奴だか名が聞きてえ。

トこれにておみよどうなるものかといふ思入にて、

みよ　あい、情人がござんす。可愛い男がござんすわいなあ。

源左　何と。

みよ　さあ、さう知らしやんしたら匿しても言はさずにはおかしやんすまい。二世と三世と言替した男が外にござんすほどに、お氣の毒ではござんすがお前の言葉には從はれぬ故、此廣い仲町に外にいくらもある藝妓、誰なと呼んで下さんせ。あんまり愛想がないやうだが、これも私の生れつきでござんすわいなあ。(ト煙草を喫みゐる。)

平馬　して、その男は誰だ、いやさ何者だ。

みよ　さあ、その男といふは。

平馬　その男の名は何と。

トこれにておみようぢ〳〵する、此時海松杭の松つか〳〵と前へ出て、おみよの左の腕を捲り、

海松　その情人は海松杭が黒眼で睨んでおいた。さあこゝへ出せ。(ト無理に腕を捲ろおみよ押へて)

みよ　いゝえ、それは、

海松　いゝや隱しても役にやあたゝねえ、腕に彫つたこの新の字、何とこれであらうがな。
長次　男の名を腕へ彫るとは、よつぽど時代な女だわえ。
みよ　さあ、もうかう見られたら仕方がござんせぬ。あい、これが命と二世かけた、可愛い男でござんすわいなあ。
源左（思入あつて、）さう白ばけにぶちまけりやあ、これまでおれが鼻毛を讀まれた、その野郎めは、何處の奴だ。
平馬　いや、赤間待たつせえ。（おみよに向つて、）この新の字は身が朋輩、浪人なせし穗積新三郎の新の字か。（おみよ默つてゐる。）よいわ、新三郎なら面白い、香爐詮議で大切な身でありながら、その役目も打忘れ遊里の女に魂奪はれ、殿の上意を輕しめる不所存者の新三郎、蠅打つて屋敷へ引かうか。（ト立上る。）
みよ　さあ、それは。
源左　情人といふのは、新三郎か。
みよ　さあ、それは。
海松　但しは外の客だといふか。

みよ　さあ、

四人　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

源左　女め返事は、どうゞどうだ。

トおみよぐつと詰る、この前方より新助、おつゆ出かゝりゐしが、此時新助前へ出て、

新助　はい、その言交しました男といふは、私でござります。

トこれにておみよ合點の行かぬ思入、皆々びつくりして新助を見る。

源左　わりあ先刻の縮屋だな。

海松　この新の字の入墨子の、

皆々　何で貴様が情人だ。

新助　(懷中より帳面を出して、)へい、此の帳面に記してある縮屋新助、私が情人でござりまする。

みよ　えゝ。

トびつくりするをおつゆおみよの袖を引き呑込ませる。新助源左衞門海松杭等氣味合の思入。

つゆ　おみよさん、もうかうなつたら仕方がない、お前の情人は、あの新助さん、いえさ、新助さんで

ござんせうがな。（ト呑込ませろ、これにておみよ思入あつて）

みよ　はい、なるほど、今の今まで隠してゐたれど、この彫物が何もかも。私の情人といふは新助さん
それ故さつきも赤間さん、お前が手籠になさんす時見るに忍びず留めたのが、たしかな證據でご
ざんすわいなあ。

源左　そんならおみよが情人といつたは、あの越後ツぽうの縮屋か、なるほど物好な者もあるものだな
あ。

海松　なるほど情人と見えらア、頭つきから装のこしらへ、よつぽど粋な扮装だぜ。

平馬　ありやあ、越後の情人は、あゝいふ装が流行ると見えるねえ。

子一　こりやあてつきりかうだ、あの女が縮の借でもあるのだらうよ。

子二　道理で、面を見てちゞみ上らあ。

子三　あいつがほんの越後ざらしだ。

海松　業ざらしが聞いてあきれらあ。

皆々　むゝはゝゝゝゝ。

トこれを聞き新助むつとして憤るを、おみよ押へ新助を引寄せて、

みよ　あい、私や物好でござんす。これが芝居でするやうに、器量のよいのが情人と定まつたら、廣い世界が片ずむわいなあ。いつがいつまで藝者して暮らされるものでもなければ、一生の身の納り堅いところと親切なぬしの心に惚れたわいなあ。

ト思入つたやうに新助にいふ、新助汗を拭きながら術なき思入、源左衞門思入あつて、

源左　いゝわ、いくらじたばた騷いでも、藝者は賣物、身請をすりやあこつちの儘だ。これ長次、利七を呼べ、利七を呼べ。

長次　おい、道具屋の利七さん、早く〳〵。

利七　はい〳〵畏りました。（ト出來り、）お約束の代金即ちお渡し申しまする。

源左　おつとよし〳〵。こりやおつゆ、おみよが年拔、この金で親方へかけあつてくりやれ。

つゆ　はい、お氣の毒ではござりますが、おみよさんの身請のことは先約がござりますわいなあ。

源左　して、その先約の客は誰だ。

皆々　どこの奴だえ。

新助（前へ出て、）へい、やはり私でござりまする。

源左　むゝ、先約の客といふは貴樣か。

新助　左様でござりまする。

源左　むゝ、いゝわ、貴様が先約なら先約にして、改めてちつと貴様に頼みがある。ちよつとこゝへ顔が借りてえ。

新助　あの、私に。（トもぢ〳〵する。）

源左　はて、遠慮せずとこゝへ來なせえといふに。コウ、改めて頼みといふは外でもねえ、おれも上總の木更津ぢやあ人に面も見知られて、赤間とか赤馬とか跳ねた野郎と思はうが、若い時なら腕づくでも命の限に出入もするが、高が女の貰ひ引き角めだつちやあ色氣がねえ、これまで人に下から出て物ゐ頼んだことはねえが、そこが互えに見得の場所、どうぞおみよは私に下せえ。この源左衛門が貰ひやした。新助どん、まあさう思つてくんなせえ。

新助　（思入あつて）へい、折角のお頼み故差上げませうと手を拍つて、おまけ申して上げたけれど、どうもこればかりは上げられませぬ。

皆々　何で、こつちへよこされねえのだ。

つゆ　それ新助さん、赤間さんへの念晴し、もうかうなつたら隱さずとも、あの妓とお前のその仲を、そこへどうなとよいやうに。

新助　そこへどうなとよいやうに。

つゆ　これ、（ト抑へ、こなしあつて）むゝ、なるほど、男の口から色戀の話しもどうやら妙なもの、そこは女子でなければ。

みよ　（思入あつて）さいなあ、手柄らしく話すのでもないけれど、しかも去年の山開き、仲間のお方と附合でこの野花屋へござんして、初のお客へその日からどうした時のはずみやら、あのゝものゝの口說から、互に心打解けて目顏で知らし、それから後はなあ申し、

新助　深うなるほど家を外、今日は花見ぢや明日は雪、その雪からの思ひ附いつそのことに國へ行き、身幅も廣く奈良晒、互ひにすきや好きあうて、氣も藍さびの二人が仲、寐る眼も鼠のかすり地で末は夫婦が共稼ぎ、思ひ染地も二年越し。

みよ　一日逢はねば氣にかゝり、身上りしても呼び遂げて浮名巽の年も明け、世帯の苦勞をするのが樂しみ。

新助　それほど思ふ二人が仲。

源左　そんなら、これほど賴んでも、

新助　お氣の毒でござりまする。

子分　呆れたものだ。
海松　親分こりやおどうしませう。
源左　その色男もほんに出來合、狐を馬に乘せられた話しの種は知れてあるわえ。
海松　それだといつて。（ト立ちかゝるを、）
つゆ　さあ、お腹の立つは御尤もでござりまするが、さう性急に行かぬが此の道、今日は取分土地のお祭り、赤間樣も私へお預けなされて下さりませ、どうかお顏の立つやうに及ばずながらいたしませう。
源左　これまでおれが言ひだして引込んだことはねえが、今仲町で裁き人と噂の高いこの家の女房、このまゝ素手で引込んぢやあこれまで賣つた名がすたれど、器用に貴樣に預けるから、なるならざるとも面の立つよう。
つゆ　そこは私も野花屋のつゆでござんす、どうぞ祭の濟みますまで。
源左　きつと汝に預けたぞよ。初めて逢つた縮屋新助、此の後途中で逢うた時たゞぢやあ顏を見忘れるわ。見違へぬ爲め目印うつて。（ト煙管を逆手に持ち新助の額を割る。新助ムヽと思入。）これで忘れぬおれが極印。

ト源左衛門につたりと思入、おみよ口をしき思入、女連皆々思入あつて、

みよ　こりや、新助さんを。(ト立上らうとするを新助留めて、)

新助　はて、恨みを受けるは當り前だ。

滿松　あゝ小胸の惡い。(ト新助を蹴倒す。新助無念の思入。)

源左　いらざる所へ出しやばつて、割つた煙管の吸口と合はねえ野郎の附燒刄、見りやあ見るほど、

皆々　みぢめな態だ。

源左　むゝはゝゝゝゝ。どりや行かうかえ。

ト先に立ち皆々花道へはひる。新助うつぶせになつてゐる、おみよおつゆ介抱して、

つゆ　もし新助さん、嘸無念でござんせう、堪忍して下さんせ。ひよんなことをお前に頼み、お氣の毒でござんすわいなあ。

みよ　手向ひせぬを附込んで、お前の額へこのやうに、嘸痛うござんせう、私や何とお禮を言うたらよからうやら、お上さん、どうしたらよからうわいなあ。

新助　あゝ申し、そのやうにおつしやつて下さりますると、實に私が困りまする、お得意のお内儀樣のお頼み、大したことではござりませず、この位のことは何でもござりませぬ。今打たれいでもさ

つきの時、どうでも打たれる額の疵、美代吉さまのお詞に難なくその場は脱れました、差引勘定いたしますれば、損得はござりませぬ。

作助　（出來りて、）えゝ親方嘸痛うござりませう、さつきから次の間で見たり聞いたりする度に、悔しくつて悔しくつて斷出さうといたしたところ、皆の衆に留められて出るにも出られず、悔しいやら口惜しいやら、一人で袖を喰ひきつてをりましたわえ。

新助　疵というても些細なこと、なにも氣にかけるほどではない、然し情人には始めてなつて見たが、いや辛いものだわえ。

ト奥より新三郎出來り、皆々へ會釋して新助に向ひ、

新三　これはこれは新助殿とやら、ひよんなことにて難儀をかけ、何とお禮を申さうやら、忝うござりますわいの。

みよ　新三さん、ようお禮をいうて下さんせ、ぬしの難儀になるところを、新助さんが引受けて下さんしたもお前の爲め。

つゆ　ようお禮をおつしやりませいなあ。

新助　そんなら、あなた樣が。

娘分　穗積新三郎さんで。

皆々　ござんすわいなあ。

新助　（新三郎の顏をつく〴〵見て、）なるほどなあ、初めてお目にかゝりましたが、男の私でさへ見惚れまする、これでこそほんまの情人ぢやなあ。

作助　親方、よい男には生れたうござりますね。

新助　貴樣やおれもどうか拵へやうがあつたらうに、これを思ふとおれが親父やお袋は恨みだなう。

みよ　（癪の起りし思入にて、）私や今のもや〳〵で逆上せたせゐでござんすか、いつもの癪がきや〳〵とさし込んでまゐりましたわいなあ。

つゆ　それでは明日が大事な日ぢやほどに、ちつとの間小座敷で休みなんせ。

みよ　そんならお上さん、世話役衆へどうぞ譯をいうて下さんせいな。

つゆ　そこは私が吞込んで、よいやうに言はうわいなあ。

新三　女子といふものは、よいにつけ惡いにつけ、兎角持病の起るものぢや。

つゆ　申し新三さん、憚りながらあの妓の癪を。

新三　私に介抱せいといふのか。

つゆ　美代吉さんには何より藥さ。

ト しつぽりした端唄になり、おみよ新三郎上手の屋體へはひる。娘分は皆々奥へはひりおつゆ殘る。新助は新三郎の後を目も放さずぢつと見てゐて、煙管を持つたまゝ二重より下りる。おつゆ合點の行かぬ思入にて傍へ行き、

つゆ　もし、新助さん。もし、新助さん。

ト 背中をたゝく、新助びつくりして、

新助　えゝ、（トべつたり下にゐるを、木の頭。）びつくりするわえ。

ト この模樣よろしく、屋臺囃子にて、

ひやうし幕

二幕目

同返し

花水橋喧嘩の場
同　橋上の場
稻瀬川波除の場

〔役名〕──小天狗正作、赤間源左衞門、縮賣新助、穗積新三郎、海松杭の松、若黨傳七、濱田宗之助、

藍屋次郎兵衞、山鹿毛平馬、道具屋利七、鳶の者豆蟹の仁三。藝者おみよ、正作妹おきし、藍屋娘おつる、藝者等。」

（花水橋袂の湯）――本舞臺三間の間正面一面に蒸籠の積物。上手に茶見世、軒口に巴の紋附の提灯をかけあり、下手祭禮の竹矢來。よき所へ床几二三脚列べ、こゝに平馬侍裝にて娘おつるを引捉へてをり、後ろに赤間の子分二人、下手に次郎兵衞老人にてあやまつてゐる。この見得、祭りの囃子にて幕明く。

次郎　こりや平馬樣には、娘を捉へて何となされまする。

平馬　はて知れたこと、日頃より戀ひ慕ひをる娘おつる、身が妻に貰はうと思ひ、この江戸まで後を追ひかけ參りしところ、最前折よく仲町で見かけし故捉へようと存ずる內、踊り屋臺に遮ぎられ、終に姿を見失ひ殘念と思ひしに、不思議にも又もやこゝで逢ひしは結ぶの神、これから直に連歸り、身共が妻にいたすのだわ。

次郎　そりやあなた御無體と申しまするもの、先達中も木更津にて女房にくれとおつしやつたその時にお斷りを申した故、御存じでもござりませうが、いはゞぬしある娘のからだ、それをとやかうおつしやるは、ちと御人體にもお似合ひなされぬかと存じまする。

平馬　（むつとして、）やあ、しやらくさいその一言、ぬしがあらうがあるまいが、譬に申す戀は仕勝、そ

れぢやによつて身共が、連れて罷り歸るのだわ。（トおつるを引立てようとする。）
つる　あゝもし、どうぞその事ばかりは、お許しなされて下さりませ。
平馬　そのやうに情の強いことをいふものではない、これ程思ふ身共が心中、あいと申せ〳〵。
次郎　假令どのやうにおつしやいましても、娘をやることはなりませぬ〳〵。
平馬　いくらやらぬと申しても貰ひかゝつたこの緣談、是非とも連れて歸らねば身が一分が相立たぬ。
子一　さうだ〳〵、平馬樣ばかりぢやあない、こちとらもこの通り遠いところからついて來て、
子二　見つけたからは連れて行かにやあ、おら達ばかりの恥でない、親分までが名の出ること。
兩人　何でも貰つて行かにやあならねえ。（おつるを引立てようとするを次郎兵衞支へて、）
次郎　まあ〳〵待つて下さりませ、拜みまする〳〵。
平馬　留めるからは得心して、身共へ娘をくれると申すか。
兩人　さあ、きり〳〵と返事をしろえ。（トきつといふ、これにて次郎兵衞思入あつて、）
次郎　それほどまでに娘が事思召して下さるは、親の身にとりましてはどのやうにか有難く思ひますれど、御存じの通りの娘が身の上なれば、一旦の約束を變替致すと申す譯にもまゐりませねど、そこは又世に申す詠と歌、どうかいたしやうもござりませうほどに、私共親子の者が國へ歸りまし

たその上で、親類中とも相談いたし、その上の御挨拶をお待ちなされて下さりませ。

平馬　いや〳〵その一寸遁れは覺束ない、是非とも唯今このところで色よい返事せぬ内は、立たすことも罷りならぬ。

次郎　それぢやと申しまして、どうも卽答のお返事には。

平馬　ならずば娘を連れて行かうか。

次郎　さあ、それは。

平馬　身共へくれるか。

次郎　さあ、

平馬　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

平馬　面倒な、ひつぱらつてしまへ。

子分　さあ〳〵娘、うしやあがれ。

次郎　あゝもし〳〵こればかりは、許して下され〳〵。

平馬　えゝ、老耄め、邪魔いたすなえ。

ト留めるを蹴倒し、おつるを連れて行かうとするを縋り留めて、

次郎 誰ぞ來て、助けて下され〳〵。

ト平馬次郎兵衞を突退け行かうと爭ふ、此の内上手より豆蟹の仁三、手古舞の鳶の者にて鐵棒を持ち出來りて中へ割つて入り、兩人の子分を投げ、平馬を突退けおつるを圍ふ。

平馬 やい〳〵〳〵、見れば近附でもない青二才め、身共へ對し無禮致した老耄を、折檻いたすその處を、何故邪魔を致すのだ。

仁三 いえ、何もお邪魔をするといふ譯ぢやあござりませぬが、町内中のごたつきは見てゐられねえ私が生業、どういふ事の間違ひか、高が相手は女と年寄三人寄つて踏んだり蹴たり、（ト次郎兵衞に向つて）もし、いつたいこりやあどうしたのでござりますえ。

次郎 はい〳〵御親切なそのお尋ね、何をお隱し申しませう、私は上總木更津の商人、これにをりますのは手前の娘つると申しまする。先達中國元にをりまする時分に、そのお侍樣がこの娘を妻にくれいとおつしやりますれど、許嫁のある身の上故、據なくお斷りを申しましたを、今日こゝで出逢ひがしら、娘を捉へて無理無體に連れて行かうと仰しやるのみか、御覽の通り踏んだり蹴たり、どう致さうと存じた所へ、丁度あなたがおいで下さりまして親娘二人が助かりました、この

上ともにお前樣、よろしうお願ひ申しまする。（ト淚ながらに賴む。）

仁三　そりやあお侍お前樣が無理といふものだ。ヽヽぬしある娘を連れて行きやあ言はずと知れたこなたは間男、知らねえ內は兎も角も、さう聞いちやあ親御より私がどうも上げられねえ、とさあ言つたらば、お前方も入らざる奴と思ひなさらうが、足弱連れた年寄の弱身をつけ込み無理無體、娘を捲上げ行かうとは勾引も同然だ。野暮な話にならねえ內、きり〱と歸んなさる方がよからうぜ。

ト始終思入にていふ、平馬嘲笑ひ、

平馬　いや、聞いた風な小野郞め、わいらが知つたことではないわ。

子一　小望月の酒の持越し機嫌か知らねえが、

子二　何の入らざる鐵棒引、

平馬　彌次馬なれば、

三人　退いてゐろ〱。

仁三　いや、退いちやあゐられねえ、留めかゝつたら金輪際後へ引かぬはおれが持前、いらざる口も御贔屓と水道の水に染まつたからは、假令劍の眞中でも飛んで飛込む鳶頭、留めに入つたこの場の出入、不承であらうがこのおれに、どうぞ預けてくんなせえ。

平馬　いや此奴が〳〵、最前より押しだまつて聞いてをれば、さま〴〵のことを吐き散らし、人もなげなるその振舞、

子一　相手の奴が強けりやあ引いてゐられぬ男づく、

子二　邪魔しやがつた埋草に、鼻柱をたゝきをるぞよ。

平馬　それがいゝ〳〵、先づ野郎からたゝんでしまへ。

兩人　合點だ。

ト子分兩人仁三へ棒にて打つてかゝり立廻りになり、仁三兩人を散々に打ちのめし、兩人は上手へ逃げてはひる。平馬刀を拔いて仁三にかゝるを仁三刀を打落し足をかけ曲げて投り出す、平馬口惜しがつて、

平馬　うぬ、この返報は。（トちよつとおこつく。）

仁三　どうしたと、

平馬　覺えてをらうぞ。

トいつさんに上手へ走りはひる。茶見世の蔭より次郎兵衛、おつる出來りて、

次郎　これはまあお前樣、どこもお怪我はござりませぬか。やれ〳〵御親切に、大きに有難うござりま

した。

つる　ほんにもう、どうなりまする事かと存じましたに、よい所へおいで下されました故、私等二人も恙なう、此のやうな嬉しいことはござりませぬ、有難う存じまする。

仁三　いやもう悪い奴等でござります、女中連れのお年寄と侮つて、したいがいの今の亂暴、わつちもあんまり見兼ねたから、ちよつと彌次馬に飛込んだのだが、まあ何にしろお二人に恙がなくてようござりました。

次郎　これと申すもあなたのお蔭。まあ何にいたせ、こゝではとつくりお禮も申されませねば、ちよつとそこまで、なう娘、

兩人　おいでなされて下さりませ。

仁三　どういたしましてそんな事を言つちやあいけませぬ。殊に私も祭りで忙しく、またお前さん方も今のやうに、無法な者が多うござりますから、ちつとも早くお歸りなさるがようござります。

次郎　左樣でござりまするか。左樣なればお言葉に從ひまして、

つる　これでおいとま、

兩人　申しまする。(ト兩人仁三に一禮なして立上る。)

仁三　それぢやあ急いでおいでなせえ。（ト兩人は下手へはひる。）とんだ事にかゝりあつて大きに手間がとれた。嘸みんなが待つてゐるだらう、どれ會所へ行つて一口やらうか。

ト花道へ行きかけると、此時上手より赤間源左衞門、後より海松杭の松出來りて、

源左　おい、若いの、ちよつと待つて貰ひてえ。

トきつといふ。仁三振返り源左衞門を見て合點の行かぬこなしにて、

仁三　待てといふのは、わつちのことかえ。

源左　いかにも、（ト皆々床几へかける。）

仁三　む、どれそこへ行かうかえ。（ト下手へ來りて、）呼びなすつたのは、私に何ぞ用でもあるのかえ。

源左　さればさ、用がありやこそ呼びもしようか。

仁三　さうして、私へ用といふのは。

ト源左衞門の傍に立つてゐる故、源左衞門ぢろりと見て、

源左　まあ、そこへ掛きやれな。（ト仁三思入あつて下手の床几へかける、源左衞門思入あつて、）これ若いの呼びかけたのは外でもねえ、かうやつていゝ年をして大人氣ねえと言はれるだらうが、それも合點、おのれの土地なら兎も角も、木更津から來て此江戸に長らく逗留する內は、堅く亂暴するな

よと言ひつけちやァあるけれど、多い子分のことなればさうは制しが行屆かねえ、何が仕落か知らねえが、あんなやくざな子分でも打たれた日にやあそのまゝに濟まされねえのがおれが持前、この江戸へ來て源左衞門が引けをとつたと言はれては、世間の人は言ふに及ばず子分の者へ面が立たねえ、そこでこなたを呼びかけたは、おれが顏を立てゝ貰ひてえ。(ト思入にていふ。)

仁三 なるほど、流石は赤間源左衞門殿ほどあつて立派な言分、何が子分の仕落だと言はれて見りやあ言ひてえが、そこを言はぬがこつちも男、明らさまに言つたなら血で血を洗ふこなたの名折、言はねえ方が花だらうよ。

海松 こりやあ面白い、あぢにからんだ言葉尻、血で血を洗ふ名折だと言はれて見りやあ親分よりこちとらまでが恥の恥、どういふ譯か知らねえがこいつは一番聞所だわえ。

源左 これさ、そんな理窟は後にしろえ。(ト仁三に向ひ、)さあかう言ひかけたらそつちも男、よもやそのまゝぢやあ歸られまい。

仁三 御大層に人を呼留め、何の用かと思つたら、高が子分のいざこざにわざ〳〵こゝ迄御苦勞な。お氣の毒ぢやあござりやすが、私あ祭りで忙しい、そんな事にかゝりあふ暇はねえ、またこのごろのことにしようよ。(ト取り合はぬこなし、海松杭せゝら笑つて、)

海松　なるほど親分の威光は恐ろしい、勇みとやらきほいとやらが、名ばかりに聞怯ぢして男に似合はぬ逃口上。みんな見ろえ、よつほど怖いと見えるなあ。
子一　それほど親分が怖ければ、早くあやまれば濟むことだ。
子二　とてもわいらがじたばたしても、なに親分に齒が立つものかえ。
子三　さつきの樣子に打つて替り、物も言はずにぶる〴〵と、顏の色さへ青二才め。
子四　鐵棒引くのは知つてもゐようが、達引く喧嘩はまだ知るめえ。
子一　知らざあ、おいら達が、
四人　敎へてやらうか。（ト四人仁三に立ちかゝるを源左衞門留めて）
源左　やい〳〵手前達はどうしたものだ、そつちへ引込んでゐろえ。（トこれにて子分四人控へる。源左衞門こなしあつて）さあ、若いの、忙しからうが乘りかゝつた船、一か八かやらぬ内はどうも蟲が落つかねえ、いつたいおれが顏はどう立つてくれる氣だ。
仁三　その顏の立てやうは、どうすりやあようございます。
源左　ほかでもねえ、お前の命が貰ひてえ。（トきつといふ、仁三思入あつて）
仁三　なるほど、望まれたらば仕方がねえ、いかにも命を上げやせうと言つたらよからうが、まあ厭だ。

源左　そりやあ江戸ッ兒同志の喧嘩なら知らねえこと、向う前でも十何里海をへだつた上總の國、塵芥船の船頭か七里法華の講頭間拔なものなら兎も角も、上總房州下總かけ誰知らねえものもねえ長脇差の頭分、相手にとつて不足のねえ赤間と聞いちやあ了簡ならねえ、ほしくばやらうおれが命取れるものならとつて見ろ。(トきつと見得、肌を脱ぎ源左衞門の前へ片足あげて詰寄る。)

源左　流石は江戸の生れだけ、見かけによらねえいゝ肚胸だ。とるに足らねえ網小魚と思ひのほかに骨ッぽい尾鰭があつて面白い、こいつは料理をしにやあならねえ。

仁三　さあ江戸前だ、すつぱりとやれ、然し上總の赤鰯でおれが體が切れりやあよし、切れねえ時にやあうぬらが首、こつちへ取るから覺悟しろ。

海松　しやらくせえ小二才め、切れるか切れぬか赤間の子分、この海松杭が切味を見せてやらうわ。

源左　はて、小野郎でも男一疋、手前達の冴えねえ腕で長く憂目をさせるも不便、おれが一思ひにやッつけてやるわ。

海松　いゝや親分構ひなさんな、元の起りは子分の間違ひ、こなたにこりやあ賴めねえ、わしらが方で殺してしまはう。

子一　今海松杭がいふ通り、

子二　事のおこりはわしら故、
子三　是非とも親分、わッちらへ、
子四　こりやあ任して、
四人　おくんなせえ。
源左　それぢやあ汝等に任せるから、しつかりとやれよ。
皆々　合點でごんす。（ト皆々鉢卷などして身支度をする。）
仁三　汝等ぢやあ不足だが、望んで來りやあ是非がねえ、なれた鐵棒先棒にこの世の暇を取らしてやるわ。
子分　うぬ、その頰げたを。（ト兩人左右より仁三の胸ぐらをとる。）
仁三　えゝ、何をしやあがる。（ト振解いて兩人を投げる。）
海松　えゝ面倒な、殺してしまへ。
四人　合點だ。

ト四人仁三へ打つてかゝろ、仁三鐵棒にて四人を相手に床几を使ひよろしく立廻り、此の内上手より鳶の者にて手古舞裝の若者四人出來り見て、

四人　頭が喧嘩だ、相手の奴等をたゝきしめろ〱。

ト有合ふ物を持ちて打つてかゝりごつちやの立廻りあつて、鳶の者は子分三人と立廻りながら下手へはひり、仁三は海松杭と立廻りながら上手へはひる、源左衛門残り、きつとなつて、

源左　えゝ意氣地のねえ子分の奴等、こりやあうつちやつては置かれねえ。

ト立ちながら尻を端折りきつとなり上手へ逸散にはひる。この時下手より仕出し大勢出來りて、「喧嘩だ、喧嘩だ」と言ひながら下手へはひる。と花道より小天狗正作武張つた打扮にて、妹おきし振袖娘にて日傘を持ちて附添ひ出來りて、

正作　妹見やれ、おびたゞしい人ではないか。

きし　左樣でござりまする、あなたと御一緒なればこそよけれ、女子連なぞでは、參られませぬわいなあ。

正作　何でも、かやうな群集のところへ、女子ばかりでは決して參らぬことぢや。

きし　それはさうとお兄樣、さきはどういたしましたか、後の四角ではぐれましたが、嘸捜してをることでござりませうなあ。

正作　あゝこの人込では、めぐり逢へばよいが。

きし　ほんに困つたことでござりまするなあ。

正作　あゝこりや斯樣いたさう、向うの茶見世にて暫く待合はして見ようわい。

きし　それがよろしうござりませうわいなあ。

正作　然らば、あれへまゐつて休息いたさう。

次郞（上手よりうろ〳〵しながら出來りて、）やれ〳〵今日のやうな間の惡いことはない、折角災難を脫れてやれ嬉しやと思ふ間もなく、またあの平馬めに出ッくはしごた〳〵とするその内に、たうとう娘を見はぐつてしまうたが、あゝ人込で、どうぞ怪我でもしてくれねばよいがな。（ト案じ思入にてきよろ〳〵見廻しおきしを見て、）おゝ娘そこにゐたか、どのやうに尋ねたか知れぬ。（ト言ひながら傍へ寄り、おきしをよく〳〵見てびつくりなし、）これは〳〵お侍樣、まつぴら御免下さりませ、ついこのお孃樣が手前娘にあまりよう似ておいでなされた故、大きに失禮をいたしました。

ト言ひすてゝ、そこ〳〵に下手へはひる。

正作　扨々よい年をいたしながら、そは〳〵と、粗相千萬な人もあるものではないか。

きし　大方あのお人も、連の娘御にでもはぐれたといふやうなことでござりませう。

正作　そのやうなことであらう、それにつけてもその方、必ず我にはぐれぬやうにいたしやれ。

きし　かしこまりました。

ト此の時後にてわや〳〵と人聲する、正作聞耳を立て思入あつて、

正作　はて、だいぶ騷がしいが、もしや喧嘩などにて、ありはせぬかしらん。

きし　いやなことでござりまするなあ。

正作　それにつけても、さきめが怪我でも致さねばよいが、案じらるゝことぢやわい。

ト上手茶屋の內より女房出來り、正作を見て、

女房　おや、おめづらしい、先生ようゐらつしやりました。

正作　これはお內儀大きに御無沙汰をいたした、然しながらいつも繁昌でよいな。

女房　有難う存じまする。（ト又後にてわや〳〵と人聲する。）

正作　最前よりだいぶ騷がしいが、ありや何事ぢやな。

女房　はい、あれは唯今こゝで喧嘩がござりまして、それから向う川岸の方へ參りましたが、何を申すも相手が惡うござりますから、どうぞ大きな喧嘩にならねばよろしうござりまするが。

正作　それはハヤ折角これまで參つたが、身共一人ならよけれども、そちを同道いたしては參られぬわい。

きし　左樣なれば私は、こゝでお待ち申しませうほどに、あなたお一人で御參詣なされませ。

正作　いや、そち一人これに待たせておくも、何とやら心元ない。

女房　まあこちらへお上り遊ばしてお休みなされませ、その內には少しは靜かになりませうから、まあ御ゆるりとしていらつしやいまし。

正作　いかさま供の者にもはぐれたれば、幸ひこれにて待合せながら、ゆるりと休息いたして參らう。

女房　それがよろしうござりますわいなあ。

ト此時ばたばたになり、上手より平馬走り出來り、おきしを見て、

平馬　おゝおつるばう、こゝにゐたか、よい所で逢つた、さあさあ來やれ。（ト傍へよりよくよく見てびつくりなし）南無三、違つた。これは粗相、まつぴら御免下され。

ト言ひすてゝこそこそと下手へはひる、これにて正作心得ぬこなし。

正作　はて合點の行かぬ、兩度までの人違ひ、こりや何ぞ仔細のある事と見えるわい。

きし　何とやら私は氣味が惡うござりまするわいなあ。

正作　いやいや、ありや大方狂人であらうわい。

ト上手より前幕の利七風呂敷包みの刀を持ち出來り、正作を見て、

利七　おゝそれにおいでなされまするは、葛飾の先生ではござりませぬか。

正作　これは、道具屋の利七殿か、まゝこれへかけやれ〳〵。

利七　左樣なら御免下さりませ。（ト床几へかけおきしを見て、）はゝお妹御樣も御一緒で、今日はお祭りを御見物でござりまするな。

正作　だいぶ立派に祭禮が出來たと申すこと故、妹にも見物いたさせようと存じ、手前までが思はず遊山をいたした。して、今朝話の差添は、そこに持參いたしてござるかな。

利七　へえ、今日その事に就きましてお宅へ上りましたところ、お祭りと承り、丁度私もこの邊へ參る所がござりまして、もしお目にかゝることもござりませうかと、持參いたしましてござりまする。

正作　それは重疊、これにて一見いたし度きものぢやが、何を申すもこゝは往來、幸ひ茶屋の奧を借り受け、あれにて一見いたすであらう。

利七　なるほどそれがよろしうござりまする。

正作　（おきしに向ひ、）こりや妹、そちはこれにをつて祭りの通るのを見物いたしたがよい、然しながら必ず此所を離れてはならぬぞ。

きし　いえ、どこへもまゐりはいたしませぬ。
正作　お內儀、何分ともにお賴み申します。
女房　かしこまりましてござりまする。
正作　然らば利七どの。
利七　先づおいでなされませ。（ト兩人は奧へはひる。）
女房　（おきしに、）あなた、お茶をもう一つ差上げませうか。
きし　いえ〳〵もう必ずお構ひなされますな。
女房　生憎お祭りで取込んでをります故、ろく〳〵お構ひ申しませぬ。
きし　どういたして、とんだお賑やかでよろしうござりまする。
女房　それにもう當年はお祭りが立派にできたと申すので、人の出が多うござりまするわいなあ。
きし　ほんに大層な見物でござりまするなあ。
ト此時上手より前幕の新三郎出來りて、
新三　當年は正八幡の祭禮にて殊のほかなる賑ひ、それに就き唯今途中にて承りしが、何か向うの川岸に大そうなる喧嘩があるとやら申す噂、ゆる〳〵と山車屋臺などを見物ながら參らうとは存じ

たなれど、譬に申す危きに近寄らず、少しも早く歸宅いたさう。（ト行きかけおきしが見て、）そこにをるはおきしどのではないか。
きし　お〻思ひがけない新三郎樣、先々これへおかけ遊ばしませ。
新三　然らばこれにて一服いたして參らう。
ト床几へかける、茶屋女房茶を出す。
きし　あなたも今日はお祭りを、御見物でござりまするか。
新三　外ならぬ弓矢神八幡宮の祭禮故、武運長久祈りの爲め參詣いたし、唯今丁度歸り道でござる。
きし　それはまあ、よう御參詣をなされましたなあ。
新三　して、おきしどのには、誰と御同道にて參られたな。
きし　はい、御兄樣と御一緒に。
新三　すりや、あの正作殿とな。
きし　左樣でござります。
新三　それはよう御參詣なされましたな。
トこ〻へ上手よりおみよ手古舞の裝にて、後より藝者二人やはり手古舞にて出來り、おみよこの體を

見て悋氣のこなしにて、ずつとはひつて兩人の中へ割つて入り、

みよ　まつぴら御免下さりませ。

　　トこれにて兩人びつくりなし、新三郎おみよを見て、

新三　えゝびつくりいたしたわい。

きし　私もびつくりいたしましたわいなあ。

みよ　こつちもびつくりいたしました。（ト少しつんとしていふ。）

藝一　はい、私等もびつくりいたしました。（ト同じく中へわつて入る。）

藝二　はい、私もびつくりいたしました。

　　ト兩人替る〴〵に中へ割つてはひる。これにておきしはだん〳〵に押されて、床几の端へ小さくなる、新三郎おきしへ面目なき思入にて脇を向いてゐる、おみよこなしあつて、

みよ　ほんにまあ厚皮な、晝日中に門中で、呆れて物が言はれぬわいなあ。

藝一　それぢやによつて、常から私等が言はぬことではござんせぬ、あんまりお前が手放しでおきなさんす故、

藝二　これに懲りて此の後は一緒にお歩きがよゝござんす。（ト口々に言はれて新三郎、術なきこなしにて、）

新三　あゝこれ〳〵、こなた衆は譯も知らずに、何を言やるのぢや、そのやうな詰らぬことを申さずとも、早う行きやれ〳〵。（トおきしへ心遣ひの思入。）

藝一　そのやうにお邪魔になされずとも、御遠慮には及びませぬ、たんとお話をなされませいなあ。

藝二　それとも、たつてお邪魔なら、私等よりはあなたの方でおいでなさるがようござんす。

新三　いやさ、何も邪魔と申すわけではないが、あまりこなた衆が、かれこれと申す故。

みよ　そりやア言はいでかいなあ、言うてもよいによつて言ふのぢやわいなあ。

新三　（思入あつて、）そのやうに疑うてゐやるなら是非がない、何を隱さうあの娘は、そなたも豫て知つてゐやる、この新三郎が許嫁ぢやわいなう。

みよ　えゝ、そんならあなたが噂に聞いた。

新三　あれがおきしどのぢやわいなう。

みよ　おやまあ、さうでござんしたか。（ト面目なきこなし。）

藝一　おみよさん、お前もよつぽど人がいゝ、それを眞實にするといふがあるものかいなあ。

藝二　常から女子をだます口故、尤もらしう言はんしても、私等が得心せぬわいなあ。

新三　これ〳〵、浪人なれども侍ぢや、なに嘘言を申してよいものか。

兩人　おやまあ眞面目で、憎らしいお人だねえ。

みよ　(腹の立ちし思入にて、)皆さん、もうようござんす、大概樣子は分りました。(トおきしへ思入あつて)もし、お許嫁のおきし樣とやら、もつとお傍へおいでなされませ。

きし　必ずお構ひなされまするな、私はこれが勝手でござりまする。

みよ　いゝえお前はそれが勝手でも、私がお邪魔をいたしまして、御亭主の新三郎樣へ濟みませぬわいなあ。(ト少しぢれていふ、新三郎困りし思入にて、)

新三　そのやうなことばかり言つてゐては、わしが仕方がない。(トおきしの日傘へ眼をつけ、)おゝ丁度よいものがある。(ト取上げ、)これ見やれ、この日傘の印しにきしと書いたる漆し文字、これが何よりたしかな證據。

トおみよの前へ日傘を出す、おみよ日傘の印しをよく〳〵見て、

みよ　それではあなたが、ほんたうの。(トおきしへこなし。)

藝一藝二　おきし樣でござんすかえ。

新三　なに、虚言を言ふものかいなう。

みよ　こりやまあどうしたらようござんせう。

兩人　惡いことをいたしましたなあ。（ト皆々面目なきこなし。）

みよ　どうぞお前さん、御免なされて下さりませ。

きし　どういたしまして、そのお詫より私からお禮を申さねばなりませぬ、毎度新三郎樣をようお世話をして下さりまして、有難う存じまする。

みよ　はい、はい。（ト術なき思入、藝者兩人もこれを見て囁き合ふ。此時下手にて拍子木鳴る。）

兩人　おみよさん、拍子木が鳴る、早う行かうわいなあ。

トおみよこれをしほに立上り、間の惡さうにおきしに向ひ、

みよ　これはお初にお目にかゝり、ろく／＼御挨拶も申さず、（ト言ひかけるを、）

兩人　さあ／＼早うござんせいなあ。（ト手を取つてひつぱる。）

みよ　えゝも忙しない。御免なされて下さりませ。

トほつと思入あつて兩人附き上手へ入る。新三郎間の惡き思入にて、

新三　おゝ、さつぱりと忘れてをつたが、靈岸島まで行かねばならぬ用事があつた。（ト言ひながら立上る。）

きし　そんなら、もうおいでなされまするか。

新三　されば、是非今日中に用辨いたさねばならぬ事故。

きし　それでもちよつとお兄様に。

新三　いや、急ぐによつてお目にかゝらずにまゐらう。

きし　どうやらそれでは。

新三　よろしく申しておくりやれ。

ト唄になり、足早に下手へはひる。おきし後を見送りホロリと思入あつて、

きし　今の女子を見るにつけ、新三郎樣がこの身をお嫌ひなさるも無理ではない。とはいへ此身は捨てられても一旦夫と定めし殿御、女子の道を立てるが貞女、いつそ今の樣子をばお兄樣に打明けておゝ、さうぢや／＼。

ト思入あつて奥へはひる。ト上手より濱田宗之助に若黨富津傳七附添ひ、深編笠一本差浪人の打扮にて出來り、

宗之　何と傳七、今日この群集の中を往來致すに、いまだ知る人に一人も出逢はぬが、はて江戸は廣いものぢやなう。

傳七　然しそれも幸ひでござりませう。唯今のお身の上にて萬一古傍輩のお方にでもお出逢ひなされ、あれ見よと後ろ指をさゝるゝも、甚だ心外に存じまする。

宗之　尤も、これより向う川岸へ越しなば、かやうに往來の繁きこともあるまい、早う人込み離れ度いものぢや。

傳七　（思入あつて、）かやうに人目を憚りまするも、お身の不運とは申しながら、これが以前でござらうなら、下郎めがお供にて、今日の祭禮も立派に御見物ができませうもの。あゝ是非もなきことでござりまする。（ト少しく愁ひのこなし、宗之助も思入あつて、）

宗之　それにつけても思ひいだすは兄上の御事、不慮の御最期遂げられしも、いかなる仔細か相分からず、殊にお家重代の村正の刀その場より行方知れず、それ故にこそ我々主從、あの砌より三年此方かく浪々の身と相成り、窃に詮議いたすと雖も、いづれの誰が所持なしをるか今に何の手がゝりとてもあらざるは、よくよく武運に盡きたる身の上。（ト落涙する。）

傳七　そのやうに御心配なされまするな、案じるより生むが易いと譬の通り、やがて村正の行方が知れさへすれば、お兄樣が御自殺の次第も知れまいものでもござりませぬ、それ故にこそ今日も早く刀の行方が知れお身の汚名を晴らしたく、弓矢神故八幡宮へ參詣なしお願ひ申して參りましたれば、やがて手蔓に取りつきませうほどに、お心丈夫に思つておいでなさりませ。

宗之　返すがへすもそちが親切、たゞこの上ともに力に思ふはそちばかり、若年の某なれば萬事よしな

に頼むぞよ。

傳七　及ばずながら私が、假令身を粉に碎きましても、きつと詮議をしいだしませう。

宗之　やがて本地へ歸參なし、この艱難を主從が昔語にいたし度いものぢやなう。

傳七　さうなりましたらどのやうに、嬉しいことか知れませぬ。それに就けても吉左右を早く聞きたいものだなあ。

ト思入、この時上手にて大勢の聲にて「喧嘩だ〳〵」と呼ぶ聲して大勢出て來る。

もし、騷がしいは、何事でござりませうな。

○　お聞きなされませ、赤間とやらいふ長脇差と、鳶の者の衆との大喧嘩でござりまする。

□　その相手同志は兎も角も、往來の人に大そう怪我がありました。

△　ところで、逃げる人が落合ひますので、橋が落ちるといつて亂騷ぎでござりまする。

皆々　お前も氣をおつけなさい。

ト言ひすてゝ皆々わや〳〵と下手へはひる。

傳七　若旦那、大變なことではござりませぬか。

宗之　さばかりの事恐るゝにはあらねども、大事を抱へし身の上なれば、どうか左樣なところへ立寄ら

ずに、向う川岸へ越したいものぢやな。

傳七　先づ何にいたせ、そこらまで參つて見ませう。

宗七　然らばさやういたさう。

傳七　必ず怪我せぬやうにおいでなされませ。

宗之　承知いたした。

ト兩人上手へはひる。と、上下より仕出し大勢出來りて、

大勢　大變だ、大變だ。

ト言ひながら上下へ入違ひてはひる。これにて、上手の茶見世をたゝみ込みにて消し、正面の蒸籠𥶡ばより上は引上げて霞となり、下半分は疊み込んで浪の模樣に替り、花水橋の場となる。

（花水橋の場）――本舞臺上手より下手へかけ一ぱいの橋、眞中三間ほど欄干の落ちたる體、橋の下は河の面にて一面の浪布、こゝに源左衞門大童向う鉢卷にて拔身を持ち、仁三鐵棒を持ち、兩人よろしく立廻り、此内上下より子分、鳶の者大勢出來りごつちやの立廻り、トゞ源左衞門は鳶の者、仁三は子分を上下へ別れ追つてはひる。ばた〳〵になり下手よりおつる逃げて來る後より平馬追かけ出來

りあちこちと追廻し、トヾおつるを捉へ、

平馬　どつこい、逃さぬぞ〳〵。

つる　どうぞ放して下さりませ。

平馬　いゝや放さぬ〳〵。コレサおつるばう何もそのやうにぴんしやんするものではない、武士たるものがこのやうに人目も恥ぢず戀ひこがれ、これほど思ふ心中者、そのやうに情なうせずと、色よい返事を頼む〳〵。

つる　えゝも、存じませぬわいなあ。

ト振放し行かうとする、平馬は逃すまいと爭ふ内平馬紙入をおとし、

平馬　南無三、身共が紙入を。

トうろつく内おつる振拂つて逃げる。此時また仕出し大勢出て來る、此中へ以前の正作妹を搜す思入にて大勢をかきのけ〳〵來て、おつるに行き合ひ妹と心得、物をも言はずに圍ひ人込をかきのけるこなし、仕出しこれに構はず押して渡らうとしていろ〳〵揉み合ひ、トヾ橋の欄干こはれ、大勢川へ落ちる。正作これを見て氣遣ひの思入にて、

正作　是非に及ばぬ。

ト刀を抜きて振廻す、仕出大勢これを見てびつくりなし、

仕出　そりや侍が抜いた〳〵。

ト大勢上下へばら〳〵と逃げて別れる、平馬おつるへかゝるを正作突廻して平馬を蹴る、これにて平馬川へ落ちる。此時上下へ橋番人六尺棒を持ち出で往來を留める。正作ほつと思入。

正作　最早越えるものもあらざるか、亂暴には似たれども、人を助ける身共が情、

つる　それ故私も恙なう。

ト言ひかけるを正作心の急くこなしにて、

正作　さ、妹立歸らう、支度しやれ。

つる　はい。(ト合點の行かぬこなし。正作身繕ひをなし懐中へ思入あつて、)

正作　おゝこりや唯今の騷ぎに取紛れ、紙入を失なうたわい。

つる　(平馬が落せし紙入を取つて、)もし、お紙入はこれではござりませぬか。

ト出すを正作取つて、おつるをよく〳〵見て、

正作　や、妹と思ひしに、そなたさまは。

つる　唯今あなたのお情故、危い難儀を脱れしもの。

正作　扨は今の騷ぎにて。

つる　もしやあなたのお連樣は。

正作　入水なせしか。

ト川の中へ思入、此時橋番人左右より窺ひ寄りて、

橋番　狼藉者。

ト六尺棒にて打つてかゝるをちよつと立廻る。此内上手より傳七水に濡れ、正作の落した紙入を銜へ泳ぎながら出で、下手の方より同じく水に濡れたる宗之助出來り、兩人橋杭へ取りつく、橋の上にて正作立廻つてゐて刀をすらりと拔く、これを木の頭。

つる　あれエ。

ト正作に縋るを、正作圍ひて、

正作　はて、是非もない。

ト水中へ思入、宗之助、傳七は橋杭に取附き、きつと思入。浪の音烈しく聞え、「船ヤアイ」と大勢にて呼ぶ聲にてよろしく、

ひやうし幕

トこの幕川岸の道具幕にて、川へ落ちし人々大勢出る。その中に、拍子木を首にかけたる祭の人足・柿色の脚絆を穿いて、床几を肩にかけし奴、或は雷の打扮の者、犬の頭を被げる者、紫の袱紗を附けたる警固の杖を持つてゐる人足等よろしく出來りて、混雑の内にも祭りの名殘りらしい様子のことさまざまよろしくありて、絶えず浪の音にてつなぎ、引返す。

（返し稲瀬川波除の場）――本舞臺四間通し中足の浪除石、後ろは一面に佃島の遠見にて川中の模様こゝに漁船、内に新助矢立の筆にて鼻紙へ手紙を書いてゐる、傍におみよ手古舞の裝にてなり、船頭棹を持つてゐる。

新助　小父さん、大きに御苦勞だつた、そこらへ附けてくんなさい。

船頭　あい／＼。（ト棹を立てゝ船をもやひ、）もし、新助さん、まだ向うの方ぢやあ大騒ぎでござりますぜ。

新助　そりやあその筈のことだ、橋から落ちたはどの位だか知れねえ。

みよ　亡くなつた人もござんせうな。

船頭　あるどころか、お前さんなぞもこの船へ落ちなさらねえと、直にぶく／＼と行くところだ。

みよ　危いことでござんしたなあ。

船頭　まつたく新助さんに助けられたのだ。
新助　（手紙を書き封をしてしまつて）それに就いて仲町まで送り屆けにやならぬ故。今夜の歸りもおそくなれば、怪我でもしたかと私が宿で案じるであらうから、ちよつと知らせてやりたい故、この手紙を縮宿の六兵衞どのまで屆けるやうに、番太でも御苦勞ながら賴んで下さい。
　　ト百錢を二枚添へて手紙を渡す。
船頭　あい〳〵、それぢやあ賴んで來ますから、ちつとの内待つてゐて下せえ。
新助　錢が殘つたら蕎麥でも喰つて來なさい。
船頭　それは有難い。（ト浪除石の上へ上り上手へはひる。）
新助　おみよさん。どこぞ痛みはしないかえ。
みよ　いえ〳〵何ともござんせぬわいな。
新助　そりやあ仕合せなことであつた。
みよ　ほんにお前の船がないと、川へ落ちて死ぬところ、よう船で來て下さんしたなあ。
新助　さあ、今日仲町から歸りがけ、あんまり人が込み合ふ故、船と思つてゐたところ、祭りでみんな休みと聞き、平生四つ手で馴染だけ、今の親仁をやつと賴み此の漁船へ乘つて來たが、喧嘩と聞い

いて險難故、急いで通る橋の下、途端にこはす欄干と共に上から落ちる人、これはと思ひ抱留めて顏を見ればお前故、びつくりなしてその場を漕ぎぬけ、介抱なせば怪我もなく、こんな目出度いことはない。

みよ　昨日手詰の難儀を救はれ、今日又死ぬるところをば、不思議にかうして助けられしは、どうした深い縁ぢややら、命の親の新助さん、お禮のしやうがござんせぬわいなあ。

　　　　トこれを聞き新助思入あつて、

新助　いやそのお禮なら何よりか、私の望みがござりますが、なんとかなへて下さりませぬか。

みよ　そりやもう命の親の新助さん、この身にかなうたことならば。

新助　そりやかなはぬといへばかなはぬし、かなふといへばかなふこと。

みよ　して、その頼みは、

新助　さあ、その頼みといふは。（ト言ひ兼ねる思入あつて、）どうも私には言ひにくい。

みよ　なんのまあ、見るから堅い新助さん、それ故昨日も赤間さんへ情人だというたもお前の氣をおつゆさんも知つてのこと、私も安心してゐます、大方頼みと言はしやんすも、いゝいやみなことではござんすまい。どういふことか打明けて早う言うて下さんせいなあ。

新助　(術なきこなしにて、)さ、それ故どうも、口までは出てゐるけれど。

みよ　言はれぬ譯は、

新助　あの、

みよ　あの、

新助　思ひきつて言つて見ませうか。

みよ　さあ、早う言はしやんせいなあ。

新助　あの、どうぞ、

みよ　どうぞ、

新助　情人になつて下さりませ。(ト言つて顏をかくす。)

みよ　えゝ。(トびつくりして呆れし思入。)

新助　さゝ、そのびつくりは尤もだが、言ふに言はれぬ新助が心の内の切なさを、これおみよ樣まあ一通り聞いて下され。しかも昨日野花屋で、その場をくろめる色仕掛嘘僞りとは知りながら、引き寄せられたその時に、これが眞實であつたならと、それからぞつと思ひ染め、宿へ歸れど夢現、縮仲間の話しさへ唯一筋にこなさんを思ひ佃の騷ぎと聞え、乘込む胸を押へつけ、あゝ、いや

いや、あの通り彫物をして二世までもと、言ひ替したるお方のあるを知りながら、かういふ心を出しては濟まぬと心で心に異見して、ぢつと辛抱しましたに、今日又橋から落ちる時怪我させまいと抱き留め、氣を失ひしを介抱なし、正氣に復れば煩惱の思ひ切られぬ身の因果、きつとした情人のあるのも合點で、言ひだすからはよく〳〵なことゝ思つておみよ樣、どうぞかなへて下さりませ。

ト新助よろしく思入にていふ、この内おみようつむいてゐたが、思入あつて、

みよ　南無阿彌陀佛。（ト川へ飛込まうとするを新助留めて、）

新助　あゝこれ、危い、まあ〳〵待つた。

みよ　どうぞ放して下さんせいなあ。

新助　いゝや放さぬ放しはせぬ。折角私が助けた命、何で死なうとさつしやるのだ。

みよ　さあ、命の親のお前の頼み、厭と言はれぬ義理なれど、その御返事のならぬのは、二世をかけたるこの彫物、新三郎樣も以前と違ひ世に便りなき御浪々、どうも今更突出しては二世と交した操がたゝず、あちらこちらのその事情に、此の身を捨つる私の覺悟、どうぞ死なして下さりませいなあ。

新助　あゝさう聞いては尤もだが、それはあんまり一途な仕方、死ぬる命を存へてそでないことの頼みながら、たつた一度でよいほどに、一旦思つた私の頼み、どうぞかなへて下さりませ。

みよ　それほどまでに足らぬ身を思つて下さるお志し、（ト思入あつて、）そんなら、かうして下さんせ、新三郎樣も御浪人故突出したと言はれては、仲町の名にかゝはれば、明日にも尋ぬる香爐が御手に入れば本地へ御歸參、その時こそは譯を話し、きれいに別れて表向お前の女房になりませうわいな。

新助　むゝ、なるほどこりや尤もだ、落目になつた新三殿故、突出されぬとはまことの心、猶々思ひが増しました。さういふ事なら香爐の手に入るまで待ちませう。

みよ　そんなら、待つて下さんすか。

新助　假令一年が二年でも、私も男だ、承知しました。

みよ　それで私も安堵しました、かう打明けて言ふからは、お前も共々その香爐をどうぞ捜して下さんせいなあ。

新助　おゝ、そりやもう此の身の願ひのかなふ香爐、命にかけて尋ねて進ぜませう。

みよ　また、新三さんも永の浪々。

新助　金が入るなら何時でも。

みよ　あの、貢いで下さんすか。

新助　どうなと私がしませうわいの。

みよ　えゝ嬉しうござんす。

新助　その替りには香爐の、首尾よく手に入るその上では、

みよ　お前の頼みも、

新助　かなへてくれるか。

みよ　あい。（トこなしにていふ。）

新助　こりやもういつそ、（トおみよの顏に見とれ、思入あつて氣を替へ）こゝが辛抱どころだわい。（ト向うを見て、）あれ〳〵向うへ流るゝ死骸。

みよ　えゝ氣味のわるい。

トおみよ新助に寄り添はうとして思入、こゝへ海松杭の松泳ぎながら出で、船の小縁へ手をかけるを新助すかし見て、

新助　やゝ、おのれは赤間の、

海松　子分の海松杭、助けてくれ〳〵。

ト船緣へ捉まるを新助拂ひのけて、

新助　うぬ、さつきの返報、勝手にさらせ。（トこれにて海松杭どんと落るを木の頭。）よい氣味ぢやなあ。

ト新助棹を構へて水の中を見込む、おみよ裾に縋る、これにて海松杭川へ沈む、この見得、浪の音にて、「お浪ヤアイ」、「お汐ヤアイ」と呼ぶ聲にて、

ひやうし幕

三幕目

葛飾正作道場の場

〔役名――葛飾正作、穗積新三郞、富津傳七、濱田宗之助、藍屋次郞兵衞、道具屋利七、門弟。新三郞母おなぎ、正作妹おきし。〕

（道場の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面大形の襖出入り、下手一間羽目板、竹刀をかけあり、上の方に障子屋體、いつもの所門口、葛飾正作といふ表札、下の方は板羽目の稽古場、總て葛飾正作道場の體。四人の門弟稽古をしてゐる見得、角兵衞獅子にて幕明く。

伴藏　これ〳〵千八殿、何をそのやうに腹を立てさつしやるのだ。

千八　腹を立てなくつてどうするものだ。身共まゐつたと申すのにめつた無性に眉間を打ち、既のこと氣絶する所だ。

喜太　それは伴藏殿の方が惡い、なぜにまゐつたといふに打たしやつた。

萬作　おほかた面ぼうで耳が聞えぬのであらう、了簡さつしやれ〳〵。

伴藏　いや、千八殿のまゐつたといふは、やァと立合ふと直にまゐつた〳〵と打たれぬ算段をさつしやる故、わざと打つたのでござる。

千八　なに、さう直ぐに申すものだ。

伴藏　然らば、今一本まゐらうか。

千八　いや〳〵貴殿のやうな無法な者とは、もう〳〵立合は致さぬぞ、あゝ痛い〳〵。

ト正作奥より稽古裝にて出來りて、

正作　これはしたり、何れにもには高聲の雜談、たしなみめされ。

皆々　恐入りましてござります。

ト花道より藍屋次郎兵衞、菓子折の風呂敷包みを背負ひし下男を連れて出來り門口へ來て、

次郎　お賴み申す。

皆々　どうれ。
次郎　藍屋次郎兵衞にござりまする。
伴藏　おゝ誰かと思へば、このほどござつた藍屋殿か。
次郎　先生御在宿にござりますならば、お目通りを願ひまする。
千八　幸ひ今日は御在宿故、さゝこれへ通らつしやれ。
次郎　左樣なら御免下さりませ。（卜風呂敷包みをとり内へはひる。）
正作　これは次郎兵衞殿、ようこその御入來、唯今稽古中でござれば失禮の段御免下され。
次郎　先生には早速お逢ひ下さりまして、有難うござりまする。
正作　扨、朝夕は冷氣になりましたな。
次郎　御意にござりまする。
正作　いや、又このほどは見事な鮮魚を澤山に忝うござる。
次郎　いやもうほんの心ばかり、左樣に御意遊ばしては恐入りまする。
正作　こりやお茶を進ぜぬか。
門弟　はツ〳〵。（卜茶を汲み來る、次郎兵衞取つて）

次郎　これは憚りにござりまする。扨くどうも申上げまする。先達八幡祭禮の砌、娘がすでに水死いたすところを先生のお蔭にて一命を助かりまして、お禮は言葉に盡されませぬ。

正作　いや、左樣に言はれては甚だ迷惑、壽は天の賜物にして死するも生きるもその身の果報、されば某の妹なども誰助けねど危難を免れ、無事に宿所へ歸つてござる。

次郎　それはまつたく先生の御仁心が深き故、神や佛のお助けにて、御無事でなくては叶ひませぬ。

作藏　いや、師匠を褒めるではござらんが、當時劍道の達人にて、而も軍學兵書の博識、

千八　又武ばかりの強きにあらず、敷島の道もお嗜みにて、文武に秀でし大先生。

萬作　とりわけ弟子を哀れみて、子も同然に日夜の御教諭、

喜太　されば他門の人々も、徳を慕つて尊敬なす、

作藏　殊にはまた花水橋で多くの人を助けし故、

千八　上よりあまたの御褒美頂戴、これ皆先生の

四人　徳でござる。

次郎　いえもう先生の御高名は、誰知らぬ者もござりませぬ。それと申すも御仁心故、お妹御樣のお行方の知れぬ中にてわざ〳〵と、娘が逗留致しをる宅までお送り下されしその御親切の有難さ、思

ひ出してもこのやうに涙が先へこぼれまする。（ト涙を拭ひ、）と老の癖とてこのやうに手前の申すことばかり、肝心の品を忘れました。（ト風呂敷より菓子折を出して、）これは粗末な品ではございますが、お妹御様へ娘めがお目にかけたいと申します故、持参いたしてございまする。

正作　それは〳〵忝い、嘸かし妹も悦ぶであらう。

次郎　お禮がてら娘をば同道いたします筈のところ、先日も申上げまする通り、私めは木更津住ひ娘は當地横山町の伊豆屋喜兵衛方の次男與五郎の許嫁。然るに千葉の御藩中山鹿毛平馬といふお侍が押して只れいと無理所望、それ故當地の縁家へ預け、程もたつたる事なれば此ほど祭りへ伴ひしに途中で出逢ひ思はぬ難儀、それから外へ出ませねば失禮の段幾重にも御免なされて下さりませ。

正作　はて扨それは嘸かし心配、若き娘を持つものは左樣な族がうるさうござる。

伴藏　その山鹿毛平馬といふは、新三郎樣の御朋輩、

千八　心よからぬ侍と豫て噂に聞き及ぶ。

次郎　失禮ながら、お話の新三郎樣とおつしやりますは、穗積浦之進樣の御子息ではござりませぬか。

伴藏　いかにも浦之進殿の御惣領にて、卽ち先生のお妹御おきし樣とお許嫁。

次郎　へえ左樣でござりまするか、それは〳〵不思議な御緣、娘が緣を組みましたる伊豆屋喜兵衛が

正作　すりや伊豆屋喜兵衛と申すは、穂積の次男の參りしところか、はて扨それは存ぜぬこと。して與
惣領の、與三郎殿と云はれるは、穂積の御次男でござりまする。
三郎にも息災にござるかな。

次郎　へえ。(ト言ひ兼ね思入にて、)御息災にござりまする。

作藏　その伊豆屋とやらへ參られし穂積氏の御次男は、身持不埒と申す噂。

次郎　へえ、お若い内故少々はお遊びなどもござりませう。してお孃様にはもはや御婚姻遊ばしてござ
りまするか。

正作　いまだ婚姻は致さぬて。

次郎　申すまではござりませぬが、お若い同志故御婚姻は、お早い方がよろしうござります。

正作　いかさま左樣存ずれど、兎角物には障りあつて、いや、盛りの過ぎぬその内に取結びをいたすで
あらう。

次郎　それがよろしうござりまする。いや老人の長話し、嘸御退屈にござりませう、もはやお暇仕り
まする。

正作　まだよいではござらぬか。

次郎　また御きげんを伺ひませう。憚りながら、お妹御樣へ。
正作　これも少々不快故御挨拶もいたさず。
次郎　どう仕りまして、左樣なれば先生。
正作　ようござられた。それ門弟衆。(ト送れといふ思入、門弟立ちかゝるを留めて)
次郎　あ、いや、それにおいで下さりませ。
　　ト辭儀をなし門口をしめ、下男をつれて花道へはひる。
正作　さて〳〵篤實な老人ぢやな。
四人　左樣にござります。
正作　先刻玄關で、道具屋の利七の聲がいたしたな。
伴藏　へえ、先達先生へお約束を申せし、その村正の差添を持參いたしましてござりまする。
正作　おゝ、持參いたしたか。(ト伴藏とつて渡すをとつて見て)どうして今時かやうな品が、賣買に出たことぞ。(ト拔いて見る、皆々傍へ寄りて)
伴藏　結構なお道具でござりまする。
正作　ちよいと取次いでくれゝばよいに、代金を渡さうものを。

伴藏　又後刻上ると申しました。

正作　これ千八どの、刀掛へかけておいてくりやれ。

千八　はッ。（ト刀掛へかける。）

伴藏　喜太郎どの、萬作どのは道場を片附けてくりやれ。

兩人　かしこまりした。

ト兩人奥へはひる。花道より濱田宗之助、富津傳七出來りて、

宗之　これ傳七、小路より二軒目とあれば、たしかに向うの道場であらう。

傳七　表札がござりますとの事、あれへまゐつたら分かりませう。（ト門口へ來て表札を見、）劍道指南葛飾正作、これに相違ござりませぬ。

宗之　然らば案内を乞やれ。

傳七　かしこまりました。頼み申す〳〵。

伴藏　どうれ。（ト門口を明け兩人を見て合點の行かぬ思入にて、）いづれからおいでなされた。

傳七　拙者どもは旅の者、御在宿にござりますなら、憚りながら先生に御對面を願ひます。

伴藏　いかにも御在宿でござるが、各〻方には。

傳七　御目にかゝれば相知れます、何卒御取次下されい。
作藏（正作の傍へ來て、）先生、お聞きなされましたか。
正作　むゝ、何れからござられたか御面會いたすであらう。これへと申しやれ。
作藏　はッ。（ト門口へ來りて、）師匠御目にかゝりますれば、あれへお通りなされませ。
宗之　すりや御對面下さるとか、
傳七　まつぴら御免。
兩人　下さりませ。（ト兩人内へはひる。正作出迎へて、）
正作　何れより御入來ありしか、拙者葛飾正作でござる。
宗之　豫て御尊名は伺ひをりまする、拙者どもは、仔細あつて、唯今姓名を申上げ兼ねまする。
傳七　失禮の段は幾重にも御容赦下し、
兩人　おかれませう。（ト辭儀をなす。）
正作　何かは知らず、まづ〳〵これへ。
兩人　御免下され。（ト前へ進む。）
正作　見受けますれば御兩所には、お目にかゝりしことありしが、はて何處でござつたやら、

宗之　いかにもお目にかゝりしは、最早三年以前の事。

正作　而も所は上總國木更津浦の濱邊にて、

正作　むゝ、なるほどそれにて思ひ出したり。房總かけて某が海岸遊歴なせし折。

宗之　頃は彌生の末にして、身に憂きことの重なりて、八重の汐路も見え分かぬ、

傳七　朝霧深き東雲に夜道をかけて早立の心も急ぐ磯つゞき、

正作　まだ小暗きに提灯の灯りを貸せしが緣となり、

宗之　一樹の蔭の旅宿り、問はれし地理の話さへ、

傳七　道分石の右左り、別れ程經て三ヶ年、

正作　思ひがけなく又こゝで、

宗之　一河の流れ盡きずして、

傳七　再會なすも他生の緣、

正作　先は堅固で、

兩人　あなたも御無事で、

正作　あゝ重疊々々。（ト三人よろしく思入。）

伴藏　すりや先生が常々から、お話しありしは御兩所なるか。

千八　ようこそ御入來なされました。

正作　して、御兩所にはいかゞして、拙者が姓名御存じにてお訪ね下されしぞ。

宗之　ふとせし事より御姓名承知いたして參つてござる。

傳七　早速ながら先生には、このほど八幡祭禮の折、お取落しの品はござりませぬか。

正作　いかにも、懷中物を落してござるが、扨はそこ許方が、

傳七　測らずその場で拾ひとり、いづれの誰か屆けたく開いて見れば御苗字を記せし書翰に諸々方々御同姓をお尋ね申し、やうやくお宅が相知れてお屆け申しにあがりました。

正作　それは千萬忝い、かの騷動の砌故、まさしく水中へ落せしと思ひをつたに、恙なく再び戻るは盡きざるところ、人命も亦斯の如くでござる。

傳七　（この内風呂敷より紙入を取出して、）中に踟躕はござりませぬか、お改め下されい。（ト正作の前へ出す。）

正作　はて、御念には及ばねど、（ト中を改め、合點の行かぬ思入にて、）外に踟躕はござらぬが、狀が一通見えませぬ。

宗之　（自分の紙入より書置を出し、）その狀とおつしやるは、この一通でござりますか。

正作　いかにも左樣。

宗之　然らばお戻し申しまする。（ト戻し、思入あつて、）この一通をお戻し申せば、又其許よりこの方へ申し受け度き品がござる。

正作　そりや、如何なる品を。

宗之　その書置に記しある村正の一刀を。

正作　なんと。

宗之　今は何をか包み申さん、某ことは千葉の浪人濱田宗之助と申す者。

傳七　又拙者めは以前の家來、富津傳七と申す者。

宗之　兄宗次郎の自殺より三年此方尋ねし行方、思はず拾ひし紙入にて姓名知れしは天の告。

傳七　この書置に記しある濱田重代の村正は、貴殿が奪ひとられしならん。

正作　こは思ひがけなき身の疑ひ、この一通は木更津にて其許方に逢ひし折濱邊に於て拾ひしが、村正の一口は夢もつて存じ申さぬ。

傳七　いや、この書置を所持あるからは存ぜぬとは申されまい。まさしく主人切腹のその場へ來合せ奪ひしならん、彼地で逢ひしが脱れぬ證據、さゝ包まず明してお渡しあれ。

正作　こりや無實の難題、妹が緣にて姓名も存ぜし濱田某故、緣者の者に屆けんと、拾ひ取りしが我誤り、弓矢をかけて一刀を盜みし覺えかつもつて、

トこれにて宗之助思入あつて、上手の刀掛の村正の差添を見て、扨こそといふこなしあつて、

宗之　盜みし覺えござらぬ貴殿が、何故あれなる刀掛に、その村正がかけてござるぞ。

正作　何と言はるゝ。

宗之　一目見ても覺えの拵へ、鍔は南蠻鐵にして目貫は後藤が二疋獅子、又緣頭は赤銅にて目貫に取り合ふ牡丹の毛彫、鞘は蠟色の蟲喰塗り、よもや違ひはござるまい。

正作（かの刀を取上げ見て、）すりや、これなる差添が、その村正であつたるか。（ト思入。）

傳七　空とぼけをなされずに、その村正に書置添へ、身の罪詫びて返しめされ。

伴藏　やあ、最前からおしだまつて承れば、さまぐな言掛りいたす不屆き者、この村正は道具屋より先生がお求めなされし品。

千八　見れば尾羽打ち枯らせし浪人、察するところ生計に迫り、樣子を聞いて騙りに來たか。

伴藏　人もあらうに小天狗と異名を取りし先生へ、言掛いたす憎さ族。

千八　達つて申さば竹刀にて、一本づゝまゐらうか。（ト兩人竹刀を持つて立ちかゝるを傳七見て、）

傳七　むゝはゝゝゝゝ、いや師が師なれば弟子までが無法無體のその雜言、いかにもお手前達が推量の通り、三年この方の浪々に人目を忍ぶ深編笠、破れ扇で門に立ち、一朱二朱の合力受け、その日の烟りも立て兼ねて飢渴に及べど盜泉の、水は飲まざる武士氣質、それに引替へ其許等は、身には絹布を纏へども心はよごれし襤褸同然、劍道指南の表札かけ、人の教へになる者が盜みするとは傍痛い。

伴藏　やあ、言はしておけば、ずわら／＼と、

千八　我師を捉へ盜人呼ばゝり。

傳七　はて、盜人故に盜人といふのだ、但し盜まぬといふ證據があるか。

兩人　さあ、それは。

傳七　よもや證據はあるまいが。

兩人　もうこの上は。（ト有合ふ竹刀を持つて立ちかゝるを）

正作　こりや／＼兩人控へぬか。

兩人　でも、あまりなる雜言故。

正作　はて、控へいと申さば、控へてゐやれ。

兩人　へゝえ。（ト兩人控へる、正作思入あつて、）

正作　斯く疑ひを受けし上は、萬言を以て言ひ解くともよもや疑ひは晴れますまい、假令汚名を受くるとも、諺にいふ正直の頭に宿る神の加護、いつかは晴れる時もあらん。望みの如く其許へこの一刀はお渡し申す。（ト思入あつて宗之助の前へ出す、門弟兩人見て、）

伴藏　やあ、現在求めしあの品を、お渡しあるとは先生には、

千八　如何めされたことでござる。

正作　はて、某に所存もあれば、そち達は控へてゐやれ。さ、さ、受取りめされ。

宗之　我家重代のこの村正、受けとらいで何とせう。

ト村正を受取る、此時下手より道具屋利七出來り、直に内へはひり。

利七　これは先生様には、これにおいでなされましたか。

正七　おゝ道具屋の利七どのか。先刻見えられたさうなが度々御苦勞でござる、かの代金をお渡し申さう。

利七　それは有難うござります。

正作　御兩所御免下されこ。（ト兩人へ會釋して、）こりや、手箱をこれへ。

千八　はッ。（ト上手屋體より手箱を持來る、正作中より包み金を出し、）

正作　即ち代金百兩。（ト渡す。）

利七　左樣なればお受取を。（ト利七は金を頂き受取を正作に渡す、正作開き見て、）

正作　「一金百兩、拵へ附村正の一腰、右代金慥に受取申候、葛飾正作樣道具屋利七」

　トこれを聞き宗之助と傳七とは顏見合せ合點の行かぬ思入。

利七　よろしうございますか。

正作　このほど花水橋にて人命を助けしとあつて、上より下さる御褒美金、封のまゝ渡し申す。

利七　有難うございまする。

傳七　（思入あつて、）すりや、この村正は道具屋より、求められし品なるか。

正作　いかにも、唯今見らるゝ通り、代金拂うて求めし一刀。

兩人　え。（トびつくりする。）

利七　へい、そのお差添は私が、差上げましたのでございまする。

傳七　して、この一刀は何れより、そなたの手へは入りしぞ。

利七　これは上總の木更津でその名も高い長脇差、赤間源左衞門といふ人から、買受けましてございま

する。

宗之　すりや、赤間源左衞門より、この村正を求めしとな。

傳七　かれは御舍兄宗次郎樣が召連れられし女郎をば、盜みとつたる惡漢なれば、

宗之　扨は彼れめが所業なるか。（ト兩人顏見合せ、ハッと思入あつて、）

傳七　若旦那樣、

宗之　傳七、

兩人　ほい。（ト村正を下へおき面目なき思入、正作こなしあつて、）

正作　御疑念は晴れましたか。

兩人　むゝ。（ト兩人術なき思入、利七この體を見て、）

利七　いや、私はもうお暇いたしませう。

正作　おゝ、大儀であつた。

利七　有難うござりまする。

ト利七思入あつて下手へはひる。兩人はしを〳〵と兩手を突いて、

傳七　扨、葛飾氏へ吾々ども申譯なきこの場の仕儀、測らず主人の書置が手に入りしより心急き、まる

宗之　つて見れば上總にてお出逢ひ申せしことある故、いよ〳〵それと思ひこみ、最前からの雜言過言、

傳七　今更申して返らねど、折あしくも村正のあれにありしに猶以て、思ひ違へし身の粗忽、

宗之　若旦那は兎も角も、いゝ年なして拙者まで、心づかざる面目なさ。

傳七　元よりお覺えなき身にて、抗爭ひたまはず村正をお渡しありし御胸中、

宗之　寬仁大度のなされ方、それと知らざる吾々ども、

傳七　盜人なりと罵りし申譯には兩人とも、

宗之　御存分になしたまひ、

兩人　お心濟まして、

正作　下さりませ。（ト兩人手をつきよろしく思入、正作もこなしあつて）

宗之　あゝ、いや〳〵その言譯には及び申さぬ。身に覺えなき潔白はいつか一度は晴れようとお渡し申せしその村正、元より事を好まぬ某、たゞ各の疑念さへ晴るればそれが身の重疊、一旦お讓り申せしからは、心置きなく持參めされ。

宗之　はゝ有難きその仰せ、身にあまりたることながら、大金を以て求められしを、申受ける由緣がござらぬ。これは是非ともお返し申す。

傳七　まだその上に我々が、命を添へて上げねばならぬが、この書置を持參なし、
宗之　兄宗次郎が不忠の汚名の、申譯をいたすまで、
傳七　二人が命を二人の者に、
宗之　お預けなされて、
兩人　下さりませ。
正作　はて、唯今も申す如く某事を好みなば、未熟なれども劍道の指南を致すこの正作、命にかけても一刀はお渡し申しはいたさねど、三年此方村正故艱難辛苦いたされしを、推量なして汚命を受けお讓り申せしあの一刀、武士の情を無足にせず、片時も早く持參めされ。
ト正作兩人の前へ刀を出す、兩人顔見合せ思入あつて、
宗之　さほどに厚き思召し、もどくは却て本意にあらず、
傳七　左樣ござらば御意に從ひ、
宗之　このまゝ申し、
兩人　受けまする。（ト宗之助取つて頂く、傳七は平伏して辭儀をする。時の鐘。）
正作　折あしく今日は、家内に少々取込ござれば、殘念ながら又重ねて、

宗之　御禮かたぐ、

兩人　參上いたし、

正作　ゆる〳〵御意得ませう。

宗之　（村正を持ち思入あつて、）思はぬ此身の粗忽より、斯くまで厚きお惠み受け、

傳七　いつの世にてか此の御恩。

正作　や。

宗之　然らば先生。

正作　濱田氏。

宗之　お暇申し、

兩人　上げまする。

ト宗之助しを〳〵として門口を出て、傳七は正作に感心せし思入にて附添ひ、花道へはひる。

作藏　さて〳〵先生には、いつもながら御勘辨強いこと。

千八　殊に大金にて、お求めありし村正を遣はされしは、我々どもの及ばぬこと。

作藏　憚りながら感心仕りました。

正作　實心面に現はれし彼等二人が流浪の辛苦、不便と存じて與へし村正、情は人の爲めならず、此の身に惡うは報ふまいて。

作藏　陰德あれば陽報とやら、

千八　何しに惡う報いませう。

正作　どりや、身共も奥で休息いたさう。その菓子折は妹の部屋へ。

作藏　畏りました。や、この菓子折は。(ト重いといふ思入にてばつたり落す、と中より百兩包み出る。)

千八　これは粗相な。や、こりや小判で百兩ばかり。

正作　むゝ、扨はこのほど持參せし金子を返し遣はせし故、菓子と名附けて持參なせしか。はて、氣の毒な。(ト立上り、袴の膝をたゝくを道具替りの知らせ)ことぢやなあ。

ト唄、時の鐘になり、この道具廻る。

(正作宅奥座敷の場)――本舞臺三間の間中足の二重、正面瓦燈口、上手床の間、上の方に障子屋體、例の所枝折戸、下の方庭口、舞臺前の方に秋草。總て正作奥座敷の體。こゝに正作妹おきし秋草に舞ふ二羽の蝶に目を附けてゐる。

きし　今を盛りに秋草の咲揃うたる四つ目垣、花に狂うて蝶々の番ひ放れぬ睦じさ、凡そこの世に生を得し人は元より鳥畜類、僅な壽命の蟲でさへ妹脊の道を辨へて、あれあのやうに餘念なく翼ならべてをりてこそ、女夫になりし甲斐もあれ、それに引替へ此の身の果敢なさ、後の世までと頼みたる夫に嫌はれ唯一羽比翼の契り知らずして、塒に迷ふ秋の蝶、袖に涙の露おきて哀れますほの絲芒、風に亂るゝ思ひぢやなあ。（トホロリと思入。）

喜太　（奥より出で來りて、）はツ、おきし樣へ申上げます、新三郎さま御親子が、唯今これへおいでゞござります。

きし　なに、母樣がおいでなされしとか、これへお通し申しやいの。

喜太　畏りました。

ト引返して奥へはひる、おきし涙を拭ひ出迎へ、奥より新三郎母おなぎ更けたる屋敷女房の打扮にて新三郎と共に出來り、

なぎ　おゝおきしどの、これにござつたかいの。

きし　これは〳〵母樣には、ようこそおいで遊ばしましたわいの。

なぎ　このほどからまゐらうと心には思へども、何をいふにも以前と違ひ一人身故に出られぬわいの。

きし　いえもう私よりも御無沙汰を。（ト新三郎へ向ひ、）このほどは途中にて、はからずお目にかゝりましたが、お早うお歸りなされましたか。
新三　暮れぬ中に宿所へ歸り、かの花水橋の騷動を、程經て噂に承り、殊の外案じました。
きし　嘸お案じなされましたらう、さうしてお怪我はござりませなんだかいな。
新三　なに、怪我がなかつたかとは、そりや誰に。
きし　さあ、それは。（ト言ひ兼れる思入。）
なぎ　いやもうそなたが見物に行つたと聞き、無事な便りを聞くまでは食もろく〳〵喉へ通らず、たいてい案じたことぢやなかつたわいの。
きし　危い命を助かりましたが、いつそあの折死んだ方が。
なぎ　え。
きし　いえさ、新三郎樣といひあなたまで、よしない御苦勞かけましたわいな。
正作　（奧より出來りて、）これは御兩所には、よくこそござられた。
なぎ　いやも疾より參る筈のところ、何やかやに取まぎれ、
新三　心外の御無沙汰。

兩人　御免下さりませ。
正作　いや、その御無音は御同然でござる。
なぎ　扨此間は花水橋で入水の折に刀を抜き、多くの人を助けしと、知るも知らぬもお手柄の何處へ行つても噂ばかり。
新三　御縁につながる拙者まで、肩身が廣うござりまする。
なぎ　蔭ながら嬉しさに、來る人達へ話して、自慢してをりますわいの。
正作　いやも、さしてもない事をばそのやうに仰せられては、却て面目次第もない。こりや妹、お茶の支度でもいたさぬか。
きし　畏りましたわいな。
正作　ついでに何ぞお菓子をば、
なぎ　あ、私等に何の馳走。
新三　必ず構うて下さりますな。
きし　左様ならば御ゆるりと。どれ、お茶入れて上げませうわいな。
　　トおきしは新三郎を見て恨めしき思入にて奥へはひる、正作思入あつて、

正作　扨、今日はよきところへ、お二人にておいで下された。
新三　なんぞ御用でもござりまするか。
正作　少々申し入れたい儀がござつて。
なぎ　案じることではござらぬかいの。
正作　いや、さのみお案じることでもござらぬ。
なぎ　してまあそれは、
新三　いかなる事。
正作　別儀でもござらぬが、親どもいまだ存生の砌、それなる新三郎殿と許嫁せし我妹、最早年頃にも相成りし故婚姻を致さすべきなれど、血を分けし兄にすら心にかなはぬ彼女が不束、所詮新三郎殿の心にもかなはぬことゝ存ずる故、いまだ盃せぬこそ幸ひ、離別いたして貰ひたい。
なぎ　えゝ、おきしどのゝ婚姻を、指折り算へ待ち侘ぶるに、離別せいとはそりや何故。
正作　さ、たゞ一向に申しなば手前勝手と思召さうが、所詮無益な御縁組、あなたは御存じあるまいが新三郎殿は御合點ならん。
新三　むう。（ト術なき思入。おなぎ扨はといふ思入にて）

なぎ　これ悴、常々私が言はぬことか、紛失なせし香爐の詮議の爲めでもあらうけれど、內を外なる夜泊り日泊り、よからぬ噂も聞いてゐれど、寶詮議の大事の身にさまでの事もあるまいと、忽にせし母が誤り、隱すことほど現はるゝと正作殿の耳に入り、それ故わざと妹御に難を附けてのこの離別、そなたは何と思ひをるぞ。

新三　面目もなき今日の仕儀、申譯には似たれども香爐詮議の手蔓を求めに、一二度遊里へ參りしが。

正作　いや、中言にはござれども、新三殿が放埓やらその儀はかつて存じ申さぬ、離緣を好むは妹が不束、なまなか緣を結びなば、つひには師弟の緣までも切らねばならぬことがあらうと、そこを存じてこの離別、後とも言はず今こゝで、去狀書いて下されい。その替りには此方より下世話に申す手切とやら、妹きしより其許へお渡し申す品がござる。（ト以前の菓子折へ封じたる質手形を載せて出し、）これを納めて下されい。

なぎ　ふう、すりや、おきしどのより此品を、離別の印しに悴新三へ。

新三　樣子ありげなこの一封。（ト手形を開き見て。）「一、元金百五十兩眞鶴の香爐一基、右はたしかに御預り申候。尤も月切に相成候はゞ御無斷相流し申候、月日、山鹿毛平馬樣、泉屋手代藤八。」やゝこりや紛失の香爐を質入なせし質手形、その置主は山鹿毛平馬、扨は香爐を奪ひしは、彼れ

が仕業であつたるか。（トきつと思入。）

なぎ　今一品のこの折は。（ト蓋を明け、）やゝ、中には小判で二百兩。

正作　質入なせしは百五十兩、利金を添へて二百兩、それにて香爐を受戻し、故主へ歸參いたされよ。

新三　はゝ忝き師の御厚志、お禮は詞に盡されねど、離縁の證とござつては。何はともあれ如何して、手形はお手に入つたるぞ。

正作　それこそこのほど八幡の、祭禮の折落したる我紙入を取違へ、拾ひし中にあつたる手形、まつた金子はその砌人命助けし褒美として上より下さる二百兩、片時も早く質受なし、歸參致さば氣にかなふ妻女を迎へて某とも、師弟の縁を結んでくりやれ。

新三　何とも以て一言の申譯なき身の誤り、不埒の拙者に斯くまでに。

正作　はて、弟子は我子も同じこと、殊には親御浦之進殿に恩になつたる恩返し。さあ二品納めて離別めされ。

なぎ　いえ／＼、聟引出なら有難くお受け申せど二品を、離縁の證とござつては、どうもお受け申されぬ。

正作　御得心ござらねば、此方とても武士の意地、離別ばかりか師弟の縁を、きつて貰はにや相成らぬ。

兩人　さあ、それは、
正作　但し二品受けめさるか。
兩人　さあ、
正作　師弟の緣まで切る心か。
兩人　さあ、
正作　離別いたすか。
兩人　さあ、
正作　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
正作　さゝ、返答が承りたい。（トきつと言ふ。おなぎ、新三郎顏見合せ當惑の思入）
新三　今更何と拙者におき、返す言葉もあらざる仕儀。（トさしうつむきゐる。）
なぎ　嘸かしお腹も立ちませうが、向後母が緣をきり遊里の念を絕たせますれば、何卒やはり元々に緣を結んで下さりませ。今離別になる時は、草葉の蔭の浦之進殿へ私がどうも濟みませぬ。定めてお氣にも入りますまいが、おきしどのを下さるやう母がお願ひ申しまする。（ト思入にていふ。）

正作　何やうお望みなさるとも、唯今にては妹がござらぬ。
なぎ　え、おきしどのがござらぬとは。
正作　きしめは浮世を捨てました。
兩人　え。（トびつくりする。と上手屋體よりおきし白の振袖墨の袈裟切髪にて出る。兩人おどろき）やゝ、こりやおきしどのには。
きし　あぢきなき世をあきらめて、佛に仕ふるこの姿、お恥しう存じますわいな。
なぎ　扨は悴が不埒故、蕾みの花をそのまゝにしぼむ姿の尼法師、なぜこの母がこれまでに打捨て置きしと正作殿、おきしどのゝ思惑が私や恥かしい、面目ない。（ト新三郎を引附け扇にて打ち）思へば憎き悴よなあ。（ト突放す、新三郎思入あつて）
新三　此期に及び某が申譯は立たざれど、香爐詮議のその爲めに化粧坂へ入込みて、ふと馴染みたる藝者のおみよ、元は當座のことなりしが、馴染むに從ひ親切に浪々の身を貢ぎの金、腑甲斐なくも受けしより今となつては引くに引かれず、浮名の立ちし二人が仲、色に心を奪ばれしと思召さうがまつたく以て、心の底までうつけにならぬその證據は、卽ちこの場に於て。
ト新三郎差添へ手をかけ、腹を切らうとするをおきし留めて、

きし　あもし、早まつたことなされまするな。

なぎ　おゝ出かした悴、まことの性根があるならば、切腹なしてお詫いたせ。

新三　いふにや及ぶ。（ト又切らうとするを、）

正作　こりや、何うろたへてその切腹、士たるものゝ一命は御扶助下さる主人の外、濫りに捨てるは不忠の第一、既にいにしへより忠臣孝子その家衰へ恥辱を忍び、つひに會稽の時を得て名を萬天にあげしもの枚擧なすに遑あらず、まッその如く其許も紛失なせし寶を取り得、本地へ歸參なさゞれば、まことの武士とは言はれまいがな。濫りに命果たすのは、これ匹夫のなす所、死は一旦にして易く、生は得難きものぢやぞや。

新三　すりや、死ぬるにも死なれぬか、ほい。（ト術なき思入。）

なぎ　とはいへどうもこのまゝでは、おきしどのへ濟まぬわいの。

きし　いえ〳〵私へなに御遠慮、この年までも家にゐて世間知らずの私故、新三樣と言交せし藝者とやらはどのやうなよい女子かは知らねども、明暮お通ひなされるとお噂聞けばねたましく、悋氣はーのつゝしみながら實はお恨み申しまして、八幡樣のお祭りへまゐりましたもありやうは、その女子の顏が見たく思うた念が屆いてか、花水橋で測らず出逢ひ、初めて見たるおみよどの、女子

の身でさへほれ〴〵と思ふほどのよい器量、これではこの身の愛想が盡き嫌はれるのも尤もと、ませたことをいふやうなれど、悟つて見れば恨みも晴れ、女夫になりたい念もなく、それ故譯を兄さんに申してきれいさつぱりと、妹脊の縁も黑髮も切つて佛へ仕へる私、不便と思召すならば妹と思うて末長う、お目かけられて下さりませ。（トよろしく思入にていふ。）

なぎ　聞けば聞くほどいぢらしい、おきしどのゝ心の內。

正作　これみな定まる約束事、まだ年若き身の上に不便なことゝは思へども、浮世の中の女子の鑑。

きし　悋氣嫉妬の愼みが、ならばこの身は善知識、

新三　實にや前車のいましめに、

なぎ　その身は車の兩輪とも、

きし　いふべき夫に引放れ、

新三　片輪車にやるかたも、

なぎ　なきの淚のなき車、

正作　思へばうしの小車や、

きし　綱手にからむ緣の絲、

新三　引くに引かれぬ、
なぎ　この場の仕儀、
正作　あゝ義理は浮世の
四人　楔子ぢやなあ。

ト四人よろしく思入。時の鐘ばた／＼になり、下手庭口より門弟出來りて、

門弟　はッ、先刻のお侍が又ぞろおいでにござりまする。
正作　むゝ、何かは知らず、これへと申しやれ。
門弟　はッ、（ト引返して下手へはひる。と下手より以前の傳七風呂敷に包みし村正を持ち出來りて、）
傳七　まつぴら御免下さりませ。
正作　そこは端近、まづ／＼これへ。
傳七　いえこれが勝手でござりまする。
正作　して、又ぞろこれへおいでありしは。
傳七　へい、先刻の御禮に。
正作　なに、先刻の御禮にとは。

傳七　扨、先生の御意に任せ頂戴いたせし村正の一刀、まさしくお求めありしと知り、故なく申受けましては何とも心濟まざる儀故、御返納申上げよと主人宗之助申附に、持參仕ッてござりまする。

ト風呂敷を解き、村正の一刀を出し、正作の前へ置く、正作取上げ見て、

正作　むう、すりや村正を。（ト思入あつて、扨はといふこなしにてすらりと拔き切先を見てびつくりし、しやんと納めて、）や、こりや宗之助殿には、切腹ありしか。

傳七　はツ。（ト泣伏す。）

三人　やあ。（トおどろく。）

正作　はて、あたら若者を、殘念至極。（ト愁ひの思入、傳七額を上げ思入あつて、）

傳七　先刻主人はこなた樣より歸ると直に一間へ籠り、若年ながら健氣にも腹一文字にかき切つて度を失はず我を呼び、こなた樣への申譯、若年の至りに心逸り、科なき御身を疑ひて盜人呼ばゝりなしたる不覺、その場を去らず切腹と存じたなれどお座敷を、血汐に穢すを憚りて腑甲斐なくも悄々と恥辱を忍び歸りしは、あなたへ御難儀かけぬ爲め、また大金を以て求められし村正の一刀を、緣なき者に下されし仁心厚き御所存に、家重代の村正で自殺なすは身の仕合せ、くれぐ〵この事申上げ御返上いたすやう、又二つには書置を國屋敷へ持參なし、兄の汚名を雪ぐくれと、遺言な

してにつこと笑ひ、これにて思ひおくことなし、といふ息さへも屍聲なく、笛かき切つて果敢なくも相果てましてござります。（ト愁ひの思入にていふ。）

正作　あゝ千悔なすとも返らねど、よしなき一通某が拾ひしばかり若者に、果敢なき最期いたさせしか。

傳七　思へばこの身につまされて、おいとしうござりまする。

新三　これも前世の因縁ながら、僅か三年經たぬ間に、兄弟二人村正の刄を以て相果つるは、

正作　實に村正は銘刀なれど、血汐を好むと世の取沙汰。

傳七　何にもいたせ殘念至極。（ト愁ひの思入あつて村正を取り）この村正はその方へ一旦讓りし品なれば賣代なして取片附け、追善供養をいとなまれよ。

伴藏　はゝ重々厚きお志し、お禮は言葉に盡されませぬ。

正作　ト村正をとつていたゞく、此の時時計の音になり、奥より以前の伴藏白臺へ拵へ附の差添を載せしを持ち出來りて、

伴藏　はッ、申上げます。

正作　何事なるぞ。

伴藏　先達の御褒美として、又々上より正宗の一刀御使者御持參にござりまする。(正作の前へ出す。)

正作　すりや、この正宗を下されしとか。(トちり手水をして押しいたゞき)して、御使者には。

伴藏　玄關にお控へなされてござりまする。

正作　直に客間へ御案内申せ。

伴藏　はツ。

正作　こりや〳〵、上下を持ちやれ。

伴藏　はツ、(ト奥へ入り持つて來る。)

新三　花水橋のお手柄にて、

なぎ　又もや上より御賜物、

傳七　これ皆仁者の御德故、

正作　あ、悲しみあれば悅びと、

新三　おきしどのゝ剃髮といひ、

きし　宗之助どのゝ御切腹、

なぎ

皆々　實に世の中は

ト皆々愁ひの思入、正作上下を取つてひつかけるを木の頭。

正作　空でござるな。

ト袴の紐を結ぶ。謠、大小入りにて、よろしく、

ひやうし幕

四幕目

化粧坂仲町の場

雪之下縮宿の場

同返し

仲町裏手の場

洲崎土手の場

〔役名━━縮屋新助、念佛六兵衛、穂積新三郎、荷擔ぎ作助、縮屋七郎兵衛、同九郎助、道具屋利七、船頭長次、縮屋三四郎、同八兵衛、藍屋次郎兵衛、縮屋四郎藏、荷擔ぎ市兵衛、同十藏。藝者おみよ、野花屋女房おつゆ、藝者、娵分梓巫子おゆみ、娵分おすゞ等。〕

（仲町野花屋の場）━━本舞臺一面の平舞臺、正面葭戸、上の方折廻して塗骨障子、いつものところ門口、下の方千本格子、この前に八幡宮と印せし御神燈、總て化粧坂仲町野花屋の體。こゝにおゆみ

巫子の打扮にて箱を前におき、梓弓を持ち、口寄せの思入、これと對ひ合つて五人の娘分聞いてゐる。
流行唄にて幕明く、

ゆみ「神は上らせたまへり。」
　　ト口寄せ仕舞ひになる。
お鈴　なるほど、口寄せといふものは不思議だねえ。
ゆみ　何でも寄らぬといふことはござりませぬ。
娘一　よく常談に、辨慶や德利を寄せるさうだね。
娘二　口をきかないものでも寄りますかねえ。
お鈴　それは何でも情がありますから、口をきかないことはありませぬ。さあ、この後はどなたでござりまする。
お鈴　この後は、私が生口でござりますよ。（ト紙撚にて水向をする。）
娘三　おすゞどん、長さんかえ。
お鈴　知れたことさ。
娘四　きついいこツたね。

ト此内おゆみ眼をねむり、巫女の調子にて、

ゆみ「寄り來るわく\あづさの弓に引かれて、寄り來るわく\。」

娘一 それ、長さんが來なすつたよ。

ゆみ「これおすゞ、折角寐てゐるものを、何で起したのだ。」

お鈴 何でとは知れたこと、一昨日私がお前に貸した、三兩のお金はどうおしだよ。

ゆみ「あの晩手前が寐番だといふから嫌になつて、あひるへ行つて遣つてしまつた。」

お鈴 何で又あひるへ行つて、あんなに手をば廣げたのだ、お金の出る譯ぢやあなし、何だつてそんな所へ行つたのだよ。

ゆみ「それでも手前と話をしてゐると、お前の腋臭が臭つてたまらねえからさ。」

お鈴 おやく\まあ憎らしい、あんな嘘をついてからに。

ゆみ「なに嘘をつくものか、その上醉ふとまだその上に、(ト言ひかけるをお鈴あわてゝ留めて、)

お鈴 あゝ、それを言つては惡いよ。

ゆみ「言はなくつてどうするものだ。」

お鈴 もういゝから、しまつておくれく\。(トおゆみの口を押へるを振拂つて、)

ゆみ　いえ〳〵、寄つたゞけは言はにやあならぬ。
お鈴　これさ、後生だから言つておくれでないよ。
　　ト金を紙に包み、おゆみにやる。
ゆみ　おや〳〵これは一分かえ、思ひがけない。（ト思入あつて、）「神は上らせたまへり。」
　　トおすゞの口寄せを仕舞ふ。と、花道より船頭長次出來りて、
長次　あゝ睡い〳〵、なんでこんなに睡いんだらう。（ト言ひながら内へはひる。）
娘分　おや、長さんぢやござりませんか。
長次　おせんどん、何だか今日は睡い日だねえ。
娘一　そりやあお前ねむい筈さ、今口寄せをされてゐなさるからよ。
長次　誰がおれを寄せるのだ。
お鈴　誰がお前を寄せるものか、私が寄せたのさ。
長次　道理で大そうねむかつた。
お鈴　これ長さん、よく私の讒奏をお言ひだね。私と話してゐると腋臭が臭くつてたまらないなんてさ。
長次　そりやあ嘘だ〳〵、かつがれたのだ。

お鈴　いえ〳〵嘘でないのは、みんなが證人。

皆々　その通りでござんすわいな。

ト此中おゆみは風呂敷竹笠を持ちて門口へ出で、舌を出して下手へはひる。

お鈴　さあ、巫女さん、もう一ぺんやつておくれ。（トあたりを見て、）おや、今の巫女さんはどこへ行つたか。

娘一　ほんにどこかへ、こそ〳〵と。

娘二　それぢやあ嘘を言つたのかね。

長次　いつでも來る巫女だらう、彼奴は嘘ばかりついてゐる。

お鈴　おや〳〵そんならいやがることを言つて、一分取つて逃げたのか、油斷のならぬ世界だね、この埋草は長次さん、私と一緒に奧へおいでよ。

長次　お前と一緒は恐れるな。

お鈴　えゝ憎らしい、おいでといふに。（トおすゞ先に長次奧へはひる。）

娘一　長さんもいゝ男だが、よく逹引ひなさるね。

娘二　そこが思案の外とやらさ。

娘三　なに、あひるに情婦があるさうだから、その踏臺にされるのさ。
娘四　お客で言つて見ようなら、
娘一　縮屋の新助さんだね。
娘二　まあ、そんなものさ。

ト流行唄になり、おみよ藝者の打扮にて出來り、

みよ　おせんどん、巫女はもう歸つたかえ。
娘一　おや、おみよさん、
皆々　いつの間に。
みよ　今日は縮屋の新助さんが來なさんす約束故、さつきから來て待つてゐるが、早く來て下さんすりやよいが。
娘一　吉田屋の船頭衆が今おいでなさんすといつてゞござんした。
みよ　ちつと話がござんすから、下座敷の靜かなとこを明けておいて下さんせいなあ。
娘一　あい〳〵合點ぢやわいなあ。
娘二　それぢや、隅の六疊を片附けておかうね。

ト皆々奥へはひろ、おみよ殘り思入あつて、

みよ　ほんに待たるゝより待つ身とやらで、新三さんの身の上になくて叶はぬ香爐の金、せつぱ詰つて新助さんに無心をしたら、今日都合して來なさんす約束故、さつきから待つてゐれど、首尾よく金が調うて新三さんの望みが叶ひ、香爐が手に入るその時は新助さんに豫ての約束、一つよければ又一つと苦勞のたえぬ浮世ぢやな。

ト煙管を杖にぢつと思入。花道より新三郎出來りて、

新三　正作殿の厚恩に測らず寶が手に入りて本地へ歸るこの新三、それに就けて許嫁のおきしが尼となつたる故、おみよと緣を切らざれば正作殿へ義理たゝず、兎やせん角やと來る道も思案にくれてうか〳〵と、いつの間にやらもう野花屋、義理ある譯を打明けて話した上でと思うたが、さうしたならば未練が殘り別れ兼ねようと存じた故、愛想の盡きた體になし心を鬼に緣を切らん。（ト思入あつて門口へ來り、そつと內を覗き、）あゝ、丁度おみよがたゞ一人、（ト近くへ來り、）あゝ、最早言はねばならぬかと思へば、胸もどき〳〵。はて、何と言つたらよからうぞ。

みよ　（聲を聞きつけて、）もし、誰さんでござんすえ。（トこれにて新三郎門口より後ろ向にはひろ。）えゝ氣味の惡い、誰ぢやぞいの。

新三　誰でもない、おれぢやわいな。
みよ　や、新三さんか、待つてゐたわいなあ。
　　ト つか〳〵と來て新三郎に縋る、新三郎如何しようかといふ思入あつて、わざと手荒く突退け、
新三　なに、待つてゐることがあらうか、そりや人が違ふわいの。
みよ　なに、人が違ふとは。
新三　今仲町で名うての藝者、新藁おみよに逢ひたいと、言はれる株は持たぬわいの。
みよ　えゝもう人の氣も知らず、來い〳〵早々愛想盡し、まあ下にゐやしやせんいな。
　　ト 手を取るを新三郎振拂つて、
新三　立つてゐようと坐つてゐようとおれが勝手だ、うつちやつておけ。
みよ　(思入あつて、)もし新三さん、いつにないお前の樣子、酒でも呑んで來やしやんしたかいな。
新三　いつおれに酒を呑ました、呑んだ覺えはないわいの。(トつんとして後を向く。)
みよ　お前は私に氣を揉ませ、樂しむかは知らねども、私や氣が氣ぢやござんせぬ。まあ下にゐやしやんせ。えゝ下にゐやしやんせいなあ。(ト新三郎の裾を捉へ無理に坐らせ、)今更いふではなけれども昨日や今日の仲ではなし、算へて見れば三年越し互ひに隱すこともなく、內證のことも打明けて

見得も飾りもないほどに、ほんの女夫と思うてゐるに、譯も言はずそのやうに私に當りなさんせずと、惡いことがあるなれば、何故に言うては下さんせぬ。

新三　そりや惚れ合うた内のこと、言はぬは愛想が盡きた故。

みよ　なに、私に愛想が盡きたとは。

新三　假名で言へば、いやになつた。

みよ　え〻。

新三　飽きたによつて、緣を切る氣ぢや。

みよ　え〻〻〻、（トびつくりして、）そりや、私に何科あつて。

新三　科はその身に覺えがあらうが。

みよ　いえ〳〵、お前に愛想を盡かされる、私や覺えはござんせぬわいなあ。

新三　なにないことがあるものか、きつとした證據がある。

みよ　なに、證據があらば見せなさんせいなあ。

新三　おゝ、證據は卽ちこの腕、これ、新といふ字の彫物は、外でもない縮屋の新助への心中ならうが。

トおみよの腕をまくる。

みよ　いえ〳〵これは新三の新の字、この彫物はお前へ心中。
新三　え丶止してもくりやれ、同じこの名におれといひ、まことは縮屋新助へ心中立といふことは、誰いふとなく世間の噂。
みよ　そりやまあ誰が、そのやうな事を。
新三　はて、言ふまいものか、見る通り三年此方流浪の身の上、首尾よく尋ぬる香爐が手に入り、本地へ歸參がかなへばよし、さもない時は浪々に一朱二朱の合力受け、その日の暮しを立てねばならぬ。又新助は年々に賣先廣く行々は、分限になる丶身の上故、襟につくのが遊里の慣ひ、こりや乘替へるのも尤もだ。
みよ　え丶まあそんな無理言うて、新助さんとのその仲は、お前も知つてぢやござんせぬか。
新三　知らぬ〳〵、おりや何にも知らぬわいの。
　　トきつといふ、此時奥より女房おつゆ、おすゞその他娘分四人出來りて、
つゆ　あ丶もし新三さん、樣子は奥で承りました、まあ〳〵お待ち、
皆々　なさんせいな。
新三　お丶、さういふはお內儀、皆の衆。

つゆ　どういふ譯か存じませぬが、新助さんのことならば知らぬというては濟まぬわいの。お前も知つてござんす通り、いつぞや祭りのその折に赤間さんへ言譯なく、私が賴んだ情人、それがあちらこちらなら、乘りかへまいものでもないが、お前を突出し新助さんへ惚れるやうな藝妓衆は、まあ仲町にはござんせぬ。

お鈴　誰がそんな事をいつたか、岡燒餠の焚附を眞實にするとは新三さん、お前さんでもござんせぬ。

娘一　外にお腹の立つことが、あるならあると隱さずに、

娘二　割つてお話し、

皆々　なさんせいなあ。

新三　（思入あつて）おゝ別に腹も立たぬけれど、愛想の盡きたは薄情故、五大力のせりふにも、妓女に戀なし寶を以て戀とすと、並木五瓶が書いた通り、寶に迷ふは遊里の慣ひ、その薄情に愛想が盡きた。（ト氣の毒なる思入にて）ふつと厭だと思つたら、おみよはもとより此家の內儀、二階廻しの女中達、これまで長のその內は、よう親切に、いやさ、その親切に引きかへて身幅も狹き浪々におれをば袖に新助が、襟についたるみんなの仕方、あゝ薄情なと思つたら、愛想もこそも盡きた故突出されぬ內こつちから、緣を切りに來たのだわ。（ト思入あつていふ。）

みよ　もし、お上さんお聞きなさんせ、言ひたいがひの愛想盡かし、こつちはさういふ心と知らず、尋ねなさんす香爐の在所が知れても肝心の金がなうては、手に入るまいと、新助さんに嘘いうて、百兩無心をいうておいたに。

新三　むゝ、お爲ごかしにその金でおれが身へ恩を着せ、否應なしに緣を切り新助の方へ行く氣であらう、その香爐も手に入つて、いや、我手に入らず一生涯、身は浪人で暮すとも、けがれた金は入らぬわい。

みよ　あれまあ、あんなこと言うて。

新三　言はねばどうも、腹が癒ぬわい。（トきつといふ、おつゆ思入あつて、）

つゆ　さつきからの樣子を見るに、どうやら譯のありさうなこと。そりやもう人の口故に、襟についたの、袖についたのといふものもござんせうが、外の者は知らぬことおみよさんに限つては、憚りながら私が證人、そんなことはござんせぬから、腹が立つなら立つ譯を、何故に言つては下さんせぬ。おみよさんもお前さん故多くの客を突出して、ぱつと浮名のたつた仲、今更それを切られては、この土地にもゐられぬわけ、この妓がゐねば三軒の茶屋の衰微になることなれば、機嫌なほして相變らず來て上げて下さんせ。はて、お前さんも昨日今日この仲町へもござんすまい、酸

も甘いも御存じなら、もうよい加減になさんせいな。

ト　これにて新三郎愛想盡しを言はうとして氣の毒なる思入。

お鈴　もし、新三さん、お上さんがあのやうに事を分けて言はしやんすれば、もう大概に仲直り、一口あがつて下さんせ。それ、お肴とお燗を早く。

娘分二人　あい／＼。

ト　奥へ入り、奥より臺の物銚子盃を持ち出來り、眞中へおく。

つゆ　さあ、お厭であらうが私のお頼み、機嫌なほして新三さん、一つ上つて下さんせ。

ト　盃を取つて出す、新三郎氣の毒なる思入にて、

新三　お志しは忝いが、（ト氣を替へ、）愛想が盡きたら呑みたくない。（トおつゆの出した盃を打落し、）長く居たなら薄情が、こつちの身體へうつるであらう。うつらぬ内に、（ト思ひきつて立上り、）歸りませう、歸りませう。（トこれにておつゆむつとせし思入にて、）

つゆ　もし、新三さん、待ちなさんせ。長くゐたなら薄情がうつるとはそりや何事、この妓はいふに及ばず、私を始めこいらまで不實なことをせぬのが自慢、お氣にさはるか知らねども、これまで溜る勘定も出所は知れたこの妓故、ついに一度催促をしたことはござんせぬぞえ。これが不實や薄

情なら、疾うに二階を斷つて、お前を客にはせぬわいなあ。

お鈴　ほんにお上さんのお言ひの通り、これまでお前のおいでの時、いつも變らずやれこれといふのはみんな實がある故、おみよさんがいやになり、切れる切れぬはそつちの勝手、こゝに長居をしてゐると薄情なのがうつると言はれ、此の野花屋の暖簾にかゝれば、もう來なさりもしなさるまいが、こつちも客にできぬから、さあきり／＼と歸りなさんせ。

新三　おゝそつちで歸れと言はねえでも、歸りたくてうづ／＼してゐる、この野花屋も今日が見納め。この後敷居を跨ぐものか。

お鈴　あい、跨いで貰ひますまいよ。

新三　そんならこれが、（ト皆々を見て氣の毒だといふこなしあつて、）再び顔を見るものか。

ト思入、おみよ泣きながら裾にすがりて、

みよ　すりやどうあつても愛想が盡き、私と緣を切らしやんすか。

新三　おゝ、突出されぬ内こつちから、切れたらおぬしの仕合せだ。

みよ　なんでこれが私の仕合せ、假初ながら三年越し、人に知られた二人の仲、未練なやうだが新三さん、腹が立つなら立つやうに、どうなと譯をつけようから、心をなほして下さんせぬか。

新三　ほかのことなら心をばまた取直すこともあらうが、目當に思ふおぬしに飽き、愛想が盡きて切れるのだ。
みよ　これほど思ふ私をば。
お鈴　愛想が盡きて切れるとは。
皆々　あまりといへば。
つゆ　あこれ、みんなも靜にしな、傾城に眞實なしとは譯知らぬと、新内節にもある通り、苦界の譯を知らぬなら、いくら言つても無駄なこと、おみよさんも心が殘り切れにくゝはござんせうが、思ひきつてしまひなさんせ。假令惜しいお客でも、死んだと思へば濟まうわいな。
新三　さすがはお内儀、よいあきらめ。死んだと思うて、（ト思入あつて、）勝手にしやれ。
みよ　そんなら、どうでも。
新三　切れる證據はおぬしから、貰つた起請のこの守袋、去狀替りにくれてやるぞ。
ト懷から守袋を出し、おみよに打ちつける。
みよ　いえ〳〵私や受取らぬわいな。（ト守袋を投げ返す。）
つゆ　爭ふものは中よりと、去狀替りのこの守袋は、私が預かつておかうわいな。（ト取つて懷へ入れる。）

お鈴　さあ、薄情のうつらぬ内、ちつとも早く歸らしやんせ。

新三　おゝ、守袋を渡せば切れたる證據、後でとつくり、これで後腹が痛めぬわい。（ト思入あつて立上る。）

お鈴　えゝ、ぐづ／＼せずと、（ト新三郎を門口へ突出し、）をとゝひござんせ。

　ト門口をぴつしやり締める。新三郎思入あつて名殘をしき思入にて、

新三　この門口の、見納めなるか。

　トちつとこなし、唄になりしを／＼と花道へ行き、後を振返り許してくれと手を合せ、思入あつて氣を替へ逸散に花道へはひる。お鈴門を明けて向うを見て、

お鈴　あれ／＼、打たれでもするかと思つて、雲を霞と逃げて行つた。

娘一　ほんに人といふものは、何時氣が變るか知れぬもの。

娘二　なるほど、男の心と秋の空とは、よく言うた、

皆々　ものぢやわいな。

　トおみよはこの前より泣伏してゐる。おつゆ傍へよつて、

つゆ　これ、おみよさん嘸悔しうござんせう。これまで足かけ三年越し、みんなお前の働きで呼通した新三さん、愛想が盡きたと言ひがゝり、無理に切れたる今日の仕儀、然し新助さんと譯のあるお

前の身でもないことなれば、又その内には心も解け、ぬしの方からあやまつてござんすに違ひない、必ずきな／＼思ひなさんすな。

みよ　お上さん、有難うござんす。（ト有合ふ茶碗をとつて、）一つ注いで下さんせ。

お鈴　お前願酒ぢやござんせぬか。

みよ　さあ、好な酒も新三さんと、一つになりたいばつかりに、金毘羅様へ斷つたれど、もうかうなつたらそれからそれ、願酒も破らにやならぬわいな。

お鈴　なるほど尤もでござんす。かういふ癇の起つた時には、酒でなければならぬわいな。

つゆ　然しお前は醉はしやんすと、氣が強くならしやんす故、たんと呑まぬがようござんすぞえ。

みよ　ほんの一つか二つばかり、

お鈴　ちとお相手でもしませうかねえ。

ト皆々にて酒宴になる。と、花道より新助同じ縮屋仲間の七郎兵衛、九郎介と共に出來る、

七郎　ときに新助殿、今日は二人は交際故、頭割では不承知だぜ。

九郎　それ／＼、貴公はおみよといふ情人があれば、實はおんぶでなければ合はぬて。

新助　いえ／＼さうはなりませぬ。お前方は私よりも得意の多い大商人、こつちでおんぶをせねばなら

ぬが、遊び事故へだてなく、三つ割にしませうわいの。
七郎　そんなら藝者か船賃でも、
九郎　そなたの方で出すがいゝ。
新助　はて商ひづくなら五厘でも、爭ふけれど遊びごと、どうなと私がしませうわいの。
七郎　その氣前におみよが惚れたか。
九郎　えゝ色男め、あやかりたいわい。（ト新助の背中をたゝく。）
新助　あんまりおだてゝ下さりまするな。（ト三人門口へ來て、）
九郎
七郎　お家さん、來ましたぞや〳〵。
つゆ　おや、どなたかと思ひましたら、七郎兵衞さんに九郎介さん、
お鈴　お祭り限りさつぱりと、きつい〳〵お見限りで、
皆々　ござんすわいな。
七郎　つい、勘定に隙がなくて、大きに無沙汰をしましたわえ。
九郎　早くお稻とおやまをば、口をかけてやつてくりやれ。
お鈴　丁度お稻さんもおやまさんも、こつちの家へ出てゐなさんすが、もう今に明きますわいな。

九郎　それは丁度よい首尾だ。

新助　（後より内へはひりて、）どなたも、この間は。

つゆ　おや新助さんかえ。あゝ惡いところへ。

新助　え。

つゆ　ようおいでなさんしたな。

新助　いやもう約束の事がある故、嘸おみよどのが待つてゐようと急いだせゐか、暑うござります。

お鈴　ほんに、待兼ねてゐなさんしたわいな。

七郎　イヨウ〳〵、待たれ樣〳〵。

九郎　いろ男にはなりたいものだ。

新助　これ、美代吉へ、新助が約束のものを持つて來たと、ちよつと呼びにやつて下され。

お鈴　いえ、呼びに行くにやあ及びませぬ、こゝへ來てゐなさんすわいな。

　　　　トおみよを敎へる、新助見て、

新助　おゝそこにゐたか、いや逢ひたかつた〳〵。（ト皆々へ辭儀をしておみよの傍へ來り、）これ、賴まれたものを、持つて來ましたぞ。

ト おみよ新助を見て、お前故に新三郎に切られたといふ思入、酒に醉つたるこなしにて、

みよ　なんの、來ないでもよいことを。

ト おみよつんとする、新助合點の行かぬ思入にて、

新助　なに、來ないでもよいとは。

七郎　あゝ、貴公の來やうがおそい故、ちよいとひぞつて見たのであらう。

九郎　こゝが戀路の、面白いところだ。

お鈴　まあお一つお上りなさんせいな。

娘一　どれ、お酌をしませうわいな。

ト 七郎兵衞、九郎介の兩人はよろしく酒を呑む。奧より船頭長次出來りて、

長次　おゝ縮屋さん、今日は遊びかえ。

七郎　やあ、お前は若竹の長次さん、いつも御用を有難うござります。

九郎　まあこゝへ來て、一つお上りなされませ。

長次　御馳走になりませうかね。

新助　（思入あつて、）これ、おみよどの、何故物を言はぬのぢや。

みよ　世辭のないのは、生得さ。

新助　なんで今日はそのやうに、つん〳〵としやるのだ。もしおかみさん、おみよどのはどうかしましたか。

つゆ　あい、ちつと氣のもめることがあつて、氣合が惡いのでござんすわいな。

新助　それは持病の癪でござりませう、癪ならよい藥があります。（ト紙包より藥を出し、）これは越中富山の反魂丹、よく利くから呑まつしやれ。（ト藥を出すを、）

みよ　私やなんともござんせぬ、藥なぞは入らぬわいな。（ト拂ひのける、これにて丸藥こぼれる。）

新助　え丶勿體ない、入らずば入らぬでよいことを、そこら中へこぼしてしまつた。

ト丸藥を拾ひとり、藥包へ入れる。

七郎　これはきつい癇癪だ、然し人目がある故であらう。

みよ　え丶もう、ぢれツたい。

トついと立つて行かうとするを、新助つか〳〵と行きて裾を捉へ、

新助　これ、おみよどの、待たつしやれ。

みよ　なんだえ。

新助　そなたの頼みの五十兩を、都合して持つて來たに。（ト懷から財布を出す。）

みよ　すりや、あの金を、（ト財布を見て氣の毒なる思入あつて、氣を替へ。）もうそのお金も入らぬわいなあ。

ト顏を背ける。新助むつとせし思入にて、

新助　私が來やうもおそいけれど、人に物を頼んでおいて、腹を立つといふがあるものかいの。

みよ　さあ、お前に科はないけれど、腹を立つのは私が持前。

新助　腹を立つては德がない、まあそれよりはこの金を。（ト財布を出すを、）

みよ　入らぬわいな。（ト新助を突倒す。）

七郎　いや、こりや怪しからぬ爲體。

九郎　それでは、情人だといつた新助は、

長次　少しべいけさね。（ト新助を見て嘲笑ふ。）

新助　これ、美代吉、いや、おみよさん、なぜ入らぬものなれば私にこなたは頼んだのだ、そつちの心は知らねども、こつちに豫ての望み故、出來ぬ金をも才覺して持つて來たのに愛想もなく、唯入らぬとはどうしたのだ。譯があるなら譯を言やれ、さ、その譯はどうでござる。

みよ　その譯が聞きたいかえ、聞きたくば言うて聞かさうわいな。おせんさん憚りだが一つ。
　　　ト茶碗を出す。
娘一　おや、お前願酒ぢやござんせぬか。
みよ　願酒も破つてしまつたわいな。
娘二　大そう醉つてゐなさんすに、
娘三　これで呑んだら過ぎようぞえ。
みよ　なに、私やあ、醉やあしないわね。（ト酒を呑む。）
つゆ　おみよさん、新助さんへの話しなら、明日のことにしなさんせ、今夜に限つたことでもない、まあそれよりは奥へ行つて、一寢入しなさんせいな。
みよ　いえ〳〵言はねばならぬわいな。もし、新助さん、譯といふのはかうでござんす、お前に賴んだその金は、私が二世も三世もかけて言交した新三さんが、なくてならぬ金故にお前に無心も言うたれど、その新三さんが今しがた來なさんして言はしやんすには、浪人者故見限つて金に目がくれ縮屋の、襟に着いたといつにない詞も荒く腹を立て、取交したる起請までこゝへおいて行かしやんしたれば、もうこの金は新三さんへ上げることができぬから、それ故これは入らぬわいなあ。

新助　むゝ、そんなら私がことからして、腹を立つて切れたとか、それはもつけの幸ひだ。新三殿と切れたなら、約束通りこの私と。

みよ　なに、約束通りとはえ。

新助　はて、いつぞや船で約束したは、新三殿が元の身になつたら別れて私に身を、任せようと言うたぢやないか。

みよ　ありや皆嘘でござんすわいな。

新助　え、そんならあの時言うたことは、嘘ぢやといふのか。

みよ　あい、陸と違つて川中の船の中にて唯二人、厭と言うたら手籠にもしなさり兼ねぬ素振故、ほんのお前の氣休めに、あゝ言うたのはみんな僞り、それが苦界の仕掛文庫、打明けて言や僞りを眞實と思ふは舟水のまだ味知らぬお前故、手鍋提げよと口には言へど、實は乗りたい玉の輿と、唄に唄へどありやうは、玉の輿より味噌こしを提げても好いたその人と、添はうと思ふが苦界の樂しみ、身の詰りとは知りながら、浮名巽の中裏で噂になつた新三さん、裲は元より看板の櫛笄も入上げて、金八さんから損料で借りて座敷へ出るやうに、なつても襟につかぬが情、例へて言はば船よりも駕籠は丈夫なものなれど、乗りかへられぬが仲町育ち、新地の尖端ぢやなけれども、

かう乘つきつていふからは、これが別れの八幡鐘、突きだされたら新助さん、言へば言ふほどお前の恥、はて三月から袷着る嘘は所の習ひぢやわいなあ。

新助　そんなら悉皆僞りとか。もしお上さん、今美代吉が言ふ通り、嘘をついてもようござりますか。

つゆ　さあ、よいといふではなけれども、厭な客にも比翼塵と惚れたやうにいふのが勤め、何ぼ正直がよいというて、厭なお客を厭というてはそれではお客がござんせぬ。例へて言はゞ縮屋さんが、柄の悪い縞柄でも褒めて賣らねば賣れぬ道理、悪いと知りつゝ嘘言ふも生業づくでござんすわいなあ。

トこれを聞いて新助思入。皆々この内酒を呑んでゐたが、

七郎　これ新助ッ子、いや新公、つい今來る道々も、來月國へ歸る時は一緒に連れて行くのだが、縮屋仲間におみよほどの女房を持つとる人はないと、自慢たら〳〵言つたのは、ありやあいつたいどうしたのだ。

九郎　大方こんなことであらうと思つた。一二を爭ふ仲町の、藝者に情人はできぬ筈だ。

長次　これから見るとお前方は、年中江戸へ出てゐる替り、藝妓衆を傍へ引附け、見せ附けた話だね。

七郎　可愛がられはせぬけれど、まさかこんな目には逢はぬ。

九郎　ほんに縮屋の面汚しだ。
娘一　えゝも、よい加減に言ひなさんせ。
娘二　新助さんへ氣の毒ぢやわいな。
お鈴　なに構ふことがあるものか、つひに一度渡りも出さず、新助さんの氣の利かぬのは、今初まつたことぢやござんせぬ。
つゆ　これ、なぜそのやうな憎まれ口を。新助さん、堪忍して下さんせ。
七郎　いや、この間拔けなのに引替へて生業づくには賢い奴、おれが得意も何軒かせり込まれて取られたが、今日の始末で腹が癒た。かういふ事とは知らぬ故、まことゝ思つてこの間國へ報せてやつたッけが、飛脚賃だけ損をした。
九郎　ほんに縮屋といやあ、角兵衞獅子と同國で間拔な者のやうに言ふ故、人のことでも嬉しいから、行く先々の得意衆へ、今度私が仲間にて藝者に思ひつかれましたと、世辭半分に觸れ歩いたが、これでは國へも得意へも、また觸れなほさねばならぬわえ。
長次　へゝえ、それぢやあぱつと世間まで浮名が立つた新助さん、今更こんな目に逢つちやあ、外聞も悪いわけだが、然しこれが本役だ。

お鈴　左様々々、いま仲町で一二の藝者衆、新藁のおみよさんと言つちやあ、誰知らぬものもないに、よく口幅ッたくなく情人だなどゝ、

四人　ほんに言はれたものだね、はゝゝゝゝ。

新助　（思入あつて）あこれ〳〵、なにも世間へ見えらしく觸れ歩きはいたしませぬ。今お前方のいふ通り、野暮な生れのこの新助、誰が眼で見ても眞實とは思はれまいが、然しまた形のないことは言ひませぬ。新三殿が香爐を詮議し出して、歸參したなら斷りいうて隨ふと言うた言葉を僞りと知らぬは私が正直故、恥かしながらその時より神や佛へ願がけなし、待ちに待つたる甲斐もなく、折もあらうにこのやうに、二人の衆と一緒に來た今日に限つて愛想盡かし、何故かういふことなれば、內證で言うては下されぬ。いかに嘘をつくのが習ひとて、そりや情ないどう慾だ。また、神樣や佛樣も何故知らせては下さりませぬ。（ト涙を拭ひ思入あつてお露を捉へ）これお上さん、嘘を眞實と思つたは私が越度でござりまするが、かういふ事と知らぬ故、集めし掛金を使つてしまひ、仲間內から借荷してそれを殘らず質入れなし、身の詰りとは知りながら、思つた念を晴らさうばつかり。それもかなはぬ今日のしだら、二人の衆の耳に入れば、國は元より仲間へもこの入譯が知れますれば、顏向けならぬ私が身の上、この江戸にもゐられねば又在所へも行かれませぬ。

騙されたのは仕方もないが、明日から路頭に迷ひまする、それが悔しうござりまする。

つゆ　尤もでござんす〳〵。腹が立たうがおみよさんが、お前に向つて當るのは、少しく譯のあること故、私があとでとつくりと言ふこともござんすれば、今日はこのまゝお歸りなさんせ。

娘一　ついした事から言募り、呼びたい客を切つてしまひ、後で後悔することは私等にも往々あること。

娘二　お上さんに何も任せて、今日は新助さん、あつさり一口呑みなほし、機嫌なほして、

皆々　ござんせいなあ。

新助　お前方がそのやうに、言うてくれるは嬉しうござりまするが、人に顏向ができませねば、どうもこのまゝ歸られませぬ。

七郎　これ〳〵新助、貴公ばかり情人だといつても、向うが情人でないからは、

九郎　ぐづ〳〵言つても仕方がない、騙されたのが間拔故、

お鈴　人を恨まず身を恨み、

長次　きり〳〵と歸りやあがれ。

ト新助の肩を持つて引立てるを振拂ひ、

新助　かうとは知らずこなたにも、取られた金は何程だ。

お鈴　そりやあお前ばかりぢやあない、お客さんから貰ふのは、こりやあ女中の當り前。
みよ　使つた金が惜しいなら、私がお前に上げようほどに、早う歸つて下さんせ。
新助　えゝ使つたものは惜しくはないが、騙されたのが腹が立つ。
　　ト悔しき思入にて、立ちかゝろをおつゆ留めて、
つゆ　あゝこれはしたり新助さん、腹も立たうがおみよさんは、親方のある抱への身、疵でもつけたらお前の難儀、惡いことは言はぬほどに、まあ〳〵お待ちなさんせいなあ。
七郎　これ〳〵新助、汝は縮屋の面汚し、なんでそんなことを言はれるのだ。
九郎　連の者まで恥をかくは、汝が間拔から起つたことだ。
兩人　えゝこゝな業晒しめ。
　　ト兩人して新助の胸ぐらを取りて喰はし、突放す。
娘二　あれ、お前さん方まで同じやうに。
皆々　よい加減になさんせいな。
七郎　いや打つてもいゝ、叩いてもいゝ、この新助が親といふは、喰ふや喰はずの水吞百姓、これが妹を五歳の時に、五兩で賣つた苦しがり、

九郎　それが私等と同じやうに縮賣りになつたのは、誰がお蔭だと思つてゐる、得意先から代物まで私等が世話をしてやつたのだ。
七郎　長くゐるほど襤褸が出て、段々恥をかゝねばならぬ。
九郎　さあ足元の明るい內、きり〳〵と歸つた〳〵。（ト兩人して新助を引立て、門口へ連れて來る。）
新助　はい〳〵歸ります〳〵。あゝ恥に恥をかいた上、この衆にまでこのやうに、手籠に逢ふも誰故ぞ、元はといへばおみよ故。
みよ　さあ、その恨みは尤もなれど、言ふだけ未練でござんすぞえ。
新助　えゝ未練故に何にも言はぬが、禮はその內。
長次　えゝ、まだぐづ〳〵と。行きやあがれ。
ト長次手荒く新助を突出すを、おつゆ留めて門口へ來り、
つゆ　新助さん、何事も私の胸に、
新助　はい、有難うござります。
お鈴　おつと。羽織があるよ。（ト投る、おつゆ取つて）
つゆ　あこれ、路の悪いに、

長次　おゝ、定紋附が泥だらけだ。

つゆ　それは悪いことをしましたなあ。

新助　なに、この泥よりも我顔へ、泥をぬられし今日の仕儀。（トきつとなるを）

長次　なにイ、さあ歸りやあがれ。（トおつゆ新助を宥め、私が呑込んでゐるとの思入。）

新助　いえ、おやかましうござりました。

ト羽織をひつかけ、紐を結びながらしを〳〵と花道へ行き、振返りきつとなるを、おつゆ見て思入あつて門口をしめる。新助涙を拭ひ逸散に花道へはひる。

つゆ　あゝ、氣の毒なことをしましたわいの。

七郎　間拔野郎は歸りましたか、あんな者と一座をすると、縮屋の價直が下る。

九郎　錢をつかつたこともなくて、藝者狂ひも氣が強い。

娘一　そりや言はずとも知れたことだが、あんなにみんなが口々に、言はないでもよいことを。

娘二　早く歸りなさんすりやよい事を、いつ迄もゐなさんす故、餘計に恥をかゝしやんしたわいな。

長次　ときに邪魔を拂つたれば、呑みなほしはどうでござります。

七郎　いや、それよりは早歸り故、お片附として貰ひませう。

九郎　なるほど、それが何よりだ。

お鈴　それぢやあ奥二階へおいでなさんせ。

皆々　さあ、ござんせいなあ。

ト皆々奥へはひりおみよおつゆ殘る、おみよは癪のさし込む思入にて胸を押へ酒を呑みゐる。

つゆ　これおみよさん、新三さんの事からして心も心ならぬ故、尤もではござんすが、何科もない新助さんへ言ひたいがひの愛想盡し、あれではお前濟まぬぞえ。

みよ　さあ、後では濟まぬと思へども、新三さんに切られたも新助さんから起つたこと、つい癇癪と後前の考へもなく愛想盡し、これといふのも新三さん故。何科あつて起請まで、返す心にならしやんしたか、私や悔しうござんすわいな。

つゆ　ほんに、さつきの切れ文を懷へ入れておいたが。（ト守袋をだして、）さつきは心附かなんだが、守袋の中はたしかに手紙。（ト守り袋より手紙をだす。）

みよ　え、手紙がござんすとえ。

つゆ　「おみよどのへ新三郎、」やゝ、これに樣子が記してあらう。

みよ　早う讀んで見て下さんせいなあ。

つゆ　どれ〳〵（ト開き見て、）「一筆書送り〳〵扨兼々尋ぬる紛失の香爐、我等と許嫁せしおきしの兄正作殿の情にて首尾よく手に入り候まゝ御悦び下さるべく候、それに就き一つの難儀は許嫁のおきし事そもじと我等を夫婦になさんと、髪を切り尼となり縁を切り候故、そもじとも縁を切らねば兄正作殿へ濟まざれば、これまでの縁とあきらめ、新助殿に身を任せ行末樂に暮さるべく候、我等ことは二人へ義理に一生一人身にて暮し〳〵、この事言ひ兼ね候まゝ文にて申入候、先は目出度かしく。おみよどのへ新三郎。」

みよ　えゝ、さういふ義理であるならば、何故かう〳〵と打明けて私にいうては下さんせぬ。さうしたならば新助さんに、辛く私もあたるまいもの。えゝ、聞えぬわいな〳〵。

つゆ　ほんに聞えぬ新三さん、よしないことを言はしやんした故、新助さんへの愛想盡し、嘸や悔しうござんせう。まあこの事を一筆書き、少しも早く上げなさんせ。

みよ　いえ〳〵私が言ふ事は、何を言うても嘘と思ひ、取上げはなさんすまい。

つゆ　でも、このまゝにしておいては。

みよ　それぢやというて。

つゆ　まあ一筆書かしやんせいなあ。

トおみよへ硯を突附ける、この見得よろしく流行唄にて道具廻る。

（縮宿の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面一面に襖、上手に障子屋體、いつもの所門口、越後縮品々とした表札、下の方黒塀、路地口にこの裏に貸座敷ありといふ札あり、總て縮屋旅宿の體。ここに縮屋の三四郎、八兵衞、次郎兵衞、四郎藏等何れも縮屋の裝にて帳合をしてゐる、市兵衞、十藏は荷擔ぎにて荷拵へをしてゐる模樣にて幕明く、

八兵　ときに今日は、盆後から涼しいのでさつぱりと動かないから、今日は見切りに安く賣つて來ました。

四郎　たいがいなら賣るさ、來年まで持つては合はねえ。

三四　そりやあ違ひない、それ故私も芝居町へ十四五反賣りました。

八兵　今時分さう賣れるとは、荒錢を取るところは違つたものだ。

三四　なに、みんなやりくりで買つて、質に置くのさ。

次郎　私も前に芝居町を廻つたことがあつたが、賣れることはよく賣れるが、後の掛金は取れぬて。

四郎　堅氣な所へ商ひすれば、大丈夫な替りに値切られるし、

八兵　何でも樂はさせぬ世界だ。
市兵　もう雁が出て來たから、四五日で歩きじまひだ。
十藏　ちつとも早く國へ歸つて、ラッポン小路へでも行きたいものだ。
市兵　ほんに、女郎は國のことだ。
十藏　ほかぢやあ色が白くいかねえ。
作助　（奥より出來りて、）こりやあ、皆さん、お歸りなされたか。
市兵　おゝ作助どん、家であつたか。
十藏　新助さんはどうさつしやつた。
作助　今日は掛廻りに行くといつて、午ッから出られたが、又仲町へでも行かつしやつたか知らぬ。
三四　新助殿は堅い人だが、惡い魔がさしたな。
次郎　聞けば仲町で評判の女ださうだ。
八兵　そんな者にかゝつては、元手を耗つてしまふに。
四郎　えい加減にさつしやればいゝ。
作助　なんだか今日は案じられる。迎ひに行つて來ませうわえ。

皆々　そりや御苦勞だな。
作助　仲町までは一ツ走りだ。
　ト作助花道へ行きかけると、花道より新助しを〳〵と出來り、兩人花道にて行き合ひ、
新助　や、新助さんぢやあないか。
作助　おゝそなたは作助、どこへ行くのだ。
新助　お前樣の迎ひに行くのさ。
皆々　そりやあ御苦勞であつた。（ト直に內へはひる。）
新助　おゝ新助どの、歸られたか。
市兵　はい、今日は掛廻りに歩いて、大きにおそくなりました。
作助　作助どの、よいところで逢はしつたの。
三四　すんでのこと、無駄足をするところだ。
新助　見れば顏の色が惡いが、どうかさつしやりましたか。
作助　持病の疝えで、肩が張つてなりませぬ。
　　　肩が張るなら、揉んであげませうか。

新助　氣の毒だが、少しばかり。皆さん、ゆるして下さい。
八兵　さあ〳〵、遠慮ふしにやらつしやい。
作助　これはきついゝ張りやうだ。(卜揉みにかゝる。)
三四　ときに、今日私は芝居町を廻りながら一幕覗いて來たが、面白いことであつた。
四郎　はあゝ、どこの芝居へ行かつしやつた。
三四　二丁目(市村座)を見て來ました。
次郎　狂言は何をしましたね。
三四　お妻八郎兵衛の心中狂言、緣切りから殺しを見ました。
作助　私ァ芝居を見たことがねえが、どんなことをしますえ。
市兵　筋を話して、
十藏　聞かせなせえ。
三四　筋は、古手屋の八郎兵衛が深川の藝者お妻といふのと情夫になつてゐたところ、そのお妻が八郎兵衛へ緣切の愛想盡し、傍の船頭だの輕子だのも口々に惡く言つて、たうとう突出してしまつたのさ。そこで八郎兵衛が腹を立つて、出なほして來てお妻を殺し、腹を切るといふ狂言だ。こり

やあ江戸にあつたことださうだ。
新助　へゝえ、江戸にあつたことかね。
三四　たしか八郎兵衞の家は、富澤町だといふことだ、
次郎　今でもかういふ筋合は、いくらも世間にあることだ。
八兵　あるとも〳〵おいらなども覺えがあるが、女にだまされたほど悔しいものはねゝ。
四郎　切る氣になるのも無理はないのさ。
新助　（これをきいてゐて悔しき思入）なるほど、切らにやあなりませぬ。
作助　えゝ。（ト思入。）
新助　わしも一幕見に行きませう。
三四　間があつたら行つて見なせえ。實に芝居のやうではない。
次郎　その八郎兵衞で思ひ出したが、今夜新道の寄席は靭太夫の鰻谷だが、なんと聞きに行かうではないか。
四郎　今ツから寐られもしまい、みんな一緒に行きませう。
市兵　どうぞ私等も連れて行つて下さい。

十藏　まだ靭太夫は聞いたことがない。
八兵　新助さん、お前も一緒に行きなせいな。
新助　私は氣分が惡いから、今夜は御免を蒙りませう。作助、貴樣は御一緒に行くがよい。
作助　いえ、私は今夜は止しにしませう。
新助　おれが奢るから聞いて來るがいゝ、これも國への一つの土産だ。
市兵　さあ、一緒に行かつしやいな。
作助　いや、聞きたくもねえ、義太夫は錢を貰つてもいやなことだ。
新助　そんな強情を言はねえで、話の種だ聞くがいゝ。
作助　お前が行かつしやるなら、一緒に行きませう。
新助　おれは氣分が惡いから、行かぬわいの。
作助　わしも氣分が惡いから、止しにしませう。
新助　そんなことを言はずと、行くがいゝ。
作助　お前もそんなことを言はずと、行きなさいな。
新助　えゝ、どう言へばかうといふと。

作助　かういへばどう言ふと。

次郎　いや、鸚鵡の鳥の掛合だ。

八兵　それぢやあ二人とも、止すがいゝ。

四郎　こつちは少しも早く行かう。

三四　一段でもよけいに聞くが得だ。

四人　それぢやあ、後を頼みます。

新助　私がしつかり預かりました。

四人　どれ、行つて來ませうか。

　ト皆々花道へはひる、新助、作助殘り思入あつて、

作助　やれ〳〵騷々しい手合だな。

新助　やう〳〵氣が落ちついたやうだ。

作助　もし、お前、出先で喧嘩でもしはなさらぬか。

新助　え、なに、喧嘩などをするものか。

作助　それでも息づかひが惡うございます。

新助　なに、こりやあ疝えのせゐだ。

ト　こゝへ奥より六兵衞世話親仁の打扮にて煙草盆を提げ、片手に珠數をかけ出來り、

六兵　南無阿彌陀佛々々。おゝ新助さん、いつの間にお歸りだつたか、さつぱり知らなんだ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

ト　これにて新助作助にもうよいといふ思入、作助は下手へ來る。

新助　たゞいま歸りましたが、大そう肩が張りました故、作助にたゝいて貰つてをりました。

六兵　さうでござりましたか、さあ／＼遠慮なしにさつしやいまし。南無阿彌陀佛々々。

新助　いえ、もうよろしうござります。

ト　此内六兵衞よき所へ坐り、新助の顏を見て、

六兵　見れば、だいぶ顏色が惡いが、持病でも起きましたか。

作助　はい、疝えが起りましたさうでござります。

六兵　そりやあ困つたものだ。御苦勞ながら作助どの、奥に神功湯があるから、あれを煎じて上げなさい。南無阿彌陀佛々々。

作助　それは有難うござります、早速煎じて上げませう。

新助　なに、藥には及ばぬに。
六兵　はてさうでない、病ひは輕い內のことだ。
作助　左樣なら、お貰ひ申します。（ト奥へはひる。）
新助　いや、あの男も役にたゝぬその替り、極く正直な生れ故、よく世話をしてくれます。
六兵　兎角正直でなければいけませぬ。私なども念佛好で、明けても暮れても珠數三昧、正直なお蔭には、商人衆も大勢來られ一年增しに繁昌なし、念佛六兵衞と言はれては縮宿でも頭株、それも偏に阿彌陀樣と商人衆のお蔭故、あゝ有難い、南無阿彌陀佛〳〵。して、新助さんには、いつ頃お立ちなされまするな。
新助　（思入あつて）最早荷も片附けましたれば、近々に出立いたします。
六兵　もう近々でござりますか、それはお名殘りをしい、南無阿彌陀佛〳〵。
新助　また、ことによりましたら今宵の內に。
六兵　え。
新助　今宵の內に荷物をこしらへ、四五日の內に出立しませう。
六兵　それでは、また來年でなくてはお目にかゝれませぬな。

新助（愁ひの思入あつて、）また來年來て、六兵衞どのに逢はれますればよいけれど、明日をも知れぬが人の身の上、もうこれきりに逢はれぬかも知れませぬ。

六兵　あゝ鶴龜〳〵。南無阿彌陀佛々々。詰らぬことを言はつしやりますな、私なぞは此の年でも死ぬ氣は少しもござりませぬ。齒はよし、目はよし、耳はよし、まだ新造でも買ふ氣でござります。

新助　ほんにお前はその氣故、人より達者でござりますな。

六兵　ときに、今日も仲町へおいでなされましたか。

新助　いえ〳〵今日はお得意樣へ、お暇乞に行きました。

六兵　いや〳〵隱さつしやりますな、さつき野花屋の前でお目にかゝつたといふ人がござりました。

新助　え、そんなら私に逢うた人が。

六兵　それ御覽じろ、ちよつとかまをかけましたら直に知れました。いや、いつぞは申さう〳〵と疾うから思うてをりましたが、家においでのその時はお仲間の衆がおいで故、つい言ひおくれてをりましたが、今日は幸ひ誰もゐず、ちと御異見せにやなりませぬ、南無阿彌陀佛。

新助　なに、私に異見とは。

六兵　若いお人でもないこと故申さいでも御存じながら、まあ聞かつしやつて下さりませ。多くござる

商人衆の中でも別なお前樣、まだ剃ぺがしの時分から私が家へござるのも今年で丁度二十年、長い內には逗留中に女郎に陷り身をしまひ、つひに國へも歸られず私に難儀をかけた人も幾人あるか知れませぬ。南無阿彌陀佛々々。それに引替へお前樣は若い人には珍らしく、親の忌日はいふに及ばず、幼い時に別れたる妹の行方を案じられ、國を出た日を命日に手の內をやらつしやつたり、あゝ南無阿彌陀佛。若い人には感心なが、早死でもさつしやれねばよいと婆ァと二人で寐物語り、ちと遊びにでも行かつしやつたらと作助どのに勸めても、これも同じく堅藏どの、眞面目過ぎて案じてゐたに、いつのほどにか深川通ひ、初めのほどはよい事と思ひのほかにこの頃は、家を外なる夜泊り日泊り、商人衆の噂にも、新助も此間から大そう女に入上げたが、あれでは終ひは身の詰り、この秋には借金で國へ首尾よく歸られまいと、口々言ふを聞くにつけ、あゝ堅い堅いと自慢した私さへ今は面目ない、南無阿彌陀佛々々。どういふ譯か知らねども、嘘で固めた遊里の習ひ、取るだけ取れば突き出して、振り向いても見ぬ不人情、それ故果は切つたりはつたり、得て騷動ができまする。さうならぬ先切りあげて、もうよい加減になされませ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛(ト思入にていふ。新助も忝いといふこなしあつて、)

新助　二十年來馴染とてよう異見して下さりました。なるほど一二度友達に連れられて行たけれど、根

が野暮者の私故に、惚れられよう筈はなし、惚れられさへせにや陷りもせず、振られて歸る果報者と、近々國へ歸りますれば、必ず案じて下さりますな。

六兵　それで私も安堵しました、して國へお歸りなさるゝに、殘りの荷物はどうなさいます。

新助　さあ、荷物は飛脚で出す積り。

六兵　その飛脚にお出しなさる代物は、どこにござりまする。

新助　え。（トぎつくり思入。）

六兵　お前の持つてござつたる、葛籠の中には一反も、

新助　え、

六兵　縮はござりますまいが。

新助　さあ、それは。

六兵　あゝ南無阿彌陀佛々々。何を隱さう、今日留守にもしやと思ひ葛籠の蓋、明けてびつくり何もなく、扨は人の噂の通り、代物までもなくされたか、早く異見をしたならばと悔んだとても返らぬ事、所詮これではお國へもたゞ歸られはいたされまい。そこはどうなとしませうから、思ひ留つて下さりませ。親御の代から年頃の久しい馴染もこれぎりにならうと思や悲しうござる。南無阿

彌陀佛南無阿彌陀佛。（懐より小さな位牌を出し、）釋孤山草露信士、この位牌はお前の親御、わしがところで死なれた故、內佛も同然に朝夕拜んでをりますが、嘸や草葉の蔭にてもお前を苦勞にしてござらう、私が異見も私と思はず親御の異見と思はつしやつて、どうぞ心を入替へて思ひ留まるもお前のお爲め、必ず惡う聞かつしやるな。

ト珠數を爪繰りよろしく思入にていふ、此の內上手へ作助出てこれを聞き泣いてゐたが、この時わつと聲を上げて泣く、

作助　はあゝ。

六兵　や、作助どのか。

作助　有難涙にむせまして、この手拭をしぼりました。（ト泣きながら出來り、六兵衞に向ひ）旦那樣、よう言うて下さりました。私もかうして萬歳の才藏同樣供をして一緒に步けば主家來、案じまするは一倍に時折異見を申したけれど、汝が知つたることではないと、頭ごなしに言はるゝ故、ついそれなりにぐづ〳〵と押して言はれぬ私が身の上、生れついての不器用も新助樣の引立で、三年此方御得意樣の御贔屓受けるこの作助、ほんのことだが天道樣より力に思ふはお前樣、私を不便と思召して、六兵衞樣の御異見を、どうぞ聞いて下さりませ。

新助 あゝ、六兵衛樣といひ作助まで、私を思うてその異見、ふとしたことの意氣張から引くに引かれず通ひましたが、何を隱さうその藝者と愛想盡しをしましたれば、今日から參りはいたしませぬ。

六兵 そんなら私の異見を聞き、思ひとまつて下さりまするか。

作助 それは何より有難い。

六兵 然し、何ぞ行かぬといふ誓言が見たうござる。

新助 さあ、その誓言は。

六兵 幸ひそれなるお前の魂、その脇差を預りませう。

新助 いえ、こればかりは。

六兵 それでは得心さつしやりませぬか。

新助 ではなけれども、

作助 なけれどもなら身の潔白、早うお預けなされませ。

新助 (思入あつて)そんなら私が魂を。(ト是非なく渡す。)

六兵 しつかりと預かりました。

作助 これで私も安堵しました。

六兵　まづ〳〵今年辛抱なされ、又來年ござられたら少しは保養にもなる所故、私も一緒に行つて見ませう、その時こそは作助どのも。

作助　へい、私もお供いたすでござります。

六兵　いやも、六十の坂を越しましたに、いつまでも生きる氣で、南無阿彌陀佛〳〵。

作助　いやお前樣はお達者故、とツ百年も生きられませう。

•六兵　さあ、生る積りでゐるけれど、いつ何時彼方からお迎ひが來ようも知れぬ。南無阿彌陀佛〳〵。

新助　（思入あつて、）これが別れにならうやら、

六兵　知れぬでもつた浮世の中、

作助　定めぬものは人の身の、

新助　詰りとなりし今日の仕儀。

六兵　金が入るなら何時でも、五十か百のことならば。

新助　有難うござりまする。

六兵　どれお看經でもしませうか、南無阿彌陀佛〳〵。（ト脇差を持ち、珠數を爪繰りながら奥へはひる。）

作助　おゝ私は藥をかけておいたが、嘸煮詰つたであらう、どりや見て參りませう。

トとつかはと奥へはひろ。後時の鐘になり、新助位牌をとつていたゞき、

新助　えゝ親父樣お許しなされて下さりませ、五つの年に別れたる妹の行方を尋ねんと、商ひ兼ねて遊里へ入込み、それが緣にて仲町のおみよにふつと心迷ひ、尋ねる妹もうはの空、現金賣にとり溜めた金も殘らず使つてしまひ、今日も無心に五十兩、仲間内から借荷をして質入なしたも鵙となり、愛想盡しの緣切りに恥に恥をかいたれば、最早國へは歸られないに、かういふことゝは知らぬ故、此間もお袋から無事を尋ねてよこした文に、歸る折には錦繪を土產に買つてくれとの賴み、それ故新繪に八幡樣の御祭禮の番附まで買つておいたも無駄となつたか、もう九月にもなつたれば嘸や國ではお袋が、今日は歸るか明日は歸るかと、待ちに待てる甲斐もなく、この始末を聞くならばその歎きはどのやうぞ。それも忘れて最前は恥をかいたる悔しさに片端から切らうと思ひ刄物を取りに歸つたところ、六兵衞どのに異見され、また脇差を取上げられしは、親父樣がお留めなされしか、今日は取分御命日に供物も上げぬ不孝者、あゝ申譯もござりませぬ。

ト位牌を葛籠の上に載せ拜みゐる。時の鐘、花道より道具屋利七村正を風呂敷に包みしを擔ぎ、小田原提灯を提げ出來りて、

利七　扨不思議なのはこの村正、正作樣へ百兩に賣り五十兩儲けたところ、その時來てゐた侍が先生か

ら貰つたといつて賣りに來た故、半分だれ五十兩で又買つたが、後にてこの刄物で腹を切つたといふ噂、何だか不氣味な代物故、早く賣つてしまはうと、足手ばかりに持つて歩くが扨買手のないには困る、（ト行きかけ躓いて提灯を消し）ほい、躓いて消してしまつた。向うの家で明りを借りよう。（ト蠟燭を拔き門口を明け）もし、御無心ながら、灯りを一つ貸して下さりませ。

新助　はい〳〵。（ト行燈を持つて出來り）さあ、點けさつしやりませ。

利七　これは有難うござります。（ト灯を點けながら）や、お前は縮屋さんではござりませぬか。

新助　おゝ、さう言はるゝは道具屋さんか。

利七　とんだところでお目にかゝりました。ときに縮屋さん、道中差を一本買ひなさらないか。

新助　え、脇差を買へ。

利七　ごく〳〵切れる上作だが、急に金が入用故、どうか買つて下さらぬか。

ト是にて新助又殺さうと思入あつて、外へ出て、

新助　そりやあ、どの位なものだね。

利七　百兩の代物だが、五十兩なら賣ります、まあ代物を御覽なさい。（ト脇差を見せる。）

新助　これは結構な拵へだ。（ト拔いて見てびつくりなし）なるほど、これは切れさうだ。

利七　名におふ千壽院村正なれば、切れることは請合さ。
新助　(思入あつて、)むゝ、こりや私が買ひませう。
利七　そんならそれを。
新助　それ、代金の五十兩。(ト懐より財布を出し渡す。)
利七　これはまあ、思ひがけない厄介拂ひを。
新助　や。
利七　いや、お拂ひを有難うございます。(ト中腰になり、財布から金を出して改める。)
新助　血汐を好むと豫て聞く、この村正が手に入るも、これで殺せといふ知せか。
　ト白刄をきつと見る。利七これをきいて、
利七　え、そんならそれで、
新助　恨み重なるやつばらを。
　ト刄を振上げきつとなり、刄の祟りで狂氣せし思入、利七びつくりして、
利七　やあ、人殺しだ。
　ト大きな聲を上げるを一刀に切倒し、猶狂氣せしこなしにて血刀を提げ、花道へ行く。花道より一人

の按摩出來りて突當る。

按摩　えゝ眼明のくせに突きあたりやあがつて、眼を明いて歩きやあがれ。

ト言ふを新助振返つて切りつける。按摩二つになりばつたり倒れる、これを見てにつたりと笑ひ花道へはひる。奥より作助盆へ藥を載せて持ち出來り、

作助　新助さま〳〵、はて、何處へ行かつしやつたかしらぬ。新助さま〳〵。

ト四邊を搜す。ばた〳〵になり、花道より駕籠舁垂をおろせし四つ手駕籠を擔ぎ出來り門口へ下し、

駕舁　はい、お上さま、まゐりました。（ト垂を上げると、中より野花屋の女房おつゆ出で、）

つゆ　ちつと手間がとれようから、支度でもしなさんせ。（ト紙へ包みし金をやる。）

駕舁　これは有難うござります。（ト駕籠をおいて下手へはひる。）

つゆ　はい、御免なさいまし、新助さんはお家でござりますか。

作助　あい、その新助さんを尋ねてゐるのだ。

つゆ　さう言はしやんすは、作助どのかえ。

作助　おゝお前は野花屋のお上さん、何の御用でござりますか。

つゆ　あい、急にお目にかゝりたいことがあつて。（ト内へはひる。）

作助　して。氣遣ひなことぢやござりませぬか。

つゆ　さあ、今日美代吉さんが新助さんに愛想盡しを言はしやんしたが、それがみんな間違ひで、外の者では分からぬ故美代吉さんに文をかゝせ、私がお詫に來ましたが、何處へおいでなさんしたぞいな。

作助　はあゝそれで讀めた。道理こそ顏附が、不斷のやうでなかつた筈だ。

つゆ　何處ぞ近所にゐなさんせぬか、早う屆けて下さんせいな。（ト文をだすを作助とつて、）

作助　や、こりや封が切れてありますぜ。（ト此内より不動の像出るを見て。）此の唐銅の不動樣は。

つゆ　そりや美代吉さんが親の形見、菅谷とやらの不動樣、新助さんへの言譯に肌身離さぬ品なれど、嘘僞りでないといふ、これが誓ひでござんすわいな。

作助　（びつくりして、）え、それぢやあ美代吉どのは、新助樣が尋ねてござつた妹御だ。

つゆ　えゝ。

作助　不斷の話しに、菅谷の不動樣が證據と聞く。

つゆ　それでは猶更、少しも早く。

作助　新助さまへ。

ト この時下手より駕籠舁出て、

駕一　もし。お上さん、人殺しがござりますから、御用が濟んだら早く參りませう。

つゆ　なに、人殺しがあるとえ。

駕二　新助とかいふ人が、村正の刀を買ひそれで切つたと、其刀を賣つた道具屋の話でござりまする。

駕三　ちよつとしても、この邊で二三人も切られた樣子。

作助　そんならもしや新助さまが、

つゆ　さつきの遺恨で。

駕舁兩人　えゝ。（ト びつくりする。奥より以前の六兵衞出來りて）

六兵　樣子は殘らず奥で聞いたが、打捨ておかれぬ新助殿、まさしく目的は化粧坂。

作助　これより直に。

つゆ　この文持つて。

ト 件の文を渡す。作助手拭へ包み懷へ入れる。

六兵　ちつとも早く。

作助　合點だ。（ト 逸散に花道へはひる。）

つゆ　私も家が案じられれば。（ト門口へ出ろ、駕籠舁駕籠をよき所へ出す。）

六兵　今の話の様子では、所詮命は。（ト向うへ思入。）

つゆ　え。（トびつくりなし駕籠の中へどうと倒れる。六兵衞は門を閉めるを木の頭、）

六兵　南無阿彌陀佛々々。

ト是非もないといふ思入にて珠數を爪繰る。おつゆはそのまゝ駕籠を上げさせる。早き合方、時の鐘にて、よろしく、

ひやうし幕

ト時の鐘のつなぎにて引返す。

（返し。仲町裏手の場）――本舞臺一面の柵矢來。よき所に火の番小屋、たそや行燈、柳の立木、總て化粧坂裏川岸の體。こゝに四つ手駕籠へ繩をかけ赤間の子分五人立ちかゝりゐる模樣にて、佃にて幕明く。

子分　こう、みんな聞きや、いゝ時にやあいゝ事が重なるものだな。親分も此間の喧嘩から喰ひ込み、今度は、島と思ひのほか、頼朝樣の御法事でお赦になつたは仕合せだな。

子二　そこで今夜こちとらは親分へ遣ひ物に、手附の金を渡しておいた、あの美代吉を引拂ひ、
子三　夜船でこつそり木更津へ、引越女房に連れて行かうと、宵から近所につけてゐたが、
子四　思ひがけなく美代吉に、この裏川岸で出ツくはしたは、天道樣のお授けだ。
子五　それ故、直に駕籠へぶち込み、これから夜通しにやる積り、こんな間のいゝことはねえ。
　　トばたくになり、赤間の子分六走り出來りて、
子六　かうく、みんなこゝにゐたか。（ト胸をたゝき息のきれる思入。）
皆々　なんだ、がうぎに息を切つて來たが。
皆々　どうしたのだく。
子六　どうしたどころか大變だ、手前達も知つてゐる縮屋の新助が、今日美代吉に突出され、そこからぽつと逆上せたところへ、いつか親分が道具屋へ賣つた村正の脇差が廻り廻つて手へ入り、それでむやみに切つて歩くが、誰といふ見さかひなく、雪の下からこゝまでゞ、二十六七人も切つたさうだ。
子一　や、そんならあの新助が、村正の脇差で。
子二　二十六七人切つたとか、そりやあとんだことをしやあがつたな。

子三　こちとらにも遺恨があれば、出ツくはせば切られる身體。

子四　こいつあ何より險難だ、新助の野郎の來ねえ内、

子五　裏通しに洲崎まで、

子六　ちつとも早くやツつけろ。

五人　合點だ。

ト子分兩人駕籠をかつぎ、皆々これへ附添ひ上手へはひる。靜な佃になり、上手より燗酒屋荷を擔ぎ出來りて、

燗酒　おでんやおでん、甘いと辛い、おでんやおでん。（ト荷をおろし、）今夜のやうによく賣れた晩はねえ。もう十四五本で山留だが、早く仕舞つて歸りてえものだ。おでんやおでん。

ト呼んでゐると花道より新助村正を持ち出來り、何か飲むものを喫れといふ思入、燗酒屋見て、

へい、御酒でござりますか。（ト何氣なく言つたが脇差を見てびつくりし、）やあ、人殺しだ。

ト言ふを一刀切りつける。燗酒屋びつくりして下手へ逃げてはひる。新助荷の傍へ來て桶の水を柄杓にて汲んで呑む。この内上手より縮屋仲間の九郎助吉原冠りにて唄をうたひながら出來る、この肩へ同じく吉原冠りの七郎兵衞手をかけ、酒に醉つたる體にて出來る、この後よりお鈴、長次提灯を持ち

て出來る。

お鈴　もし、七郎兵衞さん、又いつおいでなさいます。
七郎　明日は掛廻りに出るから、明後日午からゆつくりと來よう。
お鈴　それぢやあきつとおいでなさいましよ、お前さんがおいでなさらないと、お山さんがふさいでばかり、
長次　ほんにあの妓は縮屋さんに、がうぎにあつくなつてゐるの。
九郎　これ〳〵、おれがのはどうだな〳〵。
お鈴　お關さんもお前さんにやあ大のろけさ。
九郎　そいつは有難い。（ト嬉しき思入にてひよろ〳〵とするを、七郎兵衞押へて）
七郎　あゝこれあぶない〳〵、大そうに醉つたことだ。然し貴公なりおれなり、かう女子に惚れられるとは、男はよく生れたいものだ。これに附けても、可愛さうなはあの新助、これまで無駄な金を遣ひ、つひに一度思ひも晴らさず、揚句の果に恥をかゝされ、突出されるとは何たることだ。
お鈴　先から知れてあることを、騙されるのは間拔からさ。美代吉さんが惚れるか惚れぬか、よく考へて見ればいゝのに。

長次　あんまり目先の見えねえ奴だ。

ト新助これを聞いてゐて、此の中へずつと出るを長次見て、

誰だ。やあ、新助か。（トびつくりする。）

お鈴　なに、新助、さま〳〵。（ト新助を見て震へる。）

七郎　こいつは堪らぬ。

ト七郎兵衛九郎助を突放し逃出す、新助九郎助をすつぽり切ると額半分下り、ばつたり倒れる。これにて三人おどろきうろ〳〵して、お鈴は番小屋の中へ逃込む。七郎兵衛ひよろ〳〵と逃げるを追廻し荷の傍にて首を打落す。長次後より組附くを振解いて立廻り、背中を切る、と背中二つに割れ倒れる。此時番小屋よりお鈴覗いて見て、

お鈴　もう行つたか。

ト言ふをしるべに、新助横なぐりに切る。これにて胴切になりお鈴の足のみ歩いて倒れる。新助これを見てにつたりと思入。時の鐘にて道具廻る。

（洲崎土手の場）――本舞臺三間の間草土手、後は洲崎の海の遠見、松の立木。こゝに以前の四つ手

駕籠をおろし子分五人立つてゐる。

子一　今打つたのはもう四つだが、船でこゝから行きてえものだが、あの野郎はどうしたらう。

子二　どこまで船を賴みに行つたか、早く歸つて來やがればいゝが。

子三　かうして居る中も、新助が險難だ。

子四　なに、高の知れた縮賣り。

子五　來やあがつたら、たゝんでしまはう。

五人　それがいゝ〳〵。

トばた〳〵にて花道より子分の六逃げて出て來るを、新助亂れたる體にて追ひ出來り、ちよつと立廻つて舞臺へ來る、皆々見て、

子一　そりや來た、たゝんでしまへ。

皆々　合點だ。

ト皆々息杖にて新助へ打つてかゝる、新助はめつた切りに切りちらす立廻りあつて、トゞ六人の子分は下手へ逃げてはひる。後靜かなる佃になり、新助駕籠の細紐を切り、刄の先で垂をあげ内を覗く、内にはおみよ居て新助を見て、

みよ　や、お前は。
新助　美代吉か。
みよ　新助さん。
新助　汝、おぼえたか。
ト刀を振上げ切つてかゝる、おみよ駕籠の後へ拔ける、新助誤つて駕籠へ切りつける、此間におみよ花道へ拔けて行く、新助は駕籠の前後を搜し何處へ逃げたかといふ思入。ふと花道を見てつか〳〵と追ひかけおみよへ一刀切附け、ちよつと立廻つて髻を捉へ、引きずりながら舞臺へ來る、おみよ振拂ひ立廻つておみよは土手より落ち、新助は土手の上にて刀を振上げきつと見得。凄き鳴物になり、なぶり殺しにおみよを殺し、トヾ首を切り、切首を手に取つて唾を吐きかけ、踏みにじりなどしてホツト思入。本釣鐘。ばた〳〵になり花道より作助走り出來り、
作助　や、新助さまか。
新助　何を。（ト刀を振上げきつとなる。）
作助　もし、作助でござります〳〵。
新助　おゝ作助か。（ト心附きし思入になり、）これまでそちにも苦勞をかけたが、この新助が騙されし憎き女はまツこの通り。（ト切首を見せる、作助びつくりして、）

作助　これ、新助樣、情ない事して下さりましたなあ。此の美代吉どのは、お前が日頃尋ねてござる妹御でござりますぞ。

新助　なに、この美代吉を妹とは。

作助　證據はお前へ言譯の、文に添へたる不動尊。（ト文と不動の像とを出す。）

新助　どれ。（ト村正を結へてゐた手拭をとり、村正を下におき、二品を取り、）まことにこれぞ菅谷の、親父が話しの不動尊。して／＼文の仔細はどうぢや、そなた讀んで聞かしてくれ。

作助　（とつて開き見て、）なに／＼、「心急き候まゝ申譯のみ書送りまゐらせ候、今日はお前樣へ新三郎樣の事に就き、心にもなきこと申し、御腹立てさせ申譯なく存じまゐらせ候　後にて承り候へば、新三郎樣のお許嫁なされ候おきしさま　私事よりして尼におなりなされ　候故、おきしさまへの義理に新三郎樣も餘儀なく私と緣をお切りなされ候まゝ、又私事も今となつては新三郎樣への義理にお前樣へも從ひ難く、便りなき身となりまゐらせ候、殊に又私事は五歲の年に親に別れ、力と賴むものもなく候まゝ、あまへましたることながらこれまでの御緣により、お前樣の妹とも思召し、行末長く御目をかけ下され候やう願ひ上げまゐらせ候。この事僞りならぬ印に、生の親の形見なる越後の國菅谷の不動樣の尊像相添へ差上申しまゐらせ候。」

トこれを聞いてびつくりなし、

新助　やゝゝゝ、扨は美代吉は五歳の時別れて行方知れざりし、我妹であつたるか。

作助　それ見なされ、これぢやによつて先刻にから、いくら留めても聞入れず、滅多無性に大勢を切るのみならず、現在血を分けた妹の美代吉様までこの最期、どう取返しがなりませうぞい。

トこれにて新助件の村正を腹へ突立てる。作助見て、

新助　やゝ、これ新助さま、らちもないことさつしやりましたなう。

新助　(思入あつて、)神ならぬ身の情なや、現在妹と知らずして、ふと迷ひし我煩悩絆ても覺めても忘られず、いつぞや船での約束を眞實と思つてそれからは、附けつ廻しつしたおれが、今となつては面目ない。義理にせまつてこのおれにおぬしが肌を觸れたなら、この世からなる二人は畜生。これ妹、堪忍してくれ〳〵、おりや汝の兄ぢやぞよ。その兄の身でこのやうに、惨く殺すも互の因果、汝ばかりは殺しはせぬ。

作助　どうした心の狂ひやら、多くの人を殺したこなた。

新助　血汐を好むと聞及ぶ、この村正の祟りなるか。

作助　たゞしは、何ぞの約束なるか。

新助　あ、是非もなき世の、

兩人　成行ぢやなあ。

ト兩人よろしく思入。此時ばた〳〵になり、捕手四人出來りて、

捕手　人殺し、動くな。（ト取り卷く。）

兩人　何を。（トきつと思入。此の時樂屋頭取出て、）

頭取　先づ、今日はこれ限り。

と目出度打出し

縮屋新助（終り）

青砥稿花紅彩畫

豊國漫畫姿其儘歌舞伎仕組義賊傳

扨盗人の世話物も阿漕が浦に引網の度重なりて古めかしく刑部が娘千壽前新清水の花見から趣向を替へて支那唐土日本駄右衛門辨天小僧神輿が嶽の出會さへ凄みを戀に和らげて小夜衣重三が道行に濡て嬉しき稲瀬川身投を助し忠信が其だんまりも暗まぎれ左右へ別れて雪の下彼濱松屋へ力丸がまだな衒の萬引もあちに絡んだ遠州灘頭と頼む親船の捨た我兒も十七年月日も辰の臍の緒故名乗り合たる女房子に岩打波の碎けては退れぬ仲の幸兵衛が後世をとむらふ極樂寺佛の庭も修羅道の名を捕物に藤綱が落せし錢の詮議より寶を得たる滑川是狂言の大詰にて茲に寄する白浪五人男

世　界　皐　結　柏

「白浪五人男」(辨天小僧)は、文久二年三月、作者四十八歳の時市村座に稿下されたもので、世に聞えてゐる白浪物の一つである。龜戶豐國の見立繪に暗示を得て通し狂言に作り上げた由來は、これまでに人に知られてゐる。濱松屋の見世から稻瀨川の五人男勢揃ひ迄は、屢々上演され、五人男のツラネは好劇家の愛誦するところである。玆に全部を通じて見ると、又別の味が生ずるであらう。後の五世菊五郎が十九歲にして辨天小僧を勤め、それが大成功で出世狂言として傳唱されたものである。田村成義編「續々歌舞伎年代記」には次の如くに記されてゐる。「取分け評判よかりしは羽左衞門の信田小太郎若衆姿にて歌女之丞の千壽姬をかどはかし頭巾を脫げば辨天小僧と名乘る所大受け、又大詰極樂寺の山門は大道具大仕掛にて、屋根上にて、大立廻りあり辨天小僧立腹を切りどんでんに返ると山門せり上り、花道よりも青砥左衞門セリにて上る所何れも評よく、近年珍らしき大道具なりとて每日賣切れの盛況なりし」と。

書卸しの時の役割は市村羽左衞門(辨天小僧菊之助)、中村芝翫(南鄕力丸、青砥藤綱閻魔ノ胴六)、河原崎權十郎(忠信利平)、關三十郎(日本馱右衞門)、市川團藏(濱松屋幸兵衞)、岩井粂三郎(赤星重三)、片岡十藏(番頭與九郎)、關花助(幸兵衞悴宗之助)、中村歌女之丞(小山の息女千壽姬)、市村竹松(非人赤鬼の三吉)、坂東又太郎(千原主膳)、中村兒雀(千原左近)等。

挿繪にしたのは一惠齋芳幾筆の錦繪で、濱松屋見世ゆすりの場である。

大正十三年十月　　　　編者誌す

青砥稿花紅彩畫（白浪五人男｜｜五幕）

序幕

新清水の場

〔役名｜｜信田の小太郎實は辨天小僧菊之助、奴駒平實は南郷力丸、忠信利平、赤星十三郎、赤星頼母、千原主膳、薩島典藏。小山の息女千壽姫等。〕

（初瀬寺觀音の場）｜｜本舞臺正面小高き石段、朱塗りの高欄、正面に廻廊。上手に出茶屋、團子提灯をかけあり、床几二三脚列べ、所々に櫻の立木。石段の下手に千部の立札、總て初瀬寺觀世音、花盛りの體。こゝに○□△◎の四人腰衣同宿の打扮にて、手水桶、箒を持ち立つてゐるこの見得よろしく双盤にて幕明く。

○ときに頓念坊や、今日このやうにやかましう言うて、掃除をするはお屋敷方の御參詣でもあるのか。

△ある段ぢやあないわえ、小山の判官樣の姫君千壽姫樣の御參詣、それで聞かつしやれ、まだお年は行かぬけなが、そのお許嫁の信田家の息子殿小太郎樣とかゞ死なしやつとやらで、今日この初

瀨寺で御供養があるといふことだ。
□ はゝあ、それでこのやうに掃除をするのぢやの。おれも噂に聞いたがその小太郎樣の親御左衞門樣とやらは、北條光時樣の謀叛に荷擔をしたとやらで、お家が斷絕したのぢやないか。
○ 私もその話は聞いてゐるが、何でその息子殿の小太郎樣が死んだのぢやの。
△ さればさ、どういふことやら知らぬが、それで今日御參詣の姬君樣が、まだ祝言なされぬけれど許嫁といふところでこれからは後家を立てるといふことだが、何とをしいものではないか。
○ その千壽樣がこの初瀨の觀音樣が御信心とは、これがほんの千手觀音樣といふのぢや。
○ 何を言はつしやる。
△ ときに、もう掃除もようできたから、程なくお入りに間もあるまい、御寶前の飾りつけをせうぢやないか。
□ さうぢや〳〵、又お師匠樣に叱られぬやう。
△ 早く行かうぢやあるまいか。
四人 さあ、行きませう〳〵。
ト下手へ入る。と花道揚幕の內にて『はい、ほう』と呼ぶ大勢の聲する。と行列三重出の鳴物になり、

花道より油單のかゝりし先箱を先に、物これへ侍女一(柵)、侍女二(浮舟)、その他十人何れもひらり帽子の侍女裝にて日傘をさし、その後へ侍裝の薩島典藏、香合の入りし箱を三方に載せて持てる千原主膳老けたる侍にて、これに千原左近附添ひ、徇侍士の一(浮島大八)、他二人、茶道、中間等茶瓶、合羽籠等を持ち出來る。

典藏 お乘物立てませい。

皆々 はあゝ。(ト舞臺中央へ乘物をなほし、皆々よろしく居列ぶ。)

典藏 姬君當初瀨寺へ今日の御參詣は、大殿小山判官公三ヶ年以前御他界のあらせられ、三回忌の御佛事、

大八 まつた姬君の御許嫁信田の小太郎殿、家斷絕のその後はお行方知れず、他國に於て死せしとの風聞、それ故にこそ姬君樣には菩提の爲めに當寺へ御參詣、

主膳 それ故にこそ信田家より當家へ遣はしおかれたる胡蝶の香合、これを寶前へなほし、佛事供養の御修行を行はれたき思し立、

左近 未だお年若の御身にて、先殿樣の御追福、まつた許嫁の小太郎樣死去ありしとお聞き遊ばし、御神妙なる御供養、恐れながら御心の內お察し申上げまする。

女一　姫君様のお心は悄れておいで遊ばずに、今を盛りの櫻の色どき、ちと御覽遊ばして、お氣欝をお晴らしなされませ。

女二　名にしおふ花の名所、この初瀬寺の櫻の盛りをお詠め遊ばしますれば、お氣も解れませうほどにお勸め申すがよろしうございませう。

女三　左樣でござりまする、お許嫁の小太郎樣お行方知れぬをお案じなさるは、御尤もでござりますれど、花物言はねどお心の開くも櫻の花ざかり、

大八　千本の櫻と名にしおふ吉野の花も劣らぬ盛り、佛の庭も花盛りには、何さま天女も天下る見事なことではござらぬか。

侍一　いやも、不骨者なる拙者でも心和らぐ櫻の色香、月雪花と玩ぶ風雅人は悦ぶ筈でござるわえ。

女四　その色香ある花盛りに、千壽樣には明暮にお許嫁の事のみを、ほんにお憂ひ遊ばして、お胸も開かぬ海棠の、

女五　雨にしほるゝお姿を、お見上げ申すが御せうしで、

女六　仇に散行く遠山櫻、佛いぢりを遊ばすとは、

女七　大慈大悲の御身の上、花の姿を徒に、

女八　花に暴風と世の諺、
女九　浮世の花は散るが慣ひ。
女○　又私等は、この花の盛りを眺めて、目元が櫻になりたいわいなあ。
女△　その櫻より又一入、花より團子の横串で、眺めながらもこよなき樂しみ、
女□　見えばるよりも頰ばる譬、慈姑の煮附きぬかつぎ、器量のよいは茹で玉子、
女○　香り床しき櫻餅、お籠に入れしお土產は、お泊り番のお茶菓子に、澤山取つて參じませう。
左近　これはしたりそのやうな事を、何はともあれ姬君には、お駕籠の中にてあまりのお氣鬱、
女一　これへお出遊ばして、佛の庭の花盛り、
典藏　いざ御遊覽、
皆々　遊ばされませう。
千壽（乘物の中にて）明日は又いかに眺めん散り果てぬ、今日だに辛き花の梢を。
　ト音樂の入りし合方になり、乘物の中より千壽姬の打扮にて出來る、侍女皆々拵脇息をなほす。
典藏　姬君には嘸かし御氣鬱、この花盛りを御覽遊ばすも時の一興、
主膳　暫時この所へ御座を据ゑられ、ちとお氣をお晴らしなされませう。

左近　木々にも花咲く彌生の中空、あまりお沈み遊ばしては却て心も開かぬ道理、四方の景色をお眺め遊ばしたがよろしうござりまする。

千壽　皆の者が心遣ひ嬉しう思ふわいの、自らが心の中には櫻の盛りも此の身の仇花、許嫁せし小太郎樣まことにこの世においでがなくば、この黑髮をそぎ尼と、菩提をとむらふ尼法師、眺める花はないわいなう。

典藏　これはまた如何いたした儀でござりまする、やゝともすれば尼になるの墨染のと、そりや惡い御合點でござりまする。豫々拙者も申す如く、未だ婚姻もなされず盃もせぬ小太郎殿、ない往時と思召さば、死去なされても構はぬこと、御再緣なとなさるゝが、こりや當世と申すものでござる。

大八　左樣でござる、殊に信用の左衞門は北條光時の謀叛に荷擔し、つひに時賴公のお咎め蒙むり家は斷絕、その罪によつて左衞門には切腹なし、子息小太郎殿はその砌より行方知れず、定めて何處ぞをへちまうて、十が九つのたれ死に、

侍一　そのやうな生死も知れぬ浪人者に、操をお立てなされずと、當時威勢盛んの三浦家の若殿、良村殿が豫々の御執心、

侍二　三浦家へ御再緣なさるのが上分別、それが親御判官樣への御孝養と申すもの、

典藏 姫君こゝをようお聞きなされ、先殿判官樣御死去なされしより其後は、三浦殿の御後見、其のまゝお家の立つてあるのも皆泰村殿のお蔭、なりや姫君が良村殿へ御再緣なさるれば、お家は萬代不易と申すもの、こりや御思案なされずばなりますまい。

主膳 あいや薩島氏、姫君の御剃髮をおとゞめなさるは聞えましたが、御再緣をお勸めなさるゝは、ちとその意を得ぬかと存じまする。

大八 お家の爲めを思ふ典藏殿、その意を得ぬとは如何なる仔細で、

主膳 さればでござる、信田の家の斷絕致せしも、こりや皆讒者の所爲、殊に御子息小太郎殿死せしと申す確な證跡とてもござらねば、御再緣は相成りますまい。

大八 假令無事でをらるゝとも、謀叛に與せし天下の科人、その罪人と緣組なさば小山のお家へ疑ひかかり、如何なるお祟り受けうも知れぬ。それを知りつゝ緣組を願はつしやるは、小山の家の不吉といふもの、

主膳 左樣ではござらねど、操を破つて再緣なすは、女子の道が相立ち申さぬ。

典藏 然らば操は立つにもせよ、お家の行末お構ひなきか。

主膳 さうではござらねど、

典藏　横合から入らざる口出し、重役を勤むる薩島典藏、貴殿如きの指圖を受けうや、言葉が過ぎる、控へてござれ。（トきつといふ。）

主膳　むう、（ト無念なるこなし。左近思入あつて、）

左近　あいや典藏樣、そりや言葉が違ひませう、善惡ともに御主人の心に違ふが不忠の第一、たゞ今日は先君の御追福、その儀は後しての御沙汰がよろしうござりませう。

大八　えゝ、生若輩の身を以て、控へてござれ。

千壽　あゝこれ、双方とも爭ひ無用、兎にも角にも自らは浮世を捨てゝ尼法師、佛へ立てしこの身の誓ひ、心は決してゐるわいなう。

女一　その儀は篤と御思案の遊ばされ、及ばずながら私どもも、

女二　またよいお話しもござりませうほどに、そのやうにきなく思召さずとも、何かのことは御歸館の上、

女三　最早御法會の刻限に間もござりますまい。

女四　なるほど、御參詣がよろしうござりませう。

典藏　何さま、最前よりよほどの間、

大八　私事ならぬ大殿様年回の御供養、

主膳　まづ觀世音の寶前へ、小太郎殿より送られし胡蝶の香合、

千壽　早う供へてたもいなう。

典藏　何はしかれ、姫君には、

左近　觀世音の寶前へ、

千壽　そんなら、皆の者、

典藏　先づ、

皆々　いらせられませう。

ト唄になり、千壽姫先に皆々石段を上り上手へ入る。後典藏、侍三人だけ殘り、四邊へ思入あつて、

侍一　典藏様、

典藏　これ、（ト押へる。）

侍一　豫て同心の我々へ、密々のお話とは、

侍二　いかゞな仔細にござりまする、

典藏　その仔細は餘の儀でござらぬ。何れも、四邊へ心を、

兩人 心得ました、(ト心を配りて、皆々床几へかゝる。)

典藏 此度當家の一家たる三浦泰村樣には、豫々謀叛の企てありて、北條時頼を亡して鎌倉の執權たらんとの巧み、一味の者も多き中にこの典藏を片腕と頼むとのこと、何れも方も某とは同心のことなれば、此の一儀成就なせば小山の家を押領なさん我が巧み、

大八 まつた千壽姫は、三浦の子息良村殿の奥方と定めなば、政事を預かる執權の縁者同然この上もなき立身出世、それに就いても唯邪魔になるは、忠義立てする千原親子、何ぞれかぞれ罪をこしらへ、亡き者にするよい工夫はござるまいか。仔細といふは此の儀でござる。

侍一 初めて承はつた三浦家の大望、某とても貴所へ一味の我々なれば、この上とも心を合せ、御荷擔の仕るでござりませう。

侍二 斯く一味なす上は、典藏殿の仰せの通り、何かにつけて邪魔になる千原親子、どうかいゝ工夫がありさうなものだ。

ト此時典藏主膳の落せし扇をひろひとり思入あつて、

大八 おつとお待ちなされ、かういふ妙計がござる。今こゝへ主膳めが落しておいた此扇を、種に遣つて一つの手だて。

侍一　そりやどういふ魂膽でござるか。

大八　かやうでござる。けふの法會に寶前へ供へおいたる胡蝶の香合、預り役は千原主膳、折を伺ひ奪ひ取り其處へ此扇を落しておいて證據となし、柄に柄をすげて追ひ出す魂膽、此工夫はいかゞでござらう。

典藏　さすがは浮島大八殿、あつぱれ妙計おどろき入つた。

侍一　こりや手短かで上分別、然らばこれより寶前へ、心を附けるでござらう。

侍二　あの香合をせしめるとは、惡い事にはよい智慧が出るものでござるな。

典藏　まだ密々に申し談ずる一儀もあれば、何かは奥の別殿にて、

侍一　善は急げと申すれば、我々二人は香合の一段、

大八　必ずともにぬからぬやう、

侍二　よい吉左左は、またゝく中、

典藏　然らばこれより、

三人　御同伴仕らう。

ト唄になり、皆々上手へ入る。と花道より赤星十三郎さん、、、、すゐなる打扮にて、樒の花を持ちて出來り、

花道に留まり思入あつて、

十三　人の心も開くといふ花の頃とは言ひながら、お賑はしいことぢやなあ。唄ひつ舞ひつ世にある人はそれ〴〵に樂しみのあるその中に、それとは引替へ私が身は、御主君信田の左衛門様には御切腹、又若殿にはお行方しれず、浪々をして活計にせまり、一錢二錢の合力受けその日を送る身の果敢なさ、世の盛衰とは言ひながら、昨日の錦は今日の襤褸、あゝ三日見ぬ間に櫻ぢやなあ。

ト本舞臺へ來る、これと同時に上手より赤星頼母老けたる浪人の打扮にて深編笠を冠り、出來るを十三認めて、

それへおいでなされまするは、伯父者人ではござりませぬか。

頼母　おゝ、誰かと思へば十三郎か。

十三　して、今日はどれへおいでなされまするな。

頼母　されば聞きやれ、今朝より所々方々と用事を足しに歩きしが、とんと用が足りぬ故はとんと當惑いたしてをるのぢや。

十三　それは定めて御心配でござらう、してその御用向とおつしやりまするわ。

頼母　それに就きそちに頼み度き仔細もあれど、こゝは途中、あれへまゐつて何かの仔細を、

十三　左様ならば伯父者人、

頼母　さあ、まゐらう。（ト兩人本舞臺へ來り、床几へ腰をかける。）

十三　して、仔細と申しまするは、何事でござりまする。

頼母　さあ、様子といふは別儀でない、其方も知つての通り、三浦泰村が讒言によつて御主君には御切腹、家國とても召上げられ主家來とも皆散々、某とてもその砌後室樣を伴ひ申し、浪人の身のよるべなく、微な煙りを立つる中、後室樣には昨年より御苦勞なされしたゝまりが、氣病となつて長のいたつき、このほどにては行臥も自由にならざる大病、貧苦の中にも種々に醫療を盡せど、なか〳〵本復思ひもよらず、此の病ひを治するには、高金の藥を用ひねば全快なすことかなはぬとの醫者の言葉、高金なればとて金子でお命取りとまらば、どうぞ藥を求めたいと思へど、身貧な今の身の上、

十三　さうして、高金とおつしやりまするその金額は、どの位でござりまする。

頼母　さればさ、百兩なければ得難き良藥、金がなくては現在のお主樣を見殺しにせねばならず、とあつて金の才覺は出來ず、この頼母が心の苦しさ、推量いたしてくれいやい。

十三　あなたの爲めにもお主樣なりや、私が爲めにも大切のお主、せめて此の身が女ならその金額にな

らずとも、仕樣もやうもあらうもの、というて大まいのその金が、（ト賴母を見て一寸氣を替へて思入あつて、）もし伯父者人、そのやうに御苦勞を遊ばすと、あなたもお身體にさはりまする。後室樣が御病氣の上、ひよつとあなたでも煩らうて御覽じませ、何といたしやうがござりませう、一寸延びれば尋とやら申しますれば、どうかいたしたら出來ぬこともござりますまいから、精一ぱい私が働いて見まするほどに、もう〳〵お案じなされぬがよろしうござりまする。

賴母　そんなら何と申す、その金をそちが都合いたすと申すか。

十三　ちと心あたりもござりますれば、あちこちと歩きましたことなら、出來ぬこともござりますまい。

賴母　あゝよう言うてくれた、なるほどこれが親はなきより、出來ぬまでもそのやうに言うてくれゝば少しは胸も開くであらう、無理なことを賴むやうなれど、心あたりがあるとなれば、何分にも賴んだぞよ。

十三　よろしうござりまする、身を粉に碎いてこしらへてお目にかけまする。

賴母　そんなら、よい吉左右を待つてゐるぞや。

十三　きつとお返事申しまする。

賴母　そんなら、十三、

十三　伯父者人、
頼母　又逢ふであらう。
十三　お靜かにおいでなされませ。（ト頼母は下手へ入る。）あ、お窶れなさるも御尤も、貧苦の上に大まいの金の才覺、然し伯父者人のお心の休まるやう、あのやうに受合つたもの〻、貯へもなき今の身の上、どうぞして調へてあげたいものぢやが、何をいうても大まい百兩。おゝ、それ〳〵、切ない時の神頼みとやら、觀音樣へお願ひ申し一心に願籠めしたら、又よい智慧を貸して下されうも知れぬ。どれ〳〵參詣して來ようか。
ト上手へ入る。と直に鳥居上手の方より侍女の一千壽姬を伴れ、香合を持ち出來り、四邊へ思入あつて、
女一　もうし姬君樣、油斷のならぬこの時節、唯今御堂の裏手にて、何かひそ〳〵話し聲、樣子を聞けば典藏樣の指圖にて、大八殿を賴みこの胡蝶の香合を盜み出さん彼等が巧み、憎さも憎しと思へども、この香合さへ手元を放さねば氣づかひはござりませぬ。あなたしつかりと御懷中なさりませ。
千壽　おゝ梶よう心が附きました、この身に替へぬ大切な香合、そんなら妾がしつかりと懷中しますわ

いの。

千壽　合點ぢやわいなう。

女一　必ず人手にお渡し遊ばしまするな。

ト此時侍女大勢の聲にて『さあ〳〵皆さん、おいで遊ばせ〳〵』といふ聲して、皆々出來りて、

女二　これは姫君樣、これにお越しでござりましたか。何と柵どのよい景色ではござりませぬか。ちとこの露臺で眺望を御覽じませいなあ。

女三　鎌倉山の星月夜、名所古跡が手に取るやうに見えますわいなあ。

千壽　ほんに、よい眺めぢやわいなう。

女四　もうし姫君樣御覽じませ、彼方に小さく見えますが金澤の能見堂、あのまあ入海を御覽じませ、とんと泉水のやうでござりますわいなあ。

女五　ほんにきれいなことでござりますわいなあ。

ト皆々方々を眺める。この中侍女の六遠眼鏡を持來り見ていろ〳〵思入、

女六　おゝきれい〳〵、彼方に見ゆるが江の島の辨天樣、こちらに見ゆるが鶴ヶ岡の八幡樣、彼方に見ゆるがおらんだ、ふざんかい。

女七　えゝも何を言はしやんすぞいな、私にもちつと見せて下さんせ、（ト無理に取らうとする。）
女六　まあ〳〵、もうちつと見せて下さんせ。
女七　私に見せて下さんせいなあ、（ト遠眼鏡を見て、）ほんにまあ近く見ゆることわいなあ、あれ〳〵横濱が見えますわいなあ、こちらに見ゆるが神奈川の臺で、あれまあお茶屋の中で大勢が酒宴をしてますわいなあ。あれ、拳を打つて、おやまあ流行におくれた藤八拳でさ。もし〳〵ちよつとお合をいたしませう。
女八　もし〳〵、いくら大きい聲をしても、聞えることではござんせぬわいな。私にもちつと見せて下さんせ。
女七　さあ〳〵御覽遊ばせ、どんなに面白いことでござりますわいなあ。
女八　（見て）あれ〳〵御覽じませ、いろ〳〵な人が向うから來ますわいなあ、よい男を手に取るやうに見たいものぢやわいな。
ト、此の中思ひ〳〵の仕出し出來り、舞臺へ來て櫻を見ることあつて上下へ別れて入る。此中侍女皆皆これを見ていろ〳〵の捨ゼリフあること。
あれ〳〵、今度はほんたうのよい男が見えますぞえ。

女九　どれ〳〵、私にお見せ遊ばせ(ト見て)おや〳〵まゐりますぞえ〳〵、お姫様も皆様も御覧じ遊ばせ、御覧じ遊ばせ。

皆々　どつちの方へまゐりますぞいなあ。

女九　あれ〳〵向うの方から此方をさしてまゐりますぞえ、もし〳〵早う來て御覧なさりませ。あれあれ段々近くなりますわいなあ。

ト皆わや〳〵言ふ。と花道より信田の小太郎實は辨天小僧菊之助、若衆鬘侍装にて出來り、後より奴駒平實は南郷力丸奴装にて附添ひ出來り、あちこち櫻を見る思入あつて、

辨天　あ咲いたわ〳〵、實に金花の奇峰霞の裏に現はるゝと、唐土人の聯ねしも斯くやらん、歌人想ひを勞し、畫人は筆をなやます風景、はて面白の詠めぢやなあ。

南郷　何さま、これが花が花見るとか申すのでござりませう。

ト此中千壽姫は辨天を見て見惚れる思入。侍女皆々よい男だといふ動作、その時侍女一、侍女二に囁くことありて本舞臺へ下り、南郷を招く、南郷はこれを知らぬ思入にて知らぬ顔をしてゐる、兩人は側へ來て南郷の手を取り無理に下手へ連れて行く、辨天は何か心に浮みし思入にて懐より白扇を出し、矢立を出して考へる思入、侍女は南郷に向ひて、

女一　もし、奴さん、お前にちと御無心があるわいなあ。
南郷　なに、奴に無心とは、そりや何でござるな。
女二　あの外のことでもござりませぬが、お前の旦那様は何處のお方様で、
女一　お名はなんと、
兩人　おつしやりますえ。
南郷　なに、おらが旦那の名か、いや、こりやあどうも言ふわけにやあいかねえ。
女二　私等ぢやとてお武家の御奉公、蓮葉に人には言はぬほどに、どうぞ教へて下さんせ。
兩人　お賴みぢやわいなあ。
南郷　いゝわ、さういふことなら極く內々だが、あなたは御家沒落なされた信田の左衞門樣の御子息。小太郎樣といふお方ぢや。
兩人　えゝゝゝゝ（トびつくりなし）
女一　そんなら明暮お姬樣が、お慕ひ遊ばす、
女二　お許嫁の小太郎樣でござりますかいなあ。
南郷　これ〳〵何と言はつしやる、それぢやアあれにおいで遊ばすは、小山の姬君樣か、そいつは大變

だ、もし〳〵お二人樣内々にして下され〳〵。

ト此中辨天は扇を認め思入あつて、南鄕を見て、

辨天　こりや駒平々々。

南鄕　ねい〳〵。(ト間の惡き思入。)

辨天　その方は、それに何をいたしをる。

南鄕　ねい。いゝものでござりまする。

辨天　何といたした。

南鄕　これは斯樣でござります、唯今あのお方に唯月の御遷座は下寺か御本坊か承つてをるところでござりまする。

辨天　何を申す、觀世音に御遷座と申すことがあるものか、痴けたことを申すわえ、はゝゝゝゝ、あまり見事な櫻の盛りに、思はぬ時刻をうつし申した、どりや參詣をいたさうか。

ト立上る、此中千壽姬も侍女の二、三に手を引かれて鳥居より下へおり、始終辨天に見惚れる思入、辨天も千壽姬を見ながらつけ廻しになつて、辨天は石段を上り上手へ入る。千壽姬はぢつと辨天の後を見送りゐる、南鄕も思入あつて、

南鄉　どりや、おれもお供をいたさうか、(ト行きかけるを、侍女一、二留めて、)
女一　もし〳〵ちよつとお賴みがござんすわいなあ。
南鄉　何だ、又賴みか、今旦那樣が御參詣なされたから、お供をしにやあならねえ。
女一　まあ〳〵さうでもあらうが、ちよつと下にゐて下さんせ。
南鄉　そんなら、早く言つて下せえ。
女二　その譯はかうでござんすわいなあ。
南鄉　どういふ譯だ、氣が急くわえ。
女二　あれにおいで遊ばす姬君樣のお許嫁が、お前の旦那樣の小太郞樣、實は今日までお行方を尋ねておいでなされしが、お行方知れぬその時は、尼にならうとおつしやる故、
女一　そこがお前の働きで、その事情を申上げ、いづれ後日にお身の上が固まるにせい、今日のところはお言葉なりと下さるやう。
兩人　お執成しゝて下さんせいなあ。(トいろ〳〵賴む。)
南鄉　どうして〳〵おらが旦那は、お年はお若いがおそろしい物堅いお生れつきだ。そんなことを言ひ出したら、直にお眼玉だ。そりやあいけねえ〳〵。

兩人　さうでもあらうが、そこをどうぞ。

南鄉　そればつかりは、此方が訛りだ。

兩人　私等二人を助けると思うて、

女一　どうぞお取持をして、

兩人　下さんせいなあ。（ト留める、南鄉迷惑なる思入にて）

南鄉　こいつあとんだ所へひつかゝつたわえ、それほどに言はつしやるなら、今こゝへおいでなされたら言ひ出しては見ようが、とてもうんとは言ふまいが、どうかいゝ思案がありさうなものだ（ト思案の動作あつて）ある〳〵、かうだ、今こゝへ旦那が來て、おれが言ひだすと、そりや物堅い旦那だから、ならぬといふだらう、さうしたらお姫樣が九寸五分か短刀で死なうといふだらう、所で何で死ぬといふと、旦那樣に逢はれぬから死ぬといへば、なんぼ物堅い旦那でも、人の命を助けるのだから、これぢやあ御承知なさらずばなるまいが、この仕事はどうであらう。

女一　なるほど、これはよい思案でござんすわいなあ。

女二　もうしお姫樣、この奴どのが殿樣へお言葉下しおかれますやう、お取次いたすと申せば、まあお悅び遊ばしませ。

千壽　忘れはおかぬ、嬉しいわいなう。
南郷　それはよろしうございますが、今の短刀を忘れてはなりませぬぞ。
千壽　その短刀とやらは、どうするのぢやぞいなう。
女一　もし〳〵奴さん、骨折ついでに姫君樣に、ちよつと敎へてあげて下さんせ。
女二　ほんに、それがよいわいなあ。
南郷　そんなら私が稽古をするのか、これは迷惑なことだ。もしお姫樣、かうでございます、今旦那樣が見えまして、私がいろ〳〵申しまして聞き入れませぬ時は、かういふのでございます「あなたに逢はれぬその時は」（ト女の聲色でいふ、千壽姫聞の惡き思入にて、）
千壽　あなたに逢はれぬその時は、
南郷　「生きながらへて詮ないこの身、」
千壽　生きながらへて詮ないこの身、
南郷　「いつそこの場で」
千壽　いつそこの場で、
南郷　「南無阿彌陀佛」と、刀へ手をかけるのでございます。

千壽　南無阿彌陀佛と、刀へ手をかけるのでござります。

南鄕　あもし〳〵、南無阿彌陀佛までがせりふでござります。

女一　お姫樣よろしうござりますか。

女二　必ず、南無阿彌陀佛をお忘れなされまするな。

千壽　どうやら難しいことぢやわいなう。

南鄕　何であらうと、やつて御覽じませ。

ト音樂の合方になり、辨天出來る、皆々これを見てよろしく思入、千壽姬も思入あつて床几へかけ
る。辨天石段をおりる南鄕側へ行きて、

南鄕　これは〳〵旦那樣、もう御參詣なされましたか、だいぶお早いことでござりました。

辨天　最早參詣もいたしたれば、歸宅仕らう。

南鄕　いえ〳〵、ちよつとお待ち下さりませ。

辨天　身共に待てと申すか。

南鄕　へい、少々あなたにお目にかけたい物がござります故、これへちよつとおかけなされて下さりませ。

ト無理に床几へかけさせ、千壽姫を連れて來て、辨天の下手へかけさせ、

そのお目にかけたいと申すのは、このお方樣でござりまする。

千壽 (俯向いてゐて) 小太郎樣、御機嫌よろしうござりますか。

辨天 (びつくりして) なに拙者を小太郎、私は、そのやうなものではござらぬわいの。

千壽 いえ〳〵お隱し遊ばしまするな、よう聞いて存じてをりますわいな。

辨天 なに、聞いたとは、そんなら駒平、そちが此の身の素性をば、

南鄕 へい、ついしやべりましてござりまする (ト頭をかく、辨天思入あつて)

辨天 聞いたとあれば包んで詮なし、いかにも信田の小太郎ぢやが、浮世を忍ぶ日蔭の身の上、必ずともに人に沙汰ばししたまふな。

南鄕 (いろ〳〵思入あつて、) 扨、旦那樣ちと申し難い儀ではござりまするが、これにおいでの姫君樣は、小山の御息女千壽姫樣、豫々あなたのお許嫁と申すこと、世間晴れての御緣組は、それは公然ござりませうが、今日不思議にお出會ひなされし、盡きぬ御緣のその證據に、どうぞお言葉下さるやう、へい〳〵お願ひ申上げまする。

辨天 だまれ。

南郷（これに構はず、）お姫様の御心ゆかし、又この奴めも男が立ちますれば、

辨天だまれ。

南郷御承知なされて下さりませうならば、ねい〳〵有難う、

辨天えゝ、だまりをらぬか、（トきつといふ。）

南郷ねい。

辨天女中は女中とも思はうが、同じやうに其方までが、たしなみをらうぞ。

女一すりや、どのやうに申しましても、

女二御得心は、

兩人ござりませぬか。

千壽はあゝ、（ト泣落す。）

辨天許嫁はなしたれど、こりや親々が内證事、今この所で言葉交さば双方の親に濟まぬ。今は日蔭の身なれども、一度父の汚名も晴れなば家再興をいたさんと、心を碎くこの小太郎、この儀ばかりは千壽どの、思ひとまつて下さりませ。

トこのせりふの中、南郷、侍女等これぢや〳〵と千壽姫に目配せをする。

千壽　さうぢや、（ト懷劍を出して拔きかけるを皆々びつくりして留め）

侍女　まあ〱お待ちなされませ。

辨天　こりや千壽どのには早まつて、こりや何と召さるゝ。

千壽　さあ、やさしいお言葉なき上は、覺悟はとうから極めてをりますわいなあ。

南鄕　もし〱旦那樣、あなたが何とかおつしやらぬと、直に死ぬとおつしやりまする。

辨天　それぢやといふて、これがどうして、

女一　そんなら姫君を見殺しになされますか。

辨天　さうではなけれど、

侍女　御得心下されまするか。

辨天　さあ、それは、

侍女　見殺しになされまするか。

辨天　さあ、

侍女　さあ、

皆々　さあ〱〱。

千壽　どうぞ死なして下さりませいなあ、（ト又死なうとする。辨天倚儀なき思入にて。）
辨天　むゝ、得心したわいの。
皆々　そんなら、御得心でござりまするか。
辨天　おいなう。
南郷　やれ嬉しや、やつと寢ができたわえ。
　　ト侍女彼方へ思入あつて、
女一　折惡しう地內の參詣、人目を忍ぶ御身故、
女二　先づ不取敢この奧にて、お供申して何かのお話し、
辨天　然らばとも〴〵、
南郷　さあ、ござりませ。
　　ト辨天行きかける。南郷は侍女の二に賴むと侍女の二附いて辨天、千壽姬上手出茶屋の內へ入る。後に皆々ほつと思入あつて、
女一　やれ〳〵奴さん、大きに骨折でござんしたな。
南郷　あれほどに願つてあれば、まんざら他人といふではなし、お言葉位はかゝるであらう。

女三　鬼のゐぬ中洗濯で、此の間にちよつと奥山で、羽を延して來ようかいな。
南鄕　私もこの中ちよんの間で、裏門の酒屋へ行つて、矢大臣と出かけようか。
皆々　そんなら駒平さん、
南鄕　どりや、行て來ませうか。
ト唄、双盤になり、南鄕は下手、侍女皆々はわや〳〵と上手へ入る。と、ばた〳〵になり、上手より十三郎走り出で來り、後より典藏大八及び侍二人追ひかけ出來り、侍の三、十三郎を捉へ、
侍二　やい、素丁稚め、汝やあ面に似合はぬ大盜人だな。
侍一　寶前へ供へたる回向料の百兩を盜みひろいだ晝とんびめ、
十三　そりや何をおつしやりまする、そのやうな覺えはござりませぬ。
典藏　うぬ憎い奴だぞよ、武士たるものを汝や盲目にいたさうと思ふか、汝が盜みをひろいだを見屆けておいたのだ。
十三　それでも覺えはござりませぬ。
大八　さう強情を吐かしをれば、かうして白狀さして見せるわ、（ト十三郎を慘く打つ。）
典藏　大八殿懷中を改めさつしやい。

大八　心得ました。

　ト大八十三郎を引きすゑ、懐へ手を入れる、十三郎懐を押へるを侍の一二、十三郎を引倒す、此の時十三郎の懐より百兩包みばつたりと落ちる。これにて十三郎面目なき思入にて俯向く。

大八　うぬ太い若衆めだ、これほど持つてうせながら、包み隠す横道者め、以後の見せしめ斯うしてくれるわ、（ト十三郎の襟を取り、散々に打つ。）

侍二　そんなことぢやあ腹が癒ぬわ。（ト十三郎を蹴倒す。）

侍一　まだ〳〵腹の癒るやうに、かう〳〵〳〵。

　ト兩人にて酷くふみ倒す、これにて十三郎の着附破れ、身體の痛む思入にてやう〳〵に起上り、

十三　まあ〳〵お待ち下さりませ。何れも樣のお腹の立つは御尤もでござりまする。これにはいろ〳〵樣子のあることでござりまする。斯く盜みをいたしましたも、私慾でないといふ申譯、何をお隠し申しませう、元私も武士の果浪々なして貧苦の世渡り、一人の親が長の煩ひ、この四五日は九死一生、どうぞ命が助けたいと値の高い藥の代、求めようにもてだてはなし、心にもなき貧の盜み。何れも樣、親の命が助けたいばつかり故、お許しなされて下さりませ。（トいろ〳〵詫びても皆々は知らぬ顔をしてゐる、此中十三郎衣類の破れたるを見て、）やゝ、こりや御主人の御紋をば、土足

にかけてござる。(トきつとなる。典藏これを見て、)

典藏　なに、主人の紋附、この雪笹の紋附はまぎれもなき信田の定紋、これを主人と吐かすからは、信田に由縁の浪人だな。

十三　まつたくもつて、

典藏　いゝやさうだ、主人はその身の惡事から家は沒落、其又家來は浪々の活計が無に盗みをひろぐ、主が主なら家來まで、信田に由縁とあるからは、猶以て助けおかれぬ。それへなほれ、うぬ眞二つにいたしてくれん(ト刀の柄へ手をかけるを大八留めて、)

大八　あいや薩摩氏、お待ちなされい、斯く蟲けら同然のものをお手にかけるは刀の穢れ、この場は助けておやりなされい。

典藏　それぢやと申して、憎い奴、

大八　でもござらうが、命を取つて益なき奴、まづ〱お助けなされたがよくござる。

典藏　いゝや、了簡罷りならぬ。

大八　いやさ、拙者も了簡がござれば、まづ〱。それ〱身がお詫言を申すから、早く行け〱。

十三　はい、有難うござりまする。

典藏　いゝや、討果さねば腹か癒ぬわえ。
大八　これはしたり、拙者の計らふ仔細もござれば、
ト典藏を留めて囁く、この以前より沼田幸藏實は忠信利平浪人の打扮にて石段の上へ出かゝりゐて樣子を窺ひゐて、思入あつて又上手へ入る事。
な、それ、まづ〳〵此の場は助けておやりなされたがよからうと存じまする。
典藏　何さま、助け難い奴ながら大八殿の扱ひ、今日は了簡いたすぞ。以後はきつとたしなみをらう。
侍二　然らばお助けなさるとおつしやるか。
侍一　あゝ命冥加な小奴めだ。
大八　まづ薩島氏、唯今のお話しもござれば、この場は見捨てゝお越しなされ。
典藏　いかさま、別當方にて、暫時休息仕らう。
三人　左樣ござらば典藏樣、
典藏　とは言へ、につくき、（ト又立ちかゝらうとするを大八留めて）
大八　はて、お越しなされと申すに、
ト唄になり皆々上手へ入る。十三郎は始終俯向きゐる、こゝへ以前の賴母下手よりつか〳〵と出で、

十三郎の襟上を取り扇にて打ちすゑ、思入あつて、

頼母　こりや、やい十三、唯今これへまゐりかゝり、始終の様子は残らず聞きしが、ありや何の状だ、盗みひろいで金子をば調へる位なら、何しに汝に頼まうや、殊更御主人のお名まで出す憎い奴、こりや汝が恥辱で御主人のお顔を汚す人非人めが。こりや、身にはそぼろを纏へども心は汚さぬ赤星頼母、最早伯父甥の縁も今日限り、言はうやうなき人外めが。

十三　さゝゝ、お腹の立つは御尤もでござりまするが、道ならぬとは知りながら、あなた様の御苦労を見るに忍びず斯のしだら、伯父者人のお耳に入り、面目もなき今日の仕儀、

頼母　えゝくど〳〵申すな、聞く耳ないわえ。

十三　でもござらうが、そこをどうぞ、（ト又縋るを振拂ひ。）

頼母　えゝ言葉交すも穢らしいわえ。

ト唄になり、頼母思入あつて花道へ入る。十三郎ぢつと思入あつて、

十三　もし伯父者人、お許しなされて下さりませ。此の身の科とは言ひながら、浪人なせど侍が土足にかけられ打ち打擲、ぢつと堪ゆるこの身の切なさ、何を言ふにも後室様の御大病、今一應金調へお主の命を取留めねば、伯父者人への言譯立たず、もしも金の出來ぬ時は、死ぬより外に思案

はない。命を捨てゝこの身の潔白、これを思へば譬の通り、金が敵の（ト立上る、この時本釣鐘、櫻の花散る。）世の中ぢやなあ。

ト思入あつて下手へ入る。と、上手より典藏先に侍三人出來りて、

大八　すりや、あれなる出茶屋の内に千壽姫と小太郎めが、

侍二　唯今あの家の裏手より、とくと樣子を見屆けました。

典藏　しかと相違ござらぬか。

侍二　女中も一緒にゐるやうなれど、何でも怪しき樣子でござる。

典藏　いつそ踏込み、樣子を探らん。

兩人　心得ました。

ト侍の一出茶屋の内へ入る、と、直に外へ出て見事に轉る。つゞいて侍の三入ると、忠信利平その腕を捻ぢ上げて内より出る、皆々これを見てびつくりする。

大八　やゝ、二人がゐると思ひのほか、やゝゝゝ。

忠信　いやなに何れも、何遺趣あつてあれなる一間へ、土足で踏ん込みめされた、浪人なせど身共も武士、假令一時半時でも借りた座敷は武士の城、無禮を働く各々方、刀を帶せし役なれば、命は身

共が申し受けたぞ。

皆々　やあゝ。

典藏　して、其許は何れのお方でござるな。

忠信　身共は武藝修行の者、何れが宿りと定めなく、諸國を廻る武者修行、この鎌倉へはる〲と知邊を求め逗留中、保養がてらに初瀬寺へ參詣いたし歸り途、あれなる茶店で休息をいたす所へ不作法千萬、何で狼藉めさるのだ。

四人　さあ、それは、

忠信　但し、御存意あつてのことか。

四人　さあ、それは、

忠信　さあ、

四人　さあ、

皆々　さあ〱〱。

忠信　御返答が承りたい。

典藏　これは〱左樣のお方とはいさゝか存ぜず、あれなる仁が不骨の振舞、武士は相見互ひと申せば

御了簡の下さらば大慶に存じまする。

大八　左樣でござる、貴殿があの座敷においでと存ずれば、何しに斯やうなことを働きませう。

侍二　心得ませぬは我々が不調法、

侍一　何卒唯今のことは此の場限り、御宥免下さらば、

兩人　有難う存じまする。

忠信　いゝや了簡罷りならぬ、身共があれにをらぬ時は、いかゞ召さる御所存だ、後日に至りこの事が朋友どもへ聞えては、劍道修業の身がすたり、此の場の面ばれ眞劍の勝負をこれにて仕らう。

ト刀の柄へ手をかける、侍一、二ぶる〳〵慄へる、典藏大八に囁く、

大八　いやもう何とお詫を申さうやら、殊に拙者どもは、今日は主人の供先、斯樣な間違ひがござりまするとは實に皆扶持の喰ひ上げと申すもの、あはれ御勘辨を以ちまして、まことにはやこれは失禮と申しませうか、失敬と申しませうか、甚だ差つけがましうござれども、此の品を御受納下されて、御勘辨のほどを願ひまする。

ト以前の百兩包みをそつと忠信の袂へ入れる。忠信袂へ手を入れてうまいといふ思入あつたが、

わざときつとなつて、

忠信　いやさお侍、こりやあ何でござる、いやさこりやあ何だ、金錢に目をくれる非義非道な侍ぢやと思はつしやるか、穢らはしいこの金子、きり〳〵持つて行かつせえ。
侍一　恐れ入つた儀でござりますれど、どうかお納め下されて、
侍二　この場のことは御内分に、
大八　お腹立の段は至極御尤もでござるが、情は人の爲ならずとか申せば、御不承の段は此の通り兩腰帶した者が犬つくばひ。
侍一　どうぞ御了簡のほど、
侍二　ひたすら願ひ、
三人　あげまする。（トこれにて忠信心の折れし思入にて、）
忠信　それほどに仰せられるを聞入れぬも、本意でもござるまいかえ。
侍三　へい〳〵、御勘辨を下されまするか。
忠信　了簡ならぬところなれど、何れも方の挨拶といひ、今日のところは了簡の致すでござらう。
大八　それはゝゝ有難い儀で、
三人　ござりまする。

侍二　然らば、それなる金子をば、

忠信　この金子も受けるのではなけれども、何れものお心入り、殊に唯この場を相濟ましては其許達のいゝきぼもたゝぬと申すもの。

三人　仰せの通りでござりまする。

忠信　又、身共が金子を返したとて、受取りもさつしやるまい。

三人　その通りでござりまする。

忠信　不承なれども受納いたす、以後はきつと愼しみめされ。

三人　有難うござりまする。

忠信　あゝ思はぬ事によほどの暇入り、最早夕頃にも相なれば、觀世音へ參詣の仕りませう、(ト立上り、典藏を見て、)そこにござるお侍、此後かやうな事のないやう、若侍に言ひつけさつせえ、どりや參詣いたさうか。

ト唄になり、悠々と石段を上り、皆々へ思入あつてにつたり思入、ちよつと舌を出して、ついと上手へ入る。後に四人思入あつて、

三人　典藏樣、

典藏　いやはや、何のことだか譯が分からぬわえ、これが犬骨折つて鷹とやら、あんまり役が惡過ぎるわえ。
大八　いつでも初手がうま過ぎると、斯ういふ目に遭ふやつだ。
侍二　何でも姫と小太郎に違ひはねえが、
侍一　どうしてあんなけだものと入替つたか。
侍三　但しは迷ひの空目とやらか。
典藏　何を言はつしやる、かういたさう、このまんまほしに別當方にて酒といたさうか。
大八　なるほど、それがよろしうござらう。
兩人　いざ、御同道仕らう。
典藏　さ、お越しなされ、
　　卜唄になり、皆々上手へ入る、と、茶屋の内より辨天、千壽姫、侍女の二と共に出來りて、
女二　お附き申せし私どもまで、あなたのお言葉下さりまして、
千壽　有難う存じまする。
辨天　それにつけても危ふきは、既にそちが家來の者に見咎められるそのところへ、最前の浪人がかう

かうせいと指圖に任せ、危ふい難儀を脱れましたわいの。

千壽　これもやつぱり觀音樣のお助けでがなござりませう。(ト懷中より香合を出して、)この香合は、あなたがいつぞや送られし品なれど、今日の佛事に寶前へ供へしが、心よからぬ典藏が目をかくるとの侍女が知らせ、それ故妾が所持なせば、替らぬ印にこの品は、あなたへお預け申しませう。

辨天　なるほど、私がしつかりと預りませう。

ト香合を受取り懷中する。此時南郷上手より出來りて、

南郷　これは〳〵御兩所樣、これにお渡りなされましたか、最前よりもうお迎ひにまゐらうかと存じましたれど、こちらから急きますもあまり心がござりませぬ故、唯今まで控へてをりました、もう夕景でござりますれば、御歸宅がよろしうござりませう。

辨天　なるほど、最早暮れるに間もあるまい、千壽どのまた逢ひますぞや。

ト行きかくるを千壽姫その袖に縋り留めて、

千壽　許嫁とは言ひながら、當時日陰の御身の上に、又いつ逢ふか知れぬ身の上、道に缺けたることながら、どうぞお慈悲に自らを、一緒にお連れなされて下さりませ。

辨天　これはまた何を申さるゝ、どうしてまあそなたを連れて、

千壽　いえ〳〵お連れなされて下さらずば、やつぱりこゝで死にまする、（ト縋り泣く。）
辨天　これはまた迷惑千萬なことぢや。
女二　あれほどにおつしやること故、もしこのまゝ間違ひでもあつた時は御不爲故、いつそあなたと御一緒に、お連れなされて下さりませ。
辨天　それぢやと申して、
南郷　後は下郎が引受けますれば、さあ、御同道なされませ。
千壽　そんなら行てもだいじないかや。
南郷　悪いと申してどうなるものでござりまする。
辨天　さういふことなら道ならねど、身共が忍び假住居へ、
南郷　障りのない中少しも早く、
千壽　後はそちを頼んだぞや。
女二　直お館へ戻りまする。
辨天　さあ、おじや。（ト思入あつて兩人花道へ入る。南郷殘り思入あつて、）
南郷　今小影から樣子を見るに、情ごかしに浪人が、あの典藏めがしてやつた回向料の百兩を、あのゝ

もの〻とこじつけて強請りとつたるあの浪人、唯者ならぬ面魂、まだ山内にゐる樣子、逢つた上にて何かのことを、む〻さうだ〳〵。

ト上手へ入る。と石段の上より以前の侍女皆出來りて、

女一　先刻よりよほどの間、
女三　あれへまゐつて姫君樣を、（ト出茶屋の障子を明けて、）
女一　や〻、内には姫も小太郎樣もお見えなされませぬ。
女三　なに、見えぬとは、一えん合點が行かぬわいな。
女四　お見えなされぬとあるからは、別當方かお山の内、
女五　私どもが手分けして、
女六　お尋ね申してまゐりませう。
皆々　そんなら左樣いたしませう。
皆々　お姫樣いなう〳〵。

ト侍女の一のほか皆上手へ入る、と石段より典藏始め主膳、左近、大八等出來りて、

典藏　いやなに千原氏、唯今も寳前にて申す如く、供へおいたる胡蝶の香合、まつた回向料の百兩、兩

主膳　樣とも紛失いたして、貴殿には何としようと思はるゝ。別に思案もござらねど、御堂の內にて紛失なせしあの香合、とくと吟味の仕り、尋ね出して申譯の仕る。

左近　まつた回向料の百兩も、預り役は拙者なれば、日ならず詮議仕出して、この身の潔白立てる所存、

大八　こりやとぼけさつしやるな御兩所、唯今あれなる寶前を篤と吟味いたせしに、落散りあつたこの扇子、こりや主膳殿、貴殿の扇でござらうが、（ト主膳の鼻の先へ扇を突きつけろ。）

主膳　いかにも拙者が扇子でござる。（トこれにて典藏思入。）

大八　主膳殿、きり〳〵と白狀さつせえ。

主膳　なに、拙者に白狀しろとは、

大八　とぼけさつしやるな、今日觀音の寶前へは供養讀經終るまで、方丈所化のそのほかは出入を許さぬに、落散りありし貴殿の扇、回向料の百兩も香合の在所も眞直に、こゝで白狀さつしやれば拙者も武士だ、事穩便に濟ましてやるわ、入らざるしらをきらつしやれば、御後見たる三浦家へ申上ぐれば表沙汰、貴殿親子は扶持の喰ひあげ。それのみならず盜賊の罪に行ひ縛り首。いやさこの首が飛びますぞや。何と何れも、人は見かけによらぬものでござる。

侍一　左樣でござる證據をその場へ殘すとは、天の許さぬところでござる。
左近　假令扇があるにもせよ、身に覺えなき金の疑ひ。
主膳　こりや又主膳に遺趣あるものが、香合を奪ひ某を罪に陷さん巧計よな。
典藏　これさ主膳殿、假令お手前が覺えなくとも、あの香合の預り役は貴殿ではござらぬか。紛失せしとばかりにて、言譯が立つと思はつしやるか。
主膳　まつた、左樣では、
大八　又百兩の回向料も、假令盜人に取られうとも、おのれが役目の怠りと申すものだ、御兩所ともに潔白の相立つまで、屋敷へ歸宅は相なりますまい、忠義々々と鼻にかけ、人を見下げる罰があたつて、
侍二　親子揃つて、預りの品を取らるゝうつそりどの、
侍三　屋敷へも歸られぬとは、はて、笑止なことで、
皆々　ござるわえ。

ト　この中主膳、左近無念の動作、侍女皆々氣の毒なる思入。

典藏　いやなに、それにをらるゝ柵どの、今承はれば姬君千壽さまには、かいくれお行方が知れぬ

となる。

女一　どれへおいで遊ばせしかお行方知れませぬ故、心配いたしてをりまする。

典藏　いやさ、知れぬで事が濟まうと思ふか、これといふのもその方どもが一つ穴の狐とやらだ、どこぞの穴へ引きずり込み、人を化かした古狐、これと申すもおのれがなしたる皆所爲だ、この趣を逐一に三浦家へ言上なし、後のお祟り待つてをらうぞ、(トきつといふ。この時、時の鐘鳴る。)ありやもう入相、いやなに何れも、最早歸宅仕らう。

大八　なにさま、それがよろしうござらう。

侍二　拙者ども〻御同伴仕りませう。(ト典藏花道の附際まで行きて、)

典藏　その身の越度と言ひながら、揃ひも揃つたうつそりどの、見れば見るほど慘な狀だ、む〻は〻〻〻。どりや參りませう。

ト四人は花道へ入る。後侍女の一思入あつて、

女一　主膳樣、こりや何といたしたらよろしうござりませう。

主膳　これと申すも皆典藏めが巧みの罠、みす〱それとは知りながら、役目の越度に無念をばぢつと堪へてをつたれど、捨ておき難きは姫の身の上、

女一　それ故にこそ私も太い苦勞をいたしまする。何卒あなたの御思案にて、この場のことの納るやう御賢慮のほど主膳様、お願ひ申上げまする。
主膳　またお話しも仕るでござらうほどに、何かは當寺の方丈方にて、まづそれまでは各々方には、必ず他言は相なりませぬぞ。
女一　心得ましてござりまする。
主膳　何はともあれ、方丈方へ、
女一　左樣なれば主膳樣、お待ち申してをりまする。
　ト合方になり侍女上手へ入る。左近思入あつてつか〳〵と花道へ行くを留めて、
主膳　こりや左近、血相變へて何れへ行く。
左近　さ、この身の越度と言ひながら、武士たるものに惡口雜言、引つとらへて典藏めを。
主膳　心の急くは尤もなれど、身共が思ふ仔細もあれば、急く所ではない、まあ〳〵待つた。
左近　それぢやと申して、
主膳　待てと申さば、まあ〳〵待つた。（トこれにて是非なく立戻り。）
左近　親人さま、してあなたの御思案わな。

主膳　お家を狙ふ佞人ども、この主膳をば罪に陷し、亡きものにせん彼等が巧み、事あらだてなば御家の瑕瑾、もしも香合の出ぬ時は、年老つたれど心は金鐵、惡漢どもを切つて捨て、その言譯は身共が皺腹、

左近　え、

主膳　いやさ、死は一旦にして易しとやら、兎にも角にも香合の詮議、

左近　さはさりながら、惡人が巧みと知りつゝ生けおいては、

主膳　それも身共がこの胸に、

左近　して又この場の納りは、

主膳　方丈方にて萬事竊に、

左近　とはいへ、みすく（ト花道へ思入。）

主膳　はて、參れと申すに、

ト兩人上手へ入る。時の鐘、石段の上より忠信利平出來り思入あつて下へおり、

忠信　こいつあとつぷり暮れたわえ。（ト月出る。）おゝ月が上つたか、晝の花とは事替り又夜櫻は格別だ。この初瀬寺の櫻の盛り、花見がてらにぶらくと、犬も歩けば棒とやら、思はずさつき手に入つ

た回向料のこの百兩、物した物を濡手で粟、かういふうめえ仕事があるから、この生業は止められねえなあ。

ト そろ〳〵行きかける、この時上手より南鄕出來りて、

南鄕　あゝもし、ちよつとお待ち下さりませ。（ト忠信ぎつくり思入。）

忠信　なに、待てとは拙者がことかな。

南鄕　へい、左樣でござりまする。

忠信　何ぞ用ばしござるかな。

南鄕　いえ別儀でもござりませぬが、私めは先刻あなた樣が危ふい難儀をお助け下されました、信田の小太郎が部下でござりますが、そのお禮を申しにまゐりましてござりまする。

忠信　何の〳〵武士たる者は、人の難儀を助けるがこりや兩腰帶せし役目でござる、その禮には及び申さぬ。

南鄕　それに就きまして、ちと折入つてあなた樣にお願ひがござりまする。

忠信　なに、身共に願ひとは、

南鄕　外のことでもござりませぬが、唯今も人を助けるが刀の役目とおつしやりましたが、最前あなた

が取らしやつた回向料のあの百兩、

忠信　や、

南郷　さ、その金が紛失故、小山の家の重役が難儀を受けてをりますれば、どうぞ返してやつて下さりませぬか。

忠信　むゝ、すりや、あの金を返せといふのか。

南郷　左樣でござりまする。

忠信　(思入あつて、)これ、べらぼうなことを吐かすなえ、折角おれが手に入つた此の金を、そんならさうかと直素直に手前にやつてつまるものかえ、これ、おれを通常の浪人だと思つてゐるか、今東海道で隱れのねえ日本駄右衞門が手下だわ。

南郷　なんと、

忠信　こんな仕事は幾度か、然しこの春早々からまとめた仕事もなかつたが、今日が初音の包み金、忠信利平が懷ろへ入つたからは金輪際、取られるものなら取つて見ろ。

南郷　さう盜人としらばけにぶちまけりやあ尙のこと、かう言ひ出してまんざらに、指を啣へちやあ引つこめねえ、おれも唯の奴だと甘口に見られちやあ先祖へ濟まねえ、さあ尋常に渡してしまへ。

忠信　うぬらに渡してなるものかえ。

南郷　いゝや、おれが取つて見せるわ。

忠信　見事汝が、

南郷　おんでもないこと、

兩人　なにを、

ト双方きつとなり、金をかせにいろ〳〵立廻りあつて、南郷は開帳札、忠信は刀を抜き、石段を遣ひ存分に立廻りあつて、南郷石段の上にてぎばをする、忠信は下にて刀をさし附けろ、この時月隠れ、三重模様の鳴物になり兩人だんまり模様の立廻りあつて、トゞ百兩は忠信の手へ入り、忠信つかつかと花道へ行くを、南郷すかし見て、

南郷　どろばうめ、

トこれにて忠信花道へへたろ、南郷は口を押へろ、双方見合つて木の頭、忠信は花道へ入り、南郷は彼方を見込む、この模様よろしく、双盤にて、

ひやうし幕

二幕目

神輿ヶ嶽の場
稻瀨川の場

（淨瑠璃）冥土の旅の道連も、梅の若葉に櫻の莟　春宵色夕闇（淸元連中）

〔役名〕――信田小太郎實は辨天小僧、旅僧實は日本駄右衛門、赤星十三郎、忠信利平、南鄕力丸。小山の息女千壽姬、駄右衛門女房お賤等。〕

（神輿ヶ嶽の場）――本舞臺一面の岩組、中央に古びたる辻堂、所々に杉の立木、總て深山路峠の模樣、山おろしにて幕明く。と後方にて『迷兒の〳〵千壽姬樣やあい』と呼びながら、上手より足輕二人中間二人鉦太鼓をたゝき出來りて、

足一　何とまあとんだ事が起つたものではないか、今日淸水の御佛參からお姬樣のお行方が知れず、そこでおいら達が、勤めのほかにこんな加役、迷惑なものではないか。

足二　聞けばお許嫁の信田の左衛門樣の若殿、小太郎樣と御一緖にお逃げなされたとやらいふ噂。

中一　その小太郞樣といふは、たしか北條光時の謀叛に荷擔をして、今ではお屋敷も召上げられ、御浪人なさるとのこと。

中二　お姫樣も物好な、家もない人と逃げてどうなさる御了簡であらうの。

足一　そこが思案のほかとやら、假令深山の侘住居糸取り機織り賃仕事、柴苅手業も厭やせぬ。

　　ト ちよつと唄ふ。

三人　何を言はつしやる。

足二　然し、いくら尋ねても、たゞの迷兒と違つて駈落者では、そこらにうろついてゐる氣遣ひはなし、雲を攫むやうな搜しものだ。

中一　これにかゝつて内職の草鞋は作れず、他に餘計な宛行は下されず、つまらぬものサノ。

中二　何でも迷兒を搜す手間で、物でも拾はにやあうまらねえ。

　　ト 此中足輕の一そこらを見廻し、落ちてある淨瑠璃觸書を拾ひ取りて、

足一　噂をすれば影とやら、何か落ちてゐたく。

三人　何だなく。

足一　何か書いた物だ。

中二　もし、搜し物の辻占にならうも知らぬ、ちよつとこゝで讀んで見さつしやい。

足一　なるほど、それぢやあ私が讀んで見よう、（ト 觸書を開き、）淨瑠璃名題――、役人替名――、淨瑠璃

太夫淸元——(ト皆々にて替り〴〵に讀みて、)

足一　こりやあてつきり意氣事で、道行といふ筋に違えねえ。

足二　意氣筋だと思ふと、お互ひにむほんを起して散財だ。

中一　その謀叛で思ひ出した、今言つた謀叛の名は何とか言つたの。

中二　ありやあ北條光時さ。

足一　おゝ北條々々、その爲め北條(口上)さやう。

三人　いや、わりい洒落だ。

足一　はゝゝゝ、こんな無駄を言ふ手間で、もう一ぺん尋ねて見よう。

三人　それがいゝ〳〵。

皆々　迷兒の〳〵千壽姬さまやあい〳〵。

ト呼びながら四人は下手へ入る、と花道より前幕の信田小太郞實は辨天小僧頰冠りをなし、千壽姬の手を引かれて出來りて、

辨天　たしかに今の鉦太鼓は、そなたを尋ねる追手の者、見咎められなば一大事、定めし疲れたではあらうが、今に休息さすほどに、少し辛抱してたもや。

千壽　あい、もう歩み習はぬ山路故太う辛うは思へども、愛しいあなたと御一緒故、それが嬉しいばつかりに、さのみにも存じませぬ。
辨天　それほどに思うてくりやるそなたの親切、私こそ嬉しうござるわいの。
千壽　そのお言葉が眞實なら、どうぞ替つて下さりまするな。
辨天　何の替つてよいものぞ、（ト四邊へ思入あつて）然しながらこゝは往來、幸ひ向うに見える辻堂で暫時二人が足休め、
千壽　左樣なれば、あの所へ、
辨天　さ、氣を附けておじや。
　ト兩人舞臺へ來り、辨天は捨石へ腰をかけ、
　もうこゝまで來れば、心遣ひはないほどに、ゆつくりと休息したがよい。
千壽　それはまあ、お嬉しう存じまする、（ト捨石へ腰をかけ）唯今あのやうに申しましたが、私はもうきつうくたびれましたわいな。
辨天　おゝさうであらう、それは私も推量してゐる、今までどこへ出やるにも、駕籠でなければ出ぬこなたが、よしない私故この難儀、どうぞ堪忍してたもや。

千壽　勿體ないことおつしやりませ、あなた故ならどのやうな憂いも辛いも厭はねど、ついぞこれまで繪にも見ぬ物淋しいこの山中、心細うてなりませぬ。早うこのやうな所はまゐりたうござります。

辨天　何の私がゐれば氣遣ひはないほどに、まあゆつくりと休みやいの。

千壽　それでも、何ぞ出やせぬかと思へば、怖うて〳〵なりませぬ。

辨天　おゝほんに、このあたりは猪狼が出るとの事、

千壽　あれえ、（ト辨天へ縋る。）

辨天　これはしたり何をそのやうにおどろくのぢや。

千壽　それぢやというてそのやうなことおつしやる故、猶々怖うてなりませぬ。少しも早くお屋敷へお連れなされて下さりませ。

辨天　なに、身共が屋敷へかな。

千壽　はい、まだよほどござりまするかえ。

辨天　此の身は浪人、屋敷というては、

千壽　それでも假のお住居が、

辨天　さあ、その假の住居といふは、
千壽　何處でござりまする。（トこれにて辨天につゝたりと思入あつて、）
辨天　外でもねえ、此處だ。
千壽　えゝ、（トびつくりする。）
辨天　この辻堂が假住居だ。
千壽　すりや、信田の小太郎様とおつしやつたは、
辨天　僞りだ。おらあ辨天小僧といふ盗人だ。
千壽　えゝゝゝゝ。
　　トびつくりしてどうと倒れ呆れる、辨天は冠りし手拭を取る。
　ふむ、扨は最前の奴どの、あれもこなたの、
辨天　おゝ同類だ。南郷力丸といふやつぱりおれが一つ仲間だ、形の小せえところから小太郎の吹替で
　まんまと化けた喰はせ者、何と膽がつぶれたか。
千壽　（口をしき思入にて、）さういふ巧計と露知らず、日頃こがれた一筋に、戀しい殿御と思ひつめ、誑
　かられしは此の身の過り、それに就けても合點行かぬは千鳥の名笛、小太郎様へ結納の印しに上

けしその品を、こなたが所持してゐやるのは、

辨天　さあ、この笛についちやあ、哀れな話のあることよ。

千壽　なんと言やる。

辨天　忘れもしねえ去年の冬、信州路から甲州へかゝる路にて巡禮が、雪に苦しみ九死一生、不便なことだと介抱して様子を聞けば信田の嫡子、小太郎といふ者だが、所詮病ひのその爲めにこゝで命は終るとも、せめて所持するこの笛を許嫁せし小山家へ、返した上で結納に取交したる胡蝶の香合、それを受取り信田家の菩提所圓覺寺へ納めてくれと言つたが別れ、果敢ない往生。袖振合はすも他生の縁と死骸をその場へ葬つて、それから直に鎌倉へ出かけて今日の此の仕事。おぬしが二世の許嫁小太郎殿の世話をした、おれがお前に出つくはすとは、はて縁といふものは、おつなものだ。

千壽　そんなら眞實の小太郎様は、あのお果なされしとか。何故さういふことなら夢になりとも知らせては下さりませぬ、許嫁も名ばかりにてお顏も見ずに別るゝとは、何たる因果なことぢやぞいなあ。(ト泣伏す。)

辨天　今更いくら歎いても、行つて返らぬ十萬億土、死んだ男は思ひきり、今日からおれが女房になり

やれ。（ト千壽姬の手を取らうとするを、振拂ひて、）

千壽　知らぬ前は是非なけれど、それと知りつゝどうまあこれが、

辨天　そんなら、いやか。

千壽　さあ、それは、

辨天　女房になるか、

千壽　さあ、

兩人　さあ〳〵。

辨天　早く返事を聞かしてくりやれ。（トこれにて千壽姬、術なき思入。）

千壽　どうで穢せしこの身體、その言譯には、いつそこの身を、

辨天　や、

千壽　さうぢや、

ト言ひさま立上るを辨天引留める。千壽姬その手を拂ひつか〳〵と行き、上手の谷へ跳び込む。辨天下を見込んできつと思入。

辨天　やれ、谷へ跳び込んだか、をしいことをしてしまつた。然し、厭だといふのも尤もだ。今言つた

のは出放題、明かして言やあ現在の許嫁した亭主の敵、雪に凍えし巡禮を親切ごかしに介抱なし互ひに話す身の素性、とつくり聞いて締殺し、千鳥の笛をこつちへ捲上げ、それを證據に黄金の香合を騙りとつた今日の仕事、段々命の縮まつた辨天小僧も今日からは、お姫様から下されもので、いゝとつ百年も生き延びられるわえ。

ト思入、この時後の辻堂を明け、中より日本駄右衞門鼠衣、頭巾、首に頭陀袋をかけ、腰に如意をさし、脚袢草鞋旅裝にて窺ひゐる。辨天思はず駄右衞門を見てぎつくり思入。

こりやあだいぶ夜が更けた、どりやそろ〱と出かけよう。(ト行きかけるを駄右衞門思入あつて、)

駄右　あゝいや申し若いお人、ちよつと待つて下され。

ト言ひながら前へ出る、辨天思入あつて、

辨天　待てとは、私がことかえ。

駄右　いかにも左様。どうぞこゝまで來て下され。

辨天　(駄右衞門の傍へ行きて、)見れば旅の修行者殿、さうしておれを呼んだのは、何ぞ用でもあるのかえ。

駄右　はてまあ、その用は後でも分かる。私も宵から辻堂で明かす心で寝て見たが、隙間を洩れる山風

でどうもおち／＼寢つかれず、一人淋しくゐる中に、この寒さが辛いやら何處かの森に女子の泣く聲、

辨天　え、

駄右　さ、若い者でも身にあたるこの寒さ、こゝで焚火をせうほどにゆるりとあたつて行かつしやれ。

辨天　そりやあ折角の思召しを、無にするも何とやら、それぢやあお言葉にあまへて、御馳走になりませう。

駄右　さうさつしやれ／＼。

ト四邊の枯葉を集め頭陀袋より火打を出し枯葉を焚附ける。辨天も下手の捨石へ腰をかけて兩人火にあたり、始終氣味合の思入あつて、

辨天　ときにお修行者、お志のこの焚火でしんそこから暖まりましたが、私やあちつと氣の急くことがありますから、何の用か知らねえが、早く聞かせておくんなせえ。

ト此中駄右衞門は煙草を喫みながら、辨天の顏をぢつと見てゐて、

駄右　まだまあ見ればこなさんは、一向年も行かつしやらぬが、あゝ末頼もしいいゝ肚胸だ。

ト思入、辨天これを聞き少しむつとしたるこなしにて、

辨天 これさ、入らざることを言はねえで、用があるなら早く言やれな。
駄右 その私が用といふは、ちつとこなたに無心がある。
辨天 そりやあ何か知らねえが、身にかなつたことならば、
駄右 聞いて下さるか。
辨天 して、その無心は、
駄右 外でもねえ、おぬしが今日の仕事にかけた黄金で作りし胡蝶の香合、それを私が貰ひたい。
辨天 むゝ、すりや最前からの樣子をば、
駄右 殘らずあそこで聞いてゐた。
辨天 さう知られたら仕方がねえが、坊主相應一文か二文の施しを賴むならしてもやらうが、大それた世にも稀なる胡蝶の香合、これをほしいといふからは、扨は汝も通常の修行者ではねえな。
駄右 知れたことよ、表面は假に佛の姿、心は鬼の世渡りに、聞きやあ脫さぬ地獄耳、無間どころか無慘にも世間知らずの懷子、姫を釣出し小太郎になつた手前が化の皮、剝いで聞かせたその通り、鸚鵡返しに今こゝで坊主と見せた正體を、明かして言やあおれも盜人、今東海道に隱れのねえ日本駄右衞門といふは、おれがことだ。

ト頭巾を取り百日鬘になり尻をぐるりと捲くり、膝の上へ片足上げてきつと思入。

辨天　そんなら噂に聞及んだ、駄右衛門殿とはこなたのことかえ。

駄右　おそらくこの日本はおれが繩張り、大概立派な盜人なら、おれの知らねえ奴はねえ、それに見りやあ中僧だが、どうしてなかく〳〵立派なものだ。かういふ奴のあることはついぞこれまで知らなんだが、さうして手前が名は何といふ。

辨天　私の生れは鎌倉だが、小兒の折から緣あつて岩本院に兒奉公、見なさる通りの性根だから、手習ひなざあそつちのけ、先づ賽錢からくすね出し、それ故島を追出されあつちこつちと居る中に、持つたが病ひの晝捺ぎ、どうやらかうやら本物になつたも元が江ノ島で育つたとこから異名に呼ばれ、誰言ふとなく辨天小僧、名も祖父さんに由緣ある菊之助といふ小僧だが、これを御緣に此の後はお心安くお賴み申します。

駄右　その近附は後でのこと、おれが望みの胡蝶の香合、渡す心か渡さぬ氣か、そのいきさつはどうする積りだ。

辨天　いや、なりません。

駄右　どうしたと、

辨天　さればさ、お前の名を聞かぬ中なら兎も角も、日本駄右衛門といふ名に聞き怯ぢして、恐れてこれを渡したと言はれちやあ、辨天小僧が名のすたり、それだによつてやられねえ。

駄右　おれも亦日本駄右衛門、大人氣ねえが望んだ香合、腕づくでも取らにやおかぬ。

辨天　こりや面白い、相手に取つて不足のねえ、こなたの首をおれが貰ふか、

駄右　その香合をこつちへ取るか。

辨天　二つに一つは、

駄右　首と香合、

辨天　この場へかけて、

駄右　一六勝負の、

辨天　命のやりとり、

駄右　さあ來い小僧、

辨天　合點だ。

ト鳴物になり、辨天一刀を抜き駄右衛門へ切つてかゝる。駄右衛門は腰にさしたる如意にてしつかりと押へる、辨天悔しき思入にていろ〳〵焦るが刀の取れぬ思入。駄右衛門は嘲笑ひながら如意を

取る、辨天はそのまゝどうと倒れ、又直に立上り切つてかゝる。駄右衛門は始終如意にてあしらふ立廻りあつて、トゞ辨天は刀を打落され、それと寄るを駄右衛門如意にて辨天をきつと抑へ、

駄右　さあ小僧、動かれるなら動いて見よ。

　トきつといふ、辨天は口をしき思入にて跳返さうとして敵はぬ思入、どつかりと坐りて、

辨天　殺して下せえ。

駄右　何と、

辨天　さあ、いくら息せい引つぱつても、高いと低いで仕方がねえ、どうで一度は死ぬ身體、一思ひに殺して下せえ。

駄右　いゝや、命は取るめえわえ。

辨天　むゝ、何で命を取らぬとは、

駄右　その替りに手下になれ。（ト辨天思入あつて、）

辨天　むゝ、頭と頼んで不足のねえ、鳴り響いたる駄右衛門殿、いかにも手下になりませう。その印しにはこの香合（ト懐中より箱入りの香合を出し、駄右衛門の前へ置く。）

駄右　いや、我が手下になるからは、手前の働き、貰ふにやあ及ばぬ。

辨天　そんなら、このまゝ、

駄右　その替り、規定の連判、〈ト懷中より袱紗包みの連判狀を出し、頭陀袋より矢立を出し、さら〳〵と名を書き、〉さあ、連判しやれ。

辨天　合點だ。

ト兩人にて連判を左右へ引張り月明りにすかし見る。この見得、迫上げの鳴物になり、段々に迫上がる、よきところまで迫上げたる時裾に附きたる霞幕を切つて落す。と神輿ヶ嶽谷間の體となる。

（谷間の場）――本舞臺正面一面に奥深に谷の岩組、よき所に岩室あり、松の立木、上手に大きなる竹立ちあり、前の方に流れ、總て神輿ヶ嶽谷間の體。こゝに千壽姫氣を失ひ倒れてゐる、山おろしにて道具納り、下手の張物を打返すと、こゝに淸元連中居列び、前彈なしに直に淨瑠璃になる。

〽山の端にいつしか月も木隱れて、暗き谷間は鶯のほう法華經の聲絕えて、紅蓮の氷解けやらぬ八寒地獄に異ならず、

ト時の鐘風の音になり、千壽姫うんと心附き起返り、思入あつて四邊を見廻し、

千壽　おちこちの活計も知らぬ山中へ、覺束なくも呼小鳥、冥土の鳥に誘はれて、寶の言譯女子の操こ

の身を捨てしが、最早こゝは冥土なるか。い、ても何といふところやら、誰ぞに問ひたいものぢやなあ。

〽ほんに思へば姫御前のまだふみも見ぬ戀の道、迷うてこゝへ遠近の冥土の路といふならく奈落の底と三つ瀬川、（ト此中千壽姫死んだといふ思入よろしくあつて、）

〽これは吾妻の稻瀨川、河原へ歸る袖乞が、

ト花道より、非人閻魔の胴六、閻魔の冠をかぶり萠黄地に雲の模様の着附にて目鬘を耳へかけ、三味線を持ち、同じく非人小夜衣お松染返しの半纏に白き手拭を冠り三味線を持ち、赤鬼の打扮に仕立てたる子供を先に立て、新内の二挺三味線打合せを彈きながら出來りて、

子供　おい、今日は貰ひがたんとあつたから、旨え物を奢んねえ。

胴六　よし〳〵承知だ、尾頭附で喰はせるわ。

お松　そりやあいゝが、又呑み過ぎてぶう〳〵は御免だよ。

胴六　べらぼうめ、おれがぶう〳〵より手前の角にも困らせるぜ。

子供　おい、角に困るなら、赤鬼はもう御免だ。

胴六　こいつあ、あやまつた。

子供　さあ、行かうぢやあないか。

〽あぢな閻魔に子まで持ち、丁度三途の川の字に夜の塒をたどり來る。

ト此中三人花道にてよろしく振あつて舞臺へ來る。千壽姫見て、

千壽　おゝよい所へ往來の人、これ、物が問ひたいわいの。

胴六　物が問ひたいとは何だえ。（ト千壽姫胴六の姿を見てびつくりして、）

千壽　あれえ。（ト袖にて顏を隱し慄へゐる。）

胴六　何をそんなにびつくりしなさるのだ、何も怖いものぢやあござりませぬ。小鬼を連れてお門へまゐる御存じの閻魔でござります。

お松　見れば立派なお姬樣、何でこんな所におゐでなさるのだえ。

子供　瘧病か中風病か、べらぼうに慄へてゐなさらあ。

千壽　妾は罪の深い者、どうぞ助けてたもいの。

胴六　惡漢にでも出逢つたのなら、助けて上げまいものでもないが、慄へてゐては譯が分からぬ。

お松　どういふ譯か知らないが、譯をお話しなさいましよ。

千壽　（怖々ながら）さあ、話せば長いことながら、死なねばならぬ事あつて神輿ヶ嶽より身を投げて、

命を捨てし者ぢやわいの。

お松　え〻それぢやあ、お前は死んだのかえ。

千壽　あいなあ。

お松　これ虎やこつちへ來な、あのお姫樣は亡者だとよ。

子供　そいつあ氣味がわりいな。

胴六　これ〱何も怖いことはねえ、(トお松に囁き、)てつきりおらあさうだと思ふが、どうだ。

お松　ほんにそれに違ひない、死んだと思つてゐる故にお前や虎の裝を見て、地獄へ落ちたと思つてゐるのだね。

子供　こいつあ種になりさうだ、一番おどして見ようぢやねえか。

胴六　おもしろい〱(ト閻魔の目鬘をかけ、)やい、姫の罪人それへ出ろ。

千壽　はい、(ト慄へゐる。)

胴六　こ〻をいつたい何處だと思ふ、奈落の底の地獄にて、斯言ふ我は閻魔なるぞ。

トロを明き、きつといふ。

千壽　はい。

子供（鬼の目鬘をかけて、）嘘を吐くと舌を抜く、おいらは地獄の赤鬼だぞ。
千壽　はい、（ト恐れし思入にて、頭を上げお松を見て、）さうしてあなたは、
お松　私は閻魔の女房さ。
胴六　あゝこれ、手前は三途川の婆さんだ。
　　ト　お松に呑込ませると、お松白の手拭を冠り後で結へ、
お松　新宿に出見世のある、三途川の婆アぢやわいの、（ト腰を曲げ老婆の思入。）
千壽　どうぞそなた閻魔樣へ執りなしをしてたもいの。
お松　あい〳〵私が助けて上げやせう。ほんにお前はいゝ日に來た、今日は地獄の月並休み、それで小鬼を供に連れて針の山へ花見に行つたのさ。
胴六　何にしろ、死んで來たら地獄の勝手を知らにやあならねえ。小僧に話させるから、まあ聞きなせえ。
千壽　早う話してたもいなう。
子供　そんなら、私が話すのかえ。
お松　何も後生だ、

胴六 お松　やつたり〳〵。(ト兩人三味線を彈く。)

〽そも〳〵佛の說きたまひし阿鼻焦熱はぐつと野暮、今は地獄も金次第、無常を戀に入相の撞木町の太夫には、經帷子の墨染さへ、血の池から出る仲居達、腰から下は赤前垂、これをば火車といふことは、此の廓よりの慣はしなり、〽言ふを押へて閻魔王、(ト胴六前へ出て、)

〽閻魔さんどつちへ行かしやんす、三途川の婆さんに追出され、地藏さん賴んで詫事に私連れて行かしやんせんかいな。まだ〳〵行つたらお婆が悋氣する、赤鬼青鬼これからりんと秤にかけて見る目嗅ぐ鼻、いちばんしめて笑つて歸るが極樂ぢや、(トこれよりお松前へ出で、)

〽娘はそれとおしへだて、お前の留守に洗濯や羽織の袖の 綻から、言葉を結ぶ名古屋帶、など〽阿古屋の三弦に鬼一と口の端唄にも、

　トお松、胴六振あつて、お松終ひぎはに三味線を遣ひ、直にこれを彈き胴六唄ふ、

〽露は尾花と寢たといふ、尾花は露と寢ぬといふ、あれ寢たといふ寢ぬといふ、

〽口說の床の壁一重、隣ぢや猪口の境論。

〽佐渡と越後はイヨ國向ひ、新潟だつぽん小路の念佛後家が、坊さんくどくに和讃が交る、下ぢや題目長屋ぢや喧嘩、それ取押へろと駈出すお婆、連子に三太が道行、色の世界ぢやな

いかいな。

ト お松振あつて、胴六怖がろ千壽姫を引出し、

〽ほんにお前が地獄へ行けば、閻魔は涎を流し眼に、見る眼かぐ鼻びこつかせ、悟道の地藏さんまだ〳〵、どつこい鬼殺し。

〽鬼と名の附くものにては、神に名高き鬼子母神千人力の鬼夜叉丸、雪踏でぶつたが鬼ヶ嶽居酒に鬼熊鬼藥、看板飛脚の鬼の面、鬼一が三味線とてつるてん、屋根に鬼板天水桶に鬼ほうふらがぴよこ〳〵、角出す悋氣の妻の鬼、出て行け行きます爭ひは、ほんに心の鬼かいな、〽わけもなや。

ト 三人振あつて、時の鐘風の音になり、お松思入あつて、

お松 これさ、いゝ加減にしなさらねえか、化かす〳〵と思つてゐると、いつかこつちが眉毛をよまれ化かされてゐるも知れないよ。

胴六 なに、化かされてゐるとは、

お松 こゝらあたりにお姫樣が何でうろついてゐるものだな、てつきり狐に違ひない。

子供 (千壽姫の帶を見て、)ほんにさう言やあ、二股の尾がだらりと下つてゐるよ。

胴六　それぢやあ、いよ〳〵化かされたか。

〽ぞつと身の毛も忽ちに、歸り支度に取り縋り、

ト胴六、お松氣味の惡き思入にて行かうとするを、千壽姫縋り留めて。

千壽　あゝこれ、極樂へ一緒に連れて行てたもいの。

胴六　どうして〳〵、お前と一緒に行つたら、どんな目に遭ふも知れねえ。

お松　座附がお茶にお萩の御馳走、

子供　蚯蚓の蕎麥はまつぴらだ。

千壽　あれ、そのやうなこと言はずと。

胴六　えゝ、放しなせえといふに、

〽眉毛に唾もそこ〳〵に、三筋かゝへて一筋の道を急ぎて逃行きぬ。

ト三人は上手へ逃げて走り入る。後に千壽姫本意なき思入。

〽かぎりある花に嵐のちりふりも、一人はをしき燕子花、

ト時の鐘になり、花道より赤星十三郎しほれながら出來りて。

〽染めぬ色香の紫もさめて悔しき夢の世や、浮世の義理のしがらみに留め兼ねたる花小舟

流れ慕うて來りける。（ト振あつて舞臺へ來り、思入あつて、）

十三　幸ひのこの谷川、むゝさうぢや。（ト死なうといふ思入、千壽姫側へ來りて、）

千壽　あもし、ちと物が尋ねたいわいな。

十三　はて心得ぬ、かゝる夜更に女子の聲、して又私に尋ねたいとは、

千壽　こゝは冥土の何といふところか、教へてたもいの。

十三　なに、冥土とは何のこと、こゝは鎌倉大佛越御輿ヶ嶽の下道にて、稲瀬川の川端ぢやわいの。

千壽　えゝ、そんならやつぱり鎌倉とか、えゝ女子の操に身を捨てゝ、死んだとばかり思ひしが、稲瀬川とあるからは、蘇生りしか、情ない。

十三　むゝ、扨は御身も世の義理に、死ぬるお方であつたるか、はて似たことも、

千壽　はて似たことゝは、もしやお前も、

十三　死ぬる覺悟を極めし者、

千壽　それは幸ひ、よい道連、

十三　してまああなたは、どういふ譯で、

千壽　さあ、死なねばならぬその譯は、

〽今更何と岩橋の許嫁せし小太郎樣、契り待つ間も葛城の神ならぬ身は一筋に、祈る祇園のお守りに結べど緣の我夫と、樂しむ甲斐も情なや、比翼の蝶の印さへ、よそにもがれし片翅死なせてたべと縋りつく袖も露けき風情なり。

ト千壽姬よろしくクドキ模樣の振あつて十三郞に縋る。

十三　扨はあなたは小太郞樣と、お許嫁遊ばせし小山の姬君、千壽樣でございましたか。

千壽　えゝ、我名を知つたそなたは何者、

十三　何をか隱さん、元私は信田の家來赤星十三と申す者。

千壽　すりや小太郞樣の御家來とな、

十三　如何にも左樣にござりまする。

千壽　してまあ汝は何故に、

十三　さあ、この十三が死ぬ譯は、

〽問はれて何と許嫁も、あの山梔の花ならで、お主の爲めとは言ひながら黃金色なる山吹の枝に屆かぬ思ひから、世を卯の花の白波と名を立てられし申譯、

死ぬる今際にお主の御息女の、御目にかゝるも一つの不思議、

千壽　これも結ばる緣でがな、死ぬる覺悟とあるからは、一緒に死んでたもいの。
十三　とは言へ若い身の上に、一つに死なば心中と浮世の人の口の端に、
千壽　かゝりやつながる主從二人、
十三　とはいへ蕾の姫君樣、
千壽　散り果つる身の果敢なさは、
十三　思へば夢の、
兩人　浮世ぢやなあ。
ト兩人よろしく泣落す、此中千壽姫十三郞の刀を拔きて、
千壽　南無阿彌陀佛、
〽互ひに若木の桃櫻、連理にあらぬ姫桃は、夜半の嵐に散りにけり。
ト千壽姫は自害して落入る、十三郞は合掌なし愁ひの思入、これにて淨瑠璃臺を消す。
十三　斯く御先途を見し上は、いはゞ繫がるお主の姫君、このまゝおかば往來の人目、この亡骸はこれなる流れへ（ト屍を流れの中へ入れ、）南無阿彌陀佛々々。繰言ながら盡未來、あの世も變らぬお主樣、死出のお供を、おゝさうぢや、

ト落散りありし刀を取り、腹へ突きたてようとする。この以前より前幕の忠僧利平窺ひゐて此の時立出で、十三郎の手を押へて、

忠信　あゝこれ待つた、待たつしやい。

十三　いえ〳〵死なねばならぬ者、どうぞ放して下さりませ。

忠信　いゝや放さぬ、待たつしやい。

十三　それぢやというて、

忠信　はて、待てと言はゞまあ〳〵待たつしやい。（ト十三をよろしく留めて、）この結構な世を捨てゝ死なうと覺悟さつしやるには、切ない事情もござりませうが、若い者は相見互ひ、知らぬ前は仕方もないが眼にかゝつたら殺しませぬ。どういふ譯か一通り私に聞かして下さりませ。死なずと事が濟むならば、及ばずながら力になりお世話をして進ぜませう、心を落着けこれ若い人、事情を聞かして下さりませ。

十三　何處のお方か存じませぬが、御親切なるお言葉に、包み隱さず身の上をお話し申さん、一通りお聞きなされて下さりませ。元私は信田の家來、お主は讒者のその爲めにお命捨てられ、お家は斷絶、たゞお痛しきは後室樣、それを氣病に御大病、値の高い良藥故心ならずも百兩の金がほ

しさに初瀬寺で、道ならぬ盗みをなし、この身ばかりかお主にまで御恥辱與へし罪科に、一人の伯父には緣を切られ、生きてゐられず言譯に死なうと覺悟極めし者、御推量なされて下さりませ。

忠信　むう、そんなら信田家の御家來とか、私も以前は緣ある御家、して又お前の名は何と、

十三　赤星主膳が倅にて、十三郎と申す者。

忠信　（びつくりして）え、赤星樣の御子息とか、知らぬことゝてまづ〳〵（ト十三郎を上手へなほして）さう聞く上は猶のこと、お命助けにやなりませぬ。

十三　合點の行かぬその言葉、我を敬ふ其方は、

忠信　私ことはその以前大旦那樣へ御奉公なし、お納戸金を二百兩持逃げなしたる若黨の、傳藏が倅でござりまする。

十三　すりや、噂に聞き及びし、そなたは若黨傳藏が倅であつたか。

忠信　若旦那樣でござりましたか。

十三　思ひがけない對面も、

忠信　あなたのお命留めよと、

十三　この世を去りし親達の、

忠信　導なるか。
兩人　これはしたり。（ト兩人思入。）
十三　そちに逢つたは我が仕合せ、死ぬるこの身の言譯を、伯父者人まで傳へてくりやれ。
忠信　えゝつまらぬことをおつしやりませ、現在故主の若旦那を、どう見殺しになりますものか。
十三　でも大まいの百兩なければ、死なねばならぬ。
忠信　金づくならばお案じなさるな、百や二百はおろかな事、假令千が二千でも、私があなたへ差上げませう。
十三　え、その方が、
忠信　不奉公せし親父の言譯、まづさしあたりその百兩、（ト懷ろから前幕の百兩を出し、）さあ、お受取り下さりませ。
十三　（取つて嬉しき思入にて、）人蔘代のこの百兩、我手に入りしも汝が働き、えゝ忝ない。
忠信　まだお入用ならいかほどでも、私がお貢ぎ申しますから、死ぬのは止めて下さりませ。
十三　おゝ、死なうとせしも元は金、手にさへ入れば死ぬには及ばぬ（ト前の流れへ思入あつて、）とはいへ小山の姫君が自殺なしたる上からは、冥土のお供いたさうと、約せし言葉が反故となる。

忠信　假令約束なされたとて、負ぶつた子より抱いた子のお主の命を取りとめる人蔘代のその百兩、お持ちなされて藥を求め、忠義をたてたその上で死ぬのはいつでも死なれます、惡い心をお出しなさるな。

十三　いかにもそちの言ふ通り、一先命ながらへてお主の病氣平癒なす、藥の代のこの百兩、少しも早く持參なさん。なれども心得ぬはそちの身元、多くの金を所持なす仔細は、

忠信　持つてゐるのは生業がら、晝は百の錢がなくても、夜に入れば百や二百は直に金が手に入りまする。

十三　してまあそなたの生業は、

忠信　さあ、私が生業でござりますか、

十三　その生業は、

忠信　ちと申し難うござりまするが、盗人でござります。

十三　えゝ。

忠信　そのおどろきは御尤も、お聞き下され若旦那、親父が氣性を受けついで、生れだちから手癖が惡く、何處へ年季にやられても半年經たず追出され、十の年から十四まで二三十軒歩きまして、流

石の親父も持てあまし、とう〳〵終ひは勘當され、それから先は流れ次第、東海道をごろついて今では世間に名の高い日本駄右衛門が子分になり、多くの中でも五本の指に折らるゝほどになりまして、忠信利平と申します。

十三　むゝすりや、かね〴〵噂に聞く日本駄右衛門が仲間とか。さう聞く上は、この金も、

忠信　さあ、その百兩は今日初瀬で、小山の家中典藏から騙りとつたる回向料、

十三　え、すりやこの金は回向料とな、さすれば私が初瀬寺で盗み損ぜし金であつたか。

忠信　へえゝ、それぢやあなたも内職に、盗賊をなさいますか。

十三　お主の爲め藥の代の出來心に、盗み取りしも見咎められ、望みもかなはぬそれ故に死なうとなしたをとゞめられ、廻り〳〵てその金が、我手に入るも不思議の一つ。

忠信　不思議どころかかうも亦、順よく金が廻るものか、何のことはねえ芝居のやうだ。

ト これにて十三郎思入あつて、

十三　いやなに利平、そなたに私が折入つて頼みがあるが、聞いてくれるか。

忠信　そりや身にかなつたことならば、

十三　假令どのやうな頼みでも、

忠信　聞かいで何といたしませう。
十三　そちへ頼みはほかでもない、今日から私を盗人の仲間へどうぞ入れてくりやれ。
忠信　え、そりや又何故、
十三　一旦この身も初瀬寺で、盗人の名を取つたれば、これから事實の賊となり、貧苦に迫るお主の難儀、救ひたいのが此の身の願ひ。
忠信　ではござりませうが、あなたをどうも、
十三　何の遠慮に及ばうぞ、盗みし金を遣ふ上は、假令仲間へ入らずとも、科は脱れぬこの十三、お主の爲めには切取強盗、こりや武士の慣ひぢやわ、（トきつといふ。）
忠信　さうお心がすわつたら、所詮留めても留らつしやるまい。いかにもお世話いたしませう。
十三　そんならこれからそなたと共に、
忠信　日本駄右衛門が手下となり、
十三　その名も直に赤星十三。
忠信　左様ならば若旦那、
十三　あこれ、今日からしては同じ仲間。

忠信　そんなら赤星、

十三　忠信、

忠信　ゆるりと話しを、

兩人　いたしませう。

ト、この時ばつたり音する、兩人思入あつて四邊を窺ふ。時の鐘、山おろしになり、上手の所へ奴駒平の裝の南郷力丸現はれ、竹に縋りて斜に舞臺中央へ落ちる。これにて兩人飛退き、十三は金を懷へしつかりと入れ、忠信は尻を端折る、南郷探り寄り十三の懷へ手を入れ、忠信南郷の腰へ手をかける、十三南郷を振拂ふとたぢ／＼と引かれ、南郷忠信を振拂ひてちよつと立廻り、三方へ別れてきつと見得。だんまりの鳴物になり三人探り合ひの立廻りよろしくあつて、よきほどに中央の岩穴より以前の辨天小僧出で、これと同時に上手杉の間より、非人お松小田原提灯を袖にて隱し窺ひ出て、南郷と忠信との間へ差出す、これにて兩人顏を見合せ、双方より提灯を打落し、五人絡んで立廻り、辨天の懷より袱紗包の香合、十三の懷より袱紗包の百兩の包を引出し、これをかせに五人よろしく立廻り、トゞ辨天の信田の小太郎の裝すつぽりと脫げて世話裝になり、十三へ香合、辨天へ金包みの手に入ることゝなり、十三は花道、辨天は東の假花道へ脫れ行く。舞臺にては上手に南郷刀を拔きかけるを、お松留める、とそれを振拂つて刀を拔き足を踏み出す、忠信はお松を引附け頭を探り引廻してきつと留める、これを見合つて木の頭、十三、辨天はほつと思入、舞臺の三人は引張りの見得に

て、山おろしカケリにて、ひやうし幕。と幕引附けると十三、辨天袱紗包みをすかし見て、

十三　や、こりやこれ香合、

辨天　小判の包み、（ト兩人とも取つて返さうとの思入あつて、）

兩人　まゝよ。

ト懷中なしきつとなる。唄入りの鳴物にて兩人花道へ入る。後シヤギリ。

三幕目

雪ノ下濱松屋の場
同　奧座敷の場。

〔役名――日本駄右衞門、濱松屋幸兵衞、南郷力丸、早瀬の息女お浪實は辨天小僧、幸兵衞倅宗之助番頭與九郎、手下、丁稚等。〕

（濱松屋の場）――本舞臺四間通し平舞臺、正面中央に立三引の紋附し紺の長暖簾、上下に反物、帶地を積みし呉服店、下小裁を入れし簞笥、欄間に小形の着物、萬引用心といふ貼札、上の方に呉服太物現金懸値なし濱松屋幸兵衞といふ黑札、いつもの所門口、紺の暖簾をかけあり、下手後へ下げて土藏、用水桶、總て雪の下濱松屋呉服店の體。こゝに手代の與九郎、佐兵衞、太介等三人着流し前垂掛

にて硯箱を控へ、此の前に仕出し○、道具屋市郎兵衛買物をしてゐる。下手に格子で圍ひし茶番所、唐銅の茶釜、筒茶碗など飾り、鳶の宿龜の子清次立つて煙草を呑みゐる。小僧三人呼びかけゐる。この模様でんつゝ角兵衛獅子にて幕明く。

小僧　おわい〳〵おわい〳〵。

與九　判取、

小一　はい――（ト奥へ入り、賣上を持つて來る。）

佐兵　三分二朱で二匁五分のお剰錢でござります。

市郎　あい〳〵、大きにお世話でござりました、（ト反物を風呂敷へ包む。）

○　もし急ぎます、早くして下さりませ。

佐兵　はい、唯今御覽に入れます。小僧よ、

小二　はあゝ。

清次　もし太介さん、わつちが羽織はまだ出來ませんか。

太介　もう仕立へ廻しておいたから、明日までにはきつとできよう。

清次　そいつあ有難え、明後日與助さんのお番で芝居から廓へ行くから、ちつとめかして行かにやあな

らねえ。

與九　めかして行くはいゝけれど、三日も四日も流連をして、頭をしくじらねえやうにするがいゝ。

清次　なに、この春で懲り〳〵しやした。

ト此中花道より日本駄右衛門の手下着流し尻端折りにて出來り、門口へ入りて、

手下　はい、御免なせえ。

佐兵　これはいらつしやりませ。

手下　ときに、番頭どうしてくれるのだ、この間誂へた五枚の小袖、まだ染が出來ねえのかえ。

佐兵　いえもう染は上りましたが、お仕立がまだできませぬ。

手下　まだ出來ませぬぢやあ濟むめえぢやあねえか、今日で幾日來ると思ふ。

佐兵　つい〳〵お天氣工合が惡いのに、友禪入りの模樣故急に染が上りませぬので、大きに遲なはりましてございります。太介どん、夕方までにはできる積りだの。

太介　左樣でございりまする、先刻仕立屋がまゐりまして、五つ過ぎには持つてまゐると言ひました。

佐兵　お聞きなさる通りでございります故、どうぞ夕方までお待ちなされて下さりませ。

手下　そりやあ待てなら待ちもせうが、こんなに長くならねえやう、前金に拂つておいたのだ。

佐兵　御尤もでございますが、どうぞ夕方までお待ち下さりませ。
與九　どちら樣でございますか、こちらから持たして上げませう。
手下　なに、持つて來るにやあ及ばねえ。
佐兵　そんなら二階で、夕方まで一口召上つてお待ち下さりませ。
手下　有難うございりやすが、白雲頭の小僧の酌で、鐵ツくせえ銚子の酒は眞平だ。
小一　えゝ眞平もよく出來た、此間來た時に、ぐでん〳〵に醉つた癖に、
佐兵　えゝやかましい靜にしねえか。
手下　それぢやあ番頭晩に來るよ。
與九　左樣なされて下さりませ。
手下　どれ、芋酒屋で一ぱいやつて行かうか。（ト下手へ入る。）
清次　もし佐兵衞さん、今の若え者は何だね。
佐兵　なんだか知らぬが、祭禮に着るとて派出な着物を誂へました。
太介　今時分の祭禮では、何處の祭りであらう。
與九　大方初瀨の三社樣だらう。

清次　打扮から言方は遊び人に違えねえが、何だかきよろ〳〵見廻して眼光の悪い野郎だ。どれ、奥へ行つて、鐵ツくせえのでもやつて來ようか。

ト鳶の者清次奥へ入る。と花道より駄右衛門羽織袴大小にて若黨作平、中間を伴ひ出來りて、

駄右　こりや作平、濱松屋と申すは向うの店ぢやの。

作平　左樣にござります、近年の仕出しにござりますが、殊のほか繁昌いたしまする。

駄右　いかさま、左樣相見ゆる。

作平　御進物の品々は、あれにてお求め遊ばしますか。

駄右　されば、何か珍らしき品もあらうかと存じて、

作平　左樣なら、御案内いたしませう、（ト門口へ來り、）頼まう。

與九　はあ、これは〳〵（ト飛んで出で、）まづ〳〵これへお通り遊ばしませ。

駄右　許しやれ。

與九　こりや、茶番よく〳〵。

小僧　はあゝ（ト茶を汲み來り、駄右衛門に出す。）

與九　今日はよう快晴いたしましてござりまする。

駄右　さればうらゝかなことでござるなう。

ト袖煙草入を出す。若黨・中間は下手に控へてゐて、茶を呑みながら、

作平　これ、でこ平、これが酒だといゝな。

中間　そんなことを言つて下さるな、咽がぐびぐびするわ。

與九　今に旦那樣がお買物をなさると、供方へも酒が出るわ。

作平　そいつあ有難い。

與九　御註文の品は、何品でござりますな。

駄右　北條家への進物ぢやが、繻珍、緞子の類、織物を見せてくりやれ。

與九　畏まりましてござりまする。これ佐兵衞どん、御苦勞ながら繻珍、錦、緞子の類を、奥藏へ行つて持つて來い。

佐兵　畏まりました。太介どん賴みます。

ト佐兵衞は奥へ入る。仕出し捨ゼリフにて太介を相手にわやわやといふ、小僧は呼立てる。

駄右　いや、殊のほか繁昌なことぢやな。

與九　いえも有難いことに、諸方樣のお引立を蒙りまして、人の途斷れがござりませぬ。

ト奥より濱松屋の亭主幸兵衛羽織にて出來り、後より佐兵衞卷物を持ち出來る。

幸兵　これは〳〵、ようい
らせられましてござります。

駄右　おゝ、してその方は、

幸兵　此家の主人幸兵衞めにござりまする。

駄右　左樣であつたか。

幸兵　毎度御贔屓とござりまして、御用向を仰せ聞けられ、有難い仕合せでござりまする。新店の儀にござりますれば、何分お引立をお願ひ申しまする。

駄右　手前屋敷などでも評判故、これまでの出入もあれど、北條家への進物に珍らしき品もあらうかとその方店へまゐつたのぢや。

幸兵　それは有難い仕合せにござりまする。

與九　御註文の品を御覽に入れませう。

佐兵　生憎お屋敷方へ今朝ほど出ましても、

幸兵　いや〳〵その品は常の織物、珍らしい品と仰せられますれば、御意に入る品があるまい。幸ひ京都より着きました品がござりますれば、唯今取出し御覽に入れませう。

駄右　誂へ織りとあるからは、定めて高價な品であらうが、値は何程でも苦しうない、珍しいのが所望なるぞ。

幸兵　畏りましてござりまする。こりや〳〵太介、昨日着いた新荷を解き、繻珍を持つて來やれ。

太介　畏りました。（ト奥へ入る。）

幸兵　然し、少々手間どりますれば、こゝは端近、奥の間で暫くお待ち下さりませ、お茶を一服差上げたうござりまする。

駄右　いや、その心配には及ばぬこと、やはりこれにて苦しうない。

幸兵　ではござりませうが、雜沓ひますれば、ひらにどうか奥の間へ、

駄右　いかさま、雜沓中にをるも邪魔、然らば其方が言葉に任せ、奥で相待ち申すであらう。

幸兵　左樣なされて下さりませ。

駄右　こりや〳〵、その方ども、店の邪魔にならぬやう、片寄つて待つてゐやれ。

二人　へい〳〵、畏りました。

奥九　いや、お前樣方は勝手へ行つて一口上つて下さりませ。

二人　そりやあ有難うござりまする。

駄右　然らば御亭主。

幸兵　かうおいでなされませ。（ト先に立ち駄右衞門附添ひ奥へ入る。）

市郎　ときに、私の書附はまだでござりますか。

佐兵　はつ、唯今差上げます、判取イ。

小僧　はあ〳〵（ト賣上を持つて來る。）

佐兵　これはお待遠樣でござりました。

市郎　いや、呉服屋は長いので困る。（ト下手へ入る、佐兵衞送り出て、）

佐兵　よういらつしやりました。何だ呉服屋は困るもよくできた、半襟一掛に絞り木綿が二尺五寸、僅五匁か六匁で茶を五六ぱいに、煙草をば何服喫んだか知れはしねえ、そつちよりこつちで困るわ。

與九　ちつと目覺しに、美しいト一な代物でも來ればよい。

ト唄になり、花道より辨天小僧高髷の島田、振袖屋敷娘の打扮にて、南郷力丸侍の打扮にて附添ひ出來りて、

辨天　これ四十八、濱松屋といふのは何處ぢやぞいの。

南郷　つい向うに見えます呉服屋でござります。

辨天　婚禮の仕度ぢやといふことは、必ず言うてたもんなや。
南郷　申してもよいではござりませぬか。
辨天　それでも私や耻しいわいな。
南郷　言うて惡くば申しますまい。（ト門口へ來りて、）さあお孃樣お入りなさりませ。
辨天　そなた先へ入りやいの。
南郷　左樣ならば御免なさりませ。（ト内へ入る、此時佐兵衞奥より出來りて、）
佐兵　これはいらつしやいませ。
太介　ささ、これへ〳〵。
與九　いえ、私方へいらつしやいませ。（ト佐兵衞と太介の間へ割つて入る。）
佐兵　これはト一お孃樣、これへいらつしやいませ〳〵。
太介　いえ〳〵こちらへ、
與九　いやこちらへ、
南郷　あこれ、靜にして下され、氣逆せがするわえ。
與九　はつ〳〵、二人とも靜にせぬか。ても扨も美しい、いや美しい模樣物が澤山仕入れてござります

れば、まづ〳〵これへ。
三人　お通りなされませ。
南郷　さあお孃樣、お上りなされませ。
辨天　上つても大事ないかや。
南郷　よろしうございますとも。これ、履物を賴むぞ。
小僧　畏まりました。
　　ト辨天、南郷よきところへ住ふ。
與九　扨、今日はよいお天氣でございます。こりや茶番よ〳〵。
小僧　はあゝ、（ト茶を汲み持つて來て兩人へ出す。）
佐兵　たうとう自分の方へ引込んでしまつた（ト太介と共によい娘だといふ思入にて辨天に見惚れてゐる。）
與九　して、何を御覽に入れませうな。
南郷　京染のお振袖に毛織錦の帶地の類、又お襦袢になる緋縮緬緋鹿子などを見せて下さい。
與九　畏りましてございます。こりや三保松よ、京染の模樣物、毛織錦の巻物に、緋縮緬、緋鹿子を
〳〵　持つて來い。

小僧　はあゝ（ト奧へ入る。）
與九　唯今御覽に入れまする。（ト思入あつて、）だいぶ芝居が入りますさうにございますが、お孃樣には御見物遊ばしましたでございませうな。
辨天　はい、此間二丁目（市村座）へまゐりましたわいな。
與九　へい、左樣でござりまするか。定めてお孃樣の御贔屓は、當時若手の賣出し羽左衞門でござりませうな。
辨天　いえ〳〵私は羽左衞門は大嫌ひぢやわいなあ。
與九　それでは、權十郎か粂三郎でござりますか。
辨天　いゝえ。
與九　いや、芝翫でござりまするか、
辨天　あい（ト耻しき思入。）
與九　いや芝翫を御贔屓なら御油斷なされますな。當時の人氣者でござりますから、あつちからもこつちからもひつぱり凧でござります。
南郷　そりやお番頭大嘘だ、あんな眞面目な男はない、先づ第一酒が嫌ひ、女が嫌ひ、勝負事が嫌ひ、

とりわけせりふを覺えるのが嫌ひだ。

辨天　えゝ、そのやうな憎まれ口をきいて、

ト南郷を打つ眞似をする、與九郎始終辨天小僧に見惚れゐる思入。

與九　これはよほど御贔屓と見えまする。

南郷　こなたは芝居は好きさうだが、誰が役者は贔屓だな。

與九　へい、私の贔屓は片岡十藏でござりまする。

辨天　おやまあいやな、(ト笑ふ。)

南郷　さう言へば番頭どのは十藏に生寫しだ。

與九　誰彼と申しても、當時三丁町の役者で十藏が一でござります。

南郷　はあゝ、そんなに藝が上手かな。

與九　いえ、藝ではござりませぬ、脊丈の高いのでござりまする。

南郷　なるほど、こりやあ三丁一だ、はゝゝゝゝ。

ト小僧紙附の模様物、卷物の帶地小葛籠へ入れし緋鹿子、緋縮緬の布地を持ち出來る。

與九　大きにお待たせ申しました、(ト品物を列べ、)これ小僧よ、灯りを持つて來ぬか。

小僧　はあ〳〵（ト朝顏附の燭臺を持つて來る。）
辨天　これ四十八、鹿の子はどちらがよからうぞいの。
南鄕　どちらでも、あなた樣の御意に入つたのになされませ。
辨天　そんなら麻の葉の方にしようわいの。
南鄕　模樣物は御婚禮故、目出度いものがよろしうござりまする。
與九　へ〳〵え、御婚禮のお支度でござりますか。
辨天　あこれ、言やるなと言うたのに、（ト耻しき思入。）
南鄕　へい、うつかりと申しました。
　　ト此中與九郎こつそりと見惚れてゐる故。
佐兵　これ與九郎殿、涎がたれるわ。
與九　なんで涎が、
佐兵　見なせえ、緋鹿子はしみだらけだ。
　　ト此中辨天小僧四邊へ思入あつて、見物に見えるやうに緋鹿子の布を懷へ入れる。與九郎これを見てびつくりする、佐兵衞も太介に囁く、辨天と南鄕は知らぬ顏にて捨ゼリフにて模樣物を見てゐる、太

介は奥へ入り、鳶の者清次を引張り出來りて、

清次　もし、萬引をした奴はどれでござりまする。

佐兵　あこれ、靜にしなせえ。（ト囁く。南郷思入あつて、）

南郷　模樣物は此の二つと、帶地は毛織錦と、以上三本緋鹿子に緋縮緬、しめて値段は何程なるか、勘定をしておいてくりやれ。八幡樣へ參詣なし、歸りに寄つて持つてまゐる。

與九　畏まりましてござりまする。

南郷　さあお孃樣、暮れぬ中にお詣り申しませう。

辨天　あい、さうしませうわいの。

南郷　これは大きにお世話であつた。

ト兩人立上り行かうとするを、此の時清次、佐兵衞、太介立ち塞がる、奥より以前の若黨中間等出來る。

佐兵 太介　もし、ちよつとお待ち下さりませ。

南郷　何ぞ用か。

與九　御常談をなされますな。

南鄕　なに、常談とは、

與九　お隱しなされた緋鹿の子を、置いておいでなさりませ。

兩人　え、(ト顏を見合せ、ぎつくり思入。)

清次　いや、文金島田のお孃さんが、萬引をしようとは氣が附かねえ。

佐兵　頭、油斷のならねえ世界だね。

南鄕　なに、お孃樣が萬引をした、當て事のない粗相を申し、後で後悔いたしをるな。

　トきつといふ、辨天は南鄕に縋り震へてゐる。

與九　年中商賣をいたしてをりますれば、ちらりと見たら間違ひはござりませぬ。

佐兵　たつて知らぬと言ひなさりやあ、裸にして詮議をする。

太介　さうされたらばものがない、痛い目せぬ中出さつしやい。

清次　もう逃げようとつて逃がしやあしねえ、まあ下にゐねえ。えゝ下にゐやあがれ。

　ト南鄕の肩をとつて坐らせる。辨天おろ／＼として、

辨天　これ四十八、こりやどうしたらよからうわいの。

南鄕　いや、何もお案じなさることはござりませぬ。お孃樣を萬引なぞと惡名附けし憎い奴等、明りが

立たねば歸られませぬ。さあ落着いておいでなさりませ。
與九　なに、明りを立てねば歸られぬ。よくもそんなことが言はれたことだ。
南郷　して萬引をいたせしとは、
與九　四の五のいふは面倒だ。
トつか〳〵と行き辨天を捉へろ、辨天あれえといふを、無理に懷より緋鹿の子を引出し、
これ、この布は何處から持つて來たのだ。
清次　以後の見せしめ二人とも、袋だたきにしてやらう。
佐平　いや、しめるとは面白い、
中間　おいら達も彌次馬だ。
清次　構ふことはねえ、
皆々　しめろ〳〵。
ト太神樂の鳴物になり、皆々二尺差、暖簾掛の棒などにて兩人を打つ、南郷は辨天を庇ひ、皆々を留めるごつちやの立廻り、これにて島田髷くづれる。此の時辨天の額へ疵附きて、『あいたゝゝゝゝ』とそのまゝ俯向けになりゐる。と花道より濱松屋の息子宗之助出來り、直に内へ入り、皆々を留めて、

宗之　これはしたり、どうしたものだ。店頭で立騒ぎ、靜にしたがよいわいの。
與九　いえ若旦那お構ひなさるな、こいつらは萬引でござりまする。
宗之　なに、この衆は萬引とか、して何を盜まれたのぢや。
與九　緋鹿の子の布を盜みました。
清次　それで私がたゝきしめたのさ。
南鄕　やあ、身に覺えなき萬引呼ばはり、盜んだといふはこの布か。
與九　知れたことさ。
南鄕　そりやあ山形家で買つた布、符丁があるからとつくり見やれ。
與九　おゝ見なくつてどうするものだ（ト見てびつくりし）やあ、丸の内に山の字は、こりや山形家の符牒の印し、
佐兵　そりやア萬引と思つたのは、
太介　他所の代物であつたのか。
三人　やあ。（ト皆々びつくりする、南鄕懷から賣上を出し）
南鄕　番頭、この賣上を見やれ。

與九　へい〳〵。（ト取つて見る。）

南鄕　山形屋で買つた證據の賣上、これでも萬引と言ひかけするか。

與九　さあ、それは、

南鄕　よもや萬引とは言はれまい。

ト皆々ひよんなことをしたといふ思入、淸次は騙りだといふこなし、若黨と中間は囁き合つて下手へ入る。

宗之　私はこの家の伜、唯今お得意より歸りがけ、承りますれば若い者が心得違ひで、あなた樣へ粗相なことを申しましたさうにござりますが、幾重にもお詫をいたしまする、どうか御了簡なし下さりまするやう。

皆々　一同お願ひ申しまする。

南鄕　なに、一同お願ひ申します。どの口でそんなことを言はつしやる、萬引でもないものによく盜人の惡名附けたな。

宗之　いえもう仰せは一々御尤もで、そこをどうぞ、お情に御了簡下さりますやう。

南鄕　默れ〳〵、默りあがれ。

宗之　へい。

南鄕　これ、何を隱さう、お孃樣は二階堂信濃守のお目附をお勤めなさる、早瀨主水樣の御息女、今度秋田の御家中へ御緣を組まれし花嫁御、萬引といふ惡名附けて、たゞ詫つて濟まうと思ふか。

皆々　恐れ入りましてござりまする。

南鄕　手前達では譯が分からぬ、亭主に逢はう、亭主を出しやれ、（トきつといふ。）

幸兵　唯今それへ參りますでござりまする。（ト奥より出て來る。）

南鄕　むゝ、すりやその方が此の家の亭主か。

幸兵　へい、左樣でござります。委細の樣子は逐一に承りましてござりまする、何ともかとも申上げやうなき手代どもの不調法、お詫の趣意は立てませうほどに、どうか御了簡なされて下さりませ。

南鄕　外ならぬ主人の賴み、餘のことならば了簡いたしくれうが、この儀ばかりは、

幸兵　すりや如何樣お詫をば申上げても、御了簡は、

南鄕　ならぬといふは、これ御亭主、この疵を見て下さりませ。

ト俯伏せになり泣いてゐる辨天を引起し額の疵を見せる、皆々びつくりして。

幸兵　や、こりやお孃樣の額に疵が、

皆々　やゝゝゝゝ。

南鄕　今も拙者が申す如く、御緣極りし大切の御身、疵が附いてはこのまゝに屋敷へお供はいたされぬ。氣の毒ながら片ッぱし首をならべて、身共もこの場で切腹いたす。

辨天　あこれ四十八、そのやうに事荒立てずと、內々にどうか仕樣はないかいの。

南鄕　そりやないこともござりますまいが、今內々にいたしまして、後日に知れて御覽じませ、旦那樣へ拙者めが申譯がござりませぬ。

ト此中淸次幸兵衞に囁く、幸兵衞賴むといふ思入、淸次呑込みて、

淸次　もし、憚りながら、ちよつとこれへお顏を貸して下さりませ。

南鄕　（下手へ來て）むゝ、顏を貸せとは何用だ。

淸次　外の事でもござりませぬが、あの背高の番頭が見違ひをしたばつかり、わつちらまで共々にとんだ間違ひを拵へやしたが、今お前さんの言ふ通り、片ッぱしから切つたところが切り榮えもしねえ南瓜唐茄子、お孃さんのお言葉もあれば、道でお轉びなすつたとか、何とかかとか胡麻かして言譯をして下さりませ、お禮はしつかりいたさせます。もし、一ぺいやる氣になつておくんなせえ。

南郷（思入あつて）お孃樣、どういたしませうな。
辨天　もうよい加減にしてやりやいの。
南郷　左樣ならばこのまゝに、了簡いたしてやりませう。
清次　そりやあ有難うござります。（ト幸兵衞の傍へ來て）もし、十兩だして下さりませ。
宗之　おゝ、丁度幸ひ、お屋敷から受取つて來たこのお拂金、
ト懷より胴卷を出し、中より百兩包みを出して十兩紙に包み渡す、南郷、辨天はこれへ目を附けてゐる。
清次　それぢや少しばかりだが、歸りに一ぺいやつておくんなせえ。
南郷（手に取り開き見て）なんだ、了簡すりやあしつかりすると言つた、禮が十兩か。
清次　十兩ぢやあ不足かえ。
南郷　今內分に濟ましたことが、後日に旦那へ知れた日には、命にかゝはる仕事だぞ。
清次　それだから十兩やるのだ、それで厭なら止しにしろえ。
南郷　おゝ、止しにしねえでどうするものだ。十や二十の端金で賣るやうな命ぢやあねえ。百兩ならば知らねえこと、一朱缺けても賣りやあしねえ。

清次　賣らざあ買ふめえ、止にしよう。さあ、片ツぱしから切る先に、おれから切つてくれ。

南郷　おゝ、切らねえでどうするものだ。

清次　さあ、きり〳〵と切らねえか。

幸兵　これさ〳〵、こなたが腹を立つてはいけぬ。

宗之　まあ〳〵靜にしたがよい。

清次　なんの、あんな奴の一人や二人、たゝき殺してもだいじねえ。

與九　これさ、お前が喧嘩を買つてはいけねえ。

佐兵　まあ〳〵裏へ一緒に來なせえ。

清次　いやだ〳〵、うつちやつておいてくんなせえ。

太介　はて、喧嘩をしてはいけない。

兩人　まあ、來なせえといふに、

ト佐兵衛、太介清次を引つぱつて下の方へ入る。南郷きつと思入あつて、

南郷　恥辱に恥辱を重ねし上は、血を見ぬ中は歸られぬ。片ツぱしから覺悟なせ。

幸兵　(留めて)あゝいや、お待ち下され。最前より見受けますれば、この扱ひにて不足の御樣子、金で

買へざる人の命、どうかお心癒るやうに、(ト思入あつて百兩出し。)これにて御了簡下さりませ。

ト南鄕思入あつて金を取上げ開き見て、につたりこなしあつて、

南鄕　むゝ、了簡し難いところなれど、切れ放れよき主人が挨拶、百兩ならば了簡いたさう。

幸兵　すりや、お聞濟み下さるとか。

南鄕　いかにも、

幸兵　これで一同、

皆々　安堵しました。

南鄕　思はぬことで暫時の暇入り、

辨天　それも事なく、濟む上は、

南鄕　少しも早く、

幸兵　左樣なれば、

宗之　お二人樣、

南鄕　世話であつた。

ト南鄕、辨天立上り行きかける。と此の以前より上手へ駄右衞門出かゝり窺ひゐて、

駄右　お侍。ちよつと待つて下され。

　トこれにて兩人ぎつくり思入あつて立留まり、南鄕駄右衞門を見て、

南鄕　むゝ、見れば立派なお侍、待てとは何ぞ用でもござるか。

駄右　いかにも、

南鄕　して、その用は、

駄右　お下にござれ、

南鄕　むゝ、（ト思入あつて下にゐる。）

駄右　扨最前よりの一部始終、一間で殘らず承はつたが、よくぞ御了簡いたされた、人は勘辨が第一でござる。

南鄕　さあ、了簡し難きところなれど、何を申すも女儀の同件故、

駄右　それが却つてこの家の仕合せ、計らず身共も參り合せ、お目にかゝるも不思議の御緣、二階堂の御藩中でござると承はつたが、左樣かな。

南鄕　いかにも二階堂信濃守が家來、早瀨主水が息女でござる。

駄右　しかと左樣でござるかな。

南鄕　はて、くどいことを。

駄右　あの、こゝな僞りものめが。

南鄕　なんと、

駄右　斯いふ我は二階堂信濃守が用人役、玉島逸當と申す者、

兩人　え、(ト南鄕、辨天びつくりする。)

駄右　早瀨主水と名乘る者、我屋敷に覺えない。

南鄕　むゝ、

駄右　殊には緣組定まりし娘といふも、まさしく男、

辨天　や、(トちよつと男の容子を見せ、)なんで私を男とは、(トやさしき女の思入。)

駄右　女というても憎からぬ姿なれども、某が男と知つたは二の腕にちらりと見たる櫻の彫物、なんと男であらうがな。

辨天　さあ、それは、

駄右　但し女と言ひ張れば、この場で乳房を改めようか。

辨天　さあ、

駄右　男と名乘るか。

辨天　さあ、

駄右　さあ、

兩人　さあ〱〱。

駄右　騙者め、返事はなゝ何と。

ト きつと言ふ、南郷南無三といふ思入、辨天ずつと立つて帶を解き上着をすつぼり脫ぎ、下着細帶の裝になり、

辨天　こう兄貴、もう化けてもいかねえ、おらあ尻尾を出してしまふよ。

南郷　えゝ、この野郎は、ひつこしのねえ、もうちつと我慢すりやあいゝに。

ト 大小を袴に包み投りだし、これも上着を脫ぎ三尺帶になる。

辨天　べらぼうめ、男と見られた上からア、窮屈な目をするだけ無駄だ。もしお侍さん、御推量の通り私あ男さ、どなたもまつぴら御免なせえ。

ト 足で煙草盆をかき寄せ、尻をくるりと捲り胡座をかく、皆々見てびつくりする。

與九　扨は女と思つたは、騙りであつたか。

皆々　やあ〳〵。

辨天　知れたことよ、金がほしさに騙りに來たのだ。秋田の部屋ですつかり取られ、鹽噌の錢にも困つた所から百兩ばかり挊がうと、損料物の振袖で役者氣取りの女形、巧くはまつた狂言もかう見出されちやあ譯はねえ、ほんに唯今のお笑ひ草だ。

與九　どう見てもお孃さんと思ひのほかの大騙者、扨々太い、

五人　奴だなあ。

辨天　どうで騙りに來るからにやあ、首は細いが膽は太え。

南郷　何だ、太いの細いのと橋臺で賣る芋ぢやァあるめえし、

辨天　違えねえ。

駄右　巧みし騙りが現はれても、びくともせぬ大丈夫、ゆすりかたりのその中でも、定めて名のある者であらうな。

辨天　それぢやあ、まだ私等をお前方は知らねえか。

與九　おゝ、何處の馬の骨か、

皆々　知らねえわ。

辨天　知らざあ言つて聞かせやせう、濱の眞砂と五右衞門が歌に殘せし盜人の種は盡きざる七里ヶ濱、その白浪の夜働き、以前を言やあ江之島で年季勤めの兒ヶ淵、江戸の百味講の蒔錢を當に小皿の一文子、百が二百と賽錢のくすね錢せえだん〳〵に惡事はのぼる上の宮、岩本院で講中の枕捜しも度重なり、お手長講を札附にたうとう島を追出され、それから若衆の美人局、こゝやかしこの寺島で小耳に聞いた祖父さんの似ぬ聲色で小ゆすりかたり、名さへ由縁の辨天小僧菊之助とはおれがこツた。

ト片肌脱ぎ櫻の花の彫物を見せ、きつと見得。南郷も思入あつて、

南郷　その相ずりの尻押は、富士見の間から彼方に見る、大磯小磯小田原かけ、生れが漁夫に波の上、沖にかゝつた元船へその舟玉の毒賽をぽんと打ち込む捨碇、船丁半の側中を引さらつて來る利得とり、板子一枚その下は地獄と名に呼ぶ暗黑も、明るくなつて度胸がすわり、艫を押しがりやぶつたくり、舟足重き刑狀に、昨日は東今日は西居所定めぬ南郷力丸、面を見知つて貰ひやせう。

トきつと思入、駄右衞門扨はといふ思入あつて、

駄右　扨はこのほど世上にて、五人男と噂ある日本駄右衞門が餘類よな。

辨天　えゝ、その五人男の切端さ、先づ第一が日本駄右衞門、南郷力丸、忠信利平、赤星十三、辨天小

僧、私ァほんの頭數さ。

南郷　かうしらばけに打ちまけたら、歸しもしめえが歸りもしねえ。さあ、騙つた金は返しやすよ。

ト前の金を幸兵衞の前へやる。

辨天　さあ、これから二人ともこゝから突出してくんなせえ、騙りが現れたその時は送られる氣で新らしく晒布を一本切つて來たのだ。

南郷　これから先は私の働き、どいつもこいつも口一つで、抱いて行くから覺悟しろ。おい小僧、茶を一ぺいくれ。

小僧　はあゝ（ト茶を汲んで持つて來る。南郷ちよつと飲んで、）

南郷　えゝこいつあべらぼうに焦げッ臭え、こんな茶が飲めるものか。（ト茶碗を小僧に投げつける。）

小僧　あッつゝゝゝ（ト頭をかゝへて下手に扣へる。）

辨天　さあ、かう極つたら早いがいゝ、夜の更けねえ中きりきりと繩をかけて突出しなせえ。どうで行きやあ二人とも二度と再びこの娑婆へ出るか出られねえか知れねえ身體、然し御親切な逸當樣、首になつてもお禮にやあきつとお屋敷へ行きやすよ。

南郷　えゝ、こけ未練なことを言ふな、命がをしいやうで見つともねえ。

駄右（これを聞いて思入あつて）なるほど心のすわつたものだ、企んだ騙りが露はれて、悄々歸りもすることか、突出せなぞとふて勝手、此の家に難儀がかゝらずば生けおく奴ではなけれども、
ト思入、兩人これを聞いて、

辨天　それぢやあお前はこゝの家へ難儀がかゝらざあ切る氣かえ、おもしれえ切られよう、いつか一度は二人とも刀の錆になる身體、素人衆の手にかゝり切られりやあ本望だ。

南鄕　さうだ〳〵、疊の上で死ねねえこちとら、差擔ひでも吳服屋の店から擔いで出されりやあ、死花が咲くといふものだ。

兩人　さあ、すつぱりとやんなせえ。（トしやんと畏り、襟の毛をかき上げ駄右衞門へ身を突附ける。）

駄右　むゝ、望みとあらば、（ト刀を持ち立ちかゝろ、幸兵衞、宗之助これを留めて、）

幸兵　あもし旦那樣、まあ〳〵お待ち下さりませ、彼等をお切りなされましたら、私方は兎も角も、あなたのお名の出ますこと、

宗之　嘸やお腹も立ちませうが、何を申すも惡い相手、

駄右　それ故身共も控へをつたが、あまりと言へば憎き奴等。

幸兵　ではござりませうが大切の御身、私共にお免じ下さりませ。

駄右　達つてとあらば兎も角も、此方元より事を好まぬ。
幸兵　すりや御了簡下さりますか。
皆々　えゝ有難うござりまする。（ト此中辨天、南郷思入あつて）
辨天　さあ、切るなら早く切らねえか。
南郷　それとも切らざあ、突出すとも、
辨天　夜がつまつた、
兩人　早くしねえか。
幸兵　これ〳〵お前方もよい加減にふて勝手を言はつしやい。縛つて出すの突出すのとは、私かはうで言ふせりふ、それを言はぬが商人故、たゞ何事もこれぎりに無事に歸つて下さりませ。
辨天　いゝや厭だ、歸られねえ。
幸兵　そりや、何故に歸られませぬ。
辨天　二階堂の藩中で早瀨主水が娘と言つたも、化が露はれ百兩の金をそつちへ返したら、言はずと知れた五分と五分、そつちは損はあるめえが、こつちの損は萬引と寄つてたかつて大勢に打たれたおれが向う疵、この始末はどうしなさる。

幸兵　さあ、それはこつちの過失故、詫びて濟むならこつちから膏藥代を差上げますが、それでどうぞお二人とも、この場を歸つて下さりませ。
辨天　おゝ、そりやあ物は相談だ、趣意が附くなら歸りもしよう。
幸兵　さう了簡をして下さるなら、些少なれどもこの金を、どうぞ取つて下さりませ。
ト金包みを出すを、辨天開いて見て、
辨天　なんだ、膏藥代は十兩か、辨天小僧と南郷が呉服店で騙り損え、五兩宛で歸つたと言はれた日にやあ恥の恥、こりやあお返し申しやせう。
幸兵　それで足りずば、又どうなと、
辨天　えゝ端金は入らねえわえ。
南郷　これ菊や、長く居たなら二十と三十、ねだり出しもしようがな、こつぱ仕事で夜が更けらあ、まあ、それを取つて歸りやな。
辨天　こう手前もちつとぼんやりしたぜ、十兩ばかりで歸られるものか。
南郷　取らねえにやあましだ、取つておけ。足らざあどうかしようといふから、まさかの時のいゝ金蔓だ。あとは旦那に預けておきな。

辨天　それぢやあこれで歸らうか、(ト思入あつて金を取上げ、)御時節柄とはいひながら、端金ぢやあ安いものだ。

幸兵　そんなら、それで聞分けて、

宗之　無事に歸つて下さるか。

辨天　むゝ、今日はこのまゝ歸ります、その替りに又これを御縁に、

南郷　これから度々參りやす。

與九　それは眞平、

皆々　おいでに及ばぬ。

ト此の中辨天小僧は上着と帯を下の細帯にて結へる、南郷は袴へ大小を包み、これも帯にて結び、兩人立上り、駄右衛門に向ひ、

南郷　もし、お侍さん、大きに失禮を申しました。

辨天　このお禮はいつか一度、

駄右　むゝ、言ひ分あらば何時でも、

兩人　きつとしにやアおきやせぬよ。

ト雜物を肩へかけ、辨天尻を端折り、兩人門口へ出る。

與九　をとゝひ來い。

辨天　えゝ、やかましいやい、（ト與九郎の横面を喰はす。）

與九　あいたゝゝゝ（ト倒れる。）

幸兵　えゝ、性懲もなく、

宗之　控へてゐぬか。（ト與九郎を押へ附ける。辨天頬冠りをしながら）

辨天　何しろこいつが、邪魔だな。

南鄕　一緒にして坊主持にしよう。

辨天　それがいゝ〳〵。

ト門附の合方にて辨天一つに結へて肩にかけ、行きかけると一人の按摩出て來る。

そりや按摩だ、そつちへ渡すぞ、（ト南鄕に渡す。）

南鄕　べらぼうに早いぢやあねえか。

ト按摩花道にて忘れ物をせし思入あつて、後へ引返す。

やあ、後へ歸つたからそつちへ返すぞ。

辨天　忌えましい按摩だな、（ト肩へかけ新内を語り）あんまにむごいどうよくな、
　ト南郷口三味線にて花道へ行きかける、按摩叉取つて返し花道にて行き逢ひ、舞臺の方へ行く、辨天氣附かぬ思入。

按摩　あんま針、（トこれにて辨天心附き、）

辨天　や、あんまか、（ト振返る。）

南郷　新内で川流だ。

辨天　えゝいめえましい。（ト兩人よろしく花道へ入る。）

駄右　あ、惡漢どもとは言ひながら、身を投げ出してのゆすり騙り、扨々憎い奴ではある。

幸兵　いやも、あなた樣がおいでなされませぬと、彼等に百兩うまくと騙られますところ、

宗之　計らず難儀を脫れましたは、偏に旦那樣のお蔭故、

與九　數なりませぬ私どもまで、

佐兵　お禮は言葉に盡されませぬ。

太介　えゝ有難う、

皆々　ござりまする。

駄右　さしてもないことを、そのやうに厚う禮を言はれては、却て身共迷惑いたす。
幸兵　いやも、これと申すも番頭與九郎、皆その方が粗相からかゝる事も起るといふもの。いつぞは言はうと思うたが、よい折故にこれまでの不奉公の段々を申聞かして、今日からは店の支配は退役さすぞ。
與九　そりや又あんまり情ない、何もこれまでそれほどな、
幸兵　覺えがなくば言ひ聞かさうが、彼方樣がおいでなされば、後にとつくり云ひ聞かさん、覺悟いたして待つてをれ。
與九　へゝい。
駄右　いかなる仔細か存ぜねど、今日のことならあの者が越度と言ふでもござるまい。
幸兵　いえ、これにはいろ〳〵事情あること、かやうなことにお構ひなく、あなた樣には奥の間へ、
駄右　いや、最早初更も過ぎた樣子、また〳〵明日まゐるであらう。
宗之　ではござりませうが、丁度御時分、何はなくともお湯漬でも。
駄右　その必配は必ず無用。
幸兵　左樣ならば差上げますまいが、まだ最前のそのほかに、御覽に入れ度き品もござれば、

佐兵　是非とも一先づ、
太介　奥の間へ、
駄右　さほどまでに言はるゝを、辭退いたすも却て不遠慮。
幸兵　何はなくとも、
宗之　御禮に一獻、
駄右　然らば御亭主、
幸兵　旦那樣、
駄右　どれ、御雜作になるであらう。
　ト唄になり、駄右衞門、幸兵衞、宗之助、手代兩人、小僧附いて奥へ入る。與九郎殘り、思入あつて、
與九　扨つまらぬものはおれが身の上、とんだ騙りが來たばかり、これまで明けたおれが穴を算へたつて言はれたら、手代敵のあたりまへ、小裁布子でぼんでんごく、どんなをかしい引込でも、それではまことにつまらぬ譯、さうされぬ前たんまりと金を盗んで隨德寺、
　ト此の時奥にて『どろばう／＼』と言ひながら小僧出て來る、與九郎びつくりして、

與九　えゝ、今のは何だ。

小僧　猫が干物を引いたのさ。

與九　疵持つ足でびつくりした。

ト胸を撫でおろし、小僧を打つ眞似をする。この見得、題目太鼓にて道具廻る。

（濱松屋奥座敷の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面上手に戸棚、鋹前のおりろ鏡戸、中央更紗の暖簾口、上の方後へ下げて土藏の入口、下の方竹格子、總て濱松屋奥の間の體。上手に駄右衞門住ひ傍に誂への吳服、葛籠積み重ねあり。下手に幸兵衞、宗之助なり、よき所に廣蓋三つ物、銚子、盃など取散らし馳走をしてゐる。

幸兵　男世帶のことなれば、お酌とても倅ばかり、不束の段はお許し下さりませ。

駄右　いや、丁寧なる馳走にあづかり、千萬忝なうござるて。

宗之　お燗のよいので旦那樣、も一つお過しなされませ。

駄右　身共深くは飲べぬ故、最早納盃にして下されい。

幸兵　まだよろしいではござりませぬか。

駄右　いや〳〵、これより過すと歸宅が苦勞ぢや。
幸兵　左樣なれば、私で御納盃といたしまする。
駄右　いかい馳走になりました。
　　ト此時佐兵衞反物を紙に包み水引をかけ、白臺に載せて持出で、
佐兵　へい、唯今おつしやりました品々を、包みましてござりまする。
幸兵　あゝよし〳〵、こりやお供の衆へ御飯を上げてくりやれ。
佐兵　畏まりました。（ト奧へ入る。）
幸兵　いや、これは粗相な品でござりますが、お宿元へお土産に差上げますでござりまする。
　　ト白臺を駄右衞門の前へ出す、駄右衞門心得ぬ思入にて、
駄右　御亭主、これは何でござるな。
幸兵　お恥かしうござりますが、先刻のお禮までに、
駄右　厚志は受けまするが、この品々はお戻し申す。
幸兵　すりや、何故でござります。
駄右　はて、斯樣な禮を受けようとて、身共いたせしことではない。身が屋敷の名を騙り憎き奴故見る

に忍びず、口出しいたせしまでのこと、何故禮を受けようぞ、必ず無用にいたしてくりやれ。」
幸兵　左樣ではござりませうが、百兩といふ金子をば騙られませぬは、あなたのお庇、
宗之　お禮のいたしやうもござりませうが、さしあたつてのこと故に、有合せの呉服物、
幸兵　是非ともお納め下されねば、どうも心が濟みませぬ。（ト駄右衞門迷惑さうに、）
駄右　むゝ、心が濟まぬとあるならば、いかにも禮を受けるであらうが、とてものことに某が望みの品を貰ひたい。
幸兵　よう仰せられて下さりました、お望みの品は何なりとも、
宗之　お羽織地かお袴地か、思召しのその品を、仰せ聞けられ下さりませ。
駄右　近頃勝手なことながら、申してもよからうかな。
幸兵　よろしいだんではござりませぬ。
宗之　して、あなた樣のお望みは、
駄右　（言ひ難さうに、）申し兼ねたことながら、とても禮に下さるなら、金子でお貰ひ申したい。
幸兵　これは心附かぬことでござりました。こりや〳〵倅、（ト宗之助に囁き、）水引かけて熨斗を添へ、
宗之　畏まりました。（ト立ちかゝるを、駄右衞門留めて、）

駄右　あいや御亭主、金子なら包むに及ばぬ、箱のまゝ有金残らず所望したい。
幸兵　何とおつしやる、（トびつくりする。駄右衛門ずつと立つて刀を抜き、）
駄右　さ、刀にかけて貰ひ申すぞ。
兩人　えゝ。

ト駄右衛門舞臺へ刀を突きさし、呉服葛籠へ片足かけてきつと見得。凄き合方になり、上下より以前の南郷力丸、辨天小僧先に若黨、中間等佐兵衛、太介、小僧三人を縛りたるを引立てゝ出來る。

南郷　頭、まんまと、
四人　首尾よく、
駄右　これ、表裏の締りはいゝか。
辨天　あい、錠をおろして出入を留め、家中残らず縛りました。
幸兵　扨は玉島逸當どのも、
宗之　騙者と一つ仲間であつたか。
幸兵　知らぬことゝて、
皆々　やゝゝゝゝ。（ト呆れる、駄右衛門思入あつて、）

駄右　こりや、彌藏源吾はそいつらを臺所へくゝしおき、逃げざるやうに張番いたせ。

若黨中間　畏まりました。

駄右　必ず手荒きことをするな。

兩人　おゝい。（ト引立て入る。幸兵衞思入あつて、）

幸兵　最前よりの言葉の端、まさしく頭の樣子なれば、もしや噂の其許が、

駄右　今海内に隱れのねえ日本駄右衞門とは、おれがことだ。

兩人　えゝ。（ト思入。）

駄右　駿遠三から美濃尾張、江州きつて子供にまでその名を知られた義賊の張本、天に替つて窮民を救ふといふもおこがましいが、ちつと違つた盜人で小前の者の家へは入らず、千と二千有金のあるを見込んで盜み取り、箱を碎いて包みから難儀な者に施す故、少しは天の惠みもあるが、探偵がまはつてこれまでと覺悟を信濃の大難も、遁れて越路出羽奧州、積る惡事も筑紫潟、凡そ日本六十餘州盜みに入らぬ國もなく、誰言ふとなく日本と肩名に呼ばるゝ頭株、二人を玉に暮合からまんまと首尾も宵の中、時刻を計つた今夜の仕事、有り金殘らず出さつせい。（トきつと見得。）

幸兵　斯くなる上は是非に及ばぬ、唯今金子を差上げまする（ト戸棚を明けて千兩箱を出し、）さあ　これを

お持ち下さりませ。

駄右　なに、持つて行けとは千兩か。

南郷　こゝら邊りで名代の呉服屋、三箱とあてゝ來た仕事、

辨天　隱さず金を出してしまへ。

幸兵　何の包み隱しませう、昨日仕入に京都へ上せ、唯今宅にはこればかり、

駄右　ないと言ふなら仕方がねえ、慘い殺生じにやあならぬ。

ト幸兵衞に刀をさしつける、宗之助びつくりして、

宗之　あゝ申し盜人どの、殺さにやならぬことならば私を殺して下さりませ、大切の〳〵義理ある父樣どうぞ助けて下さりませ、こゝの道理を聞き分けて、私を殺して父樣をどうぞ助けて下さりませ（ト駄右衞門に縋り頼むが、そしらぬ顏をしてゐる故、南郷に縋りて、）もし、こちらのお人、今の事情故お前からお頭樣へ願うて下されお頼み申しまする〳〵。（ト言つても南郷知らぬ顏をして煙草を喫んでゐるので、又辨天に縋りて、）それでは、どうぞお前からこの執成をして下されを、をがみまする。

辨天　えゝ、やかましいやい、（ト宗之助を蹴倒す。宗之助うろ〳〵しながら、）

宗之　いかに無慈悲の盗人でも、あんまり情を知らぬ人達、どうでも父様は殺されぬ。さあ〳〵、早う私を殺して〳〵。（ト駄右衛門に身體を突附ける。）

駄右　おゝいゝ覺悟だ、望みの通り、汝から先へ殺してやらうわ。

ト刀を持ち立ちかゝる、此の中幸兵衛始終ぢつと思入あつてこの時駄右衛門を留めて、

幸兵　あゝもうし、どうぞ待つて下され。伜が義理ある親を庇へば私も亦義理ある伜、殺されぬは同じこと、駄右衛門どのは盗賊でも義強いお人と聞く故に、伜が命を助けねばならぬ事情を一通りお聞きなされて下さりませ。何を隱さう私は、三十路を越すに一子なく、どうがなしてと初瀬寺の觀世音へ祈誓をかけ、計らず一子を儲けし故、それで大師のまうし子と、毎月缺かさず夫婦とも御縁日に伜を抱き、お禮に通夜をいたしましたが、忘れもせぬ十七年あと、而も九月の十七日、お堂の内に喧嘩があつて、右往左往に逃げるはずみ、妻が粗相で我兒を失ひ、邊りを見れば泣きゐる幼兒、それを我兒と思ひ違へ、騒ぎの紛れやう〳〵と戻つて見れば知らぬ幼兒、不便にそのまゝ捨てもならず、我兒の替りと育つる中も、何處の誰が伜なるか、證據なければ諸所方々尋ねさがせど、我兒ともついにそれなり知れぬ故、そのまゝ育てしこの伜、月日は經てど明暮にどこにどうしてゐるをるぞと、失ふ伜を忘れねば定めてこれが實親も子を思ふ身は同じこと、嘸や案じ

てをりませう、どういふことで明日が日に尋ねて來まいものでもない、その時金に命を替へ殺しましたと言はれませうか、金は世界の湧物にて、今日失うても明日また出來まいものでもござりませぬが、取られた命は返りませぬ。このまゝ店を仕舞へばとて、金は殘らず上げませう、伜の命はこの譯故、助けて下され駄右衞門殿、どうぞ聞分けて下さりませ。

トよろしく思入にて言ふ、宗之助はこれを聞きゐる。駄右衞門も此の中扨はといふ思入あつて、

駄右　おゝ、いかにも命は助けてやらう。

南郷　その替りには殘りの金、

辨天　包みかくさず出してしまへ。

幸兵　なるほど、この身代で僅千兩、御疑念もさることながら、最前も申せし通り、荷物仕入のその爲めに多くの金子を京へ上せ、家には僅殘り千兩、實もつてこればかり。斯樣申して御胡亂なら、家搜しをさつしやるとも、それにてもお心濟まずば是非に及ばぬ、幸兵衞を切つて伜を助けて下され。私が身は厭はねど義理ある伜は殺されぬ、こればつかりが今際のお願ひ、慈悲ぢや情ぢや駄右衞門どの、どうぞ聞屆けてやつて下さりませ。

駄右　いや、その御心配には及び申さぬ。最早金子も申受けまい。

幸兵　えゝ、そは又何故、

駄右　仔細は唯今申さんが、十七年あと初瀬寺で取違へたる幼兒の衣類の中に垢附きし、三つ龜甲の紋附きし、黑地の袖に繼布はござらぬか。

幸兵　いかにも、袖の繼合せに三つ龜甲の紋附きし黑羽二重がござりました。それ倅、下着の袖をお目にかけよ。

宗之　はつ（ト片袖を脱ぎ、黑の繼布を見せ、）これぞ實父の定紋に、下着に繼いでこの年月肌身放さず着てをりまする。

トこれにて駄右衞門思入あつて羽織を脱ぎ、三つ龜甲の紋あるを見せ、

駄右　幸兵衞どの、これ御覽下されい。

ト幸兵衞宗之助これを見て思入

幸兵　や、駄右衞門どのゝ紋所、

宗之　寸分違はぬ三つ龜甲、

幸兵　もしや、こなたは宗之助が、

駄右　面目ないが、親でござる。

宗之　え、そんならお前が、

幸兵　親子であつたか、え〻〻〻。

ト宗之助駄右衛門の側へ行かうとして、幸兵衛へ思入あつてぢつとなる、駄右衛門幸兵衛を上へやり中央へ住ひ、

駄右　現在伜が十七年育てられたる家とも知らず、盗みに入るのみなるか、殺害なさんとなしたる大罪まつぴら御免下さりませ。（ト手をつき思入あつて、）あ、思ひ出せばその折は、身貧に迫り妻におくれ、かねて初瀬寺の通夜を幸ひ御堂の中、慈悲ある人に拾はれなば行末とてもよからうと、捨てるほどでも親の慾、誰が拾ふかと子の邊り去り兼ねたるを見咎められ、やれ棄兒よと言はる〻を、喧嘩の體にもてなして、跡をくらましそのま〻に暫く都に足を留め、ついに賊黨の中に入り憂き年月を送る中も、今其許の言はる〻如く、十七年がその間、寢た間も忘れはいたしませぬ。

宗之　そんならお前が實の父樣でござりましたか、（ト寄らうとして幸兵衛へ思入あつて、）おなつかしうござりまする。

幸兵　して、その許には捨てしのみ、我兒を連れては行かれぬか。

駄右　さ、捨てるほど故存ぜぬが、其夜は近鄕近在より參詣なせば何國へか、他國へ連れて行きしなら

ん。倅が受けし御恩送りに、何れ何國にござるとも、尋ねさがして進ぜませうが、何ぞ子息にこれぞといふ證據のものはござらぬか。

幸兵　別に證據もござらぬが、その折腰に提げたる巾着、布は赤地の鴛鴦布、中に入れたるその品は初瀬の御影に臍緒書、「寛文元年癸の卯四月二十日亥の時の誕生、幸兵衞倅幸吉」と書記してござります。

駄右　寛文元年卯の年は、今年で丁度十七年、さすれば倅と同じ年、

ト これを聞き辨天小僧思入あつて、腹に卷きし鬱紺木綿の守袋より、赤地の錦の巾着を出し、

辨天　その鴛鴦布の巾着は、もしやこれではござりませぬか。（ト出して見せる、幸兵衞取上げ見て、）

幸兵　まことにこれぞ覺えの巾着、

宗之　そんなら、お前が、

辨天　その幸吉でござります。

皆々　や、（ト思入あつて、）

幸兵　扨は倅であつたるか。

辨天　親父樣でござりますか、あゝ面目ないく。

幸兵　してまあそちは、此年まで何處で人になつたるぞ。
南郷　その事情は力丸が脱れぬ仲故一通り、私が替つて話しませう。
幸兵　そんならこなたも、脱れぬ仲とか、
南郷　さあ、その夜御堂で幸吉を拾つて來たは私が親父、六右衞門といふ漁夫だが、觀音樣が信心で、毎月か丶さず南郷から十七日にお通夜のお籠り、倅といふも唯一人丁度弟のほしい最中、そのまま育て丶ゐる中に岩本院から望まれて、器量のよさに寺小性、忘れもせぬあの時は、おぬしが十二の年であつた。
辨天　それから島で窮屈な勤めが厭さにぐれ始め、たうとう彼處にゐられなく、辨天小僧と肩書に言はる丶やうになつたのも、元はと言やあ乳兄弟一緒に育つた力丸が、惡い遊びを見習つてこんな身體になつたと言ふ條、やつぱり私が生得惡い性根があつた故、人を恨むとこもねえ、此の身から出た錆刀、始終はお上の手にか丶り親に憂き目を見せるのも、これも定まる業だとあきらめ、どうぞ許して下さりませ。
幸兵　何を許すの許さぬのと、盗人するも商人するも、持つて生れたその身の一生。
駄右　思ひまはせば十七年、大恩受けし此の家へ、

辨天　神ならぬ身の露知らず。
南郷　危ねえ白刄の夜働き、
宗之　露の命を取らるゝところ、
幸兵　身の言譯からこのやうに、
駄右　別れ程經し親と子が、
辨天　名乘り合うたる今日も亦、
南郷　月は替れど十七日、
宗之　枯れたる木々も花の咲く、
幸兵　これも藤埵の導引なるか。
駄右　不思議な出會で、
皆々　あつたよなあ。（トよろしく思入）
幸兵　思ひがけなくこのやうに、名乘つて見れば親子兄弟、繫がる緣にこなた衆へこの千兩を進ぜるほどに、今からさつぱり盜みを止め、まことの人になつて下され。
駄右　お志しは忝ないが、此の身を始め二人とも、止めようと言つて止められぬは、凡そ手下も千人

あまり、此等の爲めに本心に立返つても舊惡にいつかはかゝる天の網、首級を野末にさらすまでは、止めることのならざる身の上、

辨天　五人の者が召捕られ、お仕置受けると聞いたなら、その時こそは親子の誼、未練なことを言ふやうだが、後の回向を頼みます。

幸兵　そんなら、命のある中は、

南郷　生涯盗みの夜働き、疊の上では死なれませぬ。

幸兵　あゝ、情ない、

宗之　ことぢやなあ。(ト兩人泣く、駄右衞門思入あつて、)

駄右　こりや倅、我は眞實の親ながら、東西知らぬその中に捨てる程の無得心、親と思ふな親ではないぞ。十七年がその間手鹽にかけて育たれし幸兵衞殿が親なるぞ。現在實子はありながらお世話のできぬ身の上故、幸吉殿になり替り、よう孝行を盡しませうぞ。

宗之　はつ、仰せまでもござりませぬ。産の親よりまさりし御恩、孝行せいでなんとしませう。

駄右　むゝ、その心を忘るゝな。

宗之　死んでも忘れはいたしませぬ。

駄右　出來した倅、それでこそ賊の胤とも言はれまい。

幸兵　これ倅聞いたか、そちも亦手下となれば子も同然、駄右衛門殿を親と思ひ、必ず孝行忘るゝな。

辨天　そりやあ私もその心、實子に替つて今日からは、命にかけて孝行します。

幸兵　そんならそちも眞實に、

辨天　孝行しにやあ義理が濟まねえ。（トこれを聞き南鄕思入あつて、）

南鄕　あゝ、孝行をしてえ時分に親はなしと、二人と違つておれなざあ、死んだ親父やお袋に不孝に不孝を盡したが、今のを聞いて面目ねえ。（ト頭をかく。）

駄右　世に盜人は非義非道、鬼畜のやうに言ふけれど、

幸兵　かうして見れば素人より遙にまさつた仁義の道、定めて以前は由ある生れ。

駄右　いかにも昔は遠州にて、鎗をも突かせし鄕士の果。して又貴殿の身の上は。

幸兵　何を隱さうその以前は、小祿ながら小山の家中、仔細あつて浪人なし、大小捨てゝ町家の交はり唯今にてはこの如く何不足なく暮せども、町人にて果つること本意ならねばこのほどより、何卒歸參の願はんと、傳手を求めて賴みしところ、一つの功を立てよとある仔細といへば先達紛失なせし胡蝶の香合、詮議しだして差上げなばそれを功に御赦免と、聞くより諸方を詮議いたせど、

今に何の手がゝりなく寶の行方知れざれば、所詮此の身の願ひもかなはず。一生かゝる商人にて朽ち果つる我無念、駄右衞門殿御推量下され。

卜これを聞き三人思入あつて、

辨天　そんなら以前は小山の家中で、その寶故それほど苦勞を、（卜思入あつて。）知らぬことゝて、

幸兵　え、

辨天　とんだことをしたなあ。

卜思入、ばた〳〵になり奥より以前の手下の三出來りて、

手三　もし頭、遁げにやあならねえ、支度をしなせえ。

駄右　なに、遁げにやあならねえとは。

手三　こゝの家から訴人をして、捕手の衆が今に來やすよ。

幸兵　なに、此家の中から訴人せしとは、

手三　たしか、番頭の與九郎とやら、

宗之　扨は、彼れめが、（卜その手下を見て。）や、お前は店へおいでのお客、そんならやつぱり、

駄右　おれが手下だ。

宗之　ほんに、お前が誂へし五枚の小袖が出來ました。

ト葛籠の中より紙包の小袖を出す、駄右衛門見て。

駄右　これぞ五人が物好のまさかの時の晴小袖。

南郷　折よくできしはこれ幸ひ、

辨天　赤星、忠信もろともに、

駄右　五人揃うて花々しく、

南郷　群がる捕人を切りちらし、

辨天　一先づこゝを落ち延びん。

ト此の時花道の揚幕にてどん／＼と捕物の鳴物を打つ。

幸兵　や、かすかに聞ゆるあの太鼓は、

駄右　我を取卷く合圖なるか。

ト立上りきつとなる。揚幕にて「迷兒やあい」と鉦、太鼓をたゝく。

手三　おきやあがれ。迷兒でござりやす。

辨天　然し、捕手でないこそ幸ひ、

南郷　この家へ難儀のかゝらぬ中、

ト皆々立ちかゝる、此の時手代太介縛られたまゝにて、

太介　どろぼう〳〵。（ト言ふを、南郷引捉へる。）

幸兵　左樣なれば駄右衞門殿、

駄右　幸兵衞殿、

宗之　隨分壯健で、

辨天　必ず達者で、

ト幸兵衞は辨天小僧、駄右衞門は宗之助と顏見合せ、名殘りを惜しむ。太介は跳れ返さうとするを南郷押へる。

幸兵　鶯のかひこの中のほとゝぎす。

駄右　子で子にあらぬ、

南郷　義理合に、

宗之　しがらむ緣の、

辨天　いつかは繩目、

駄右　あゝ、子は三界の、
ト首をたゝく、幸兵衛は寄らうとする宗之助をへだてる、これを木の頭、
あゝ、鶴龜々々。
ト首のまはりを拂ふ。幸兵衛は辨天を宗之助は駄右衛門を見送る。南郷は太介へ葛籠の蓋をかぶせる、
これをきざみ、寺鐘迷兒の鉦太鼓にて、
ひやうし幕

四幕目　稻瀨川勢揃の場

〔役名――日本駄右衛門、辨天小僧菊之助、忠信利平、赤星十三、南郷力丸、捕手等。〕
(稻瀨川の場)――本舞臺正面畫心に高き草土手、所々に櫻の立木、高張提灯、後黒幕、總て鎌倉稻瀨川の體、波の音、佃にて幕明く。と、雨車波の音にて、花道より○△□◎等の大勢蓑笠にて鉦太鼓をたゝき、迷兒を呼びながら出來り、
大勢　迷兒の〳〵三太郎やあい〳〵。(ト舞臺へ來り、)
○　又ばら〳〵やつて來たが、大降りにならねばよい。

△　初瀬寺から稲瀬川、この界隈にゐぬからは、
□　朝比奈の切通しを越え、六浦の方へ行つたか知らぬ。
◎　それぢやあこれから一のしに、瀬戸橋までやッつけよう。
○　先へ行つたら知らぬこと、後なら彼處でがんばれば、
△　知れるは必定、一方路、
□　路のぬからぬその中に、
◎　こつちもぬからず、ちつとも早く、
○　何れもござれ。
皆々　迷兒やあい〳〵。

ト鉦をたゝきながら上手へ入る。と本釣鐘を打込み、端唄稽古囃子にて、船から上りし心にて、正面より辨天小僧、忠信利平、赤星十三、南郷力丸、日本駄右衛門等何れも染衣裳一本帯し下駄がけにて、しら浪と廻し書にしたる番傘をさして出來り、

辨天　雪の下から山越しに、まづこゝまでは逃げのびたが、
忠信　行く先つまる春の夜の、鐘も七つか六浦川、

十三　夜明けぬ中に飛石の洲崎をはなれ、船に乘り、
南鄕　故鄕を後に三浦から岬の沖を乘りまはさば、
駄右　陸と違つて波の上、人目にかゝる氣遣ひなし、
辨天　然し六浦の川端まで、乘つきる暇が遠州灘。
忠信　油斷のならぬ山風に、追風か追人の早風に遭へば、
十三　艪櫂にあらぬ一腰の、その梶柄の折れるまで、
南鄕　腕前見せて切散し、かなはぬ時は命綱、
駄右　錠を切つて五人とも、帆綱の繩に、
五人　かゝらうかい。

ト唄になり平舞臺へおりる。この時下手より捕手四人迷兒搜しの體にて鉦太鼓をたゝき『迷兒やあいやあい』と呼びながら來り、五人に行違ひ思入あつて入替り、太鼓を持ちし捕手土手の上へ上り、太鼓を早めて打つ、これにて皆々笠を脫ぎ四天の裝になり、上下よりばら〳〵と取卷き、

○　盜賊の張本日本駄右衞門、それに從ふ四人の者、やることならぬ。
皆々　動くな。

トこれにて皆々思入あつて、

駄右　扨は、五人がこの所へ來るを待伏せ、

五人　なしたるか。

△　迷兒を捜す體に見せ、幾組となく手分をなし、網を張つて待つてゐたのだ。

駄右　む〻、斯く露顯の上は、卑怯未練に逃げはせぬ、一人々々に名を名乘り、繩にか〻つて、

五人　刑罪受けん。

トこれにて舞臺へ五人居並び、上下を捕手取卷く、

○　殊勝な一言、して眞先に、

皆々　進みしは。

駄右　問はれて名乘るもおこがましいが、産れは遠州濱松在十四の年から親に放れ、身の生業も白浪の沖を越えたる夜働き、盜みはすれど非道はせず、人に情を掛川から金谷をかけて宿々で、義賊と噂高札に廻る配附の盥越し、危ねえその身の境涯も最早四十に人間の定めは僅五十年、六十餘州に隱れのねえ賊徒の首領日本駄右衛門。

辨天　扨その次は江の島の岩本院の兒上り、平生着慣れし振袖から髷も島田に由井ヶ濱、打ち込む浪に

しつぽりと女に化けた美人局、油斷のならぬ小娘も小袋坂に身の破れ、惡い浮名も龍の口土の牢へも二度三度、だん／＼越える鳥居數、八幡樣の氏子にて鎌倉無宿と肩書も島に育つてその名さへ、辨天小僧菊之助。

忠信 續いて次に控へしは月の武藏の江戸育ち、幼兒の折から手癖が惡く、拔參りからぐれ出して旅を挊ぎに西國を廻つて首尾も吉野山、まぶな仕事も大峰に足を留めたる奈良の京、碁打と言つて寺寺や豪家へ入込み盜んだる金が御嶽の罪科は、蹴拔の塔の二重三重、重なる惡事に高飛なし、後を隱せし判官の御名前騙りの忠信利平。

十三 又その次に列なるは、以前は武家の中小性故主の爲めに切取りも、鈍き刄の腰越や砥上ケ原に身の錆を磨ぎなほしても、拔兼ねる盜み心の深翠り、柳の都谷七鄕花水橋の切取りから、今牛若と名も高く、忍ぶ姿も人の目に月影ケ谷神輿ケ嶽、今日ぞ命の明け方に消ゆる間近き星月夜、その名も赤星十三郎。

南鄕 扨どんじりに控へしは、潮風荒き小ゆるぎの磯馴の松の曲りなり、人となつたる濱育ち、仁義の道も白川の夜船へ乘込む船盜人、波にきらめく稻妻の白刄に脅す人殺し、背負つて立たれぬ罪科は、その身に重き虎ケ石、惡事千里といふからはどうで終ひは木の空と覺悟は豫て鴫立澤、然し

哀れは身に知らぬ念佛嫌えな南郷力丸。

駄右　五つ連立つ雁金の、五人男にかたどりて、

辨天　案に相違の顏觸は、誰白浪の五人連、

忠信　その名もとどろく雷鳴の、音に響きし我々は、

十三　千人あまりのその中で、極印うつた頭分、

南郷　太えか布袋か盜人の腹は大きい膽玉、

駄右　ならば手柄に、

五人　からめて見ろ。

捕人　何をこしやくな。

トどん／＼になり捕手皆々打つてかゝるを、上下へ別れ傘にてあしらひ、立廻つて一時に投げ退け、傘を開いてきつと見得。これにて後の黒幕を切つておとし、彼方稻瀬川、聖天山船宿を見たる灯入りの遠見、賑やかなる鳴物になり、五人傘にて捕物のやうな花々しき立廻りあつて鳴物替り、皆々一刀を拔き土手を傳ひて烈しき立廻りよろしくあつて、トゞ上下へ追ひ込み、ほつと思入。本釣鐘上手に赤星十三、忠信利平、下手に南郷力丸、辨天小僧、土手の中央に駄右衛門居並びて、

駄右　今日は一緒に身の終りと、覺悟はせしが一日でも、脫れられなば逃げ延びん。
南郷　いかさま命が物種なれば、
忠信　五人連にて一先此の地を、
駄右　いや、大勢づれでは人目に立つ。忠信、赤星兩人は、これより直に中仙道、南郷、辨天兩人は道を違へて東海道、片時も早く落延びよ。
四人　してまた、頭は、
駄右　この身はやつぱり鎌倉の中に隱れて、後より出立。
南郷　そんならこれより右左り、
十三　別れ〴〵に旅路へ出かけ、
辨天　道中筋を一働き、
忠信　五月を待つて京都にて、
駄右　再び出逢ふ、
五人　五人男。(ト此の時以前の捕人二人出で、)
捕人　捕つた。(ト駄右衞門にかゝるを、立廻つて引附ける。)

四人　又もや、捕手。
駄右　いや、こゝ構はずと、
四人　そんなら頭、
駄右　片時も早く、
四人　合點だ。
ト波の音、佃になり、南郷、辨天は花道へ、十三、忠信は東の假花道へ、駄右衛門は捕手の一人を踏まへ、一人を捻じ上げ後を見送る。四人は花道を入る。これをいつぱいにきざみ、よろしく
ひやうし　幕

五幕目大詰

極樂寺山門の場
滑川土橋の場

〔役名――日本駄右衛門、南郷力丸、辨天小僧、番頭與九郎、道具屋市郎兵衞、靑砥藤綱、千原左近、濱松屋宗之助、狼の惡太郎、其他。〕
（極樂寺塀外の場）――本舞臺一面の練塀、内に松の立木、禪の勤めにて幕明く。と上手より夜鷹砦

蕎麥屋蕎麥の荷を擔ぎ、呼びながら出來り、これと同時に花道より玉子賣籠を提げ呼びながら出來り、双方舞臺にて行き逢ひ、

玉子 軍八殿、

そば これ、(ト兩人四邊へ思入あつて、)豫て申合せし通り、この極樂寺の山門に今四海に名の高き盜賊の首領、日本駄右衛門隱れ住む由、

玉子 彼が手下の惡次郎といふ者の、訴人によつてたしかに聞く、

そば それ故にこそ我々ども藤綱公の仰せを受け、或ひは蕎麥屋玉子賣、思ひ〳〵の商人裝、

玉子 この邊りを徘徊なすも、取逃さぬやう固めの我々、

そば 風を喰はぬ其中に、今宵召捕る手配り萬端、必ずともにぬかりめさるな。

玉子 心得申した。

ト兩人は上下へ別れて入る。と花道より辨天小僧頰冠り尻端折りにて出來る、後より捕手頰冠りにて菰を被り窺ひ出る、花道にて辨天振返り見ると捕手は引返して入る。上手より南鄕力丸頰冠り尻端折りにて出で、舞臺へ來り辨天と行逢ひ、左右へ避け、互ひに顏をすかし見て、

南鄕 辨天ぢやあねえか。

辨天　おゝ、南郷か。（ト兩人四邊へ思入あつて捨石へ腰をかける。）

南郷　ときに、手前が日外騙つた胡蝶の香合は、まだ知れねえか。

辨天　さあ、あの香合を尋ね出して、小山の屋敷へ返さねえぢやあ、親父へ對して濟まねえから、いつか五人が別れた時、手前と一緒に箱根まで行きやあ行つたが氣になる故、取つて返して二日越し行方を搜すがまだ知れねえ。

南郷　それ故おれもとも〴〵に、又鎌倉へ歸つて來たが、聞きやあ利平が主だといふ赤星十三が賣つたさうだな。

辨天　そりやあいつか稻瀨川で、闇に出逢つたその時に、金と間違へ拾つたを故主へ貢ぐ人蔘代に賣つたさうだが、それからそれと道具屋仲間へ段々渡り、今ぢやあ誰が持つてるるか、尋ねたいにも日蔭の身の上、どうか手蔓を聞きてえものだ。

南郷　手前のこと故おれまでも尋ねてるるがどこにあるやら、知れねえ時にやあ知れねえものだ。

辨天　それに引き替へ極樂寺に、頭が忍んでるることを青砥樣が知つた樣子だ。

南郷　そりやあたしか、狼の惡次郎めが訴人をしたのだ。

辨天　むゝ、すりやあの野郎が言附けたのか。

南郷　おのが惡事を脫れようと、言附口をしやあがるとは、ほんに卑怯な奴ぢやあねえか。
辨天　それぢやあ、何日が何日までもうかく\しちやあゐられねえ。
南郷　隨分手前もうれた顏、見られぬやうに氣を附けろ。
辨天　夜に入らにやあ步きあしねえ。
南郷　それぢやあ辨天、
辨天　兄貴賴むよ。
南郷　合點だ。（卜思入あつて下手へ入る。）
辨天　あゝ、思ひ出せば此の身の惡事、日外信濃で小太郎が瘧になやむを締殺し、そこからふつと惡心で小山の姬を勾引し、寶を取上げ命を捨てさせ、現在親の家とも知らず、いつぞや騙りに行つた時話に聞けば親父が故主、姬はもとより小太郎も繋がる緣のお主筋、いはゞこの身は主殺し、二十五までは生きられぬ短い命を捨てたとて、その言譯にならねえ故、盜んだ胡蝶の香合を尋ね求めて小山家へ、それを渡して命を捨て、身の言譯の十分一故主へお詫をする心（卜思入あつて）詮議嚴しい身の上に、どうぞ寶の手に入るまで、天よりかゝる網の目を脫れてえものだなあ。
　卜思入あつて上手へ入る。と花道より小道具屋市郎兵衞風呂敷包みを脊負ひ出來り、その後より濱松

屋の番頭與九郎尻端折りにて附添ひ出來りて、

與九　道具屋の市郎兵衛さん、さう強情を言はずと待つて下せえ。

市郎　えゝしつこい、待たれぬと言ふに、女乞食を見るやうに、うつとうしい附けなさんな。

與九　附くなと言つても附けにやならぬ。（ト本舞臺へ來る。）

市郎　これ與九郎さん、よく物を積つて見なせえ、後の月から二月越し、この香合の持主へ同じことが言はれるものかな。もう一日はおろか半日でも待たれぬから、待たれぬといふのだ。

與九　さう言はれるは尤もだが、あの胡蝶の香合は、是非々々こつちへ買はねばならぬが、知つての通り濱松屋を駈落をしたおれだから、今といつては出來ねえが、兄貴の方へさう言へば、早速金をよこす積りだ。

市郎　そんなら、早く言ひなせえな。

與九　所が生憎兄分が先月お國へ出立なし、もう四五日のその中にきつと歸るといふことだ。今まで待つた待ちついでに、どうぞ四五日待つて下せえ。

市郎　いや、その言譯も今日で幾度、買人がなければ急きもせぬが、右から左り金になる買人があるから、氣の毒ながら待たれないから、あきらめなせえ。

與九　それぢやあどうでも待たれないのか。
市郎　待たれねえと言つたら、待たれねえのだ。
與九　お丶待てざあい丶、待つて貰ふまい。
市郎　よくなくつてどうするものだ、(ト行きかけるを、與九郎引戻すのでちよつと立廻つて、)こりや、汝、どうしやあがる。
與九　どうするものだ、かうするのだ。
ト脊負つてゐる風呂敷包で、そのまゝ市郎兵衛を締殺す、與九郎鼻息を窺ひ風呂敷を取るとばつたり倒れる、與九郎風呂敷の中より香合の箱を取出し、
信田家の重寶胡蝶の香合、兄貴の手より差上ぐれば、言はずと知れた褒美はずつしり、えゝ忝い。
ト押しいたゞく。時の鐘になり、後へ南鄕窺ひ出で、後から香合を引つたくる、與九郎びつくりして、それをやつてはとかゝるを立廻り、
や、汝はどうやら見たやうな。
南鄕　汝が見世へ騙りに行つた、南鄕の力丸だ。
與九　あゝ悪い者に見つかつたが、こなたが取つてもその品は賣らうと言つても買人のない、お觸の廻

つた不正な品、どうぞ私に返して下さい。

南郷　いゝや返さぬ、この品はこつちに望みがあつて取るのだ。

與九　なに、その香合を望みとは、

南郷　おれが仲間の兄弟分、辨天小僧が言譯になくてならねえこの香合、おれが貰つた呉れてしまへ。

與九　いや〳〵やられぬ大事の代物、褒美の金にせねばならぬ。

南郷　いくら汝が褒美の金にしようと言つても、そりやあ無駄だ、素人ならば知らぬこと、この力丸が手に入つちやあ、金輪奈落返しやあしねえ。

與九　うぬ、さうぬかせば一生懸命、この與九郎が腕づくで、

南郷　何をこしやくな。

ト與九郎南郷から香合を取らうとするを突廻す機に、南郷香合を落す、與九郎これをひつたくり駈出すを南郷駈け行き爭ひ合ふ中香合を舞臺へ落す、それを兩人取らうと爭ふ中、ばた〳〵になり狼の惡次郎出來り、件の香合を拾ひ上げ逸散に花道へ走り入る。

南無三、大切の香合を、

與九　これも汝故、

トむしやぶり附くを振拂ひて立廻ろ、こゝへ辨天小僧出來り見て、

辨天　や、力丸ぢやあねえか。

南郷　おゝ、よいところへ菊之助、手前が尋ぬる香合をこの與九郎が持つてゐる故、取らうと思ひ爭ふ中、あの惡次郎めがその品を、

辨天　おゝ持つて行つたか。

南郷　おゝ、ひつたくつて行つた故、後追ひかけて取返せ。

辨天　して、惡次郎が行く先は、

南郷　大門筋を眞直に、

辨天　そんなら、これより、

南郷　少しも早く。

辨天　合點だ、（ト逸散に花道へ走り入ろ。）

與九　彼奴はやらぬ、（ト何でも行かうとするので、南郷持てあませし思入にて、）

南郷　こりやもういつそ（ト與九郎を一刀切ろ、與九郎苦しみ、）

與九　うぬ切りやあがつたな、人殺しだく。

ト言ひながら立上らうとしてどうと倒れる。南郷は邊りへ心を配りながら立廻りあつて、トゞ與九郎を切倒し止めを刺し、刀の血を拭ひて鞘へ納めほつと思入、

南郷 やれ〳〵おそろしく骨を折らせやあがつた。これにつけても菊之助の安否が心元ない、後追かけて、さうだ〳〵。

ト身繕ひして行かうとする、此の中以前の玉子賣と蕎麥屋捕手裝にて、十手を持ち後へ窺ひ出で、

兩人 捕つた。

トかゝるを南郷身を躱し、刀を拔き兩人を相手に烈しく立廻り、兩人は敵はず上手へ逃げて入る。後賑やかなる鳴物になり、正面の練塀を上へ疊み上げると極樂寺の山門となる。

（山門屋根の場）――本舞臺三間莫大なる瓦葺の屋根、上手の鬼板に修復の足場をかけ、箱棟より鎖りを下げ、彼方は空の心、總て極樂寺山門屋根の體。と鳴物打上げ、大薩摩になる。

大ざつま〽それ櫻花爛漫と今を盛りの法の庭、仰げば高き山門の梢に花の白浪や、寄せては返る山風に連れて散り行く花吹雪、精舍の鐘ぞ音高し、

ト禪の勤めになり、はだしにて屋根の後より惡次郎逃げ出る、後より辨天追ひかけ出て、惡次郎を捉

へ、

辨天　さあ、われが持てる胡蝶の香合、きり〳〵おれに渡してしまへ。

惡次　え丶しみしつこい、放しやあがれ。

辨天　放したとても逃げ所は天より外へは行かれねえ。家の棟高き山門へ逃上がつたが袋の鼠、地獄落しか極樂寺の下は名におふ滑川、身動きすりやあ眞逆さま、命がをしくば寶を渡せ。

惡次　大金になるこの香合、うぬに渡してつまるものか。

辨天　何をこしやくな、（トちよつと立廻つて、惡次郎の懷より香合を引出し）これぞ尋ぬる胡蝶の香合、

惡次　南無三、それを、（ト寄るを辨天支へて）

辨天　ちえ丶忝い。

ト押しいたゞく。惡次郎思入あつて懷より玉を出し『えい』と打附けると、どんと音して掛焔硝ぱつと立つ、と花道の揚幕の中にてどん〳〵になる。辨天きつとなつて、

辨天　や丶、あの物音は、

惡次　汝を召捕る合圖の太鼓、

辨天　なんと、

惡次　寶を餌にこの屋根まで、釣り寄せたのは搦めん手段だ。
辨天　訴人なした意趣ばらし、うぬが命は貰つたぞ。
惡次　こしやくなことを。

ト兩人刀を拔きちよつと立廻つて惡次郎を切倒し、ほつと思入あつて刀を銜へ、香合を手拭に包み腹へ卷く。どん〳〵になり捕手八人突棒、さす股、錑を持出でどん〳〵にて大まくしの立廻りあつて皆々打つてかゝり、屋根の足場、鎖を使ひ捕物の立廻り十分にある。やがて辨天の手拭解けて香合落る、それを捕手手早く取り上げる、辨天それをやつてはと寄らうとする中に、捕手はその香合を下手へ投るので、辨天びつくりして、

辨天　やゝ、大切の寶を、
皆々　何を。

ト打つてかゝり辨天烈しき立廻りあつて、左右へ捕手を切倒しほつと思入あつて、

辨天　故主の御息女千壽姬を勾引かしたる言譯に、千辛萬苦で取り得たる胡蝶の香合投込みし下は早瀨の滑川、滑卷く水に行方さへ、誰白浪の身の終り、梢烈しき夜嵐に散行く花の雪ならで、これまで積る惡事の年明、今日ぞ一期に齋日の閻魔の廳へ名乘つて出る、辨天小僧菊之助が最期のほど

を捕手の奴等、間近く寄つて見物なせ。

ト思入あつて刀を取なほし、立つたまゝ腹へ突立てよろしく引廻し刀を拔く、これにて血汐流れどうと倒れる、こゝへ捕手二人かゝるを、一人を踏まへ一人を頼りに立上りきつと見得、どん／＼のズリし迫上げの鳴物になり、この屋根を後へあほり返す、とこの後に山門を取りつけある。

（山門上の場）――本舞臺朱塗の山門、極彩色、鍍金金物附、同じく高欄、左右に櫻の梢、總て極樂寺山門上の體。こゝに駄右衛門大百日褞袍にて、傍に一刀をおき、高欄にもたれ下を眺めてゐる、

駄右　（きつと思入あつて）春眠曉を覺えずと、昨夜の夢の覺めやらで、山さへ眠る春の夜に雪と見紛ふ花盛り、朧の月も一入と四方を眺めてついとろ／＼、まどろむ寢耳に打ち立つる二六時中の時ならで、音色烈しき寄太鼓、合點行かずと見おろせば、この極樂寺を十重二十重圍むは我を召捕る人夫、星にはあらで提灯の光りまばゆき星月夜、はて仰山な振舞だなあ。

ト駄右衛門下を見て嘲笑ふ。この時上下より手下二人出來りて、

兩人　頭、

駄右　おゝ、岩淵三次關戸の吾介、汝等はこゝに殘つてゐたか。

三次　さあ、この山門の梯子を引き、數百人にて取卷けば、翼があらば知らぬこと、
吾介　所詮逃げ出る手段がなければ、捕手を引受け花々しく、死ぬる覺悟の我々兩人、
三次　既に冥土の魁に、辨天小僧菊之助は、遙かに高き屋の棟にて、
吾介　立腹切つて潔く、冥土の旅の一番乘り、
三次　頭も覺悟、
兩人　さつしやりませ。
駄右　きりや菊之助は自殺なせしか、盛り短き花七日、この世へ出でゝ十七年、譬にも言ふ二十五の曉待たで散行きしか、不便なことをいたしたなあ。

トホロリと思入、兩人顏を見合せ隙を窺つて、

三次　駄右衛門、
兩人　覺悟。(ト駄右衛門を捕へる、駄右衛門二人をぢろりと見て)
駄右　扨は汝等は裏返つたな。
三次　おゝ、命がをしさにこなたの住家を、惡次郎と諸共に訴人なしたる我々兩人、
吾介　最早かなはぬ日本駄右衛門、どうで繩目にかゝるなら、手下の手柄に、

兩人 して下せえ。(ト駄右衞門兩人を振拂ひ、)

駄右 むゝはゝゝゝ、燕雀何ぞ大鵬のこの駄右衞門が心を知らんや。仁者の靑砥が下知ならば手向ひなさで尋常に、繩目に合はんがさもなくば、假令數百の人夫にてこの極樂寺を圍むとも、逃げるは腕に覺えあり、まづ血祭りに汝等兩人、死出や三途の案内しろ。

兩人 何をこしやくな。

ト駄右衞門兩人を相手に立廻りよろしくあつて、トヾ左右へ切倒す。本釣鐘、櫻の花ばら〳〵散る、駄右衞門山門の下を見込んで、

駄右 花に照り添ふ月影に見おろす下は滑川、あまたの人夫屯なし、松明振立て水中を尋ねさがすは何事なるか。中に烏帽子を着せしはまさしく我を搦めんと、討手の者の頭なるか。(トこの時三次又かゝるを振解き、花の散るを見て、)はて面白き(ト刀を突き高欄へ足を踏みかけ、)詠めだなあ。

トきつと見得、山門迫上げの鳴物になり、この山門の道具せり上がる、中央へ靑砥左衞門藤綱大紋立烏帽子、中啓を持ちゐる、とこれと同時に花道へ土橋を迫上げる、この上には幸兵衞倅宗之助香合を持ち、千原左近松明を持ちて迫上る。

藤綱 今我君の御武德にて、太平謳ふ時に望み世界を騷がす日本駄右衞門、搦め取らんと來かゝる途中

下部の者が滑川へ孔方十錢落せし故、
宗之　天下の寶の廢るををしませ僅か十錢を取り得ん爲め、
左近　五十錢の松明を焚き、土民を雇ひてこれを搜す。
駄右　扨は烏帽子を着せしは、賢者と噂の藤綱なるか。
藤綱　今十錢を尋ぬる折、計らず水底より拾ひ上げしは、信田家の重寶胡蝶の香合。
駄右　すりや菊之助が尋ねたる、胡蝶の香合が手に入りしとか。
藤綱　まことに汝は日本駄右衛門、
宗之　既に五人男と噂する盜賊南鄉力丸始め、赤星十三、忠信利平、三人とも搦めとり、
左近　まつた辨天小僧菊之助は、屋根の棟にて自殺なし、殘るは日本駄右衛門一人、
兩人　いで吾々が、
左近　何れに隱れ忍ぶとも、
藤綱　尋ねいださで置くべきか、
駄右　地獄の鬼の目を忍び、この極樂寺に隱れしが、天下の賢者と呼ばれたる藤綱殿故のぞむところ、
手向ひいたさぬ繩かけよ。

宗之　さすがは駄右衛門、健氣な一言、
左近　いで我々が、(ト兩人立ちかゝるを、)
藤綱　やれ待て兩人、窮鳥懐に入る時は、獵人もこれをとらず、當四月は先君の大法會故、それまで
は一度は見のがす放生會。
駄右　すりや、駄右衛門をこのまゝに、
藤綱　助けおくも義賊故。
駄右　仁愛深き藤綱殿の、言葉をもどくに似たれども、最早天命盡きたる駄右衛門、今繩かけて下され
い。
藤綱　すりや、駄右衛門にはこの場にて、
駄右　一命捨てるは豫ての覺悟
藤綱　惡に強きは善にもと、
宗之　はて、あつぱれな、
二人　日本駄右衛門。
駄右　いざ、繩かけて下されい。

ト駄右衛門高欄へ足をかけきつと見得、藤綱中央に、宗之助左近左右に控へ、引張りの見得、山おろしカケリにてよろしく、

幕

白浪五人男（終り）

表は笹の生垣に藪醫は知れし長庵が悪事は日々に麹町井戸より深き欲心に農夫を殺せし血汐の赤羽根而も其夜は雨降りて忘れし傘に道十郎が疑ひ受し身の濡衣乾く間もなき妻のおりよが涙に暮す瘦世帯同じ思ひの久八は世に落ぶれし屑買も心曇らぬ小鏡に添へて買たる折手本縁もしがらむ藤掛氏此主とある道之助が元手も細き小商内夫をゆすりし中間の子分の詫に忠藏が貧苦を貢ぐ情の男氣人の噂も吉原の小夜衣連れて千太郎が逃げる途中の強異見死ぬるを留むる手が外れてあへなき最期に自身の白狀折から村井長庵が牢舍と聞き早乗三次が駈込み訴訟これぞ名高き大岡政談

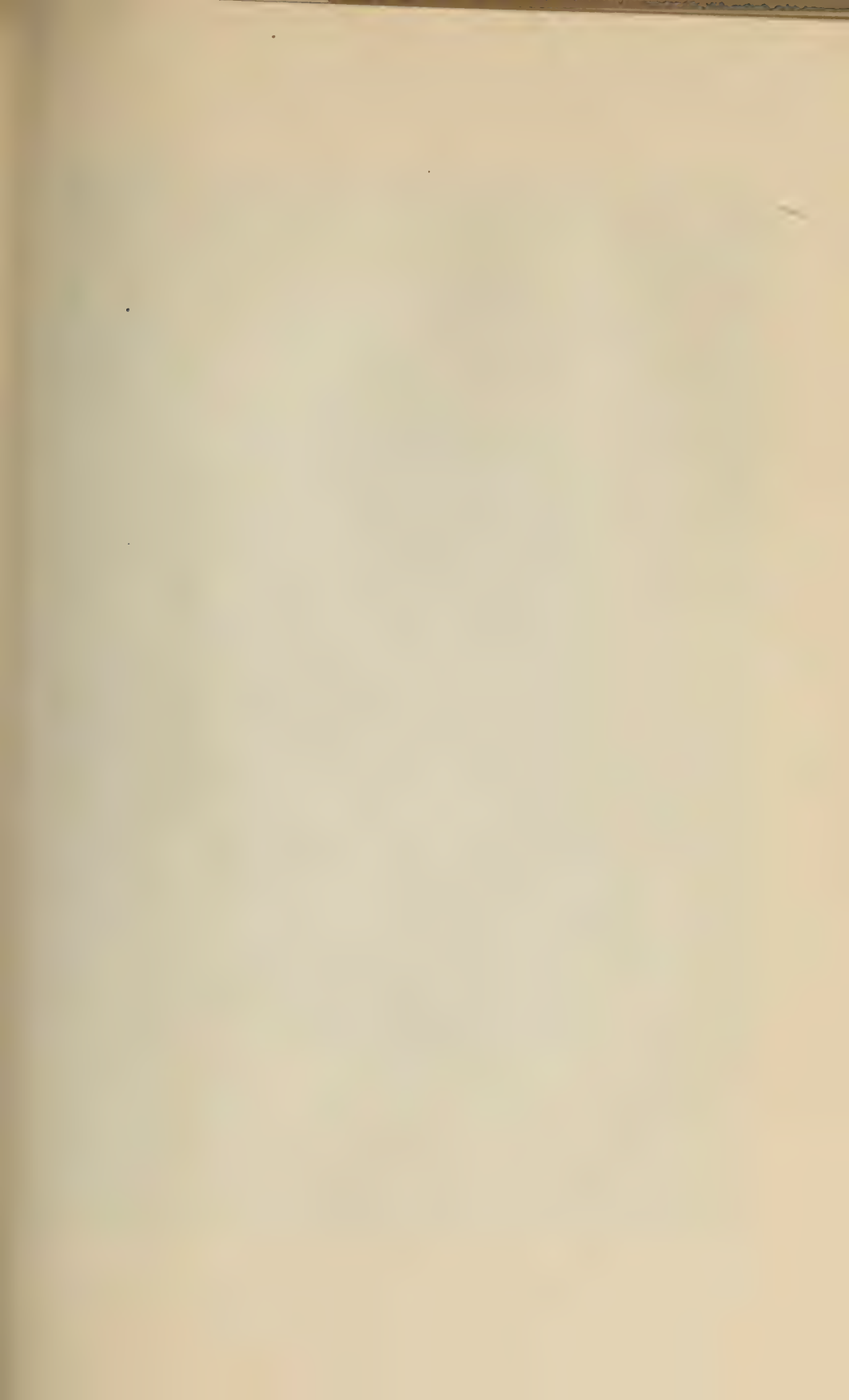
勧善懲悪覗機関

「村井長庵」は文久二年八月、四十七歳の時守田座に於て書卸され、默阿彌作中の代表作として定評がある。嘗て狂言百種の第一號として刊行されたもの。全篇を通じて陰慘なる作である。强惡無比な長庵と篤實な番頭久八とを小團次が巧みに「達者」に演じ分けたことや、後の仲藏の中村鶴藏の早乘り三次が好評であつたことや、道十郎女房おりよと紙屑買ひになつた久八とが邂逅する世話場が非常によかつたことなどが傳へられてゐる。而して日本堤の常磐津は、名文句として又式佐の作曲としても勝れたものであることなどが傳へられてゐる。三次が伊勢屋へゆすりに來て歸る引込みの洒落は、三次に扮した鶴藏が志賀山流の家元であり且つ斯流の妙手であつたからである。

書卸しの役割は、市川小團次(醫師村井長庵、伊勢屋の手代久八)、尾上菊次郎(道十郎女房おりよ)、中村鶴藏(早のり三次、甲州屋吉兵衛)、中村鶴助(紙屑屋六右衛門、百姓重兵衛)、市川市藏(人入れ貝坂忠藏)、中村福助(伊勢屋息子千太郎)、坂東三津五郎(小夜衣、道十郎忰道之助)、吾妻市之丞(重兵衛後家おそよ)、嵐雛助(藤掛道十郎、大館左馬之助)等であつた。

插繪にしたのは大正四年四月新富座上演の際の舞臺寫眞で、當市川左團次の長庵、市川左升の百姓重兵衛である。尙、扉に掲げた「語り」は書卸し當時のではなくして、明治十七年十一月新富座にて上演の「時雨雲村井破傘」の時のものである。

大正十三年十月

編者誌す

勸善懲惡覗機關（村井長庵――八幕）

序幕

麴町村井長庵宅の場
赤羽根十兵衞殺の場
平川天神裏門前の場

〔役名――村井長庵、人入れ貝坂の忠藏、浪人藤掛道十郎、百姓重兵衞。雇婆おかん、其他。〕

（村井長庵宅の場）――本舞臺三間の間、常足の二重、正面更紗の暖簾口、上手一間地袋戸棚、此上に藥研、藥袋積みあり、下手唐詩石摺の襖、上の方に障子屋體、下の方一間玄關式臺附、向うやはり石摺の襖、二重と玄關の境は四ッ目垣にて見切り、玄關の柱に村井長庵といふ表札、總て麴町町醫者長庵宅の體。二重に雇婆おかん、口入婆お百源太郎 單物の上に木綿半纏 病人の裝お萬小娘の裝三人とも藥取の體。この見得稽古唄角兵衞獅子の鳴物にて幕明く、

かん　どなたも大きにお待遠でござりまする、今午後のお廻りからお歸りなすつたばかりゆゑ、もう少しお待ちなさいまし。

源太　今朝取りに上りますのを、用があつて下町へ參り遲くなつて濟みませぬ。

お百　私は先生が御見舞なされてお加減をなされますとおつしやつたから、それを頂きに上りました。

お萬　わたしのは今日御願ひ申し、初めて取りに參りました。

源太　自由がましうござりますが、お早くお願ひ申します。

かん　此頃は時候が惡く、惡い風が流行るので大そう先生もお忙しく、お藥取の絕間がないが、何をいふにも旦那お一人、御新造も無けりやあ御弟子もなし、それでわたしが雇に賴まれ、四五日後から來ましたが、かう藥取りに來られては息をつく暇がない。雇賃を三割も增して貰はにやあ勤まらない。

源太　そりやお前の御勝手だが、今日は早く歸りたいからどうぞお藥を下さいまし。

かん　よく藥をくれ〳〵と四谷怪談の小平ぢやアあるまいし、出來れば直に上げますよ。(ト上手へ入る。)

お百　今をばさんの言ふを聞けば、爰の旦那はお一人でまだ御新造がないといふが、こりやあ聞流しにはならない事だ、よいのを一人お世話をして、お禮をお貰ひ申したいものだ。

お萬　ほんに慶庵のをばさんは聞いた事を逃さないね、直に御世話をしたいとは少しも拔目のない事だね。

源太　そこは生業柄だから、御新造の御世話をして慶庵賃で藥代を差引といふ考へだらうね。

お百　とても事に手の筋といひたい程に當てられたが、何にしろ此間から斯う風邪が流行ては、長庵さんはお仕合せだ。

源太　そりやあ長庵さんばかりぢやあねえ、何處の御醫者も大仕合せだ。

お萬　それぢやあ神農樣よりもお醫者樣は、風の神を祭つた方がよからうね。

源太　此子もなかく口が惡い。

お百　そこは鐵棒お鐵といふおつかあの娘だから、口ぢやあ男もかなはないよ。

かん　（奥より藥包を持出て來り）さあくお藥が出來ました。是が鳥屋の娘つ子生薑が一片入りますよ。是が八百屋の息子さん。又口入のをばさんのは今日は加減かしてござります。

ト三人に藥包を渡す、時の鐘鳴る。

源太　おやもうあの鐘は暮れ六ツだ。

お萬　曇つたせゐか暗くなつたね。

お百　どうやら一ト降りありさうだ。

源太　降らない中に歸りませう。

お百　大きにお世話に、

三人　なりました。（ト三人は玄關口より下手へ入る、おかん後を見送り、）

かん　なんのかのといふうち、もう日が暮れてしまつた、あしたの仕掛もしておいたれば、今日のお勤も濟んだといふもの、どれ灯りを點けておきませう。

ト稽古唄になり、おかん行燈を出し灯を點ける、此唄にて上手障子屋體より村井長庵、坊主かづら黑の羽織着流し醫者の打扮にて出來り、

長庵　此頃の流行風で不斷暇な長庵も朝からの藥取りに、たつた一人でほつとした。先づ今の三人で片附いた、（トいひながらおかんを見て、）おゝ雇のをばさん、大きに御苦勞だ。

かん　いえ私よりは旦那さまは、嘸お勞れでござりませう。

長庵　なに、幾人病人があらうとも、馴れた事故苦にはせぬが、こなたは日々忙しないので、骨の折れることだらう。さうして用は片附いたかな。

かん　はい、あしたの仕掛も何もかもとうに仕舞ましたから、けふは少し早くお暇をお貰ひ申したうござります。家の嫁が產み月で蟲がかぶると申しますから手傳つてやりたうござります。

長庵　それは困るであらうから、あしたの用を片附けたら早く家へ歸るがいゝ。

かん　有難うございます。

長庵 明日も早く來て下され。
かん 畏りましてござりまする。(ト此時雨車になり、おかん門口をあけて見て、)おや〳〵雨が降つて來た。
もし旦那樣降出しましたから、お傘をお貸し下さりませ。
長庵 おゝ持つて行くがよい。
かん (下手に掛てある傘を取つて、)左樣なら、又明日あがりまする。(トおかん傘をさし下手へ入る。)
長庵 雇ひ女といふ者は兎角に口のさがないもの、それゆゑ夜は家へ歸すが、後は一人で不自由なことぢや。

ト雨車、時の鐘になり、花道より藤掛道十郎羽織着流し、大小、浪人の打扮下駄にて、井桁に藤といふ印の附し白張の傘をさし出來り、

道十 未殘暑も去り兼ねて凌ぎ難きに此雨は、まことに天の賜物ぢや。雨中ながらも下駄がけで歩行の出來る樣になつたは、長庵老のお蔭ゆゑ、ちよつと今日は禮ながら音信て行きませう。(ト玄關口へ來り、)頼み申す、先生は御在宿でござるかな。
長庵 (出て來り、)これは〳〵藤掛氏、ようこそ御入來下された。まあずつとお通りなされませ。
道十 然らば御免下さりませ。(ト傘を玄關へ置き、二重へ來る。)

長庵　生憎雇の女が出ましし、お茶さへも差上げませぬ。

道十　それは御無用になし下さりませ、拙者も追ひ〱全快に赴き、夕刻より神詣を致し、御禮旁々此樣子を御覽に入れたく存じまして、お立寄り申しました。全く先生の御丹誠ゆゑ忝なう存じまする。

長庵　それは何よりの事でござる、愚老も丹誠は致したなれど、此邊迄御歩行が出來ようとは存じませなんだ、誠に大慶な事でござる。いや仕合せと配劑の藥能が見えまして、御同然に重疊でござる申さずともの事ながら、元より醫は仁術にて、今日暮しの其爲に醫を業になす者は必ず病は治らぬもの、貧なる者に高價の藥を用ひ難いと算用すれば是賣藥同樣の業、いやしくも愚老などは我が預つた病人は是を親とも子とも思ひ、此病症に此藥が適當なりと見極めれば高價を厭はず用ふるゆゑ、必ず癒えざることはない、實に慾心を離れねば名醫にはなられぬと我師よりの申傳へ、斯く貧乏は致し居れど、療治に掛つて損益は少しも厭ひは申しませぬ。

道十　いや先生の御心底感心致してござりまする。今仰せられました表を飾る醫師のみが、世界に多うござりまするわ。

長庵　愚老などは幼年より醫道が至つて執心にて、江戸へ參つて師を選み、日夜修行致しましてやうや

う醫者の數に加はり、多く病人を手掛けましたが貴殿の樣な胸痛は今迄療治を致しませぬが、餘程御心勞をなされた事と推察致しまする。

道十 いかにも貴老の仰せの通り、種々心勞致しました。斯く御入魂に相成る上は包み隱さず打明けて只今お話し申すでござる。(ト思入あって)元某は鹽冶の藩中、主君不慮の御生害より大石殿を初として同志の者一味なし、亡君の仇を報ぜんと思ふに甲斐なき此身の不幸、健忘の病に犯され人事を忘れし身の悲しさ、遂に其夜の列に洩れ誓ひし同志の手前といひ、亡君への申譯に切腹せんと思へども、刄を見れば身は震へ本意を遂せぬ其中に家内の者に見咎められ、空しく月日の經つ中に同志の者は切腹と承つて口惜しく、有て甲斐なき武士の不具の體を悔むのみ、其後病は癒えたれど六日の菖蒲十日の菊、此上は剃髮なし亡君初め同志の者の菩提を問はんと思ひしが、一ツの障りは幼き伜、何卒主君の御緣家へ仕官させんと思ふに附け、伜が成人致す迄剃髮なすを思ひ止まり、流浪なして此年月苦勞致す心氣の勞れが打つて出で、病となり御厄介になりました る世にいひ甲斐なき我身の上、御推量下さりませ。

長庵 初めて今日承はつたる御不仕合せな御身の上、是迄長の御心勞さこそと御察し申しまする、然し世界は譬にいふ七轉八起とやら、今に御子息が御成長なされ御仕官なされる其時は、どの位な

御悦び、必らずきなく思召すな、折角御全快になる所跡戻りが致しましては、愚老の丹誠も水の泡、今迄の事は皆夢とお諦めなされまして御養生が専一でござりまする。

道十　いや拙者とした事が、御親切に任せ我身の上の長物語り、御免なされて下さりませ、以後は仰せに隨つて養生專一に致しませう。最早御藥を呑切りましたれば、序ながら御貰ひ申して歸宅致したうござりまする。（ト懐ろより服紗に包みし藥疊紙を出す。）

長庵　もう少し上りますれば、必ず御全快に至ります、只今調合致しますから、暫時御休息なされませ。

ト唄になり、長庵上手へ入る。道十郎は莨を呑み居る。花道より百姓重兵衛麻の羽織、單物、脚絆、尻端折跣足にて白張の大黒傘を持つて出て來り、

重兵　吉原から麴町まではよつほどの道程ぢや、暮れぬ中戻らうと思つたなれど、娘が引留め歎き居るので、つい手間取り大ぶ遲うなつたゆゑ、急いで出ると雨に降られ傘を買つて爰迄來たら、雨はさつぱりと晴れてしまつた。嘸兄貴が待つてゞあらう。早う歸つて何もかも首尾した話をして聞かさう、（ト天水桶で足を洗ひ、手拭でふき玄關へ上りながら、）兄貴、今戻りました。

ト二重へ出て來る、上手より長庵藥疊紙を持出て來り、

長庵　おゝ重兵衛歸つたか、手間どつたから案じをつたが彼方の首尾はよかつたか。

重兵　何もかもお前樣が掛合つて置いて下すつた故、すら〳〵と濟みましてお梅が身の代五十兩の内で身附とやらが三兩に、判人とやら世話人とやら三治とかいふ人が判賃世話賃で五兩、都合八兩引かれまして、四十二兩受取つて來ましたが、引け道の多いものでござりまするな。

長庵　かやうな事には種々の散り金の多いものぢや、兎角身賣の習ひで仕方がない。シテ四十二兩の其金は慥に受取つて參つたか。

重兵　それはしつかりと胴卷へ入れ、腹へ縛つて置きました。

長庵　むゝ、すりや懷中の胴卷に、

重兵　はい、左樣でござりまする。（ト長庵重兵衞の懷ろへ思入。）

長庵　うつかりして盜賊に取られぬ樣にしたがよい。

重兵　命掛の金なれば、何で疎に致しませう。

長庵　娘の體に換へた金、空にしてはならぬぞよ。

重兵　なんで空に致しませう、其身を苦界へ沈めるやうな言はゞ邪慳な兩親を、わたしが家に居なかつたら何かに附けて便なく嘸不自由な事であらう、それが悲しうござりますと、身を賣る親を恨みもせず、涙にくれて案じ居るあの孝行な娘をば辛い勤めをさせるといふは、何たる因果な事なる

かと、胸に溢れる涙を呑み込み、やう〳〵堪へて戻りました。(ト手拭を額へ當て泣く。)

長庵　おゝ尤もだ〳〵、嘸別れともないことであつたらう、此長庵にも實の姪こんな不便な事はない、(ト愁ひの思入あつて、)あゝ長棒にでも乘る己なら、假令他借をしてなりと手助を仕樣もの、力づくにも腕づくにも及ばぬ者は貧の病、こんな悔しい事はないが、然し死んだといふ譯でもなし年が明ければ元々の親子一つになることだから、それを明暮樂しみに、時節を待つより外はない。まあさう思つて諦めるがよい。

重兵　今お前樣のいふ通り、諦めるより外はない、もう〳〵歎きはしませぬから御苦勞なすつて下さりますな。

長庵　(道十郎へ向ひ、)是はとんだ粗相を致しました、藤掛氏の御出を忘れ、思はぬ失禮致しました。どれお茶なりと入れませう。

道十　いや〳〵御構ひ下さるな。

長庵　いやお藥迄も忘れてをつた、これは生薑が入りますぞ。(ト藥疊紙を出す。)

道十　左樣でござりますか、(ト藥を袱紗へ包み、)何か子細は存じませぬが、だいぶ御心配の御樣子と見受けましてござりまする、手前も覺えのある事故、御察し申し上げまする。

長庵　最前貴方の御物語り承はりましてござりまするが、是なる弟重兵衛が薄命なる身の上噺し、

重兵　然ししみ〴〵おちかづきにもならぬあなたへ、身の上を、

長庵　いや袖振合ふも他生の緣、まあお聞下さりませ。斯く御別懇になりしゆゑ弟が薄命、此身の素性包まずお話し申しますが、元來愚老が生國は三河の國藤川在、重左衛門と申す小百姓の家に生れし者なるが、同胞とては妹一人、追々成長する中に兩親共に死去致し、田畑も少々ござれども、素より虚弱の愚老ゆゑ鋤鍬を取ること出來ず、幼年よりして醫道を好み醫者になり度き志願にて跡式を妹へ讓り、聟を取つて我家の相續させんと思へども、親類緣者もござらねば村役人へ相談なし、媒人あつて近村より此重兵衛を貰ひ受け、妹そよとめあはせて二人の者へ家督を讓り、愚老は直に當地へ參り、專ら醫道の修業なし、やう〳〵醫者になりまして微な暮しをして居りまする。

重兵　又跡式を引受けまして間もなく一人の娘をまうけ、悦びあれば悲しみと夫婦共長煩ひ、かてゝ加へて凶作續き、年貢の未進に仕方なく、所持の田畑を質入なし一時の難儀を凌ぎましたが、その田畑が受け戻されず、今年はいよ〳〵貸方へ取られる事になつたので、それを免やかう苦勞して、女房おそよが血勞の煩ひ、

長庵　實に二人が難儀をば、聞けば聞く程哀れな話し、妹の病氣も心氣の勞れに大人蔘と犀角を用ひぬ時は助からぬと申せど、是も亦金づく、

重兵　此難儀をば娘が聞き、わたしの體を廓へ賣り、金調へて下されと殊勝な詞に力を得て、不便な事とは思へどもわしは養子の身分ゆゑ、田畑を外へ渡しては先祖は元より世間へ濟まず、脊に腹は替へられず泣きの涙で娘を連れ、江戸へ出て來て兄を頼み、掛合方をして貰ひ、今日吉原へ連れて行き娘を苦界へ沈めまして、田畑の金と藥の代に受取つて來た身の代金。モシ御客樣、切ないわしが心の內、お察しなされて下さりませ。

長庵　なんと弟が身の上は、不便な事でござりますな。

道十　段々とのお話しを承はつて身につまされ、思はず落涙致しました。

ト三人愁ひの思入。道十郎鼻紙にて涙を拭ふ。

長庵　いや飛んだ話をお聞かせ申し、お茶もろく〳〵上げませぬ。

道十　決してそれには及びませぬ。（ト時の鐘鳴る。）今鳴る鐘はもう五ツ、最早御暇致しませう。

長庵　只今お茶を入れますれば、もそつとお話しなされませ。

道十　いや左樣致しては居られませぬ。しかしよい折參り合せ、先生の御舍弟にお目に掛つてござりま

する。

重兵　へい私もあなた樣にお近附になりましたが、もう明日は出立致し、國元へ歸りまする。

道十　それはお名殘り惜しうござるが、道中御機嫌よろしう、

重兵　あなた樣にも御大切に、御養生なされませ。

道十　いや思はぬ長座致しまして、嘸御迷惑でござりましたらう。

長庵　一向にお構ひ申さず、失禮のみ申しました。それ、御提灯を、

重兵　畏りました。（ト下手の提灯を取り、灯を附ける、道十郎立上り、）

道十　いえ〳〵それには及びませぬ。

長庵　道が暗うござりますれば、

重兵　是をお持ちなされませ（ト提灯を出す。）

道十　それではお借り申しまする（ト提灯を持つて玄關口へ出る。）

重兵　左樣なれば御浪人樣、

道十　御緣もあらば、

長庵　又その中。

道十　お目にかゝるで、

三人　ござりまする。

ト唄になり、道十郎提灯を持ち、傘を忘れて花道へ入る。重兵衞後を見送り傘を見て、

重兵　や、此傘は、

長庵（見て）おゝそれは今の道十郎どのが、最前さしてござつたのぢやが、雨が止んでをつたので忘れて行かれたものと見える。

重兵　わしが持つて行きませうか。

長庵　いや、あした屆ける序があらう。（ト元の所へ來る。）

重兵　あの御浪人も御苦勞をなされたお方と見えまして、此方の話しを聞かれしやつて貰ひ涙をこぼして居られた、人に人鬼はないものぢや。ときに最前もいふ通り、お前のお蔭で娘をば吉原へ勤に遣り、金受取つて來ましたれば、少しも早く國へ歸り、嚊に委細を話して聞かせ悦ばせたうござりますから、翌日の朝六ツ立にわしは立ちたうござりまする。

長庵　なるほどそれもさうなれど、此間から心配して定めて勞れてござらうから、もう一日も逗留して勞れをやすめて行くがよい。

重兵　わしもさうして居たいけれど、少しばかり勞れたけれど金が手に入り嬉しいので、さつぱり忘れて仕舞うたれば、早う戻つて質入した田畑をこつちへ受戻し、人蔘や犀角を嗅に呑して遣りたいゆゑ、あした立ちたうござりまする。

長庵　さう思ふのも尤もだから、あした六ツに立ちなさい。こなたの樣な親切な亭主を持つたは妹の仕合せ、此兄も安心して誠に嬉しく思ひます。

重兵　いえ〳〵わしが聟に來てから不慮の難儀が重なつて、何一つ出かした事なくお前に迄も御苦勞掛け、働きのない此重兵衛、其樣に言れては穴へでも入らねばなりませぬ（ト天窓をかき面目なき思入）

長庵　よしない事を言ひ出して、却つてこなたに氣の毒だが、そんな事は取りおいて、翌日の立ちも早いから奥へ行つて寐たがよい。

重兵　暗い中に立ちますから、それでは先へ臥りまする、どうか寐忘れ度くないものだ。

長庵　わしが起して進ぜるから、其心配には及ばない。

重兵　それでは濟まぬが先へ寐ます。

長庵　金は大事にして居なさいよ。

重兵　胴卷へ入れてしつかりと、腹へ結へてござりまする。

長庵　用心をしてゆつくりと、
重兵　極樂往生しませうか。
長庵　えゝ旅立前に不吉な事を、
重兵　ほんにさうぢや、鶴龜々々。
長庵　さあ、少しも早う、
重兵　そんなら兄貴、
長庵　六ツが鳴つたら起しますぞ。
重兵　どうぞお賴み申します。(ト上手へ入る。此時雨車になる。)
長庵　えゝ又降つて來たか。(ト玄關口へ來り、空を見て以前の道十郎の傘を取つて、)井桁の内に藤の字の此傘は、道十郎がさつき忘れていつたのだが、こりやいゝ物があつたわえ。(ト傘を持ち二重へ來り、上手の家體を窺ひ、)重兵衛どん、寐さしつたか、重兵衛どん／＼。晝の勞れで高鼾、もうぐつすりと寐込んだわえ。(ト時の鐘、すごみの合方になり長庵障子の隙から内を覗き、思入あつて、)雨が降つても明け六ツでは、東の方がしらみかけ、もう人影の見える時分、ちつとこつちの都合が惡い、何でも今夜八幡の八ツを打つたら支度をさせ、六ツだといつて立たしても土地の勝手を知ねえ重

兵衞、迂闊立つに違えねえ、さうしたならば後を附け場所を見定め裏通しに先へ駈け拔け待伏せして、首尾よくやつた其跡へ此傘を捨てゝ置けば、向うへ科の掛るは必定、醫者の匙より惡計はよつぽど廻る此長庵。（ト此時奥にて、ばつたりと音する。長庵思入あつて、）今の音は、押石か。

（トうなづくを木のかしら、）えゝびつくりした。

ト胸をさする雨車時の鐘合方にて、

と時の鐘にてつなぎ、尻明に直に引返す。

ひやうし幕。

（赤羽根橋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面に眞向の赤羽根橋、上の方本屋根駒寄せ附の高札場、松の立木・下の方海鼠壁屋敷長家の張物にて見切り、橋の下手松の立木、後ろ增上寺の黑門、樹木の茂み、五重の塔土器町森元あたりを見たる夜の遠見、總て赤羽根橋南詰の體よろしく。雨車時の鐘にて幕明く、と上手より赤合羽饅頭笠を冠りし中間二人、六尺棒弓張提灯を持出て來り、捨ぜりふにて舞臺を廻り下手へ入る。時の鐘、凄みの合方、橋の彼方より長庵頰冠り尻はしをり、一本差跣足、藤掛の傘をさし駈出し出て來り、後を振り返り見て高札場の蔭へ隱れる。と橋の彼方より百姓重兵衞菅笠を冠り、二枚繼の蓙を引掛け、小田原提灯を提げ出て來り、橋の上にて、

重兵　かう大降になららうとは思はないから出て來たが、菅笠では凌げない、それに又眞つ暗でまだ明けさ

うもない樣子、最前打つたは六ツではなく七ツの鐘であつたと見える、早く夜が明けてくれゝば
よい、こんな困つた事はない。（ト いひながら平舞臺へ下りる、此時本釣鐘の七ツを打つ、）おゝ丁度幸
ひ鐘がなる、何時だらう算へて見よう。（ト 指を折り數をかぞへて、）や、今鳴る鐘はありや七ツぢや、
さうして見ると麴町でさつき聞いたのは八ツだと見える、まだ六ツ迄には一刻ある。はて扨とん
だ事をしたなあ。

ト思案の思入、後ろより長庵窺ひ出て一腰を拔き、提灯を切落す、重兵衞ヤアと悧りする所を、
長庵後ろから切下げる。

やあ人殺し、人殺し〳〵、

ト菅笠切れて逃廻る、追廻はして切り附け〳〵雨車にて立廻り、重兵衞の口を押へ、脇腹へ突込む、
糊紅になり、重兵衞立身にて苦しみ、ばつたり倒れるを乘掛つて止めをさし、白刄の血を拭ひ鞘へ納
め懷中を探り胴卷を引出し、探り見てにつたり思入、

長庵　丁度時刻も寅の刻、千里一飛闇雲に後を附けたる暗まぎれ、篠突く雨に往來のないを幸ひばつさ
りと夜網にあらぬ殺生も、僅五十に足らねえ金、人の命も五十年長い浮世を長袖の小袖ぐるみで
交際も、丸い天窓を看板に醫者といふのが身の一德、然し十德を着る長棒に所詮出世の出來ねえ

のは、言はずと知れた藪育、蚊よりもひどく人の血を吸取る惡事の配劑は數年馴れたる我匙先・現在妹の亭主ゆゑ言はゞ義理ある弟だが、金と聞いては見逃されず、手荒い療治の血まぶれ仕事・酷い殺しも金故だ、恨みがあるなら金に言へ。どれ、そろ〳〵と出かけようか(ト傘を捜し取って)あゝつめてえ、びつしより濡れた、いや濡れぬ先こそ露をも厭へ、此傘を捨て置きやあ殺したものは、

ト言ひかけ、邊りへ思入あつて、傘をはうり出すを道具替りの知せ、

いゝ智慧だなあ。

ト雨車早き合方にて此道具廻る。

(平河天神裏門の場)――本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せ黒澁塗りの冠木門、左右黒塀上手開帳の立札、下手茶見世揚縁を上げ、雨戸締りある家體、正面の門片扉明掛けてある。下手に縫ぐるみの犬寐て居る、總て麹町平川天神裏門前の體。雨車合方にて道具留る。と堀の内朝參の仕出し三人・脚絆草鞋大黒傘をさし長提灯を持出て來り、まだ殘暑が暑いから朝參りに行くといふせりふあつて、花道へ入る。と上手より以前の長庵ずつぷり濡れて早足に出て來り、

長庵 えゝ意地惡く降る雨だ、傘がないからぐつすり濡れたが、爰迄來りやあ安心だ。(トいひながら袂の

水を絞り、）これでよつほど輕くなつた。

ト此聲を聞き犬起上り長庵を見て、ワン〳〵〳〵と噛み附くやうに吠えるゆゑ、

長庵　シツ〳〵、えゝ此畜生め、吠えやあがるな（ト追廻すが犬吠えるゆゑ持あまし、）うぬも序に（ト手早く脇差を抜き、切附ける。犬縫ぐるみさけて血綿出で、ワン〳〵とくる〳〵廻つて倒れる。）こいつも啼かざあ殺されめえに、

ト手拭にて血を拭ひ鞘へ納め、身拵らへする。此中門の内より貝坂の忠藏半合羽尻はしをり一本差足駄がけ澁蛇の目の傘をさし、小田原提灯を提げ、朝參りの歸りにて何心なく出て來て、双方舞臺にて行合ひ思はず顔を見合せ、長庵花道へ足早に行くを忠藏思入あつて提灯を差出し、

忠藏　はて見たやうな、

ト長庵花道にて、

長庵　えゝ、

ト礫を打ち、提灯をぱつたり落す、これを木の頭、長庵下にゐる。

忠藏　あゝ白んで來たか。

ト空を見上げてこなし、烏笛早き合方にて、

ひやうし幕

と幕引附けると長庵立上り、後を見返り早き合方、寺鐘にて、足早に花道へ入る。

二幕目

赤羽根辻番詮議の場

〔役名〕――村井長庵、藤掛道十郎、役人笹川軍藏、同津山主水、家主杢右衞門、同九兵衞。道十郎女房おりよ。〕

(辻番の場)――本舞臺三間の間中足の二重家體、正面一面の板羽目、六尺棒捕繩など掛けあり、蹴込み板羽目、此前二重上下折廻し駒寄せ、突棒刺股もぢりを掛け、後ろ草土手漆の立木、總て辻番の體。上手へ軍藏野袴ぶつさき羽織、脇差、刀を傍へ置き住ひ、下手に主水同じ打扮にて控へ、硯箱を前へ置き、筆紙を持ち口書を取つて居る。平舞臺上手に長庵黒羽織着流し一本ざしにて控へ、此脇に重兵衞の死骸莚を掛けあり、下手に杢右衞門羽織袴家主にて控へ居る、菖蒲革の足輕四人六尺棒を持ち警固して居る。この見得山内の時の太鼓にて幕明く、と時の太鼓を打上げ、合方になり、

軍藏 こりや長庵、

長庵 はつ、

軍藏 其方が妹聟重兵衞が所持の金子は、娘梅を吉原町へ賣渡せし身の代とな、

長庵　御意にござりまする。申し上げるも涙の種、重兵衞事は十年此方不仕合せの其上に、日照水損凶年續き、年貢の未進に持傳へし田畑を遂に質入なし、一時の難儀を凌ぎましたが、女房そよが血勞にて三年餘りの長煩ひ、困り果てたる其所へ質入なしたる田畑の期月に、小前なれども先祖より持傳へたる事なれば、他へ渡しては位牌を初め世間へ濟まぬと堅い心に、娘を連れ拙者方へ尋ね參り、段々との物語に餘儀なく世話する者を賴み、丁子屋方へ五ヶ年にて五十兩に賣りましたる身の代金にござりまする。

主水　すりや、重兵衞が娘を其方が世話を致し、丁子屋方へ賣つたるか。

長庵　へい外に知邊もござりませねば、宿屋にをれば日々の旅籠代も出ますれば、私方へ止宿いたさせ萬端世話を致しまするも、私在所に居りますれば家督相續なすべき身分、幼年の折より醫道を好み當地へ參り修業なし、末始終帶刀でも致し度く存じまして此重兵衞を貰ひ受け、國の家督を讓りまして私は只管に醫道を勵みましたれども、青雲來らずしがない暮し、それゆゑ助力致し度く存じますれど心に任せず、せめて手足でなす事でもと其手續きに駈歩き、成たけ物の入らぬ樣致し遣はしましたるも、今日となりては水の泡、殘念至極にござりまする。何卒弟重兵衞が敵此傘の持主を、御吟味の程願ひ上げまする。

軍藏　おゝ其方が願はずとも、詮議なすは此方の役目、先刻の申立てに、直さま麹町へ道十郎を召捕りに遣はしたれば、只今に參るであらう。

主水　かゝる證據の有る上は脫れ難なき道十郎、篤と是にて詮議なさん、最早只今參るであらうから其方は控へ居よ。

長庵　有難うござりまする。

杢右　人は見掛に寄らぬもの、蟲も殺さぬ顏附で切取するとは太い奴、然し證據の傘があつて直に知れるといふものは、天の御罰でござります。

長庵　是を思ふと杢右衞門殿、惡い事は出來ませぬな。

杢右　何しろ重兵衞殿は、敵が知れて嬉しからう。

長庵　嘸嬉しうござりませう、（ト莚の掛てある死骸へ向ひ、）これ重兵衞悦ばつしやい、今に御上の威光で敵を取つて下さるぞ、草葉の蔭で待つて居やれ。どういふ事か現在の血を分けた妹よりそなたを親身の弟と、力に思うて居る長庵、今朝斯う〳〵と聞いた時あまりの事に悔りなし、足も地へは附かなんだが、是に附けても不便なは國に殘つた妹おそよ、一人の娘を勤に出し便りすくない身の上に、こなたが人に殺害され死んだと聞いたら歎きの餘り、女子の事ゆゑ取詰めて其儘にでも

なりはせぬかと、そればつかりが案じられる。あゝ斯ういふ事のある故か、そなたが早く立たうといふを立たしともなく留めたれど、ちつとも早く國へ歸り女房に見せて悦ばせたいと言はるゝのも無理ならねば、言ふに任せて立たしたる後ろ影が氣に掛り、どうかかうかと案じたも頼みに思ふ兄弟の別れを蟲が知らせしか、あの時留めておいたなら斯ういふ事にはなるまいに、悔しい事を致しました。

ト長庵涙をこぼしよろしく思入、此内軍藏主水囁き合ひ、軍藏是をまことと思ひ、

軍藏　こりや〳〵長庵、其の歎きは尤もながら、殺害されし重兵衛が敵は今に取つて遣はす。

ト長庵平伏して控へ居る、ばた〳〵になり下手より捕手一人走り出で、

捕手　はつ、仰付けられましたる浪人藤掛道十郎、召連れましてござりまする。

軍藏　おゝそれ待兼ねた、急いで是へ、

捕手　はゝ、

ト引返して入る、說經樣の合方になり、下手より道十郎着流し羽織大小にて、九兵衛羽織袴同じ打扮の五人組治郎右衛門附添ひ、捕手に前後を圍まれて出で來り、

捕手　下にをらう。

道十　はつ（ト平伏し下手へ控へる。）

軍藏　麴町三丁目九兵衛店道十郎とは其方か。

道十　はつ、拙者めにござります。

主水　苦しうない、それへ出よ。

道十　御免下さりませ、（ト式臺へ住ふ。）

主水　其方は町役人か。

九兵　はつ、卽ち家主九兵衛、

治郎　五人組治郞右衛門、

兩人　差添ひましてござりまする。

道十　や、そこにござるは長庵殿か、

長庵　おゝ道十郎殿よう來て下さつた。

道十　（不審さうにして、）はて思ひがけない、此の所に。して、拙者めに御尋ねの儀は。

軍藏　其方に尋ぬるは。こりや其の傘是へ。

足輕　はつ（ト前幕の傘を軍藏の前へ置く、軍藏開き見て、）

軍藏　こりや其の方が所持の傘か。

道十　いかにも、拙者の傘にござりまする。

軍藏　確と相違ないか。

道十　相違ござりませぬ。

軍藏　然らば夜前當所に於いて、それなる長庵が妹聟駿州藤川在百姓重兵衛を殺害なし、所持の金子五十兩奪ひ取りしは、其方ぢやな。

道十　（びつくりして、）こは思ひ掛なきお尋ね、道十郎身にとつて毛頭覺えござりませぬが、何ゆゑに拙者めに御疑ひはござりますな。

主水　おゝ今其方が所持と申せし其傘が、重兵衛の死骸の側に有りしゆゑ、正しく道十郎が所業なりと長庵が申すにより、其方を呼寄せしが、申譯の筋あらば逐一に申立てよ。

九兵　これ／＼道十郎殿、一ト方ならぬ御疑ひ言ひとりが惡い日にはわしまで難儀となる事なれば、心落附けとつくりと申譯をさつしやりませ。

道十　別に申譯の儀もござりませぬが、證據と成りし其傘は昨夜それなる長庵方へ、病氣全快の禮旁ゝさして參りましたる處、歸宅の砌り雨も止み忘れて歸りましたるが、如何致して其の傘が其所に

落ちてござりましたか、一圓合點がまゐりませぬ。

主水　むゝ、すりや其傘は長庵方に其方忘れ歸りしか。

道十　參る折には小雨が降りましたゆゑ傘をさして參りしが、雨中のつれ〲四方山の雜談に時うつり歸る折には雨も止みましたゆゑ、つい傘を失念致し歸宅なしてござりまするが、もしやそれなる重兵衛がさして參りし物なるかと、拙者は左樣存じられまする。

主水　いかさま左樣な儀もあらん。笹川氏いかゞ思召すな。

軍藏　されば道十郎が申し口尤もの樣なれど、片口にては相分からぬ。こりや長庵、今道十郎が申す通り、其方宅へ此傘は忘れ置きしに相違ないか。

長庵　（思入あつて、）其儀は全く僞りにござります。

軍藏　なんと申す。

長庵　彼は先達より不快にて私療治致し遣はし、全快に及びしゆゑ禮に參つてござりまするが、其折には雨止にて傘は持參致しませぬが、只今の樣に申しますは跡方もなき僞りにござりまする。

道十　（是を聞きせき立ちて、）これ長庵殿、僞りとは何事ぞ、而も入口の片隅へ雨水きつて立掛置きしを。こなたも眼前見てござつたに、傘は持參いたさぬ抔とまざ〱しく言はるゝは、こりや一物あつ

ての事ぢやな。

長庵（わざと悔しき思入にて、）はて怪しからぬ事をいはるゝわえ。さういふ人とは知らぬゆゑ、浪人暮に長の病氣、嘸や難儀と推量なし、十日の物は五日にて早く全快なす樣と、仁術施す所ぞと、價の高い藥を惜しまず肥立も早く其樣にあるける樣に誰がしました、其恩のある長庵へ恩を仇にて返すとは、ても恐しい心ぢやな。あゝ神ならぬ身の知らざれば、つい四方山の話から、是なる弟重兵衛が娘を賣つた五十兩明日は金を持參なし國へ歸ると云ふ事を、迂濶いふたがこつちの過り、女房子のある浪人殿、こんな事はあるまいと思ふはわしが正直故、こなたは大方あの折に聞いたを幸ひ後を附け、所を放れ重兵衛を殺害なして五十兩は、こなたがとつたであらうがな、見覺のあるこなたの傘、其場にあつたは遁れぬ證據、これ天道がお免しなされぬぞ、包み隱さず白狀さつしやれ。

道十　白狀とはなにが白狀、傘は忘れ歸つたれど重兵衛を殺せしなどゝは、身共かつて存ぜぬぞ、強ひて申掛け致すに於ては　其分には差置かぬぞ。（ト道十郎きつとなる。）

長庵　あれ〱、しら〲とあのやうな事を申しまする。ふとい人だな。

道十　まだ〱申すか。（ト立掛るを、）

軍藏　兩人控へい。

道十　はつ（ト道十郎控へる。）

軍藏　未だ善惡知れざるに、私の爭ひ控へてをらうぞ。最前より兩人が申條承はるに長庵が申條いちいち尤もに思はるゝ、殊に道十郎が所持の傘死骸の場所に落散りありしは、慥な證據。道十郎其方にも云ひ開きの慥なる證據あるか。

道十　別に證據はござりませぬが、人を殺して金子を奪ふ左樣な企みを致す者が、後日の證據になるべき品を後へ殘して歸りませうや、そこらの所は憚ながら御賢察下されえ。

軍藏　いや其方が申譯尤ものやうなれども、あながち印のある物を取落さぬとも言はれまい、よしんば夜盜家尻切家財を盜み出る時身に附く品を取落し、それが足にて召捕られ詮議に逢ふは往々ある事、其方迚も其如く所持なす傘が死骸の傍に落散りありしを、只長庵が宅へ置參りしとばかりでは相成らぬわえ。

ト道十郎軍藏へ思入あつて覺悟のこなし、長庵嬉しき思入。

長庵　あゝ有難い其お詞、非業に死んでも卽座に敵の知れしは弟の仕合せ、それに附ても此傘の側にあつたは天の助、有難う存じまする。（ト此内主水長庵へ目を附け、）

主水　して長庵には、其傘を道十郎が所持なることは如何致して存じをつたぞ。
長庵　え（トぎつくり思入。）
主水　どうして知つた、
長庵　先達てのことなりしが、彼が宅へ見舞に參り夜に入つて歸宅の折借受けし、提灯の印をもつて存じをります。
主水　すりやそれ故に長庵には、一目見るより道十郎が所持の品と知つたるとか。
長庵　はつ。
主水　はて記憶のよい事ぢやな。（ト思入、軍藏は道十郎が業と心得）
軍藏　かく證據のある上は脱れ難なき道十郎、詮議中入牢申附くるぞ。
道十　すりや覺えなき拙者めに、
軍藏　覺えないと申せども、證據なければ脱れぬぞ。
道十　むゝ、
軍藏　但し存ぜぬといふ證據があるか。
道十　さあ、

軍藏　證據がないか。

道十　さあ、

軍藏　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

軍藏　どうぢや。（トきつとなる。）

道十　はつ（ト是非なくさしうつむく。）

軍藏　それ道十郎に繩打て、

捕手　はつ、

　　ト立掛る。ばた〳〵になり下手よりおりよ屋敷者と見える世話女房の打扮抱子を抱き出て、

りよ　はつ暫く、暫くお待下さりませ。（ト下手へ出て控へる、足輕立掛り、）

捕手　やあ、其方は、

皆々　何者なるぞ。

りよ　はつ私事はそれなる道十郎が妻りよと申しまする者にござりまする。

主水　こりや、女の身にてかゝる席へ何用あつて參りしぞ。

りよ　俄の御召は何事なるかと案じるに附け胸騒ぎ、見る事聞く事氣にかゝり居ても立つても居られぬゆゑ、道之助に家を頼みこれをば連れて參りました（ト抱子泣くをいぶり附け、）おゝたがよく〳〵。

軍藏　して其方は何ゆゑに、道十郎へ繩打つを止めしぞ。

りよ　さあ委細の樣子は小影にて承りましてござりまするが、全く夫の存ぜぬ事ゆゑ、お止め申しましてござります。

軍藏　こりや最前から道十郎も存ぜぬとは申せども、死骸の側に落散りありし、是なる傘が證據ぢやわ。

りよ　仰せではござりますれど、夫が申上げし通り、長庵殿の宅へ忘れ宿へ歸りて其事を申せしかども四ツ過ゆゑ、翌日の事と其儘に親子四人打臥まして、他行いたさぬ道十郎が、何しに人を殺しませうぞ。（ト抱子なく、）おゝ泣くな〳〵、とゝさまの大事の場所ぢや。憚ながら其傘をわすれ參りし長庵どのを、御詮議なされて下さりましたら、重兵衞とやらがさして參りたるか、又は誰ぞが（ト長庵へ思入あつて、）さして參りましたるか、何卒お上のお目鑑でお調べなされて下さりませ。

ト始終抱子泣くをだましながらいふ、長庵是を聞き、

長庵　これ〳〵御内儀、こなた迄が同じ樣にわしが家へ忘れたと言ひ掛けをさつしやるが、重兵衞はかくの如く國から持つて來た雨具、桐油替りの莚蓙に重といふ字の印のある半三度、是れを冠つて

居る者が傘をさしませうか、元より持つてござらぬ傘、さして行かうやうがござらぬ。

りよ　さうこなさんの樣にいへば、どうやら道理に聞ゆれど、こつちも知らぬ身の疑ひ、その重兵衞がさゝぬなら外に誰ぞが、（ト長庵と顏見合せ思入）さして行くまいものでもない。

長庵　外に誰ぞといはるゝは、わしでもさして行つたかとこなたは思ふ樣子ぢやが、これよく物を積つて見さつしやれ、現在妹に連添ふ重兵衞緣につながる弟を、人間の皮を着て居て殺されようかよし又金を取る程なら赤羽根迄追かけて殺して取らずと我家でどうでもして取れる金、こりや夫婦馴合つて、わしに罪を着せようと巧んで來た仕事ぢやな。

りよ　巧んで來たとはこなたの事、外の品なら知らねども忘れて置きしその傘を、證據といふが疑はしい、こなたの仕業に違ひない。

長庵　いや〳〵愚老が何で殺しませう、こなたの夫に違ひない。

りよ　いえさうぢやない、こなたぢや〳〵。

長庵　いや〳〵こなたの亭主だ。

りよ　いえ〳〵こなたぢや〳〵（ト抱子せはしく泣くをいぶり附け）えゝ默らぬかいの、こゝなたぢやわいの。（トきつといふ。軍藏思入あつて）

軍藏　やあかましい、しづまり居らぬか。

長庵　はつ（ト恐れし思入にて平伏する。）

軍藏　詮議致すは我々の役目、證據もなき事申し募り、上を恐れぬ無禮者めが（トおりよを叱る。）

りよ　それぢやと申して、

軍藏　まだ〳〵申すか。

皆々　控へをらう。

りよ　はつ（ト恐入つて辭儀をなす。抱子泣くを。）おゝたがよく〳〵。

ト此内道十郎は目を閉ぢ覺悟の思入、主水こなしあつて、

主水　こりや〳〵りよとやら、何樣其方申しても證據なければ水掛論、一旦繩目に逢ふとても實存ぜぬ事ならば申譯も立たうから、立騒ずと控へて居よ。

りよ　はつ有難うござりまする。

主水　こりや長庵が家主、それへ出い。

杢右　はつ（ト前へ出る。）

主水　長庵事月々の店賃に滞りはなきか。

杢右　はつ私店子表裏十七軒ござりまして、表店が二分二朱裏店が一分一朱、掃除代が、一ヶ年三兩二分。

軍藏　こりや其樣な儀は調べは致さぬ。

主水　店賃に滯りはなきかと、それを聞くのぢや。

杢右　はい長庵事は一ト月も滯りはござりませぬ、毎月晦日にきつと持參致しまする。そればかりではござりませぬ、祝儀の强飯法事の饅頭、貰うた物はいつでも私方へ遣はしまする、一の店子でござりまする。

主水　すりや店賃は月々晦日にきつと勘定致すとか、(ト思入あつて、)こりやさうなうては叶ふまい。

軍藏　こりや道十郎が家主、それへ出い。

九兵　へい〳〵(ト前へ出て、)へい道十郎事は、

　　トいひかけるをおりよ袖を引き賴む。九兵衞呑込み、

九兵　やはり毎月晦日々々にきつと、持參致しまする。

軍藏　しかとそれに相違ないか、僞りを申すと曲事ぢやぞ。

九兵　え、(ト悄りなし、顫へる。)

軍藏　有體に申せ。

九兵　左樣なら申上げまする。當月で五ヶ月滯りをりまする。其外米屋酒屋などにも餘程借がござりまする。度々斷りに參りまする。

りよ　あもし、その樣な事を、

九兵　はて曲事ぢやと仰しやれば、有體に言はねばならぬ。（ト おりよ是非なき思入、軍藏主水に向ひ、）

軍藏　津山氏いかゞ思召す、只今家主共の言葉にて、あらかた相分かりました。先程長庵が申し口に相違なく、道十郎長庵宅へ參り合す折柄、重兵衞とやらが五十兩の金子所持致し、未明に出立すると聞きしを幸ひ、永々の流浪ゆゑ貧苦に迫り、殺害を致したに相違ござらぬ。

主水　なにさま左樣存ずれど、未だ分明ならざれば、一先役所へ立歸り、後しての詮議に仕らん。

軍藏　先調べ中は、道十郎は入牢申し附けるぞ。（ト おりよ恟りなす。）それ繩うて、

捕手　はつ、立ちませい。

道十　此期に及んで未練ござらぬ、いざ繩をお掛け下され。

軍藏　それ、道十郎に繩をかけい。

捕手　はつ、（ト 脇差をぬきとり手を後ろへ廻す、捕手繩を掛ける、おりよ恟りして、）

りよ　えゝ、こりやどうあつても覺えなき人殺しの疑ひにて、繩をお掛けなされまするか、そりや片手打でござりまする、

軍藏　やあ無慈悲とは何が無慈悲、人を害せし罪人ゆゑ繩を掛けるは天下の大法、達て申さば用捨はないぞ、覺悟なせ。

りよ　御用捨なくば共々に繩かけて下さりませ。

軍藏　む、望みとあらば、

皆々　共々に、

りよ　お引きなされて下さりませ。

道十　こりや〳〵、狼狽者何を申す、只今此場でどの樣に申解くとも、是ぞといふ證據なければ言わけ立ず、一旦虛名を蒙むるとも天道誠を照す道理、いつかは明りの立つ事あらん。

りよ　さあ明りも立たうが、此儘には、

道十　はてそちが共々獄舍へ行かば、未だ幼年の道之助誰が後にて育まん、終にはそれなる巳之松に獄舍の苦艱をさせねばならぬぞ。

りよ　それでもみす〳〵、

道十　狼狽者めが、

りよ　はあ〳〵（トおりよ泣く、道十郎思入あつて）

道十　これりよ、再び歸る心なれど萬一無實に落入つて、是が別れにならうとも、前世よりの因果ごと思ひ諦め歎かずと、二人の子供を守育て、豫て尋ぬる短刀を、いやさ、短慮事をなさずといへば心を長く尋ね求め、此身の汚名を雪ぎくれよ。

りよ　はあ〳〵（トおりよ涙を拭ひ）神や佛はいふに及ばず、お上のお慈悲もあるなればさういふ事にはなりますまいが、若しも成行く其時は、足らはぬながら武士の妻、心を鬼になり替り二人の子供を守り育て、行衞の知れぬ其の品を尋ね出して年頃の望みはきつとかなへませう。

道十　お〳〵出かした女房、それにて思ひ置く事なし、道之助が案じて居よう、少しも早う歸つてくりやれ。

りよ　いえ〳〵是が一生の別れにならうも知れませぬ、せめて道までお見送り、斯ういふ事になるならば道之助も共々に、連れて參ればよかつたに、

道十　いや却つて伜の來ぬのがまし、ぐわんぜなき巳之松と違ひなまじ心がある故に、歎きの種であらうわえ。

りよ　とはいへ親子のことなれば、お前も逢ひたうござんせう、兒と思うて此兒が顔を、見てやつて下さりませ。（ト抱子の顔を見せる、道十郎思入あつて、）
道十　あ、果報つたない、（トほろりと思入、抱子泣立てる。）
りよ　おゝ尤もぢや〳〵、是が泣かずに居られようか。（トおりよ泣伏す。）
道十　えゝ何をめろ〳〵、未練者めが、
りよ　はあゝ（ト泣く、長庵せゝら笑ひ、）
長庵　いや盜人たけ〴〵しいと、實しやかな夫婦の言葉、御兩所さまに哀れと見せ命助る下心、いや何所迄ふといか知れぬ奴、流石は不義士の鹽冶浪人、此所存では主君の大事をよそに見て逃げた筈だ。
軍藏　すりや藤掛道十郎は、鹽冶浪人であつたるか。
長庵　はつ夜討の砌り變心なし、徒黨を洩れし不義士でござりまする。
道十　あこれ、めつたな事をいはるゝな、左樣な者ではござらぬぞ。
長庵　なに、ない事があるものか、昨夜互ひの身の上話しに、こなたなんと言はれた、妻子の愛に惑かされて、列を洩れたと言つたではないか。

道十　いや〳〵其樣な事をいつた覺えはござらぬぞ。
長庵　それでも、あの昨夜、
道十　いや知らぬ〳〵。
長庵　あれ〳〵、あゝ舌を二重に遣はつしやる、非義非道な金をとり、かゝる繩目の恥に逢ふも元は主君の皆罰だぞ。報いは怖いものでござる。
道十　ちえゝ（ト悔しき思入。）
軍藏　不義士とあればいよ〳〵もつて切取りなせしに極まつた、道十郎獄舍の住居女房りよも同罪ながら、乳呑子あるゆゑ情をもつて家主へ預け遣はす、しかと預かりをらうぞ。
九兵　へい〳〵畏りましてござりまする。お慈悲を持つて私方へ御預けに相成りまする段、有難い仕合せにござりまする。
主水　隨分共にいたはつて遣はせ。
九兵　畏りましてござりまする。
軍藏　長庵申條相立つ上は、構ひないぞ。
長庵　はつ、理非明白な御裁き、有難うござります。

主水 いや笹川氏、御待ち下され。
軍藏 何んでござるな。
主水 長庵事も家主へ預け置かずばなりますまい。
軍藏 とはまた何ゆゑ、
主水 彼も越度がござりますれば、
長庵 私に越度とは、
主水 こりや、夜前重兵衛は何時に出立致せしぞ。
長庵 へい八ツ、いや、七ツ半に出立致させました。
主水 假初にも、五十兩所持なす者を只一人、何ゆゑ夜深に出立させしぞ。
長庵 其儀は先刻申上げし通り、當人歸宅を急ぎますゆゑ、
主水 然らば其方途中まで、なぜ見送つて遣はさぬぞ。
長庵 折惡く風邪にて雨天の歩行を厭ひますれば、
主水 風邪にて送られずば、何故夜明をまつて立たせぬのぢや。
長庵 留めましてござりますが、何分にも急ぎますゆゑ、

主水　假令どのやうに急がうとも、僅一時か半時に何程道が違はうぞ、それを其まゝ立たせしは拔目なき長庵ながら、こりや其方が、（ト目を附ける。）
長庵　え、（トぎつくり思入。）
主水　こりや長庵が越度なるぞ。
長庵　恐れ入つてござりまする。（ト平伏する。）
主水　こりや長庵が家主、詮議中しかと其方へ預けたぞ。
杢右　へい〳〵私の一の店子、慥に預かりましてござりまする。（トこれにて軍藏思入あつて、）
軍藏　最早是にて一ト通り詮議相濟む上からは、道十郎を引立て參らうではござらぬか。
主水　いかにも左樣仕らん。こりや、道十郎幷に長庵が相長屋の者共より、其夜の次第それ〴〵に口書を取り置く間、家主共心得よ。
兩人　畏まつてござりまする。
軍藏　それ、道十郎を獄舍へ引け、
捕手　はあゝ（ト道十郎を引立てる。）
りよ　そんならこれが、（ト寄らうとするを、足輕へだてゝ、）

足輕 最早側へは、

四人 かなはぬぞ。

ト是にて軍藏主水立出で、長庵上手につくばひ皆々よろしく、

道十 無實ながらも盗賊の惡名受けて假初にも、獄舍へ引かるゝ身の成行、いかなる事か天道の憎しみ受けし我不幸、思へばく淺ましい。

りよ 年月積る艱難の憂日の數は過せども、邪非道は露程もなくに泣かれぬ此場の仕儀、

軍藏 汝に出でしは汝にかへると、善根すれば幸ひあり、惡事は脫れぬ天の罰、

主水 傳へ聞く周の代に大聖孔子も無實にて捕はれ給ひ、縲紲の中に苦しむ例しもあり。

りよ 其濡衣を解くよしも歎きに晴れぬ日の目さへ、干す方もなき雨の夜の、

長庵 さす目印の傘が、身に覆ひかゝり暗き身と、

道十 實や浮世は幻しの、其境界は秋の色、

りよ 變るも早き水鏡、とまりかねたる月の影、

道十 世に薄命な、(ト思入。)

軍藏 それ、引立てい。

皆々　はあゝ。（ト是を木のかしら。）

兩人　あゝ身の上ぢやなあ。

トおりよ抱子を突附ける、道十郎ぢつと見て名殘を惜む、軍藏寄らうとするを主水隔てる、長庵うまいと思入にて肩にて笑ふ。此見得よろしく、時の太鼓、うれひ三重にて、

幕

三幕目　麴町村井長庵内の場

（役名══村井長庵、早乘り三次、伊勢屋の息子千太郎、御家定。長庵妹おそよ。）

（麴町長庵宅の場）══本舞臺上へ寄せて三間常足の二重家體。向う更紗の暖簾口、上手三尺の床の間、此脇に百味簞笥、藥種棚、下手唐藍石摺の襖、下の方一間の玄關、右家體の傍に用水桶、後ろ黑塀、總て長庵住居の體。爰におそよ亂れたる結び髮黑絹の鉢卷をなし、やつれたる打扮にて茶碗の水へ切火をうち、御符を呑み居る御家定紋付の着附、尻端折り片襷武家出と見える打扮にて雜巾掛をして居る、傍に番手桶あり、此見得宜しく稽古唄にて幕明く、

定　居候もいゝが拭掃除をするので、手があれていかねえ、それに名代の麴町だ水を汲むばかりで、

がつかりする。
そよ（御符を呑んで、）もしお前さん、兄さんはどこへ行かれましたぞいな。
定　あい、先生は今湯に行きなすつた。
そよ　さうでござりますかいな。
定　お前水初穂で何を上んなさるのだえ。
そよ　胸が支へてなりませぬゆゑ、高野のお土砂を頂きましたわいな。
定　おや／＼生きて居る者にも利きますかえ。
そよ　信心さへ致しますれば、藥よりよう利きますわいな。
定　わつちやあ又死んだものにばかり用ゆるのかと思ひました。
そよ　いやも私の體なぞは、半分死んで居りますが、どうぞ息のある其中にお屋敷へ奉公に行つて居るお梅に一ト目逢ひたい者ぢや、さうして爰から淺草迄はどの位ござりますぞいな。
定　淺草迄はまづ二里だね、
そよ　あゝ二里あつては歩かれぬが、どうぞ駕籠に乘つてなりとお梅に逢うて死たいものぢや、どういふ事か兄さんが先の屋敷の名もをしへず、今に／＼と二月越し連れていてくれませぬが、おまへ

さん知つてなら先を教へて下さりませ。

定　えゝその娘御の行つて居る家は、いやさ、行つて居なさるお屋敷は淺草だといふことだ。

そよ　どうぞおまへさん居所をば、お聞きなすつて下さりませいな。

定　あい〳〵その中聞いて上げませう。何にしろ爰に居なすつては悪いから、二階へ上つておいでなさい。

そよ　はい〳〵今二階へ行きますわいの。あゝお梅に早く逢ひたいものぢや。

定　今に逢はして上げますよ。

そよ　どうぞお頼み申しますわいな。（ト下手の襖を明ける、内に階子ありて是より二階へ上る心定後を見送り）

定　いやこつちの親分もひどい事をする人だ、現在血を分けた妹が娘に逢ひに三河からわざ〳〵江戸へ出て來たを、此二階へ投り上げてたうとう病人にして仕舞つた、もう一ト息煩らやあころりと、いつて仕舞ふのを知りつゝ娘に逢はさねえのは、却々己達には出來ねえ事だ、どうでも師匠は師匠だけあるなあ。

トやはり門口を拭いて居る、又稽古唄になり花道より、長庵木刀をさし手拭を持ち、湯上りの體。酒屋の丁稚三太一升德利を提げ出て來り花道にて、

長庵　こう小僧、昨夜の酒は濁つてゐたが、家へ行つたらさう言つてくれ。
三太　さうでござりませう、ありやあ樽底でござりますから。
長庵　あんな酒をよこすと、勘定をしねえぞ。
三太　どうで下さりませんから宜しうござります。
長庵　いや口のへらねえ奴だ（ト舞臺へ來り、直に内へ入り、）定公、今歸つたよ。
定　こりやあ先生、お早うござりましたね。
長庵　なに、早い事もあるめえ、病家へ一軒寄つて來たのだ。
定　へえお前にも病家がありますかえ。
長庵　失禮な事をいふな、此間迄は惡い病氣に朝から晩迄歩いて居た。
定　あの時遊んで居る醫者なら、よく〳〵下手なやつだ。
三太　（門口から德利を内へいれ、）もし、是で三升でござりますよ。
長庵　いくらでもおいて行け、節句前には拂つてやるわ。
定　こりやあ有難い、酒だね。
長庵　手前に呑ませようと思つて、一升つがせて來た。留守に誰も來なかつたか。

定　いえ誰も來やあしませぬが、二階の妹御が娘に逢ひたい〳〵と口つゞけに言つて居なさるが、ありやあ病氣がよくなると駈出して行きますぜ。

長庵　いくら逢ひてえといつたとて、逢せる譯にやあいかねえから、方を附けて仕舞はざあなるめえ。こう湯へ行つて來さつし、ゆつくりやらう。

定　そいつあ有難い、なんぞさういつて來ようかね。

長庵　いや手前が行くにやあ及ばねえ、小僧を頼んでやらう、これ小僧、手前歸り掛に角へ寄つて、鐺鍋を二枚さういつてくれ。

三太　あい〳〵。

長庵　忘れるなよ。

三太　忘れたら堪忍しねえ、

定　(手拭を持ち、門口へ出掛け、)いや此幼兒はけんのんだ、わつちが行掛けにさういつて、歸りに持つて來るとしよう。

長庵　氣の毒だな。

定　何のざふさもねえ、

三太　氣の毒だな。
定　えゝ洒落やあがるな。(ト三太の天窓を叩き三太附いて花道へ入る。)
長庵　やれ〳〵日は詰つた、朝湯の積りで行つたがもう午だ、雇の婆に風を引かれて飯を焚くに困る所へ御家定が遊びに來たから、男替りに賴んで置くが、扨々不自由な事だ、飯の世話ばかりやあ女に限る。

ト煙草を吞居る、稽古唄になり花道より、千太郎羽織着流しにて、以前の小僧一緒に附いて出來り、花道にて、

千太　そんなら長庵樣のお家は向うのお家か。
三太　あい、玄關のある家でござります。
千太　よく敎へて下すつた。
三太　お前掛るならおよしなせえ、あの人は下手だぜ。
千太　なに、藥を貰ふのではない。
三太　そんならいゝ。
千太　いや子供といふ者は罪のないものだ。(ト舞臺へ來り、門口にて、)はい、御免下さりませ。

長庵　どうれ（ト帯を締直し、思入あつて玄關へ出で、）どなたでござるな。

千太　へい、千太郎でござります。

長庵　おゝこれは千太郎殿か、よくおいでなすつた、まあ〱是へおいでなせえ。

千太　眞平御免下さりませ、（ト玄關より二重へ廻り來て、兩人宜しく住ふ。）

長庵　扨朝夕は冷氣になりましたな。

千太　大きにお涼しうなりましてござりまする。

長庵　（煙草盆を出し、）あひにく只今召仕が出まして、

千太　いえお構ひなされてくださりますな。

長庵　ときに吉原へ御出でなされますかな。

千太　はい一昨日參りましてござります、小夜衣も宜しう申しましてござります。

長庵　左樣でござりますか、して今日は遠路の所何ゆゑお出でなされましたな。

千太　え、（ト合點の行かぬ思入。）

長庵　なんぞ御用でもござつてかな、

千太　へい、一昨日お頼み申した事は、如何なりましてござりまする。

長庵　(わざと心得ぬ思入にて、)なに、一昨日お賴みとは、御病人でもござつたかな。

千太　いえ明神下の龜の尾で、お願ひ申しました事でござりまする。

長庵　一向覺えござらぬが、そりや人違ではござらぬか。

ト千太郎是を聞き、長庵がだますといふ思入あつて、

千太　はゝゝ長庵さまとした事が、私に氣を揉ませようと、御常談ばかり仰しやります。

長庵　いや千太郎どの、愚老若年の者ではない、最早初老を越したる長庵、何常談を申さうぞ。

千太　そりや貴殿、ほんまに左樣でござりまするか。

長庵　人命を預かる醫者でござる、なに噓を申さうぞ。

千太　え(ト思入あつて、)一昨日龜の尾でお目にかゝつた其時に、明後日は家へ來い、小夜衣に逢はさうと、仰しやつたではござりませぬか。

長庵　いや龜の尾で逢つたの、小夜衣に逢はさうのと、愚老とんと存ぜぬ事だが、いかゞな仔細あつての事だな。

千太　(せきこみ、)そりやあなた何を仰しやります、小夜衣を私が身受したいと申しましたら、客の手から身請をすれば何百兩といふ金がなければ所詮出來ぬ事、親元から掛合へば賣つた時の五十兩で

家へ連れて來らるゝ程に、五十兩遣はされば直に小夜衣を連て來て、わしが家へ置きませうから女房と思うて時々に逢ひにござらば身の爲と、御親切のお詞に、五十兩の金調へ一昨日お渡し申しました。而も其時おつしやるには、もし又是で不足なら、十や二十のたらずめは、姪の事ゆゑ足してなりとも、つらい苦界の勤をば早く助けて遣りたいと、仰しやつたではござりませぬか。

長庵　いや是は怪しからぬ事を承はるものかな、脈體は伺はぬが、御血色の樣子逆上てござると見える。ちと服藥なさるがいゝ、卽效は灸治にかぎります（トわざととぼけていふ、千太郎思入あつて）

千太　そんならどうでもお前さまは、御存じないと仰しやりますか。

長庵　まだ老耄も致さぬ長庵、忘却致すこともござらぬ。

千太　えゝまざ〳〵とそのよなことを、あれ程金子五十兩龜の尾でおわたし申したに、

長庵　なに金子を五十兩渡した、いやはや途方もない事を言はつしやる、受取つた覺えはござらぬぞ。

千太　なんのない事がござりませう、而も小判で五十兩。

長庵　すりやどうあつても長庵に、渡したと言はるゝか。

千太　お渡し申したに相違ござりませぬ。

長庵　左程に渡したと言はるゝには、證據がござらうな。

千太　さあその證據は、
長庵　證據があらば見せさつせい。（トきつと言ふ、千太郎悔しき思入にて、）
千太　えゝかういふ事のあるかして、請取つたといふ一札を一筆書いてと言うた時、小夜衣と夫婦とな
ればいはゞ伯父甥、其中になんの一札がいるものぞ、それを取らうと言るゝは隔てがあつて氣ま
づいゆゑ、もう〳〵身請の世話はせぬと、けんさうかへて言はるゝゆゑ、よもや間違もあるまい
と請取りもなく渡したが今となつては此身の過り、いかに證據がないというて、ようまあ知らぬ
請取らぬと言はれた事でござりまする。（ト悔しき思入。）
長庵　これ〳〵千太郎殿、そりや何を言はれるのだ、借屋なれど玄關構へ仁術を施す醫者でござる、不
義の富貴は浮ぐる雲、非道な金を貪るやうな村井長庵ではござらぬぞ、倅にしてもいゝこなた相
手にするも大人氣ないが、言ひ掛けをさつしやれば、其分にはして置かれぬぞ。
千太　えゝ言ひ掛とはなんの事、渡した金を請取らぬと、こなたが嘘をいはるゝのだ。
長庵　又しても〳〵同じ事を言はるゝが、渡したといふ證據があるか。
千太　さあそれは、
長庵　證據がなければ、言ひ掛けだぞ。

千太　さあ、
長庵　證據があるか、
千太　さあ、
長庵　さあ、
兩人　さあ〳〵。(ト長庵千太郎の襟がみを取つて引据ゑ、)
長庵　よくも言ひ掛しやがつたな。(ト突放す、千太郎思入あつて、)
千太　金を取つた其上に知らぬといふて打ち打擲、そりやあんまりでござりませう。
長庵　あんまりとは何があんまりだ、渡しもしねえ五十兩、渡したといふ汝があんまりだ。
　　　ト長庵煙管で千太郎の額を突く、
千太　それぢやというて、お前に渡したに違ひありませぬ。
長庵　まだそんな事をいふか、さあおれと一緒にあゆべ。(ト千太郎の手をとり引立る。)
千太　何處へ行くのでござりまする。
長庵　何處へ連れて行くものか、名主の玄關へ連れて行き、汝を縛つた突出すのだ。
千太　え、(ト悄りなし、怖き思入。)

長庵　まだ親掛の身分にて、五十兩といふ金をどうして持つて居る事か、其所から調べていつたなら、愚老が明は立つだらう。さあ覺悟極めて一緒に行きやれ。
千太　さあ、どうも名主の玄關へは、
長庵　なぜ行かれねえのだ。
千太　今お前樣のいふ通り、親掛の私ゆゑ金子を調へましたのは、人に明けては言はれませぬ。
長庵　むゝ盜みでもしたのか。
千太　いえ〳〵左樣な事ではござりませぬ、三次殿といふ人から五十兩に預つた、白露の短刀を下質同樣仲間の家へ預けて借りた五十兩、親父樣へ内證ゆゑ、表沙汰になりまして家へ知れては濟みませぬ、それ故どうも參られませぬ。
長庵　それぢやあ三次が、
千太　え、
長庵　いや、さりとは〳〵ふてい奴だ。さういふ話しを聞くからは、いよ〳〵言ひ掛に違ひない、名主の玄關で金の言ひわけ白い黑いを分ねばならぬ。（卜長庵立かゝる）
千太　どうぞそればかりは、堪忍して下さりませ。

長庵（思入あつて、）迷惑とあるならば了簡して遣らうから、早く歸られたがよい。
千太（思入あつて、）ではござりませうが、此儘に、
長庵　歸られぬいふのか、
千太　さあみすく知れた五十兩、（ト長庵を恨めしさうに見る。）
長庵　未だそんな事をぬかしやあがるか、
　　ト木刀を持ち立かゝる、千太郎玄關へ逃出る、長庵追かけ來て木刀で打つ、千太郎どうとなる。
千太（起上りて、）えゝ、なんでわたしが、
　面に似合はぬふてえ奴だ。
長庵　どうしたと（ト木刀を持ち、きつとなる。）
千太　いえよろしうござりまする。（ト雪踏をとつて、門口へ出る。）
長庵　よくなくつて、どうするものだ。
ト千太郎悔しき思入にて顔へ手拭を當て泣く。是をきつかけに唄になり、泣きながらしをくと花道よき所迄行き、後を振返り今に見ろといふ思入、ばたくにていつさんに花道へ入る。長庵玄關から覗き後を見送り、

長庵　あゝもう歸つたか。いや何んといつても未だうぶだ、五十兩といふ金を只取られて歸つたが、流石のおれも氣の毒だ。借長家でも玄關附やわらかもので世を送り、わづか五軒か七軒の病家先から持つて來る三分禮ぢやあうまらねえ、そこで時たま古方家な荒療治はするものゝ、ならう事なら憎まれる敵役は仕度くねえな。

ト新内の合方になり、花道より御家定岡持を提げ出て來る、後より三次頰冠り、半合羽尻端折りにて出て來り、花道にて、

三次　おい、そこへ行くのは定ぢやあねえか。

定　誰だ。（ト振返り、見て。）おゝ三次さんか、何處へ行きなすつた。

三次　二三日後から新宿へ來て、すつかり耗つて仕舞つたから、兄貴の所へ寄つて家へ歸るのだ。手前此頃はどこに居る。

定　長庵さんの所にごろついて居るのさ。

三次　むゝさうか。兄貴は家か。

定　あい、内に居なさるよ。

三次　丁度いゝ、一緒に行かう。（ト兩人舞臺へ來り。）

定　もし、三次さんが來なすつた。

三次　兄貴、此間は、(ト手拭を取りながら内へ入る、御家定は下手へ岡持を置く。)

長庵　どうした三次、さつぱり來ねえな。

三次　久しく風を引いて居た。

長庵　そいつはわるかつたな。(ト捨ぜりふにて、三次長庵の傍へ住ふ、御家定煙草盆を出し)

定　どうだね淺草の方は錢になりますかね。

三次　いやならねえから山の手へ、二三日後から出掛けて來たのだ。

長庵　堀の内へでも參つたのか。

三次　きのふの朝參つて來たが、さつぱり御利益がねえ。

長庵　勿體ねえ事をいふなえ。

定　どれ、御酒の仕度をしようか。

三次　定や、酒があるのか。

定　あい一升ありやす。

三次　そいつあ有難え。ときに兄貴、いつもおんなじ事を言ふ樣だが、此頃の樣に間のわりい事はねえ。

出るたァとられ〳〵、盆からこつちへ三十両耗つた。なんぞ金になる事はねえかえ。

長庵　あるな。

三次　あるかえ。

長庵　いくらもあらあ。

三次　痲疹ぢやァあるめえし。

長庵　早速金になる事がある。

三次　何にしろ有難えな。

ト此中小さなひろぶたへ鰌鍋二枚燗徳利すましの丼猪口を添へて御家定持ちて出で、

定　まあ一ぱいおやんなせえ。（ト三次の前へ出す。）

三次　やあ骨抜鰌鍋だな、こいつあごうぎだ、（ト蓋をあけて、）お丶山椒をこぼして仕舞つた。

長庵　株をやつてるるぜ。

定　一寸お燗を見ておくんなせえ。

長庵　どれ（ト長庵猪口を取る、御家定酌をする、長庵呑んで、）丁度い丶、名燗だ。

ト三次へさす、捨ぜりふにて酒を呑み居る、奥にて、

そよ　もし兄さん、どうぞお梅に逢はして下さい、早くお梅に逢はして下さい〳〵。
長庵　逢はしてやるから、待つて居ねえ。
そよ　息のある内に逢はして下さいよ。
長庵　えゝやかましい、逢はしてやるといふに、（ト三次是れを聞いて思入あつて）
三次　兄貴、ありやあなんだ。
長庵　それ、一件の重兵衞が女房だ。
三次　むゝ、おめえの妹か、
長庵　さうよ。手前飯を食つたか。
三次　まだ食はねえ。
長庵　定や、（鰻の）小あれい所を一分ばかりさういつて來てくれ。
定　飯附きだらうね。
長庵　しれた事よ。
定　香々たつぷりお茶をあつくしてか、
三次　御苦勞だな。

定　なに直そこだ。（ト下手へ入る。兩人酒を吞みながら、）

長庵　こう三次や、きつと金になる仕事を手前におれが賴みてえが、何と聞いてくれるだらうか。

三次　金にせえなる事なら、なんでも聞かうぢやあねえか。

長庵　手前に賴むは外の事でもねえ、今お梅に逢ひてえ〳〵といふ重兵衞が女房、己が實の妹だが、よつほど分からねえやつよ、手前も判が入つて居るが、屋敷へ奉公にやつた積りで、丁子屋へ賣つたお梅だから、幾ら逢ひてえといつたつて逢はせられねえぢやあねえか。煩らつて居るからいいけれど達者になりやあぢつとして居ねえ、これが一つ暴れた日にやあ重兵衞の一件も疑ひが掛らにやあ居ねえ、そこで少し不便だが、あいつを生かして置けねえから、手前に殺して貰ふ積りだ。

三次　え、そりやあ金にせえなる事なら、何でも否とは言はねえが、他人ぢやあなしおめえの妹、こりやあ御免だ〳〵、殺すなら人手を借りず一服用ひて仕舞やあいゝに。

長庵　そりやあ氣の附かねえでもねえが、どんな劇い毒藥でも芝居でするやうに直にやあ死なねえ、其上惣身の色が變るから跡が面倒だ。

三次　それで己に殺せといふのか。

長庵　まさか己が手を下して殺す譯にも行くめえぢやあねえか。爰は兄弟分のよしみだ、己に替つて殺してくれ。
三次　外の事ならいゝけれど、是ばかりやあ御免だ。
長庵　こう手前もわからねえ事をいふぜ、此一件が暴れた日にやあ己許りが兇状は着ねえ、手前も罪があるから抜けようといつて抜けられねえぜ。
三次　そりやあ事と品に寄つたら、殺すめえものでもねえが、（ト大きな聲をする。）
長庵　えゝ大きな聲をするな。
三次　さうして、金儲けといふなあなんだ。
ト此時御家定下手より出て來り、玄關口より窺ひ居る。長庵思入あつて。
長庵　手前が三河町の伊勢五へ置いた一件の短刀を、家の息子が早乘つて仲間の家へ五十兩に預けた事を聞いたから、親父の知らねえ所が山だ、種のねえのを附込んで、今日其品を出しに行き、見世へ掛つてごたつきやあ、十や二十は大丈夫だ。
三次　そいつは旨え話しだが、きつと息子が持出したかえ。
長庵　當人の口から聞いたのだから、こんな慥な事はねえ。

三次　それぢやあ知らねえ顔をして、出しに行つてごたつかうが、なんぞ金と見える物がほしい物だ。

長庵　(有合ふ箱入りの温石を取つて、)おつといゝ物がある、病人が入れた箱入温石、此石をもう一つ買つて、すつかり封じて切餠(二十五兩包み)はどうだ。

三次　うめえ〳〵、然しおれ一人で行くよりやあ、持主だといふ侍を拵へて連れて行く方がいゝな。

長庵　そりやあ其方がいゝ。

三次　誰ぞ侍はあるめえか。

長庵　御家定を連れて行かつしな。

三次　むゝ、彼奴は以前りやんこだから、二本差は妙だ。

定　(思入あつて、)賴まう〳〵。(ト時代に言ふ。)

長庵　どうれ(トまじめに、)どなたでござるな。

定　小山定之進でござる。(ト突袖をして二重へ出る。)

長庵　おきやあがれ、定か。

三次　悪い洒落だ。

定　玄關で樣子を聞いた所から、直に侍になつたのだ。

長庵　氣の早いやつだな。

三次　しかし、賴まう〳〵は本職だ。

定　そりやあ昔取つた杵柄だ、何にしろ損料屋へ行つて身裝を拵へて來やせう。(ト行きかける。)

三次　毎々御苦勞だな。

定　其替り旦那は御如在ねえ。

三次　其樣事をいふと、鼾をかくぜ。

定　惡い顏だ。(ト下手へ入る。)

三次　それぢやあ是から伊勢五へ行くから、二階の方は明日の晩にしてくんねえ。

長庵　さう急でなくてもいゝが、お梅に逢ひてえ〳〵とあゝ口つゞけに言はれちやあ、あたり近所へ惡いから、明日手前の所へ駕籠に乘して送らして遣るから、二階へでも上げて置いてくれ。

三次　丁度そりやあいゝ事がある、小塚原へ遣つた女が鳥屋について來てゐるから、一緒に二階へ上げて置かう。

そよ　兄さん〳〵、どうぞお梅に逢はしてくんなさい。

トいひながら襖を明けて出て來る、長庵三次に目くばせをする。三次是にてちやんと住ふ。

長庵　お丶逢はしてやるとも〳〵、此間中から連れて行つて逢はしてやらうと思つても、病人の多いので、晝前は調合に掛り、晝から病家を見舞ふので半日明ける事が出來ず、どうしようかと思つた所、其お屋敷へお出入りの而も田原町においでなさる金貸の旦那がおいでなさつたから、其のお話をしたらば己の所へよこすがいゝ、屋敷へ一緒に連れていつて、おぬしが逢ひたがるお梅に逢はしてやらうと仰しやるよ。

そよ　え、そりや、あの、娘に逢はして下さりますとか、それは〳〵有難うござりますわいな。左様ならあなた様が、そのお屋敷へ御出入りの旦那様でござりますかいな。

三次　なに、わつちやあ、

長庵　あこれ、伊勢屋の八兵衛さま。伊勢八の旦那様、これが妹でござりまする。

三次　（思入あつて）これは〳〵お初にお目に掛ります、わつちやあ、いや、わたしは伊勢屋八兵衛と申しまする、そんならおめえが兄貴の、兄御の、妹でござるかな。

そよ　はい左様でござりまする。定めてお聞及びもござりませうが、連合の重兵衛が不慮な目に遭ひまして、便りに思ふは此長庵、又一人の娘のみ、まだ年も行きませず、又お屋敷の御奉公ゆゑ嘸氣詰りと思ふに附け、此頃は夢見が惡く案じられてなりませぬゆゑ、逢ひたうて〳〵なりませぬわ

いな。

三次　あの子なら案じなさんな、至極達者で評判もよし、今ぢやあ小夜衣さんといふよ。

そよ　へえゝ小夜衣と申しますか。

長庵　えて屋敷ではあんな名を附けるものだ。

三次　年はいかねえが、仲の町張りだ。

そよ　仲の町とおつしやりますは、

三次　いやさ、中奥を勤めて居なさる。

長庵　（此中氣づかふ思入）どうぞ旦那、御面倒でもお出入り屋敷の事なれば、お連れなされて下さりませ。

三次　あゝ連れて行つて上げようとも、あすこの家は、

長庵　あこれ、（ト目で敎へる。）

三次　あすこの屋敷は、極く心安い。

そよ　兄さんに聞きましても、兎角お屋敷の名も申されませぬが、何樣とおつしやるお屋敷でござりまする。

三次　お屋敷といふは、吉原御殿さ。
そよ　吉原御殿と申しまするか。
三次　いえ吉田御殿の跡で、お名前は、なにさ、見歸り播磨樣といひます。
そよ　左樣でござりまするかいな。
長庵　先おぬしも安心だ、明暮逢ひたい〳〵といつたお梅に、翌日逢はれるのだ。
そよ　是といふのもあなたのお蔭、え〻有難うござりまする。
　　　ト三次を拜む、三次可哀さうだといふ思入あつて、
三次　あ、佛頼んで、
長庵　これ、
　　　ト目で押へる。下手より鰻屋の男岡持、お櫃、香の物の丼を乘せし廣蓋を持出で、
若者　へい、お誂へでござります。（ト突出して下手へ入る。三次おそよへ思入あつて、）
三次　あ、こいつあ罪だ。
そよ　なに、罪とは、
長庵　む〻、（ト思入あつて、鰻の岡持をおそよの前へ置くを木の頭、）鰻の事よ。

ト本釣鐘新内段切の合方にてよろしく、と幕引附けると、直に角兵衞獅子、合方になり、尻明けに引返す。

ひやうし幕

四幕目

神田三河町伊勢屋の場

〔役名――伊勢屋の番頭久八、伊勢屋五兵衞、甲州屋吉兵衞、早乗り三次、伊勢屋の息子千太郎、紙屑屋六右衞門、御家定、伊勢屋手代與助、同清七、其他。〕

〔伊勢屋店頭の場〕――本舞臺四間通し常足の二重家體。軒へ山形に五の字伊勢屋と記せし紺暖簾、正面同じく山五といふ紺の長暖簾、上手質棚、下まひら戸の戸棚、此前に帳場格子、帳箱、下手鼠壁質の帳面通抔の書割。質物の掟書を張出し、いつもの所門口、下の方後へ下げて土藏の張物、用心土の箱、下の方柱に分銅の中へ兩替と記したる看板、すべて三河町伊勢屋質見世の體。爰に手代與助、清七の兩人にて質物を帳面へ引合せ居る、此傍に小僧質物を疊紙へ入れて居る、下手に質置の仕出し△ゐる、此見得角兵衞獅子の鳴物にて幕明く。

與助　千三百五十七元金二分也、薩摩がすりの單衣、正兵衞仁助。後が千三百五十八元金一兩、六七の蚊屋、三布蒲團一枚、四郎助五兵衞。（ト手代兩人にて質物を帳面へ控へる。）

△　もし〳〵、まだおいらの羽織は知れねえかえ。
清助　まことにお待遠でござります。
△　急に折口があつて行くのだから、早くしておくんなせえ。
與助　へい〳〵、畏りました。これ三太、まだ知れぬか。
三太　はい〳〵知れました、（ト奥より質物の包を持つて來り、手代の前へ置く。）
清助　へい、是は元が一分で利分が二タ月になります。
△　そんなら利が八十に、元が一分、上げるよ。
清七　へい〳〵宜しうござります。
△　おいらが行つて來ると直に持つて來るから、値を下げちやあいけねえぜ。
與助　いえ疵さへ付きませずば、何時でも一分通用でござります。
△　それから二の字崩しのどてらと、中裁の布子といふ口は、もうちつと待つてくんねえ。
與助　どうか少しでも利上をお願ひ申します。彼是二タ流になります。
△　あいつは是非請けにやあならねえ、どつちみち利上をして置きやせう。
清七　お頼み申します。

△ ときに番頭さん、此頃は家の息子もだいぶ初めたのこ
清七　何でござります。
△ 吉原の丁字屋へせつせと出かけなさるね。
與助　まことにはや困つたものでござります。
△ あゝ熱くなつちやあ、始終はむづかしいね。
與助　いえもう親指の耳へでも這入りますると、中々大騒ぎでござります。
清七　直に里方へ引戻しといふことになりませう。
△ さうだらうよ、又此方の家の大將程慾張つたしみつたれはねえの。
與助　いやもう是は名代物でござります。
△ 世間の評判だが、おめえの家ぢやあお櫃へ錠をおろすさうだの。
清七　まづそんなものでござります。
△ もういゝ年だらうが、本たうの金の番人だ。
與助　いやも吝い方では引けは取りませぬ。

ト此時後ろの暖簾より五兵衞老けたる打扮着流しにて出で來り、嚔をして、

五兵　あゝ又どいつか人の噂をしやあがると見える。

△　そりや生爪親仁が出て來た、お暇と致しやせう。

與助　先宜しうござります（ト是にて質置は下手へ入る。）

五兵　これ〳〵與助、段々と日が詰るわ、何時迄帳合に掛つて居るのだ。清七々々、さつさと調べて仕舞はぬか、どれ一人己の氣に入る奴は無いわえ。早く仕舞つたら天氣のいゝ内に敷紙へ澁でも引いて仕舞はつせえ。

兩人　はい〳〵畏りました。

五兵　何を云つても畏りました〳〵とばかりで、とんと埒が明かぬわえ。これ〳〵長松、手前は何をして居る。

長松　今入質を結へて居ります。

五兵　それなれば手ばしこくするものだ、そんな事で手間を取つては役に立ぬ。人並に飯ばかり喰やあがつて何を爲ても埒が明かぬ。さうして早く流の書出しを配つて來ぬか、夜になつたら十露盤も習へ、此間手前に貸した塵劫記はどうした。

長松　へい私の箱にござります。

五兵　御座りますなら、なぜ出して習はぬのだ。
長松　あれは幾ら見ましても、版が摩れてちつとも分かりませぬ。
五兵　不器用な奴だ、分からぬ事があるものか、あれは昔の塵劫記、中々紙もよい筈ぢや。
長松　それでも眞黑で少しも分かりませぬ。
五兵　そりやあ其筈だ、あの塵劫記は己が十二の年初めて奉公に出る時、古本屋で廿八文で買つたのぢや、物持がよいであらう。
長松　左樣でござります。
五兵　貴樣達もちつと見習へ。
皆々　畏りました。
五兵　これ與助、長助さんは利上げを持つて來たか。
與助　いえまだでござります。
五兵　いやあの男の樣にづるい者はない、これ小僧序に廻つて來るがいゝ、今日明日に利上をなさらぬと、流れて仕舞ひますとよく斷つて來い。
長松　はい〳〵畏りました。

五兵　これ〱又犬にかまつて居るなよ。
長松　はい〱（ト出にかゝる。）
五兵　これさ、はい〱とばかりで長助の所へ寄るを忘れるな。
長松　宜しうございます。
五兵　利上をせぬと流すと云ふのだぞ。
長松　はい〱。
五兵　分かつたか、利上をすると流すといへ。
長松　はい〱、利上をすると流すと申します。
五兵　えゝ分からぬ奴だ、利上をせぬと流すと言へ。えゝ何だか分からなくなつたわえ。
長松　私にも分かりませぬ。
五兵　役に立ずめ、扨々世話のやけた奴等だ。（ト煙管を持つて雁首の方を呑まうとする。）
長松　あゝもし〱、それぢやあ逆さまでござります。
五兵　えゝ知つて居るわえ。（トやはり雁首を吸ふ。）あツつゝゝゝ、それ見たことか燒傷をさせをつた、えゝ忌々しい、（ト小僧の天窓を打つ。）

長松　敎へたり打たれたりしちやあうまらねえ。
五兵　此方がうまらねえわえ、えゝ何をぐづ〳〵して居るのだ、早く行かぬか。
長松　はい〳〵（ト門口へ出る。）
五兵　又川を間違へるな。
長松　大丈夫でござります。
五兵　えゝ口のへらねえ奴だわえ。

ト長松下手へ入る。五兵衞捨ぜりふにて小言を言つて居る。やはり合方角兵衞獅子の鳴物にて、花道より紙屑屋六右衞門着流し白足袋草履麻風呂敷を肩に掛け、秤を腰に差し出て來る。後より久八羽織着流し篤實なる打扮にて紛失帳を持出て來り、花道にて、

久八　もし〳〵、其所へおいでなさりますは、飯田町の叔父さんではござりませぬか。
六右　おゝさう云ふは久八殿、何處へござつた。
久八　はい、紛失物を玄關へ寫しに參りました。いやも御同然に此稼業はこれが蒼蠅うござりまする。
六右　いや、此間から御天氣の惡いので、久しく買物にも出なんだ故、今日は朝から出掛けたが商賣といふものは有難い、出さへすれば二朱や一貫の立前にはなるて、

久八　それにお前さんなどはお顔が古いから、どう致しても違ひます、モシお約束の古帳を見出して置きました。
六右　いやそれは有難い、澤山あるか。
久八　いえ十册ばかりもござりませう、兎も角も來て御らうじませ。
六右　そんならお見世まで行きませう。
久八　さうなされませ（ト舞臺へ來り、門口にて、）さあお入りなされませ。
六右　まあ〳〵貴樣入るがよい、今日はお前の方がお客樣だ。
久八　そんなら御免なされませ（ト門口を入る。）
五兵　おゝ久八、歸つたか。
久八　唯今歸りましてござりまする。
五兵　今日の紛失物のお觸は、どんな物であつた。
久八　いえ皆在來りの品ばかりでござります。
五兵　さうか、いや不正の品は取りたくないものだ、引合で物入りが何より怖いて。
久八　實に左樣でござります。

六右　へい旦那樣、御機嫌宜しうございますか。
五兵　おゝこれは、飯田町の六右衞門殿、久しく見えぬ樣であつたがどうぞさつしやつたか。
六右　いやもう此時候の惡いせゐか一寸風邪を引きましたが、十四五日臥せりました。
五兵　此節はよツぽど氣を附けぬとやられます、わしも鬼の霍亂とやらで十日程寐ました。
六右　それはお珍らしい事でござります、然し早速お快うござりましてお目出たうござりまする。
五兵　全快はしましたが醫者に藥禮をせねばならぬ、いやはや、とんだ大物入をしました。
與助　久八殿、昨夜の分は殘らず元帳へ寫しました。
久八　それは御苦勞であつた、午過迄は掛らうと思うたが、思ひの外捗が行きました。
小僧　私も殘らず包みました。
久八　おゝさうか、手前もめつきり手早くなつた、段々と出世せねばならぬ、精出して勤めたがよい。
五兵　これ〳〵久八殿、さう褒めさつしやるな、大概になまけをるによつて早いと思うても遲いと小言をいはつしやれ。
久八　はい〳〵畏りました。(ト紛失帳を帳箱の上へ乘せる。)
五兵　ときに六右衞門殿、此節は反故の相場はどうでござるの。

六右　へえ先達より二匁方値が宜しうございます。

五兵　なに値がよいかそれは何よりだ、然しまだ値が上りはせぬかの。

六右　いえ〳〵只今が相場の宜しい止りでございます、是から段々下り口になります。

五兵　丁度よい時分であつた、種々古帳も奥に出してあるから見て下さい。

六右　畏りましてございます。

五兵　いやなに六右衛門殿、今更別に云ふでもないが、此方が請判でわしが家へ奉公に來たあの久八、まことに辛抱人ぢや、初めて此方が連れて見えた時は慥十二の年であつた、目見得に來た其時に上り口に落ちてあつた反故を拾つて紙縒によつて居るのを見て、此奴氣の附く奴だわえとわしが思つたに案に違はず、始末といひ辛抱といひ子供の時から目を附けた程あつて、わしが氣に適ふは久八ばかり、それに引替へあの養子に來た千太郎、いかに若年とは云ひながら、紙縒どころか半紙でなければ鼻紙も遣はぬ樣子、それに、そわ〳〵して、わしが氣に少しも入らぬのらくら者、困りはてるて。

六右　いえそれはまだお若い故でございまする。なか〳〵御發明な若旦那御如在な氣遣ひはございませぬ。あの久八なども根が田舍出でございますればお間に合兼ねませうけれど、旦那樣がお仕込故

どうやらかうやら人並になりましたと申すもの、是はあなたのお蔭でござります。
五兵　それは言はつしやる通り、一つは主人の仕込みにある、其所へ氣が附かねばならぬて。
久八　仰しやる通り私などは別段に旦那樣のお引立てゞござります。
五兵　これ〳〵皆もよう聞いて置いたがよいぞ、何時が何時迄浮か〳〵しては居られぬぞ、三度の飯は二度喰つて一度宛は主人の物の入らぬやう、第一己がやかましく言ふも、皆そち達の爲を思ふのぢや、餘所事に聞いてはなりませぬぞ。
六右　いやもう此方のお若い衆は、皆御辛抱でござります。
五兵　ときに六右衛門どの、丁度時分であらう、支度をしてござらつしやれ。
六右　いえ有難うはござりますが、まだほしうござりませぬ。
五兵　いや何も遠慮さつしやるな、其替りそれだけ反故を値をよく買はつしやれ。さあ〳〵わしも喰べるから、一緒にやりませう。
六右　左樣でござりますか、御遠慮なしに頂戴致しませう。
五兵　いやこなたは口果報があるわえ、今日は肴の惣菜ぢや、いゝ日に來合せて仕合せぢや。
六右　それは有難うござります。

五兵　それに少し悦び事があるによつて、大きな鰯が一尾附ぢや、何と此頃はわしが家も奢つて來たらうな。

六右　それは別段に好物な品でござりまする。

五兵　そんなら久八殿、見世を頼みまするぞ。

久八　御ゆるりと召上りませ。

五兵　さ六右衞門殿ござらつしやれ（ト唄になり、五兵衞先に六右衞門附いて奥へ入る。）

與助　いや旦那もいゝ氣な人だ、何の口果報な事があるものか、十で三十六文の鰯が一尾宛。

淸七　それも滿足ならよけれど、腹の切れた仕舞ひ物よ。

小僧　眞實に旦那は吝嗇だね、

久八　是はしたり手前迄同じ樣に、何の樣な事があらうとも御主人の噂はせぬ物ぢやぞ。それはさうと與助殿、若旦那はまだお歸りなされぬか。

與助　下谷の御屋敷と云ふのはかこつけで、何れ吉原で晝遊びでござりませう。

淸七　もし久八さん、此間參會の時に初めての女郎買ひ、それから女郎の味を覺えたかして、あれからこつちはそわくとなさいまして、何も手に附かぬ樣でござります。

久八　さあわしも知らぬ顔はして居るが、若し其事が旦那樣のお耳へ入らばどの樣なお腹立、お小言ばかりで濟めばよけれど、なか〳〵むづかしい旦那樣殊に根が他人の親子故、不緣にでもなる時は富澤町の旦那樣もどの樣に御苦勞なされうも知れぬ、どうかさうならぬ中、若旦那にも御意見申し旦那のお名前でもお嗣ぎなされ、見世を預かるやうになれば、わしも一遍國許へ行つて來たいと三年後から願つて居るが、どうか御辛抱を見屆けて、わしが願ひも叶へたいものぢや。

與助　先づ今の分では、

兩人　むづかしうござります。

久八　はて困つた事ぢやなあ。

トやはり角兵衛獅子の鳴物になり花道より、甲州屋吉兵衛羽織着流し冠り笠を持出で來り、直に門口へ來て、

吉兵　はい御免なさい、此間は御無沙汰をしました。（ト久八帳場を出て來り、）

久八　是は〳〵富澤町の旦那樣、よう入らつしやりました、先づ〳〵こちらへお上りなされませ。

ト是にて吉兵衛平舞臺へ住ふ、合方になり手代煙草盆を持つて來り、

與助　へい旦那樣、ようゐらつしやりました。

吉兵　もう〳〵構うて下さるな、段々と日短になつて嘸忙しなうござりませう。

久八　へい何かと用事の多い事で、とんと暇がござりませぬ、いつもお替りもござりませいで、お目出たうござります。

吉兵　いやもう唯達者なばかりで、とんと埒は明かぬて。ときに達者といへば五兵衛殿の病氣はどうでござるな。

久八　へい有難うござります、早速全快でもう昨日あたりから見世へ出られます。

吉兵　いや達者な人ぢや、それでは相替らず小言も出ようの。

清七　いやも出るの何んのと申しまして、唯小言のみで外に御用はござりませぬ。

與助　藤倉様の御藥が餘り效過ぎまして、御全快が早いので藥が出來ませぬ。

吉兵　はゝゝいやあの小言も病ひの一つ、持まへと云ふものは仕方がない物。然し病氣が全快と聞いてわしも安堵した、ときに久八殿、流質の調べはまだ出來ぬかの。

久八　はい調べ掛けてござりますが、つい見世の忙しないので、一日々々と延びましたが、最早一兩日の内にはきつと調べて置きまする、其替り旦那様今度の流質の口は、餘程端口が宜しうござります。

吉兵　それは何よりだ。いや久八殿流質と云へば、あの千太郎をば吉原で見掛けたといふ者が二三人も、わしが耳へ入つたが、家でも明けはしませぬか。

久八　いえ〳〵それは誰ぞ人違ひでござりませう、若旦那に限りましては、そんな事は決してござりませぬ。廓所か芝居さへ春と秋とにたつた二度、それさへ大旦那のお暇の出ぬ中は、おいでなされた事はござりませぬ、もうお若いお方には珍らしい事でござりまする。

吉兵　さう聞けば安心ぢやが、此間も廻りの髮結が江戸町とやらで見掛けたと云はれて見ると親心、何ぼ初心な伜でも年頃に、若ひよつとそんな事でもあつた日には、五兵衞殿へ濟まぬ上迚も始終が覺束ないと、案じた日には落附いても居られぬ故樣子を聞きに來ましたが、いよ〳〵其樣な事はござらぬかの。

久八　其事は決してお案じなされまするな。流石はあなたのお育柄、餘所外の息子樣より堅過る程にござりますれば、浮氣らしい事は怪我にもござりませねば、御安心なされてくださりませ。

吉兵　いやもう、隨分堅い者なれど譬にも云ふ思案の外、どうもわしは、(ト案じる思入。)

久八　もし旦那樣、其吉原で見掛けたと仰しやりましたは是は斯樣でござります、先達て仲間の參會崩れ御一統のお附合で、仲の町迄おいでの事がござりましたが、大方其時の事でござりませう。其

節もお茶屋迄お附合だけ、お早うお歸りでござりました。

吉兵　いかさま其樣な事であつたらう、然し誰しも若い時分は皆覺えのある事、まんざら惡くもない所故一度や二度はよからうと、それからが病付きでついはまり易いもの、賴みに思ふは久八殿、必ず主と思はずに親身の弟とも思うて、もし惡い事でもあつたなら、此わしになりかはりよう云うて下され、さうして貰ふが千太郎の身の爲め、必ず共に賴みましたぞや。

久八　行屆きませぬ私ではござりますが、及ばずながらお心添へも致しませうほどに、お案じくだされまするな。いやもう私が偏屈者でござりますれば、若い者や子供でも惡い噂やちと目に餘つた事がござりますれば、異見を加へて遣りますれば、仕合せと見世の衆も不勤めをした者はござりませぬ、いやもううるさう思ひませうけれど、實に若い者には折々四角な事も申さねばなりませぬ。

吉兵　何に附けてもこなたのしめしがよい故に奉公人の惡い耳も聞きませぬ、不斷家でも三河町ではよい番頭殿が居られるので五兵衛殿の仕合せと何時でも噂をして居ます、此上とも久八殿伜の身の上、よい樣にどうぞ賴みましたぞや。

久八　ひよつと惡い噂でもござりますれば、御遠慮なう御異見も申し上げ、もう一兩年の中には御家督

にもおなりなされませう、其時はお目出度くあなた樣の御安心をお待ち申して居ります。

吉兵　いやもう、今日は久八殿そなたに逢うたのでわしも安堵、あゝ伜もよい番頭殿がござるので身の仕合せぢや、それに附けてはわしも仕合せ、此禮は別段に言ひますぞや。いや、大きに長話をして、お前の帳合の邪魔をしました。これ久八殿、附かぬ事を聞くやうぢやがもう幾つにならつしやる。

久八　へい月日の立つは早いもの、昨日御奉公に上つた樣に存じますが當年三十一歳になりまする。

吉兵　もう三十一になられるか、あゝ年より遙に優つた事ぢやなう。（ト吉兵衛思入あつて）お前の年を聞くに附け、わしが惣領も算へて見れば三十一、何所にどうしてゐることやら、あ、生死さへも分らぬ身の上（トほろりと思入。）

久八　もし旦那樣、其御惣領と仰しやりますは、どうなされたのでございまする。

吉兵　いや是はちと仔細あつて、人に遣りました。

久八　左樣でござりまするか。（ト是にて吉兵衛氣を替へ）

吉兵　いや久八殿、今日はちと脫れぬ用事もあれば、直に歸りまする、五兵衛殿にも逢はずに行きます程によい樣に言うて下され。

久八　まア宜しいではござりませぬか、何時もながらお構ひも申しませず、

吉兵　事によつたら又歸りに寄りませう、（ト言ひながら門口を出る、久八送つて出て、）

久八　左樣なれば旦那樣、

吉兵　久八殿、（ト小聲になり、）伜が事を頼みますぞや、

ト唄になり、吉兵衞思入あつて、花道へ入る。久八宜しく後を見送り、

久八　あゝお案じなさるも御尤も、お年頃の若旦那には此頃（ト邊りへ思入あつて、）あ、親子の情は別な物ぢやなあ。これ與助殿、清七殿、吉兵衞樣のお出で思出したが、此方衆は流質の代物を附け立て下され。

兩人　畏りました。

久八　これ〳〵次の間には旦那がござれば、めつたな事は、

兩人　畏りました、

久八　又端唄や聲色の稽古をして、旦那に聞かれぬ樣にさつしやれ。

兩人　はい〳〵畏りました。

久八　小僧や、そちも一緒に行つて手傳うたがよい。

小僧　はい〳〵。

兩人　飛んだ事を聞出された。(ト合方にて兩人小僧附いて奥へ入る。久八殘り思入あつて、)

久八　惡事千里と若旦那が吉原通ひをなさるゝを、吉兵衞樣のお耳に入つた樣子、然し今の樣に云うて上げれば、是からふッつり思ひ留る樣篤くり御異見申さにやならぬ。それに此間町内の九兵衞樣が口入で質に取つた白露の短刀、此間藏へ行つて見たれば、何處の棚にも見えぬ故ひよつと若い者が仕業かと心を附けれど其樣子も見えず、未だ部屋住の若旦那何をなさるゝも不自由勝廓の金には詰るの譬、ひよつと持出しはさつしやらぬか、あの短刀が流質の品ならよいけれど、まだ月のあるあの代物、今にも請けに來られたら何と言譯が出來ようぞ、打捨置かれぬ一大事、なんぼお若いとは言ひながら前後見ずのなされ方、とつくり御意見申さにやならぬわえ。

トぢつと思入、花道より千太郎羽織着流し自墮落なる打扮にてツカ〳〵と出で來り、直に内へ入り邊りをうろ〳〵して、

千太　おゝ其所に居るは、久八か。

久八　おゝ若旦那樣只今お歸りでござりますか、何方へおいでなされました。

千太　久しく佛參をせぬ故、今日は淺草へ行つて墓參りをして來ました。

久八　それは御奇特な事でござります、ようお參りなされました。

千太　さあ、わしが今日寺參りに行つたは、人間といふ物は斯う達者なやうに見えても、老少不定とやらで今夜にも死なうも知れぬ故、それで墓參りに行つたのぢや。

久八　お前樣も何を仰しやりまするやら、其樣な忌はしいことは言はぬものでござりまする。如何に老少不定ぢやとて、今の若さに死んでたまるものぢやござりませぬ。

千太　それぢやというて、死なぬと堅い事も言はれぬぢやないか。

久八　左樣ではござりますが、何時死ぬ事やら知れぬで持つた物でござります、あなたの樣に死ぬ事が知れたか何んぞの樣に、あゝ鶴龜々々。

千太　いや〳〵、これ久八どの、おりや事に依ると死ぬかも知れぬわいの。

久八　よう死ぬ〳〵と仰しやりますが、御氣分でも惡いのでござりますか。

千太　さあ氣分が惡い所ぢやない、惡うて〳〵、悔しうてどうもならぬわいの。

トわな〳〵震へながらいふ、久八も思入あつて、

久八　まゝお顏の色も常ならず、又例のお疳が發りましたな、さういふお氣持の所へ大旦那樣のお目にかゝり、又お小言でもおつしやればやつぱりあなたのお氣分の障り、まだお見世へおいでのない

中直に二階へお上りなされませ、さうしてちつとお休みなされますと少しは御氣分も、殊には遠方へお出故又お勞れも、

千太　え、

久八　いやさ、大方お草臥でござりませう、まあ〳〵お休みなされませ。

千太　そんなら二階へ行てちつと横になる程に、誰も人をよこしてたもるな。

久八　宜しうござります、誰もやる事ぢやござりませぬ。（ト千太郎思入あつて立上り）

千太　これ久八、

久八　へい、何でござります。（ト千太郎久八の顏を見て）

千太　頼んだぞよ。（ト思入あつてツイと奥へ入る。久八後を見送り）

久八　あゝ息づかひの忙しさといひ心に掛る詞の端、何か仔細のありさうな事、御發明な樣なれど世間知らずの懷中子、意氣地とやらで若氣の至り、ひよんな事でも、（ト思入あつて）こりや打捨てゝは（ト烟管で灰吹を叩くを、道具替りの知らせ）置かれぬわえ。

ト獨吟になり、久八ぢつと思入よろしく、道具廻る。

（伊勢屋二階の場）═══本舞臺三間の間上手へ寄せて常足の二重二階家の道具、上の方三尺の袋戸棚、正面床の間一間二枚の襖、下の方庭の黒塀後へ下げて土藏の張物、下家の家根物干など宜しく取附け、總て奥二階の模樣。爰に千太郎脇差を出し、手拭にて拭ひ居る。やはり獨吟にて道具留る。

と千太郎思入あつて、

千太　思へば憎くき村井長庵、親切ごかしに私を欺し五十兩といふ金取つて今日になつて素知らぬ顏、却つて此方が言掛したと手籠めになして打ち打擲、此意趣返しに汝を殺し、わしも直に死ぬ覺悟、人の恨があるものか無いものか、おのれ長庵待つて居をれ。唯濟まぬのは親父樣、孝行すべき身をもつて不孝重ぬるのみならず暖簾迄に疵附ける憎い奴とも思召しませうが、どうも捨ては置かれぬ仕儀、先立つ不孝は親父樣お免しなされてくださりませ、（ト宜しくこなしあつて、）明日にもそれと知られたら親父樣が嘸お歎き、取分けて母さまは不斷からの血の道持、死んだと聞いたら猶更に御病氣の種になるであらう、濟まぬ事とは知りながら思ひ切られぬ絕體絕命、唯何事も前の世の約束事と諦めてお免しなされてくださりませ。あゝいつ迄言うても返らぬ繰言、又久八が見咎めなば嘸や苦勞にするであらう、人目に掛らぬ其中に少しも早く、さうぢや〳〵。

ト身拵をして脇差を袖に隱し行きに掛る。此以前より久八後へ出掛り居て、

久八　若旦那、何所へござらつしやりまする。
千太　や、そなたは久八、
久八　いやさ、何れへおいでなされまする。
千太　さあ、あの、わしが行くのは、
久八　お袖に隱した其一腰、そりや何になされまする。
千太　さあ、是はな、
久八　あなたはそれで人を殺し、死ぬるお心でござりませうがな。
千太　や、（ト悄り思入。）
久八　そりや惡い御了簡でござりまする、どう云ふ譯か存じませぬが、膝共談合私になぜ斯う〳〵ぢやとお話しをなされては下さりませぬ。勿體ないことながらお主樣とも親身とも思うて居ります此久八、他人行儀になされますは、そりやお恨みでござります。
千太　（思入あつて、）これ久八、堪忍してくれ〳〵。（ト手を合せて拜む。久八其手を拂ひ、）
久八　あゝ是はしたり、其樣になされますると罰が當ります、定めて餘儀ない譯でもござりませうが、其仔細を私めにお聞かせなされて下さりませ。

千太 今に初めぬそなたの親切、今更言ふも面目ないがまあ一通り聞いてくりやれ。いつぞや仲間の參會で否と云ふのを無理やりに吉原へ連れて行かれ、丁子屋で今流行の小夜衣といふ女郎を買ひ、濟まぬ事と思つた故たつた一度で行くまいと思うて居たが惡緣か、二度が三度と度重なり引くに引かれぬ仲となり、頻に女房に持ちたくなり身請せうにも樣子は知れずどうした物と思ふ所、其小夜衣が伯父ぢやといふ麹町に居る町醫者で村井長庵といふ人が事馴れて居ると聞き、其長庵を呼びに遣り相談をした所、客の方で身請をすれば三百兩も入りますが其所を判方の私の方で親の病氣と僞つて掛合を致しますれば賣つた時の五十兩で小夜衣を取戻しますから、五十兩都合して持つて來いと云ふ故、道ならぬ事ながら九兵衞殿の口入で三次殿から質に取つた白露の短刀を持出して、遊び仲間の遠州屋へ五十兩の質に入れ、其金を長庵へ明神下の龜の尾で渡した時に明後日は家へ連れて來る程に、逢ひに來いと言うた故今日尋ねて行た所、其樣な事は知らぬと言うて私を打つたり叩いたり、金を渡した其折に一寸一札取らぬのは私が不念に仕方なくすご〳〵家へ歸つて來たが、五十兩と云ふ金を只取られた悔しさにどうも蟲が納らぬ、是から行つて恨を言ひ、彼奴を殺して私も死ぬ氣、譯といふのは此通り、無分別ではあるけれど、止めずに遣つて下されいなう。〔ト久八是を聞き思入あつて〕

久八　成程お話を承はりますれば御尤もでござります、其長庵といふ奴は噂に聞いた悪い奴、其様な者に欺されたがお前様が悪い故、唯斯様に申しまするとがからぬ奴と思召しませうが、よう物を積つても御覧じませ、五十兩で買つた娘を諸藝を仕込んで親方で突出す迄の物入りは安い金ではございませぬ。それを元金の五十兩でどう取戻しがなりませう。如何に世間を御存じないお若い身とはいひながら、それを實に心得て、金をお渡しなされたは言はゞ此方の不調法、こりや思ひ切つておしまひなされませ。よし又それが五十兩で取戻しになつてからが、身元の知れぬ女をば伊勢屋の嫁になりませうか、十間間口の居附地主、神田組の質屋では五本の指に折らるゝお家、何の某といふ名前の聞えたる商人の娘でなければ、どうまあ嫁御に貰はれませう。さすれば女房に持たれぬ女、どんなよい器量かは存じませぬが此身代を振捨て女房に持つても詰らぬ譯、お若いとは申しながらもう御勘辨が出にやなりませぬ。今し方も富澤町の旦那様がおいでなされ、此間も廻りの髪結が吉原で伜をば見かけたといふ話だが、ひよつと不埒でも初めはせぬかとお案じなされて、わざ〳〵おいでなされました故、若旦那に限つては決して其様な事はござりませぬと立派に申して上げますれば、それは〳〵お悦びでお歸りなされました。親御様の御心配といふものはどの様でござりませう、此女がいゝのあの傾城に限るのと言ふはほんの當座の事、其小夜衣

とやらばかりが女子でもござりますまい。どうぞ思切つて下さりませ。もう半年か遲くも一年二年とは待たしませぬ、器量望みでどの樣な美しいお嫁御でも、私が御世話致しまするから、もう惡い御了簡をお出しなされまするな。あの通りお濶達の旦那樣、此事がお耳に入らば直にお里へ人が參りまする、さうなる時はあなた樣ばかりではござりませぬ、請合ひました私迄面目なうござりまする。御兩親樣の御孝行且は私をお助けなさると思召し、此後ふッつり此事は思ひ止つて下さりませ。(トこれにて千太郎術なき思入にて、)

千太 段々との其方の異見、聞けば聞くほど私が過り、今更悔んで返らぬ事、惡企をする長庵が親身の伯父のあの小夜衣、首尾よう女房に持つてから生涯難儀をせねばならぬ。あゝ迷つたく、心が附いて見る時は、猶々濟まぬわしが身の上。(ト心配の思入。)

久八 あゝお出かしなされました、ようお心を取直して下さりました、あなたが御了簡さへ定まりますれば短刀の事は私が引受け、どうか都合を致した上、取戻して人知れず元の所へ入れ置きませう程に、必ず御心配なされますな。然し一寸しても五十兩、今といふ譯にも、

千太 もし其中に三次とやらが、請けに見えたらどうせうぞ。

久八 いえ急には出さぬ品といふ事は大概知れて居りますれば、氣遣ひはござりませぬ。唯旦那が土藏

へおいでなされまして、無いのがお目に掛つた時は、言ひ譯に困りますて、

千太　もしさうなつたら、どうも私は、

久八　いえ〳〵宜しうござります。言ひ譯の立たぬ時は絶體絶命、私が其罪は着ますほどに、あなたは知らぬ顔をしておいでなさりませ。

千太　それぢやというて、どうして其方に其罪が、

久八　はてお前樣と知れましては、富澤町の旦那樣へ私が濟みませぬ、然しさうなる氣遣ひはござりませぬが、是は其時の心得、それ迄には都合致して取戻して置きまする、何事も私次第にお任せなされてくださりませ。(ト此時奥より小僧出で來り、)

小僧　番頭さん、旦那樣がお呼びなされまする。

久八　おゝ、只今參ると言うて下され。

小僧　畏まりました。(ト奥へ入る。)

千太　親父樣がお呼びなさるゝは、若し詮議では、

久八　はて、それなれば、又其時の事、

千太　それぢやというて、

久八　はて、お任せなされてお置きなされませ。

小僧　（奥にて。）番頭さん〱。

久八　はて、忙しない、

千太　そんなら久八、どうぞそなた、

久八　宜しうございます。どうか其事で、（ト思入あつて立上り。）無ければよいが、

ト唄になり宜しく道具廻る。

（元の店頭の場）――本舞臺元の見世の道具へ戻る、爰に五兵衞帳場に帳面を調べ居る。傍に手代兩人立ちかゝり居る、平舞臺に三次判人好みの打扮にて煙草を喫み居る。此傍に御家定の澁右衞門着流し大小侍の打扮にて控へ居る。此見得合方にて道具留る。

三次　もし、短刀は見えませぬか。

五兵　へい何所へ積込みましたか、唯今知れまするでございまする。どうぞもう一ぷく上つて下さりませ。（ト奥より手代出て來り。）

清七　與助殿知れましたか。

與助　はい、藏の棚を殘らず捜しましたが、どうも見えませぬ。

五兵　これ〳〵見えませぬといふ言譯はない、よく捜して見さつしやい、さうして久八はまだ來ぬか。
小僧　はい只今參りまするると申されました。
三次　どうぞ早くして下さいまし。
與助　まことに早お待遠でござりまする。（ト奥より久八、千太郎出で來り、）
久八　何ぞ御用でござりまするか。
五兵　おゝ久八か、九兵衞さんの判で此お方より預つた短刀を出しにおいでなされたが、どうも藏に見えぬさうだが、貴樣覺えはないか、（ト久八、千太郎びつくりして、）
千太　あの、そんなら短刀をば、
久八　出しにおいでなされましたか、（ト當惑の思入。）
五兵　先刻からお待ちなされてお出でなさるわ、
千太　これ久八、どうしたら、（ト言はうとするを久八押へて、）
久八　はて、お前樣の知つた事ぢやござりませぬ。默つておいでなされませ。
三次　もし〳〵番頭さん、去年の八月廿日の晩お前の所から貰つた質手形、此短刀を出して下さい。
ト質手形を久八の前へ置く。

久八　はい／＼、唯今見出して差上げまする。

三次　實は爰においでなさる澁川澁右衞門様から頼まれて置いた短刀さ、明日お國へおいでなさるといつて唐突に言はれたから、大急ぎで來やした。外に用もあるし、早く出して下さい。

久八　すりや、あなたが御持主でござりまするか。

澁右　いかにも身共が所持の短刀、先祖より持傳へたる品なれども、餘儀無き事にて此者を頼み預けたが、此度殿様より御懇望に就いて是非々々差上げねば相成らぬ。それ故取る物も取敢ず請戻しに參つたのぢや、どうぞ早う渡して下され。

久八　左様でござりまするか、誠にお待遠でござりまする。（トちよつと三次に思入あつて、）もし三次さん、お氣の毒様だが一寸お顔をお貸し下されませ、只今手代共が捜しましたが、何處へ仕舞ひましたか、どうも知れませぬさうでござりますが、どうか明日迄御勘辨くだされませ。

三次　もし／＼番頭さん、そりやあお前のお頼みだが、わつちが物なら一日や二日はどうでもいゝが、あの旦那が持主で今お前も聞く通り殿様から御懇望で、御上へ上げるといふ大切な代物、あのお方が早速差上げませうと御請をして來た日限の物だらうぢやあねえか。今是が質に置いて知れねえといふ日にやあ、二百石取の御侍様を一人棒に振らにやあならねえ譯だ。質手形をよこしなす

つてお預け申した品だから、無えといふことはあるめえぢやあねえか。

久八　そりやあ預かり申した品に相違はござりませねば、あるに違ひはござりませぬ。

澁右　これ〳〵番頭容易ならざる白露の短刀、知れぬで事が相濟まうか、今日は是非〳〵上へ差上げねば相ならぬ。それ故にこそ此澁右衛門が態々是迄推參致した、暫時も猶豫は相ならぬ。これ三次殿、其方も請合つて質物に差入れながら、無いと申して事が濟まうか。（トきつといふ。）

三次　御尤も樣でござりまする、私も掛り合でござりますれば、知れませぬでは濟ましませぬ。もしもし番頭さん、預かつた代物が無くなつちやあ濟むめえぢやあねえか、早く詮議をしておくんなせえ。

五兵　これ〳〵久八、先刻からお待遠だ、貴樣早く尋ねてお上げ申さぬか。

久八　はい。（トもぢ〳〵立兼る故。）

五兵　何をぐづ〳〵、さつさと尋ねて上げ申せ。

久八　はい畏まりました、（ト久八立掛るを、三次留めて。）

三次　もし番頭さん、一寸待つておくんなせえ。

久八　はい、待てとは何んぞ御用でも、

三次　いゝや番頭さん日が短えや、むだな立居はよしなせえ、あの短刀はありやしめえね。

千太　え、

三次　いやさ、其の短刀は爰の家の藏の中にやァあるめえが、

久八　どうしてそれを、

三次　家の息子が擔ぎ出し、賣つたといふのを聞いて來たのだ。

千太　え、(トびつくり思入。)

三次　月の切れねえ質物を置主へも斷らず、ばつたりに賣つても濟みやすか、もし、そんな事はわつちらがする事だ、乞食伊勢屋と言れちやあ神田きつての質兩替、地面地屋敷を持つて居る旦那衆の御身分で、早乘をして濟みやすか。はゝあ、こりやあなんだね、置主がわつちだから出されねえと見くびつてしなすつたのだね。

久八　いえ〱、全くもちまして、

三次　いや、さうだ〱、人の大事の代物を女郎買の遣繰に遣はれちやあ癪に障らあ。さうされりやあ此方も意地だ、入らねえ物でも出さにやあならねえ。まして日限で入用のあの短刀がねえ日にやあ、お侍樣は腹切道具だ。さうなる時にやあうぬの家へも兇状を掛けにやあならねえ。ある

とも無えとも、番頭さん、肚胸をすゑて返事をしねえな。
ト三次胡座をかき、きつと言ふ、五兵衞びつくりして、
五兵　やあ〳〵、そんならあの短刀は、伜が餘所へ、
三次　お前の息子が女郎買の穴ッぷさげに、やらかしたのだ。（ト此時久八前へ出て、）
久八　あ、いや〳〵そりや若旦那ではござりませぬ、此久八が持出したのでござりまする。
與助　やあ〳〵、すりやあの番頭さんが、
清七　あ、人は見掛けに寄らぬものぢや。（ト五兵衞きつとなつて、）
五兵　やい久八、大まい五十兩と云ふ短刀を、何でおのれは持出した。
久八　今更申しまするも面目ない事ながら、不圖吉原に馴染が出來、五兩七兩筆先で遣つた穴の埋草にあの短刀を盜出し、五十兩に質に入れました。（ト思切つて言ふ。千太郎術なき思入にて、）
千太　それではどうも、
久八　はて此久八が遣ひました。私の所業でござります。
五兵　（あきれたる思入にて、）いやあきれて物が言はれぬわえ。これ久八、汝は〳〵大それた私が所業でござりますと、よくも〳〵言はれた事だ。これよく聞け、あなたは代物が無くなつても五十兩と

いふ金を遣つておいでなされば、まだしもそれだけ得なれど、己は正金五十兩目に見えての損をせねばならぬ。これ五十兩といふ金が尋常大抵で出來ると思ふか、爪へ火を點す樣にして積上げた此身代、それを澤山さうに遣ひをつて、汝どうしてくれう、えゝ腹が立つわえ〱、

ト久八を突廻し悔しきこなし。

三次　何だえ今聞いて居りやあ、わつちが方は五十兩遣つたが得だえ、面白くもねえ、そりやあ其方の得手勝手だ、五十兩遣つたといつて只貰つた金ぢやあねえ、二百兩にもなる代物だ、そつちやあ五十兩の損だらうが、こつちやあ百五十兩の損だ。さあ、たつた今出して呉れ。

五兵　そりやあなた出せと云うて、お預かり申しました其代物は久八めが持出したとあれば此奴が科、此久八から金を出させ、其金で短刀を請戻し、お前さんへお返し申しませう。

三次　いゝや、そりやあちつとも待てねえ、先刻からもいふ通り、今日限りの短刀だ、さあたつた今、出せ〱〱、出しやあがれ。

久八　さあ〱御尤もでございますが、長うとは申しませぬ、どうぞ明日迄の所をばお待ちなされて下さりませ。もし三次樣、此通りでございます、拜みまする〱。

三次　えゝ、否だわえ。

千太　もし〳〵、私が里へ云うて遣りまして金を拵へ、きつと差上げまするから、どうぞお待ちなされて下さりませ。

三次　いやだ。

千太　どうぞわづかな所をば、

三次　えゝしちくどい、否だと言ふに、

久八　そんならどうでも、

兩人　待たれませぬか。

三次　知れたことだ。（トきつと言ふ。久八千太郎思入、三次居直つて、）これよく聞け、年中人の物を早乘つて、斯う云ふ仕事で喰つて居る早乘り三次だ、手前達の樣なうぶな野郎に代物を早乘られちやあ、友達へ顏向がならねえ、平つたく云やあ待たれるものも待たれねえ、爰らがこちとらの附目だ、ちつと目の明いた挨拶をしろ。さあ親父、番頭や息子にやあ構はねえ、伊勢屋五兵衞と云ふ名目で大帳に附いてる代物だ、五兵衞が取つた質だから五兵衞から出せ。（ト懷中より金包を二つ出し、）さあ元金は額銀包で二た包、五十兩持つて來たのだ。さあ質物を出しやあがれ。

五兵　それではお前が無理といふもの、無い物が出されるものか、それを出せと云ふのはお前がゆすり

ぢや。

三次 なに、ゆすりだ、途方もねえ事を言やあがらあ、ゆすりとは誰が事だえ、置いた質を出さうといふのが何でゆすりだ、己がゆすりならお前方は盗人だ、さあゆすりならゆすりにして己を爰から突出してくれ、何奴も此奴も抱込んで皆んな哭面を見せてやるぞ。さあ突出せ、えゝきり〳〵と突出しやあがれ。

トきつといふ、此時奥より以前の六右衛門出で來り、前へ出て、

六右 もし〳〵、最前からの樣子は奥で聞きました。又お話しも致しませうから、まあ靜かにして下さりませ。

三次 いゝや靜かにしちやあ分りやせん。ゆすりだとぬかしやあがつたから、此明かりを立てにやあなりません。

六右 いち〳〵お前の御立腹が皆尤も、それも詞の間違ひといふもの、まあ〳〵待つて下さりませ。

五兵 これ〳〵六右衛門殿、此方も掛り合ひだ、其方が請判で置いた此久八が、五十兩といふ短刀を持出した不屆者、それから發つた此騷ぎ、どうともかうとも片を附けさつしやれ。

六右 宜しうござります、あなたの御厄介にはなりませぬ樣、私がどうとも致しまするでござります。

三次　さあ親仁、何をぐづ〳〵ぬかすのだ、短刀の方はどうするのだ。

五兵　えゝどうもかうもいるものぢやない。もう請人に引渡したから、其六右衛門殿に掛合はつしやれ。

三次　これいゝ年をして分らねえ事をぬかすなえ。奉公人の掛合は手前が勝手にするがいゝ、置いた質は伊勢屋五兵衛だ、主人が相手だ、早く方を附けやあがれ。

澁右　これ〳〵三次、あの短刀がない日には、此澁右衛門命を捨てねば相ならぬ。

三次　御尤もでござります、とても命をお捨てなさるなら行きがけの駄賃だ、片つ端から切つてお仕舞ひなさいまし、其中にもあの親仁短刀をなくしやあがつてお前様には敵同志だ、あいつから先へ敲き切つてお仕舞ひなせえ。

澁右　なるほど身共も其心得で罷り在る、先主人の五兵衛より一分試しに致してくれう。

ト身拵をなし立上る、五兵衛驚き、

五兵　あゝわしが知つた事ではない。（ト逃にかゝるを、）

三次　うぬを逃がしてつまるものか。（ト五兵衛を引すゑる、六右衛門中へ割つて入り、）

六右　これ〳〵必ず短氣をさつしやりますな、私が話をしませうから、まあ〳〵待つて下さりませ。

ト久八千太郎も思入あつて、

久八　事の發りは私故、切つてお腹がいるならば私を先へ殺して下さりませ。

千太　いえ〳〵其方が知つたことではない、わしを殺して下さりませ。（ト兩人して三次、澁右衞門に縋る。）

澁右　いや〳〵さう死にたがる者を手に掛けては、此方の仕事が、いやさ、身共が一分が立たぬ。是非とも厭がる主人から、

六右　先々お靜まりなされませ、只今御挨拶を致しませう。暫くお待ち下さりませ。（ト五兵衞の前へ來て）中々あの樣に云ひ出しては聞き入れませぬ。こりや首代でも出さずばなりますまい。

三次　なるほどこりやあいゝ思ひ附だ、さあ命が惜しくば首代を出せ。

五兵　そんなら首代を取られるのか。

六右　はて、見込まれたが此方の災難。

五兵　あゝ仕方がない、今日は如何なる惡日ぞ、思ひ切つて一分も遣らずばなるまいか。

六右　いえ〳〵一分位では濟みますまい、先一兩もおだしなされませ。

五兵　なに一兩、途方もない、どうして〳〵めつそうな事を言はつしるな。

澁右　これ〳〵町人、否やを申せば首がないぞ、此方は金より首が望みぢやわえ。

ト叉刀の柄へ手を掛ける。

五兵　あゝ申し出しますく、惜しいものだが、それ一兩、（ト小判を一枚出す。）
三次　何だ首代が一兩か、
淀右　一兩ばかりで了簡がならうか。やつぱり首を、（ト又立掛ける。）
五兵　あゝ仕方がない、もう二分、〆て一兩二分、
淀右　いやく二兩や三兩では了簡ならぬ、只の面ならよけれども、其長い面が端金で了簡ならうか。
五兵　三兩ではなりませぬか。
三次　まだく、
五兵　もう一朱買ひませうか。
三次　一朱ばかりどうなるものか。
六右　そんなら堪忍五兩、
三次　密夫が七兩二分、
五兵　さう値打のある首ではないが、
三次　見てくれはふめなくつても、首の値段は目方の物だ。
五兵　そんなら譬の通り、目方に掛けたら十匁、

五兵　あの十兩が相場かな。さう聞いては是から大事に遣はねばならぬ。(トしぶ〱十兩出す。)
澁右　了簡しにくい所なれど、命を取るも不便故、十兩で免してくれるわ。
五兵　あゝ此の首が十兩とは、我ながら高いものだ。(ト頭を撫でる。)
三次　もし十兩ばかりで不承しちやあ、お前殿樣へ濟みやすめえぜ。
澁右　それでも是が眞の取得。
三次　えゝ意氣地のねえ、質兩替の旦那の首、見掛は間拔けな面つきでも二十や三十の値打はあらあ。
澁右　むゝなるほど、十兩では八百屋か魚屋、質兩替の主人の首十兩では了簡ならぬ〱。
久八　(思入あって、)これ三次殿、折角旦那が十兩で了簡しようと仰しやるを、お前が傍から餘計な事、十兩取ればよいではないか。
三次　いゝとは何だ、己あ錢貰ひに來たのぢやあねえ、質を出しに來たお客樣だ、十兩でいゝとは何の事だ。
六右　これさ何を言はつしやる、先刻から見て居ると、しら几帳面なお人とも見えぬ、腋皴は言はずとも切れたお人と見て取りました、まんざら錢貰ひでないこともござりますまい。
三次　何で己が錢貰ひだ。

六右　さあ、短刀が無いを承知で質受けにござられた三次どの、無いからよけれどあつた日には、其金では請けられまい。

三次　何と、

六右　さ額銀か知らぬが溫石の石によく似た金包み、明けて言つたら物がない、其溫石より十兩でお前の腹も暖たまらう、うんと言つてもよいではないか。

三次　（思入あつて、）成程おめえの云ふ通り、己が置いた短刀のねえのを承知で請けに來た五十兩は、お察しの時候ちがひの箱入溫石、斯う見出されちやあわつちも三次だ、十兩持つちやあ歸られねえ、此御家定を侍に仕立てゝ來たも大小から身の廻り迄損料物、元手を掛けて來た仕事だ、十兩ばかりぢやあ歸られねえ、おめえの方でもゆすりと知れちやあ、只は置かれめえ、さあ爰の家から突出しなせえ。

澁右　これ／＼兄貴喰え込んぢやあつまらねえ、十兩取つて歸んねえな。

三次　いゝや打捨つて置けえ。

澁右　それだつて牢疥癬ぢやあ懲り／＼だ。

三次　案じるな手めえは拔いて遣るから其替りにやあ、五兵衛を始めどいつもこいつも抱いて行くぞ、

手めえ達を土産にして行きやあ直に役附いて、婆婆に居るより樂をするが、遁れるだけは行き度くねえ、其所が譬の地獄だ、手前達が行つて見ろ、三日も行きやあ直に熱氣でころりといかあ、然し一度は見るのも得だ、己が案内してやるから覺悟を極めてうしやあがれ、（ト三次きつと思入）やい、其所に居る息子、短刀を盜みやあがつたのは手めえだらう、今ッから其了簡ぢやあ此家を叩き潰すのは造作もねえ、いや今の中だ、どし／＼やれ。

久八　あゝこれ／＼三次さん、其短刀は今云ふ通り私が吉原通ひで金に詰り、ついした事の出來心、

三次　えゝ知つてるわ、息子が逆上て通ふのは、丁子屋の小夜衣と云ふ流行妓だ。

久八　さあ其小夜衣に打込んだは此久八、私の科でござりまする。もし三次樣、嘸お腹も立ちませうが今日の所は此儘にお歸りなされて下さりませ、お前樣へは別段にきつと御禮を致しまする。もし今日の所をば御慈悲でござりまする、お歸りなされて下さりませ。

ト三次に賴む、六右衞門も思入あつて、

六右　これ三次殿とやら、今云うたのは私が言ひ損ひ、お前に無理は少しもござらぬ、此天窓に免じて其金でどうぞ歸つて下さりませ。

三次　そりやあ歸つてくれろと賴みなさりやあ歸らねえとも云はねえが、一番天窓を押へられちやあ何

所迄も居直らにやあならねえ、爰がわつちらが體を張る所だァね。
瀧右　兄貴、もう歸つてもいゝ時分だぜ。
三次　それぢやあ今日は歸つて遣らう、云ひてえ事はあるけれど、久八どんおめえに免じて何にも言はねえぜ。
久八　いやもう何事も私が越度、後で話をしませうから、どうぞ二三日の所をば、
三次　男は當つて碎けろだ、二三日なら待つて遣らうよ。
五兵　さう話が附いたなら、其首代には及ぶまい。
三次　是が欲くば返して遣らうが、其替りに抱込むぞ。
五兵　いやそれは眞平、
三次　それぢやあ己が持つて行つても、言ひ分はねえか。
五兵　ある樣な無い樣な、
三次　今日は歸るが、明後日迄に話が附かにやあ又來るぞ。
五兵　え、
三次　定や行かうぜ。

濡右　おい、(ト立たうとしてぺつたり坐り、)歩けねえ〳〵。
三次　どうしたのだ。
濡右　長く坐つてしびれがきれた。
三次　とんまな男だぜ、額へ埃でも附けて見ろ。(ト是にて定額へ埃を附ける、)
定　やつと立たれた。(トよろける。三次介抱しながら門口へ出て、)
三次　それぢやあ久八さん、いゝね。
久八　何事も私が胸に、
三次　おい吝嗇、明後日来るから待つて居ろ。(ト花道まで行き、)どうだ、しびれはいゝか。
定　やつと直つた。おい兄貴、おめえはいゝ肚胸だ。
三次　べら棒め、いゝの悪いのと云つたつて大丈夫な仕事だ、手前も二本差の上りぢやあねえか、もうちつとはき〳〵するがいゝや。
定　お前があんまり根強いから、此方が烟にまかれらあ。
三次　是からもうちつと張込んで遣つて見ろえ。さあ今日の立前だ、(ト金を一分出して、)さあ、手を出せ。

定　おい來た。（ト兩手を出す、三次一分載せろ。）兄貴たつた一把か。

三次　知れたことだ、一把ぢやあ少ねえか。

定　これぢやアあんまり酷からうぢやあねえか、山割なら五兩宛よ、三つ割ならば三兩廿匁よ、お前一割にも付くめえぢやあねえか。

三次　え丶意氣地もねえくせに、慾張つて居やあがらあ、仕方がねえ、そんなら二把よ。（ト又一分出す。）

定　ごうぎに刻むぢやあねえか、せめて三把にもしてくんねえな。

三次　なに、三把。三把と切出しちやあ猶厭だ。

定　なぜ〳〵、三把ぢやあいけねえのか。

三次　知れたことよ。我思ふ所より外へはやらじと思ふ、

定　へ丶悪りい洒落だ。

三次　爰が志賀山流だ。

定　そんならいよ〳〵三番は舌出しか、

三次　あたりめえよ。

ト好の端唄になり、三次、定花道へ入ろ。後皆々思入あつて、五兵衞恨めしさうに後を見送り。

五兵　扨々太い奴もあるものだなあ。

六右　いやも、彼奴等は容易な奴ではござりませぬ。あゝ云ひ出しますと、大なり小なり金子を取りませぬ中は歸りませせぬ、實に人間ではござりませぬ、逆らひますればお見世のお邪魔、よう金子を遣はされました。

五兵　これ〳〵六右衛門殿、あんまりようも金は出しませぬ、是と云ふのも、貴樣の見さつしやる通りあの久八が爲した業、此方請人の役ぢや、五十兩の金を償うて當人を引取つて行かつしやれ、見るもなか〳〵腹が立つわえ。（ト疊を叩いて云ふ。）

六右　へい〳〵繰立腹は重々御尤もでござりまする、請人の事でござりますれば、否やなく引取りまする。（ト久八に向ひ、）これ久八どの、さて〳〵こなたは見損なつた人だの、如何に天魔か魅入ればとて、あんまり呆れて物が言はれぬ。國許の親父やお袋が、あの久八はもう戻つて來るか何日頃鄕へは歸るぞと指折り算へて待つて居るは、度々の書狀でも知れてあるに、飛んだ事を仕出かして私から何と云つて遣り樣がない。十九や二十歲の者ではあるまいし、是がお家の若旦那とか若い者ならありがちの事、お見世の締りもする者が此樣な不始末して、貴樣は濟まうと思ふか、いやさ、御主人樣へ濟まうと思ふか。

トきつといふ、千太郎術なきこなし、久八思入あつて、

久八　いやもう一言の申譯もござりませぬ、今更申すも返らぬ不埒、面目もなき此度の仕儀、御不承でもござりませうが、どうぞ引取つて下さりませ。

六右　そりや引取るも腹が立つけれど、首と釣替の判を捺したが私が不承ぢや、否でも應でも引取らにやならぬわえ。あまりと云はゞ馬鹿々々しい。

千太　あゝこれ〳〵六右衛門殿、久八に科はない、あの短刀は、此私が、（ト言ひかけるを久八消して、）

久八　これはしたり若旦那樣、年來勤めた此久八故殊にあなたが御養子においでなされた其時に、お取持致したる私故、かばうて罪を引受くるお志でござりませうが、どうまあ家來の私がお主に難儀を掛けられませう。何にも仰しやらぬが宜しうござりまする。はて口出しはなされますな、お志は屆きました。さ、默つておいでなされませ。

千太　それではどうも、

久八　其やうに仰しやりますと、どうやらあなたがなされた樣で、人聞が惡うござります。

千太　それぢやと云うて、

久八　はて、是程苦勞を致しましても、お聞入れはござりませぬか。

ト千太郎を鎭める、千太郎是非なく控へる、六右衞門扨はといふ思入あつて、

六右　おゝ、出來た。(ト思はず言ふ。)

五兵　出來たとは、金が出來たか。

六右　(氣を替へ)いえ、ひよんな事が出來たと申しましたのでござりまする。久八どの其方は私がしつかりと引取りませう。

五兵　引取つて行くならば、五十兩の金を爰へ置いて行かつしやれ。

六右　さあ引負なれば兎も角も、今と云うては多くの金子、何れ濟方致しませう。

久八　これ伯父樣、其五十兩は旦那樣へお預け申せし此久八が御給金、今年で丁度卅五兩、不足の所は衣類其外二た葛籠殘らず拂つて仕舞ひましたら、十四五兩にはなりませう。それをどうぞ私が引負の償ひに、

五兵　いや〳〵そりやならぬ、首尾能く勤め上げたなら給金も衣類も殘らず渡さうが、此樣な事を仕出かした不埓者、給金は元より衣類一つなりと渡す事はならぬわえ。

六右　それは餘りでござりませう、何も持つて歸らうとは申しませぬ、引負金の償ひにあなたへ納める其品々、それを水になさらうとは、ちと御無體でござりませう。

五兵　無禮とは何が無禮、不奉公すりや給金も仕着も水にして仕舞ふは、餘所外の店は知らず乞食と世間で綽名を呼ぶ、此方の家の家風だわ。
六右　如何に御家風と仰しやつても、人にこそよれ此久八、
五兵　えゝ誰でも彼でも二色はござらぬ、これ六右衞門殿、證文の表にも御家風背き申すまじくと、書いてあるのを忘れたか。
六右　さうではござりませうが、
五兵　えゝ證文が物を云ふわえ。（ト大きくいふ。）
久八　あゝもうし伯父樣、あゝ仰しやつては是か非でもお聞き入れなさらぬが旦那樣の御氣性故、後で事が分ります、何に致せ今日の所は、どうぞ此儘私を引取つて行つて下さりませ。
六右　いやも、其方が然う云ふことなれば言ひ度い事も云ひませぬ。そんなら此儘引取りませう。
五兵　いや只は引取ることはならぬ、五十兩の其外に三次めに遣つた十兩、耳を揃へて持つて來い。
久八　何れ都合を致しまして、あなたに御損は掛けませぬ。
五兵　知れた事だ、損をしてたまるものか。
六右　とはいへ現在卅五兩、溜めた衣類の二た葛籠、（ト悔しきこなし。）

久八　はて何事も私が、胸に納めてござりまする。

六右　いや、出て行くなと仰しやつても、此様な無慈悲の家には置かれぬわえ。さあ〳〵久八どの、行かつしやい。(ト久八の手を取り引立てにかゝる、久八も思入あつて、)

五兵　きり〳〵と出て行かぬか。

久八　はい〳〵只今参りまする(ト五兵衛に向ひ)左様なれば旦那様、十二の年から長の年月御恩になつたお禮もせず、御苦労掛ける不忠者、憎い奴とも思召しませうが、是には種々、さあ、色に迷ひし此身の不埒、何日かは御恩を送ります、不奉公せし罪科は、お許しなされて下さりませ。

五兵　えゝつべこべと、汝が物をぬかすと癪に障るわえ。

久八　へい〳〵其お腹立は御尤もでござりまする。(ト千太郎にこなしあつて、)若旦那様、是迄は御厚恩に預りまして有難うござりまする。あなた様もお身を大切に、申す迄はござりませねど旦那様へは御孝行、お里方の旦那様お袋様へは猶の事悪い事をばお聞かせなされてくださりますな、此久八の身の上がよい手本でござりまする、此様な身にならぬやう、

千太　これ久八、どうも私は済まぬ。いつその事に打明けて、

久八　あゝ是はしたり、これ程迄に私が心配致すが見えませぬか、済まぬと仰しやるお心なら、どうぞ

辛抱なされて下さりませ。（ト五兵衞に見えぬ樣に思入。）

五兵　あゝ何をぐづ〳〵ぬかすのぢや。こりや伜、久八の樣な不忠者の側へ寄ると人でなしが移るわえ。

千太　何のこれが人でなし、

六右　犬でも義理は知つて居ますわ、（ト立上り、門口へ出る。）

五兵　えゝ主人の物を盜みしからは、犬畜生も同じ事だわ。

千太　あゝあぶない、何處ぞ怪我でも、（ト寄らうとするを、五兵衞引退りて。）

五兵　えゝ畜生め、出をらぬかえ。（ト久八をむごく門口へ突出す、久八よろ〳〵となるを千太郎隔てゝ。）

五兵　一昨日うせう。（ト門口をしめる。）

六右　いかに乞食といひながら、あまりといはゞ無慈悲な仕方（ト立かゝるを。）

久八　あゝもし、（ト支へる。）

六右　それでもあんまり、（ト又息込むを。）

久八　はて主といふ字にや、（ト六右衞門を引廻し、きつと留めるを木の頭。）勝たれませぬ。
　　ト千太郎門口を明け、手を合せ拜む、五兵衞突退け、門口をしめる。六右衞門は口をしき思入、久八宥める、此仕組宜しく唄へ寺鐘を冠せ、

ひやうし幕

五幕目

淺草千束村田甫の場

〔役名――早乘三次、日雇取市郎兵衛、相長屋路治右衛門、同井戸六、燗酒賣藤助。長庵妹おそよ、市郎兵衛女房おふみ等。〕

四幕目の幕引附ると葬禮の鳴物になり、幕外へ花道より相長屋の路治右衛門、井戸六の兩人白布を掛けし燒場行きの早桶を擔ぎ、是へ日雇取市郎兵衛尻端折り懷へ猫を入れ、弓張提灯を持出で來り、舞臺へ來て早桶を下し、

路治　こう市郎兵衛さん、お前のおかみさんだが、めつぽう重い佛樣だ。

井戸　舂米屋の力持で四斗俵位はさす己だが、肩がめり／＼するやうだ。

市郎　そりや其筈のことだ、町内一の太つちよう、不斷身體が丈夫だからこんな事はあるめえと思つたが、あんまり早い別れだつた。

路治　お前の前ぢやあ言ひ難いが、大概打つては死にそもねえ、くり／＼太つたおかみさん、

井戸　俄にころりと行きなさるは、やつぱり一件の病氣かね。

市郎　どうして／＼長家中で稻荷樣のお祭をしたからは、そんな嫌な病氣ぢやあない、話をするも馬鹿

馬鹿しいが、お月樣へ飾つて置いた大きな團子を口へ頰張り呑込めねえのを無理やりにうんといつて呑込むと、喉へ支へてそれなり往生、直に芒の一本花に殘りの團子は枕團子、芋や枝豆はお通夜の茶菓子、蛤の鹽蒸で出立の飯を喰はしたは月見と葬禮の段返し、飛んだ茶番をしましたのさ。

路治　然し片月見は人が忌むから、來月の月見にやあお前ころりと死になさるがいゝ。

市郎　いや外の事は兎も角も、假令片月見にならうとも、死ぬ事ばかりは眞平だ、あゝ鶴龜々々。

井戸　そりやあさうと市郎兵衛さん、お前懷に入れて居るのは何だえ。

市郎　こりやあかゝあが可愛がつた三毛よ。（ト猫を出して見せ、）一生の別れだから懷へ入れて連れて來たのだ。

路治　いやお前は途方もねえ人だ、死人を舁いで行くに、猫を連れて來るといふがあるものか。

市郎　なぜ、猫を連れて來ては惡いかえ。

井戸　惡いの惡くないのと、死人に猫が附いた日には生返つて踊り出すわ。

市郎　なに、生返つて踊り出す、そりやあ何より有難い、どうぞ生返つてくれゝばいゝ、亡者の女房も氣が替つてよからう。

路治　氣が替つてよい物か、夜寐た時坊主天窓も極りが悪いぜ。

市郎　所が剃刀が切れねえから、剃らずにやつたがもつけの幸ひ、生返る物ならば爰らで早く生返らせたいものだ。(ト猫を出して早桶の上へ乘せる、兩人留めて、)

井戸　えゝけんのんな事をしなさんな、爰らで生返られてたまるものか。

路治　早く燒場へ擔いで行かう。(ト兩人早桶を擔ぎ上げる、市兵衛猫を抱き早桶へ思入あつて、)

市郎　や、何だか桶の中でがた／＼といふやうだぜ。

路治　えゝ氣味の悪い事を云ひなさんな。

井戸　これから先は田甫だ、

兩人　早く行かう／＼。

市郎　どうぞ猫で生返ればいゝが、にやんまみだぶつ／＼。

ト葬禮の鳴物になり、皆々上手へ入る。と鳴物打上げ、淺草千束村田甫の場となる。

(中田甫の場)――本舞臺正面一面の藪疊み、松の大樹、正面草土手、後ろ田甫、吉原の二階を見たる灯入の夜の遠見總て中田甫の體。題目太鼓にて幕明く。と花道より三次半合羽着かき一本差し、尻

端折り、麻裏草履小田原提灯を提げ、後よりおそよ着流しやつし裝にて出で來り、

そよ　もし三次樣、娘の居ります所は何所でござりますぞいな。

三次　この田甫を一つ越すと直にその御屋敷だ。

そよ　それではもう僅かでござりますな。

三次　僅かどころか二三町だ。

そよ　早う逢ひたうござりますわいな。

三次　今に逢はして遣るから、そろ〱來ねえ。（ト行きかけ下へ思入あて、）それ、道が惡いよ。

トおそよ思入あつて、

そよ　有難うござります。

三次　これから先は猶惡いから、お前提灯を持つて先へ立つて行きねえ。

そよ　はい、左樣ならさう致しませう。

トおそよ提灯を持ち先に立ち、三次後へ下り思入あつて舞臺へ來り、花道の角にて脇差を拔き、切らうと振上げる、おそよ振返り見る、三次びつくりして脇差しを後ろへ隱す。

もし、今光つたのは、何でござりますぞいな。

三次　え、今光つたのかえ、ありやあ稻光だ。
そよ　雨が降りさうでもござりませぬのに、
三次　さあ雨の降らねえのに光るのは、豐年の證だ。
そよ　左樣でござりますか、稻光がござりますとよう實がいると申します、それに今年は荒も無くよう出來ましてござります。嘸在所でも稻苅で忙しいことでござりませう。
三次　此鹽梅ぢやあ此暮は一升位になるだらう。おゝ一升と云やあ、さつき貰つた酒が家にあつたつけ、一杯やつてくりやあよかつたに、斯う云ふ時にやあ酒のことだ。
そよ　今に娘に逢ひますと、お禮に御酒を上げませうわいな。
三次　それ迄待つては居られねえ、呑みてえにも田甫中、あゝ角の蕎麥屋で二合ばかり引つかけて來りやあよかつた。

トやはり右の鳴物にて上手より藤助やつし裝の尻はしをり草鞋にて煮染を列べし屋臺、當り屋といふ提灯を附け、吉原商人の打扮にて荷を擔ぎ出て來り、往來の狹き心にて、

藤助　はい御免なさいまし、是はお邪魔でござります。（トおそよを避け、下手へ行くを三次見て）
三次　おゝ丁度いゝ所へ當り屋さん、一ぺい呉れねえか。

藤助　はい、御酒はござりますが、お煮染が、
三次　何もねえかえ、
藤助　棒鱈に鯣の足、蓮がちつとばかりござります。
三次　何でもいゝから早く呉んねえ。
藤助　畏まりました。（ト屋臺より徳利を出し、桶の中で燗をしながら、）鐵炮が消えましたから、お燗がぬるうござります。（ト茶碗を出す、三次取つて藤助徳利より酒をつぎ三次呑む、此内捨ぜりふ宜しく。）
三次　あゝいゝ酒だ、めつぽうな酒を賣るな。
藤助　私が好でござりますから、大道賣でござりますが、灘の利物を遣ひます。
三次　道理でいゝ筈だ。（ト又一杯呑みながら、）おいお前どうだ、一ぺいやらねえか。
そよ　わたしや一向不調法でござります。
三次　それぢやあ何ぞつまんで喰ひねえ。
そよ　有難うござりますが、何も喰べたうござりませぬ、どうぞ早う連れて行て、娘に逢はして下さりませ。
三次　今直に連れて行くから、もう一ぺい呑む中待つてくんねえ。（ト酒を呑みながら、）どうだ此頃は俄

かでしつかり賣れるだらうね。

藤助　有難いことには、一晩でも殘して歸つた事はござりませぬ。今夜はちつと用事があつて早く仕舞つて歸りました。（ト此中三次呑み仕舞ひ、）

三次　おい幾らだ。

藤助　御酒が三杯に足と蓮で、八十八文になります。

三次　それ、百錢だよ。（ト財布から百錢を出し遣る。藤助受取り、）

藤助　はい只今お剩錢を上げます。

三次　なに、八文ばかり剩錢にやあ及ばねえ。

藤助　そりやあ有難うござります。

三次　こう氣を附けて行きねえ、此先に惡い犬が居るぜ。

藤助　そいつあ險難でござります。

　　ト荷を擔ぎ、藤助足早に花道へ入る。三次後を見送り酒に醉ひたる思入にて。

三次　あゝいゝ心持に醉つた。（トよろ〳〵とするを、）

そよ　あゝもしあぶない、どぶへ落ちて下さんすな。

三次　なに、おれよりやあお前落ちねえ様にしねえ。
そよ　何で私が落ちませうぞいな。
三次　所を今に落してやる。
そよ　え、
三次　いや何所へ落したか、手拭が見えねえ。（トおそよの持つて居る提灯を取り、邊りを捜す思入にて提灯を消す。時の鐘。）ほい、又提灯を落した。
そよ　おゝ眞暗で何所が何所やら、（ト暗き思入、吉原の遠見に心附き、）もし、向うに見える灯りは、あれは何所でござります。
三次　おゝあれかえ、あれがお前の娘の行つてゐる御殿の二階だ。（トこれよりかすめて吉原騒ぎになる。）
そよ　大層賑やかでござりますな。
三次　屋敷が派手だから毎晩あの通りだ。（ト此中落したる提灯を拾ひ、袂へ入れ、そつと脇差を抜き殺さうといふ思入。）あれ見な、あの隅が娘の部屋だ。
そよ　どれ、何所でござります（ト後ろを見る。）
三次　あれ、あすこよ。

ト云ひながら後ろからおそよに切附ける、おそよアツと言つてどうと倒れるを、又一刀切ろ、ちよつと立廻つて、

そよ　や、こりやこなさんは、何故わしをむごう殺すのぢや。

三次　おらあ殺す氣はねえが、無據頼まれてそれでお前を殺すのだ。

そよ　その頼み手は何者なるぞ。

三次　誰でもねえ長庵だ。

そよ　えゝ、すりや兄さんが、

三次　おゝ屋敷へ遣つてあるといふ娘は疾に吉原へ女郎に賣つてしまつた故、逢はせることが出來ねえから、殺してくれと長庵が達つての頼みに殺すのだ、恨みがあるなら兄貴に言へ。

そよ　そんなら屋敷へ遣つたといふお梅を女郎に賣つたとや、えゝ言はう樣ない人でなし、逢うて恨みを言はねばならぬ。

三次　恨みがあるなら兄貴に言へ、おらあ何にも知らねえことだ、化けてゞも出るならば長庵の所へ行くのだぞ、必ず己が家へ來るな。

そよ　假令長庵が頼みにもせよ、汝も惡事の荷擔人なれば、

三次　えゝ己ぢやあねえ長庵だ。

ト叉切附ける、騒ぎ唄へ木魚を冠せ、兩人立廻る。こゝへ花道より以前の早桶を擔ぎて市郎兵衞附添ひ出で來り此中へ入る、三次白刃を振廻す、これにてびつくりなし、

市郎　わあゝ人殺しだ。

兩人　逃げろ〱。

ト早桶をよき所へ捨て上手へ逃げて入る。後兩人早桶の周圍をあちこち立廻り、此中三次誤つて早桶の繩を切る丸太下へ落ちる、三次おそよを踏へきつと見得、時の鐘、凄き合方蟲笛になり、

そよ　あゝ誰ぞ來て下され、人殺しぢや〱。

三次　幾ら泣いても喚いても、往來稀な中田圃、たまさか通る提灯は此世に迷ふ人魂か、盂蘭盆過ぎて草の中精靈ばつたの啼聲も、枯れて哀れな秋の夜に、無常の風の吹廻し火屋の烟りと消えてなくなれ。（ト蹴返す、おそよ苦しき思入にて、）

そよ　殺さば殺せ此恨み、今にぞ思ひ知らしてくれん。

三次　おゝ酷くわれを殺すのも、己ぢやあねえ長庵だぞ。

ト　おそよを早桶の上へ仰向に引附け、喉を突く、おそよ虚空を摑み落入る、是にて早桶の白布へ血汐

したゝる。三次ほつと思入あつて、

初めて人を殺したが、あんまりどつともしねえものだ。（ト三次氣味の惡き思入にて、おそよを後ろへ突落す。此時後ろへ市郎兵衞出て伺ひ、早桶の棒を取つて、）

市郎　うぬ、女房をどうしやあがる。

三次　なんと、

市郎　大事の死人、野郎め覺悟、（ト棒で打つて掛るを、身を轉し、）

三次　えゝ何をしやあがる。

ト三次切込むを市郎兵衞棒で受け、兩人立廻り、市郎兵衞誤つて早桶を棒で突く、是にて引くり返り中よりおふみの亡者髮振亂し紅絞の樣に血汐の附いたる經帷子、頭陀袋脚袢にて轉がり出る、兩人は立廻りあつて、トヾ市郎兵衞かなはず懷の猫を投り出し上手へにげて入るを三次追掛けて入る。後時の鐘どろ〳〵の樣な風の音をかしみ幽靈の合方になり、件の猫亡者の側へ來りうなづく、此時亡者猫に誘はれて起上り、ひよろ〳〵と歩く、ばた〳〵にて上手より三次とつて返し、亡者に行き當りびつくりして星明りに透し見て、おそよと思つてぎよつとなし、

三次　やあ、もう迷つて出たか、恨みがあるなら長庵に言へ。（トいひながら下手へ逃げて行くを亡者引留め、）

亡者　眞暗で家が知れない、一緒に連れて行つて下さりませ。

三次　家は麹町だ、勝手に行け。（ト振拂つて行かうとするを、又とらへて、）

亡者　あれさ、連れて行つておくれと云ふに、

三次　えゝ幽靈を連れて行かれるものか。

ト亡者を突倒し、花道へつか〳〵と行き、躓きてばつたり轉ぶ、亡者起上り向うを見て、不氣味な聲にて、

亡者　あゝ恨めしい人だなあ。

三次　わあゝ（ト着物をすつぽり天窓へ冠るを、木の頭、）こいつはたまらぬ。

ト時の鐘ばた〳〵にて三次いつさんに怖き思入にて花道へ走り入り、

よろしく幕。

ト時の鐘、亡者立上り思入あつて、

亡者　月見〳〵團子が喉へ支へ、何でも死んだに違ひないが、どうして息を吹返したか、さつぱり分からない。（トドロ〳〵の樣な風の音になり、以前の猫足元へ出る亡者見て、）おや其所に居るのは三毛か、死人の傍に猫が寄ると踊出すといふ事だが、それぢやあわたしの生返つたのも、猫ぢやな、（ト猫を見る、猫點頭く）おゝ猫ぢや〳〵、（ト是より唄になる。）

〽猫ぢや〳〵とおしやますが、猫が下駄履いて杖突いて、絞の浴衣で來るものか、おつちよこちよいのちよい、

ト太鼓入りの鳴物になり、亡者頭陀袋を引裂きて手拭に冠り、踊りながら花道へ入る。知せにつき、鳴物打上げ直に引返す。

六幕目

飯田町紙屑屋の場
寺門前裏借屋の場

〔役名＝紙屑屋久八、人宿貝坂ノ忠藏、伊勢屋の息子千太郎、家主雷五郎兵衞、道十郎倅道之助、同巳之松、紙屑買ひよろ八、雇中間はげ松、同ぐづ市、道十郎後家おりよ、雇女おあさ、同おくさ。〕

（六右衞門店頭の場）＝本舞臺四間の家體、上手へ寄せて三間常足の二重、正面暖簾口、押入戸棚、古帳買入の帳面、秤など掛けあり、下手一間落間、折廻して板羽目、古帳紙屑の大包み積上げありこの前に紙屑買の籠あり、柱に「古帳買入所三河屋六右衞門」といふ札、いつもの所門口、下の方路地口、黑塀、天水桶、總て紙屑問屋の體。幕の内よりお淺、おくさ紙屑を伸す女の打扮、手拭を冠り襷を掛け、紙屑を伸して居る、此傍にひよろ八紙屑買にて籠より紙屑を出して居る、この見得さんげさんげにて幕明く。

八　おあささんよく毎日精が出るの。

あさ　精を出さにやあ喰えねえわな、朝から晩迄選分けても、一貫目廿四文だから、二百取るのは大仕事さ。
くさ　それに又秋口で、かすや落が多いから六貫目精切りさ。
八　此屑は新ぼろが多いから、足袋底になるぼろが出たら面倒でも除けて置いてくんねえ、かゝあに足袋をさゝせるから、
あさ　そんなに夫婦で稼いだら、金の置き所があるまいぜ。
八　どうして〳〵大違ひだ、麻疹で久しく休んだ揚句が、此間からのばら〳〵降りで、半日出ちやあ彌太一で日を暮して酩酊になりすつかり種を耗つてしまつてどうしようかと思つた所へ、ありがてえ事に隣り裏に首縊りの獨身者があつて、其仕舞物を見倒してそれから商賣に取附きました。
くさ　それぢやあお前の爲にやあ、首縊りは助けの神だね。
八　もう四五人首縊りがあると、おらあ身上を直すけれど、
あさ　そんな縁喜でもねえ事をいつて、お前縊らねえ樣にしねえよ。
くさ　物は願ひがらといふから、始終は首縊りだぜ。
八　こんな氣の利いた首が、首縊りにあるものか。

あさ　そりやあお前の慾目だよ、鼻をたらすときつといゝよ。
くさ　然し知つて居る家は御免だよ。
八　さうよ、爰の家の軒下へは、
　　トいひかける。此時奥より前幕の六右衛門着流し前垂掛にて出で來り、
六右　ひよろ八さん、軒下がどうしました。
八　え、(ト振返りびつくりなし、)六右衛門さんか。
あさ　もし親方さん、家の軒下が丁度いゝから、
八　あこれ〳〵、(ト言つては悪いといふ思入)
六右　おゝ軒下がどうしましたな。
くさ　首を縊るに、
八　あこれ〳〵、首ぢやあねえ、釘が出て居るといふことさ。
六右　あゝあの釘か、あれは提灯掛けだ。
八　提灯掛かえ、それぢやあ首を掛けるにやあ、いやさ、屑を掛けたが一貫五百目ござります。
　　ト紙に包みし屑を出す。

六右　一貫五百目ぢやあ二朱だね。

八　明日持つて來ますから、一分貸しておくんなせえ。

六右　此頃はどうだね。

八　どうだ所か極閑さ、二朱といふ金を儲けたことがねえ。

六右　いゝ首縊りもないと見える。

八　いや面目次第もない、

二人　いゝ氣味だねえ。

六右　（帳箱より金を出し、）さあお前のいふ通り、一分貸しますよ。

八　そりやあ有難うございます。

六右　今日はもう怠業かね。

八　どうして〳〵、もう一稼ぎしますのさ。

あさ　首縊りでも捜しておいで、

八　えゝやかましい、（トいひながら門口へ出て、）それぢやあ六右衛門さん、

六右　明日逢ひませう。

八　屑やく。（トひよろ八籠を擔ぎ花道へ入る。）

六右　あの男も商賣は人並より目が利いて、いゝ錢を儲けるが、女と酒には目のねえ男だ。

あさ　それはさけく困つたものだね。

六右　惡い洒落だ、はゝゝゝ。

ト六右衞門は帳箱へ向ひ帳合をする、兩人は屑を選分けて居る。端唄の合方になり、花道より前幕の千太郎、羽織着流しにて出て來り、後より着流し白足袋の茶屋の若い者出で來りて、

若者　もしくそこへおいでなされますは、三河町の若旦那ぢやあござりませぬか。

千太　おゝ誰かと思つたら槇正の與助か、今日は何處へ行つたのだ。

若者　掛廻りに出掛けましたが、丁度よい所でお目に掛りました。小夜衣からお屆け物がござりまする、

ト懐から文を出して渡す。

千太　おゝ小夜衣からか、急用としてあるが何ぢや知らぬ、（ト開き見て紙入へ入れながら、）急に逢はねばならぬ事があるから是非來てくれとの文、都合して行くほどに、歸つたらさう言うてくりやれ。

若者　お手間がとれませずば、お供致しませうか。

千太　いや少し手間が取れようから、片附き次第駕籠か舟で、暮方迄には行く積りぢや。

若者　左樣ならお仕舞ひ申して置きますから、お早ういらつしやりませ。

ト若い者は引返して花道へ入る。千太郎は門口へ來て、

千太　ちとお賴み申しまする。

あさ　はい、どちらからおいでなされましたか。

くさ　此方へお入りなされませ。

千太　御免下さりませ。（ト合方きつぱりとなり千太郎内へ入る。）

六右　や、是は三河町の若旦那樣、

千太　おゝ六右衞門殿、そこにござつたか、此間から訪ねようと心には思うて居れど親掛りの自由にならず、大きに無沙汰をしましたわいの。

六右　いえもう私こそ上らねばなりませぬを、まあ〳〵何はともあれ、是へお出でなされませ。

千太　忙しいに構うて下さるな。（ト上手へ住ふ。）

六右　これ〳〵お客樣へほこりがする、手前達は奥へ行つてちつとの間休んだがよい。

あさ　それは有難うござります。

六右　久八に、ちよつと來いと言うてくりやれ。

くさ　畏まりました。（ト兩人奥へ入る。）

六右　これ久八は何をして居る、久八若旦那様がお出でなされた、久八々々（ト奥へ向ひ呼ぶ。）

久八　只今それへ參りまする。（ト奥より前幕の久八出で來り、）これは〳〵若旦那様、ようお出でなされました。

千太　おゝ久八か、逢ひたかつた〳〵。

久八　私もお目に掛りたうござりました。

千太　何から先へ言はうやら、

久八　思つた事が急に出ませぬ。

六右　まあ急かずとお話し申すがよい、どれ何はなくともお煮花でも、（ト立掛る。）

千太　あこれ、さうしては居ませぬわいの。

六右　まあ御ゆるりとなされませ、（ト合方にて奥へ入る。千太郎久八の裝を見て氣の毒だといふ思入。）

久八　どうなされましたかと存じましたが、お替りもなくお目出たうござりまする。

千太　わしは替りはなけれども、以前に替るそなたの身の上。さうして今は何をしてゐやる。

久八　達者な體で遊んで居るも勿體なうござりますゆゑ、紙屑を買うて歩きまする。して今日お出でな

されましたは、何ぞ御用でもござりましてか。

千太　いや別に用はなけれども、私が遣うた五十兩引受けてくれた主人思ひ、直にも禮に來ねばならぬがそなたが居ぬので見世は忙しく、一寸出るさへ心にまかせず、定めてわしを不實者と思うて居ようが知つての通り自由にならぬ親掛り、是まで無沙汰になつたのはどうぞ許してくりやいの。

久八　いえ其樣におつしやりましては御挨拶に困りまする。私こそ御機嫌を伺ひながら參るべきを、御遠慮申して上りませぬ。

千太　いや〳〵そなたの方から來られては、猶々わしが濟まぬわいの。

久八　まづ引負の一條も段々とお願ひ申し、御給金の三十兩へ衣類を殘らず添へまして、四十兩と額を極め、殘りは月々壹兩づゝ差上げまする積りにて御了簡下さりますれば、お預けなすつた短刀は返りましたでござりませうな。

千太　おゝ此間受戻したが、置主の三次からあれぎり何とも言うては來ず、てつきり他所へ預けしを何處でか聞いて來たと見える。

久八　あの三次といふ奴は、あなたの金を衒りとりし村井長庵と一つ穴、兄弟分とか申しますれば、知つて參つたに違ひござりませぬ。

千太　そなたに餘計苦勞掛け、あのまゝ置いては心が濟まずどうかして返したいと明暮思へど五十兩、今が今といふ譯にゆかぬは養子のわしが身の上、其中都合が出來ればよし、出來ずばわしが世に出る迄長い事ぢやが待つてくりやれ。其時こそは倍にしてそなたに金を返さうから、それ迄の借證文、これ取つて置いて下され。（ト紙入より證文を出す。）

久八　是は又改まつた、あなたと私の仲に、なんの證文が入りませう。

千太　いや／＼人間は老少不定、何の仲にも念には念、證據になるは書いた物、是非とも取つて置いてくりやれ。（ト久八の手へ渡す、久八思入あつて、）

久八　それ程におつしやりますを、兎やかう申すもいかゞなれば、お預かり申して置きまする。

千太　どうぞさうしてくりやいの。それに附いても今の身の上、嘸不自由であらうと思ひ、せめて小遣の少しづゝでも送り度いと思へどもそれ迚も心に任せず（ト千太郎脇を向き、紙入より金包を出す。久八是を一寸覗く、千太郎見せまいと紙入を仕舞ふ。此時以前の文を落す事。）ほんのわしが志し、是れを取つて置いてくりやれ。（ト久八の前へ出す。）

久八　これは／＼有難うございまするが、あなたとても御小遣の御不自由なは存じてをります、決して御心配には及びませぬ。爲馴れぬ事ではございますが、天道樣のお惠みで出さへすれば喰べるだ

けのお錢は儲けて參りまする。
千太　さうでもあらうが遣らうと思うて里の母から貰うた此金、不足でもあらうけれど、どうぞ取つて置いてくりやれ。
久八　いえ〳〵それには及びませぬ、お納めなされて下さりませ。
千太　それでは心が濟まぬわいの。
ト兩人金包をあちこちとする、此時奧より六右衞門盆へ茶碗茶臺小さな土瓶を載せて持出で來り、落ちてある文を拾ひ、反故と思ひ紙屑の籠へいれ、
六右　これ〳〵久八、樣子は奧で聞いて居たが、折角其方に遣らうとてお持ちなされたお志し、お貰ひ申して置いたがよい。
久八　それぢやというて、
六右　はてそれを元手に精出して、又若旦那へ其方から御恩送りをしたがよい。
久八　そんならお貰ひ申しませう。
千太　どうぞさうしてくりやいの。
久八　あゝ有難うござりまする。（ト久八金を頂く、六右衞門茶を汲み千太郎へ出し、）

六右　まあお茶一つお上りなされませ。（ト捨ぜりふにて千太郎茶をのむ。久八思入あつて、）

久八　いやもし伯父様、今日迄はお隱し申しましたが、若旦那様から念の爲下された此證文、是で久八が引負を御推量下さりませ。（ト以前の證文を見せる。）

六右　おゝ最前からの一部始終暖簾越しに承はりました、かういふ事であらうかと推量はしてをりましたが、久八が隱します故表向はそしらぬ振で心にも無い小言をば久八に申しました。

千太　それと言ふも此身の不埒、久八ばかりか伯父御に迄苦勞を掛けるも若氣の至り、堪忍して下さりませ。

六右　あ勿體ない事おつしやりませ、十二の年から御恩になつた御主人様の若旦那、よう成代つて久八が、あなたの罪を背負ひました。是でこそ誠の人、伯父も嬉しうござりまする。いやお茶ばかり何もお菓子が、

千太　いや〳〵構うて下さりますな、是から廻る所もあれば、もうお暇致しませう。

久八　まあよいではござりませぬか、何はなくともお蕎麥でも、

千太　今日は急な用事もあれば、又其中ゆつくりと馳走になりに來ませうわいの。

久八　して急な御用とは、何所方へおいでなされまする。

千太　え（トぎつくり差支へし思入にて）さあ、今日は、あのお屋敷へ、
久八　お屋敷とは、どちらのお屋敷へ、
千太　あの廓内の、
久八　え、
千太　いやさ、おくるわ内の六角樣へ、
久八　おくるわ内ならよけれども、廓へおいではござりますまいな。
千太　はて一旦誓言したからは、足も向けはせぬわいの。
久八　それ承はつて安堵致しました、此後ともに私がかういふ身分になりましたを、不便な事ぢや
　と思召さば、どうぞおいで下さりますな。
千太　なんの行かうぞ、そなたへ對し義理にも行かれたことではない。いや家を急げば少しも早う。
六右　お留め申す所なれど、早うお返りなされまするが、親御樣への御孝行、
久八　左樣なれば若旦那樣、
千太　久八、また其中、
六右　おついでがござりましたら、

久八　どうぞゆるりと、
千太　尋ねませうわいの。(ト唄になり、千太郎門口へ出て思入あつて、足早に花道へ入る。)
久八　引負の五十兩、わしが使はぬ證據の證文、伯父樣預かつて置いて下さりませ。
六右　おゝ預かつて置きませう。(ト六右衞門證文をとる。)
久八　いや、とてもの事に下された三兩の金も共々に、(ト以前の金を出す。)
六右　いや、それは其方持つて居て、古着でもあつたらば買つて來て儲けさつしやい。
久八　いかさま、三兩買へば三兩だけ餘計に利分がござりますれば、そんなら是を持つて行つてなんぞ
　　買つて參りませう。(ト下手より屑籠を持つて來る。)
六右　もう今に午であらうに、飯を喰つて行つたがよい。
久八　いえまだちつと間もあれば、辨當を持つて行く積りで、お淺どんに賴んで置きました。
　　ト荷拵へをする、奧よりいぜんの女二人辨當箱を持出で來り、
あさ　久八さん、辨當を詰めて置きましたよ。
久八　それはお世話でござりました。
くさ　まだお菜が出來ないから、梅干と澤庵ばかりでござります。

久八　何でも宜しうござりまする。左様なら行つて參ります。

六右　あゝこれ久八どん、安い物は油斷がならぬぞ。

久八　それに如在ござりませぬ。（ト門口へ出で荷をかつぎ、）どれ一挊ぎして參りませう。

　　ト　さんげ〳〵にて久八屑籠を擔ぎ花道へ入る、六右衞門後を見送り、

六右　あの久八は捨子だが、よい衆の胤かして子供の折から素直にて、篤實な者であつたが、お主の難儀を身に引受け恥も厭はずあのやうに、屑を買つて歩くとは、あゝ感心な事だな。

　　ト女兩人は紙屑をひろげながら、

あさ　ほんにあの久八さんは、今時の人には珍らしい、あゝいふ亭主を持ち度いものだ。

くさ　私らが女らしいと、頼んでも女房になるが、朝から晩迄屑の中で漉返し臭い體では、初まらないせんさくだ。

あさ　蓼喰ふ蟲も好々とやら、日に八貫目の仕事を持參になられまいものでもないから、一寸辻占に是をお見、（トいぜん千太郎の落せし文を出す。）

くさ　こりやあ女郎の文だね。なんだ「千太郎さままゐる、小夜衣より」、この千太郎樣といふのは聞いた樣だね。

あさ　聞いた筈さ、三河町の若旦那のことだ。
六右　なに若旦那の文があつた。
「くさ　はい此籠の中にありました。（イ出す、六右衛門取つて見て、）
六右　おゝこりや今し方屑と思ひおれが拾つて籠へ入れたが、そんなら是は若旦那が此處へ落してござつたか。廓通ひはなされませぬと、今も立派におつしやつたが斯ういふ文があるからは、やつぱり廓へござると見える。
あさ　あの旦那なら此間燈籠を見に行つた時、仲の町で見掛けました。
くさ　十六七な可愛らしいおいらんと、連立つて歩いてゞござりました。
六右　そんならいよ〳〵廓へござるか。
くさ　たしかにおゐでなされました。
六右　いかに若いといひながら、あの久八が忠義も無駄に、廓へござる心では此方で思ふ親切も、
トきつとなる、兩人は端唄の本の反故を開き、一寸唄ふ。
あさ　〽先や左程にも思やせぬのに、
六右　それにこつちが、

くさ〳〵登り詰め、

六右　えゝ腹の立つ、

　　ト紙屑籠を取つてはふる、紙屑ぱつと散る、兩人これを拾ふ。六右衞門はきつと思入、

事ぢやなあ、

　　トこの見得よろしく、やはりさんげ〳〵にて道具廻る。

(裏借家藤掛宅の場)――本舞臺三間の間前へ出し常足の二重家體、正面押入戸棚、上に三尺の佛檀、瀬戸物の佛具位牌など宜しく、下手鼠壁、膳棚是にいろ〳〵の世帶道具、一ツ竈に釜を掛け、鍋擂鉢など取散しある。いつもの所門口、上の方後へ下げ卒堵婆を結込みし生垣、下の方路地朝鮮矢來、總て寺門前貧家の體。爰におりよやつし裝世話女房にて、古蚊帳へ繼を當てゝ居る、上手に破れたる二枚屏風を立て巳之松を寐かしてゐる。五郎兵衞家主の打扮にて、煙草を吞みながら店賃の催促をして居る。床の三重にて道具留る。

淨るり〽秋の日の次第に詰るかせ世帶、きのふに替る飛鳥川ふちにはなれし身の果の、哀れを知らぬ家主が、

五郎　これおりよどの、店賃の貸しはどうする氣だ。

りよ　打續く不仕合せについ〳〵延び〳〵になりましたが、伜が歸りましたらば少しなりとも差上げませう。

五郎　息子どのは何所へ行つたのだ。

りよ　枝豆を賣りに參りましたが、もう歸りますでござりませう。

五郎　歸る迄待つても居られまい。これ、その蚊帳は損料蚊帳か。

りよ　はい、十六錢で借りましたが、そこら中に寄りがあつて蚊が入つてなりませぬゆゑ、繼當がひを致しますわいな。

五郎　そんな破れ蚊帳を釣らずとも、青々とした新らしい糊氣のある蚊帳を釣らすが、侍氣質の野暮を捨て、おれが女房になる氣はないか。（トおりよの傍へより、袖を引くをふり拂ひ、）

りよ　又してもお大家様の其樣な事をおつしやりまする。此間も申します通り、夫は無實の難にあひ、非業に死なれましたゆゑ、修羅の苦艱を助かるやう明暮願ふ菩提の道、其日稼ぎに仕方なう髮は結うて居りますれど、心の内は尼になり佛に仕ふ身の上なれば、有難うはござりまするが御免なされて下さりませ。

五郎　そりや尤もな樣なれど、其所は又詠と歌、夫が死んで尼になり、生涯男を持たぬといふは、そ

りや上つ方でいふことだ、下々の貧乏暮し親切な人があるなら其身を任して、子供らの手足を伸ばして貰つた上年忌佛事を立派にしたら草葉の蔭で御亭主が悦びこそすれ恨みはしまい、惡い事は言はぬから、よく了簡をして見なせえ。

りよ　見る影もない私を其樣に迄思召すお志しは嬉しいけれど、是ばかりは女子の操、二人の夫は持たれませぬ。どうぞ堪忍して下さりませ。

五郎　それが野暮の上なしだ。よくいふ事だが、常磐御前は清盛に身を任したばつかりに三人の子供が助かり、後に平家を亡して源氏の御世になつたぢやねえか、十間間口の二人役、此町内で雷と異名をとつた五郎兵衛が自身番での太政大臣、家主仲間の清盛公、おれが女房になる時は大家樣の常磐御前、二人の子供は今若乙若此上もない立身出世、掃除代はやられないが節句錢や瓶釣錢は、化粧料にこなたにやる氣だ。これ野暮をいはずとうんといやれ。

〽常磐ごかしにいひ諭す、清盛ならぬ貞節な清き心に突放し、(トおりよむつとして、)

りよ　えゝ又しても〳〵いやらしい事ばかり、一人身なれど佛前に飾つてある位牌が夫、貧苦に迫れど武士の妻達つて慮外をなされますと、大家樣とは申させませぬぞ。(トきつといふ。)

五郎　いやこれはきついお腹立、さう又そつちが色氣もなく愛嬌をこぼして言へばこつちも邪慳に言に

やあならぬ。去年の秋此長家へ引越して來て二月三月店賃を拂つたばかり、それから後は今日の明日のと六百づゝ七ヶ月六七四貫二百といふもの貸して置くのは何が目的、家財は知れたがらくたばかり、こなたといふ見込がある故、それが不得心の上からはもう一時も待たれない、家財家財を賣つてなりとも、たつた今勘定さつせえ。

りよ　御尤もではございますが、何をいふにも親子三人其日に追はれまするゆゑ、今というては御勘定が、

五郎　出來ずば店を明けてしまふか。

りよ　さあ、それは、

五郎　此家主の女房になるか。

りよ　さあ、それは、

五郎　耳を揃へて勘定するか。

りよ　さあ、

五郎　店を明けるか、

りよ　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

五郎　うんといつて女房になりやれ。

〽又も手を替へ言ひ寄るを、（ト五郎兵衞おりよの袖を捉へる。）

りよ　えゝ穢らはしい、知らぬわいな。（ト振拂ふ。）

五郎　おゝいゝわ、さう情なくさつしやるなら、可愛さ餘つて憎さが百倍。

〽破れかぶれに古蚊帳を引つ抱へて立上るを、おりよは裾に取りすがり、

ト五郎兵衞蚊帳を持つて立上るを、おりよ留めて、

りよ　今に倅が歸りますれば、どうぞそれ迄暫時の中、

五郎　いや〳〵何時歸るか、べん〳〵とこれが待つて居られるものか、是を抵當に取つて置くから、殘らず家賃の勘定するとも店を明けて立退くとも、うんといつて女房になるとも、三つに一つの返事をしやれ。

りよ　すりやどうあつても、

五郎　えゝ人を恨むな、心柄だ。

〽情用捨もあらけなく、留めるを突きのけ家主が、蚊帳を抱へて立ちかへる、

ト おりよ五郎兵衛を留めるを突退け、蚊帳を持ち下手へ入る。

〽後におりよが兎やせんと案じ煩らふ親心、知らぬが佛幼兒が、

ト おりよぢつと思入、寐て居たる巳之松起上り、

巳之 母さま、何ぞ喰べたいわいの。

りよ 今に兄さんが戻つたら、何ぞお土産があるであらう。おとなしう待つてゐや。

巳之 いや〳〵待つては居られぬ、まだおまんまを喰べぬから飢じうてならぬわいの。

りよ 今甘酒を呑んだではないか。

巳之 それでもなんぞ喰べたいもの、

りよ いかに頑是がないというて、少しは物を辨へや、此間から血の道で、わしがぶら〳〵して居る故、可愛さうに兄さんは仕つけもせぬ商ひして夜の目もろくに寐はせぬぞ。それにそなたはやんちやんばかり、さう言ふ事を聞きやらぬと、母さまの子にはせぬから、お孤の子になつたがよい。

〽おどせばしく〳〵泣きながら、可愛ゆい兩手を疊につき、

巳之 もうおとなしうしますから、お前の子にして下さりませ。

りよ おゝおとなしい〳〵、それでは母の子にしませう。

巳之　嬉しいわいの。

〽悦ぶ顔を見るに附け、不便な者と涙ぐみ、（ト巳之松の縋り附くを抱上げ）

りよ　あゝこの樣に叱るもの〻、世が世であらば言ふなり次第、好な物を取つて遣らうに、三度の食さへろく〳〵に、喰べさせぬものひもじい筈、泣くのも無理ではないわいの。それはさうと今の蚊帳、取り戻し度いものぢや。

〽蟲が知らして案じる折から、（ト花道の揚幕にてぐづ市はげ松兩人の聲にて）

兩人　うしやあがれ〳〵。（と言ふ。）

〽呑んだる酒の後ねだり喧嘩仕掛に中間が引ずり來る道之助、

ト はげ松ぐづ市紺看板一本ざし、雇中間の打扮にて、枝豆の籠を肩に掛けたる道之助を引ずりながら出で來る。

道之　どうぞ御免なされて下さりませ、宿に居るのは母ばかり、女の事ゆゑ案じますれば、是で御免下さりませ。

はげ　いくら言つても了簡ならねえ、家がお袋ばかりなら家主が相手だ、案內しろえ。

道之　そこをどうぞ、

ぐづ　えゝ、うしやあがれ。

〽詫びる程猶つけあがり、了簡ならぬと門へ來て、

はげ　さあ、うぬが家はこゝか。

兩人　きりきりと入りやあがれ。

〽襟がみ取つて突き倒すを、見るに母親打驚き、

ト道之助を門口から内へ突倒す、おりよびつくりなし、

りよ　や、倅ではないか。

道之　あゝもし母さま、ひよんな粗相を致しました、お詫び申して下さりませ。

りよ　どういふ譯か存じませぬが、年端も行かぬ不束者、お許しなされて下さりませ。

ぐづ　いやだいやだ了簡ならねえ、此界隈で面を賣る看板着のこちとらが、恥をかゝせられちやあ歸られねえ。

りよ　そりやまあ倅が何を致して、恥をおかゝせ申しましたか、譯をお聞かせ下さりませ。

はけ　譯といふなあ外でもねえ、枝豆を一把くれとこいつが言つたを、此息子が遣られねえと言つたからだ、明日來りやあ遣る錢を、なんのかんのとぬかすから、こんな間違になつたのだ。

りよ　いえも御覽の通り大きうても年の行かぬ不束者、お前さん方に一把や二把上げぬといふは不調法さあ〳〵何把でもお持ちなされて、免して遣つて下さりませ。（ト枝豆を出す、）

ぐづ　いゝやいらねえ、貰はねえ、年中看板一枚だが面を賣るこちとらだ、これが二朱か一分するもんぢやあなし、四文か八文の枝豆で盜人と言はれちやあ、了簡ならねえ。

道之　えゝめつそうな事おつしやりませ、誰が其樣な事申しませう。

ぐづ　誰でもねえ、手前が言つた。

道之　何でまあ、私が、

ぐづ　言はねえことがあるものか、枝豆一把でも人のものを只取りやあ盜人だと、うぬが口から言やあがつた。（トぐづ市枝豆をとつてはふり附ける、道之助むつとするを、相手が惡いとおりよ留めて、）

りよ　あこれ〳〵、腹も立たうが、いやさ、御腹の立つは御尤も、なぜ其樣な事を言やつたぞいな。

道之　いや〳〵、言うた覺えは、

はげ　いやそりやあ言つたに違ひねえ、此野郎は喰ひ醉つて居るが、素面のおれが證人だ、錢せえありやあこちとらは四文の物を八文でいつでも買つて喰ふ男だ、枝豆賣や玉子賣微な商賣する者を、ついに箍めたことはねえ。

ぐづ　其替りにやあ商人なら、見世先へ踏反り返つて貸せと言ひ掛つた其日にやあ、一兩二兩する物でも借りずに歸つたことはねえ。それでも今迄盗人と言はれた事ア一度もねえ、四文か八文の枝豆で盗人と言はれちやあ男が立たねえ。おれと一緒にうしやあがれ、大部屋へ釣し上げ、敲きしめてやらにやあならねえ。

りよ　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ、夫に別れて三年越し引續いての不仕合せに、見る影もない此暮し、ほんに杖にも柱にも便りに思ふはこれ一人、

道之　これといふのも私が不調法から起りし事、これ此通り手をついて、お詫を致しまするから、

りよ　お部屋へお連れなされまするを、

道之　何卒免して、

兩人　下さりませ。

〽何心無き幼兒まで、手をつき詫びるを見向もせず、

トおりよ道之助手をつき詫びるを見て、巳之松も同じ様に手をつき辭儀をする。兩人これに構はず、

ぐづ　厭だ〳〵、了簡ならねえ、なんでも屋敷へそびいて行つて、筋骨拔かにやあ腹がいねえ。

りよ　さあ其處をどうぞお情に、

ぐづ　えゝ知らねえわえ。

〽寄るを蹴倒す傍若無人、如何はせんと親と子が取附く島も泣く涙、わざと一人が猫撫聲、

トおりよぐづ市に賴むを蹴倒す、これにて巳之松おりよに縋る、道之助はおろ〳〵と、如何したらよからうがといふ思入、はげ松點頭て、

はげ　もし〳〵お上さん、ちよつと來なせえ（トおりよを下手へ連れて來て、）お前知つて居るかも知らねえが、あの野郞はぐづ市と言つて私らが仲間で名うての惡漢、喰え醉つて言ひ出したらどんな事でも聞きやあしねえ。此間もこんな息子をそびいて行つて敲きしめたうとう打殺してしまつたが、そこへ來ると町家と屋敷慮外をしたから殺したと言やあそれで濟む話だ、そんな事になつても氣の毒、わつちがだまして連れて行くから、一升買つて詫まんなせえ。

りよ　それはまあ御親切に有難うござりまするが、そのお酒を買うて上げますお錢が唯今、

はげ　高が四百か五百のことだ、それしきの錢のねえこともあるめえ。

りよ　お恥しうござりますが、こゝにわづか四五十あまり、（ト緡にさしたる錢を見せる。）

はげ　無けりやあ止しねえ、それ迄の事だ、絕つて貰はうといふのぢやあねえ、其替り此息子が打殺されても、おらあ知らねえよ。

ぐづ　さあおれと一緒にうしやあがれ。

〽襟がみ取つて引立てる、其手におりよは縋り附き、

りよ　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ、どうなとして上げませうからお待ちなされて下さりませ。

（ト留めて、）これ伜、そなたが今日の賣溜をこゝへ出しやいの。

道之　はい、三百四五十ござりまする。（ト首に掛けたる財布より錢を出す。）

りよ　それにこれを一つにしたら、四百餘りになりませう。これで御不承下さりませ。

トおりよ錢を一ツにしてはげ松の前へ出す。

道之　あもしそれをあげましたら、晩の御飯をどうしませう。

りよ　はて御飯はどうなとならうわいの。

巳之　母さま、お飯が喰べたいわいの。

りよ　おゝ又其樣な事を言やるか。（ト巳之松を睨む、はげ松錢を取つて、）

はげ　一分か二分貰はにやあ歸り難い所だが、大負にまけて連れて行きやす。

ぐづ　いゝや歸らねえ、おらあ厭だ、一升や二升で歸られるものかえ。

はげ　これが立派な家體骨なら、己も共々居しかつて菰冠りの一本も部屋へ土産に持つて歸るが、高が

四文の枝豆賣だ、これで不承して一緒に歸れ。

ぐづ　厭だ〳〵、盗人と言はれた明りを立てにやあ、

はげ　明りも絲瓜もいるものか、歸れと言つたら歸れ。

ぐづ　厭だ、歸られねえ。

はげ　己が言ふ事を聞かねえのか。（トはげ松ぐづ市の胸ぐらを取つて引立てる、おりよ案じる思入。）

はげ　なに、打捨つて置きなせえ。さあ野郎歸るか歸らねえか。

ぐづ　歸らねえとは言はねえが、あんまり手前が分らねえ、何でこいつらが肩を持つのだ。

はげ　肩も脊もいるものか、己が胸にあるから歸れ。

ぐづ　なんだ、溜飲ぢやァあるめえし。

はげ　それぢやあお上さん、こりやあ貰つて行きやすよ。（ト錢を財布へ入れる。）

りよ　どうぞお持ちなされて下さりませ。

ぐづ　どれ、不承して歸つてやらうか。（ト立上る。）

はげ　こりやあおやかましうございました。（ト兩人門口へ出て）

ぐづ　こう四百の錢ぢやあ詰らねえな。

はげ　さうよ、あんまり馬鹿々々しいけれど、あの家の樣子ぢやあいつ迄言つてもむだなことだ。
ぐづ　これでも取らねえよりましか。
はげ　違えねえ。
〽慾に目のなき惡漢は酒屋を指して急ぎ行く、（トはげ松、ぐづ市捨ぜりふにて花道へ入る。）
〽跡に伜は二人の影恨めしさうに見送りて、（ト道之助門口より向うへ思入）
道之　今日はいつより餘計賣り、澤山儲があつたゆゑ、殘りの豆を賣りながら早う家へ歸らうと急いで來た後ろから、今の二人が呼びかけて籠へ手籠に二把づゝ取り、お錢も置かず行くゆゑに、呼返したら腹を立ち、踏んだり蹴たり打ち打擲、擧句の果に家迄來て屋敷へ連れて行くと脅し、豆の元手やお米の代、當にしてある賣溜を殘らず持つて行かれたれば、翌日はどうして暮さうぞ。
りよ　まだそれよりは大家さまがこれ迄溜りし店賃を勘定するかさもなくば、店を明けろと嚴しい言ひつけ、其返事をする迄の抵當に取つて置くというて、損料屋から借りて置いた蚊帳を持つて行かれたわいの。
道之　すりや店賃のその抵當に、蚊帳を持つて行かれましたか。
りよ　知つての通り損料物先方へも濟まず、一晩でも蚊帳か無うては蚊に責められ已之松が泣いて寐ぬ

道之　故に、其方が歸つたことならば、少しなりとも勘定して、蚊帳を返して貰はうと思つた事も鶍となり、只一錢のお錢にさへ困るといふは何事ぞ。

道之　世が世であらば鹽冶の家來、何不足なき身の上ながらお主の沒落父の不運、夜討の折も病氣にてお役に立たず、其後に無實の罪に非業な御最期。

〽跡に殘りし妻や子が、かゝる憂目の艱難は神佛にも捨てられしか。

こりやどうしたら、ようござりませう。

りよ　此苦しみをするよりも、いつそ死んでと思へども、其方と違ひ僅五歲これが不便と二つには夫の汚名が雪ぎたく惜しからざりし命を存へ、すゝぎ洗濯賃仕事、

道之　せめて些しの手助けと、恥も恥辱も打捨てゝ、元手も薄き際物賣り、

りよ　襤褸させてふ蟲の來て、啼けども冬の仕度もなく、

道之　秋の日脚と共々に、次第に詰る瘦世帶、

りよ　運も傾く軒朽ちて、

道之　杖柱さへ無き身の上、

りよ　破れたる壁を洩る風に、

道之　消ゆる灯のそれならで、
りよ　思へば果敢なき、
兩人　身の上ぢやなあ。

〽濕り勝なる雨雲に、身の秋歎く親と子が、傍にぐわんぜも泣く幼兒、

トおりよ道之助よろしく思入。

巳之　母さま、なんぞ喰べたいわいの。
りよ　おゝさうであらう〳〵、今にお飯を焚いてやるから、おとなしう待つてゐや。
道之　母さまお米がござりまするか。
りよ　なんのお米があらうぞいの、今朝のお粥に拂つてしまひ、今夜は買はねばならぬところ、
道之　買ひに行くにもお錢はなし、
りよ　どうで家賃も遣らねばならず、明日の元手お米の代二分程無ければならぬけれど、無心を言はう當もなし、今に屑屋が來たならば何なりと賣代なし、此の二三日を凌がうわいの。
道之　それが宜しうござりまする。
巳之　早う飯が喰べたいわいの。

りよ　あゝ忙しない、待たぬかいの。そなたよりは道之助飢からうが辛抱しや。
道之　いえ〳〵私はまだ飢じうはござりませぬ。
巳之　おりや飢じいわいの。(ト大きな聲する。)
りよ　あゝこれはしたり、其樣な事を大きな聲で言はぬものぢや。
巳之　それでも飢じいもの、
道之　どれ、よい物をやりませう。
〽籠に殘りし枝豆をやれば渇ゑし幼兒が悦ぶ顏を見るに附け、親は塞がる棟割の心も狹い路地口を、荷籠かたげて屑買が、(ト花道より以前の久八出て來り)
久八　屑はごぜい〳〵。
〽門より内を差覗き、(ト久八舞臺へ來り、)
まだ屑は溜りませんか。
りよ　おゝよい所へ屑屋どの、一寸内へ入つて下され。
久八　へい畏りました、大きにお涼しくなりましてござりまする。
りよ　屑はまだ溜らぬが、外の物でも買ひなさんすか。

久八　何でもお貰ひ申しまする。
りよ　そんならこゝへ來て下さんせ。
久八　まつぴら御免下さりませ。
〽荷籠下して内に入る、此方は數の品々を、屑屋が前へ取並べ、
ト久八荷を下して内へ入る、おりよ道之助兩人して重箱、蓋物、茶碗などを出し並べて、
りよ　是を買うて下さんせ。
久八　へい〳〵畏りました。（ト品を見て、）是は一向お値打な物がござりませぬ。（ト鐵砲籠より小さな算盤を出し勘定して、）悉皆で七百五十文でござります。
りよ　（鏡を出し、）是はどの位に買ひなさる。
道之　あゝもし、それをお賣りなされては、
りよ　鏡は女の魂ゆゑ、今日迄除けて置いたれど、時の用には何とやら、賣つてもだいじないわいの。
久八　（鏡を見て、）是は結構な鏡でござりまする、一分におもらひ申しませう。
りよ　どうかみんな一つにして、二分に買うて下さらぬか。
久八　なか〳〵さうは買へませぬが、一分二朱ならお貰ひ申しませう。

りよ　定めて如在も無からうが、二分なければならぬ譯、はて困つたものぢやなあ。

ト何ぞあるまいかと邊りを見廻す。

久八　（煙草入を出し、）お火を一つお貸し下さりませ。

道之　あい〳〵（ト火鉢を見て、）生憎みんな立消えて、

久八　いえ是に火打がござりました。（ト煙草入より火打を出し、煙草を呑み兩人を見て思入。）

道之　母さま、なんぞござりませぬか。

りよ　さあ考へては居るけれど、三年此方賣盡し、何も値になる物がない。

〽又も戸棚をそこ爰と、搜し明くれど塞がる胸、始終を見やり久八が、

久八　最前から見ますところ、賤しからざるお二人樣、定めて以前はお歴々由緒あるお方と見えまする。私なぞも先月までさる大家に奉公なし、米の値段も存じませなんだが、據無い事からして暇を取つて此樣な、しがない渡世を致しますれば、身につまされてお二人樣がおいとしうござりますから、もう一朱買ひませう、それでお拂ひなされませ。

りよ　見るから律義な屑屋どの、押して言ふのも氣の毒ながら、是非二分なければならぬ仕儀、どうか二分に買へますまいかの。

久八　いえもう御難儀と存じますゆゑ一分三朱と申しまするは踏込んで買ひました、なか〳〵御前樣方の此御道具を買ひまして儲ける心はございませぬ、少々買値が切れましても厭はぬ心でござりまする。

りよ　見ず知らずでありながら親切なお人ゆゑ恥を明かしてお話申すが、今もお前のいふ通り以前は武家であつたれど、不圖した事から浪人なし夫に死なれて三年越し、子供を相手に女の身衣類調度も賣代なし、貧の病に藥より煎じ詰つた二分の金、なければならぬといふ譯はこれ迄溜る店賃の勘定するかさもなくば、店を明けろと家主が蚊帳をば抵當に持つて行き、今夜迄に返事をしろと退引ならぬ其所へ、惡い者に倅が出逢ひ、僅か四文か八文に商なふ元手を持つて行かれ、明日の烟りの代もなく三方四方に二分の金、出來ねば明日から親子共路頭に迷ふ果敢ない仕儀、

道之　ひよんな所へ來合せし屑屋どのもなんぞの緣、所詮數にもなるまいが、私が習うた此手本、是をば數に入用の二分に買つて下さりませ。

〽出だす手本の折日高、昔床しき墨の香に、久八心察しやり、

ト道之助戸棚より折手本を三本出し、久八の前へ出す、この中久八氣の毒なる思入にて、

久八　その御難儀を承はつては、假令損がまゐるとも高が一朱か二百のこと、是が買はずに行かれま

せうか。
りよ　そんなら買つて下さりますか。
久八　はい二分にお貰ひ申しませう。
兩人　えゝ有難うござりまする。
久八　何のお禮に及びませう、さあ御受取り下さりませ。
〽金を渡せば押頂き、〔ト久八財布より二分出し、道之助に渡す。〕
りよ　あゝ嬉しや〱、これで蚊帳も取戻せば、
道之　明日商ふ元手も出來、
りよ　殘りは今日の烟りの代、
道之　是でやつと、
兩人　安堵しました。
〽悦ぶ親子の傍には、手本の名書を打見やり、久八は不審顏。
久八　こりや御前さまのお手本でござりまするか。
道之　さあ、此弟に譲らうと、殘して置いた師匠の手本、

久八　そんなら是に記してある、藤掛道之助様とは、お前様の御名でござりまするか。
道之　おゝ、道之助とはわしぢやわいの。
久八　それではもしや鹽冶様の、御家來ではござりませぬか。
兩人　え、（トぎつくり思入あつて、）いかにも、以前は鹽冶家の者でござりまする。
久八　扨は藤掛道十郎様の、御新造様や若旦那様でござりましたか。
兩人　如何してそれを、
久八　御浪人とのお話から、手本に記せし御苗字に、それと知つたも盡きせぬ縁、駿州江尻にをりまする、久右衛門といふ百姓を御存じでござりませうな。
りよ　おゝ其の久右衛門夫婦の者は、親父様に仕へし者。
道之　それでは若しや噂に聞いた、
久八　へい、その久右衛門の倅久八と、申しまする者でござりまする。
道之　そんなら母の話に聞いた、其方はたしかに、
久八　へい、江尻在の地藏堂へ、二つの時に捨てられし元は捨子でござりまする。
りよ　すりや久右衛門が拾つたる、

道之　養子の倅であつたるか。
久八　藤掛樣の御新造樣、若旦那樣でござりましたか。
りよ　思ひ掛けない手本から、
道之　互ひに知れる氏素性、
久八　嬉しい中に悲しいは、
りよ　以前に替る今の身の上、
道之　名乘り合ふのも、
兩人　面目ない。
〽落目になれば人の身は涙ばかりが先立ちて、互ひにそむける顏と顏、
ト三人宜しく思入あつて、
久八　してまあどうして此樣な、お暮しにはおなりなされました。
〽問はれて涙を押拭ひ、
りよ　話せば長い事ながら、お預りの短刀を御國元より持參の途中盜まれしが越度にて、既に切腹にもなるべきを、御慈悲を以て御追放、間もなく御家の騷動に爰ぞ御恩の送り所と思ひの外に二年越

し、病の爲に討入りのお役に立たぬを口惜しがりしが、死ぬにも死なれぬ短刀の詮議の爲に麴町の平川町に暮す中、おなじ所の軒並び村井長庵といふ町醫者の妹聟にて、三河の百姓重兵衞といふ者が娘を賣つて歸る途中、人手に掛つて身の代の金を取られし其場所に、藤掛といふ印のある夫の傘が捨てゝあり、それが御上へ證據に上り、無實の罪に入牢なし、言譯立たぬ其中に非業な死をばなされしゆゑ、所の人に親子共顏見らるゝが恥かしく、此處や彼處と宿替なし持ち傳へたる貯へも、三年此方干滅の立つに是非なく此樣な見る影もない裏家住み、世にも因果な身の上を推量してたもいの。

久八 承はつて驚き入つた旦那樣のお身の上、御恩になつた久右衞門夫婦の者が五年あと引續いて故人になり、つい御行方も知れざればお尋ねも申しませず、眞平御免下さりませ。今承はつた麴町の村井長庵といふ醫者は、一方ならぬ惡漢にて、私などが此樣な身になりましたも元は長庵、旦那樣の無實の罪も若しや彼れが仕業では、いや、此事は又追つて、先づ差當り唯今にては何を渡世になされまする。

道之 話すも面目ないけれど、そなたに道具を賣る程な身の上故に母樣は、すゝぎ洗濯賃仕事、わしは當座の果物賣り、冬は蜜柑秋は柿、其間には茹玉子、又は枝豆、薩摩芋、面を包んで賣り步けど

以前出入の商人や職人などに出會うた時、此方より却つて向うから顔をそむけて行かるゝ、其悲さも我家へは隱して歸る苦しさは、どの樣であらうぞいの。

久八　それ程迄に御難儀をなされまするを、もう一年早く知つたら何樣にも親久右衞門の御恩送り、御親子樣を御貢ぎ申し、此御苦勞はさせますまいに、間の惡いと申すものは、十二の年から勤めました主人の家を譯あつて、忠義の爲に年來の給金から衣類迄殘らず置いて着のみ着の儘、暇を取つて是非なくも伯父の所に掛人、今更いうて返らねど殘念な事でござります。

〽返らぬ愚痴を車井の綱の切れたる思ひにて、人は釣瓶の浮沈み、

ト久八ちつと思入、巳之松おりよにすがり、

巳之　母樣飢じいわいの。

りよ　又其樣な事を言やるか、今お晝飯を喰べたではないか。

巳之　いや〳〵坊はまだ朝から、お飯は喰べぬわいの。

りよ　なんの喰べぬことがあるものか。

道之　今米屋から取つて來て、暖たかに焚いてやるから、おとなしう待つていや。

巳之　いや〳〵待たれぬ、飢じいわいの。

道之　えゝ聞譯の惡い、待つて居ぬか。

〽叱れどぐわんぜ泣く顔を見る親の身にも察しやり、

久八　あゝもし、これからお焚きなさるのでは慾なお間には合ひますまい。幸ひよい物がござります、

〽荷籠の内より取出す、辨當箱も昔物（ト久八籠の内より以前の辨當箱を出し）

失禮ながら私の辨當がござります、是をお上げ下さりませ。

〽兀げぬ忠義の堅地塗り、（ト辨當箱をおりよの前へ出す。）

りよ　それは何より忝いが、其方が後で困るであらう。

久八　いえ私は懇意の所でお晝に茶飯を馳走になり、持つて出た儘手を附けませねば、どうかこれをお坊様に、

〽蓋取除けて差出すを、見るに渇ゑし幼兒が、（ト久八蓋を取つて出す、巳之松見て手をたゝき）

巳之　やあ、お飯ぢや嬉しい〳〵。（ト取りに掛るを留めて）

りよ　これ、行儀の惡い、どうしたものぢや。

巳之　それでも早う喰べたいもの、

久八　さあ〳〵お上りなされませ。

道之　どれ取分けてやりませう。

〽時世につれて物事も缺けたる膳に箸茶碗、盛るを待兼ね澤庵の香の物さへ醍醐味と悦ぶ顔を見るに附け、子は支へねど母親は胸に支へる憂思ひ、

ト此内道之助緣の缺けたる膳へ小さな茶碗箸を添へ、辨當箱より箸にて盛り、香の物を手鹽へ取つてやる。巳之松嬉しさうに喰ふをおりよ見て涙を拭ふ。久八も是を見て氣の毒だといふ思入。

りよ　これ久八、其方の前も恥かしい、人は氏より育とて賤う育てば賤しうなり、今日は御飯の都合が惡く、わたしら初めまだ巳之松にも實はお晝飯を喰べさせぬゆゑ、御飯を見るとがつ〳〵と、

〽犬か猫を見る樣に喰べるといふは何事ぞ、以前は正しき御家來にて、三百石の知行取り、藤掛といふ侍の倅と人に言はれうか、

え丶淺ましや、

〽悲しやとわつとばかりに泣伏せば、兒は賢く母親の背撫で摩り共々に泣くをも知らず幼兒は、我嬉しさに莞爾々々と笑ふ程猶いぢらしく、久八涙を押拭ひ、

トおりよ泣伏すを、道之助顔をそむけ泣きながら脊中を摩る。巳之松嬉しき思入にて笑ひながら飯を喰ふ。久八情ない事ぢやといふ思入あつて、

久八　あゝ御尤もでござります〳〵、したがそれも皆時世、譬にもいふ人間は七轉び八起とやら惡い後は必ずよいもの、今の難儀を昔語りに致す時節もござりませう。せめて少しの御苦勞休め、爰に僅か二兩二分持合せがござりますれば、是をあなたに差上げますから、半月なりともすゝぎ洗濯出商賣をなされませずに、氣樂に御暮し下さりませ、ほんの九牛の一毛ながら親久右衛門が御恩送り、お納めなされて下さりませ。

〽黄金の花の心榮貢に贈る千疋は、天晴男一疋なり。

ト久八財布より金を出し、籠の上にある破れ扇の上へ乘せ、おりよの前へ出す。

りよ　あゝ〳〵それは忝いが、今も聞けば伯父の所に其方も掛つて居るとやら、定めて不自由がちであらう。志しは貰ひましたが、金子は其方に戻しまする。（トおりよ金を取つて頂き久八へ返す。）

久八　いえ〳〵その御遠慮には及びませぬ、高が男の一人口仕慣れぬ事でも商賣冥利、出さへ致せば二百と三百、きつと儲けて歸りますれば、樂に暮して參られまする。必ずお案じ下されますな。

りよ　さうでもあらうが其方も元手、是れが無うては明日から差詰困るは知れた事、それぢやによつて

〽此金は氣の毒ながら戻しまする。

久八　すりやこれ程に申しても、お受けなされて下さりませぬか。

りよ　さあ、それを受けては濟まぬわいの、
久八　(思入あつて、)いや、こりや私が不調法、お主様へ家來の身で金子を上げるは失禮千萬、眞平御免下さりませ。
〽兩手をついて詫入れば、
りよ　あこれ、さういふ譯ではないわいの。
久八　左樣でなくば此金子、お受けなされて下さりますか。
りよ　さあ、それは、
久八　但し御不足でござりまするか。
りよ　さあ、
久八　さあ、
兩人　さあ〳〵、
久八　どうぞお納め下さりませ。
〽親切面に現るれば親子は顏を見合せて、
りよ　これ伜、それ程迄に言うてくれる久八が志し、無足にするも本意ならず、

久八　すりや御受けなされて下さりますするか。
りよ　嬉しう貰ひますわいの。
久八　それで安堵致しました。
りよ　思ひがけなく此様に其方の恵を受けるのも、繋がる縁の折手本、
久八　以前は厚き御身分も、此奉書に引替へて、
りよ　薄い世帯の糊放れ、
道之　折目高なる行儀さへ、
久八　眞も草書の崩れがち、
りよ　替らぬものは墨の香に、
道之　名のり合ひたる嬉しさは、
久八　思へば筆の、
三人　命毛ぢやなあ。
〽嬉し涙に主従が其水入の水あぶれ、硯の海やましぬらん。（ト三人宜しくあつて）
りよ　これ伜、久八が志し御佛前へ供へてたも、草葉の蔭で道十郎殿が嘸お悦びであらうわいの。

へ備への金は經文の三部に勝る一分銀、（ト道之助件の金を佛前へ供へる。）
道之　おとゝ樣、久八が浪々を貢いで呉れし此金子、お悦び下さりませ。
久八　して旦那樣にはいつお果てなされました。
道之　算へて見れば三年後、而も九月の十九日、（ト位牌を見せる。）
りよ　刄譽劍道信士といふが、夫道十郎殿ぢやわいの。
久八　すりや旦那樣でござりまするか、承はりますれば、無實の罪にて御最期とやら、嘸御無念でござりませう。して、今もつて殺したる其本人は知れませぬか。
りよ　村井長庵か仕業ならんと推量なせど證據もなし、夫が仕業と世間の人に言はるゝのが口惜しく、何卒して殺したる其本人を尋ね出し汚名を雪ぎし其上に、紛失なせし短刀の在所を求め御舍弟の大學樣へ差上げて、亡き殿樣へお詫なさんと神や佛へお願ひ申せど、今に在所が知れぬわいの。
久八　して其短刀と仰しやりますは、銘は何と申しまする。
道之　無銘なれども業物にて、燒刄に露のこぼれたる跡がある故白露と、中身に金の入銘あり。
久八　や、其短刀ならござりまする。
道之　それはいづくに、

久八　先達て迄私が奉公なして居りました、而も神田の三河町伊勢屋五兵衛といふ質屋に、五十兩の質物に預つてござりまする。

りよ　嬉しやそれが手に入らば、夫がなくせし越度のお詫、

道之　とはいへ大まい五十兩、

久八　はて金は世界の湧物ゆゑ、調ふ時節がござりませう。

りよ　便りない身の二人故、

道之　此後ともに、どうぞ力に、

久八　及ばずながら精いつぱい、御恩送りを致します。（ト時の鐘鳴る。）もう入相でござりますれば、秋の日の釣瓶落し、日の暮れるに間もござりませねば、今日はお暇致しませう。

〽買ひたる品を差戻し、立たんとするを、（ト久八以前の道具を返し、歸らうとするを、）

道之　これ、此道具を持つて行かぬかいの。

久八　えゝめつそうな事をおつしやりませ、知らぬ先は兎も角も、どうして持つて參られませう。

りよ　いや／＼それは不用な品、どうぞ持つていつてくりやれ、

久八　はて禍も三年とやら、又お入用もござりませう、先づ／＼お置きなされませ。

りよ　そんならどうでも、
兩人　此品は、
久八　お置きなされて下さりませ。
りよ　あ、禮は詞に、
道之　盡きせぬ奇縁、
久八　左樣なればお二人樣、
兩人　久八、
久八　（巳之松へ向ひ）ぼつちやん、たんとお上りなされませ。
巳之　又持つて來て下されや。
久八　はい。
〽はいとはいへど久八が如何に浮世に落つればとて、此辨當をさ程迄悦び給ふはいとしやと
口に言はねど目は涙、袖に隱して門へ出で、
ト久八以前の辨當箱を取り、巳之松へ思入あつてほろりとなし、門口へ出て荷籠へいれ、
お暇申しまする。

ト門口をしめる、おりよは後を拜み居る、道之助は道具を片附ける。

〽門の戸しめて久八は、わつといひ度き口に手をあたり窺ひ吐息をつき、思案に暮るゝひと

もし頃足元暗く、

ト此中花道へ行掛ける、おりよ門口を明け、

りよ　これ、下水板があぶないぞや。

久八　はい、有難うござります。

〽たどり行く。（ト時の鐘、久八荷を擔ぎ思入あつて花道へ入る。おりよ金をとつて）

りよ　捨てる神あれば助ける神と、思ひ掛ない此金で、大家樣の勘定なし殘りで米屋薪屋の拂ひ、今宵はゆつくり寐らるゝわいの。

巳之　母さま睡たうなつたわいの。

〽横にころりと寐入るを見て。（ト巳之松横になり直に寐る。）

りよ　おゝ腹がようなつたら直に寐やつた。

道之　正直なやつでござりまする。

〽早日の入りて群れる蚊に、蚊遣の仕度何やかや忙しき門へ人入れの頭を連れて以前の中間

門より内を差覗き、

トおりよ道之助蚊遣の仕度をする、花道より忠藏好の打扮銀拵への一本差し、人入の打扮以前のはげ松、ぐづ市、鰹節箱を持ち附添ひ出で來り、直に舞臺へ來て、

はげ　親分こゝでございます。

忠藏　案内をしやれ。

ぐづ　はい御免なさいまし、(ト門口を明ける、)

りよ道之　や、こなたはさつきの、

はげぐづ　へい、又參りました。

〽いふにびつくり親子が驚き、門に控へし忠藏が小腰をかゞめ内に入り、(ト忠藏内へ入り、)

忠藏　眞平御免下さりませ。(ト脇差しを抜きながら下手へ住ふ。)

りよ　して、こなさんは、

忠藏　へい私は忠藏と申しまして、こいつらが親分でございます。

兩人　え、(トびつくりして、)

りよ　最前少しばかりなれど御酒代をあげましたが、僅四筋のお錢故不足で又もござつたのか。

忠藏　いえ〳〵どう致しまして、さういふ譯ではござりませぬ、こいつらがお前樣方へ無理な事を申しまして、おねだり申した御酒代のお詫に參りましてござりまする。
はげ　もし御新造樣、若旦那樣、さつきは御免下さりませ。
ぐづ　つい喰ひ醉つた勢ひで、とんだ事を致しました。（ト兩人あやまる。）
忠藏　不斷いひ附けて置きますが酒ばかりは控へられず、つい一合が一升と呑めば呑む程呑度くなり、酒の力で言ひ掛り、惡い事してなりませぬ。定めてお腹も立ちませうが、どうか私にお免じ下され、御免なされて下さりませ。（ト懷から以前の錢を出し、）是は先刻お貰ひ申した、御酒代のお錢でござります。（トはげ松が持つて來た鰹節箱を出し、）又是は輕少ながら、お詫の印に差上まする、どうぞお受取り下さりませ。（ト辭儀をなす。）
りよ　これは〳〵痛み入つた御挨拶、却つて迷惑致しまする。決してお返しには及びませぬ、殊には結構な此品を、どうまあお貰ひ申されませう。
忠藏　左樣仰しやつて下さりましては、私の方が迷惑致しまする、何卒お納め下さりませ。
りよ　どうも受けては濟みませぬ。
忠藏　（思入あつて、）これ〳〵手前達も此處へ來て、共々お願ひ申せ。

ト是にてはげ松、ぐづ市前へ出て、窮屈さうに坐り、

はげ　もし御新造様、折角親分があゝ言ひなさるから、長い短いおつしやらずと、早く貰つてお置きなせえ。

ぐづ　錢だつて鰹節だつて、まんざら不用な物でもござりませぬ。

忠藏　これ〳〵、どうしたものだ、いけぞんぜいな、もつと丁寧にお願ひ申せ。

はげ　眞平御免なせえまし（ト手をつき思入あつて）へい、さつきは私共お二人さま共、彌太一のお居酒屋でお鰯のお鹽燒で一升ばかりお酒を召上り、お醉ひ遊ばした所から、飛んだ惡い事を致しました。

ぐづ　それも全くお出來心、心から遊ばした事ではござりませぬ、是に懲りてお二人さま共、今日から御酒をお止め遊ばし、お下戸におなり遊ばしますから、

はげ　それをおきぼに此お錢、

ぐづ　お鰹節も共々に、

兩人　御頂戴あられませう。

〽疊に天窓をすり附けて、詫り入るこそをかしけれ。（ト兩人天窓を下げて詫る。）

忠藏　こいつらもあの樣に申しますから、お納めなされて下さりませ。

りよ　その樣におつしやりますを、兎やかう申すも如何なれば、お詞に任せまして、

兩人　お貰ひ申しますでござりまする。

忠藏　それで私も心が濟みました。

ト此中はげ松ぐづ市矢張舞臺へ天窓を附け、蚊の喰ふ思入にて足を叩き居る。

忠藏　これ、もういゝから天窓をあげろ。

はげ　やれ〳〵ひどく蚊に喰はれた。

ぐづ　おらあ又痺れが切れて堪えられねえ。

道之　おゝいつの間にか暗うなつた、どれ明りを點けませう。

りよ　あこれ、油がたしか無かつたわいの。

はげ　油が無かア、買つて來ませうか。

ぐづ　御遠慮なくおつしやりませ。

りよ　有難うござりまする。

〽わづかに殘る佛檀の油を皿へ絞り入れ、二寸に足らぬ燈心にこゝろも細き灯の光り、初め

て見合す顔と顏、
トおりよ佛壇の油皿を取つて行燈へつぎ、明りを點ける。是にて忠藏おりよと顏見合せ、
りよ　忠藏や、お前樣は麹町においでなされた、藤掛道十郎樣の御新造さまではござりませぬか。
忠藏　いかにも左樣でござりますが、さうおつしやる、
兩人　お前樣は、
りよ　へい貝坂に居りまする、人入の忠藏でござりまする。
忠藏　すりやお屋敷方へお出入りの、
りよ　左樣でござりまする、諸方へお出入り致しまする。取り分けてお屋敷樣へは祖父の代からお出入りゆゑ、旦那樣のお顏はよう存じて居りまする。
道之　そんなら以前はお屋敷へ、お出入りであつたとか、
りよ　今日の樣な、思ひ掛ない人に逢ふことはない。
はげ　何所にどう知つた人があるか、
ぐづ　めつたな事は出來ねえなあ。
忠藏　扨て、過ぎ去つた事でござりますが、旦那樣には不慮な事で、とんだ目にお逢ひなされましたな。

りよ　定めて近所の事なれば樣子は知つてゞございませうが、傘の印が證據となり、言譯立たず果敢なくも非業な死をば遂げられました。

忠藏　嘸御殘念でございませう、全く御存じない事なれど、傘の印に言譯立たずお調べ中の御死去故、どうやら旦那の仕業の樣に知らぬ者は申しまする。して殺しました本人は、未だそれと知れませぬか。

りよ　明暮尋ねて居るけれど、今に慥な證據もなく、

道之　空に月日を送りまする。

忠藏　正しく百姓重兵衞を、赤羽根橋で殺したは女房の兄村井長庵、あいつが仕業と思ひます。

りよ　え、すりや、あの長庵が仕業とな、それにはなんぞ、

道之　證據でも、

忠藏　さあ別に證據もございませぬが、重兵衞が殺されましたあの日は八月廿五日天神樣の御緣日、災難事を遁るゝやう人の參らぬ其先にかゝさず參る此忠藏、烏も啼かぬ夜明前、而も宵から大降に天神樣の裏門前、やつと見分かる人顏に、すれ違つたる村井長庵、傘もさゝずに天窓からずつぷり濡れて歸つて來たを、犬も怪しく思つてか吠えつく所を切倒し逃げて行くのを見掛けましたが

人殺しの其場所へ落ちてあつたる傘が證據になつて入牢となり、一旦事は濟んだれど傘をさゝずに長庵が其朝濡れて歸つたが、不思議な事と思ひましたが、迂濶な事も申されず、それから樣子を見る所日にまし募る惡事の段々、それ故あいつが仕業だと、この忠藏は思ひます。

りよ　すりや、あの折も淚をこぼし眞實らしう歎きしも、夫を罪に落さう爲め、

道之　僞り事であつたるか。

はげ　あの長庵は根が醫者陸、早乘三次が兄弟分で賣つた娘の客を誑し、五十兩取つたとやら、

ぐづ　國から娘に逢ひに來た重兵衞の女房が、中田甫で殺されたも、これも彼奴等二人が仕業、

りよ　扨はいよ〳〵長庵が仕業と知れた上からは、

道之　とりも直さず親の敵、

りよ　伜、來やれ、

ト戶棚に隱す嗜みの一腰さすが武士の妻、伜もともに駈出だす、ト戶棚より兩人脇差を出し、つか〳〵と行くを忠藏留めて、

忠藏　こりやお二人には血相替へ、何れへお出でなされます。

りよ　無實に死せし夫の敵、麴町へ尋ね行き、

道之　村井長庵を討つ心。

忠藏　いやお心逸るは御尤もだが、それは惡い御了簡、今お二人で踏ん込んでもなか〳〵己が殺したと容易に言はぬ村井長庵、

りよ　それぢやというて現在の、

道之　敵と知れた上からは、

忠藏　はてめつたな事をおつしやつたら、却つて此方が逆ねぢに、どんな難儀にならうも知れぬ。急く所ではござりませぬ。

兩人　それぢやというて、

忠藏　まあ〳〵お待ちなされませ。

へ言ふに親子は是非なくも、行くに行かれず拔きかけし鯉口納め座に直り、

りよ　何をいふにも女の事、伜というてもまだ若年、どうしてよいやら惡いやら、勝手知れざる町家の作法、

道之　力と頼むは忠藏殿、

忠藏　袖振合ふも他生の縁、知らぬ者でも賴まれたら後へは引かぬわしが氣性、まして以前はお出入の

鹽冶樣の御家來なれば、及ばずながら忠藏がお二人樣の腰押なし、旦那樣の御無念の晴れる樣に致しませう。然し相手の長庵は一筋繩で行かぬ奴、爰は一番高ぴしやにお上の力をかりにやあ行かない、當時仁者と名の高い大館樣へお願ひ申し御詮議受けたら御名智に蛇の目を灰汁で洗つたやうに、善と惡とは分かります。

はげ　こりやあなるほど親分の、

ぐづ　一點張りが上分別だ。

りよ　すりや此由を大館樣へ、

忠藏　お願ひなされればその時は、證據人に忠藏が出る所へ出て長庵を、罪に落して旦那樣の汚名を雪いで上げませう。

りよ　今日はいかなる吉日か、紛失なせし短刀の在所の知れし其上に、又もや夫の敵が知れ、

道之　久八といひ、

りよ　忠藏殿・力を得しも夫の導き。

忠藏　是からとつくり相談なし、夜が明けたらば大館樣へ、

りよ　願ひでるにも勝手知らねば、

忠藏　そりやあ氣遣ひなされますな、手引はわしが致します。
　　ト此以前より、下手へ五郎兵衞出で、
五郎　願ひ事なら家主が、
りよ　いや、こなたは賴まぬ、
五郎　直訴は御法度、
忠藏　えゝ默つてござれ。(ト忠藏五郎兵衞を突廻す、おりよ思入あつて)
りよ　嬉しや日頃の、(ト向うへ思入。)
五郎　願ひが叶ふか。(ト寄らうとするを)
りよ　えゝ、それ所かいな。
　　ト突倒す、是にて火鉢の土瓶ひつくり返り、五郎兵衞の頭灰にて眞白になる。
忠藏　いや、ひどい灰神樂だ、
　〽勇み勇んで、
　　トおりよ道之助向うを拜み、嬉しき思入、忠藏手拭にて灰を拂ふ、五郎兵衞寄らうとするをはげ松ぐづ市押へ附ける。此見得三重にて、道具元へ戻る。

●（六右衛門宅の場）＝本舞臺元の道具、此處に以前の久八に六右衛門詰寄り居る、矢張三重にて道具留る。

〽入る月や秋の習ひの空よりも、身の雲晴れぬ久八が替りし姿見るに附け、伯父は涙にくれながら、

六右　最前そちが持つて行つた息子殿から貰うた金、一寸爰へ出してくりやれ。

久八　さあ、あの金はよんどころなう、

六右　え、どうぞしやつたか。

久八　はい、親父樣の御恩になつた藤掛樣の御新造樣、若旦那樣にお目にかゝり、話せば長い事ながら、其日の烟りも立てかぬる御難儀を見兼ねまして、お貢ぎ申して歸りました。

〽聞くに六右衛門口あんごり、

六右　あゝそれは殘念な事をした、貰うた金を返した上、言分言はうと思うたに。

久八　なに、あの三兩の金を返し、言分言はうとおつしやるは、そりや誰に。

六右　誰でもない、千太郎殿に、

久八　そりや又、どういふ譯あつて、

六右　これ久八、おりや其方がいとしいわいの、忠義一途な心から千太郎殿の難儀を引受け、年來溜めた給金に二葛籠の着類迄水になしたる甲斐もなく、千太郎殿は今もつて廓通ひをさつしやる故、最前貰うた金を返し、伊勢五へ行つて一理窟言はねば腹がいぬわいの。

久八　其御腹立は御尤もではござりまするが、言ふのは何時でも言はれます、まあ〳〵お待ち下さりませ。いつぞや若旦那に私が御異見申した其時に、再び廓へ行くまいと堅い御誓言をなされましたれば、よもやおいでなされますまい。大方それは人の口、無い事もある樣に言ふのが習ひでござりまする。

六右　いや〳〵さういふ譯ではない、こなたに金の罪を着せ、知らず顏して今日迄過ぎ、いつ返すか知れもせぬ反故同然な證文に、三兩ばかりな金を添へ、持つて來たが腹が立つ、まだ其上にまざまざしう廓へ足は向けぬなどゝ口先ばかりの眞實顏、外へ出たなら舌なと出し、笑うて行つたであらうと思や、おりや悔しうてならぬわいの。

久八　若旦那に限つては無い事とは思ひますが、その樣におつしやりますには何ぞ證據がござりますか。

六右　最前見世に落ちてあつた女郎から來た是此文、證文を出す其の時に落して行つたに違ひない。

〽差出す文を久八は、不審ながら手に取り上げ、

久八「千太郎さま參る、小夜衣より、」

〽扨は眞實と打驚き、思はず開き見る文は、文字もやさしき小夜衣が、筆の命毛二世かけて比翼と契る鳥の跡墨の光りも濃い中に、今宵來いとの迎へ文、卷納めても久八が納め兼ねたる胸の內、

ト久八此中宜しく文を讀む事あつて、口惜しき思入にて、

そんならいよ〳〵今もつて、廓へおいでなされますか。え〻情ない若旦那、あなたを誠のお人にしようと、數年勤めし勤功も捨て〻此身に罪を負ひ、伯父ぢや人に引きとられ、身すぎ世すぎに恥を捨て、いゝいゝしがない元手で紙屑買ひ、貯へとてもあらざれば養父が勤めし御主人が難儀を見ながら救はれず、是も誰ゆゑあなたゆゑ、此久八は是程に艱難苦勞致しますを、不便と思うては下さりませぬか。そりやどうよくでござりまする。

〽忠義一途に久八が、思はず伯父の胸づくし、ぐつとしむれば六右衞門、

ト久八悔しき思入にて、六右衞門の胸づくしを取り、こづく、

六右　あ〻これ、喉がしまる〳〵、放してくれ〳〵。

久八　いえ〳〵放しませぬ。

六右　あゝこれ、死ぬといふに〳〵。

久八　假令糠に釘にもせよ、今一應若旦那に、逢うて異見を言はにやあならぬ。

六右　これ久八、おれぢや〳〵おれぢやわいの。

久八　おゝ腹立まぎれに、ついうつかり、眞平御免、（ト辭儀をなし、手を上げるを木のかしら、）下さりませ。

ト久八向うへ思入、六右衛門は胸をさする。時の鐘早き合方にて、

ひやうし幕

七幕目

日本堤淨瑠璃の場

（淨瑠璃）　蘆の野や額撫で揚る夢ごゝろ　恨葛露濡衣　（岸澤連中）

（役名━━紙屑買久八、早乘三次、貝坂ノ忠藏、伊勢屋の息子千太郎。丁子屋の遊女小夜衣、其他。）

本舞臺一面の淺葱幕、柳の釣り枝、下の方樹木の張物。爰にひよろ八、前幕の紙屑屋にて立かゝり居る。是を太助紺の前垂尻端折り、若い者の裝にて留めて居る。此見得禪の勤にて幕明く。

八　これさ〳〵、此人は、わしを引張つてどうするのだ。

八　待てといふなら待ちもしようが、此日の短いのに今にもう日が暮れます、用なら早く言ひなせえな。

太助　どうもかうもいらぬから、まあ一寸待つて下せえ。

八　なに、あの紙屑を返してくれ、お氣の毒だが御膳籠へ一緒に明けてしまつたから、どれがどうやら分らねえ。返す事は堪忍してくれ。

太助　おゝさつき賣つた紙屑に入用な物があるから、どうぞあのまゝ返して下せえ。

八　酒と聞いちやあのがせねえ。それぢやあ此處へ明けるから、有るかねえか御覽なせえ。

太助　どうして〳〵大事の書附が入つて居るから、返すことがならねえなら一寸見せてくんなせえな、ありせえすりやあ其代り、お禮に一合買ひますよ。

ト紙屑を舞臺へ明ける。

太助　こりやあ有難うござりまする。（ト太助選り分ける。）

八　どうだね、有りましたか。

太助　有りました〳〵、是が入用でござります、（ト反故を開き見て）「淨瑠璃名題――」（ト讀んで）此連があるなら見せて下さい。

八　その連は是だらう、（ト反古を開き、）東は和田倉八代洲川岸、
太助　そりやあ江戸方角の手本だ、太夫の名を書いたものだ。（ト又反故を取つて、）
八　おつと、太夫の名ならこれだ。つる田龜太夫旅宿、
太助　そんな名ぢやあないはずだ、えゝこりやあ御師の所書だ。これだ〳〵。（ト反故を開き、）「淨瑠璃太夫、岸澤――」（ト太夫連名を讀む。ひよろ八又反故を開き、）
八　「三味線、」
太助　おゝあつたか〳〵。
八　「三みせん堀、七つ藏の向ぅ曲つて、角から三軒目、」
太助　えゝそんなものぢやあねえ（ト又開き、）「三味せん堀、」えゝおれまで引込まれた。「三味線、岸澤式佐、上調子岸澤――、相勤めまする役人、」
八　おつと、その後はこれだ。（ト　反故を開き、）
太助　「相勤めまする役人、中村福助、坂東三津五郎、」
八　「市川米平、中村鳴藏樣、」
太助　こぅ〳〵そりやあ違つたぜ、こんな所へ出る顏でもなし、樣の附いて居るのはをかしいぜ。

八　あゝ逢つた〳〵、こりやあ流質の書出しだ。

太助　えゝ外聞の惡い。

八　是だ〳〵。（ト反故を開き、）「中村鶴藏、市川小團次、」

太助　やれ〳〵嬉しや、是で殘らず揃つた。

八　さあ約束で、一合買ひなせえ。

太助　なに、これを讀めば用はねえ、酒を買つてたまるものか。

八　えゝそれぢやあ嘘か。

太助　知れた事よ、早く仕舞つて引つこみねえ。（ト太助上手へ入る、ひよろ八反故を籠へ入れ、）

八　いやとんだ目に逢ふものだ、然し只も引込れまい。「いよ〳〵此所淨瑠璃初まり、その爲口上さやう。屑はござい〳〵。

ト禪の勤にて呼びながら上手へ入る。鳴物打上げ、知らせに附き淺葱幕を切つて落す。

（日本堤の場）――本舞臺正面高二重の土手、後ろ田町より斜に吉原の家根を見たる夜更の遠見、上の方に柳の立木、舞臺前に芒の土手板、流の波板、總て吉原土手下の體。下手淨瑠璃臺に岸澤連中居

並び、道具納ろ。ト直に淨瑠璃になる。

〽引四に月夜の里も戀の闇、忍び廓をおちこちの人目堤を横ぎれて、誰そやの灯り細道を、たどり〳〵て二人連、

ト本釣鐘合方にて、上手より土手の上へ千太郎、おしよぼからげ一本差し頰冠り、小夜衣部屋着の裝手拭を吹流しに冠り出て來り、後へ思入あつて、

〽濡るゝもすその露ならで、心置く身は雨空に亂れて渡る雁さへも、若し追手かと驚かれ、顫ふ足元音を忍ぶ秋の蛙の聲かれて、田川の水の淺き緣、死ぬる覺悟も癪ゆゑに歩み兼ねてぞ立ちやすらひ、

ト此中土手より平舞臺へ下り、振あつて千太郎癪の差込む思入、胸をおさへ。

千太 あいたゝゝゝ。

小夜 もし、どうかしなさんしたかいな。

千太 掟嚴しい廓を脫け、やれ嬉しやと思うたら、心のゆるみに持病の癪が、あいたゝゝゝ。

ト千太郎胸を押へ、下に居る。小夜衣介抱しながら、

小夜 こりや困つたものでござんすが、なんぞ藥はござんせぬかいな。

千太　此世で添はれぬ身の上に死なうと覺悟極めし故、藥を呑むにも及ばねど、せめて二人が死所と定めし小梅の菩提所迄、どうぞ早く行きたいものだが、行くに行かれぬ此の差込み、

小夜　さうして此處らにかうして居たら、追手の者に捉へられ、いかなる憂目に逢はうも知れず、

千太　小梅村迄行かれずば、どこで死ぬのも同じ事、

小夜　此處を二人が最期場に、果敢なく消ゆる土手の露、

千太　秋の夜長に引きかへて、契り短き身の上は、

小夜　西へ傾く月代を、

千太　よすがとなしてあの世の旅、

小夜　今更いふも愚痴ながら、

〽そもや初會の其日より勤め放れてしみ〴〵と、末の末まで言ひかはし、樂しみ逢うた甲斐も無く、書く書置もにじみ勝ち、薄い契りに今日の今、筆の命毛切れ果てゝ硯の海の御主人に恩も送らず死ぬるのも、みんな定まる約束事、早う殺して下さんせと、言ふにこなたも苦しさ怺へ、

ト此中小夜衣千太郎を捉へ口說のもやう、始終千太郎癪を押へ苦しむを小夜衣介抱しながら、よろし

くあつて、

〽そりや我とても父母へ孝も盡さで今死なば、歎きを掛くる不孝の罪、お詫は草葉の蔭より
と絞る袂の露時雨、暫し涙に暮れにける、

ト千太郎苦しさを怺へながら此中よろしく思入あつて、トヾ小夜衣と手を取交し泣居る。時の鐘。

〽鐘の音しづむ眞夜中に、往來も稀にそゝりぶし、

そゝり〽鐘が恨みのきぬ〳〵に、泣いて別るゝ明烏、

ト此中　手土手の上へ、早乘三次尻端折り頰冠りにて出て來り、

三次　今伏見町で勘太に逢つたら、丁子屋の小夜衣が駈落をしたといふ事だが、千太郎が連出したか、
彼女あおれも掛合ひ、聞捨にやあならねえわえ。

〽いふ聲聞いて兩人が逃げんとなすをすかし見て、

ト三次の聲を聞き、千太郎、小夜衣びつくりなし、兩人逃げようとする、三次之を見て、

三次　や、そこに居るのは、小夜衣、千太郎か。

兩人　えゝ、

三次　いや、いゝ所で見附けたわえ。（ト三次つか〳〵と平舞臺へ來る。）

兩人　もし、どうぞ見逃して下さりませ。(ト逃げようとするを引とらへ、)

三次　どうしてこれが見逃せるものか、外の者なら知らねえ事、おれが判の入つて居る小夜衣、連れ出されてたまるものか、二人共丁子屋へそびいて行くから覺悟しろ。

千太　(おど／＼しながら、)もし三次さま、御尤もではござりますが、添ふに添はれぬ身の上に、死ぬる覺悟で廓から連れて逃げたる此小夜衣、

小夜　見ず知らずと言ふではなし、麴町の伯父さんと兄弟分のおまへゆゑ、わたしは姪のことなれば、知らぬ顔して此儘に、

兩人　どうぞ見逃して下さりませ。

三次　いやあんまり呆れて物が言えねえ、なんぼわからねえ手前達でも、よく物を考へて見ろ、大金を出して抱へた小夜衣、今死なれて見ろ丸損だ、其祟りは判方の長庵とおれが難儀だ。目に掛つたは天の助け、見逃す所か二人共貧乏ゆるぎもさしやあしねえぞ。

千太　そんならどうでも、此儘に、

小夜　見逃しては下さんせぬか。

三次　知れたことだ、そびいて行きやあ丁子屋からしつかり金になる仕事だ、こんな事がこつちの附目

だ。

千太　さう聞く上は、

兩人　ちつとも早く、（ト兩人行かうとするを捉へ）

三次　うぬ逃げるとて逃さうか、長年季のある小夜衣を連出しやがりやあ勾引だ、じたばたすると敲き殺すぞ。（ト千太郎を突倒す、小夜衣寄らうとするを三次引附ける、千太郎起上り）

千太　それぢやといううて此儘に、

小夜　どうまあ廓へ歸られませう。

三次　そりやあうぬらが心柄だ、さあきり〳〵とうしやあがれ。

〽小肱取つて引立つるを、やらじとすがり留むる折柄、更けて田町の騷ぎ唄、

きやりくづし〽船の通路おせ〳〵やつさつさ、好いた女郎衆のまねく目元にすとんと打込んだ、好いたら其氣でこんえもしよ、さつさよい聲かけろ、よんやな。

ト此中在郷の屋臺囃子を冠せ、三次小夜衣を引立て行かうとするを、千太郎さゝへる。三次あり合ふ竹の折にて千太郎を打つ立廻り宜しくあつて、

〽在の囃子に紙砧、うち合ふ三次千太郎、これまあ待つてと小夜衣が留めるもかよわき女郎

花、情嵐の一と吹に折れて倒るゝ萩芒、後白露と、

ト三次立廻りて千太郎をひどく打つ、これにてうんと悶絶なし倒るゝ、小夜衣はつと思つて寄らうとするを、三次無理に引立て上手へ入る、風の音になり、

〽又一と吹きの小夜風に雨雲運ぶ秋の空、替る習ひの男氣も替らぬ忠義久八が、只一と筋にあゆみ來て、

ト花道より久八着流しにて思案の思入にて出て來り、花道にて、

久八　宵に土手で若旦那を見掛けたゆゑに後を附け、茶屋の見世迄行つて見れば、女郎が先に待つて居て現たわいもない有樣、直に踏ん込み御異見をしようとは思うたが、滿座の中で若いお方に恥をかゝすも本意ならねば、歸りを待つてと此土手を宵から往つたり來たりしたが、待退屈する中に今打つたのは八つの鐘、七つ過には歸られよう、是から土手に待合せ、逢うて恨みを言うた上、とつくり異見を言はにやならぬ。

〽小川に掛ける橋の名の神ならぬ身にそれぞとも、知らで躓く緣のはし、

ト久八思入あつて舞臺へ來り、思はず千太郎に躓きびつくりなし、

これは〳〵いづれのお方でござりますか、心せきゆゑ思はぬ粗相、眞平御免下さりませ。

ト此中紙砧の入りし合方、千太郎うんと心附く、久八心得ぬ思入にて、

久八　この往來に今時分寐て居らるゝは、生醉か。や、息づかひの樣子ではどうやら病に苦しむ樣子、もし、どうかなされましたか。

ト抱き起して取形の似たはもしやと見る折しも、雲間をいづる月影に顏さし覗きびつくりなし、

やあ、若旦那でござりますか。

ト千太郎心附き、久八にむしやぶり附き、

千太　これ、小夜衣はやらぬ〳〵。

久八　もし、氣をしつかりお持ちなされませ。

千太　や、さういふ聲は、

久八　久八でござりまする。

千太　えゝ、（ト久八を見てびつくりなし、）おゝそなたは久八、あ面目ない。

ト面目なやと逃出すを、引きもどしてつれ〴〵と、涙もつ目に顏打ち見やり、

ト千太郎逃出すを久八引留め、千太郎の顏をうらめしさうに見て涙を拭ひ、

久八　もし若旦那、此久八の顏を見て逃げる樣なお身持に、何でおなりなされました。

千太　え、(ト蟲笛入の合方になり、久八千太郎を引すゑ合方になり、)

久八　こなたはなう、今更いふに及ばねどお前樣は私がお世話をなした御養子の御身ゆゑ、一と方ならず思へばこそ、五十兩の質物も此身に罪を引受けて、十二の年から勤めたるお家を不首尾に出ましたも、惡い御名を附けまい爲め、伊勢五の家の番頭は見掛によらぬ不埒者、紙屑買つて歩くのは心がらぢやと人樣に芥の樣にいはるゝとも、お前樣さへ御辛抱にて御家督相續なさるれば、盡せし忠義も顯はれて又元々の主從になられませうと、それのみを朝夕願ふ甲斐も無く、これ此樣な御身持ではあの物堅いお家故、明日をも知れず御離緣におなりなさるのは知れた事、さうなる時は富澤町の御兩親さまへも私がなんと言譯がなりませう。なんぼお若いお心でも、よもや再び廓へはお出でなされぬ事とのみ思ひましたは田舍氣質、正直すぎたが今での後悔、お前樣より十からして年を取つたる久八を、よくも誑して下さりました、實に悔しうござりまする。

ト久八よろしく思入、千太郎術なき思入にて、

千太　その腹立は尤もぢやが、さらく誑すの僞るのと、そんな心は微塵も無い、色に迷ひし若氣のあやまり、久八そなたへ言譯は、此場に於て、

〽差したる一腰拔くより早く、既にかうよと見えければ、久八あわてゝ抑止め、
ト千太郎脇差を拔き、死なうとするを久八留めて、

久八　えゝめつそうな事なされますな、お前樣に命を捨てさせ、此久八が悅びませうか、どうぞして誠のお人にしたいばかり、此樣に夜の目も寐ずにまご〳〵と行きつ戾りつ此土手を、幾度步くか知れませぬ。今お前樣に死なれたら是迄盡した忠義も水、短氣な事して下さりますな。

千太　いや〳〵わしはそなたに逢はずとも、今宵は死ぬる覺悟の身の上、

久八　え、そりやまあいかなる譯あつて、

千太　さあ是迄隱して遣うた金のたゝまり、二つには思ひ切らうと思うても、いかなる前世の惡緣か思ひ切られぬあの小夜衣、所詮此世で添はれねば、長い未來を樂しみに心中せうと覺悟を極め、（ト左りの手で懷より書置を出し、）これ、此樣に書置迄互ひに持つて廓を脫け、爰まで首尾よく逃げのびしが、思ひ掛けなく長庵が一つ穴なるあの三次に、見咎められて小夜衣を引戾されるをやるまいと、爭ふはずみに脾腹を打たれ、氣を失なうて後は知らねど、たしかに三次が小夜衣を連れて行つたに違ひない、さすれば明日は我家へも彼奴が來るに違ひない、最早家へは歸られねば、せめてそなたへ言譯に、此處で死ぬのが此身の本望、どうぞ留めずにくりやいの。

久八　知らぬ先は是非もないが、此久八の目に掛り、なんであなたが殺されませうい

千太　それぢやというて生きては居られぬ。

久八　めつたに放しは致しませぬ。

〽留めるはづみに久八が持つたる刄過まつて千太郎が脇腹へ、ぐつと突きこむ急所の深手。たまぎる聲に打驚ろき、

ト此中久八千太郎の持つて居る脇差しを取上げる、千太郎それを取りに掛るをやるまいと爭ふ立廻りに過つて久八千太郎のわき腹へ突込む、これにて千太郎アツというてどうとなる、久八びつくりして、

久八　もし若旦那、どうぞなされましたか、

千太　（疵口を隱す思入にて、）いや〳〵案じるな、どうも仕はせぬ〳〵。

久八　や、五音の調子呼吸の狂ひは（ト千太郎の疵口と我持つてゐる脇差の切尖を見てびつくりなし、）こりや過つて若旦那を、や〳〵〳〵、

〽あきれて膝はわな〳〵と、目もくれなゐの草紅葉血しほにすべる足も空、苦しむ手負を介抱なし、

ト此中早めたる合方、蟲笛、久八千太郎を我殺せしといふ思入あつて、わな〳〵顫へ、歯の根も合はぬ思入、千太郎疵口を押へ苦痛を怺へる、久八介抱なし、

もし若旦那、お氣をたしかにお持ちなされませ。あなたにお怪我をさせまいと、留めるはずみに過つてひよんな事致しました、こりやどうしたらようござりませう。

千太 あ、いや〳〵そなたの知つた事ではない、元より死ぬる覺悟といひ、我と我手に突いた疵、是で死ねば我本望、必ず〳〵構うてくれるな。

久八 いえ〳〵あなたぢやござりませぬ、此久八が取る拍子突いたに違ひござりませぬ。

千太 まだまあそんな事をいふか、先非を悔いて自殺する身のいひわけを親達へ、我に替つて言うてくりやれ。

〽言ふ息さへもたえ〴〵に野末によわる秋の蟲、哀れをそへる道哲の鉦鼓の聲もすみ渡り、

ト此中千太郎苦しき思入にて水を呑ましてくれといふ、久八手負に水は呑まされぬといふ思入、千太郎手を合はして頼む、一ツ鉦になり、

〽なむあみだ〳〵〳〵、

ト千太郎段々によわり、うつとりとなる、久八抱起し耳へ口をよせ、

久八　若旦那々々、千太郎さま〳〵。

〽あの世を照す常燈の灯りも消ゆる夜半の露、果敢なく息は絶えにける。

ト千太郎よろしく苦痛の思入にてばつたり落入る。久八どうとなり、

こりやもう事は切れたのか、ほい、

ト思入、是より竹笛入りの合方になり、久八途方に暮れし思入にて、

あ忠義一途に凝固まり、怪我とはいへど御主を殺し、今は不忠となつたる久八、身の言譯は此場にて腹かつさばいて死出三途、若旦那の御供なさん。（ト思入あつて、）とは言ひながら追腹はまことの人のする所業、現在此身は主殺し、我が手に死んでは今日の天道樣へ濟まぬ科、是よりお上へ訴へ出で、三尺高い木の空で主殺しの御成敗受けて死ぬるが罪亡し、（ト思入あつて、千太郎の亡骸へ向ひ、）もし若旦那さま、遲かれ早かれ私も後より冥土へ參りまして、此身のお詫を致しまする。

〽今は詮方亡骸へ手向の水も宵の雨、木々の雫に袖濡れて唱ふ六字の無常音、

ト久八鼻紙を流れの水へ浸し、千太郎の口へ絞りこみ泣きながら手を合せ、

南無阿彌陀佛々々々々々々。

トはあゝと泣く、この途端本釣鐘を打込み、久八きつとなる、此以前より上手にて三次窺ひ居る。

ありやもう七つ、夜明けぬ中に、(トつか〳〵と土手の上へ上る。)

三次 うぬ、人殺しめ、

ト後ろから組附くをふり拂ひ、一寸立廻る。爰へ上手より忠藏着流し一本差し早歸りの心にて出て來り此中へ入る。三次胸ぐらを取るを、忠藏ふり拂ふ、久八行かうとするを忠藏三次と心得引戻す、これより忍び三重もやうの合方、本釣鐘にて探り合の立廻り、此中三次以前の遺書を拾ふ、是を忠藏引附けて取る。久八脱れて身仕度をなす。

〽佛の誓ひ頼みなき罪科重きおのが身は、心は鬼に責められて、今に地獄の苦しみと、

ト此中立廻りよろしくあつて、久八つか〳〵と花道へ行く、舞臺には忠藏三次引張りの見得、

〽奉行所指して、

トばた〳〵三重本釣鐘にて久八花道へ入る。忠藏三次を引附け遺書をすかし見る、此見得よろしく。

幕

八幕目大詰

町奉行所白洲の場

村井長庵

〔役名＝＝村井長庵、紙屑買久八、貝坂ノ忠藏、早乘り三次、甲州屋吉兵衞、六右衞門代與兵衞、大館左馬之介義晴、伊勢屋五兵衞、道之助。道十郎後家おりよ其他。〕

（白洲の場）＝＝本舞臺四間通し白木造り高足の二重家體、欄間上板屋根の庇を見せ、正面大形の襖、中央に白洲階子を掛け、上の方板羽目、大戸口出這入の潜戸、下の方板羽目、爰に捕繩手錠掛けあり總て町奉行所白洲の體。宜しく飾りつけ爰に下役人○△の兩人黑羽織一本差にて左右に控へ居ろ見得、時の太鼓にて幕明く、

○今日の御白洲は、先達てお召捕に相成りし麴町の町醫者長庵人殺しのお調べ、

△又神田三河町伊勢屋五兵衞召仕ひ、久八主殺しの御詮議、

○只今打ちは八つのお太鼓、最早程なく御退出、

△御出席の刻限なれど、萬事手配り致したれば、

○是にて暫時控へ、

兩人　申さん。

トやはり時の太鼓にて、下手の襖より役人◎□の兩人上下一本差しにて、書物入の箱硯箱を持出て來り、左右へ別れて住ひ。差出しの名前書を前へ置き、

○先刻申渡せし通り、一昨年芝赤羽根にて人殺しの一條、今日お直の再吟味、

□ まつた神田三河町主殺しの一件、并に訴訟人道十郎後家りよ親子其外掛り合の者一同、

◎□ 相揃ひしか。

○ 御達しの通り、一同差控へさせ置きましてござりまする。

◎ 然らば、先づ囚人村井長庵・

□ 藤掛道十郎後家りよ、倅道之助、

◎ 町役人共一同、

□ 呼出し召され。

○△ はつ。(ト○は上手へ向ひ、)

○ 囚人村井長庵、是へ引出しめされい。(ト奥にて、はあゝと返事ある。)

△ (下手へ向ひ、)藤掛道十郎後家りよ、倅道之助・一同是へ出ませい。

ト花道にてはあゝと返事する。是にて上手の奥にて牢の戸を明ける音、說經掛りの合方になり、花道よりおりよ、道之助やつし裝にて町役人兩人附添ひ出る。上手の潜戸を明け、長庵月代の伸びたる坊主鬘、好みの打扮にて繩に掛り、法被の下番繩を取り、外に二人、黑羽織の役人一人附添ひ出て、双方宜しく思入、見合つてきつとこなし。

下番　下にをらう。

ト是にて長庵は上手へ坐り、下の方におりよ、道之助住ひ町役人下手後ろへ控へる。

○　囚人町醫師長庵、

長庵　へい。

□　道十郎後家りよ、伜道之助。

兩人　はあゝ。

□　其外町役人共、

町役　はあゝ。

□　一同罷出たな。

町役　御意にござりまする。

○　今日はお直の御裁斷、訴答突合せの御吟味、

□　双方共神妙に御受け申し上げろ。

○　即刻御出席なさるゝ間、

□　差控へ罷りをらう。

皆々　はゝあ。

ト是にて時計の音になり、正面の襖を左右へ開き、左馬之助上下脇差の打扮袴裝の侍二人、一人は刀を持ち一人は手文庫を持ち附添ひ出て、左馬之助中央よきところへ住ひ、侍二人後へ居並ぶ。差出しの名前書を持ち行き、左馬之助の前へ置く、

左馬　おゝ、（ト思入あつて差出しを見る事あつて、）麴町平河町町醫師長庵、

長庵　へい。

左馬　藤掛道十郎後家りよ、伜道之助、

兩人　へい。

左馬　其方共が願ひ出でたる儀に依つて、此方にも深き含みあつて、先達て長庵を召捕り入牢の上吟味に及べ共、白狀を致さず、依つて今日双方突合せの吟味致し遣はすぞ。

兩人　有難い事でござります。

左馬　こりや長庵、去る未の八月中芝赤羽根に於て、其方が妹婿百姓重兵衛を殺害致し、所持の金子を盜取りしは同町に住居致せし浪人藤掛道十郎の所業と、其砌斯波左衛門役所へ召捕はれ吟味中

○　右一件の者共、殘らず召出だしましてござりまする。

牢死なしたるに依つて、人殺しは道十郎と相成り、右一件一旦落着致したるを、今般右道十郎後家りよ倅道之助差添人忠藏より願ひ出でたる訴狀面の廉により、再吟味の筋これあるに依つて、先達て召捕入牢の上此程より吟味を遂げさするに、いまだ白狀致さゞる由、依つて今日双方共呼出し突合せの上予が吟味を遂げるが、有體に申せ。

長庵　はつ、恐れながら申上げまする、先達て存掛けなくもお捕へに相成り、直樣入牢仰付けられましたる儀如何樣な事と驚き歎き居りまする中に、御呼出しに相成りお調べには、妹婿重兵衞を殺せしを私の所業であらうと度々の御詮議、此身に覺えない事は如何樣な拷問仰付けられましても、毛頭覺えござりませぬ。

左馬　豫て吟味に及べども存ぜざると申すのみ故、今日は予が直の調べ只一通りでは濟さぬぞよ。其方とても業體の事故聖賢の書籍を讀んだであらう、善惡は人の性によると云へど其元は善なるもの故、知らざるは知らざるとせよ是知るなり、過つて改むるは是丈夫のする所、胸にこたへのある事、絕體の其期に及ばゝ明白に申すが人の人たる所、是人倫の道ぢやぞよ。

長庵　此儀に付き何樣御理解仰せ聞けられまするとも、元より覺えのない事は斯波樣御役所にて右の一條お調べの砌、重兵衞が死骸の邊に捨てござりましたる目印の傘が道十郎所持の品故、全くの證據

と相成り疾に御詮議の上道十郎の所業と極り、明白なる御取裁にて一旦落着に相成り、私におきましては弟が敵を取りまして有難い事と存じ居りましたるに、唯今と相成り右様のお調を受けますは、何か私へ遺恨を差含みましたる者が、跡方もない取拵へを申上げましたやとも恐れながら存じ奉りまする。

りよ　あゝ算へて見れば三とせ後、其傘故夫道十郎も無實にて果敢ない最期を遂げました、其詮議の折とても常に無口な夫故、長庵殿が辯舌に鷺を烏といひくるめ、終に夫を無實に殺し、まざ／＼しくもあの樣に、

道之　幼少の私故其折の御調の場所へは參りませねども、後で母より委しく聞き何のやうにか口惜しく非業な最期は是非なけれど、侍の身にあるまじき穢れし汚名が晴らし度く親子二人が憂艱難、

りよ　明暮それのみ忘られず、神や佛へ祈りし甲斐に天道樣が親子の者を哀れみて、其お惠みにはからずも助けに依つて今度の御訴訟、親子二人が命に替へての此お願ひ、今長庵より申上げました傘は、夫道十郎が長庵方へ療治の禮に參りまして忘れて戻つた其傘にて、殺されし重兵衞とやらの死骸の側にあつた故、それを證據と言ひ立てられ、

道之　終に無實に陷りし父の汚名の晴れますやう、

りよ　どうぞ御慈悲のお裁きを、偏に、
兩人　願上げまする。
左馬　其方共が此一件願ひ出でたるに依つて、其砌差上置きたる口書、其外取調中の書物、殘ず斯波左衞門役所より受取り調置きたるが、なぜ其砌申開きは致さぬのぢや。
りよ　其節とても私が其申譯は精々申上げましたれど、長庵が申上げます事のみを眞實と思召して、御取上げにはなりますれど、此方より申上げまする事は一向に御取用ひはなく、片手打なる御裁きでござりまする。
長庵　これ〳〵婦人とはいひながら後前をも顧みず、口さがなくもよく其樣な事が言はれたもの、假初ならぬ天下の御裁、依怙の御沙汰があらう道理はない。全く道十郎が弟を殺し金を盜んだ故のことだ。
りよ　えゝ穢らはしい、何で夫がそんな事を、
長庵　假令何と言うとも其時申譯立難く、入牢の上の御吟味濟み既にお仕置と極つた所を、牢死したのがまだしも仕合せ、
りよ　さあ御吟味中牢死なされしが其身の不運、まだ明かに其罪と極らぬ中に果てたる故、それなり終

に悪名受け。

長庵　それはそつちの悪事の報い、それをさうとも思はずに今更何か拵へ事を企んで、御訴訟に附き此長庵を苦しめて殺さうといふ言ひ掛は、外に腰押する者が遺恨でもあつての事に違ひあるまい、天道樣がなくば知らず、落し穴へやらうと言つてもさう自由にもならぬもの。何卒此儀御賢察の程願ひ上げまする。

左馬　長庵よく承はれ、當三ヶ年前未の八月中百姓重兵衞が其方宅に止宿致し、金子を持參して麴町を出立致せしは、夜中の樣に承知したが何時であつたぞ。

長庵　へい右重兵衞が私宅を出立致しましたるは、其夜の七つ前とも存じましてござりまする。

左馬　金子を所持せし一人旅の者を、なぜ夜中に一人出立は致させた。

長庵　其お咎めで恐入りましてはござりますれども、私も其節見送りも致し遣はさうとの心組にござりましたれども、折節風邪にて臥せり居りまして、病家へも斷り他出も致し兼ねまする程、惡寒も烈しく殊に雨中の事と申し、何分步行なり兼ね實氣懸りにはござりましたれども、右の次第故是非なく見送りも致しませず、變事の後にて見送つたらば此歎きもあるまいと、只悔みましたる次第にござりまする。

左馬　それ程に思ふ義理ある弟なら、夜中は差留めて夜明けて後には立たせぬのぢや。

長庵　其儀も精々差止めましたれども、田舎者の一徹に申出した事は聞入れませず、夜中の旅も度々致せば心遣ひは決してない、最早仕度も出來たれば是非々々出立致すと申し、止事を得ず其意に任せ出立致させましてござります。

左馬　何樣左樣な事でもあつたであらう。今其方が申すには、風邪にて其夜他出は致さぬと申したな。

長庵　へい仰せの通り、重兵衛さへ見送りませぬ事故、一切他行は致しませぬ。

左馬　むゝ、いよ〳〵他出は致さぬな。

長庵　御意にござりまする。

左馬　その他出の相ならぬ者が、重兵衛が殺害されし其曉に、傘もさゝずづぶ濡に相なつて、何故近邊を步行致した。

ト是にてぎつくりこなしあつて、氣を替へ、

長庵　いえ、へい、左樣な儀聊覺えはござりませぬ。

左馬　いやさ、風邪にて惡寒厳しく他出致されぬと申す者が、其曉に限り、何故步行致したと申すのぢや。

長庵　存じも寄らぬ儀を承はりまするが、決して他出は致しませぬ。
左馬　いや其方も年限經つたる事故忘れたものでもあらうが、しかも當三ヶ年前未の八月廿五日曉の事ぢやぞ、篤と勘考致して見よ、覺えがあらう、どうぢやぞ。
長庵　恐れながら、何をもつてかやうな儀を仰せあるや、私におきましては、一圓相分り兼ねまする。
左馬　こりや長庵、此方をなじらうとて證據だてを申すな、其方で申さいでも、此方で其證據見せうわえ。それ、證據人を是へ呼べ。
○　はゝ。差添人忠藏を、是へ呼出せ。
△　はつ。(ト揚幕へ向ひ、)訴訟人りよが差添忠藏を召連れ召されい。
ト揚幕にてはあゝと聲して時の太鼓になり、花道より忠藏羽織着流しにて腰を屈め出る、後より町役人二人附添出て來り、直に舞臺へ來、下手へ控へる。町役人は後へ控へる。
□　差添人を召出しましてござりまする。
左馬　(思入あつて、)忠藏、それへ出い。
忠藏　へい、(ト前へ進み、道之助の次に住ふ。)
左馬　其方共が一件、今日長庵と突合せ申付ける間、豫て申立てたる通り、今一應これにて長庵へ申し

聞けい。

忠藏　はつ有難き仕合せにござりまする。これ長庵、人は知るめえと思つて居ようが、三年後の八月廿五日は御緣日だから、わしは猶よく覺えて居る、平河の天神へ心願で明六ツ前に日參の其日は大降、人顏もまだわからねえ明方に傘なしのづぶ濡を犬でねえも怪しいと吠えたを切つて行所へ、出合せたは此忠藏、東が白んでしつかりと見留めて置いた其夜の事、赤羽根の人殺し、目印の傘故に道十郎殿は入牢と聞き、こりやあ人違ひであらう氣の毒と御檢屍の下りた其時の樣子を聞いたら、こんたは其夜風を引き出歩きはしねえと云ふ書上げをした者が、變つた裝であの明方歩かう道理はねえ筈だが怪しい事と思ふ中、道十郎殿は牢死してそれなり落着、あゝ情ねえ事をしたと思つたばかりで日を暮し、丁度今年が三年忌、是も佛の導きかおりよ殿にはからず出逢ひ、今の始終を話したら、常日頃から長庵を怪しく思つて居た所故、さういふ證據がある上は彌々夫を無實に落し殺した敵の長庵を、討つて恨を晴さうと駈出す親子を漸やく留め、それ程思ひ込んだなら、これから御上へ願ひ出て敵を取るが上分別と、證據人に私が立ち親子の衆に願はせたは男を磨くばかりでなく、以前御出入屋敷故昔の恩を忘れぬ性根、かういふ慥な證據があつては、なんと脫れはあるめえな。只此上は御憐愍の御沙汰を御願ひ申上げまする。

りよ　今忠藏殿が申上げし通り、人殺しの其場所に假令傘がござりませうとも、非道な事を致す樣な道十郎ではござりませぬ、全く長庵殿が申掛にて以前御吟味の折柄も、あの辯舌に任せまして夫が申すも私が申す事も皆打消し、あれの是のと言ひくるめ、終に夫が無實の罪にて果敢ない最期を遂げたるが親子共殘念にて、どうぞ明りが立てたいと明暮心に絶えぬ折柄、思ひ掛なく忠藏殿に出逢ひて聞きし話より、女子の淺い心から一途に逸り、長庵を一太刀なりと夫の敵、

道之　幼年ながらも武士の伜、宅へ參つて名乘り合ひ討果さんと存ぜしを、

りよ　忠藏殿に留められ、以前のよしみに私共の差添人になりまして御訴訟申してござりまする。何卒御上のお慈悲をばお願ひ申上げまする。

忠藏　前後の次第を考へますれば、どうあつても長庵の所業の樣に存じられます。何と長庵、男らしく斯樣々々と申上げたがいゝではないか。

長庵　へゝゝ、誰だと思つたら貝坂で人宿稼業の忠藏か、證據といつてない事をある樣に拵へて、實しやかに言ひ並べ、此長庵を深い所へ埋めようとは意趣遺恨でもあつての事か、扨恐ろしい惡巧み、其明方に雨に濡れ歩いたなんぞとは思ひもつけねえ。そりやあ忠藏夢ぢやあねえか、此長庵に限つては少しも覺えのない事だ、何を馬鹿な。

○こりや長庵控へい、斯る證據人あつて申立てる儀を、其方は彼是陳じて、
□白狀致さぬ此上は、獄屋へ引いて拷問さすぞ。
兩人　それでも達つて陳ずるか。（ト兩人きつと言ふ、長庵思入あつて、）
長庵　へゝえ、憚ながらどの樣な假令責苦に逢はうとも、存ぜぬ事は申されませぬ。
忠藏　これさ長庵、そりやあ卑怯だ、世に惡事を働く者が一生知れずに仕舞ふなら御仕置になる者はないが、天知る地しる人知ると廻つて來るのが世に言ふ惡報、今度はどうで脱れはない此方の運の盡きたのだ、大館樣の直の御詮議もう言ひ拔ける事はならねえ、卑怯未練に期を延ばさず、是が惡事の年明と覺悟極めて言つてしまへ。
長庵　默れ忠藏、大館公の御前故言ひ度き事も差控へ、默つて居ればいゝかと思ひ、身に覺えない言掛を仔細らしく拵へて、其上卑怯とは誰が事だ、さういふおのれが大の卑怯だ。
忠藏　なに、此忠藏を卑怯とは、
長庵　おゝ卑怯でない事があるものか、此長庵が生きて居て邪魔になる事があるにもせよ、今の樣な言掛をして御上へ御苦勞掛けずとも、なぜ手短に殺してしまはぬ。男を磨く樣でもねえ、それだに依つて卑怯だといつたのだ。

忠藏　これ〳〵長庵、今こなたのいふのを聞けば、何か根に持つ事があつて、ない事をある樣に申立てた樣に聞えるが、此方に對し忠藏は意趣もなけりやあ遺恨もないわ。何卒御賢慮の程願ひ上げ奉つります。

左馬　長庵、今其方が申口では忠藏が其方に何か遺恨を含み、りよ親子が訴訟に就いて事を巧みし樣にも申すが、何か忠藏より遺恨を受ける覺えがあるか。

長庵　へい。其儀は是にて申上げまするも如何なる儀と差控へ居りましてござりまするが、元より彼に遺恨を受けまする覺えは毛頭ござりませぬが、りよ親子が御訴訟へ忠藏が差添ひまして御前に於て、只今の樣身に覺えない事を申掛け致しまするは、心得ぬ事と先刻より考へましたが、何心なく私が見ました事がござりますが、それを口外致さうかと斯樣な事にかこつけて、罪に落さう底巧み、お上を僞る横道者、憎い奴でござりまする。

左馬　ふむ。して、仔細と申すはどうぢや〳〵。

長庵　へい。其儀を申上げましては、何か私が人の非を申上げる樣でござりますれば、此儀は御免を蒙りまする。

左馬　如何なる事か苦しうない、人の善惡眞僞は元より何事なりとも聞きおいて、邪正を糺し裁斷する

は此方が役目、忠藏が其方を遺恨に思ふ事あらば有體に申せ、どうぢや。

長庵　再三のお尋ね故、人の非を訴へまするは私に於いて恐入りますれど、無據申しまする。餘の儀ではござりませぬ、忠藏りよ儀は道十郎存生中より密通致し居りましたる儀にござりまする。

左馬　何と、

長庵　以前同町に居りましたる故存じ怪しい儀も見受け、道十郎死後にも慥なる儀を私が見屆けましてござりまする。

ト皆々是を聞きびつくりなし、おりよは思はず前へ出て、

りよ　これ長庵殿、そりやまあ何を言ふのぢや、いかに口から出る儘とて跡形もない僞り事、肌身穢した覺えはない。元より我身も武士の娘夫に死なれて三とせ此方、貧苦の中に操を立て幼き小供を守り育て、どうぞ無實に死なれたる夫の汚名をすゝがんと、小供の世話と朝夕に神や佛に願籠めの外に他事ない貧しい暮し、石の上にも三年と念が屆いて此お願ひ、力と頼む忠藏殿と密通せしの何のとは、おのれの惡事の詰りから、人に惡名附けようとは、思へば〳〵極重惡人。

道之　母に限つて其樣な猥らな身持のない事は、朝夕側に居ります故、私が慥な證據、近所の衆の言は知れるにも貞女といふはお前の母、御大事に孝行せいと云はれます世間の噂をお糺しあつても、

れまするでござります。
長庵　いや口巧者にも言合せ、よくも其樣な僞りを申立て、此長庵をお上の御手で殺さうとは、扨々恐ろしい巧み事、もう此上は何もかも打明けて言はねばならぬ。只今申上げました兩人の密通を、慥に見屆けました故、此長庵を其罪に落さうといふ彼等兩人の惡巧みにござります。
左馬　して密通せしと申すには、何か證據があつての事か。
長庵　へい慥な證據がござります。あゝ近くは三月後の事、しかも麴町貝坂の天滿屋と申す料理屋の奧二階にて密會せしを、其夜其家へ參り合せ、小用所へ參らうと廊下を通りてはからずも、おりよ忠藏兩人と顏見合せて、其時見屆けましてござりまする。
左馬　こりや長庵、其方が申立て、只見屆けしとばかりにては、其證據には相成らぬぞ。
長庵　へい、見屆けましたばかりにては、證據には相成りませぬか。
左馬　如何にも相成らぬわ。
長庵　只見屆けしとばかりでは證據とは相成らぬと、只今仰せでござりまするが、しからば三ヶ年以前八月廿五日の朝忠藏が私を見たと申すも、見たのみにては證據にはなりますまいな。
左馬　おゝ、（トつまる思入、長庵せゝら笑ひ）

長庵　此儀いかゞにござりませうな。（トきつといふ、左馬之助思入あつて、）

左馬　流石は長庵道理あるその詞、予もほとんと感じ入つた、今そちが詞を證據となし、忠藏りよ兩人が密通せしと極らば、其方も忠藏が詞の如く、重兵衞を殺せしに相違あるまいな、どうぢや。

長庵　さあ、其儀は、

左馬　申開きあるか、

長庵　さあ、

左馬　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

左馬　長庵返答いかゞなるぞ。

長庵　へい、（トぢつと思入、左馬之助思入あつて、）

左馬　唯無證據の爭ひは、此處で取上げはないぞ、此上は双方とも、外に慥な證據になるべき品があらば是へ出せ。

忠藏　はつ、（ト忠藏懷中より旅日記を出し、）憚りながら此品が、密通致しませぬと申す、證據にござります

ト出すを、△より□へ取次ぎ左馬之助へ出す、取上げ見て、

左馬 ふう、こりや旅日記と相見えるが、是を證據と申立てるは、

忠藏 其旅日記の儀は、三ヶ月後會津樣の御供にて奥州へ參りましたる日記にて、只今長庵が申しましたも三ヶ月後と申しますれど、私旅行中の儀は右日記にて御賢察奉願上ります。

りよ 三月後には私も大病を煩ひまして、長屋の衆の厄介になりましたれば、兩隣を御詮議下さりますれば、相分ります。

左馬 ふう、忠藏は旅行致し、りよ儀は不快にてありしとあれば、如何致して密會せしか、長庵何を其方見留めしぞ。

長庵 さあ、それは、

左馬 猶密會せし證據があるか。

長庵 むゝ（ト詰りて俯向く。）

左馬 斯る言掛なすからは重兵衛を殺せしは長庵己れが所業であらう。速に白狀致せ、どゝどうぢや。

トきつと言ふ、長庵默然としてゐる。此時花道よりばたくになり、黑羽織の下役走り出て來り、

只今三次と申す者駈込み訴訟仕り、長庵一件に附き申上度き仔細ありと、達つての願ひ、此儀如何計ひませう。

左馬　おゝ長庵の儀とあるからは、直に是へ呼出だせ。

△　はつ。(ト向うへ向ひ、)訴へ人三次、是へ出ませい。

三次　はつ、(ト揚幕より三次着流しにて法被の下番附添ひ出て來り、おりよの上の所へ住はせる。◎口見やりて、)

○　長庵一件に附き、申上ぐる仔細ありと申立て、

口　當御役所へ駈込みし、三次とは其方か、

三次　へい、私めでございます。

左馬　三次面を上げい。

三次　へい。(ト手を突いて額を上げる。)

左馬　其方は何れに住宅致し居るぞ。

三次　へい、其住宅と申しましても、極つた所はございません。懇意に致す友達の所にごろついて居りますが、其中にも半月はあすこに居る長庵の所に、(ト言ひかけるを、長庵言ふなと目で押へる。)なに、隱すにやあ及ばねえ。大がいは長庵の家に寢泊りをして居りまする。

左馬　むゝ、して長庵一件に付き其方が訴へとは、

三次　人殺しがございますから、それを申上げまする。

○口 何と申す、

三次 此長庵が實の妹、赤羽根橋で殺された重兵衛が後家およそといふ者生かして置けねえことがあるから、三兩遣るから殺してくれと長庵に賴まれましたが、丁度其折工面が惡く、二朱の金でもほしい所故、およそを欺して家を連出し、淺草田甫で殺らしましたが、實は仕附ぬ仕事だから、薄氣味惡く其晩から何だか後が見られる樣で、其怨靈に取附かれ、誰いふとなく人殺しを世間の人が知つた樣子、どうで取られる命なら潔よく名乘つて出て、お上のお仕置受けるのがせめて此身の罪亡ぼし、又長庵が召捕られ惡事が露顯致すのも、みんな死靈の祟り故先非を悔いて、今日駈込み御訴訟申上まする。

左馬 ほゝお神妙なる其方が訴へ、惡黨だけによい覺悟、此上は長庵が惡事の條々申立てよ。

三次 申しますとも〳〵、殘らず申上げまする。

ト是を聞き、おりよ道之助、忠藏宜しく思入あつて、

りよ よい所へ此お方が御訴訟に出て下さんした、長庵殿の惡事の次第、

道之 親子の者を天も憐み給ふのか、

忠藏 脫れようとてのがれぬは惡事の報い、忽に手の裏返す今日の今、上の御沙汰を願ふのみ。

三次　これさ長庵、さう知らねえ顔をするな、默つて居ちやあ理が分からねえ。もう斯うなつちやあ仕樣がねえ、何もかも言つてしまへ己も人殺しせえしなけりやあ、まだ御息災で居られるものを手前に賴まれおそよを殺し、其怨靈に取附かれ、たうとう御上の御厄介だ、早く己が道連に友達甲斐になつてくれ。

長庵　汝が惡事に體が危ふく、日頃の恩も打忘れ、人を抱込む橫道者、妹を汝が殺しておいて塗付けようとはふとい奴、飼ひ犬に手を喰はれるとはよく言つた譬だな。

三次　此期になつて卑怯な奴だ、何もかも一つ懷のおれに迄不知をきるとは、こんたもよつぽど愚に返つたの、言はざあ己かいひ上げよう三年後に赤羽根で重兵衞を殺し金を取つたも、伊勢五の倅の千太郞から五十兩騙り取つたも、妹のおそよを殺させたも、此長庵が皆仕事。つまんだ所がこんなもの惡事の段々並べたらどうでも死なにやあならねえ體、立派に御上の御仕置受け、切られて死ぬのが罪滅し、己と一緒に冥土へ行きやれ。

長庵　手前はそんな惡事がある故、名乘つて出て御仕置を受けるが其身の勝手だらうが、此長庵は覺えのない事、其御仕置になられるものかえ。

忠臧　其身の惡事を懺悔して訴へに出た三次殿、一つ仲間で內幕を明けて並べて訴へても、罪に落ちね

え太い根性、

りよ　かほどの證據あるとても知らぬとばかり言張つて、重兵衞を殺しておいて、道十郎殿へ罪をぬり付け知らぬ顏なる憎い奴、づた〳〵に切りさいなんでも飽きたらぬ長庵。

りよ
道之　え〻悔しい事でござりまする。

長庵　お〻悔しからう〳〵が、おれが白狀せぬ中は此儘死んでも長庵を、うぬらが敵とは言はれぬぞ。

りよ　無實に果てし夫の敵、現在此處にありながら、

忠藏　手出しもならぬ此御白洲、

道之　思へば〳〵、

三人　口惜しい、（トきつとなり、悔しき思入。）

○　こりや〳〵、御前なるぞ。

○口　控へて居らう。

三人　は〻あ。（ト控へる。左馬之助思入あつて、）

左馬　假令長庵が辯舌を飾り、詞巧みに陳ずるとも、天下の御威光、此大館が白狀させ敵は取つて得させするぞ。

忠藏　身に餘つたる御慈悲のお詞、

三人　有難う存じ上げます。

長庵　責めらば責めろ、白狀して上の仕置を受けて死ぬのも、責殺されて死ぬのも五分だ。一分試しに切り刻まれても、言ふめえと思つたら、なに白狀をするものか、元より知らぬ人殺し、何のつけに言ふものか。

三次　これ長庵、まだ夢が覺めねえか、强情もいゝ加減にしろ、白狀しねえは立派な樣だが、己が口から白狀したのに、もう手前の罪は極つた、僅な間も痛い目をするのはたはけの行留り、おれも惡事の友達づれ、友誼甲斐に言つてやるのだ。

長庵　えゝやかましい默つて居ろ、白狀しねえと云つた日にやあ骨になる迄言やあしねえ、尻腰のねえ大だはけめ。

忠藏　まだしぶとくも言募る上を恐れぬ極惡人、

りよ　どうぞ御慈悲に彼奴を殺し、

兩人　敵をお取り下さいまし。

○口　こりや〳〵控へぬか。

兩人　はゝアい。（ト宜しく控へる。）
左馬　三次、其方は自身に其罪を訴へ出では、神妙なれども、人殺しの罪科はのがれぬぞ。
三次　へい、直訴致しますからは、人殺しの御仕置は覺悟致して居ります。
左馬　事落着致すまで、入牢申し付けるぞ。繩うて。
○　はつ。（ト○△宜しく三次に繩をかける。）
左馬　それ、長庵を引立てゝ拷問致せ。
○△　立たう。
　　ト是にて法被の中間兩人長庵を引立てる、同じく中間兩人は三次の繩を取り、兩人を引立てる。
　　兩人宜しく立上り、双方ちよつと顏見合せ、
長庵　へゝゝ、世間の人の噂には大舘公は名奉行、勝れた智者の仁者のと評判するのは大違え、己が目からは只の人間。あんまり褒めた人でもねえなあ。
三次　これ、お互ひにもう短けえ命、憎まれ口は未練だぞ。
長庵　やい三次、
三次　何だ、

長庵　地獄で逢はうよ。
下番　きり〳〵歩め。
　　ト時の太鼓にて、長庵は上手の潜りの内、三次は下手家體脇へ、下役人下番附添ひ入る。皆々是を見
　　送る左馬之助思入あつて、
左馬　こりや道十郎後家りよ、其外兩人、
三人　はあゝ。
左馬　長庵が惡事の次第三次が訴へにて事明白、重兵衞を殺せしは全く道十郎にあらざる事分明なる上
は、そち達が爲には長庵は敵故、嘸口惜しく殘念には思ふであらうが、天下政道の大法當人の口
より白狀致さぬ其中は、其罪に行ひ難し、今日は某が手段を以て長庵に白狀致させ、恨を晴ら
し遣はす間、暫時の間控へ居よ。
忠藏　重々厚き御憐愍、何卒お慈悲をもちまして、
りよ　三歳の間の艱難も今日を待つたる甲斐あつて、
道之　父の仇たる村井長庵、殺した修羅の妄執を、
三人　おはらしなされて下さりませ。

左馬　あゝ佞人の詞甘き事蜜の如く、人を害ふ事利劍にも勝れりと、憐むべきは道十郎、無實に死しても孝貞の妻子の爲に汚名も晴れん。

りよ　それといふのも忠藏殿が、俠氣故に願ひも立ち、

忠藏　御上の御威光あればこそ、長庵ほどの惡黨も、

道之　終には野邊に身を晒し、

りよ　鳥や獸にあさられる、

忠藏　天の御罰に引替へて、

道之　草葉の蔭にて父上は、

りよ　汚名も晴れて成佛あらん。

忠藏　ても有難い、

三人　お慈悲ぢやなあ。（ト三人宜しく思入あつて、大館を拜む。◎□思入あつて）

○□　一件殘らず立ちませい。

三人　はあゝ。

ト時の太鼓になり、おりよ道之助、忠藏町役人附添ひ殘らず下手へ入る。◎□思入あつて、

村井長菴

○　神田三河町久八一件、
□　殘らず是へ呼出し召され。
○△　はつ。
△　神田三河町家持五兵衞、富澤町又兵衞地借吉兵衞、飯田町萬助店六右衞門、煩ひに就き代與兵衞、
○　右五兵衞召仕久八、双方共に、
兩人　是へ出ませい。

ト上下にて、四人はあゝと答へ、上手より久八腰繩にかゝり、下番二人繩を取出る。下手より吉兵衞、五兵衞、與兵衞三人共羽織着流し、町役人六人羽織袴にて附添ひ出る。

下番　下に居らう。

ト是にて久八俯向き面目なき思入にて上手へ控へる。三人は久八を見て氣の毒だといふ思入にて、下手へ控へる、大館双方を見て思入、

○　千太郎養父五兵衞、同じく實父吉兵衞、久八伯父六右衞門代與兵衞、
□　五兵衞召仕久八、
四人　はつ。(ト皆々辭儀をなす。)

口　一同揃ひましてござりまする。

左馬　こりや五兵衞、其方が養子千太郎一昨夜日本堤にて、これなる久八が殺せしと名乘り出て、成敗願ふが、それに相違ないか。

五兵　はつ、御意の通り千太郎事は人手に掛り相果てましてござりまするが、久八が殺したるか、誰が殺しましたるか、其儀は存じませぬ樣にござりまする。

左馬　吉兵衞、其方は如何ぢや。

吉兵　はつ、私におきましては、久八が所業とは存じられませぬ樣にござりまする。奉公中にも千太郎を眞身も及ばぬ厚き世話、何故あつて殺しませう。是には仔細ある事かと、憚りながら存じられまする。

左馬　其方共が申す通り、内々取調致せしに、忠義の者と聞及ぶ、何故あつて千太郎を殺害なせしと尋ぬれど、いまだ其仔細を申さず、只主殺しの成敗に行ひくれよと彼が願ひ。

與兵　これ久八殿、なぜ仔細を云はぬのぢや、こなたの伯父六右衞門殿は此事を聞くと其儘びつくりなして足腰立ず、それ故わしが代りに出たが、千太郎殿を殺したは廓通ひの事であらう。なぜ其譯を言はつしやらぬぞ。

久八　それを露に言ふ程なら、斯ういふ事にはならぬわいの。
吉兵　(思入あつて、)すりや豫々噂に聞きし千太郎が廓通ひ、それ故こなたが殺せしとか、
五兵　包み隱さず其仔細、
與兵　どうぞ言うて、
三人　下さりませ。
久八　五兵衛樣、吉兵衛樣、お目にかゝるも面目なき久八が不忠の始末、嘸やお憎しみもござりませうが、主殺しの御成敗受けまするを、お腹いせにお許しなされて下さりませ。
左馬　そりや久八、其方が願ひなれど、千太郎を殺せし仔細有體に申さねば、刑罪には行ひ難し。さあ其仔細疾く申せ。
久八　仰せではござりますが、其儀ばかりは、
左馬　仔細を言はねば政事の掟、成敗には行はぬぞ。
久八　え、すりや仔細を申上げねば、御成敗は下さりませぬか。
左馬　いかにも、
久八　お是非に及ばぬ、此場の仕儀、

吉兵　さあ、早う仔細を、

久八　そんなら、どうでも、

左馬　さあ、有體に申せ、

久八　仔細と申すは私がいまだ主人五兵衛方に奉公致しをつたる砌、養子千太郎殿事質屋仲間の參會より吉原町に伴はれ、丁字屋の遊女小夜衣にふと馴染しが緣となり、身請をも致し度く、其小夜衣が實の伯父村井長庵といふ醫者に欺され、五十兩の金さへあれば身儘になると聞きしより、三次といへる者よりして質に取つたる短刀を他へ預けて五十兩才覺なせしも長庵に掠め取られし其上に、右三次より短刀を請けに來られて仕方なく、千太郎殿の越度をば此久八が引受けて、五十兩の其抵當に三十五兩の給金から二タ葛籠の衣類をば後へ殘して、請人の伯父六右衛門に引渡されいゝいゝしがない渡世を致しまするも、お主を大事に思ふ故、私不便と思召さば必ず廓へござるなと、堅く御異見申せしに、やはり廓へござると聞き、それでは御身の破滅と存じ、又も異見を加へんと日本堤に待伏なし、廓へござるを見た故に、歸るを待つて其晚は行きつ戻りつせし折に、氣絕なしたる人に躓き介抱なせば若旦那、仔細を問へば廓から、小夜衣を伴ひて逃げる途中で判方の三次に出逢ひ、小夜衣を連れて行かれし上からは、生きて居られぬ千太郎、そなたに逢ふも面目な

いと用意の脇差拔きはなし死なうとなすを止むるはずみ、此久八が過つて千太郎殿の脇腹へぐつと突込む急所の深手、呼べと叫べと情なや日本堤の露霜と消えてはかなき最期故、怪我とはいへど主殺し、御上の成敗受けざれば言譯立たぬ罪科に、我と我手に訴へ出で、御仕置受ける身の覺悟、仔細と申すは斯の仕儀。此事申し上げますれば、御法通の御刑罪、偏にお願ひ申し上げまする。（ト此中吉兵衞、五兵衞びつくりなす。大館も宜しく思入。）

五兵　やあ、そんなら短刀を持出せしは、千太郎であつたるか。さうとは知らず此方と思ひ、暇を出したのみならず、給金から衣類迄引留めたのは面目ない。

吉兵　なぜさういふ譯ならば、此吉兵衞に内々で打明けてはくれぬのぢや。さうした事なら此樣な間違にはなるまいもの。

五兵　それも今更返らぬ事なれば、只此上のお願ひは、人殺しとはいひながら、

吉兵　主人を思つてした事なれば、何卒命の助かる樣、お慈悲をお願ひ、

三人　申し上げまする。

左馬　すりや、久八は千太郎が遣ひし金を身に引受け、給金衣類を殘し置き五兵衞方を立退きしか。

與兵　御意にござりまする、則ち請人六右衞門方へ引取りましてござりまする。其後千太郎殿參られ、

後日の證據と久八に渡し置かれし借證文、

ト懐より證文を出す、○取つて□に渡す、□開いて大舘に見せる。

左馬　こりや久八より千太郎が五十兩借受けし、後日の爲の借證文、是にて慥な證據なるぞ。

久八（思入あつて）一旦罪を着た上は、若旦那が御家督を相續なさるゝそれ迄は、決して誰にも言ふまいと、人の笑ふも厭はずに、伯父が世話にて紙屑買、苦勞苦艱も昔語りと樂しむかひもなき身の上、あまりお主を思ひ過し、終に己が命迄捨てる樣になりましたは、因果な事でござりまする。

五兵　おゝ尤もだく、强慾非道と世の人に言はれるのも合點で、爪に火を燈すのも家の榮えを思ふ故、餘り己が吝嗇から斯ういふ事になつたるか。今日といふ今日目が覺めて、慾も得もいらぬわいの。

吉兵　久八殿の實親が聞かれたことなら、嘸や嘸、其歎きはいかばかり、我子をなくせし吉兵衞が身につまされて思ひ遣らるゝ。（ト吉兵衞五兵衞愁の思入。）

久八　其實親も何くの誰やら、知れぬ此身は捨兒の悲しさ、

左馬　すりや久八は捨兒とな、して何歳の時捨てられしぞ。

久八　はつ、養父久右衞門が話にて、成人の後承はりましたが、此久八が當歳にて藤川在の地藏堂へ捨てられましたと申す事。

吉兵（是を聞き吉兵衞びつくりして、）え、して、それは何年後にて、月日を覺えて居らるゝか。

久八　今年で丁度とる年も三十一年後にして、しかも極月十日とやら、

吉兵　それでは若しや守袋の中に、唐銅で鑄た觀世音と、九重の守りはなかりしか。

久八　いかにも仰しやる二品は、守の中にござりまして、親の形見に肌身放さず、

吉兵　扨はそなたは、（ト我子かと側へ寄らうとするを、）

左馬　こりや吉兵衞、待て、

吉兵　はつ。

左馬　捨兒は天下の法度なるぞ。

吉兵　はつ、（ト控へる大館腹痛の思入にて、）

左馬　あゝ折惡しくも先刻より、腹痛にて堪へ難い。

○　御不快とござりますれば、御裁斷は是限りにて、

□　久八一件の者共は、又候後して呼出しませう。

左馬　いや暫時休息致しなば、快くなるであらう。

○△　して、此者共は、

左馬　予が出席を待たせ置け、
○△　はつ。
左馬　其方共は次へ立ちやれ。
○△　畏つてござりまする。
左馬　（立上り。）こりや、暫時休息致す間、心置なう。
四人　はつ。
左馬　相待居れ。
四人　はつ、

ト辭儀をなす。大館先に◎□近習附き奥へ入る。○△下番は上下へ入る、皆々有難き思入にて。

吉兵　あゝお慈悲深い大館様、此場で親子の名乗りをせいと言はぬばかりの今のお詞、
五兵　えゝそんなら此方は、久八殿の、
與兵　若しや親御ぢやござらぬか。
吉兵　如何にも、わしは實の親、
久八　えゝ、すりや思ひ掛けないお前様が、

吉兵　おゝ三十一年後の事、藤川在の地藏堂へそなたを捨てたは己ぢやわいの。
久八　えゝ、（トびつくりなす。）
五兵　扨はいよ〳〵吉兵衞殿は、
與兵　久八殿の親御であつたか。
吉兵　絕えて久しき伜なるか。
久八　親父樣でござりましたか。
吉兵　年來懇意にしながらも、
久八　知らぬことゝて、
五兵　是はしたり。（ト兩人思入。）
與兵
五兵　して吉兵衞殿は都と聞いたが、以前は如何なる身の上なるか。
與兵　まだ當歲の幼兒を、何故あつて、
兩人　捨てられしぞ。
吉兵　話せば長い事ながら、此身の懺悔聞いて下され、この私は京の產れ、圓山近き邊りに住ひ、爰やかしこの寺々へ雇れて行く料理人、二十四の時女房を持ち間もなく出來し男の子、やれ嬉しやと悅び

し其甲斐もなく女房が、産後の悩に果敢ない最期、其所や此所やの貰ひ乳で、七本塔婆も忽に四十九日の忌も明き、里に遣るにも口はなく、是も此身の前厄と水兒を抱いて此江戸の知邊を便り下る道、乳に困つて仕方なくひもじい目をさせるより、いつそ捨てゝ拾はれたら、乳も澤山飲まれようと、子育と云ふ額を頼みに地藏堂へ其方を捨て、泣々江戸へ下つて後、誓願寺の出入となり、和尚樣のお世話にて其檀家の甲州屋へ入夫に入りて出來た子が、萬之助に千太郎、二人の倅を見るに就け捨てた其方が案じられ、何方にどうして居る事と、三十一年尋ねたる念が屆いて此樣に、名乘るは盡きぬ親子の緣、よう無事で居てくれたなあ。

久八（嬉しき思入にて、）神ならぬ身の露しらず、是迄他人と思うたるお前樣が眞實の、わしが親でござりましたか、あゝおなつかしうござりまする。

吉兵　親と云ふのも面目ない、西も東も辨へぬ水兒を捨てし此吉兵衞、また其頃は二十五の曉越さぬ身ながらも明暮心に掛りしが、世の譬にも言ふ通り親はなくとも子は育つと、如何なる人に拾はれて其方は人となつたるぞ。

久八　わしを拾うて下すつたは、藤川在の百姓にて久右衞門といふお人、それは〳〵兩親共可愛がつて下すつた故、眞實親身の親と思ひ、我儘言うて育ちましたが、忘れもせぬ七つの年寺屋へ上り、

いろはから段々子供に馴染が出來、動ともすると捨兒々々と大勢寄つてなぶる故、泣いて歸りて親達へ話せば二人も涙ながら、今日迄そちには隱してゐたが捨兒と人になぶられても仕方のないそなたの身は、七年以前十二月十日の晩に地藏堂で、拾つて來たる捨兒ぞと素性を聞いて恥かしく、其翌日からは子心にも何となく隔てが出來、寺屋へ行ても肩身が狹く、捨兒々々となぶられて、指を銜へて唾も返さず、泣いて歸るを親達も不便と思つて十二の年、こんな田舍で育つより江戸に己が弟の六右衞門といふ者が、それ相應にして居れば是へ賴んでやらうから、何れへなりと奉公して、人となつて歸つたら、いつか捨兒の名も消えて末始終がよからうと、捨てられた日の十二月十日を此身の誕生と、赤の飯で祝をなし、親子連立ち伯父樣の所へ便つて其年に、御緣あつて五兵衞樣へ十ケ年の年季奉公、不束な身を番頭に迄お取立て下されて、大恩のある其お家へ御恩も送らず剩へ、御難儀掛ける不忠な久八、三尺高く木の空で死ぬのがせめて申譯、別れ程經し親父樣に名乘るかひなき主殺し、餘計な御苦勞掛けまする。

ト宜しく思入にて言ふ、吉兵衞も思入あつて、

吉兵　今更言つて返らねど、千太郎が廓通ひを包隱さず打明けて、言つて呉れたら親の事、この難儀は掛けまいに、

久八　なまじ庇うたばつかりに、お爲を思つて異見も言ひ、終には怪我とはいひながら、現在主人を殺せし久八、

五兵　それも名乘つて見る時は、

與兵　千太郎殿は此方の弟、

吉兵　其兄弟と知れぬ故、かゝる事にも成行きしが、訴へ出ずば内々で、其方の科にはせまいもの、早まつた事してくれた。

久八　假令兄弟なればとて、主人は主人家來は家來、ましてそれと知らぬ前、お主を殺し家來の身で生きながらへて居られませうか。

吉兵　これといふのも、此己がまだ年若に後前見ず、天より授かる賜を捨てたる罰が子に報い、

久八　三十年來明暮に尋ねし親に廻り逢ふ、其嬉しさに引替へて、

吉兵　捨てる時より猶更に、悲しさまさる今日の仕儀。

久八　いつそ親子と名乘らずば、此お歎きはかけまいもの、

吉兵　そりや己よりも名乘らずば、其方にみじめは見せまいもの。

久八　これも定まる約束にて、切つても切れぬ親と子が、

吉兵　血筋にからむ捕繩に、
久八　草も枯行く秋の末、
吉兵　涙の雨の小止なく、
久八　晴れぬ目ぶたの重き科、
吉兵　野末の露と消え行かば、
久八　逆さまながら一遍の、
吉兵　おゝ（ト涙ながら手を取交し、）倅、
久八　親父樣、（ト顏見合せ、）御回向なされて下さりませ。
皆々　はあゝ、
　　トみなく泣く、此とたん奧にて「御出席」ト呼ぶ、是にて上下より○△出で來り、皆々も思入あつて、
久八　やゝ大館樣の、
四人　御出席とな。
○　双方共に、

兩人　控へて居らう。
四人　はあゝ。
　　ト控へろ、合方になり正面の襖を明け、大館先に近習刀を持出て來り、中央へ住ひ、
左馬　今其方共が物語、襖隔てし事故に、露には聞えざりしが、是なる囚人久八は、吉兵衛其方が實子
　　とな、
吉兵　左樣にござりまする、三十一年後藤川在の、（ト言掛けるを、冠せて）
左馬　百姓久左衛門方へ音信不通にて、養子にやりしか。
吉兵　はつ、（トいひ兼ねるを）
左馬　さうであらうな。
吉兵　はつ。（ト平伏なす。）
左馬　さすれば、久八千太郎は腹は替れど、吉兵衛が胤は同一の兄弟ぢやな。
吉兵　左樣にござりまする。
左馬　こりや五兵衛、其方千太郎を貰ひ受け、養子の披露致せしか。
五兵　はつ、先達て致しましてござりまする。

左馬　こりや〳〵五兵衛、何を申す、老衰致して忘れしか、いまだ披露は致すまいな。
五兵　はつ、
左馬　さうか〳〵。
五兵　はつ。まだ披露は致しませぬ様にござりまする。
左馬　養子の披露致さねば養子と云つて養子にあらず。これ久八、千太郎はそちが爲には主ではない、弟なるぞ。
久八　お詞ではござりまするが、假令私が弟に致せ、
五兵　これ〳〵久八、千太郎はほんの客分、表向の披露をせねば、此五兵衛が養子ではないぞ。
與兵　大舘樣のお詞に、主でないと御意あれば、めつたな事を言はつしやるな。
久八　さあ有難い御意ながら、主でなくとも人殺し、科は脱れぬ此久八。
左馬　それとても留めるはずみ、其方が突いたるか又千太郎が突いたるか、證據なければ分明ならず、人殺しとは言はれぬぞ。
久八　左樣ではござりますが、千太郎は私が、
　ト言ひかける時、ばた〳〵になり、下手より以前の忠藏出て、

忠藏　憚りながら其人殺しは、久八殿ではござりませぬ。

○　おゝ其方は、最前の人入れ忠藏、

左馬　して、是なる久八が人殺しでないと申すは、なんぞ慥な證據あつてか。

忠藏　はつ、千太郎殿横死の砌り、日本堤を通り掛り、思はず拾ひし此一通。（ト紙入より前幕の遺書を出し、）これ御覽下さりませ。（ト出す、◎取つて大館へ渡す。）

左馬　むゝ、こりや千太郎が先非を悔み、養父實父を初めとして、久八へも言譯なく覺悟極めし自殺の書置。

五兵　すりや千太郎は先非を悔み、

吉兵　死ぬる覺悟であつたるか。

忠藏　最前よりの一部始終、あれにて殘ず承はり他人なれども世に稀な忠義を感じて忠藏が、久八殿を助けたく思ふ折柄、禍も三年待たず拾ひし一通、役に立つべき證據故、お叱り受けるも合點で持參致してござりまする。

左馬　流石は物の頭ともなるべき程の器量あつて、仁心厚きそちが計らひ、よくぞ持參致せしぞ。

忠藏　はつ。（ト大館以前の證文を取つて、）

左馬　この書置と最前の五十兩の借證文、今引合せ見る所、寸分違はぬ彼が同筆、千太郎はいよ〳〵白殺、久八そちはお構ひないぞ。

久八　でも私が殺しましたれば、(ト言ひかける、大館きつとなつて、)

左馬　やあ大館左馬之介義晴が、裁許を破るか、無禮者めが、(トきつと言ふ、久八平伏なし、)

久八　はつ、恐入りましてござります。

左馬　それ、久八が繩目をゆるせ。

○△　はつ。(ト繩を解く。)

吉兵　大館樣の御慈悲の段々、

皆々　有難う存じ奉りまする、(ト嬉しき思入、ばた〳〵になり、奥より上手へ□出で來り、)

□　はつ申上げまする、怪我にて致せし事なるを、主殺しと訴出し久八が忠義を感じ、强情不敵の村井長庵先非を悔いて惡事の段々、只今白狀致してござりまする。

左馬　すりや、十兵衞を害せしと自身に白狀致せしとか。

□　はつ。

左馬　性は善なるものぢやなあ。

トばた〳〵になり下手より、おりよ道之助出で來り、

りよ　はつ、憚りながら村井長庵白狀致しましたる上は、

道之　何卒親の敵討、

兩人　御許しなされて下さりませ。

左馬　敵討は天下の法度、許す事相ならぬぞ。

りよ　え、すりや夫道十郎を無實の罪に陷れ、非業な死をば遂げさせし極惡人の村井長庵、

道之　正しく親の敵ながら、

忠藏　討つ事ならぬは御上の掟、是非もない儀でござりまする。

りよ
道之　はあゝ（ト兩人泣き伏す。）

左馬　こりや敵討は相ならぬが、貞女孝子の心に愛で、死罪の砌太刀取りを、道之助に申附けるぞ。

りよ　はつ、すりや太刀取りを倅めに、

道之　お許しなされて下さりますか。

忠藏　それにて敵を討つたも同然。

三人　有難うござりまする。

久八　もし御新造樣、御場所がらを憚りて何事も申しませぬが、嘸御本望でござりませう。
りよ　久八、そなたも科が許り、何より嬉しう思ふわいの。
左馬　是にて一件落着なせば、五兵衞事は老年故、千太郎が身代りに久八を養子となし、家相續を致させよ。
五兵　あ願うてもない其仰せ、老いても安心致しまする。
りよ　すりや久八には、五兵衞殿の、
久八　私家督となりますれば、お尋ねなさるゝ短刀は、親久右衞門が御恩送りに、あなた樣へ差上げまする。
りよ　あの短刀が手に入れば、御舍弟樣へ差上げて、
道之　父上樣の汚名も晴れ、
忠藏　猶行末は忠藏が身に引受けて、御世話致さん。
左馬　只不便なは十兵衞夫婦、伜が緣に小夜衣を吉兵衞養育致し遣はせ。
吉兵　はつ、身受致して彼が家名絶えざる樣に、私が計らひますでござりまする。
久八　あ、何から何迄大館樣の、

りよ　お情厚き御裁き、

皆々　有難うございまする。

左馬　あ惡は滅び、善は榮え、目出たい〳〵。

皆々　はあゝ、

ト皆々辭儀をなす、太撥の時の太鼓、カケリにて、

幕

村井長庵（終り）

[illegible]江戸小腕達引

元祿正德の昔〳〵神祇白柄よしや組武道を磨く角鍔の角だつ詞の行違ひ名に大鳥が道場へまけぬ木太刀の曙が一本まゐる喧嘩買遺恨の元は十三郎とお照が戀の詮議から姉の小磯が氣を紅裏甚三左吉も師匠とは白刄で振込む甚内へ勘當詫に片腕を切た誓もやぶれかぶれ故主の爲に喜三郎が浮世は夢か幻の異見も聞かで幼兒に書すいろはの書置もとがなくて死す身の覺悟命を捨にやる妻も蓼喰ふ蟲のすきやがし牡丹紅葉の行燈にこれ御ぞんじの男達

唯御贔屓力瘤

「腕の喜三郎」は文久三年八月、四十八歳の時市村座に於て書卸された。御所ノ五郎藏と共に先代小團次の演出した俠客劇の一である。小ぢんまりとして引きしまつた作で、よく清爽狷潔な男達を描き出してある。小團次の盛んであつた時代に、その女房役を勤めたのは四世梅幸菊五郎と先代尾上菊次郎とであるが、この作に於ける喜三郎女房おいそは、菊次郎の扮役中の傑作として傳へられてゐる、喜三郎宅の場に於ける弟の曙源太に對する異見ぶりなぞは小團次をも驚嘆せしめたと「俳優百面相」に述べられてある。殊に書卸しの當時好評であつたのは、喜三郎の子分に扮したのが、家橘、訥升、三津五郎、九藏等といふ當時人氣のあつた若手連を網羅して、それ〲にその特長を發揮せしめたにも因由してゐた。

書卸しの時の役割は、市川小團次（腕の喜三郎）、尾上菊次郎（喜三郎女房小礒）、市川團藏（神崎甚內）、市村家橘（曙源太）、市川九藏（幻長藏）、澤村訥升（二見重三郎、紅絹裏甚三）、坂東三津五郎（前髮佐吉）、片岡十藏（大鳥逸平）中村歌女之丞（甚內娘お照）、市村竹松（內甚悴甚之助）等であつた。

挿繪にしたのは龜戸豐國筆の錦繪である。

大正十三年十月　　編者誌す

古今大入

大繁昌

茲江戸小腕達引（腕の喜三郎――三幕）

序幕　神崎甚內道場の場

〔役名――腕の喜三郎、神崎甚內、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、二見重三郎、大鳥逸平、神崎甚之助、若黨正作、梅吉、蔦藏、村岡軍藏、横山大助、甘川栗平、長倉運八、鹽田伴藏。喜三郎女房お磯、甚內娘おてる等。〕

（神崎道場表の場）――本舞臺三間の間下手二階造り、屋根付白壁、この下三尺程中窓黑き格子、この內へ簾を掛け、窓の下黑き下見板、是に續き上の方に潛門の附し黑の冠木門、此上手黑塀、すべて神崎道場表の體。爰に門弟四人白の稽古襦袢、袴竹具足にて竹刀を持ち立掛り居る。焚出しの子分梅吉、蔦藏法被姿にて御膳籠を傍へ置き、詑つて居る。この模樣白囃子竹刀の音にて幕明く。

梅吉　別に何も私ども、あなた方の事を、惡く申したことではございませぬ。

蔦藏　好な道でございますから、此お窓から覗いたばかりでございまする。

梅吉　若しお氣に障りましたら、

兩人　御免なすつて下さいまし。
軍藏　これ、わいらは爰を何と心得て居る、踊や三絃の稽古所とは譯が違ふわ。
大助　我々共が粉骨碎心致し居る、劍術修業の道場なるわ。
栗平　汝ら如き下司下郎が、覗いて見ても役には立たぬわ。
運八　いはゞ盲目の垣覗き、それに只今聞いて居れば、何か我々共をさみなす樣子。
軍藏　やい、いつたいわいらは何れの奴だ。
四人　きり〳〵爰でぬかしてしまへ。
梅吉　誰もぬかさぬとは申しませぬ、私どもは數寄屋川岸で人入を致して居ります、喜三郎が子分の者でござりまする。
軍藏　なに、喜三郎が子分と申すか、なるほど、聞及んだる人入の喜三郎。
大助　其喜三郎といふ奴は、何か少しばかり劍術を心得て居るとのこと。
栗平　其子分故生利に、是が世にいふ譬の通り、
運八　生兵法大疵の元とは、彼等がことでござるて。
軍藏　やい〳〵、喜三郎の子分とあればわいらでは分からぬ、兩人の內一人は留置くから、分る奴を連

れて参れ。

梅吉　もし、そんな事をおつしやらずと、どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

軍藏　えゝ何をぐづ〳〵申すのだ、わいらでは分からぬ故。

大助　きり〳〵是へ連れて參れ。

四人　早く致せ〳〵。

梅吉　左樣なら別に迎へに參りませずとも、親分の弟の曙源太と申します者が、一緒に家を出ましたから、只今爰へ參りますが。

蔦藏　小頭が參りましたら、それにお掛合ひなすつて下さいまし。

大助　そんなら、その源太とやらは小頭か。

兩人　へい、左樣でござります。

軍藏　小頭と申すからは、少しは譯が分かるでござらう。

大助　源太とやらが參りなば、嚴しく談じ附けてやらう。

栗平　然らばそやつが參る迄、暫時是にて待合さん。

運八　早く是へ參ればよいが、まだ小頭の影は見えぬか。

兩人　まだ影が見えませぬ。

軍藏　待たるゝ身より待つ身の譬。はて待遠しい、

四人　事だなあ。

ト四人は向うを見込む。子分二人は下手に氣を揉む思入、此見得白囃子にて道具廻る。

（神崎道場の場）――本舞臺上手へ寄せて常足九尺の屋體、正面へ大形の襖、下手へ折廻し板羽目、是へ木太刀、竹刀、面小手など掛けてあり、ずつと下手杉戸、いつもの所門口、總て神崎道場の體。此二重に大鳥逸平袴裝一本差にて煙草を呑み居る。平舞臺に甚之助袴裝にて竹刀を持ち、伴藏半平稽古裝にて竹刀を持ち、甚之助と立合つて居る。此見得白囃子にて道具留る、とちよつと立廻つて甚之助兩人を打据ゑる。逸平是を見て、

逸平　いや、あつぱれ〳〵、流石は先生の御子息だけあつて竹刀の巧者、息込の樣子、なか〳〵年功の者も及ばぬこと、お年の行かぬお腕前には感心仕ッた。此上ともに御出精めされたが、ようござる。

甚之　なか〳〵以て未熟の私、大鳥樣のお褒めのお詞有難うござりまする。此上共にお稽古をお願ひ申し上げます。

伴藏　いつもながら、若先生のお手の内。

半平　恐入りまして、

兩人　ござります。

逸平　いやなに御兩所、何か御門前が騷がしいではござらぬか。

伴藏　なるほど、だいぶ騷々しい樣でござります。

半平　どうか傍輩どもの聲の樣子。

逸平　いかさま門弟衆の樣子ぢや、早く見てござらつせえ。

伴藏　然らば、見屆けて參るでござらう。

甚之　早くおいでなされ。

兩人　畏まつてござる。

ト下手へはひる、合方になり下手障子よりお照振袖娘の打扮にて、湯呑を茶臺へ載せ持出で來り、

お照　大鳥樣今日も御苦勞に存じまする。お茶が入りました、お一つお上りなされませ。(ト茶を出す。)

逸平　これは〳〵、お照殿のお手づからの、お茶の出花とは別段風味も格別でござらう、いや忝なう存じまする。

お照（甚之助に向ひ。）これ甚之助、重三郎樣が先刻から奥の座敷で、讀物のお稽古をして遣らうとおつしやる程に、願つて參つたがよいぞや。

甚之　左樣でござりましたか、只今門弟衆と稽古を致しをつたので、嘸かし重三郎樣にもお待遠でござりましたらう。左樣なれば大鳥樣御免なされませ。（ト奥へはひる。）

お照　どれ私も、（ト立上り。）左樣なら又後程。（ト行きかゝるを、逸平袖をひかへて。）

逸平　これはしたりお照殿、何も其樣にそは〳〵としてお出には及びませぬ。やゝともすると重三郎の傍にばつかり、拙者とても此道場に、只一人徒然でもござるし、ちとお話しなされてもよいではござらぬか。

お照　はい有難うござりまするが、私もあの、お歌の稽古を致しかけてをりますれば。

逸平　何と仰せらるゝ、歌の稽古をめさるとか。これお照殿よく聞れよ、歌などはなまめいたもので入らぬことでござる。武士の娘は武藝が肝腎、名におふ人に聞えたる神崎甚内殿の娘、長刀の一と手木太刀の遣ひ樣位は、御存じなくてはかなはぬこと、そこは身共が手を取つてやはらかに敎へて進ぜる。さゝ是へおいでなされ〳〵。

お照　いえもう有難うはござりまするが、劔術の稽古ならば、あなたに御厄介を掛けませずとも、お父

様に教へてお貰ひ申しますわいな。

逸平　何もさうすげなう申さぬものだ、親子の中ではかへつて我儘があつて覺えられぬもの。是非々々身共が教へて進ぜよう。

お照　いえ〳〵、それには及びませぬわいな。

ト ついと奥へはひる、此時お照文を落して行く事、逸平うつとりと跡を見送り思入あつて、

逸平　えゝ忌々しいあのお照、こりや一通りでは行かぬわえ。（ト思案の思入、このとき文に目を付け、取上げ見て）なに、重三郎様へ照より、ウム是で様子が分かつたわえ。此逸平が云ふ事を聞かぬも道理、此文だ、てつきり二人が様子といひ、ちゝくり合つて居るは必定、どうで女に彈かれるは敵役の當りまへだ、可愛さ餘つて憎さの譬、こりや一思案せねばならぬわえ。

ト 思入、此時ばた〳〵になり、下手より源太羽織着流し白足袋草履にて門弟六人に引立てられ、此後より幕明の子分付き出で、源太を舞臺眞中へ引摺る、逸平是を見て、

逸平　こりや門弟衆、仰々しい其體は何事でござる。

軍藏　はツ大鳥様お聞き下され、我々共が道場にて、試合を致すを表より差覗き、

大助　どちらが強いの弱いのと、蔑なす奴故此所へ連れて參り、

栗平　定めて我々共を難じるからは、心掛があらうと存じ、

運八　此道場にて我々が、相手になつて立合はうと存じ、是迄引摺つて參つてござる。

逸平　何と仰せらるゝ、あれなる若者が武士たる者の立合をば、蔑すとは憎い奴。

トきつといふ、源太前へ出て、

源太　あゝもし〳〵、それは私ではござりませぬ、あれに居りまする若い者が、何か麁相を申しましたとやら、一足後れて私が參つて見れば只今の仕合せ、取るにも足らぬ無骨者でござりますれば、何卒先生の御勘辨を持ちまして、御了簡なされて下さりませうならば、有難うござりまする。

逸平　して汝は何れの者で、住居は何れだ。

源太　へい私は數寄屋河岸で、お屋敷樣へ人入渡世を致しまする、喜三郎の身内の者でござりまする。

逸平　何と申す、すりや喜三郎が身内と申すか。

源太　へい、左樣にござりまする。

逸平　その喜三郎と申す者は、身共も兼々聞及んでをる、神影流の劍術に達し、町人風情の身をもつて子分の者に劍道の稽古をなすと承はる。定めしそれなる若者も、神影流を學びをらん、某是れにて見物致せば、それにて彼れと立合ひめされ。

軍藏　大鳥氏のお詞故、此場に於て我々が、
逸平　さあ立合はぬか、いやさ立上らぬか。
栗平　足腰の立たぬ樣、打つてく打据ゑくれるわ。
軍藏　きりくと、
皆々　立合はつせえ。（ト皆々きつといふ、源太迷惑なる思入あつて、）
源太　これは又思ひも寄らぬ其お詞、却々もちまして、町人風情の私共が、劍術の柔術のと存じませう樣がござりませぬ。此儀ばかりは幾重にも、御容赦なされて下さりませ。
軍藏　いや罷りならぬ、心掛があることは、我々共が存じて居るわ。
ト源太種々詫びる、門弟皆々無理に源太を前へ出す、兩人の子分口惜しき思入あつて、
蔦藏　こいつあよつぽど面倒になりさうだ。
梅吉　親分へ知らせて來よう。（ト兩人は逸散に下手へはひる。門弟皆々見て、）
皆々　あいつは當人だ、迯すことはならぬぞく。（ト皆々立上つて追つかけゆきに掛ゝる、源太是を留めて、）
源太　あゝもしく、なにも其樣にお騷ぎなさるには及びませぬ。あの者が迯げましても、私が是に居りますれば、あなた方の御恥辱にはなりませぬ。先づくお下にござりませ。

ト思入、逸平源太を見て思入あつて、
逸平　最前より見る所、落付きたる彼れが樣子、是非此所にて勝負致せ。
源太　そこを何卒御勘辨をもちまして。
逸平　いゝやならぬ、罷りならぬ。
運平　さあ立合ぬか、えゝきりきりと、
皆々　それへ直れ。（ト四人竹刀にて源太をむごく前へ突出す。此時奥より甚之助出て、門弟を留めて）
甚之　これはしたり、各方、如何なことでござる、只今奥にて承れば、あの者も只管わびて居る樣子、今日は父上もお留守の事、何れもにも了簡して、此儘許して遣はすがようござる。
逸平　いやいや甚之助殿、左樣でござらぬ、貴殿は何も存じた事ではござらぬ、打捨てお置下され。
甚之　左樣でもござりませうが、町人風情を其樣に。
逸平　町人と仰せられるが、町人故に猶了簡相ならぬ、身の程知らぬ不屆きゆゑ、もう貴殿はお口出しは御無用でござる。假令先生の留守にもせよ、道場を預かるは此逸平、門弟共の恥辱になれば是非とも勝負致させねば、武士道の一分が相立たぬわ。それ何れも、ぐづぐづと面倒だ、其奴を打据ゑしまはつせえ。

四人　心得ました。（ト四人一時に双方より打つてかゝろ、源太ちよつと留めて、）
源太　すりや、どうあつても私めを。
逸平　道場預かる大鳥逸平、刀の手前了簡ならぬ。
源太　是程お詫申しても、
逸平　くどいことだ。
源太　こりやもう、是非に及ばぬわえ。
四人　覺悟致せ。

ト四人竹刀にて打つて掛る。是を相手に矢張竹刀を持ちちよつと立廻つて、眞中にてきつと見得、是より十分立廻りあつて、四人を打据ゑ竹刀にて散々に打つ、甚之助よい氣味といふ思入にて奥へ行かうとする、此時奥より重三郎袴裝一本差刀を持出て、甚之助とちよつと囁き、甚之助は奥へはひろ、逸平此時飛んで出て、源太に拔掛ける、爰へ重三郎割つてはひり、逸平を留めて、

重三　先づ暫く、大鳥氏、
逸平　誰かと思へば重三郎殿、何故身共を留めさつしやる。
重三　さ、お止め申すも相手が町人、御成敗なされても、左のみお手柄にも相なりますまい。

逸平　ではござれども、憎い若者。

重三　先づお止まり下され、町人の身を以て、武士たる者に手向ひ致すにツくい奴。こりや町人、なぜお詫び申さぬのぢや。さゝお詫び致せ〳〵。

源太　へい〳〵重々の不調法、粗忽の段は幾重にも、御免なされて下さりませ。

ト詫びる、重三郎思入あつて、

重三　大鳥氏、あの通り詫びて居りますれば、もう許してお遣りなされ。未熟なるあの若者、何で貴殿と立合が、出來よう筈がござりませぬ。先づ〳〵お下においでなされませ。

逸平　えゝいくぢなしの素丁稚めが、此大鳥が微塵に致し呉れうと存じたなれど、重三殿が御挨拶故今日は差許す、えゝ命冥加な奴だわえ。

ト竹刀にて俯向いて居る源太の額を打つ、是にて額へ疵付く事、重三郎思入あつて、

重三　これ程拙者がお止め申すに、お聞入れなくあの者の。

源太　（額の糊紅を見て、）こりや男の生面を。

逸平　おゝ割つた、いかにも身共がぶち割つた。

源太　むゝ。（ト源太口惜しき思入、）

逸平　其面は何だ、えゝ面を見るも、小胸が悪いわ。（ト源太を蹴倒す、是にて源太きつとなつて、）

源太　もう了簡が。

ト立上る、重三郎これと留めるを振拂つて又立掛る、逸平も立上り刀に手を掛ける、此途端ばた〳〵になり下手にて、喜三郎「暫く〳〵」と聲を掛けながら、羽織着流し一本差し人入の頭の打扮、以前の梅吉、蔦藏付き出來り直に舞臺へ來て、源太を取つて引据ゑる。源太喜三郎を見てびつくりする、喜三郎皆々を見て、

喜三　これは〳〵何れも樣、御挨拶も致さず御道場へ罷りでまして、粗忽の段眞平御免下さりませ。これ源太どうしたものだ、お歴々樣のおいでの席で、立騷いで失禮千萬、日頃からあれ程噛んでくめる樣に、言聞しておくぢやあねえか。其裝あどうしたといふのだ。

源太　もし兄貴見ておくんなせえ。お歴々でも侍でも、斯う面へ疵を付けられちやあ、わつちやあ厭だ、了簡なりやせん。

喜三　えゝ又してもく〳〵己が言ふ事を聞かねえのか。（トきつと言ふ。是にて源太無念の思入にて控へる。喜三郎思入あつて、）へい〳〵何れも樣、失禮の段御免なされて下さりませ、私は人入渡世を致しまする喜三郎めにござりまする。何か召仕の者があなた方へ對し、御粗相を申上げましたさうにご

ざりますが、あれなる者が宿元へ知らせに參り、樣子を聞いてびつくり致し、取る物も取敢ず、宙を飛んでお詫言に罷出ました。どうか私にお免じ下され、御勘辨の程お願ひ申し上まする。

ト皆々に詫びる。重三郎思入あつて、

重三　すりや其方が喜三郎と申すか。

喜三　へい、不調法者にござりまする。

重三　拙者ことも仔細は委しく存ぜぬが、其方の召使の者が何れも方へ粗言を申したとやらで、大鳥氏が殊の外の御立腹、其方參りしこそ幸ひお詫言を申したがよい。

喜三　左樣なればあなた樣が大鳥樣でござりまするか、誠にはや申譯もござりませぬ。若い者が粗相御免なされて下さりませ。

逸平　すりや喜三郎とやら申すは其方か、これよく聞け、武士たる者の劍道はこりや表藝だぞ、其道場へ理不盡に踏込み、是なる門弟衆へ手向ひ致し恥辱をあたへし無禮なやつ、それ故身共が許さぬのだ。（ト云ふを源太前へ出て、）

源太　もし〳〵兄貴さういふ筋ぢやあござりやせん。二人の奴等が粗相をしたと六ヶ敷捻るから、わつちが詫をしてゐるを有無も云はずに出し拔けに竹刀を持て掛られちやあ、わつちも默つて居られ

ぬ故、無據お相手になつたのでござります。

喜三　あゝこれ源太、餘計な口をきかねえがいゝ、今更それを並べても水掛論といふものだ。假令何よおつしやらうとも、己がお詫をする程に、四の五の云はずと先へ歸れ。

源太　つまらねえ事を言ひなさらあ、お前を置いてどうして前へ行かれるものか。

喜三　何も案じる事はねえ、跡の始末は己がするから早く歸れ。

源太　それだと云つて。

喜三　（梅吉、蔦藏に向ひ）これ〳〵手前達は早く源太を連れて歸れ。

梅吉　おい〳〵小頭、親分があゝ言ひなさるからまあ歸んなせえ。

蔦藏　さうした方がよからうぜ。さあ〳〵歸らう〳〵。

喜三　まだ行かねえか。

源太　えゝ今歸りやす。

ト合方にて不承々々に立上ろ、子分兩人傍よりせり立てながら源太は後に心の殘ろ思入にて兩人附いて下手へはひる。喜三郎思入あつて、

喜三　扨早がさつな奴等、如何なる粗相を致しましたか、あいらが粗相は私の粗相も同然。幾重にも

お詫を申しあげまする。何分御了簡をお願ひ申しまする。
逸平　何と申す、子分の粗相は我粗相と申すか。
喜三　左樣にござりまする。
逸平　然らば今日理不盡を働いたは、喜三郎其方が業ぢやぞよ、子分の代りに此所で、身共と立合ひ勝負をさつせえ。
重三　大鳥氏の御立腹御尤もにはござれども、子分に代りあの樣に、喜三郎がお詫致せば、最早許して遣はされい。
逸平　いゝや許す事罷りならぬ、是非とも此場で勝負致せ。
喜三　どうぞ其儀は御勘辨の程を。
逸平　いゝや是非とも、そちが手の內を見ねば相ならぬ。
ト逸平だしぬけに竹刀を取り、喜三郎を打たうとする。喜三郎竹刀にてぐつと押へ付け、
喜三　これにお出遊ばす重三郎樣、お歷々の此中でお手向ひは恐入りますれど、お詫をなせどお聞入がござらぬ故、是非に及ばずお相手を仕りまする、御免なされて下さりませ。
重三　身共も詞を添へたけれど、御不承知の上からは其處へ十分、いやさ、十分に心を附けお相手致し

たがよい。

喜三　さあ大鳥樣、此竹刀を手に取りますれば、最う致方はござりませぬ。お望みの通りお相手仕つるでござります。

逸平　おゝさ、今の內言ふことがあるなら申して置け、今息の根を留めてくれう。

喜三　如何樣とも御勝手次第。

逸平　何を。

ト竹刀にてちよつと立廻り、倚兩人烈しき立廻りあつて喜三郎逸平の竹刀を卷落し打たうとする。此まへかた下手より、甚內羽織袴大小更けたる打扮、後より正作若黨の裝にて付添ひ出で來り、門口まで來て窺ひ居て、此時つか／＼と內へはひり、喜三郎を打据ゑる。是にて逸平は上手へ控へる、喜三郎びつくりなし、甚內と顏見合せ、

喜三　やゝ思ひがけなきあなた樣は、お師匠樣でござりましたか。(ト飛退いて平伏なす、甚內思入あつて、)

甚內　やあ師匠とは誰が事、其方の樣な無骨者を、弟子に持つた覺えはない。

喜三　へい／＼、まことに久々の事故お見忘れでござりませうが、私めは御指南を受けましたる、喜三郎めでござりまする。

甚内　見忘れたとは何の痴言、年罷り寄つたれどもまだ老耄は致さぬわえ。尤も先年喜三郎と申す弟子もあつたれど、身持が惡さに勘當致し、師弟の緣を切つたる某。よもその喜三郎は參るまい。其方とても町人の身を以て、我道場へ臑踏込み、大鳥氏と立合ふなどゝは、言語に絕えし痴け者、早く此場を歸りをらう。

トきつと言ふ、これにて喜三郎ぢつと思入あつて、下手へ行き控へる。重三郎前へ出て、

重三　先生には、お早いお歸りでござりました。

甚内　おゝ重三郎か、御上の御用も思ひの外早く相濟み、それより觀世音へ參り、大きに遲くなつたわえ。

重三　それは宜しうござりました。先生に異な事を伺ふやうではござりますが、只今あれにて承れば、あらはにそれとはおつしやらねど、あの喜三郎と申す者は、以前やはり先生の御門弟でござりまするか。

甚内　さあ、聞かつしやれ。餘人ならぬ其許ゆゑ、事の仔細をお話し申すが、彼は以前結城の藩中葛飾十左衞門が忰にて、幼少の砌より我門弟となり、わづか四五年の修業なれど、一を聞いて萬を知る衆に勝れし彼れが上達、行く〳〵はあつぱれなる遣ひ手に相ならんと、末頼もしく存ずる故、

神影の奥義迄も傳授なせしが、惜いかな身持悪しく酒興の上では喧嘩口論、其處で拔いたはかしこで切つたと、よからぬ噂、惜しき者故異見を加へ其心を撓直さんと種々制統はいたせども、持つたる病ひ性根も直らず、剰へ我手廻りの腰元と密通なし、女を連出し行方知れず、親父十左衛門殿も事の仔細を聞くより、元より堅き仁なれば直樣勘當、我も師弟の縁を切り勘當なせし其後は、音信不通に過行きしが、承はれば只今にては此江戸表にて人となり、達者で居ると聞きたるが、よくこそ無事で、（ト思入あつて、）是迄の汚名も雪がず、師匠の家へ臑踏込み、憎い奴でござりまする。

トきつと言ひながら愁ひの思入。

重三　初めて承はつた喜三郎殿の身の上、あたら業を持ちながら、あゝ惜しい事でござりまする。

喜三　（涙を拭ひ、）面目次第もなき仕合せ、あなた樣のお屋敷と存じますれば、何しに是へ參られませう。御表札もござりませず、殊には以前とお名前も、替りあれば存じませずに參りし粗忽、どうぞ御免なされて下さりませ。又あまへました事ながら、何卒御勘氣御赦免ある樣、偏にお願ひ申しまする。

甚内　許して遣りたきものなれど、今は叶はぬ、時節があらう。これ正作、早く彼を引出せ。

正作　はッ只今引出しまするでござりまする。さあとつとゝそこらへ、いやさ、其所らにをる事は相ならぬ、早く立つて行かつせえ。（ト引立てながら其處らへ行つて待つて居よといふ思入。喜三郎も何分頼むといふ思入。）さあ〳〵、早く立つた〳〵、な、おらが部屋で。（ト呑込ませる。）

喜三　左樣なれば、御機嫌宜しう。

正作　えゝ行かぬかといふに。

ト追立てながら思入あつて、喜三郎も心の殘る思入にて、下手へはひる。甚内思入あつて、

いや、馬鹿なやつでござるわえ。

重三　扨は以前は結城の家中、葛飾氏の子息にてござりましたか、あたら業を持ちながら、町人に致し置くは殘念な義でござる。

逸平　只今迄口をつぐんでお話を承はつたが、あの喜三郎とか申す奴、どれ程手練致したとて高が町人。素人の中ではどうか勝れて見ゆれども、其職には及ばぬもの、どの位の手の内か試し見んと思ひしに、師匠の歸りにそれもそれ限り、

軍藏　今一足お歸りが遲いなら、きやつの體は粉微塵、

大助　あの者の仕合せと申すもの、

逸平 然し立合にならいで、殘念な事でござつた。
軍八 惜しい事を致しました。
甚内 いや〳〵門弟衆、身共が日頃申聞かすはこゝの事、野夫にも功の者とやら、町人風情と侮つて恥辱を取るはまゝある事、某初め何れもにも劍道を心掛ける侍は、自分の用心慰みではござらぬ。皆主人への奉公、いで御馬前の一大事、といふ時こそ命を捨て御用に立てる。それ故習ひ覺える劍術、君に替るが武士の表、それをお手前方の樣にさゝいな事を咎め立を致し、先の相手が詫びればこそよけれ、相手に寄つては各方が、主君の爲に死す命を落す樣な事も計られず、武士たる者は愼みが肝腎、以來は町人百姓たりとも必ず人を侮どりめさるな、きつと申附けましたぞ。
ト逸平へ掛けて門弟を叱る。
門弟 以來は愼みまするでござりまする。
お照 (奥より出て來り、甚内の前へ手をつき、)お父樣只今お歸り遊ばしましたか。
甚内 おゝ今日も觀世音へ參詣致した故、思ひの外遲くなつた。
お照 それはよう御參詣なされました。
逸平 (前へ出て、)いやなに先生、只今仰せられます通り、某が不鍛錬故門弟共が恥辱を取りました。是

と申すも日頃より、拙者がお願ひ申す神影奥義の一卷を、身共へお讓り下されば、未熟ながらも喜三郎づれに不覺は取り申さぬ。是等の義を思召し、早速お讓り下さる樣お願申上げまする。

甚內　いかさま豫々貴殿が望なれども、彼の一卷は疾くより殿樣御懇望故、明日差上げねば相ならぬ、內見とても許されぬ、併し貴殿は奥義の卷は讓らずとも、我門弟數百人の內お手前の右に立つべき者はござらぬ甚內が一の高弟、我亡き後は殿樣へも、御指南も致さにやならぬ貴殿の身の上なれば、別に奥義を極めずとも、十分ではござらぬか。

逸平　なるほどそれは分りました、然し左程某を御賞美下さらば、奥義の卷の其外に申し受けたい物がござる。

甚內　其の望みと仰せらるゝは。

逸平　外でもござらぬ、御息女のお照殿を、どうか身共に下さるまいか。

甚內　何事かと存ずれば、照事でござるか。御存じの通り忰とても若年故、娘に婿をと存ずる折柄、丁度似合の緣組故、直樣應と申したけれど。

逸平　下されぬと申さるゝか。

甚內　いかにも。

逸平　傳授の卷は兎も角も、お照殿は逸平が枉げてお貰ひ申さねば相ならぬ。
甚内　そりや又何で。
逸平　師匠の恥辱を雪がん爲め。
甚内　何と。
逸平　疵がある故御息女を、それ合點で申し受けたい。
甚内　なに、娘に疵があるとは。（トきつと言ふ。）
重三（前へ出て。）これ〱逸平殿、師匠の娘に非難を付け、めつたな事を仰せられるな。
お照　なんで私に其樣な事がござりませう。言ひたいがいの出放題、お父樣の前ぢやとて樣子によれば聞捨にはなりませぬぞ。
逸平　それ〱、とぼけさつしやるなお照どの、又ぬつぺりと重三殿眞顔でなんと申さうとも、これなる二人は密通致してをりまする。
甚内　なに、娘が不義致しをるとは、それには何ぞ證據があつてか。
逸平　いや證據も證據此の一通、何と立派な證據でござらうがな。（ト以前の文を出して見せる。）
お照　どうしてそれを。（ト取らうとするを、）

逸平　どつこい、さうは參らぬわ。「重三郎殿へ照より、」しかも見事な御家流、是でもとぼけさつしやるか。（ト重三郎へ突付ける。）
重三　さあ、それは。
逸平　不義でないと申さるゝか。
お照　さあ、それは。
逸平　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
逸平　これぢやによつて娘御を、申受けるも師弟の情。
　　ト　これにて重三郎お照面目なき思入にうつむく、甚内もぢつと思入。
軍藏　お歌の稽古の、讀物のと、間がな隙がな戀歌の稽古。
大八　揚句の果が師匠の娘、疵物にした重三殿。
栗平　劍術稽古の道場で、木太刀や槍は手に持たず。
運八　竹刀で濟まぬ不義大罪。

軍藏　かの川柳點にも申す如く、知らぬは亭主ばかりなりと、御存じないは先生ばかり、
大八　數百人の門弟は、疾くより存じをりまする。
逸平　弟子の身として師匠の娘と、不義致しては相濟みますまい。いやさ、此成敗は如何でござる。
甚內　別に仔細も五さいもござらぬ、不義の成敗手討に致す。
逸平　すりや、あの、お照殿を。
甚內　親が手づから首討ちまするわ。
皆々　えゝ。（トびつくり思入。）
甚內　さあ娘、何も別には申さぬぞ。親たる者の目を掠め、いたづらひろぐ憎いやつ、覺悟致せ。
ト刀を持ちきつとなる。此時下手より以前の喜三郎出で來り、
喜三　どうぞ暫く、お待ち下さりませ。
甚內　そちや喜三郎、何故あつて是れへ參つた。
喜三　さゝ御勘當の身を顧みませず、申上げるも恐れあれど申上げねばなりませぬ。お孃樣のお命乞に罷り出ましてござります。
逸平　又してもく、入らざる所へ出しやばつて、控へてをらう。

喜三　いゝや控へては居られませぬ。御勘當は受けましても心は直な喜三郎。もし旦那樣、以前御家に居りました頃、お腰元の小磯と不義を致せし私、其節直にお暇賜はり、御勘氣受けて一命を、お助けありし先例もござりますれば、お二人共に御勘氣あつて、お命助けて下さる樣、偏にお願ひ申しまする。

甚内　いや／＼それは人の娘、我娘では助け置かれぬ。

喜三　さゝ不義は男女兩人の科、お照樣のお命斷ち、重三郎樣をお助けあらば、命助かりそれでよいと、さながら見てもをられますまい。又お二人共お手討になされて御法は立ちませうが、以前私小磯ともお助けありしことがあれば、重三樣につながつた御縁のお方があなたをば、不仁の仕方とお恨みなされませう。物辨へぬ私が何か理窟を申しまするも、詰る所はお孃樣又二つには重三樣、只お命が助けたさ。こゝの所を幾重にも思召し分けられて、喜三郎めが面を冠つて此お願ひ、どうぞお聞屆け下さりませ。（ト思入にて言ふ。甚内理に服したる思入にて、）

甚内　なるほどそちが申すのも一理ある申分、然らば二人が命を助け、勘當なして追放致さん。

喜三　すりや、私が詞を立て、お聞濟み下さりまするか、えゝ有難う存じます。又お二人樣のお身の上は、受けし御恩の送り所、何とぞ今日より私へ、お預けなされて下さりませ。

甚内　いや、其方はいまだ勘當許さねば、預ける事は相ならぬ。
逸平　然らば拙者にお預けなさるか。
甚内　いや、大鳥氏もあの照を執心ある故、是以て預けられぬ。
逸平　すりや、身共にも預けられぬか。
甚内　いかにも。
逸平　然らばどうとも勝手にめされ。（ト立上り、思入あつて、）何と何れも見さつせえ、不義働いた横道者、武士たる者の風上にも置かれぬ奴、身共などは歌俳諧は不得手なれど、武道一通りに於ては腕を磨く大鳥逸平、是より身共が宅へ參り、晝夜をわけず稽古が肝腎、門弟衆身が宅へお出でなされ。
軍藏　御同道仕つるでござりませう。あの樣な不義者などゝ同席致すと、武藝の穢れと相なりまする。
大八　左樣でござる。力の滿ちた此腕が、たるむ樣に思はれまする。
栗平　拙者なども最前恥辱を取りしも、不義者の影がさしたと見えまする。
運平　是より大鳥先生のお宅へ參つて、穢れた腕を清めませう。
軍藏　いかさま、それが宜しうござらう。

逸平　さ、門弟衆參らうか。
四人　先々お先へ。
　ト唄になり、逸平思入あつて甚内へちよつと默禮をして、いう〳〵と先に立ち、四人の門弟付いて下手へはひる。跡重三郎思入あつて、
重三　師匠へ對し今更に、申譯なき此身のしだら。
お照　先立つ不幸は、お父樣。
重三　御免なされて、
兩人　下さりませ。
　ト重三郎は刀へ手を掛け腹を切らうとする。お照は喜三郎の脇差へ手を掛ける。甚内喜三郎兩人を留め、
甚内　こりや早まるな、重三郎。
喜三　どうなされまする、お照樣。
甚内　疾くより二人がわりなき樣子、親ぢやもの知らいでならうか。丁度似合の年ばい故、女夫になして此跡を相續させんと思ひしも、今となつては詮なき事。

喜三　お孃様も御短氣なされず、假令御勘氣受ければとて、只蔭ながら親御樣へ、御孝行必ずお忘れなされまするな。

甚内　いやなに重三郎、斯くなる上は何をか厭はん、娘はそこ許に遣はす程に、足らはぬ彼が生れゆゑ、見捨てぬ樣に末長う何れへなりとも連退いて、仲好う二人添うて下され。

重三　えゝ勿體ない師匠のお詞、不義せし拙者をお叱りなく、

お照　仲よう添へとのお詞は、盡未來迄忘れませぬ。

兩人　有難う存じまする。

喜三　くどい樣ではござりますが、どうぞ此上お二人樣を、お預けなされて下さりませ。

甚内　いや〳〵生れ付いたる其方の氣早、心よからぬ逸平めが執心致す此お照、如何なる事をか仕出さん。左ある時は我名も出で、又二つには主人の恥辱、先刻よりも申す如く不義して勘當せし者に、預け遣りしと申されなば、武士の表が相立たぬ。

喜三　すりやお世話とてもなりませぬか。

甚内　そちが勘當許した上、預け遣りたいものなれど、今はどうも許されぬ。

喜三　あゝ是を思へば世の中に、義理に柵む武士の、

甚内　表を立てるも世界の義理。
重三　御勘氣蒙むる我々も、
お照　親子の緣につながる義理。
喜三　義理はせつない、
四人　ものぢやなあ。

ト唄になり、此仕組よろしく、道具廻る。と本舞臺元の門の道具となる。左右に柄杓の附し番手桶あり、宜しく道具留る。と、ばた／＼になり、花道よりお磯人入女房の打扮草履にて走り出で來り、直に舞臺へ來てほつと思入あつて、

お磯　嬉しや、まだ來ない樣子だ。家の人が此屋敷へ擒になつて居ると云つて、弟野郎の源太を初め後先見ずの若い者が、拔身を持つて出たといふから、譯も聞かずにつまらねえ間違でも出來た日には、名前目に掛はる故裏通しに駈けて來たが、一足後になつたと見える。あゝせつねえ、息が切れた。(ト番手桶の水を柄杓にて呑み、胸をさすりながら屋敷の內へ思入あつて、)屋敷の內はひつそりと、何にも譯のない樣子、爰へうつかり踏込んで、どんな間違にならうも知れねえ。(ト向うを見て、)お向うへ見えるは若い手合、爰に待受け、留めてくれう。

ト お磯肌を脱ぎきつと思入、ばた〳〵になり花道より源太、向う鉢卷尻端折縄襷拔身の脇差を持ち跣足にて出て來る、跡より甚三同じ打扮、左吉若衆鬘裾を左右で端折り、同じ打扮、長藏同じ打扮、皆々拔身の脇差を持出て來る、お磯花道へ行き、よき所にて留め、

源太 あこれ、みんな待つた〳〵。

源太 や、こりや、姐御には、

四人 いつの間に。

お磯 おめえ方が拔身を持つて、此屋敷へ行つたと聞き、先へ廻つて留めようと裏町を駈けて來たが、譯も聞かずに振込んで大事の命を捨てる氣か。良人が居てならいゝけれど、留守の內に間違ひがあつちや私が濟まねえから、白い黑いの分かる迄、まあ〳〵待つて下さんせいな。

源太 いゝや、姉さん留めなさんな、是が堅氣の商人なら引込んでも居られやせうが、牡丹紅葉の行燈より皆御存じの數寄屋川岸、喜三郞と云はれちやあ、子分子方も大釜で年中喧嘩の焚出しに、日に何俵と炊く飯も柔らけえもありやあ硬いもある、一粒選の其中で負けぬ生米の曙源太、こんなせりふも去年から古背鰹を熨斗替り燒いて喰ふとも煮て喰ふとも、片身はおろされ皮作り切刻まれるも合點で、兄貴の加勢に來たからは、お前も脫れぬ中落の、骨を拾つてくんなせえ。

甚三　腕と云はるゝ親分故、引けを取つちやあ歸るめえが、子分が聞いちやあ居られねえ。其所が勝氣な人入稼業、江戸は卅六見附旅は五十三次から六十九次宿々を、股に掛けても草鞋は穿かず仁王の樣な駕籠舁に、あうんの聲で擔がせる音に響いた達師の元締、其下請の血祭ァ赤いが名代の紅絹裏甚三、人より背丈は短かいが、生れ立から表裏袖ねえ事が大嫌ひ、襟垢のねえしらつ子だが向うが曲つたおくみなら、直に行かぬが産すな柄、ずた〳〵になるそれ迄ァ、五分でも後へは引きやあしねえ。

左吉　兄い手合に誘はれてお先眞つ暗向う見ず、前髪だてら色氣のねえ、よせばよいにと言はれるのも見て居られぬが生れ付、二の字繋ぎで賣込んだほんの親父の俤のみ、道中師でも箱根から先は何處やら双六の、畫で見たばかり知らねえが、江戸の内ぢやあ親分の光に輝く銀鎖、前金物は菊川の花も蕾の前髪左吉、心の裏座は横やすり根付の丸くいかねえのが、こゝが達師の子分だけ、細い煙管も天窓勝ち、へこまされちやあ了簡ならねえ。

長藏　四人の中ぢやあ年かさの手前迄が大人氣ねえと、叱られるのも合點で出掛けて來たは是迄に、寒の師走も法被一枚面肌に迄功を積み、太鼓が鳴りやあ足袋はだし振出す喧嘩の纏持、どんなあふりを喰はうとも後へ引かねえ我慢者、命知らずと云はれたも親分の手に付いてから、今ぢやあ小

ざしの頭分、親方とか馬方とか人に云はれる幻長藏、銀拵えの脇ざしも斯ういふ時に遣はにやあ、重い思えをするのは無駄、向うを殺すかこつちが死ぬか、血を見ぬ内あ歸られねえ。

源太　元より死ぬ氣で四人とも、

甚二　拔いた白刄の鞘を捨て、

左吉　水杯をして來たからは、

長藏　留めずとやつて、

四人　くんなせえ。

お磯　いゝやゝられぬやられねえ。家の人が居てならば引を取つては名の穢れ、死にゝ行くのも合點で行けとこそいへ留めやあしねえ、其所が達師の喜三郎腕といはれる其人の、私も小指になつたからは切つても切れぬ五本の內、假令源太が死なうとも愚痴や未練は言はねえ氣だが、留守にやつては私の粗相、斯うして出掛けて來たからは留まり難いは承知だが、喧嘩は人の留めるが花、爰は留つて私にも、花を持たして下さんせいな。(トお磯皆々を留める。)

源太　なんぼ姉御の詞でも、是ばつかりやあ留められねえ、元はおいらが喧嘩から義理ある兄貴を此屋敷へ擒にされた上からは、命を捨てゝも連れて來にやあ浮世の中へ面が出せねえ。

甚三　折角おめえの頼みだが、あゝして來たも人おどし姉御が留めるを幸ひに、歸つたなどゝ云はれちや

やあ、子分の者の名折となる。

左吉　どうで命を捨てる氣で、水杯迄して來たからは、遣る所迄やらしてくんねえ。

長藏　假令是がどうもつれ、組合初め江戸中の親分頭の厄介に、なればといつて此儘に、拔身を提げち

やあ歸られねえ。

お磯　それぢやあ私が是程に、留めても留まつてくれねえのか。

源太　他人と違つて眞身のおれが、先頭に居るから猶聞けねえ。

四人　留めずとやつてくんなせえ。

お磯　いゝやならねえ、行くならば、私を殺して行きなせえ。

源太　いらざる女の支へ立て。

甚三　邪魔をせずと、

四人　退きなせえ。

お磯　いゝや退かれぬ。

四人　えゝ面倒な。

ト源太先にお磯を掻退け行く、是にて千鳥に皆々かき退け舞臺へ來る。お磯も續いて來て四人をさゝへる。此内門の内より喜三郎出てびつくりなし、羽織を脱捨て、門の内へはひり竹階子を持つてツカツカと出て、四人を階子にて留め、

喜三 あゝこれ待つた、早まるな。

源太 や、お前は兄貴。

長藏 何でおいらを。

四人 留めるのだ。

喜三 いゝや留めにやあならねえのは、此屋敷へは芥子程でも、手向ひ出來ねえ譯があるから、おれが留めたら待つてくれ。(トこれにて四人思入あつて)

甚三 して此屋敷へ手向ひの、

左吉 ならねえといふ、

四人 其譯は。

喜三 さ、己も知らずに出掛けて來たが、此道場の主人といふは、常から話すおれが師匠、女房と共に數年來、御恩になつた神崎樣。

お磯　えゝ、そんなら爰は旦那樣の。（トびつくりなす。）

喜三　おゝ勘當受けて十何年、音信不通にお屋敷がこゝにあるとも露知らず、源太が喧嘩の挨拶にうつかり爰へ出て來たが、名乘つて見りやあ逸平と己とは同じ兄弟弟子、どうで遺恨は殘らうが表向ぢやあ師匠へ對し、向うも其儘歸つた譯、殊にやァおれが勘當も、まだ許しのねえ內は敷居の高い此道場、一本持つて行くどころか、面でも掛けにやあ入られねえ、それとも知らず手前達が向う鉢卷繩襷、眞劍勝負に來られて見ろ、竹刀の竹の折れる程おれが體を粉な〳〵に、ぶち殺されても濟まねえ義理、門弟頭の逸平へ遺恨を返すは後日の試合、負けるは勝だ此儘に、己と一緒に歸つてくれ。

トこれにて四人思入あつて、

源太　それぢやあさつき喧嘩をした、あの逸平は門弟頭、主人といふは兄貴の師匠か。

甚三　繫がる緣のおら達は、云はゞ孫弟子同然だ。

左吉　其處へ無闇に踏込んで、亂暴したら濟まねえ上、

長臧　定めて豪氣な手利ゆゑ、片ッ端から切られる所、

源太　いや、あぶねえ事で、

四人　あつたなあ。
お磯　（いゝ氣味だといふ思入にて、）大方こんな事だらうと、思つて私が留めに來たに、それも女と侮つて留めるも聞かずすんでの事、御門の內へはひる所、愚痴な事をいふ様だが、姉御々々と常不斷人に厄介を掛けながら、附合のねえお前方、辛いか甘いか知らねえが役に立たねえ女でも、先へ生れて居るからは惡い事は云やあしねえに、よく私をへこまして言ふ事を聞いてくんなさらなんだ。是からどんな事があつても、おめえ方のお頼みはもう聞かねえから、さう思ひなよ。

ト是にて皆々鉢卷を取り、面目なき思入にて、

甚三　さう姉さんに言はれちやあ、誠にこりやあ濟まねえ譯、ついあの時あ氣が立つて、折角留めてくんなすつたを、聞かなんだが惡かつた。
左吉　たゞ親分の身の上に、間違えでもあつちやあと、其處へばつかり氣が行つて、
長藏　實の所は目が眩み、何を云つたか知りませぬ。どうぞ堪忍して、
三人　おくんなせえ。
お磯　いゝえお前方の知つた譯ぢやあない、みんな源太が惡いからだ。
源太　おれが惡いとは、何が惡いのだ。（ト立掛るを長藏留めて、）

長藏　これ〳〵こつちが惡い、默つて居ねえか。
甚三　いえ、源太ばかりぢやァありませぬ、わつちらが惡う、
四人　ございます。
お磯　なに、私が惡いからさ。
喜三　これ〳〵お磯何をつまらねえ事を言ふのだ、おれが屋敷へ擒になり、若しもの事でもあらうかと、それを案じて此手合が、命をきりに出て來たのだ、もういゝ加減に言はねえか。
お磯　（つんとして、）それぢやあ私が留めずに置いて、屋敷へ遣りやあよかつたね。
喜三　えゝ又そんな皮肉を言ふか、留めに來たのは手前の手柄、又押掛けて出て來たは若い手合の親切だ。どつちがどうとも言えねえ譯、是が他人づくぢやあなし實の兄弟親分子分、濟むも濟まねえもあるものか、何にしろ最う半時早かつたらば枝が咲き、みんな命を捨てる所、怪我のねえのは神の助け、家へ歸つて身祝ひに御造酒でもあげようぜ。
甚三　今親分があゝ言ひなさるから、
長藏　それぢやお姉さん、
三人　お前も笑つて、

お磯　何の笑ふも笑はねえもあるものかね。
喜三　いや爰に長居は師匠へ恐れ、ちつとも早く。（ト皆々を見て、）といつた所が其装ぢやあ、往來中をみつともねえ、白刄を鞘へ納めねえか。
源太　みんな死ぬ氣で出て來たから、鞘は家へ置いて來た。
左吉　どうか仕樣はあるめえか。
源太　手拭へでも包んで行かう。
ト四人繩襷を取り手拭へ白刄を包み、腰へ差す。お磯思入あつて門へ向ひ拜み居る。喜三郎脱捨てし羽織を取り、是を着ながらお磯を見て、
喜三　これ、お磯何をして居るのだ。
お磯　さあ御門前迄來ながらも、行くことならぬ御勘氣故、せめて爰から申譯を、御恩になりし旦那樣へ、心でお詫をしましたのさ。
喜三　それも歸つて相談なし、どうかお詫の仕樣があらう。（ト氣を替へ、）さあ、手前達は先へ行け。
源太　そんなら兄貴、
四人　先へ行きやすよ。

ト甚三先に左吉、長藏、源太花道へ行く、跡より喜三郎うつかり階子を持ち花道附際へ行く、お磯是を見て、

お磯　お前それを持つて行くのか。

喜三　おゝ、うつかり持つて來た。（ト此時舞臺へ中間出て、）

中間　うぬ、喜三郎め。

喜三　何だと。（ト振返る。中間氣味惡く震へる。喜三郎腹を立つては惡いといふ思入あつて、）おゝいゝ所へ來た、是を持つていつて下ツし。

ト階子をはふる、中間受取り、階子を持つた儘見事に轉るを木の頭、四人こなたへ立掛り、

四人　あれは。（ト息込むを、）

喜三　これ。

ト制する、此見得宜しく引張の見得にて、

ひやうし幕

ト、幕引付けると、

さあ、行かツし。

ト腮で教へ四人いう〳〵と花道へはひろ。跡から喜三郎、お磯これを見ながら、

喜三　血の氣の多い奴ぢやあねえか。

お磯　ほんに、命知らずだね。

ト兩人話しながら花道へはひろ。後シヤギリ。

中幕

神崎屋敷の場
喜三郎内の場

〔役名――腕の喜三郎、神崎甚內、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、二見重三郎、大鳥逸平、甚內悴甚之助、若黨正作、喜三郎一子喜之松。喜三郎女房お磯、甚內娘おてる、子分、門弟等。〕

(神崎座敷の場)――本舞臺三間の間中足の二重、正面上手床の間、下手襖、上の方一間丸窓の附屋體、いつもの所枝折戶、下の方建仁寺垣、紅葉の立木、舞臺前四つ目垣、萩の下草、總て神崎座敷の體、爰に若黨正作、着流し一本差にて手桶を持ち水を打居る。傍に軍藏袴大小にて立掛り居る、唄にて幕明く。

軍藏　こりや正作、先生は何れにござる。

正作　今日は御休日故お骨休めに御居間にて、御療治をなされてゞござりまする。

軍藏　左樣でござるか、お丈夫な樣ではあるが、最早五十を過ごされたれば、日々多くの御稽古故お勞れなさる筈でござる。

正作　せめての事に重三郎樣が、おいでなされた事ならば宜しからうと存じまする、劍術よりは色事のお稽古が積みまして、お出入さへも叶はぬ仕儀、飛んだ事になりました。

軍藏　いや重三郎などがをつたとて、何の役にも立ちはせぬが、惜しいのは逸平殿、豫てお照殿に執心なれば早く婿にしめされて、此道場を讓られたら先生のよい片腕、お樂が出來るでござらうのに、元はと云へば先生の御了簡が惡い故、（ト此時奥より甚之助出て、咳拂ひをする軍藏びつくりして）いやさ、御氣分が惡いさうなが、先生は如何でござるな。

正作　いえ、何處もお惡くはござりませぬ。

甚之　軍藏殿、何ぞ御用でござりますか。

軍藏　いや別して用事もござらぬが、御近邊迄參りし故、お立寄り申したは、御休日を附込んで何か武邊のお話しを承はらうと存じまして。

甚之　それは折角のお出ながら、夜前より肩が凝り只今療治を致し居れば、御面會致されませぬ。

軍藏　いえ、今日に限りました事でもござりませねば、先生へ宜しう仰せ下されませ。
甚之　こりや正作、水を打つてしまつたら、風爐へ炭を致して置きやれ。
正作　畏りましてござりまする。
甚之　序に裏の花壇へ參り、がんぴを一もと切つてくりやれ。
正作　へえ、お投入でござりまするか。
甚之　圍ひの花を差替へたいのぢや。
正作　畏りましてござりまする。
軍藏　いや近頃は藥草などが、だいぶ流行致しますが、嘸御花壇は見事でござらう。
甚之　少し末にはなりましたが、まだ七草もござりまする。
軍藏　正作そちが參るなら、身共もどうか拜見したい。
正作　御案内致しませう。
軍藏　左樣なれば甚之助殿。
甚之　御ゆるりと御覽なされい。
軍藏　忝なうござる。

正作　さあ、斯うお出でなされませ。

ト唄になり、正作先に軍藏付いて下手へはひる。合方にて下手屋體より、甚内着流し一本差にて出來り。

甚内　悴、軍藏は歸つたか。

甚之　いえ花壇の草花を見たいと申し、正作と同道なし、裏の花壇へ參つてござる。

甚内　彼は逸平に懇意を結び、淫酒にばかり心奪はれ風韻のない無骨者、花壇の花を眺めんとは何か所存のあつての事。

甚之　大方左樣でござりませう。

甚内　療治中失敬故、對面を致さなんだが、御近習の伊織殿は、何用あつてござつたな。

甚之　夜前御寶藏へ盜賊入つて、先達て殿樣へ御獻上遊ばせし、神影極意の一卷が紛失致せし由、尤も心當りもござる故、窃に御詮議あるとの事、申置かれて歸られました。

甚内　ふむ、すりや、前夜紛失せしとか、あれは我師一神齋より傳來なせし祕密の一卷、一子相傳と思ひしかど殿樣頻に御懇望故、先達て差上げしが豫て逸平めが望み居り、讓りくれずば内見なりと許し呉れと頼みしに、口外なさんを憚る故内見すら許さゞりしが、若しやほしさの餘りにて。

甚之　すりや、逸平が一卷を。

甚内　こりや、(ト甚之助を止め、)正しくそれとは存ずれど、めつたな事は申されぬぞ。

正作　(下手より長き菓子折を持出で來り、)はツ、申上げます。

甚内　何事ぢや。

正作　只今お庭口へ、年の頃三十餘りの町家の妻が參りまして、旦那樣へお目通りをお願ひ申してくれと、斯樣な折を持參致しました。(ト件の折を甚内の前へ置く。)

甚内　なに、年の頃三十ばかりの町家の妻が參りしとか。して姓名はなんと申す。

正作　はツ、承りましてござりますが、お目通りを致しますれば御存じの者と申し、押返して尋ねましたが姓名は申しませぬ。

甚内　ふう、姓名を名乘らぬとか。(ト思入あつて、)苦しうない、是へと申せ。

正作　はツ(ト下手へ向ひ、)あいやそれにござる女中、旦那樣へ申上げましたれば、遠慮なく通りめされ。

お磯　有難うござりまする。(下手よりお磯世話女房にておづ〳〵と出來り小腰をかゞめ、)お許しなされて下さりませ。(と枝折戸の内へはひり下手へ控へ、)これは〳〵旦那樣には、久々にてお目見え致しまするが、以前に替らず御機嫌宜しう、お目出たう存じまする。

甚内　さういふお身は誰なるか、某も老衰致し昨日の事を今日忘れ、殊に眼氣が薄い故、面さへ見分かぬが、お身は誰であつたな。

お磯　それにお出遊ばします、若旦那樣がお五つのお祝迄居りました、お出入の乘物屋七右衞門が娘、磯めでござりまする。（ト甚内思入あつて、）

甚内　なるほど十ヶ年程後の事、左樣な召使があつたれど、若氣の至りといひながら、葛飾喜三郎と申す我門弟と密通なし不奉公致せし故、勘當なして音信不通許しもなきに其者が、よもや是へは參るまじ、察するところ其磯が、身寄の者でがなあらうな。

お磯　左樣仰せござりましては、申上げ樣もござりませぬが、據ないお願ひ故お許しもない御屋敷へ押して上りし不束も、今となりては後悔に、何時ぞはお詫を／＼と、思ひの餘りお叱りも顧みませず十年振り、此お目見得がしたさゆゑ、お許しなされて下さりませ。

甚内　磯は元より身寄でも勘當なせば緣はない、如何なる願ひか知らねども、聞屆ける事罷りならぬ。

お磯　お詞返すは恐れあれど、最早十年立ちますれば、何卒お慈悲を持ちまして。

甚内　十年立たうが百年立たうが、勘當許さぬ其内は目通りならぬ。左すれば只今持參せし、此品とても受けられぬ。それ正作此折を戻し、早う去なしてしまへ。

正作　はツ、畏りましてござりまする。これ女中、旦那樣があの樣におつしやれば、幾ら云つても無駄な事だ。殊に此間も現在こなたの夫喜三郎殿が種々歎いて頼んだが、それでさへも叶はぬお詫、無駄な事だと諦めて、さあ〳〵早く行かつしやい〳〵。

お磯　すりや、お目見得は叶ひませぬか。

正作　はて其身の科だ、仕方がない。

お磯　はあゝ。

正作　さあ、爰にはかなはぬ立たつしやい。

　　トお磯是非なく枝折戸の外へ出る。正作戸を立て、枝折戸の傍に控へ居る。お磯正作に向ひ、

お磯　申し、其處においでなさりまするお方樣は、御存じござりますまいが、私は其以前こなたに御奉公致して居りましたが、ふとせし心の間違ひより、お弟子内の喜三郎と不義をなし、既にお手討にもなりまするを、旦那樣のお慈悲にて命をお助け下されて、二人共の御勘當お詫の仕樣もなき故に、知邊を頼りて夫婦となり、人入稼業致せし所以前お敎へ下されし劍術が役に立ち、仲間の衆が弟子になり、喜三郎は勝れし腕強い腕ぢやと賞美され、自然と人にも用ひられ、只今にては渾名をば腕の喜三郎と申しまして、此江戸は申すに及ばず、京大阪迄人樣に知られまするも誰が

お蔭、お師匠樣のお蔭故どうかお出入のなります樣、神や佛へお願ひ申せど、橋なき所へは參られませず、どうがなしてと思ふ折柄、先達て喜三郎がお屋敷へ上りまして、宿へ歸りて申しまするに、久々にてお師匠樣のお替りもなきお顏を拜し、一言でもお詞をお掛けなされて下さりましたれば、是で死んでももう己は、思ひ置く事がないと、涙をこぼして悦びましてござりまする。それを承りましてより私が心の內、少しも早う上り度く、御勘氣御免のない所へ押して上りましたのも、絕えて久しき旦那樣のお顏を拜したさ故、どうかお前樣からよい樣に、お執なしをお願ひ申しまする。

ト宜しく思入あつて言ふ、正作も氣の毒なるこなしにて、

正作　段々聞けば尤も至極、然し今が今と申す譯にも是は行くまいから、折を見て、若旦那樣迄お願ひ申して置かうから、まあ今日は歸つたがよい。

お磯　はい〳〵。（ト歸り兼ねる思入、此內甚內本を見て居る。甚之助思入あつて）

甚之　父上、お聞きなされましたか。

甚內　おゝ書見に心奪はれて、何か申す樣であつたが、とんと身共は聞かなんだ。

甚之　先非を悔いての彼が身の詫、あなたにお目に掛りたいと、只管願ひ居りますれば、出入なすは兎

も角も、お逢ひなされて遣はされては如何でござりまする。

甚內　されば逢うてやりたいものなれど、一つの功の立たざる內は勘當は許されぬ。さすれば對面も叶はぬ事ぢや。いやお照がをらねば奥が無人、悴そちは奥へ參れ、又正作は玄關へ參り、取次を致しやれ。

正作　畏りましてござりまする。

甚之　左樣なれば父上樣。

甚內　是へ誰も參らぬ樣。

甚之　心得ましてござりまする。

ト唄になり、甚之助は奥へ、正作は枝折戸より下手へ行掛るを、お磯袖をひかへ賴むを、正作其處に居たがよからうといふ思入あつて下手へはひろ。甚內四邊を見廻し、お磯に向ひ、

甚內　こりや、磯。

お磯　はゝ、はツ。（ト嬉しき思入にて枝折戸を明け、內へはひらうとする。）

甚內　あ、こりや〳〵勘當許さぬ其內は、表立つては逢はれぬぞ。矢張其儘枝折を隔てゝ、餘所ながら逢うて行きやれ。

お磯　有難うござりまする。

甚内　斯う我強くは申す物の、我とても最早五十路又忰事は若年故、誰ぞ力になる者と數多ある門弟内誰彼と指折れど、是ぞといふ者もなく、あゝ喜三郎が居たらばと心に思ふは幾度か、勘當なして十ケ年が其間音信不通に致せども、我子も同じ弟子の事思ひ出さぬ日はなけれど、不義せし者を故もなく許し難きが武士の表、宿所へ歸らば此趣き、喜三郎に申し聞かせよ。

お磯　其仰を喜三郎が承りました事ならば、嘸悅びますでござりませう。若い時には仰有る通り人に負ける事が嫌ひで、よう喧嘩を致しましたが、それも次第に取る年と二人が中に子供が出來、一年增に堪忍なし、只今にては其身より人の喧嘩の中へ入り、濟み濟ませをする程におとなしうなりましたれば、どうか御勘辨下さりまして、二人の者の御勘當お許しなされて下さりますやう、偏にお願ひ申しまする。

甚内　いや〳〵それは僞りぢや、假令相手は何人でも、喜三郎が一人行けば喧嘩に引けを取らぬ故、強い腕ぢやと人より褒め、今腕の喜三郎と異名に呼んで俠客の頭分とやら。あゝいまだに心が直らぬかと、歎はしう存じをつた。それゆゑ勘當は許されぬ。

お磯　隱す事程顯るゝと、其事が旦那樣の、お耳へ入つてござりますか。

甚内　おゝ惡事千里と世の譬、其根性の直らぬ内は勘當は許されぬ、以來は必ず詫を致すな。
お磯　すりや、其心が直りましたら、お許しなされて下さりまするか。
甚内　おゝ心さへ改めなば、我片腕ともなるべきもの、勘當は許しくれる。
　　ト此時下手より喜三郎羽織着流しにて、下手へ控へ、
喜三　はッ、御勘氣御免下さりまして、有難うござりまする。
甚内　や、そちは喜三郎、扨は疾より。
喜三　先刻よりあれに控へ、委細の樣子承はり、多年の願ひ叶ひまして、大慶至極にござりまする。
　　ト此時下手より、軍藏出て窺ひゐる。
甚内　然し、以來喧嘩を致さぬ樣、しかと心を改めねば、勘當は許されぬぞ。
喜三　はッ其仰は御尤も、此程はからず御目にかゝり有難い思召しを承はつて私も、決して喧嘩は致すまいと只堪忍の二字を守り、向後心をすつぱりと改めましてござりまする。
甚内　すりや心を改めしと申すには、何ぞ慥な證據あつてか。
喜三　いかにも、それに一札替り、慥な證據がござりまする。
甚内　して、其證據は。

喜三　只今女房が持參せし土産の品、御覽下され。
甚内　なに、此品が證據とな。（ト折の蓋を明けびつくりなし）やゝ、此片腕は。
喜三　神影流の極意を極め、假令十人二十人白刃を振つて參るとも、びつくりともせぬ喜三郎、是と申すも師匠のお蔭、所へ持つた負けぬ氣で、是迄數度の喧嘩口論、其荒氣をば止めざれば御勘當は許されませぬと、身に染み〴〵との御教訓、是非に及ばず幼年より、御指南請けし此腕を。（ト腕まくりをなし、切口を見せ）御覽の如く切つたれば、假令土足に掛けられても、只堪忍の二字を守り荒氣を出さぬ一札替り、是を證據に御勘氣を、御免なされて下さりませ。
甚内　ほゝお、流石は以前が結城の藩中葛飾氏の子息とて、あつぱれなる其誓言、有無を申さずそち達が、勘當は許したぞ。
喜三　すりや兩人が御勘當、
お磯　お許しなされて下さいますとか。
兩人　えゝ有難うござりまする。（ト兩人嬉しき思入）
甚内　最早誰に遠慮もない、是へ〳〵。
兩人　御免なされて下さりませ。

ト兩人嬉しき思入にてはひろ、軍藏うなづいて下手へはひろ、よき所へ兩人控へ、

喜三 先づ改めまして、あなた樣にもお替りなく、御健勝にて、

兩人 お目出たう存じまする。

甚內 そち達も無事で重疊。あゝ我身の老になるは知らず、以前に替つて二人とも、よい年配になつたな。今承はれば子供が出來たといふ事ぢやが、女子か男子か。

喜三 へい、男子でござりまする。

甚內 それは何より、して何歲になるな。

お磯 はい、七つになりましてござりまする。

甚內 おゝ、最早七つの子持になつたか。

喜三 月日の立つは早い物にて、御勘氣を受けましてより、最早十ヶ年になりまする。

お磯 旦那樣には其時に、さのみお替りはござりませぬわいな。

甚內 心に替りはなけれども、餘程加減が違つて來たて。それといふも賴みに思ふ倅は若年、又姉は知つての通の不埒故、捨て仕舞ひは仕舞ふものゝ、血を分けた親子の情合、つい心配を致す故、餘計に體へ障つてならぬ。

喜三　御尤もにござりまする、是も世間にない事でも、いや、眼前に私夫婦がお目を掠めし身の不埒、隨分覺えもござりますれば、せめて少しの御恩送りに、お照樣のお身の上どうがなしてと存じますれど、表立つてお世話もならず、それ故女房と申し合せ、

お磯　お乳を上る時分より、お傍に居つた此小磯、何御遠慮もござりませねば、不奉公せし申し譯お世話を致したうござりますれば、どうぞお預けなされて下さりませ。

甚內　おゝ勘當許せば何が扨、以前に替らぬ師弟の仲、そち達が申さずとも此方より、賴みたい娘が身の上、年は取つても懷子、又重三郎とてもその如く、屋敷育ちの世間見ず、なか〳〵誰ぞ後見がなうては町家の住居はならぬ。一人は娘一人は弟子二腰帶する刀の手前、强い事は申せども案じられるは親心、何分ともに世話を賴むぞ。

喜三　其お賴みがござりませずとも、私といひ女房とも、

お磯　年頃受けし御恩返し、

甚內　疾より世話を致しくれるか。（ト兩人ぎつくり思入あつて）

喜三　すりや旦那樣には、

兩人　其事を。

甚内　頼る方なき二人の者、さこそあらんと推量致す。

喜三　御推量の上からは、何をお隱し申しませう、あの砌より私方へお伴ひ申しまして、お世話は致しますれども、御勘氣御免のない内はと、あなた樣へ憚りましたが、

お磯　早速御勘氣御免下され、表立つてお孃樣をお預けなされて下さりまして、是で世間の肩身も廣う、暑さ寒さの御機嫌伺ひ、お出入が出來まして、こんな有難いことはござりませぬわいな。

甚内　いやそち達よりもこの甚内、喜三郎の勘氣を許し、元の師弟となる上は誠に身共のよい片腕。（ト腕へ思入あつて、）身共が我強さばつかりに切らせたる殘念さ、此程勘當ゆるしなば、そちを片輪にせまいもの、此甚内が一生の過り、許してくれよ、喜三郎。

喜三　あ勿體ないことおつしやりませ、其腕のある時は愼みますれど勝に乘り、つひには此身を果します、切つたは丁度身の仕合せ。

お磯　是で生涯私迄、無事に月日が送られまする。

喜三　御勘氣御免のある上は、また元々のあなたのお弟子。

お磯　私事も以前に替らず、磯や斯うせいあゝせいと、

喜三　御用の節は御遠慮なく、

お磯　お遣ひなされて、
兩人　下さりませ。（ト此時時計の音する、喜三郎思ひ入あつて、）
お磯　内の留守は長藏に、言附けて置いたれど、
喜三　お孃樣がおいでなされば氣掛りでならぬ故、もうお暇申さうではござんせぬか。
ト喜三郎の袖を引き小聲で言ふ。喜三郎うなづき、甚内に向ひ、
喜三　餘り早速にはござりますれど、留守中を案じますれば、
お磯　最早お暇、
兩人　致しまする。
甚内　然し、此の儘歸すも殘念、喜三郎ちよつと待つてくりやれ。（ト床の間に飾りありし桐の箱を持來り、）改め云ふには及ばねど、人間一生愼むべきは慢心の一つなり、我壯年の折劍術にておさ〳〵人に負けざる故若氣の至り慢心なし、諸國修業に出でたりしが、暫く上州に足を止め、夜陰に登山をいましめし榛名山へ參詣なせしに、山上に於いて六七人の修驗者に出合ひ、武邊の爭ひより立合なせしが首尾よく彼れを打伏せしに、其長と見え丈拔群なる修驗者顯れ出で、いざと聲掛立合ひしが、電光石火の早業に、木立刀を卷かれ打据ゑられ、思ひがけなき不覺を取り初めて我身の

未熟を知り、拙き業を誇りし故、正しく天狗のいましめなりと悟りし故に恥辱を捨て、先非を悔いて詫びければ、よくこそ改心なしたりとて、彼の修驗者が某へ、右劍左劍と名附けたる二卷の祕書を讓られたり、今關東に名を得しも天狗に授かる極意故、時に取つて其方が右の腕を切つたる故、左劍の一卷讓り遣はす、是ぞ卽勘當を許せしといふ杯替り。(ト一卷を出す、喜三郎取る。)又是なる短刀は、我幼年の守り刀、右の腕を切つたる汝に、中身は緣ある左文字の一腰、五十年來息災故是は悴へ讓りくれるぞ。

　　　　トお磯へ渡す、お磯受取り、

お磯　これは〳〵悴へ迄の下され物。

喜三　あなた樣にあやかります樣、受納致しますでござりまする。(ト戴く。)

甚內　いや、喜三郎は其一卷を披見致せ。

喜三　はッ。(ト一卷を開き見る、甚內思入あつて)

甚內　どうぢや、會得せしか。

喜三　はッ、思ひがけなき御賜、有難頂戴仕ッてござります。

甚內　其祕書を會得せば、假令左りの腕たりとも右にも勝る程なるぞ、最早荒氣を出さぬ其方、用ゆる

事もあるまいが、然し是もまさかの爲ぢや。

喜三　重ね〴〵のお心添へ、詞にお禮は盡されませぬ。

甚内　又其方に賴み置くは、此程殿へ差上げし神影流極意の一卷、昨夜紛失なせし由、正しく大鳥逸平が仕業なりと存ずれど、證據なければ詮議もならず、若し又出合ひし事あらば、心を付けて詮議を賴むぞ。

喜三　すりや逸平が、その傳書を。

甚内　あ、こりや、竊に〳〵。（ト思入あつて、）又心を籠めし此片腕、庭へ埋めて腕塚と、印を立つて門弟共へ義心を磨く手本に致す。

お磯　すりや、忌はしい其品を。

喜三　えゝ冥加至極もござりませぬ。

甚内　さあ、最早留めねば勝手に行きやれ。

喜三　左樣なれば、

兩人　また其内、

甚内　ゆるりと來るを相待つぞ。

兩人　はッ。(ト兩人下にをり。)

喜三　いや憚りながら、若旦那樣へ、

お磯　宜しうお願ひ申し上げます。

甚內　おゝ申し聞かすであらう。(ト喜三郎先に門口へ出るを、)あゝこれ、磯。

お磯　はッ、御用でござりまするか。(ト門口へ來る。)

甚內　照は、無事かな。

お磯　お替りはござりませぬ。

喜三　あゝ、親子といふものは。

甚內　えゝ。(ト兩人顏見合せ、双方顏を背けるを木の頭。)急いで行きやれ。

ト喜三郎、お磯枝折戸の外にて辭儀をなす、甚內宜しくあつて、早き合方にて、

ひやうし幕

ト調べにてつなぎ直引返す。

(喜三郎內の場)——本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手茶壁是へ堪忍といふ掛物を掛け、下手押入戸棚、正面欄間に立派な神棚、是へ誂の造酒德利土器へ供物備へあり、上の方中二階障子立切

りあり。いつもの所門口、太き繩簾を掛けし勝手口、鐵猫の井戸、總て喜三郎内の體。爰に子分蔦藏紺半纏腹掛にて摺粉木を振上げ、梅吉同じ裝摺鉢を持ち兩人立掛りゐる、是を勘太、谷松同じ裝にて留めて居る模樣にて幕明く。

勘太　これさ〳〵、靜にしねえか〳〵。

谷松　何を手前達は喧嘩をするのだ。

蔦藏　明日御難の牡丹餅を拵へるから、胡麻を摺つて置かうと思やあ、此ごま摺野郎が己が事を胡麻摺だとぬかしやあがるから、何時己が胡麻を摺つたと云つたら、胡麻ア摺つたから胡麻アすつたと、胡麻摺野郎がいやあがるけれど、おらあ胡麻ア摺つた覺えはねえに、それを胡麻ア〳〵えゝ。

ト せりふにつかへる。

勘太　これ〳〵何を言ふのだ、手前の言ふ事はさつぱり分らねえ。

谷松　胡麻ア摺つたから〳〵と、いつ迄言つてもおんなじことだ。

梅吉　言ふことも通らねえくせに、よく愚圖々々云やあがる、何處ぞ其方へ小さくなつて居ろえ。

蔦藏　べらぼうめ、小さくなつて居ろと云つたつて、生れ附いて大きいのが小さくなれるものか、悔しかア己が樣な股引をはいて見ろ、一足半ぶり錢を取られらア。

勘太　あんまり自慢も出來ねえぢやあねえか、大げえ人間の定りがあらあ、
谷松　年中半纏で居るからいゝが、着物を着りやあ一反半ぢやあ出來ねえ。
梅吉　片袖ねえのも意氣なものだ、手前初めて流行らせりやあいゝ。
蔦藏　こいつらあ寄つてたかつて、己をひやかしやあがるな。
梅吉　誰が手前をひやかすものか、干上りきつてせえ此脊丈だ。
勘太　是をひやかして見ろ、仕樣がねえ。
谷松　股引の錢を二足ぶり取られらあ。
蔦藏　最う了簡がならねえぞ。

ト右の鳴物にて蔦藏摺粉木にて打つて掛る、是を三人にて留める。此時奥より長藏出て來り、

長藏　これ〳〵手前達は靜かにしねえか、今日は親分も姉御も據ねえ用があつて、己に跡を頼んで行つたが、留守の內に間違があつちやあ親分へ對し己が濟まねえ、どういふ譯か知らねえが、どうで手前達の喧嘩だから、根も葉もあることぢやァあるめえ、己が一ぺえ買つて遣るから、臺所へ行つて笑つてしまへ。(ト長藏懐の丼から額を一つ出して投げて遣るを梅吉取つて、)
梅吉　こりやあ長藏さん、有難うござります。これ、みんなお禮を言はねえか。

長藏　なに禮にやあ及ばねえから、間違をしてくれるな。
勘太　いえ此野郎せえ、ぐづ〳〵言はにやあ、
谷松　誰も喧嘩をする者はござりません。
蔦藏　何時己がぐづ〳〵言つた。
梅吉　まあいゝから早く、
三人　さあ、あゆべ〳〵。（ト三人して蔦藏引張つて下手へはひる。）
長藏　あの野郎もぐづ蔦といふが、ねえ名は人の付けねえものだ、あんなぐづな奴はねえ。
　ト奥よりお照振袖屋敷娘の打扮、悴喜之松派手な裝にて淸書双紙と手本を持ち出て來り、
お照　これ長藏殿、まだ喜三郎殿は歸らぬかいの。
長藏　これはお照樣、嘸お淋しうござりませうが、最う今に歸りませう。
お照　先刻にからかゝさん〳〵と、此子が待遠がつてぢやわいな。
長藏　おゝさうでござりませう〳〵。これ坊よくおとなしく待つて居るな、今にいゝお土產を買つて歸つて來るぜ。
喜之　長ぢいやあ、是を見な。（ト双紙を見せる。）

長藏　おゝ、お清書が出來たか、見せな〳〵。
喜之　なに、まだお清書は書かないのだよ。
お照　お双紙の切目故、今綴ぢて遣つたのぢやわいな。
長藏　左樣でござりますか。坊は今何を習つて居る。
喜之　おらあ難波津だ。(ト手本を見せる、長藏いろはの手本を明けて、)
長藏　それぢやあもう此いろはは上げたのだな、豪氣だ〳〵。
お照　年よりはよう出來ますわいな。

ト花道より以前の喜三郎、お磯手遊のも組の纏を持出て來り、

喜三　久し振のお天氣に、御勘當が許りたので、今日は清々とした樣だ。
お磯　こんな嬉しいことはござんせぬ。
喜三　嘸お照さんが、お待ちなすつてだらう。
お磯　お照さんより喜之松が、どんなに待つて居るか知れやあしない。
喜三　早くそれを見せて悦ばしてやらう。(ト舞臺へ來り、直に門口を明け、)長藏、今歸つた。
長藏　親分歸りなすつたか。

喜之　おツかあお土産は何だ。
お磯　それ、こんな物だ。（ト纏を見せる。）
喜之　やあ是りやあ當番だ、嬉しい〳〵。（ト纏を持ち悦ぶ。）
お照　お磯今歸つてか、だいぶ遲かつたわいの。
お磯　いえもうお待兼でござりませうと、たいてい急いだ事ぢやござりませぬが、日が短うなりましたので、つい遲うなりました。
喜三　嘸お淋しうござりましたらう、長藏留守に誰も來なんだか。
長藏　え丶左吉がちよつと來たばかり、誰も來ませなんだ。さうしてお屋敷のお首尾は、どうでござりました。
喜三　首尾よく御勘氣が御免になつたから悅んでくれ。
長藏　そりやあお目出たうござりました。
お照　そんなら父樣の方へ、行かれるやうになつたかいな。
お磯　はい、もう是からは表向上られまする樣になりました。
お照　それは嬉しいことぢやわいの、それにつけても私の身の上、どうか其内お許しがある樣。

喜三　其儀は又折を見合せ、お願ひ申すでござりますから、お氣長にお待ちなされませ。

トばた〳〵になり、花道より門弟の大助袴大小にて出て來り、直に門口へ來り、

大助　たのまう。（トこれにてお磯お照を隱す、此時簪を落す事。）

長藏　へい、どちらからお出なされました。

大助　喜三郎は在宿なるか。

長藏　へい、宅に居りますでござりまする。

大助　在宿ならば只今是へ、大鳥逸平參る程に、差控へ居る樣に申しついでくりやれ。

長藏　畏りましてござりまする。

大助　他出せぬ樣こたへ置くぞ。（ト引返して走りはひる。）

喜三　いつぞや道場で別れし儘、遺恨ある逸平が、押して此家へ參るのは。

お照　若しや私の身の上か。

長藏　但しは遺恨の仕返しか。

お磯　何か仔細のある事なれば、お照樣にはあの二階へ。

お照　そんなら私は。

喜三　逸平めが歸る迄、お忍びなされて下さりませ。

お照　合點ぢやわいの。（ト中二階へはひる。）

長藏　高の知れたる大鳥逸平、爰へうせたら腕づくで。

喜三　あこれ、今日からしては喧嘩はならねえ。どれ、奥へ行つて待つて居よう。

ト喜三郎先に、お磯喜之松を連れて奥へはひる。

長藏　いつぞや源太が喧嘩をして、話にやあ聞いて居るが、どんな奴だか面を知らねえ。（ト門口より向うを見て、）おゝ向うから來る四五人連、慥にあれが大鳥逸平、何と云つても侍だ、褌をしめて掛らにやあならねえ。

ト長藏帶をしめ身支度をする、花道より逸平羽織袴大小裝にて門弟四人、何れも袴大小にて竹刀を擔ぎ出來り、

逸平　すりや喜三郎は片腕切つて、師匠へ誓に喧嘩をせぬとか、それに相違ござらぬな。

軍藏　いかにも先刻師匠の宅にて、確と見屆け參つてござる。

逸平　申さば彼は我兄弟子、殊に神影の極意を極め兩腕あれば我手にも餘る程の手練なれど、片腕切つて喧嘩をせぬ誓をなせしがこつちの幸ひ。

大助　手向ひ致さぬ弱身へ附込み、厄病の神で敵とやら。
栗平　先達道場にて源太に打たれし遺趣晴らし。
運八　蹴たり踏んだりさいなんで。
逸平　日頃の恨を晴らしてくれう。
四人　然らば先生。
逸平　何れもお來やれ。（ト舞臺へ來り）それ、案内致せ。
大助　はッ、喜三郎在宿なるか。
長藏　どなたか存じませぬが、こちらへお這入りなされませ。
逸平　大鳥逸平だ、許しやれ。（ト合方になり、逸平先に四人内へはひり、逸平お照の簪を拾ひ懐へ入れ）して、喜三郎は何れに居る。
長藏　へい、奥に居ります。
逸平　先生が參りし趣、喜三郎に左樣申せ。
長藏　いえ先刻お使がございまして、あなたがお出の趣を、承知致して居りますれば、只今是へ參ります、先お煙草でも召上り、お待ちなされて下さりませ。

逸平　先刻申し入れたるに、出迎ひせぬは失敬至極。
軍藏　奥にをるとあるからは。
大助　いで我々が。
四人　引きずり出して。（ト四人立掛る、此時奥にて、）
喜三　あいやお出でに及ばぬ、喜三郎只今それへ參りまする。（ト奥より喜三郎好みの打扮にて出て來り、眞中へ住ひ、）是は〳〵大鳥樣を初め、御同門の何れも樣、見苦しき私宅へようこそお出なされました。
逸平　先達神崎の道場にて逢うた儘、其後尋ねて參らうと存じたなれど、稽古に暇なくやうやく今日參つてござる。
喜三　何の御用か存じませぬが、先づごゆるりとなされませ。これお煙草盆を差上げぬか。
長藏　はツ。（ト煙草盆を逸平の前へ差出す、奥よりお磯茶を汲み來り、）
お磯　御免下さりませ。（ト出す、逸平取つて、）
逸平　そちや喜三郎が女房か。
お磯　左樣にござりまする。

逸平　然らばかね〴〵噂に聞く、神崎殿の召仕。
軍藏　いまだ我々門弟に、參らぬ先の事さうなが、
大助　喜三郎と密通なし、出奔なせし腰元小磯。
栗平　聞きしに勝るよい女房、勘當請けたも尤も至極。
運八　斯樣な女に惚れられるとは、我々共の及ばぬ事、自慢さつせえ〳〵。
お磯　これは〳〵思ひも寄らぬ其御座興。
喜三　十年立てば一昔、ほんの若氣の至りにて、面目次第もござりませぬ。
逸平　それに付いて此逸平、其方に頼みがあるが、何と聞いてはくれまいか。
お磯　如何なる事か存じませぬが、
喜三　身に叶ひました事ならば、
逸平　早速の承知忝い。
喜三　してお頼みとおつしやるは。
逸平　外でもない、此家の内に匿ひある、神崎の娘お照をば某が貰ひたい。
喜三　何事かと存じましたに、其お照樣は先達不義密通露顯の折、重三郎樣諸共に何れへお出なされし

か、お行方さへも存じませぬ。
軍藏　然らば此家にお照どの。
大助　匿ひおかぬと申すのか。
栗平　慥に匿ひある事を、
運八　存じて我々參りしが。
逸平　それでもそちは知らぬと申すか。
喜三　毛頭存じませぬ。（ト逸平件の簪を出し、）
逸平　これ、只今是に落散りありし照といふ字に、裏梅を比翼に彫りし此簪、こりや何者の所持なるぞ。
喜三　其簪は。
逸平　裏梅はお照どのが定紋、此家の内に居ぬものが、なんで爰に落ちてあつた。
喜三　さあ、それは。
逸平　よも匿はぬとは申されまい。
お磯　あいや申し、其簪はお照樣より私が、お貰ひ申しましてござりまする。
逸平　そんなら是が貰ひしとか。

喜之（奥より出て來て）や、こりやお照様の簪を。
お磯　あこれ、めつたな事を。（ト喜之松を抱き口を押へる。）
軍八　天に口なし、人を以つて言はしむると。
大助　うつかり言ひし子供は正直。
栗平　匿ひ置きしに相違あるまい。
運八　但し知らぬと申し切るか。
喜三　さあ、それは。
逸平　匿ひ置きしか。
喜三　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
逸平　えゝ面倒な、家捜し召され。
四人　心得ました。
　　　ト合方聖天囃子にて四人二階と奥へ行かうとする。長蔵お磯留めるを振拂ひ、行かうとするを、長蔵

左右へ突退ける。喜三郎びつくりして是を留め、

喜三　あこれ、常とは違ふ喜三郎、只何事も穩便に。

長藏　それだと云つて。

喜三　えゝ、さつき言つたを忘れたか。(ト云ふ、長藏是非なく控へる。)

逸平　家捜しなすを支へるは、匿ひ置きしに相違あるまい。

喜三　いつぞや密通露顯の折既にお手討にもなるべき所、御勘氣あつて重三樣へ遣はされたるお照樣、申さば親より許されし主ある花のお照樣、それをあなたが理不盡に、手折つてお連れなされたら、不義は申すに及ばぬ事、柄をすげますれば勾引、花盜人と申されたらお名の穢れとなりませう。

逸平　むゝ、然らばお照は貰ふまい。

喜三　すりや私が申せしを。

お磯　お聞濟み下されて。

逸平　いかにも、さつぱり思ひ切つた。

お磯　嬉しやそれで此場は此の儘。

長藏　花も散らさず無事に納り。

逸平　いゝや納めぬ大鳥逸平、お照を貰はぬ其替り、外に所望の品がある。
喜三　して、お望の、
喜三
お磯　其品は。
逸平　そちが命を貰ひたい。
喜三　そりや又なんで。
お磯
長藏　どういふ譯で。
逸平　いつぞや神崎の道場にて、我に耻辱をあたへし其方、只一討と思ひしも甚内殿に止められ、無念を怺へ立歸りしが、遺恨は胸に止み難く返報なさんと參りし逸平、然し無下には殺すまい。そちも神影の遣ひ人なれば、眞劍の勝負なせ。
喜三　なか〳〵以て町人風情、ほんの竹刀を遣ふのみ、大鳥樣のお相手に元より及ばぬ其上に、五體が片輪になつたる私、此義は偏に御容赦を。
逸平　なに、五體が片輪になつたとは。
喜三　御覽下され。(ト片肌脱ぎ切口を見せ、)生兵法は大疵の元と下世話に申す如く、少し許りの覺えある腕を賴みに喧嘩口論、遂には師匠の勘當受け、大小捨て町人に身を持崩して十ケ年、腕と異名を

取る迄には喧嘩の數も幾度か、それも段々とる年に師匠へ恩が返したく、荒氣を出さぬ誓言に、右の腕を切つたる私、片輪を相手になされましては、今神崎の道場で一と云はるゝ大鳥様、あなたのお恥でござりませう。
逸平　假令恥辱にならうとも、遺恨重なる喜三郎、生けては置かぬ覺悟なせ。
喜三　すりやどうあつても。
逸平　血を見ぬ内は、
四人　歸らぬのだ。（ト是にて長藏つか〳〵と前へ來て、）
長藏　さつきから親分が、割つ口說つ譯を云つても、聞入れのねえ二本棒、血を見ねえで歸らざあおれを替りに切らつせえ、一度死んで二度は死なねえ人間わづか五十年、浮世は夢に幻　長藏死ぬと肚胸を据ゑたらば、一人ア死なねえ大鳥様、覺悟極めて切らつせえ。
四人　何を。（ト立掛るをお磯留めて、）
お磯　あゝこれ長藏、何を言ふのだ、あれ程家で留めるのを、なぜ聞分けてくれねえのだ、それぢやあ最屓の引倒し、爲を思はゞ何事も、蟲を殺して居ておくれ。
長藏　えゝいめえましい、うづ〳〵すらあ。（ト手を握り、是非なく控へる。）

喜三　あなた方へ對しまして只今の無禮過言、定めてお腹も立ちませうが、高の知れたる私の子分の者にござりますれば、大きく申せば蟲けら同然蚯蚓が鳴いたと思召して、お耳に掛けず何れも樣、御了簡なされて下さりませ。又其替り先達の御遺恨がござりますなら、此喜三郎を御存分に、とは申す物の町人でも、人一人でござりますれば、命を取らば仕儀により御身分にも拘はりませうから、お腹がいずば私を、打つなりと踏むなりと、お心任せになされまして、

四人　了簡しろと申すのか。

喜三　へい、お手向ひは仕りませぬ。（ト是にて逸平四人と顏見合せ、思入あつて）

逸平　いかさまそちが云ふ通り、高が町人蟲けら同然、命を取るも益なき殺生、望みに任せ某が遺恨の仕返し覺えて居よ。

ト逸平喜三郎の肩へ足を掛ける、喜三郎懷より珠數を出し爪繰りぢつと思入、長藏是を見て、

長藏　こりや親分を土足に掛けて、

逸平　おゝ土足に掛けたら何とする、遺恨があらば心任せ、打つなりと踏むなりと勝手にせいと言つた故、望みに任して踏んだがどうした。

軍藏　大鳥氏は我が師匠、神崎殿の弟子頭、

大助　道場預かる高弟なれば、いはゞ師匠も同じ事、

栗平　手出しをすりやあ腕を切り、誓を立つたが虚言になるぞ。

運八　自由になつて打たれずば、改心なしたと云はれまい。

長藏　むゝ。(ト喜三郎ぢつと思入。長藏悔しきこなし、)

逸平　まだこんな事ぢやあない、遺恨の仕返し、かう〳〵。(ト門弟の竹刀を取り、喜三郎をさん〴〵に打ち、)何と骨身にこたへたか。(ト手ひどく打つ。)

喜之　あれお父さんを。(ト行かうとするをお磯抱く。)

長藏　こりやもう、どうも。(ト立掛るをお磯留めて、)

お磯　爰をぢつと怺へるが、堪忍するのでござんすぞえ。

長藏　えゝいめえましい。

ト長藏悔しき思入。此以前下手より源太好の打扮にて出て來り、門口にて窺ひ、内へ飛込まうとしていや〳〵といふ思入あつて窺ひゐる。

逸平　これ何れも、先達彼が弟曙源太に打たれたる、其返報に打たつしやれ。

四人　打つても宜しうござりませうか。

逸平　おゝよいとも〳〵、後には身共が居る、存分に打たつしやい。
軍藏　然らば御免下されい。（ト四人竹刀を持ち、）
四人　喜三郎覺悟致せ。
　　ト四人一時に打つ、喜三郎ぢつと思入あつて左右を振向く。四人びつくりして思はず相打に打合ひ、
四人　あいたゝゝゝ。
栗平　あゝ我身つめつて、人の痛さを知れだ。
運八　喜三郎許しやれ。（トちよつと辭儀をして後へ退り、）
四人　大鳥樣、有難うござりまする。
逸平　最早それでようござるか。
四人　存分打ちました。
逸平　何れも方の遺恨が晴れゝば、これで身共が武士も立ち、お照が事は又重ねて、さあ何れも參らうか。
四人　御同道仕りませう。（ト門口へ出る、是にて源太下手へはひろ、逸平思入あつて、）
逸平　いや男達の俠客のと、名立がましく申せども、以前は兎もあれ今は町人、武士に逢つては意氣地

はない。猫に逢つたる鼠同然、尻尾を挾み四足を縮め、ちうといふ音も出やあしねえ。

長藏　え丶云はして置けば。（ト立掛るを、）

喜三　こりや。（ト長藏を留め、思入あつて、）左樣なれば大鳥樣。

逸平　喜三郎、其内逢はう。

ト先に立ち四人附いて花道へはひる。長藏鉢卷尻端折をする、奥より以前の子分四人、若い衆の子分大勢皆々庖刀棒など、思ひ〳〵の物を持ち出て來る。

長藏　さあ、みんな來い。

皆々　合點だ。（ト駈出さうとするを、喜三郎門口をしめ、皆々を留め、）

喜三　やあ又しても〳〵、己が云ふ事を聞かねえか。

長藏　それだと云つてあんまりな、手出しの出來ねえ親分を、寄つてたかつて打ちやあがつて、子分が見ちやあ居られねえ。

梅吉　さつきから出よう〳〵と思つたけれど、家ちやあ面倒、

勘太　外へ出りやあ構やあしねえ、

谷松　後から行つて追ひ打ちに、

蔦藏 叩きしめにやあ、
四人 腹がいねえ。
喜三 さうでもあらうが此己が、掛替のねえ腕を切り、誓言立つて止めた喧嘩、他人は知らず喜三郎が子分の者は一人でもやる事アならねえ。
お磯 其親切は嬉しいが、切つた腕が無駄になるから、どうぞ辛抱しておくれ。
長藏 親分といひ姉御迄事を分けて留めるのを、振りもぎつても行かれめえ。
喜三 己を思はゞ此の儘に、否でも辛抱してくりやれ。
長藏 ようござります。思ひ切りました。(ト鉢卷を取り尻をおろす。)
喜三 さあ手前達もみつともねえ、奥へ行け〳〵。
皆々 今行きます。(トぐづ〳〵するを、)
喜三 えゝ愚圖々々しねえで、行燈でも點けねえのか。
長藏 はゝい。(ト皆々奥へはひる、時の鐘。)
喜三 やれ〳〵、大風の吹いた後のやうだ。(ト奥より子分行燈を持出る。)
お磯 してお前、何處ぞ疵でも附きあしないかえ。

喜三　なに、餓鬼の時分から竹刀ぢやあ打たれつけて居るから、何ともねえ。
ト時の鐘になり、下手より源太出て門口を明け、
源太　兄貴、此間は。（ト言ひながら內へはひる。）
喜三　おゝ源太か、どうした。
源太　四五日宿へ行つて、遊んで居やした。（とよき所へ住ひ）
喜之　兄いお女郎買か。
源太　又そんな事を言ふか。
お磯　小遣のあるうちは、五日も十日も家を明けて、錢がなくなると歸つて來るが、よく家を忘れねえものさね。
源太　人を小猫か何ぞの樣に、歸り早々姉御の皮肉だ。
お磯　私が云はにやあ、誰も云ひ手がねえからよ。
喜三　えゝやかましい、又いがみ合ふのか、こんな仲の惡い兄弟はねえ。
源太　いや兄貴、今佐吉に逢つて話を聞いたが、お前とんだ事をしなすつたの。
喜三　お照樣をお置き申すに、勘當の身ぢやあ表向、お世話をする事が出來ねえから、荒氣を出さねえ誓

言に腕を切つて行つたので、悦んでくれ、御免になつた。

源太　そりやあ何にしろよかつたが、然し腕の喜三郎と云はれた其腕を、切つてしまつたは惜しい事だ、髮を切るのは譯もねえが指位迄は切られようが、どうして腕は切られねえ。おいらなぞも金毘羅樣へ酒で二三度髮を切つたが、いや、金毘羅樣と言やあ兄貴、おらあちよつと金毘羅樣へお參り申して來やす。

喜三　十日でもねえのに、何で行くのだ。

源太　ちつと願掛けがあつて。

長藏　今ッから遲からうに、虎の門か三絃堀か。

源太　なに、讃岐へさ。

長藏　え、株でそんな事を云ふぜ、ちよつとお參りに行くと云ふから、虎の門か三絃堀だと思やあ、百何十里ある讃岐迄、ちよつとでもあるめえぢやねえか。

喜三　何と思つて讃岐迄、お參りに出掛けるのだ。

源太　ちつと江戸に居ちやあ面倒な事があるから、信心半分二月ばかり、旅をして來ますのさ。

お磯　一人で行くならいゝけれど、女なぞを引張つていつて、後へ難儀を掛けてくんなさんなよ。

源太　なに、そんな厄介を掛けるものか。
長藏　島や成田と云ふぢやあなし、讃岐と云やあ長旅だ、神奈川迄も送つて行かうが、何時立つのだ。
源太　今夜直ぐ立つ積りだ。
喜三　そりやあ何にしろ早急だが、路用の手當はいゝか。
源太　實は暇乞ながら、其事で來ました。
喜三　お磯、掛硯を持つて來やれ。
お磯　あい。(ト押入より硯箱を持つて來る。喜三郎引出しから、二十五兩包を出す。)
喜三　さあ、少しばかりだが餞別だ。(ト出すを、源太取つて、)
源太　こりやあ兄貴、有難うござりまする。
お磯　おや、みんな遣らずとよいのに。
喜三　なに、長旅は一分でも餘計な方が氣が丈夫だ。
源太　兄貴こりやあ二十五兩包だね。
喜三　さうよ、額だから重からうが、あいにく家に金がねえから、取替えて持つて行つてくれ。
源太　なに額でも錢でも何でもいゝが、是ぢやあちつと足りませぬ。

喜三　むう、それぢやあ足らねえと云ふのか。これが京大阪や大和廻り、遊山旅と云ふぢやあなし、信心參りの道中だ、餘りもしめえが讃岐迄、二十五兩あつたらば行つて來られさうなものだぜ。

ト源太額包を下へ打付け、

源太　そりやあ柄杓一本で金毘羅參りに御報謝と、野宿をして行つたなら、一文なしでも行かれやすが、わつちも若い身の上だ、酒も呑みたし宿々で、女郎の一つも買ひてえから、端た金ぢやあ行かれねえ。千兩箱を馬に付けて珠數繋ぎに引いて行つても、遣つた日にやあ足りねえが、そんな大きな事は言はねえ。兄貴百兩わつちにくんなせえ。

喜三　なに、百兩くれと。

源太　實は二百兩貰ひてえのだが、御時節柄故半減に、百兩と云つたのだ。

お磯　（傍へ寄り、）これ源太、そりやあ手前何を云ふのだ、一本の二本のと飴の棒でもしやぶるがいゝ。此せちがれえ世の中に、錢でも呉手はありやあしねえよ。

源太　そりやあ云はねえでも知れた事だ、是が堅氣な生業ならこんな事も云やあしねえが、川留の三日もありやあ不時な金の儲る生業、増して他人ぢやあなしつながる緣の兄弟だから、それで貰ひに來やしたのだ。

喜三　誰も遣らねえとは言はねえが、これが身でも持つ事ならそりやあ二本が三本でも、遣るめえものでもねえけれど、信心で行く金毘羅參りに、女郎を買ふ其金は、氣の毒ながらおらあ遣られねえ。

源太　呉れざあようござります、貰ひますめえ。二十や三十は腰の邪魔だ、是もお返し申します。

　　ト二十五兩包を喜三郎の前へはふる。

喜三　不用なら止しにしろ、達つて遣らうとは言はねえわ。（ト金を取る。）

源太　遣らうと云つても貰やあしねえ。姉御の縁に繋がつて、兄貴々々と云つて居るなあ、斯う云ふ時に一本と二本の金を貰ふばかり。何だ二十や二十五の目腐れ金、こんな吝ッたれな兄貴は入らねえ、血を分けた仲ぢやあなし、縁を切りやアあかの他人、今日から兄でもなけりやあ弟でもねえぞ、翌日が日どんな事があつても。（ト源太思入あつて、）兄弟でなけりやあ知らねえぞ。

喜三　はて、おつな事を云ふな。（ト思入、お磯怺へ兼ね喜之松を喜三郎の傍へ遣り、）

お磯　これ、源太。（ト源太の胸づくしを取る。）

源太　何だ。

お磯　手前そんな事を云つては濟まねえぜ。

源太　濟むも濟まねえもいるものかえ。（ト振拂ふ。お磯膝を突付け、）

お磯　これ、どの口でそんな事が言はれるぞ。ほんに／＼十年此方家の人の厄介になつたのはどの位、算へ立つて云はれやあしねえ。先吉原は云ふに及ばず、品川新宿剰へ神奈川迄金を持たして迎へに遣つたは幾度か、遊びの足が遠退いて、ちつと狐が離れたかと思ふと直にくすぶつて、何處の部屋から來ましたと、歩きに渡す其金も三度に一度は私の金、もう是限りで止めますと、酒と一緒に髪を切り金毘羅様へ願掛けも、十日と持たぬ三日坊主、願酒を破つた揚句が喧嘩、相手の天窓をぶちこはし、明るい體も暗闇へ縄が掛つて行く所、金で濟して仲直り、やれ嬉しやと云ふ間もなく、人の娘を引つ浚ひ、表向なら勾引と四角に來ても家の顔、丸く濟まして是も金、今日は三兩あすは五兩又は十兩二十兩、微塵積つて山よりも高い恩をば忘れたか。是迄手前に入り上げた金をしめたら何百兩、しみッたれとはよく云つた、現在實の弟だが愛想もこそも盡果てた、そつちから縁を切らずともこつちから縁を切る、姉と云ふな人でなしめが。

ト此内源太煙草をのみ素知らぬ振をして居る、お磯胸ぐらを取り振廻して突放す。

源太　おゝ其縁切を待つて居たのだ、是で兄貴もなけりやあ姉もねえ、一本立のおれが體、さば／＼としていゝ心持だ。（ト是にて長藏思入あつて、）

長藏　これ源太、さつきから聞いて居たが、何でそんな愛想盡かしを云ふのだ。今姉さんの云ふ通り、

是迄兄貴に御厄介を掛けた事を忘れやあしめえ、何處かで喧嘩でもして來て、八つ當りかあ知らねえが、そんな事を云つちやあ濟まねえぜ。

源太　何だ手前迄が同じ樣に、何ぞと云ふと濟むの濟まねえのと、水切の井戸ぢやァあるめえし、生利な事を云やあがるな、甚三や左吉は無口だがよく四文と出やあがる、うぬが樣な好かねえ奴はねえ。

長藏　そりやあ好かざあ好かれなくつても、おらあどうでもいゝけれど、兄たァ云へど義理ある仲、さつきからの不手勝手を、傍で聞いてる姉さんが、どの位氣の毒だか知れやしねえ。これが十や十一の餓鬼ぢやあなし、ちつたあそこらも思つて見たがいゝ。

源太　えゝやかましいやい、よくつべこべ〳〵と根よく胡麻を擂りやあがる。見掛倒しの擂粉木野郎め、今兄弟の緣を切りやあ、手前にも緣はねえ、友達附合は今日限りだぞ、えゝ面を見るのも蟲唾がはしらあ。

長藏　なに見掛倒しの擂粉木だと。（トきつとなり、喜三郎へ思入あつて氣をかへ、）そりやあ擂粉木でも擂鉢でも根が無頼漢から上つたおれ、何とでも言ふがいゝが、兄貴へ對して云つちやあ濟まねえ、よく考へて見るがいゝ。

源太　ヽヽこけが占を見やあしめえし、考へるも考へねえもいるものか、頼みにならねえ兄弟は入らねえ。
こんな家に居ると身の穢れだ、どれ行きやせう〳〵。

ト此内お磯奥へはひり、位牌を持つて來て、立たうとする源太を引付け、件の位牌を目先へ出し、

お磯　これ源太、此位牌を知つて居るか。(ト源太見てぎつくり思入)手前が家を潰した故、位牌に彫つた戒名の父さんやかゝさんも、爰の佛檀に居候、死んだ人迄此樣に居所立所に困るのは、こりやあ誰がした業だ。十年此方私の縁で兩親初め手前迄、大恩請けた爰の家、身の穢れとは何で穢れだ、手前こそ人間の皮を着た畜生だ、犬や猫と一つに居れば、こつちでこそ身の穢れ、よくそんな事が云はれた事だな。(ト襟がみを取つて位牌で打つた振拂ひ)

源太　えゝ何をするのだ、惣領だつておめえは女だ、何で己をぶつたのだ。

お磯　おゝ手前をぶつたなあおいらぢやねえ、これ、この位牌のとつさんかゝさん、草葉の蔭から見て居られず、私が手を借り親の折檻、かう〳〵。(ト又引付け位牌でさん〴〵に打ち)ちつとは骨身にこたへたか。

源太　姉さん、もうそれでいゝのか、一つぶたれるのも百ぶたれるも、打たれる味は同じ事だ。さあ幾らでも打ちねえ〳〵、何なら一思ひに、ぶち殺してくんねえ。(トお磯に體を摺付ける。)

お磯　うぬ、打たねえでどうするものだ。（ト又引付け打つ。）
喜之　あれ、おッかあが喧嘩をするよ。
喜三　なに喧嘩ぢやあねえ、兄ィが叱られるのだ。
長蔵　これさ〳〵姉さん、腹の立つのは尤もだが、もういゝ加減にしなせえ〳〵。
お磯（悔し泣に泣きながら）それだつてあんまりの奴だ、お師匠様へ誓言に荒氣を出さぬ家の人、默つて見て居る心の内、噍川き倒したからう、身内でさへもほんに〳〵愛想もこそも盡果てた奴だ。これ親のない後は姉は親、七生迄の勘當だぞ。（トきつといふ、源太思入あつて、）
源太　うむ、勘當受けりやァあかの他人、きつと是限り緣を切つたよ。長藏、今迄兄弟同様にした友達づき合は今日限りだぞ。
長藏　こつちにやあ替りはねえが、厭ならよしねえ、附合ふめえ。
源太　兄貴、お前とも兄弟の緣は切つたよ。
喜三　むゝ、手前の方から望故、切つて遣らうと云ひてえが、おらあ切らねえ。
源太　なに、切らねえとは。（トきつといふ。）
喜三　心にもねえ愛想づかしで、兄弟初め友達迄、緣を切つて今日限り、生先長い命をば手前は捨てる

氣だらうが。

源太　えゝ。(トぎつくり思入。)

喜三　知らねえでどうするものか、何日ぞや師匠の道場で、手前の喧嘩が遺恨となり、さつき己が打たれたる其仕返しに行く氣だらうが、そりやあ惡い了簡だ。心は曲つた逸平だが、直な竹刀の神影流極意を極めた腕めえ故、なか／＼以て痩腕の生兵法ぢやあ覺束ねえ。まして向ふは多くの門弟たつた一人で踏み込んだら飛んで灯に入る夏の蟲、其處は手前も江戸ッ子だけ、死ぬのは覺悟で兄弟へ後の難儀の掛らぬ樣、縁を切らうと云ふのだらうが、おらあ切らねえ何處迄も、手前の難儀を背負込む氣だが、昨日に替る今日の身の上、喧嘩をしめえと誓言に片腕切つた喜三郎、明日が日手前が短氣な事を、すりやあ云はずと己が身に、掛りやつながる兄弟仲、假初ながら十年此方、縁を結んだ上からは、切つた誓の此腕が、無駄にならねえ樣にしてくれ。

源太　むゝ。

ト源太ぢつとせつなき思入、お磯扱はさうかといふ思入あつて、

お磯　そんなら今の愛想づかしは。(ト嬉しき思入、源太思入あつて。)

源太　いゝや、おらあそんな立役な、芝居でする樣な了簡はねえ、實はお前の云ふ通り己が遺恨を背負

込んで、行かにやあならねえ所だが、さうする日にやあ相手が侍、切られて死なにやあならねえから、それを遁れる金毘羅參り、命の御報謝に出かけるのだ。
長藏　それぢやあ眞底命が惜しく、それで讃岐へ出掛けるのか。
源太　知れたことよ。
お磯　まだしもさうかと思つたに、いよ〳〵さういふ心なら、片時爰へは置かれない。さあきり〳〵と出て行け。
源太　行かねえでどうするものだ。（ト思入あつて立上り、行掛るを）
喜三　これ、源太待て。
源太　何ぞ用か。
喜三　おゝ遂て行くなら留めやあしねえが、あの逸平は師匠の弟子、手前が喧嘩をする日にやあ己が誓は反故になるぞ。をこがましいが此珠數の、（ト持つてゐる珠數を出し、）二つの玉は己と女房、又四菩薩の四つの玉は手前に甚三、長藏、左吉、跡は殘らず子分の者玉の數せえ百八の、水滸傳にも負けねえ勢ひ、それを一つに緣の絲で繋いで置けば丈夫だが、切つてしまへばみんなばら〳〵、元の珠數にはまとまらねえ。どうぞ命を長房に、短氣な事をしてくれるな。

源太　うむ。（ト思入あつて）なに金毘羅へ行くのだから、案じなさんな。然し愛想づかしは云ふものゝ是迄長の其間、大きにお世話になりやした。是から行きやあ長旅故、もう是限お前にも逢はれねえかも知れねえぜ。（ト禮をいふ思入）いや縁を切りやあ二度と再び、もう逢ふ事はありやしねえ。おい姉さん。

お磯　姉さんと云はれる覺えはねえよ。

源太　おゝ、姉さんぢやあなかつたおかみさん、お前も持病の多い體、煩はねえ様にしねえ。（ト名殘だといふ思入。）いや、是も他人にいらねえ世辭だ。これ長藏。

長藏　何だ。

源太　おれが居にやあ、手前は後を。

長藏　えゝ。

源太　跡で思入れ胡麻をすれツさ。（トづう〳〵しく門口へ出る。お磯つか〳〵と行き）

お磯　まだそんな憎まれ口を、きり〳〵とうしやあがれ。

ト位牌で打つて掛る、其手をとらへ位牌を見て、濟まねえ事だといふ思入にて、ホロリと涙をこぼし、お磯と顔見合せ氣を替へ、

源太　えゝ面を見るも厭だ。(トお磯を内へ突倒し、きつとなつて尻を端折り、)おゝさうだ。
　　　ト逸散に花道へはひる。お磯起上り門口へ出て、

お磯　うぬ、どうするか見やあがれ。(ト長藏是を留めて、)

長藏　これさ、姉さん待ちなせえ。

お磯　えゝ長藏留めてくれるな。(ト振拂ひ、花道へ追掛けはひる。)

長藏　えゝ待ちなせえと云ふに。(ト尻を端折りながら、跡を追掛けはひる。)

喜三　えゝみつともねえ、いゝ加減にしねえのか。

喜之　(傍へ來て)おつかあやアく。一緒に行かうよ。

喜三　おつかあは今歸つて來るから、とつさんと遊んで居やれ。

喜之　おらあ遊ぶのはいや、睡くなつたものを。

喜三　睡くなつたら、爰へ來い。(ト喜之松喜三郎の傍へ來て、)

喜之　あした機關を買つておくれよ。

喜三　おゝ買つて遣るともく。(ト喜之松を抱き思入あつて、)おれへ濟まねえ所から、お磯がむきに腹を立ち、源太の跡を追掛けて行つたが、みつともねえ事をしにやあいゝが。長藏が一緒に行つたか

ら大方連れて歸るだらう、何にしろ源太にもあれ程己が言つて遣つたから、よもや振込んで行きやあしめえが、喧嘩の元が手前故、行かにやあ男が立たねえなぞと、折角切つた此腕を、無駄にしてくれにやあいゝが。おゝ睡いくと云つたが、直にもう寐てしまつた。あゝ子供は罪のねえものだなあ。

ト子供を見て思入、これにて道具廻る。

（喜三郎内裏手の場）＝本舞臺一面の黒塀、此内上手二間の二階家、九尺四枚の障子立切り、下手平家の屋根、紅葉、松の見越の枝、外に大八車。總て喜三郎内裏手の體。時の鐘にて道具止る。と時の鐘打上げ誂の雨吟になり、唄一くさりあつて二階の障子を明ける、内に丸行燈を點し以前のお照居て、

お照　今宵も雨を催して星さへ見えぬ薄曇、私の心と同じ空、戀し床しい重三樣と浮世の義理故此樣に別れくに居る悲しさ、早う一つになりたいと、思へどそれも叶はぬは、逸平づらが戀慕故、若しもの事でもあつてはと喜三郎が心遣ひ、それに付けても今日で三日、お出のないは增す花の外にあつての事ではないかと、思へばほんに夜の目も合はず、あゝ案じられる事ぢやなあ。

ト雨吟になりお照案じる思入、此内花道より重三郎着流し大小にて出て來る、後より離れて、大鳥の

門弟一人頬冠り尻端折り大小にて窺ひながら出て來る、重三郎花道へ留る門弟下に居て窺ひゐる。

重三　秋の長夜といひながら、暮れてより餘程立てど、未だ五つを打たぬ樣子、晝は人目の多い故夜に入つてから逢ひに來るが、何時御勘氣の御免あつて肩身を廣う世間晴れ、二人一緒に添はれること か。師匠の緣に繋がれて喜三郎が親切に言うて吳れるが他人故、まさか每夜行かれもせず、我と我身に異見なし一兩日行かざりしが、一夜を千夜と思ふは戀路、嘸やお照が待つて居よう。

ト兩吟になり重三郎行きかけろ、門弟窺ひ寄り拔掛ける、重三郎振拂り顏を見ろ、門弟刀を納め袖にて顏を隱し引返して花道へはひろ。重三郎是を見送り、何だかと思入あつて舞臺へ來ろ、唄のきれ、月出て重三郎思入あつて、

雲間を洩れし月影に、見れば爰は數寄屋河岸、喜三郎が住居の裏手。（ト二階を見上げ、お照を見て、）やゝ其處に居るのは、お照ぢやないか。

お照（下を見て、）おゝ重三郎樣でござりましたか、えゝ逢ひたうござりましたわいな。

重三　其の逢ひたいは同じ事、今日は〳〵と思へども、あたりの人目に我慢して、一日二日遠退いたが、替る事もなかつたか。

お照　私に替りはなけれども、お前に替りがあらうかとそれが心に掛る故、いつその事此場より、連れ

て退いて下さんせいなあ。

重三　わしもさうしたいと、思はぬ事はなけれども、眞身も及ばぬ喜三郎が親切にしてくれるのを、袖にするかと思はるゝが濟まぬ義理故、此儘にどうも連れて行かれぬわいの。

お照　さあさうではあらうが私故、さつきも大鳥逸平に、うち打擲に逢うたのを、蔭で見て居る此身のつらさ、いつそ私の居ぬ方が、喜三郎へも難儀が掛らず、よからうかと思ふ故。

重三　すりや逸平がおぬしの事より、喜三郎を打擲せしとか、それは定めて此程の、遺恨故であらうけれど、元はと云へばおぬし故、さういふ事と聞く上は、六本木に知邊の者あれば是よりそれへ伴うて、二人一緒に暮さうわいの。

お照　そんなら連れて退いて下さりますか、えゝ嬉しうござりますわいな。

重三　善は急げ、ちつとも早く。（ト重三郎上手へ行かうとする。）

お照　あゝ申し重三郎様、表からでは人目が邪魔、どうか爰から塀越に、下りる事はなりますまいかいな。

重三　（車へ思入あつて、）おゝ丁度それには幸ひな、爰に有合ふ此車、是をば立てゝ梯子となし、塀越に連れ退かん。（ト兩吟になり、重三郎車を塀へ乘掛け齒へ石を挾む、此うちお照奧を窺ひ身支度をする。）さあ

支度がよくばこれへ下りよ。
お照　私や怖うて、どうしてまあ。
重三　何の怖い事があらう、わしが押へて居る程に其處の欞子へ扱帶を掛け、それに縋つておりたがよい。
お照　あい〳〵合點ぢやわいな。(ト兩吟になり、お照扱帶を欄間へ掛け、それへ縋つて、こは〳〵車へ足を掛ける、重三郎是へ手を掛け漸々下へおりてほつと思入。)そんなら是から手に手を取り、お前の知邊と云はしやんす。
重三　其行先も離れざる、連理の枝の六本木。
お照　麻布と云へば幸橋、夜は往來も稀にして、
重三　月さへ落ちる西の久保、
お照　芝の御寺の五重の塔、
重三　木の間に赤き赤羽根を、
お照　後に見なして古川傳ひ、
重三　流れに添うて、

お照　少しも早う、

重三　さあ、來やいの。

ト兩吟になり、重三郎お照の手を取り行き掛る。ばたばたになり、下手より門弟四人後より逸平出て來り、兩人を取卷き、

逸平　兩人待ちやれ。

重三　や、さう云ふ聲は。

逸平　（前へ出て、）誰でもない、大鳥逸平だ。

兩人　えゝ。（トびつくりなす、お照重三郎の後へ隱れる。）

逸平　疾からこなたに逢つたらば、無心を云はうと思つて居たに、はていゝ所で逢ひました。

重三　して、此重三へ無心とは。

逸平　無心と云ふは外でもねえ、お照は身共が執心故、刀に掛けて貰ひたい。

重三　こは理不盡のおつしやり樣、此お照故大恩ある師匠の勘氣を受けたる重三、門弟頭の其許がお望みなれどおいそれと、お照ばかりは上げられぬ。

軍藏　どうですべよく熨斗を付け、さあ進上とも云はれまい。

大助　否やをいふは合點で、助鐵砲に參りし我々。
栗平　いやと云はうが應と云はうが、はごに掛つた鳥同然。
運八　羽根ツぱたきもさせぬから、
皆々　大鳥氏へ差上げろ。
重三　假令何樣云はるゝとも、町人ならば知らぬ事、身共も兩腰たばさめば、刀の手前此儘に、妻と定めし女をば、故なく人に渡さうか。
逸平　えゝしやらくせえ其一言、邪魔のない内ちつとも早く。
六人　合點だ。

ト又兩吟になり、四人お照を連れて行かうとするを、重三郎支へる立廻りあつて、件の車を引出し、是にて重三郎をさゝへ此間に兩人お照を引擔ぎ、逸平付いて逸散に花道へはひる。重三郎これをやつてはと行かうとするを四人支へる。重三郎刀を拔き切拂ふ、四人も拔合せ立廻り、よき見得にて月隱れ、重三郎四人を相手に車を遣ひ暗がりの立廻りあつて、又月出で、兩吟になり立廻りあつて、重三郎眞中にて車の端を踏む、是にて車のはな上り上手の兩人刀を振上げ車で支へられる、下手の門弟刀を差付けられ、たぢ〳〵となる。此見得引張り宜しく兩吟の切にて道具廻る。
ト本舞臺元の世話場の道具へ戻る、と時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽秋雨に水かさ增る外堀の樋口の音も物さびて、夜は淋しき數寄屋川岸。

〽子分の物があわたゞしく息を切つて馳來り。

ト花道より子分梅吉走り出て、直ぐ舞臺へ來て内へはひる。

梅吉　もし〳〵、親分々々、親分は何處に居なさる、親分々々。

喜三　（奥にて）おい〳〵、誰だ〳〵。（ト云ひながら出て來り、子分を見て）手前は梅吉、仰山にどうしたのだ。

梅吉　どうした所か、親分大變だ〳〵。

喜三　なに、大變とは、

梅吉　さあお聞きなせえ、今裏町で、さつき爰へうしやあがつた逸平が、弟子めらと重三樣と切つてはッつ、、、、どうか味方が危い故、私ち等が彌次馬にどぶ板をめくつて叩き散し、たうとう弟子めらは逃げましたから、重三樣に樣子を聞いたら、お照樣を連出して麻布の方へ逃げる所、逸平めにお照樣を引拂はれたとおつしやりました。

喜三　すりや、お照樣を逸平めが引つ拂つて行つたとか。して、重三樣は。

梅吉　跡追掛けて行きなすつたが、川岸通りが知れねえから、みんなも附いて行きました。

喜三　え。
〽聞くに南無三、一大事。
さうして先の所を突留めたか。
梅吉　わつちがこれから行つて、樣子を見て來ます。
喜三　先の居所を突留めたら、直ぐに此方へ知らしてくれろ。
梅吉　合點だ。
〽言ふより早く一目さん、見附をさして駈けり行く。（ト子分逸散に花道へはひる。）
〽後に兎や角喜三郎、覺悟極めて吐息つき、
喜三　お照樣を盗まれては、けふ改めて預つた師匠へ對して喜三郎が、顏向ならぬ今宵の仕儀、こいつあ誓も破れかぶれ、一番腕を見せにやあならねえ。然し、お磯に此事を一筆書いて殘してえが、左の手で書けりやあいゝが、
〽言ひつゝ以前の硯箱、取出す紙も糊離れ、緣も薄き半切へ書かんとすれば筆憚へ、
ト喜三郎以前の硯箱を取出し抽出しより卷紙を出し、左にて書きかけ書けぬ思入。
えゝ書きつけねえと云ふものはいけねえものだ。あゝどうか仕樣がありさうなものだ。

〽困る後へ幼兒が、（ト奧より喜之松出て來り）

喜之　お父さん、おいらが書いて上げようか。

喜三　おゝさつぱりと氣が付かなんだ、然しいろはを上げた許りで淺香山の習ひかけ、幾ら手筋がよくつても、こりやあ手前にやあ書かれねえ。おゝいゝわ、あの手本を爰へ持つて來い。

喜之　あい〳〵。

喜三　どれ、墨を磨つてやらうか。

〽磨出す墨も濃き中の音を鳴く鹿の命毛も、今日を限りと白紙の妻のお磯が立戻り、

ト此内喜三郎喜之松硯箱にて墨を磨りながら喜之松を見て愁ひの思入、此内よきほどに花道より以前のお磯出て來り、

お磯　人の心はいつ何時どう替るか知れぬもの、よくはなけれど源太めも、あゝ云ふ氣ではなかつたが、今日に限つて愛想盡かし、どうやら樣子のありさうな詞に後を追掛けたが、女の足に追付かず、一緒に行つた長藏に、樣子があらば聞いてくれと、頼んで遣つて歸つたが、何の仲でも我弟家の人へ氣の毒で、何だか敷居が高いやうだ。

〽我家の口へ來ながらも、流石女のはひり兼ね、内を窺ふ折柄に、

ト お磯舞臺へ來り、門口より内を窺ふ、此内宜しく墨を磨り双紙を廣げ、傍へいろはの手本を開き、

喜之　お父さん、何と書くのだえ。

喜三　それ此かの字にきの字、おの字、又きの字にのの字、それからこの字にとの字だ。

ト いろはの手本の字を敎へる、喜之松其通りに書き何心なく讀み、

喜之　「かきおきのこと。」

お磯　えゝ。(トびつくり思入あつて、内へはひらうとして門口に窺ひゐる。)

喜三　それ、一二三の一を書くのだ。

喜之　あい／＼。

喜三　それ。こよひ、(ト手本を突いて敎へる。喜之松其通りに書く)おてる、さまを、いつへいに、うばひとられ、もうしわけに、いのちを、すてそろ、あひだ、おしせう、さまへ、もうしわけ、また、あとのこと、たのみそろ、かしく、(ト手本の字を突いて敎へ、書置を書かせ、)おゝ見事々々、よく出來た／＼。今におつかあが歸つて來たら、是を讀んで聞かしてくれ。

喜之　あい／＼。明日坊に御褒美に、何ぞ手遊物を買つておくれよ。

喜三　おゝ買つてやるとも／＼、何でも好きな物を買つて遣るぞ。

喜之　うれしい〳〵。（ト手を叩き悦ぶ。）

喜三　あゝ幼き時は世の中に兩親程のものはなく、明暮慕ふ其親が命を捨てる書置も、何の事やら辨へず、

〽しらぬが佛持遊びを、買うてくれろとねだらるゝ、親の心の苦しさは、鬼でも泣かずに居られうか。

〽人目なければ抱き上げ、不便のものや可愛やと、頰摺なして泣く親の心を知らず幼兒が、悦ぶ顏は泣くよりも哀れさ勝る門の口、始終聞居る女房が怺へ兼ねて戸口を明け、

ト此内喜三郎喜之松を抱き宜しく愁ひの思入、お磯も宜しく思入あつて門口を明け、

お磯　あい、今歸りました。

喜三　や、お磯か。

〽びつくりなして書置を、押し隱せば聲をかけ、（ト喜三郎件の双紙を後へ隱す。）

お磯　あ、もし、隱して下さんすな、そりや書置でござんせうが。

喜三　や、それぢやあ手前さつきから、

お磯　さあ歸りかゝりし門の口、書置といふ一聲が耳へはひつて何事かと、戸口に身を寄せ窺うて、樣

子は殘らず聞きました。

喜之　「かきおきのこと。」（ト讀みかける。）

喜三　あこれ、門で樣子を聞いたとあれば、最う讀むには及ばぬわい。

喜之　そんなら玩具を買つておくれ。

お磯　おゝ明日尾張町へ連れていつて、澤山買つて遣らうわいな。

喜三　これお磯、聞いたとあれば隱さぬが、今此二階の裏手より重三樣がお照樣を連出さうとした所へ、附けてをつたる逸平が多くの弟子を引連れて、お照樣を引つさらつたと、子分の者の知らせを聞き南無三寶もう是迄、所詮柔らで行つた所が直素直にやあ返すめえ、どうで命は捨物と誓ひを破つた今夜の仕儀、師匠の爲と諦めろ。

〽云ひ放したる一言は、常の氣質とわるびれず、

お磯　よく言つてくんなすつた、連添ふ夫が命を捨て、死ぬと聞いては女房が、留めねばならぬ所なれど、留めてはお前の男が立たぬ。決して留めはしないから、潔う行かしやんせ。

喜三　それぢやあ手前は得心して。

お磯　さあ女房となつて十年此方、お祖師樣ではなけれども生死にのある四度の喧嘩、小さな喧嘩は數

知れず、いつか一度は此樣な、悲しい別れのあらうとは、疾から覺悟して居ました。

〽泣くは女子の常なるに連添ふ夫の別れにも、泣かぬ心ぞいぢらしゝ。

ト兩人顏見合せ愁ひの思入あつて、

喜三　いつか一度は斯ういふ事の、あらうと覺悟して居たとは、女に稀な手前の心、是で己も未練がなく思ひの儘に今日の仕返し、後へ噂の殘る樣左ながらも神影流の極意を受けた喜三郎、腕の強さを見せて遣らう。

お磯　私も一緒に行きたいが、喜三郎の仕返しに女房が一緒に行つたなどゝ、云はれた日には後日の名折れ、とても死ぬ氣で行かしやんすなら、誰も連れずに只一人、潔よう行かしやんせ。

〽お前が死なば共々に、死ぬる心でござんすが、二人死んだら後は闇、死にたい命を生延はり、お前の骨を拾つた上、

〽此子をば守り立てゝ、二代目の腕と云はして喜三郎の、名前を繼がす心ゆゑ、そんな愚痴はあるまいが、死なば一緒と云つたのに、水臭い女だと、

〽必ず恨んで下さんすなと、誠顯ず親切に、

喜三　男勝りの手前故、跡の苦勞は少しもねえが、然し多くの出入屋敷、是ぞといふ後見が、なけりや

甚三　あ御用が勤まらねえ、あゝ甚三に逢つて行きてえものだ。

（此以前より甚三出て、門口に窺ひ居て、）其お頼みは何なりとも、命に掛けて頼まれませう。

ト甚三内へはひる。兩人見て、

喜三　や、思ひがけなき紅絹裏甚三。

甚三　今梅吉に今日の樣子、殘らず聞いて出掛けて來ました。

喜三　すりや、さつきからの一部始終を。

お磯　委しく聞いてござんしたか。

甚三　此期に臨み兎やかうと、餘計な事は言ひませぬ。ちつとも早く親分には、其仕返しに行きなせえ、今云ひなすつた跡の事は、及ばずながら是迄に、何の役にも立たねえ者が、紅絹裏甚三と人樣に知られる樣になつたのも、皆親分のお蔭故お世話をするは恩返し。又長藏や佐吉を初め多くの子分があるからは、跡を決して案じずに腕一ぱいにやんなせえ。神影流の極意迄極めた腕の親分故、とッ百人の相手でも左りばかりで澤山だが、どういふ不意の手段があつて、萬に一つ犬死に死んだらそれ迄わつちらが、弔ひ軍の仕返しは、命に掛けて首を取り、お前の墓へ手向けます。

〽假にも親子の附合とて、親切見えし一言に、

喜三　いや頼もしい其詞、不断は無口な男だが、斯ういふ時には大丈夫、くれ〴〵頼むは小僧が事、
お磯　跡の所も甚三さんへ頼んだ上は、門出を祝うて、
〽無事をば願ふ神棚の、徳利に添へる土器も、晴れぬ心の薄曇り、涙隠して取並べ、
ト お磯神棚の造酒徳利、お備へを載せし小三方へ供物を盛りし土器を載せ、喜三郎の前へ置き、
さあ、是で別れの杯を。
喜三　おゝ、目出度く祝つて出掛けよう。(トこれより床と下座の打合の合方になり、喜三郎土器を取り上げる、お磯徳利の酒をつぐ、喜三郎呑んで甚三にさし、)さあ甚三、こりやお手前へ。
甚三　先づ姉さんから。
お磯　これ、遠慮する所ぢやあないわね。
甚三　それぢやあお先へ。(ト土器を取る、お磯つぐ、甚三呑んで、)親分お前へ。
ト 喜三郎へ返す、又お磯つぎ、喜三郎呑んで、
喜三　さあ、これが別れだ。(トお磯へさす。甚三酌をする。)
お磯　一ぱいおくれ。(ト一口呑み咽せる思入、是にて喜之松起上り、)
喜之　おつかあ、おいらも呑みたい。

喜三　あゝ、蟲が知らすか。
甚三　親分、爭はれねえものだな。
お磯　さあ、是を半分遣りませう。（ト呑みさしを呑ませる。喜之松呑んで、）
喜之　あい、父さん。（ト喜三郎へさす。）
喜三　おゝ。
　〽又いつの世に廻り逢ふ、事かと惜しむ憂別れ、
　それぢやあこれで納めよう。（ト喜三郎呑み仕舞ひ、三人宜しくあつて、）
お磯　目出度く濟んだ上からは、
喜三　丁度幸ひ、拵へた浴衣を出してくれ。
お磯　あい〳〵。
　〽あいとお磯が押入より、取出す浴衣に七字の題目、
　　トお磯押入より、白地の題目を書きし浴衣を出す。
甚三　や、浴衣に書きし題目は。
喜三　喧嘩を止めて今日からは、髮こそあるが坊主の氣で、昨日わざ〳〵上人へ、賴んで書いて貰つた

甚三　が、今となつちやお前表か、あの世へ曠の死裝束。
(傍にあるいろはの手本を取つて、)それも七字これも七字、昔は知らず親分は、今の浮世に義を磨く男達のいゝ手本。
お磯　いろはにほへとちりぬると、書いたる假名の字の留めを。
喜三　續けて横に讀む時は、とがなくてしす我終、
甚三　思へば筆の命毛捨て、
お磯　泣くにもまさる、
三人　思ひぢやなあ。
〽互ひに胸迄突きかくる涙を隱す三人が、心の內の苦しさは、堤を越ゆる秋の水堰留め兼ねし如くなり。
ト三人宜しく泣かぬ愁ひの思入。本釣鐘を打込み、
喜三　や、今のは八つか九つか。
お磯　更け行く月も西へ行く、
甚三　今日は九月の十一日。

喜三　翌日は御難の辰の口。（ト此時揚幕にて題目太鼓を打つ）

甚三　祖師の利益に助かるか。

お磯　胡麻のお萩も手向となるか。

喜三　生死二つは今夜の大難。（ト此時大鳥の門弟兩人掛るを捉へて）こいつも丁度よい道連。

甚三　其行先も深川に、

お磯　お通夜に參る講中の、

喜三　太鼓に紛れて、おゝさうだ。（ト土器を持ち立上る。）

〽門出を祝ふ土器も碎けて元の土となる、身の行末ぞ、

ト喜三郎土器を打付け向ふを見込みきつとなる、お磯浴衣を廣げ着せようといふ思入、甚三傍にある脇差を差出す、喜之松書置の双紙を見せる、此の模樣宜しく三重題目太鼓にて、

ト波の音にてつなぎ、直ぐ引返す。

大切　新大橋仕返しの場

〔役名――腕の喜三郎、神崎甚内、曙源太、幻長藏、紅絹裏甚三、大鳥逸平、子分、門弟等。〕

（新大橋の場）――本舞臺下の方へ斜に橋、袂の所欄干附、橋普請の足場取附けあり、下の方新大橋普請小家といふ傍示杭、竹矢來、橋の下斜に屋形船、後ろ一面の黒幕、舞臺前は河の面の模様、總て新大橋普請の體。爰に繩にて結びし四つ手駕籠を下し、上手に逸平下手に伴藏、半平駕籠舁二人立掛り居る、波の音佃にて幕明く、

逸平　いや駕籠の者、大きに大儀であつた。爰迄來れば氣遣ひない、一休みして行きやれ。

駕舁　有難うござりまする。

伴藏　扨今日は大鳥氏、

兩人　よい手番ひでござりました。

逸平　是と申すも、各方の骨折、御苦勞に存する。

　　トばた／＼波の音にて軍藏、大助、栗平、運八走り出て來り、

四人　大鳥氏、これにござりましたか。

逸平　お、四人の衆待兼ねてをつた。して重三郎めは、如何でござつた。

軍藏　唯一と打と思ひの外、なか／＼手ごはき立振舞、

大助　爰を先途と打合ふ所へ、喜三郎の子分めが、思ひ／＼の得物を引提げ、

栗平　加勢をなす故是非なくも、多勢に無勢手に餘り、
運八　其儘にして、
四人　歸りました。
逸平　さすればお照を引上げしは、我々共が仕業といふ事喜三郎が聞いたは必定、定めて今に子分の者
　後追掛けて參るであらう、何に致せ素町人でも、喜三郎が仕込み故、
栗平　腕に覺えがあると云へば、油斷のならぬ子分の者、
逸平　いや假令何人來ようとも恐るゝには足らねども、折角こつちへ引上げし、お照を此儘彼奴等の方
　へ、取返されぬ樣にしたい。
伴藏　いかさま、是迄伴うて取返されてはつまらぬもの。
栗平　とあつて是なる駕籠屋ばかりに、任してやられるものでもなし。
逸平　こりや御苦勞ながら御兩所には、深川の別莊へお照を同道して下せえ。
伴藏　心得ました、我々兩人附添ひ參れば、行く道筋は大丈夫。
栗平　必ず氣遣ひ召さるゝな。
逸平　何分ともにお賴み申す。

兩人　然らば何れも、
皆々　御苦勞でござる。
逸平　駕籠の者頼むぞ。
駕舁　畏りました。
伴藏　どれ、假橋から、
兩人　參らうか。（ト件の駕籠に兩人付添ひ下手へはひる。）
逸平　先これで安堵致した、然し子分の者の參る迄爰に待つても居られまい。幸の橋普請矢來の内で待合さう。
運八　何樣屈竟の足溜り、
逸平　それ、矢來を破らつせえ。
四人　心得ました。
ト矢來を破り、皆々内へはひり忍ぶ。ばた／＼になり、花道より以前の源太一本差尻端折りにて駈けて出て來る、後より長藏同じく一本差尻はし折にて追掛け出て來り、
長藏　これ源太、待てと云つたら待たねえのか。

源太　しみしつこい、待たねえと云ふに。

長藏　さうでもあらうが、たつた一言、いひてえ事があるから聞いてくれ。

源太　えゝ聞いて居る暇はねえわえ。

ト振拂ひ舞臺へ來るを、追掛け來る立廻りちよつとあつて、長藏源太を留め、

長藏　これほど己が留めるのに、待つてくれてもいゝぢやあねえか。

源太　何の用か知らねえが、おらあ命を捨てる體、聞いても無駄だ、放してくれ。

長藏　さあ其命を捨てるのは、さつき打たれた親分の仕返しに行くのだらうが、さうならさうと此己に、譯を聞かして行つてくんねえ。

源太　さあさつき兄貴を逸平が、蹴たり踏んだりする所を門口から見た故に、飛込まうと思つたが、家で喧嘩をした日にやあ腕を切つた兄貴に濟まず、怺へ憎い蟲を怺へ仕返しに行く此源太、包み隱した胸の內、斯うぶちまけてしまつたら、どうぞ留めずに遣つてくれろ。

長藏　おゝよく打明けて云つてくれた、それでこそ友達だ。己も手前を留めやあしねえ、今追掛けて來る道で、梅吉に出ツくはし樣子を聞いてびつくりしたが、お照樣を逸平が引拂つて行つたといふ事、それ故親分も捨てゝ置かれず、後から來るといふ噂を、聞いたを幸ひ親分に、替つて己が取

返さうと、追掛けて來て此事を、一言手前に云ひてえのだ。
源太　おゝそんなら今夜逸平が、お照樣を引上げたとか、さう聞く上は猶の事、生けちやあ置かれぬ。是から直に遺恨の仕返し。
長藏　斯う打明けた上からは、一人命は捨てさせねえ、己も共々手前の加勢。
源太　して逸平の行く先は、
長藏　深川の別莊へ、連れて行つたといふ噂。
源太　それぢやあ是から橋を越え、（ト兩人きつとなる、此時後へ逸平等四人出て、）
逸平　いや深川迄行くに及ばぬ、其逸平は爰に居る。
源太　や、思ひがけねえ大鳥逸平。
長藏　何故あつて此所に。
逸平　うぬ等の來るのを、
四人　待つて居た。
源太　待つて居たとは神妙な、さつきうぬ等が引上げた、お照樣はいふに及ばず、
長藏　遺恨に遺恨の重なる奴等、命を添へて貰ひたい。

逸平　如何にもうぬ等がいふ通り、お照は己が引上げた。假令一日半日でも、女房にしにやあ武士が立たぬ、それ故駕籠でこつそりと、媒人なしに別莊で己が自由にする心だ。其前祝ひに二人とも、命を取るから覺悟なせ。

源太
長藏　何をこしやくな。

ト波の音になり、逸平拔掛けるを源太留める、四人拔掛けるを長藏足場の小丸太にて留める。逸平拔いて切つて掛る。源太もぬき合せて立廻り、是にて矢來の繩を切りばら〳〵とこはれ、逸平源太立廻りながら橋の上へ行き立廻り、長藏は袂にて四人を相手に立廻りあつて橋の上へ行き、入亂れになり逸平長藏と立廻り、源太四人を相手に烈しき立廻り、よき程にばた〳〵になり、花道より前幕の喜三郎題目の着附尻端折り、一本差にて出て來り此中へ割つて入り、四人を左右へ投退け、蹴倒し、眞中へ來る。逸平上手に刀を振上げるを、喜三郎留めて引張りの見得。

源太　やゝこりや兄貴には。

長藏　誓ひを捨てゝ。

喜三　おゝ、怺へに怺へた堪忍の、二字を破つて出て來たのだ。

逸平　いやいゝ所へ喜三郎、若い者では逸平が相手にならぬと思つたに、片腕なくても骨ッぽい神影流の極意迄極めた體に切でがある、どれ三枚におろしてくれう。

喜三　えゝ、ちよこ才な其一言、祖師の利益で是迄に既に命も取られる程な、大難四ヶ度小難は數の知れ
〃　ねえ體の疵、伊豆の流罪もまぬがれて松葉ヶ谷や小松原、其追打の拔身の中土の牢へも幾度か雨
〃　乞よりやあ命乞、片瀬片腕切る迄にやあ惡い浮名も龍の口、佐渡へ渡海の浪よりも荒い氣にせえ
〃　塚原のつかの間忘れぬ師匠の娘、引上げられた其上に、八の卷より大事の傳書取られた上は是非
　　がねえ、おのが身延を捨てる氣で、仕返しに來た喜三郎、題目唱へて覺悟しろ。

逸平　もう云ふ事はそれ限か、愚痴があるなら云つて置け、今息の根を留めてくれるぞ。

源太　やあ兄貴が來りやあ百人力、

長藏　さう云ふうぬが息の根を。(ト立掛るを喜三郎留めて、)

喜三　片腕なくとも喜三郎、仕返しするなあ只一人、手前達は見物して居ろ。

兩人　それだといつて、

喜三　はて、己が命を取られたら、敵は二人で取つてくれろ。

逸平　それ面倒な、たゝんでしまへ。

皆々　合點だ。

　　ト此内喜三郎珠數にて片襷を掛け、皆々打つて掛るを喜三郎左手にて一腰を拔き立廻り、源太長藏是

非なく上下に見物して居る、逸平橋より屋根船の屋根へ飛下りる。是にて船より船頭六人浴衣三尺帶にて出て來り、逸平を見て、

船頭　や、喧嘩の相手は、

皆々　大鳥樣か。

逸平　橘屋の若い者、骨はぬすまぬ加勢しろ。

六人　合點だ。

ト此時喜三郎屋根船の上へ飛下りる。船頭六人板子、たはしの附きし竹などにて立廻り、よき見得にて後の黑幕切つて落し、川岸通り灯入の遠見になり、淨心寺へ朝參りの灯入りの萬燈を引いてとる、題目太鼓の入りし鳴物に替り、喜三郎皆々を相手に面白き立廻り、源太、長藏兩人ちよい／＼と出て邪魔になる者を追散す。とゞ船頭は皆々川へ飛込み、四人は橋より上下へ逃げて行く、逸平、喜三郎立廻つて逸平懷中より傳書の一卷を落す、喜三郎刀を下へ置き傳書を取上げ見て、

喜三　やゝ、こりや神影奧義の一卷。

逸平　南無三、それを。(ト取らうとするを、手早く懷へ入れ、刀を取上げ、)

喜三　一神齋より傳來にて師匠が年頃祕藏せしを、上へ上げしと聞きたるが、扨はおのれが盗んだな。

逸平　それ知られたら、もう是迄。

ト兩人烈しき立廻りあつて、喜三郎逸平の刀を打落し、疊み掛けてあびせ、ト〻逸平を切倒し、屋根の上にて止めを刺す。此時上手向うにて、

大勢　人殺しだ〳〵。

源太　やあ、あの人聲は。

長藏

喜三　惡い奴でも人一人、殺した日には己が下手人。源太は是を神崎樣へ窃にお屆け申してくれ。（ト件の一卷を源太へ渡し）是にて思ひ置く事なし、繩目の恥を受けぬ內に。

ト脇差を取直し、腹を切らうとするを兩人留めて、

源太　これ兄貴、早まつたことをしてくんなさんな。

喜三　いゝや生きちやあ居られねえ。放せ〳〵。（ト此時下手にて、）

甚三　いや、死ぬにやあ及ばねえ。

喜三　何と。（ト喜三郎ためらふ、下手より以前の甚三繩に掛り、是を子分兩人繩を取り出て來る。）

源太　や、思ひ掛けねえ紅絹裏甚三。

喜三　何で繩目に掛つたのだ。

長藏　是にやあ何ぞ、

三人　仔細があらう。
甚三　仔細と云ふは外でもねえ。さつき親分に頼まれて後に殘る氣で居たが、考へて見りやあ年若な己が後見する時は、姉さんとても若い身に、つまらぬ浮名を受けにやあならねえ。それよりいつそ身替りに、己が行つたら親分の體に何の恙もなけりやあ、家は元より多くの子分、人の助けになる事故、繩に掛つて行く甚三。
勘太　達つて二人へ頼み故、
谷松　これから直に奉行所へ。
源太　いゝや、其身替りは此源太、己が喧嘩の起り故、脊負つて行かにあならねえ體。
長藏　いや手前は姉御もある身の上、後に殘つて居るがいゝ、此身替りは己が行く。
源太　いゝや手前は遣られねえ、おれが行く。
長藏　いゝや、己が行かにやあならねえ。（ト兩人爭ふ。）
甚三　えゝふたりともによしみのねえ、折角己が繩に迄掛つて來たを無駄にする氣か、是非とも己が行かにやあならぬえ。（トきつといふ、喜三郎思入あつて、）
喜三　其志しは忝いが、三人の內誰にもせよ、己が替りに命を捨てさせ、それでいゝとは喜三郎が

どの面さげて居られるものだ。此身替りに立つよりも、お照様重三様お二人様の身の落着き、就いちやあお磯や小僧が行方、跡の面倒見てくりやれ。

源太 そんならどうでも、

長藏
甚三 親分は。

トきつと云ひ三人顔見合せ、是非なき思入。此時ばた〳〵になり、下手矢來の蔭より、甚内羽織袴にて出て、

甚内 やれ死ぬに及ばぬ喜三郎、樣子は具に聞いたるぞ。

皆々 やあ、あなたは神崎甚内樣。

喜三 此喜三郎は人殺し、何故お止めなされしぞ。

甚内 おゝ、止めしは外ならず、其逸平は神影の奧義の一卷奪ひし盜賊、殺害なしても苦しうない。

長藏 すりや、親分の身の上に、

甚内 恙はないぞ。安堵致せ。

皆々 えゝ有難うござりまする。(ト是にて子分甚三の繩を解く。)

源太 何は兎もあれ大事の一卷。(ト件の一卷を出し、)いざ、お受取り下さりませ。

ト甚内へ渡す、甚内改めて見て、

甚内　紛ふかたなき神影の一卷、慥に身共が落手致した。まつた娘照事も某が只今是へ參る道にて、助けし所へ折よくも、重三郎が參りし故二人諸共知邊の方へ預け置けば、氣遣ひ致すな。

喜三　扨は御無事でござりましたか。ちえゝ忝い。

甚内　測らず一卷手に入る上は、此悅びに勘當許し、夫婦となして家名を讓らん。

喜三　すりや、御勘氣御免にて、御家督お讓りなさるとか。

源太　是にてあなたの御家といひ、

甚三　又親分始め我々迄。

長藏　何から何迄無事の納り。

四人　ちえゝ忝ない。（ト皆々悅ぶ思入、此時船頭後ろより窺ひ出て、）

舟頭　うぬ、喜三郎め。（ト組付くを、振解いて引附ける。）

甚内　最早しらむか、鳴く烏。

源太　明ければ、九月十二日。

甚内　其敷革の御難より。

長藏　危い命を。

三人　脫れたは、

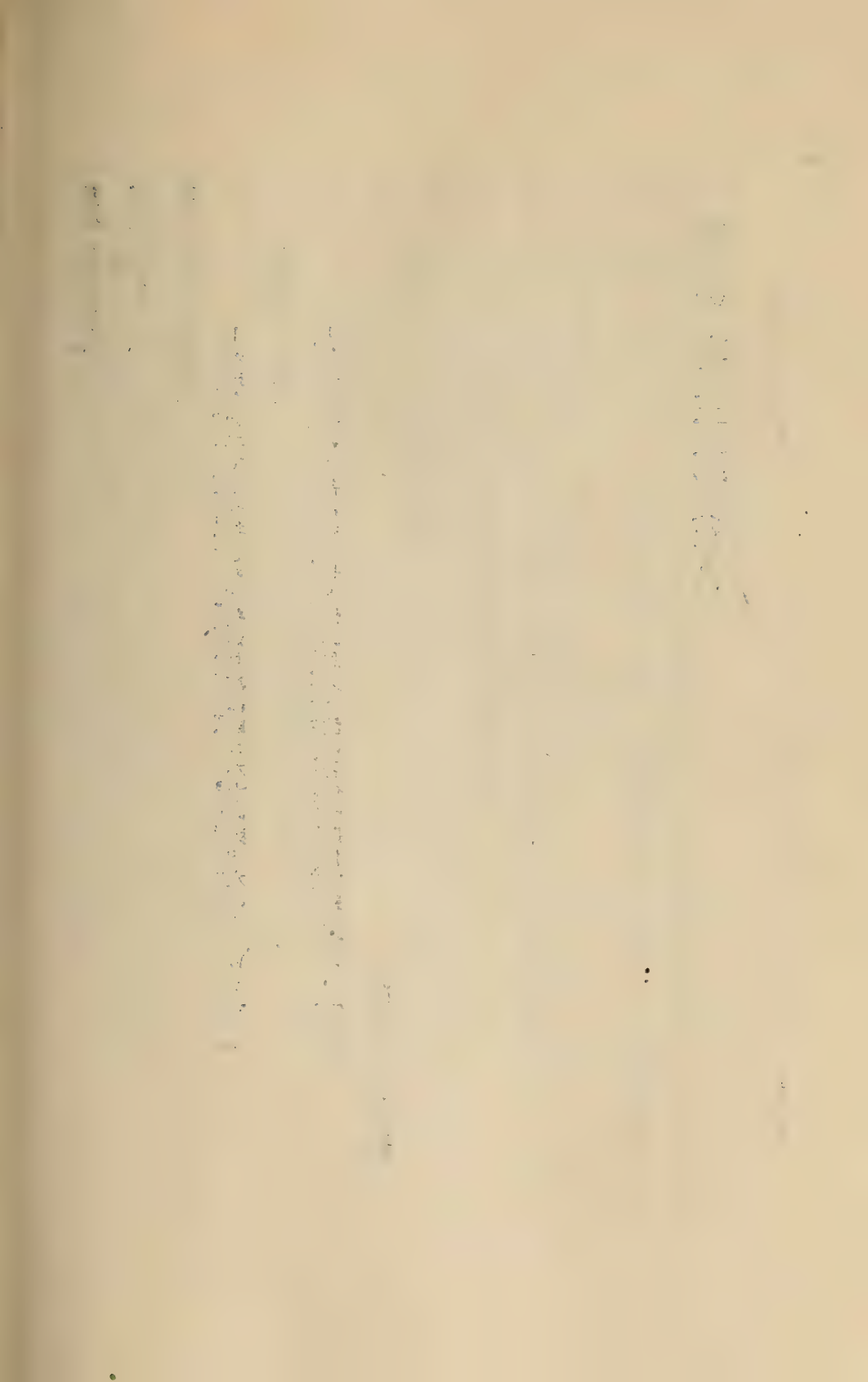
喜三　これも高祖の、

御利益だなあ。

ト船頭を片手で川へ打込む。船頭見事に轉るを木の頭。水の花パッと立つ。

ト片手で拜む。甚內初め皆々悅ぶ思入。波の音佃へ題目太鼓を冠せ、宜しく、

ひやうし幕

腕の喜三郎（終り）

第二番目は先代の曙山が勤めし世話狂言お竹の由來をお好みに幸ひ兄も一座故勸めし所大役の重なる後へ又候や思ひもよらぬ初役と達て辭退にお馴染の薄き身として水仕業馴れぬ勝手の働きは覺束なきも御贔屓と坂間の主人や彦助の助力を頼みに左振流槍の傳書を奪はれし父次郎右衛門のあだがたき積る恨みの丈五郎を討たんとねらふ孝女の鑑

身贔屓勤功刃

「孝女お竹」は元治元年、作者四十九歳の十月、守田座に稿下したもの、長吉長五郎の狂言と綴り合せになつてゐて、「雙蝶色成曙」といふ大名題が冠せられてあつた。此の少し前にお竹大日如來の出開帳があり、又天王橋に女の仇討があつたのを當込んで上場されたのだといふ。田之助所演のものゝ一として、又「狂言百種」中に作者が輯錄したるものである。扉へ掲げた「語り」は明治十六年三月市村座に上場された時のもので、兄とあるのは田之助の兄助高屋高助のことである。

書下しの時の役割は、中村芝翫（坂間勘右衞門）、澤村田之助（お竹）、關三十郎（橋本次郎右衞門）、市川小文次（紙屑買ひ彥助）、中村翫太郎（坂間の下男九助）、坂東松次郎（次郎右衞門孫梅之助）、市川九藏（倉橋丈五郎）、市川はま七（横江典六）、中村駒十郎（鞆岡傳八）等であつた。

挿繪にしたのは豊原國周筆の錦繪である。

大正十三年十月　　編者誌す

身光於竹功（孝女お竹――二幕）

序幕

傳馬町坂間の場

返し

錦糸堀浪宅の場

天王橋敵討の場

〔役名――坂間の下女お竹實は橋本娘お竹、坂間勘右衞門、浪士橋本次郎右衞門、倉橋丈五郎、紙屑買ひ彦助實は橋本の若黨彦助、坂間の下男九助、同手代幸七、法印喜樂院、岩田伴藏、鞆岡傳六、横江典藏、坂間の下男權介。讀賣りおたの、同駒吉、同三吉、同文治等。〕

（坂間臺所の場）――本舞臺四間通し常足の二重、後へ奥行深く、蹴込板羽目正面に大黒柱火の用心の張札、紺の長暖簾、上手一間杉戸、下手膳棚、鐵網の戸棚・米櫃・二重ずつと上に惣銅壺の竈釜茶釜をかけ、之に續いて置流し、水瓶手桶、臺所道具宜しく飾り、いつもの所門口、下の方黒塀、すべて大傳馬町坂間臺所の體。上手荒神棚へ向ひ喜樂院緋の衣輪袈裟法印の打扮にて前の盆の上へ幣束を載せ、竈〱の祓をして居る、下の方に權介飯焚の打扮にて行燈の掃除をして居る、〇△□の乞食三人立掛りゐる。此見得稽古唄錫杖の音にて幕明く。

喜樂　内外清淨六根清淨々々。

○　どうぞ一文下さいまし。

權介　手の內は四ッ限りだ、もう今日は出たのがねえ。

□　さう仰しやらずと、お手殘りを一文づゝ下さいまし。

△　五人も十人も居りはしませぬ、たつた三人でござります。

權介　三人だらうが一人だらうが出たのはねえ、明日來い。

○　此の飯炊ぐらゐ因業な奴はねえ、ついに呉れたことがねえ。

△　それに引替へ女中衆のお竹どんはよく呉れるの。

□　さうよ手の內のねえ時は、魚のあらか燗ざまし、何かしら呉れぬことはねえ。

○　あんな優しい女中衆はねえ。

□　又こんな呉れねえ飯炊もねえ。

權介　えゝやかましい、早く行かねえか。

△　どつちがやかましいか知れやあしねえ。

トわや／＼と下手へ入る。此の中喜樂院出たらめに錫杖を振立て、

喜樂　あいみん納受敬つて申す。（ト錫杖を振仕舞ひ竈〆をしまふ。）

權介　これは〳〵御苦勞さまでござりました。

喜樂　權介どの、だいぶ日が短くなりましたな。

權介　いや短くなつたところか、七ツを打つと直暮れます、嘸お忙しうござりませう。

喜樂　いやも、ちりん〳〵の飛脚同樣、朝から晩迄駈歩きます。

ト奥より手代幸七斉流しにて、盆の上へ錢包みを載せ、これを持出て來り、

幸七　はい、お初穂を差上げます。

喜樂　これは〳〵有難うござります。（ト錢包みを取つて箱へ入れ、）ときに旦那樣は、御在宿にござります
かな。

幸七　今日は午から碁が初り、奥においでなされます。ちと、あちらへお通りなされませ。

喜樂　いえ〳〵竈〆の法印は、何所の家へ參つてもお臺所がお座敷でござりまする。いや、當月は正五
九月で秋葉講の集め金が五拾兩集りました、どうか御面倒でも旦那樣に御預かりなされて下さ
りますやう、お願ひ申上げまする。（ト懷より五十兩包を出し、幸七へ渡す。）

幸七　畏りましてござります、金子は宜しうござりませうな。

喜樂　横町の兩替屋で、改めて貰ひました。
幸七　左樣なら、此儘お預り申します、（ト幸七金包みを持ち奧へ入る。）
喜樂　權介どの、今日は評判のお竹どのが見えませぬの。
權介　今御新造樣のお使ひで、油を買ひに行きました。
喜樂　お使ひに參られたか、いや、私もはう〴〵へ參りますが、お竹どのゝ樣な女中はない、器量がよくて世辭がよくて、御奉公を大事に勤め、今時あんな女中はない。
權介　そりや實にござりませぬ、どの女でも洗ひ流しの飯を麁末に致しますが、あのお竹どんに限つては流しの隅へ網を張り、洗ひ流しは一粒でも流してしまふことはねえ、拾ひ溜めてそれを喰ひ、親が貧乏な暮しゆゑ我喰ふ分を、內々で內へ持たして遣る樣子、今に是がお上へ知れ、親孝行の御褒美で、靑緡でも貰ひませう。
喜樂　きつと貰ふに違ひない、お慈悲深い此方のお家へあゝいふ女中の來るといふは、目の寄る所へ玉とやらだ。
　　ト奧より幸七書附を持出て來り、
幸七　秋葉講の五十兩たしかにお預り申しました、念の爲預の一札を差上げます。

喜樂　これは〳〵御念の入つた、御書付には及びませぬに、折角の思召しゆゑお貰ひ申して置きまする
ト預證文を出す、喜樂院取つて、
（ト紙入へいれ、）左樣なら日短故、もうお暇申しまする。
幸七　まだ宜しいではござりませぬか。
喜樂　いえ、廻り場が多うござりますれば、
權介　でもまだ八ツを打ちませぬに、
喜樂　八ツ迄に二三軒廻らねばなりませぬ。
幸七　左樣なれば、喜樂院樣、
喜樂　お奧へ宜しくお願ひ申します。
ト稽古唄にて喜樂院風呂敷包みの箱を提げ花道へ入る。奧より九助紺の着附、眞鍮胴がれの脇差を差し出て來り、
九助　おゝ幸七どん、爰に居なすつたか、旦那樣がお呼びなすつてだ。
幸七　何ぞ御用でもあるのかえ。
九助　何だかわしやァしらねえが、幸七〳〵と奧で呼んでござつた。

幸七 はてな、碁のお相手でもするのか知らぬ。（ト思入あつて奥へ入る。）
九助 これ權公、お竹どんはまだ歸らねえか。
權介 油ばかりなら歸る時分だが、情人の所へでも廻つたかしらん。
九助 なに、お竹どんに情人がある。
權介 あるとも〳〵、暇せえあると毎日行かア。
九助 そりアあまあ何所だえ。
權介 横町の大日樣よ、えらく信心をすることよ。
九助 えゝ忌へましい、惡く氣を持たせやアがる、割掛けた薪でも早く割つてしまへ。
權介 今煙草を買つて來て、それから割らう。
九助 煙草を買ふなら、五十のを十匁買つて下ッし、（ト百錢を出す。）
權介 おつと合點だ。
九介 五十ぢやア釣錢を出さうな、
權介 出さずア半分おれが貰はう。
九助 いや慾張つた奴だな。

ト權助は花道へ入る。九助四邊へ思入あつて、懐から以前の五十兩包みを出し、

九助　今喜樂院が持つて來た秋葉講の五十兩、碁に身が入つてうつかりと用箪笥の引出しへ入れた積りで、旦那樣が上へ置いたをちよろまかしたが、どうで今夜は夜明し故、明日になればぼんやりと何所へ置いたか御存じあるめえ、犬も歩けば棒に當ると、思ひ掛けなく五十兩手に入つたは有難い。此段取りぢやあお竹めもうんと言ふ事を聞くかも知れねえ、さうなる時は今夜にも直に連出し此金で、夫婦ぐらしの小商ひ、いや四文商ひも面倒だ、損料蒲團でも買込んで、二朱八でも貸すとしよう。(ト煙草を喫まうとして、)えゝ煙草はなく粉ばかりで、すくつてのまにやア、一服のめねえ。

ト九助煙草をのみ居る。稽古唄にて、花道よりお竹やつし裝、前垂掛け下女の打扮、小風呂敷の包を持出て來り、

お竹　今お午の跡を仕舞つたのに、もうお八ツの子が下つて來る、秋の末とはいひながら、ても日の短いことぢやわいなア。(ト言ひながら舞臺へ來り、)はい、今歸りましたわいな。

九助　おゝお竹どん、歸つたか。

お竹　もし、御新造樣がお呼びなされてゞはなかつたかいな。

九助　いや／＼お呼びなさりやァしねえ。

お竹　それは嬉しうござんした、下村が込んで居たので、大きに遅うなつたわいな。

トお竹奥へ行かうとするを、袖をとらへて、

九助　これさ、お竹どん、ちよつと待つてくんねえ。

お竹　何ぞ用がござんすか。

九助　さあ、用があるから呼んだのよ。

お竹　わたしに用とは、何でござんす。

九助　何だといふがあるものか、邊りに誰も人はなし、男が女の手を取つて用と言ふのは外にやァね色よい返事をしてくんねえ。（ト手を捉へ引寄せるを、振拂ひ。）

お竹　ほんにお前の樣な人はない、間がな隙がなわたしをとらへ猥らな事を言はしやんすが、一度が二度と度重なれば、其分にはせぬほどに、重ねて言うて下さんすな。

九助　どうして／＼言ふなと言ふはそつちが無理、此の美くしい顏を見て、誰が默つて居るものか、どうで一度は持つ男、うんと言つてくんねぇな。

お竹　えゝも、又してもく其樣な事言はしやんすと、わたしや御上へ告げるぞえ。

九助　お ゝ告げるなら告げるがいゝ、盗みどろぼうしやあしめえし、何のそれを恐れるものか、野暮を言はずとうんと言ひねえ、お前せえ得心すりやァ直に連出し随徳寺、路用も爰に五十両。

お竹　え、

九助　いやさ、五十ぢやあねえ後生だから、己と色になつてくんねえ。（ト九助お竹が引ばる。）

お竹　えゝもしつこい、爰放して下さんせ。

九助　どうして〳〵、うんと言はにやァ放しやしねえ。（ト是れにてお竹思入あつて、）

お竹　おゝ放さぬと言はしやんすりや、（ト九助の手を振ほどき捻上げる。）

九助　あいた〳〵。（トびつくりする。）

お竹　ても仰山な、（ト九助を突放し、）顔わいなァ。（トにつこり笑ひ、唄になり、奥へ入る。九助起上り、）

九助　はて顔に似合はぬお竹が力、親父は橋本次郎右衛門とて、左振流の槍の名人、流石は手者の娘だけ、彼女も剣術をやると見える、こりや腕づくではいかぬわえ。（ト思入あつて、側に落散りあるお竹の簪を取り上げ、）こりやお竹が此間御新造様から貰つた簪、落して行つたは天のあたへ、是を用箪笥の側へ置き、五十両盗んだと此簪を證據となし、彼女に科を塗付けて、戀のかなはぬ意趣返し、こいつァ旨え手つがひだ。

ト奥にて幸七の聲にて、

幸七　九助どん〳〵、旦那樣がお呼びなされます。

九助　はい〳〵、今參ります。いや、旦那の前へ五十兩うつかり持つては行かれねえ、何所ぞへ隱して置きてえが、氣の付かねえ所がありさうなものだ。おツとある〳〵、晩迄の忍ばせ所は幸ひの紙屑籠、よもやこゝへは氣が付くまい。（ト下手の隅に掛けてある紙屑籠へ五十兩包みを入れ、）斯うして置けば大丈夫。

幸七　九助どん〳〵。

九助　えゝ忙しねえ、今行くといふに、

ト九助紙屑籠を見返り〳〵奥へ入ろ。ト花道より以前の權助紙包みの煙草を持出て來り、後より紙屑買彥助やつし裝麻風呂敷を脊負ひ、秤の入りし鐵砲笊を持出て來り、花道にて、

彥助　もし〳〵、そこへおいでなされますは、權介どんではございませぬか。

權介　おゝお竹どんの宿の彥助どのか、よく精が出ますの。

彥助　いやも、貧乏世帶は一日も休まれませぬ。ときにまだ屑は溜りませぬか。

權介　溜らぬ所か、しつかり溜つて居る。

彦助　それはよい時參りました、ちつとも早くお貰ひ申しませう。（ト兩人舞臺へ來り內へ入り、）お竹どのは、何所へか參りましたか。

權介　奥の使で外へ出たが、いや、履物があるから歸つたと見える。

彦助　左樣でござりますか。（ト腰を掛ける。權介紙屑籠を取つて、）

權介　それ、こんなに溜つて居る。（ト彦助取つて、）

彦助　これはよつぽど目方がござります。（ト秤を出し掛けようとするを、）

權介　あゝこれ掛けるには及ばねえ、正直なお前の事、いゝ加減に置いて行かつしやい。

ト紙屑籠より鐵砲笊の中へ打ちあける。

彦助　それは有難うござりまする。左樣なら百文にお貰ひ申しまする。（ト財布から百錢を出す。）

權介　紙屑や醬油樽は九助野郎の役得だが、あいつはいつも外へ賣る故、內證で賣つて上げるから默つて居て下せえ。

彦助　畏りましてござりまする。

權介　ときに、お竹どんに用でもあるかえ。

彦助　はい、ちよつと逢つて參りたうござりまする。

權介　ぢやァ呼んで進ぜるから、一ぷく喫んで待たつしやい。（ト煙草盆を出す。）

彥助　左樣なら、憚りながらお呼びなされて下さいまし。（ト權助奧へ入る。彥助煙草を喫みながら、）今八ツを打つた樣だが、もう日差の鹽梅では、七ツにきつう間はないわえ。

ト合方にて奧よりお竹出て來て、

お竹　御新造樣から頂戴した簪を、何所へやつたか、（ト彥助を見て、）おゝ彥助殿、來なさんしたか。

彥助　はい、お天氣の惡いので大きに御無沙汰致しました。

お竹　嘸長じけで困んなさんしたらうな。（ト彥助四邊へ思入あつて、）

彥助　お竹樣、先づ〳〵、（トお竹を上手へ直し思入あつて、）あゝいかに時世といひながら、左振流の槍の達人三百石お取りなされし橋本次郞右衛門樣のお孃樣が、召慣れもせぬ木綿物、襷前垂身に纏ひ手足の胼もお厭ひなく、一季半季の水仕奉公、あゝおいとしうござりまする。

お竹　さあ、それも此身は年若ゆゑ、今どの樣な苦勞をするとも、長い月日の其中には、昔語りにする樣な又よい事もあらうなれど、お年取られし父樣が、三年此方幾せの御苦勞、それ故兎角御病氣勝ちにて、此間から瘧とやら、若しもの事がなければよいと、お案じ申す其のせいか、打續いて夢見の惡さ、梅之助に樣子を聞けば、利口な樣でも子供故、委しい事が分からぬが、少しはお快

い方か、どうぢやぞいの。

彦助　いいえ、大きにお快い方でござりまする。それにお兄い樣の松太郎樣がおいでなされましたら、お力になりませうに、五年後に御死去なされ、跡にはお孫の梅之助樣、御苦勞多い其中へかてゝ加へて我々の、力づくにも才覺にも及ばぬ程な御苦勞がござります故、どうしてもお肥立が遲うござります。

お竹　むゝ、して其父樣の御苦勞とは、どんな事ぢやぞいの。

彦助　さあ其御苦勞と申しまするは、先達御家中の平岡鄕右衞門殿の弟御丈五郎殿が、親切に再々尋ね參られて、其日の代に困るを見兼ね、金子十兩用立て呉れ、誠實意と思ひしに、底巧みのある事にて、金十兩と記せし手形の金と十との其の間へ、五の字を一字書入れて十兩借りしを五十兩と申しかゝりて此程より、日每々々の矢の催促、みすみす知れし謀書ながら名前に旦那の實印あれば、此黑白を分けるには殿のお名をも出さねばならず、其所を憚り言譯なせば、弱身へ付込み聞入れず、今日が日限の切迫故、どうしたものとといつおいつ商賣も手に付きませぬ。

お竹　そゝ、そりや父さんが巧みに乘り、心よからぬ丈五郎より金子をお借りなされし故、貧の中に輪を掛けて其御苦勞をなされますとか、どうか仕樣はないことかいの。

彥助　さアみす〳〵借りぬ金なれど證據なければ言譯立たず、とあつてそれを返すには、容易に出來ぬ五十兩、爰が御恩の返しどころ、都合致さにやならぬ身も五十兩は扨置いて、五十の錢にも困るわたくし、實は途方にくれまする。

お竹　そりやまア困つた事ぢやわいな。（ト兩人じつと思入。時の鐘。彥助思入あつて、）

彥助　あの鐘は七ツでござりますな、暮れる迄にもう四五軒お得意を廻りながら、五十兩は出來ずともせめて五兩か三兩の金の工面を致しませう。

お竹　親類とてもあらざれば、力と賴むはそなたばかり、どうぞ才覺してくりやいの。

彥助　いえ金は世界の湧物なれば、出來ぬ〳〵と言ふ中に出來まいものでもござりませぬ、必ずお案じなされまするな。

お竹　力を付けてくりやれども、才覺なすは五十兩、

彥助　何をいふにも煎じ詰め、秋の日足の忙しなく、

お竹　今日を限りとあるからは、

彥助　思案途方に暮六ツまでに、

お竹　どうかそなたの才覺で、

彦助　都合致すでござりませう。

お竹　そんなら彦助、

彦助　お暇致すでござります。（ト門口へ出で、）あゝ又明日は雨だわえ。

　　ト矢張稽古唄にて彦助思入あつて花道へ入る。お竹後を見送り思入

お竹　身貧な故とはいひながら、御思案深き父様が丈五郎が巧みに乗り、五十兩の才覺に御苦勞なさるおいとしさ、お年の上に此程より重き癪のお煩ひ、御苦勞なさるが元となり、若しもの事でもなければよいが、只さへ哀れな秋の末、あゝ心に掛ることぢやわいなア。

　　トじつと思入、時の鐘、床の淨瑠璃になり、

上るり　〽秋の日の短きあしの難波潟、隠すとすれど穂に出るお竹が涙満汐にうちよる弟梅之助、門より内をさし覗き、

　　ト此内お竹思入。花道より梅之助芥子坊主やつし裝、重箱を風呂敷に包み、斜に脊負ひ出て來り、門口から内を見て、

梅之　もし、姉さん〳〵。

お竹　おゝ梅之助か。

梅之　其所へ行てもよいかえ。
お竹　よいとも〳〵、幸ひ四邊に人目もなし、遠慮はない此處へ來や。
梅之　あい〳〵。
ヘあたり忍んで姉の側、（ト梅之助お竹の側へ來る。）
お竹　だいぶ今日は遲かつたの。
梅之　あい、今日は朝早くお祖父さんのお藥取りに行つて、それからお母さんの御命日故、おてら參りに行つたわいの。
お竹　おゝ、それはようお參りに行つてくりやつた。嘸姉樣がお悅びであらうわいの。
梅之　よくお墓の掃除をして、お花を上げて拜んで來ました。
お竹　ほんにそなたは私の兄さん松太郎樣のわすれ形見、まことは伯母に當れどもまだ年若に姉と呼ばせ、兄弟同樣にして居る故、一日逢はねば氣にかゝり、昨日もそなたが來ぬ故に若し風でも引きはせぬかと、たいてい案じたことではない。
梅之　昨日は强い吹降りに、傘がない故來なんだわいの。
お竹　さうして、お飯はどうしやつた。

梅之　お飯は食べませなんだ。

お竹　え、あの、御ぜんを焚かぬのか。

梅之　お飯を焚きたくつても、お米を買ふお錢がなく、彦助が來たならば買つて貰はうと思つたに、あれが來ぬ故仕方なく、お芋を買つて喰べました。

お竹　おゝ、それは嘸ひもじかつたであらう、ちよつと雨止みの其の中に取りに來ればよかつたに、其替り今日は又二日ぶり御ぜんがあるから、早う持つて行つて喰べたがよい。

梅之　それは嬉しうございます。

へ風呂敷解いて取出す昔模樣も破れ果てゝ、萬事に事をかけ重箱、

ト梅之助風呂敷より兀げたる重箱を出し、

是へ入れて下さりませ。

お竹　あい〳〵。

へ我喰ふ食を親里へ貢ぐ心の香の物、切目も厚き親子の情合、

ト お竹戸棚より切溜を出し、中にある飯と澤庵の香の物を重へ詰めるを、梅之助見て、

梅之　もし姉さん、そんなに澤山下さつたらお前の食べるのがあるまいぞえ。

お竹　あゝ、いや〳〵犬になるとも大所の犬になれと譬の通り、此方のお家は御大家故、洗ひ流しの御飯にて、わたしが三度喰べるのはあり餘る程あるわいの。（ト此中お竹飯をこぼし、）あゝ是はしたりつい御ぜんをこぼした、拾つてくりやいの。

梅之　あい〳〵、澤山こぼして下さりませ。

〽こぼれし飯を悦んで拾ふ弟のいぢらしく、

ト梅之助こぼれし飯を悦んで拾ひ喰ふを、お竹見て愁ひの思入、

お竹　あゝいかに貧苦に迫ればとて、こぼれし御ぜんを悦んで拾ふ心の情なさ、

〽世が世であらば知行取り、橋本次郎右衛門が嫡子故、下女や下男にかしづかれ、上より御扶持を賜はれば、

〽三度の食に飢ゑもせず、心の儘に喰べられように、洗ひ流しやこぼれた飯で、今日の命を繋ぐ身は、今も言ふた大所の、犬畜生も同じこと、

〽思へばはかない身の上やと、咽び入つてぞ泣きにける。

梅之　これ姉さん、そんなに泣いて下さるな、今も家でお祖父様が、一人で悔しい〳〵と言うて泣いて

ございました。お祖父様といひ、お前といひ、そんなに泣いて下さると、己等も悲しくなります
る。

〽顔へ手を當てしく〳〵と、わけも涙にくれければ、

お竹　そんなら昨日父様も一人でお泣きなされしとか、大方それは彦助が先刻話した金の事、ついに是まで涙などお出しなされたことのない氣性のお方が、其樣にお泣きなさるとは、よく〳〵に悔しいことがあればこそ、どうぞお身體に障らねばよいが、さうして、御病氣は何うぢやぞいの。

梅之　あい、毎日瘧で日が暮れると、顫へておいでなされますが、わたしが十五になる迄は、死にたくないと仰しやります、どうか早うお治りなさる、よいお藥はござりませぬか。

お竹　それもこれも今の間に天道樣のお惠みで、御病氣もお治りなされ、元のお身にならうから、必ずきな〳〵思やんな。

梅之　あい〳〵、早く私が大きくなり、お殿樣から御扶持を貰ひ、お祖父樣や姉樣をお樂にさせたうござります。

お竹　おゝよう言うてくりやつた、早うそなたも成人して、御扶持を貰ふ樣になつてたもいの。

梅之　さうなつたらお飯も、澤山家で喰べられますかえ。

お竹　おゝ喰べられるとも〳〵、幾らでも喰べられるわいの。

梅之　嬉しい〳〵。

〽利口な樣でも頑是なく、悅ぶ弟の不便さに、

お竹　さあ〳〵、それ樂しみに早う歸りや、父樣がお待ちなされてゞあらう。

梅之　そんならわたしや歸りますぞえ。

お竹　人目に掛らぬ中がよい。

梅之　あい〳〵。

〽背負風呂敷もモウ一寸足らぬ世帶にやつれし顏、お竹はじつと打守り、

ト　お竹梅之助に風呂敷を背負せながら顏を見て、

お竹　三度の食がとぼしい故、心のせいか太いもせず、日に增し瘦せるそなたの顏、

梅之　いえわたしより、姉さん、お前が、

お竹　おゝ、これが瘦せいで何とせう、

〽わつとばかりに泣きたさを涙呑込み〳〵て、（ト　お竹梅之助をとらへ思入あつて）さあ〳〵、

暮れぬ中に早う行きや〳〵。

梅之　あい〳〵、（トつか〳〵と行くを、）
お竹　あ、これ、〳〵、とばつ〳〵、ついて怪我しやんな。
梅之　あい〳〵。
　　〽流石子供の頑是なく、悲しさ忘れ走り行く、後見送りて涙を拭ひ、
お竹　賢い樣でもまだ子供、外へ出ると忘れてしまひ、莞爾々々笑ふ心根が、猶更不便でならぬわいの。
　　〽影見えぬ迄伸上り、見送るお竹が後より、（トお竹伸上り見送る。奥より九助出て、）
九助　さう言つてもい〻女だ。（ト手を取るを振拂ひ、）
お竹　え〻又してもく、いやらしいことばかり、
九助　言ふのも女がい〻からだ。
お竹　此後言うて下さんすな。
　　〽案じる親に兎や角と、胸は思案にくれ近く座敷へこそは、
　　トお竹九助を突廻して、三重にて九助の顏をぴつしやり打ち、奥へ入る。跡合方、九助起上り、顏を押へ、
九助　いかに武士の娘だつて、あんまり色氣のねえ話しだ、然し女にやァ嫌はれても、金にやァ可愛が

られる男だ、ちよつと情人の顔を見ようか。(ト紙屑籠を見てびつくりなし)や、こりや紙屑が少しもない。さあ〳〵大變、ないわ〳〵、(ト紙屑籠をふるひ、うろ〳〵する、奥より以前の權介出來り)

權介　これ九助どん、何をそんなに騷ぐのだ。

九助　是が騷がずに居られるものか、此紙屑は誰が賣つた。

權介　誰が賣つたかおらあ知らねえ。

九助　どいつが賣つたか、ないわ〳〵。

權介　何がないのだ。

九助　何でもかでもないわ〳〵。

權介　ない〳〵盡しで言はうなら、役者揃ひで屑がない、それ故當つてはづれがない、大入芝居に穴がない。

九助　爰へ入れたに違ひはない、それが搜せどさつぱりない。

權介　ぜんたいお前に〆りがない、見るから間拔で智恵がない。

九助　それも生れで仕方がない。(ト拍子に掛つて九助心付き)えゝ、釣込まれたか、(ト權介をくらはす、是を道具替りの知せ。)えゝ、忌々しい。

ト紙屑籠を持ち宜しく思入、曲撥やうの鳴物にて、この道具廻る。

(橋本浪宅の場)――本舞臺三間の間前へ出して常足の二重、正面暖簾口、押入戸棚、佛檀、下手崩れたる鼠壁、上の方後へ下げて一間反古張障子家體、いつもの所竹簀戸の門口、下の方柿の立木、側に鳥脅しの棹立掛けてあり、後ろ藪疊すべて本所錦糸堀橋本浪宅の體。爰に以前の彦助瘷風呂敷砲笊を下手へ置き、大和風呂へ土瓶を掛け藥を煎じゐる。此の見得時の鐘、床の三重にて道具留る。

〽松の常磐に武士の色は替ねど浪々に、尾羽打からせし橋本が見る影もなき佗住居、哀れな啼く〳〵や群烏、

ト柿の木へ烏來て啼き立てる。彦助思入あつて、

彦助 先刻からカア〳〵と軒端近く啼く烏、吉事か凶事か知らねども、旦那樣の御病氣といひ、何かに付けて氣になるに心に障る烏啼、どれ追ひ散らしてやらうか。

〽竿にて追へば啼きつれて逃行く烏引違へ、塒に歸る梅之助、

ト彦助竿にて烏を追ふ、花道より以前の梅之助出て來り、直に舞臺へ來り、

梅之 これ、ぢいやア、何故柿を落すのだ。

彥助　これはお坊樣お歸りなされましたか、柿を落すのではござりませぬ、此柿へ烏が來てやかましく啼きます故、追散したのでござりまする。

梅之　そりや柿を取りに來るのぢやわいの。

彥助　大方左樣でござりませう。お坊樣一つ取つて上げませうか。

梅之　いや〳〵、其柿はお祖父樣がお好き故、己等は喰べたくない。

彥助　それはお穩順しうござりますな。然し一つや半分は上つても宜しうござりませう。

梅之　いや〳〵、己等は柿よりか姉さんから貰うて來た、此の重箱のお飯を、（ト言ひ掛けるを）

彥助　あゝもしお坊樣、何うしたものでござります、わたくしなりやこそよけれ、餘所の人の居る所でそんなさもしいことを仰しやりますな。

梅之　あい〳〵、今度から言はぬわいの。

彥助　さあ〳〵、奥へおいでなされて、早くおあがりなされませ。

梅之　あい〳〵。

〽重箱抱へとつかはと、納戸の内へ入りにけり、（ト梅之助重を持ち奥へ入る。）

〽折柄爰へ畔傳ひ、道も曲りし丈五郎、門口より聲高に、

ト花道より丈五郎逆熊の鬘奔流し、大小にて少し酒に醉ひたる思入にて楊枝を遣ひながら出て、直に門口へ來て、

丈五　次郎右衛門殿、お宅でござるか。

彥助　これは〳〵丈五郎樣、ようこそおいでなされました。

丈五　餘りよくも參らぬが、用立申した五十兩、日限故に取りに來た。

彥助　何は兎もあれ、先々これへ、

丈五　免してくりやれ。

〽金を功に上座へ直り、（ト丈五郎思入あつて上手へ通り、）

次郎右衛門殿に、某が參つたと言つてくりやれ。

彥助　畏りましてござりまする。（ト上手家體にて、次郎右衛門の聲にて、）

次郎　あいや知らせに及ばぬ、次郎右衛門只今それへ參るであらう。

〽破れ障子を押明けて立出る、主次郎右衛門、

ト上手家體より次郎右衛門病ひ鉢卷、切繼裝刀を杖に出來り、中央へ住ひ。

扨此程より再度の御入來、御苦勞千萬にござる。

丈五　再度の苦勞を思はつしやるなら、用達申した五十兩、今日日限故、耳を揃へ身共に返濟めさるであらう。

次郎　誠に以て其許へ申譯なきことながら、種々樣々に心を盡せど、何を申すも流浪の身にて、未才覺成かねますれば、今暫くの宥免を、

丈五　いや其言譯は聞倦きた、金が出來ずば金の替り身共が所望の品もあれば、それを替りに貰ひたい。

次郎　むう、金の替りに其許が、所望の品と仰しやるは、

丈五　外でもござらぬ、日頃から此丈五郎が所望致す左振流の傳書の一卷、それを抵當に貰ひたい。

次郎　望みとあらば金子の替り、差上げようと申したいが、橋本の家數代の重器傳書は一子相傳故、他家へはどうも上げられぬ。

丈五　然らば傳書は貰ふまい、未だ身共も獨身故、貴殿の息女お竹どの不束なれど身共が妻に、金を引手に貰ひたい。

次郎　それはいとより易き事、直にも妻女に差上げんと申したけれど是も又、緣組許りは當人が得心なさねば差上げられぬ。

丈五　傳書は一子相傳にて、娘は得心なさゞれば呉れぬとあらば貰ふまい、其替り用立つた金を只今貰

ひたい。

次郎　御尤もにはござれども才覺ならぬ五十兩、氣の毒ながら今というては、

丈五　出來ねば傳書を讓らるゝか、但しは娘を下さるか。

次郎　それも只今申す通り兩樣とも上げられぬ。

〽聞くより氣早の丈五郎、刀おつ取り詰寄つて、（ト丈五郎きつとなり）

丈五　殿の御不興を蒙りて、扶持放されの活計に迫り、娘を町家へ水仕の奉公、見るに忍びず古朋輩のよしみを以て貸したる金に、五十兩は扨置いて二朱の金の才覺も容易な事では出來ぬ故、情をもつて傳書なり娘なりどちらなりとも五十兩の抵當に取らうと言つてやるに、ならぬといふは踏む氣だな、二朱や一分の金ではねえ、五十兩では首がねえぞ、命が入らずば兎も角も、踏まれるものなら踏んで見やれ。

次郎　一旦借りた恩義もあれば、返さぬ所存はなけれども、身共が借りたは金十兩、いつの間にかは證文も五十兩と金高上り、今の身共には大金故、其才覺が出來申さぬ。

丈五　はて、異な事を言はるゝが、十兩貸した覺えはない、しかも小判で五十兩貸した證據は後日の爲、印形するゑし此證文、書いた物が物を言ふぞ。

入筆なせし證文をおし開いて見せければ彦助はたまりえず、
ト丈五郎懷から證文を出し、上手の方へ開き見せる。彦助始終口惜しき思入にて、

彦助　それは正しく最初より、まッかくなさん巧みにて、金十兩の間を明け、あとより五の字を書入れて、五十兩となしたる證文、

丈五　それでは是を謀書といふか、

彦助　はて知れた事、墨色の出合はぬ所がたしかな證據、

丈五　いかに貧苦に迫ればとて、恩を仇にて返す氣か、此の身に覺えないことを、入筆なせしと言ひがかり、己が貸せしを返さぬ氣か。

次郎　何しに左樣な所存がござらう。

丈五　いや〳〵返さぬ氣に違ひない、僞り衒をさつしやらずと、切取りなすもまゝある習ひ。己を殺して踏まつしやれ。

尻引まくり體を摺付け、（ト丈五郎尻をまくり、次郎右衞門へ體を突付け。）

さあ腕から切るか脛から切るか、こなたの眼から見る時は取るに足らねえ小野郎だが、小兒の折から柔術劍術たゝつ込んだ丈五郎、瘦腕ながら骨が硬へ、喰ふや喰はずの扶持放され、路頭に迷

ふ身から出た錆刀ぢやア切れめえぜ、
〽弱身へ付込む傍若無人、見るに忍びず彦助が、（ト丈五郎宜しく思入、彦助怺へ兼ね、）

彦助　こりやもうどうも、（ト立掛るを、）

次郎　こりや〳〵、立騒いでどうしたものだ、一旦貧苦を救はれし恩金なれば如何程でも、調達なして返さにやならぬ。

彦助　でも、みす〳〵違ふ四十兩、

次郎　はて、天道實を照し給へば、

丈五　や、

次郎　いつか明りが立たうわい、
〽流石は老の思慮深くせき立つ彦助留むる折しも、お竹を宙に引立てゝ、下男の九助喜樂院手代も共に入り來り、（ト此中花道の揚幕にて、）

九助　うしやアがれ〳〵、
トばた〳〵にて九助お竹を引立て、後より喜樂院幸七付添ひ出て來り、直に舞臺へ來て、
さア親元へ斷らにやあならねえ。

お竹　どうぞお免しなされて下さりませいな。
　ト、いふ聲聞いて、（ト次郎右衛門お竹を見て、）
次郎　や、そちは娘、
彦助　お竹樣でござりますか、
お竹　はあゝ、（ト内へ入り泣伏す、皆々も入り。）
九助　いくら泣いてもほざいても、料簡しねえぞ、覺悟しろ。
次郎　こりやいかなる仔細あつて、斯く娘を手ごめになすぞ。
九助　大それた事をした故に、宿へ屆けに、
三人　連れて來たのだ。
彦助　なに、大それた事とは、
九助　此のお竹が盜みをしました。
次郎
彦助　え、（トびつくりなす。）
お竹　何で私が盜みなぞを、
九助　幾ら汝がしらをきつても、證據があるから仕方がねえ。

次郎　して盗みしといふ、其品は、
九助　外でもねえ二分金で五十兩といふ金を盗んだ。
次郎　すりや五十兩といふ金を、
丈五　はゝあ、親の難義を救ふ氣で、扨はお竹が盗みをしたか、いや呆れ返つた話しだなア。
彦助　してその金の持主は、
　　へ言ふに法印しや〳〵り出で、（ト喜樂院前へ出て、）
喜樂　まつぴら御免下さりませ、其五十兩の出所は、秋葉講の寄金にて此喜樂院が坂間樣へ、お預け申した五十兩、
幸七　しかも金子を受取つて旦那へお渡し申したは、則手代の此幸七、
九助　其時旦那は碁に身が入り、うつかり其所らへ置いたのを、ちよろまかしたる此お竹、
彦助　して盗みしには、證據あつてか、
九助　おゝ證據のねえ事いふものか、秋葉講の寄金を入れてあつた簞笥の前に、御新造樣から此間お竹が貰つた此の簪、落ちてあつたが盗んだ證據、
喜樂　遁れぬ筋の五十兩、預けた主は喜樂院、

幸七　又受取つた此の幸七、掛り合ひ故一緒に來ました。

九助　何と盗んだに相違はあるめえが、

ヘ言ふに主從顏見合せ、

彥助　扨は最前お話し申せし、今日につゞまる五十兩、

次郎　すりやそれ故に、

ヘ後言ひさして親の爲、扨は盗みを致せしかと、言ふに言はれぬ此場の仕儀、丈五郎は始終を聞き、

ト此の中次郎右衞門、彥助顏見合せ、五十兩の金をお竹が盗みしといふ思入。

丈五　いや親が親なら子も子とて、大恩のある五十兩、返さぬ心の氣を受けつぎ年端もゆかぬ娘の身で主人の金を五十兩掠め取るとは大膽不敵、あゝ蛙の子は蛙だなあ。

喜樂　さあお竹どの、慥な證據があるからは、盗んだ金を返して下さい。

幸七　受取つたのがわし故に、返らぬ時は掛り合ひ、金さへ返れば內分に旦那樣へ願ふから、

喜樂　隱さず金を出して下せえ。

お竹　おまへ方迄共々に、盗みし樣に言はしやんすが、わたしや覺えはござんせぬ、幼い時より今日が

日迄、人樣の物寄片し取つた覺えはござんせぬ。

九助　なに、ねえことがあるものか、目串の附いてるお主の體、

喜樂　何所に隱して持つて居るか、

幸七　早く出してしまひなせえ。

お竹　假令何と言はしやんしても、わたしや覺えはござんせぬ。

九助　うぬ、さうぬかしやァ手籠になして、

〽襟がみ取つて懷へさし込む手先を拂ひのけ、（ト九助お竹を捉へ懷へ手を入れるを拂ひ退け。）

お竹　え丶女子の肌へ手を入れて、其儘にはして置かぬぞ。

喜樂　いや、隱すはどうでも、

幸七　怪しいお竹、（ト兩人立掛るを、）

お竹　え丶又しても、知らぬといふに、

〽二人が手先を突退ければ、（ト喜樂院幸七立掛るを突きのける、丈五郎思入あつて）

丈五　いや、知らぬとは言はれまい。

お竹　なんと、

丈五　いらぬおせゝに出る樣だが、盜んだ證據は此親の次郎右衞門から今日己に、返さにやならねえ恩借の五十兩のせつぱ故、てつきりこりやアさしがねで盜み取つたに違えねえ、いかに其身に火が付けばとて、娘に盜みをさせるとは、義を立通す誠の武士の、風上へは置けぬ話しだ。
〽丈五郎が當言に面皮を失ふ次郎右衞門。お竹が襟がみむづと執り、
ト次郎右衞門思入あつて、お竹を引付ける、彥助留めて、
彥助　こりやお竹樣を、何となされまする。
次郎　おゝ、何ともせぬ不孝の折檻、言はう樣ないおのれはなア、（ト誂の合方になり、）我は讒者の其爲に、殿の御不興蒙むつて、三年此の方流浪なし、斯く困窮致せども二君に仕へぬ我潔白、左振流の槍術では極意を極めし某故、諸家より抱へに參りしかど、他家の知行は取らぬ所存、又其の方も十人並に手かけ妾に黃金を積み望む者もあつたれど、不義の富貴は浮べる雲、よしや水仕の奉公でも誠の道を守らせんと、斯く迄義をば立通す親に恥辱をあたへし其方、何故金子を掠めしぞ、さあ、有體に白狀致せ、品によつては生けては置かぬぞ。
〽義を立通す次郎右衞門、悔し淚の折檻に、
お竹　さゝ、其お腹立は御尤もながら、身に覺えない此の濡衣、何しに盜みを致しませうぞ。

次郎　白狀なさずば身の潔白、いつそのことに、

〽刀の柄へ手を掛けるを、彦助あわて押しとゞめ、（ト次郎右衛門切らうとするを彦助押し留め、）

彦助　あゝもし旦那樣、暫くお待ち下さりませ。

〽留むるをしほに次郎右衛門さし控へれば彦助が、（ト彦助次郎右衛門を留めお竹に向ひ、）

もしお竹樣、お隱しなさるも無理ならねど、跡に證據が殘りしからは、隱しても隱されませぬ有體に仰しやりませ、定めて最前わたくしがお話し申した金故に、な、親の難義を救はうと、それで盜みをなされましたか、さうでござりませう〳〵な、さすればこれも親への孝行、坂間樣へはわたくしがお詫を申しに參りますから、包み隱さずお竹さま、どうぞ言うて下さりませ。

〽だましつすかしつ彦助が思ひ違ひに、お竹の苦しさ、

お竹　其の疑ひも無理ならねど、眞實盜みし覺えはない。

彦助　すりやこれ程に申しても、覺えはないと仰しやりますか。

お竹　此場で命を取らるゝとも、知らぬ事は何所迄も、知らぬと言ふより外はない。

九助　いゝや知らぬとは拔けさせぬ、證據は其場に落散る簪。

喜樂　但し盜まぬといふ、證據がござるか。

お竹　さあ、それは、

幸七　證據がなければ、盗みしか、

お竹　さあ、

九助　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

九助　きり〳〵金を出してしまへ。

お竹　はあゝ。

〽はつとばかりに言譯も、泣くより外のことぞなき、

九助　えゝ面倒な、此上は町奉行所へそびいて行かう。

喜樂
幸七　おゝ、合點だ。

〽おゝ合點と引立つるを、父次郎右衛門押止め、

ト喜樂院幸七お竹を引立てに掛るを、次郎右衛門留めて、

次郎　いや、町奉行所へ行くに及ばぬ、假令娘が存ぜずとも其場に證據の簪殘り、疑ひ受けし上からは、紛失なせし五十兩は、身共が辨へ返上致さん。

九助　すりや紛失の五十兩、

喜樂　こなたが辨へ、

幸七　返さつしやるか。

次郎　奉公人の引負は、宿にて濟ますがこれ定法、

丈五　そちらの方が付いたらば、身共が貸した五十兩、此の恩金は如何致す。

次郎　それも金高違ふとも一旦受けた恩借故、殘らず返上致すでござらう。

丈五　然らば貸したる五十兩、

九助　又紛失の五十兩、

丈五　都合合して丁度百兩、

九助　此場で直に、

兩人　請取らう。

次郎　いや、只今とては金子がござらぬ。今宵亥中の鐘迄に、調達なしてお渡し申さう。

丈五　すりや今宵の四ツ迄に、耳を揃へて返さつしやるか。

次郎　身共も武士だ、二言はござらぬ。

丈五　むゝ、さういふ事なら、待つて遣らう。
九助　そんなら、こつちも、
喜樂 幸七　四ツを合圖に、
次郎　御念に及ばぬ、
丈五　きつと詞をつがへたぞ。

〽詞つがへて丈五郎、慾には暗き火ともし頃、打連れてこそ歸り行く、

ト丈五郎先に、三人付添ひ、花道へ入る。

〽跡にお竹は一腰取り、既に斯うよと見えければ、

トお竹次郎右衛門の差添を取つて死なうとするを、彦助留めて、

彦助　こりやお竹樣、何となされまする。
お竹　身に覺えなき事ながら、父樣へ御恥辱あたへ、申譯がない故に、
彦助　ではござりませうが死なずとも、お身のあかりが立ちませう。まあ〳〵お待ちなされませ。

〽彦助刄をもぎ取れば、

次郎　あのこゝなうろたへ者めが、一命捨て盗人の疑ひは晴るとも、十七年が其間養育なせし此親へ歎

きを掛けるを思はぬか、よしや疑ひ受けるとも、金さへ出せば濟むことなるぞ、死して再び返らざる命が金で買へようか。

お竹　とはいへ償ふ其金の、高も大まい五十兩、

彦助　又丈五郎へ返濟の、金も則ち五十兩、

お竹　兩方合して百兩の、

彦助　其の才覺が、

次郎　いや、後とも言はず調ふ百兩、

兩人　え、そりやまア何うして、

次郎　浪人なして二君に仕へず、三年此の方病ひ勝に、其日の煙も立兼ねて、三度の食さへお竹より貰うて過す程なれば、着類調度も賣代なし、何一品もあらざれど、左振流の傳書の一卷、又殿樣より拜領なせし來國行の此差添、こればかりは手放さず、今日迄は所持なしたが、寶は其身のさし合せ、賣代なして百兩の金子を調へ彼等に渡し、今日の難義を兔るゝ所存、（ト以前の差添を出す。）

お竹　すりや父樣には、其のお腰を、

彦助　お拂ひなさるお心か、

次郎　何れへなりとも拂うてくりやれ。
彥助　でも拜領の此のお腰を、
次郎　はて、金子返濟致さねば、我一分が相立たぬわ、
彥助　それぢやと申して、
次郎　えゝ、主の詞を用ひぬか。
彥助　はつ、畏まつてござりまする。
次郎　あゝ最前より兎や角と、心遣ひをなしたるせいか、最早瘧がきざしたやうな、
お竹　此處ではお風が當りませう。
彥助　あなたは奥にてゆつくりと、
次郎　梅之助に腰なとさすらせ、
彥助　下郎が歸りを、
次郎　待つて居るぞよ。
〽病苦に弱る次郎右衞門、工合も惡き破れ障子、引立てこそ入相に、お竹があかり立兼ぬる
古行燈へ彥助が、點す灯さへも細々と、

ト次郎右衞門思入あつて奧へ入る。彥助納戶より行燈を出し、灯りを付け、差添を風呂敷に包み

彥助　世にも稀なる來國行、惜しいものではあるけれど、旦那樣の仰せ故何所ぞへ賣つて來ずばなるまい。どれ一と走り行つて來ようか。（ト立上る。）

お竹　あゝこれ彥助、ちよつと待つてくりやいの。

彥助　はい、何ぞ御用でござりますか。

お竹　さあ、用といふのは殿樣より拜領なせし其差添、人手に渡すが惜しい故、行くのを待つてくりやいの。

彥助　又とお手には入難き來國行の差添故、仰しやる通り賣代なすは惜しいものではござりますれど、是をお拂ひなされねば、なくてならざる百兩の金子がお手に入りませぬ。

お竹　其差添を拂はずとも、どうか都合が出來ようわいの。

〽いふに彥助、不審顏、

彥助　此一腰を拂はずに、外に都合が出來ようとは、

お竹　さあ、此身を苦界へ沈めたなら、よしや百兩出來ずとも、今日のせつぱを免るゝ程の、金にならうと思ふ故、

彥助　すりや、あなたには一腰の替りに苦界へ身を賣つて、勤めをなさるお心よな。

お竹　憂ふし茂き川竹のつらい苦界の勤めをなすとも、其差添を置きたいは、明日にも歸參叶うた時、拜領なせし殿樣へ差して出ねばならぬ仕儀、貧苦に迫り親の爲め勤めをなすとも孝の道、恥かしいとも思はねば、どうぞ此身を廓へ賣り、金調へてくりやいの。

〽忠孝分けし言の葉に、彥助ハタと橫手を打ち、（ト彥助感心なせし思入にて、）

〔彥助　なるほどあなたの仰しやる通り、御歸參叶うた其折に、是がなくてはお上へ濟まぬ、こりやめつたに賣られませぬ。爰へお心がお付きなさらぬ旦那樣ではなけれども、最早一生武士を捨て御歸參なされぬ御所存か、何にも致せ後々に梅之助樣もござりますれば、賣代なさぬに如くはなし。然しながら、此の替りに貴女を廓へ私が、お世話なしては旦那樣へ申し譯のなき次第、

お竹　其の斟酌は尤もながら、此身を賣るも親の爲め、そなたの越度にせぬ程に、どうぞ世話してくりやいの。

彥助　斯ういふ事のあるはしか、屑の問屋の裏に居る判人どのと懇意になせば、それへ賴めば今宵にも相談出來て手に入る金、

お竹　さういふ知邊のあるは幸ひ、少しも早く連れて行て、金調へてくりやいの。

彦助　とはいへ、貴女を苦界へ賣つては、

お竹　はて、それもこれも親の爲め、主人の爲を思はぬか。

彦助　あゝ是非に及ばぬ、そんならこれより、

お竹　そなたの知邊へ、

彦助　お供致すでござりませう。

〽言ふに名殘の惜しまれて、不孝の詫も口なしの涙の時雨柿紅葉、散り行く門に最前より終始を窺ふ其人が、

トお竹一間へ向ひ、次郎右衛門へ詫をする思入、彦助思入あつて兩人門口へ出ようとする、此の以前よき程に花道より坂間勘右衛門、羽織着流し一本差しにて出で、以前の幸七出て來て向うの家と教へる、勘右衛門うなづき、幸七引返して入る、勘右衛門門口へ來り、内の樣子を窺ひ居て、此の時、

勘右　いや、其の身賣はさせられぬぞ。

お竹
彦助　や、さういふお聲は、

勘右　坂間勘右衛門だ。

お竹　思ひがけない旦那樣、

彥助　見苦しくとも先づ〳〵あれへ、
勘右　免してくりやれ。
　〽物数言はず座に直れば、兩人は手をつかへ、
　ト勘右衞門上手へ通り住ふ、兩人下手に控へ、
お竹　夜分と申し只お一人、
彥助　何故あつて此邊へ、
勘右　ちとそち達に用事あつて、供をば返し只一人、慥かこゝらと尋ぬる中、耳へ入つたお竹の聲、扨はと門に佇みて、しめり勝なる秋の末夜露に思はず袖を濡らした。（ト思入。）
お竹　すりや、最前からの、
彥助　此場の樣子を、
勘右　殘らず門にて聞いた故、お竹に勤めはさせられぬ。
お竹
彥助　え、
勘右　さあ、其のさせられぬといふ譯は、去年の春から奉公に己が抱へた年季中、主人へ暇も願はずにおのが氣儘に身を賣つて、つらい悲しい苦界の勤め、（ト不便なといふ思入あつて、）己が聞いては

遣られぬぞ。(トわざときつといふ。)

お竹　さし掛りたる事故に、お暇さへもお願ひ申さず、此身を賣らうと致しましたは濟まぬ譯ではござりますが、今宵四ツの鐘迄に、金調へねばならぬ仕儀、

彦助　お竹さまがお宅にて、疑ひ受けし五十兩、又其外に五十兩なければならぬ其譯も、あらかた御存じでござりませうが、せつない譯故、旦那様、

お竹　何卒お慈悲にわたくしへ、永のお暇下さるやう、

兩人　お願ひ申上げまする。

〽兩手を突いて賴むをも、態と坂間はあらけなく、(ト勘右衛門思入あって)

勘右　そりや最初から賴みなば、暇をやるまいものでもないが、只一と言の屆けもなく、苦界へ其身を沈めんとは、世にも稀なる、(ト感心だといふ思入あって、)不屆きやつ、主人を主人と思はぬ仕方來三月迄足かけ三年、年季で置きしそちが身の上、せつない譯もあらうけれど、(ト思入あって又氣を替へ、)奉公中は主人のもの、親の儲にも致させぬ、さあ、己と一緒に家へ歸りやれ。

〽口と心の裏表、鬼も佛と白露の涙ながらに主從か、

お竹　旦那様の其仰せ、返す詞はなけれども、此身を賣らねば殿様より、拜領なせし一腰を、人手に渡

さにやなりませぬ。
彦助　さすれば歸參のお許しあつても、歸參もならず一生埋れ木、何卒お慈悲を以ちまして、
勘右　いゝや、假令何と言はうとも、主人の威光で連歸り、苦界の勤めは致させぬ。
お竹　すりや、これ程に事をわけ、
彦助　お暇お願ひ申しましても、
勘右　年季中は一日でも、濫りに暇は遣はさぬぞ。
〽態と情もあら／＼しき、主の詞に是非なくも、
お竹　えゝお暇出でぬ上からは、望みの金子も手に入りませぬか。
勘右　苦界へ沈むと聞く上は、暇は遣らぬが其替り、金が入るならそちが給金、心置きなくこれを遣やれ。
〽取出す坂間勘右衛門が、深き心を包み金、お竹は手に取り打驚き、
ト勘右衛門思入あつて懐より百兩包みを出し、お竹の前へ置く、お竹取上げ見て、
お竹　やゝ、こりや大まいの、此のお金、
彦助　正しく高は小判で百兩、

お竹　そんなら是を、

勘右　苦界の勤め致させぬ替りに惠むそちが給金、是にて償ふ百兩の半は宅にてうせたる金、正しく九助が仕業とは推量なせど證據なく、其場に落散る簪がお竹が所持に拔さしもならぬ證據に盜みしと疑ひ受しは其身の不運、それ故遣はす此金で、今日につゞまる親子の難儀、兩樣共に償うて矢張奉公致してくりやれ、主人へ忠義親へ孝行、世にも稀なるそち故に語り草にも殘したく、思ふが故に暇はやらぬ。

〽傳馬町に名も高き、坂間の主勘右衞門人の司と見えにける、

お竹　すりや旦那樣には何もかも、御存じあつて此のお金を、お惠みなされて下さりますか。

彥助　何とお禮を申さうやら、

兩人　えゝ有難うござります。

〽金押頂き兩人が、悦ぶこなたの一間より、始終漏聞く次郎右衞門、病苦も忘れ立出て、

トお竹彥助嬉しき思入、一間より次郎右衞門出て來り、

次郎　これは〳〵、思ひ掛けない坂間氏、拙者はこれなる竹が實父橋本次郎右衞門でござりまする。

勘右　豫てお名前は聞及びしが、彥助どのが請人故お目にかゝるは今日が初めて、

次郎　何卒自今御懇意に、

お竹　あゝもし父様、旦那様が、（ト金包みを見せろ、次郎右衛門思入あつて）

次郎　おゝ様子は一間で殘らず聞いた、親子が難義をお救ひ下さるお慈悲深ひ思召しに、お禮を一言申さんと、失禮をも顧みず病中ながら次郎右衛門、お禮にこれ迄出でました。

〽平伏なせば手を取つて、（ト勘右衛門其手を取つて）

勘右　何のお禮に及びませう、廓の勤めも町家の勤めも奉公なすに二つはない、此百兩は十年の竹が水仕の則ち給金、誰に遠慮もいらぬ金、必ず心配さつしやるな。

次郎　あゝ武士にも優る坂間氏、お禮は詞に盡されませぬ。（ト此の中五ツの時の鐘。）

勘右　最早あれは五ツなるか、夜更けぬ中にお暇致さう。

次郎　あゝ折角おいで下されしに、何一つ風情もなく、

勘右　いやお知り人になる上は、又其中にゆつくりと、彥助どのは竹を伴ひ、疑ひ受けし五十兩、持參なして我と共々、御苦勞ながら行つて下され。

彥助　丁度お供もござりませねば、お送りかたぐ御一緒に、

お竹　お供致して參りませう。（ト此内次郎右衛門百兩包みを二つにわけ。）

次郎　然らば只今賜はりし、金子をそちは持參致しやれ。（ト彦助懷へ入れる、勘右衞門思入あつて、）

勘右　嘸や無實の汚名を受け、口惜しくも思はうが、冴行く秋の月さへも思はぬ雲に光を失ひ、暫しは闇となるとても、空行く風に皎々と光り輝く時節がござらう。

次郎　はゝ、有難き其の仰せ、此末ともに娘が身の上、

勘右　及ばずながら行末迄も、

次郎　何分宜しう、

お竹　どれ御一緒に、

彦助　お供致さん、

ト此内彦助古き小田原提灯を點け、門口へ出る、勘右衞門振返り、次郎右衞門をぢつと見て、

勘右　病苦のせいか、どうやら影が、

次郎　え、

勘右　いや、風は瘧に毒でござるぞ。

〽詞殘して立出る、主人の供に是非なくも、後へ心は殘れども打連れてこそ出て行く、後見送りて吐息をつき、

ト勘右衛門思入あつて門口へ出る、お竹次郎右衛門宜しく名殘を惜しむ思入あつて、彦助先に勘右衛門お竹付添ひ花道へ入る。次郎右衛門跡を目送り、

次郎　あゝ捨てる神あれば助ける神と、坂間氏の情にて、ゆゑなく納る今宵のせつぱ、最前殿より拜領の此差添を手放しなば切腹なさんと覺悟なせしが、いまだ命數盡きざるか思はず命が助かりし、

（ト薄き風の音、次郎右衛門瘧の思入にて、）最早時刻に發熱なるか。

〽俄の熱氣に苦しむ次郎右衛門、斯くとも知らず白粥を梅之助は携へ出で、

ト次郎右衛門苦しむ思入、奧より梅之助平膳へ土鍋茶碗箸を載せ持ち出て來り、

梅之　お祖父樣、大きに遲なはりました、お粥をお上りなされますか。

次郎　奧には火種もなかつたに、よく粥を拵へて呉れたが、今熱が發したれば、一と顫ひふるつてから喰べよう。

梅之　そんなら後に上げませう。

次郎　あゝ熱氣のせいかだるくてならぬ、ちと腰をさすつてくりやれへ

梅之　あい〳〵。

〽年はゆかねど孝心に、祖父の看病怠りなし。蟲の音のしん〳〵と更け行く秋の物淋しき

門を窺ふ丈五郎、

ト次郎右衞門よき所へ寐る。梅之助腰をさすり居る、時の鐘烈しく、花道より以前の丈五郎足早に出て來り、門口より內を窺ひ思入あつて向うへ礫を打つ。

〽合圖の礫に忍び來る惡事に荷擔の惡者ども、

トばた〳〵になり、花道より軍藏、傳八、典六いづれも着流し、大小、尻端折りにて出て來り、花道にて、

三人　丈五郎殿、

丈五　これ、（ト時の鐘、凄き合方になり、）若や逐電致せしかと、只今家內を窺ひしが、子供めに腰をさすらせて悠々と寐て居るが、一と筋繩では行かぬやつ、必ずともに油斷なく、

軍藏　いや、たとへ橋本次郎右衞門、何程の手者なりとも、

傳八　我々三人加勢なし、

典六　不意を打たば何の手間ひま、

丈五　所詮大まい五十兩金の出來る氣遣ひない、傳書の一卷奪ひ取り、お竹が家に居るこそ幸ひ、引つさらつて行く所存、骨はぬすまぬ、何れも加勢を、

三人　心得てござる。
丈五　然らば共々、
三人　先づ〳〵、
〽しめし合して門口より、（ト皆々舞臺へ來り門を明け）
丈五　橋本氏、約束の刻限故、丈五郎わざ〳〵參つた。
次郎　それは夜中に御苦勞千萬、
丈五　然し、參つた詮もなく貸したる金は出來まいな。
次郎　いや、調達なして先刻より貴殿の入來を待つてをつた。
丈五　え、すりや五十兩の金が出來たか。
次郎　改めて受納さつしやれ、（ト五十兩包みを破扇へ載せて出す。）
丈五　はて、思ひがけない、
〽ためらふこなたに次郎右衞門、瘧に苦しむ胴顫ひ、
ト丈五郎思入、次郎右衞門顫へ出す、丈五郎是を見て、
次郎右衞門殿如何さつしやつた。

次郎　いや、なんともござらぬ。
丈五　なに、ない事がござらうぞ、相好替りがたく〳〵と、歯の根も合はぬ胴顫ひ、
次郎　さあ、此顫へは、
梅之　瘧りを煩らうてござる故、
次郎　あこれ、
丈五　（思入あつて、）扨は瘧を顫つて居るか。（ト此時三人内へ入り、）
軍藏　瘧りとあれば、
三人　大丈夫。（ト皆々しめたといふ思入にて、内へ入り、）
梅之　あれ、怖いをぢさん達が、（ト次郎右衛門に縋る。）
次郎　誰かと思へば古朋輩、軍藏、傳八、典六殿、何用あつて此所へ、
傳八　丈五郎殿に伴はれ、
典六　久々にて御意得に參つた。
次郎　や、（ト思入。）
丈八　傳八殿、門口を、

傳八　心得ました。

〽門口〆てかきがね掛け、（ト傳八門をしめ、かきがねを掛ける、凄き合方、蟲の音になり。）

丈五　いや次郎右衛門殿、貴殿へ金子を用達てたは元より傳書の一卷を讓つて貰ふ下心、今此金の調達も爰やかしこの七所拵へ、是は取つたも同様だ、貴殿へ身共が進上申す、何卒替りに傳書の一卷橋本一子相傳にて他へ讓られぬことならば、此場で内見させて下せえ。

〽言ふにこなたは苦痛をこらへ、（ト次郎右衛門ぶる／＼顫へながら。）

次郎　最前も申す如く、傳書は一子相傳にて、他見を許さぬ極意の祕書、氣の毒ながら見せられぬ。

丈五　見せぬとあれば猶更に、見たくなるのが浮世の人情、斯う言ひ出したら是が非でも、是非とも内見致さにや置かぬ。

次郎　假令何と言はうとも、傳書ばかりは見せられぬ。

丈五　見せともなくば見せぬがいゝ、日頃は手者の次郎右衛門、瘧病ひは此方の幸ひ、殊に荷擔の若黨をかたらひ參つた上からは、かなはぬことと諦めて、傳書の一卷渡してしまへ。

軍藏　兎や角ぬかせば我々が、

傳八　加勢に參つた上からは、

典六　手籠になしても、取らねば置かぬ。
次郎　扨は此身の病苦を付け込み、彼等を語らひ槍術の傳書を奪はん企みなるか。
丈五　いかにも傳書が望みの某、こま言いはずと、
四人　渡してしまへッ
次郎　えゝ折悪い此病ひ、五體自由にならずとも、おのれ等如きの手籠に逢ひ、やはか一卷渡さうか、
丈五　先づ差當る此金から、(ト取りにかゝるを、)
次郎　さう聞く上は、其金子も、
丈五　何をこしやくな、
〽立蹴につたと蹴倒され起上らんとなす所を襟かみ取つて引据ゑられ、手出しもならぬ病苦の勞れ、
ト丈五郎金を取り、次郎右衛門を蹴倒す、次郎右衛門起上らうとするを、傳八、典六手を取つて引据ゑる、次郎右衛門苦痛の思入にて顫へ居る、
梅之　や、こりや、親父さんな、
〽駈寄る幼子引とらへ胸に刄を押當てゝ、(ト軍藏梅之助を捉へ胸へ白刄を差付け、)

軍藏　さあ傳書の一卷渡さずば、今此の餓鬼を刺殺すぞ。
次郎　あゝこれ、めつたなことを、
丈五　橋本一子相傳の左振流の傳授をなすか、此の梅之助が命を取らうか。
次郎　さあ、それは、
丈五　傳書の一卷身共に渡すか、
次郎　さあ、それは、
軍藏　此の小悴を殺さうか、
次郎　さあ、
四人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
丈五　えゝ面倒な、
〽肌身放さぬ傳書の一卷引出す手に縋り付き、次郎右衛門は手足も利かず、
ト丈五郎次郎右衛門の懷より袱紗包みの傳書の一卷を引出す、次郎右衛門ぶる〳〵顫へながら丈五郎を引留めるを振拂ひ、一つ鉦の合方、きつとなつて、

左振流の槍術では手者と呼ばれし次郎右衛門、瘧の病ひにぶる〳〵と五體の利かぬを幸ひに、其所へ付込み傳書を巻上げ、五十兩の其金を路用にお竹を引つさらひ、日頃の思ひを晴した上、廓へ賣つてこれも金、惡い事にやあ染易く、白痴をば脅す月代の五分もすかねえ心だが、根が石取りの懷子、黑くはいかねえ羊羹色、こなたの目から見たならば、澁の拔けねえ青柿に緣ある猿の三猿か、三本足らぬ敵役、鳥なき里の蝙蝠から罰が當ると言はれるも、百も承知で憎まれ口、
(ト次郎右衛門の肩へ足をかけ、)老耄命は貰つたぞ、(トきつと見得。)

次郎　ちえゝ口惜しや、折も折とて瘧の病ひに五體かなはず、やみ〳〵と手籠に傳書の一巻を、おのれに奪ひ取られるか、せめて彥助がをつたなら、少しは力にならうのに、

丈五　えゝやかましい、それ、何れも、

三人　合點だ。

梅之　あれえ、たれぞ來て下されいの。

〽呼べど叫べど町中を離れし在の錦糸堀、更行く庭に蟀蟋の啼く音も細き秋の末、野寺の鐘や小夜砧いとゞ哀れを添へにける。

ト時の鐘、砧、蟲の音の入りし床と下座打合せの合方になり、一巻をかせに次郎右衛門苦痛を怺へ、

皆々な相手に立廻り、此中へ梅之助入り、アレエ〳〵と邪魔になる仕組みの立廻りあつて、トヾ丈五郎一卷を奪ひ取り、

丈五　しめたぞ、傳書は手に入つた。

次郎　南無三それを、

〽支へる手先を振拂ひ、脇腹深く切込めば、流るゝ血汐の夕紅葉、塒はなれて啼きたつる夜半の烏に胸騷ぎ、取つて返せし彥助、お竹、我家の門を打叩き、

ト此内丈五郎、次郎右衞門を切下げる、梅之助あれえ〳〵と泣く故、軍藏猿轡を掛ける。ばたばたになり花道より以前のお竹彥助足早に出來り、直に舞臺へ來て門口を明けようとして明かぬゆゑ、

お竹　心ならぬ胸騷ぎ、お暇願うて歸つて來たが、もうお寐みなされたか。

彥助　もし、彥助でござります、ちよつと明けて下さりませ。

丈五　南無三、表へ來たのは彥助、（ト行燈の灯りを消し、時の鐘）闇にまぎれて、

三人　合點だ。

次郎　えゝ殘念な、深手を負ひしか。

〽いふ聲聞きて、打驚き、

お竹　やゝ、あの聲はたしかに父さん、
彦助　こりや常事ではござりませぬ。
〽門の戸こはして駈入れば、灯りは消えてしんの闇、勝手覺えし彦助が火打のほかげに丈五郎、荷擔の者も忍び足、あとをも見ずに逃げて行く、
ト彦助門の戸を踏みこはし、兩人内へ入り、忍び三重模様の床の合方にて、お竹丈五郎行當りちよつと探り合の立廻り、此の内彦助は火打箱をさぐり、しめたといふ思入にて火を打つ、是にて丈五郎三人共門口へ出て、一卷を懐より出し、にったり思入、時の鐘ばた〱にて皆々花道へ入る。次郎右衛門よろぼひながら、
次郎　おのれ丈五郎め、
〽切つて掛るを身をかはし、（ト次郎右衛門切付ける、其の手にお竹縋り、）
お竹　もし父さん、わたしでござんす。（ト此時彦助行燈へ灯りを點ける。）
次郎　おゝ、そちは娘か、遲かつた〱。（ト兩人次郎右衛門を見て、）
彦助　やゝ、こりや旦那樣には、深手の御樣子、
お竹　えゝ、むごたらしう此の樣に、何者が手を負はせました。（ト梅之助の猿轡を取り、）

梅之　姉さん、祖父樣を切つたのは、丈五郎でござります。

お竹　すりや、敵は丈五郎とな、

彦助　遠くは行くまい、跡追つ掛けて、

〽勢ひこんで駈出すを、（ト兩人駈出すを、）

次郎　やれ待て兩人、今跡追つて行つたとて、何れへ行きしか行衞は知れぬぞ。

彦助　でも、此のまゝには、

次郎　はて、今をも知れぬ我末期、そち達二人は見捨て行くか。

兩人　さあ、それは、

次郎　言ひ置く事あり、まあ〳〵待ちやれ。

兩人　はつ、（ト後へ返る。）

〽手負は苦しき息をつき、（ト竹笛入りの合方になり、）

次郎　敵は平岡丈五郎、それに荷擔の軍藏、傳八、典六といふ新參者、金子は元より傳書の一卷奪ひ取つたる曲者共、敵は後にて討つてくりやれ。先づ差當る此深手、今をも知れねば言ひ置くは、一子相傳の我槍術そちが兄松太郎へ口授口傳に傳へ置きしが、病身にて早世せし故、跡へ殘せし忘

れ形見、これなる孫の梅之助が十五歳にならば傳授なさんと、惜しからぬ命を今日迄存へしが斯く深手を負ひたれば所詮存命思ひも寄らず、女乍らも幼少より武士の娘に生れし故、教へ置きたる劍術槍術、末期の際に其方へ傳授致し置く程に、成人の後梅之助へ汝より傳授致しくれよ。

お竹　すりや、左振流の極意をば、

次郎　おゝ、息ある中に傳授なさん。

〽言ふに彦助手早くも、暖簾を取つて俄の腹帶、お竹は有合ふ鳥脅しの、棹を幸ひ當座の槍りう〳〵はつしと押しごき、身構へなしてぞ待掛けたり、

ト此内彦助暖簾の布を取り、次郎右衛門にしつかり腹帶をしめさせろ、お竹は襷を掛け棹竹を槍となしきつと思入、誂への鳴物になり、お竹棹をしごき突掛ける、次郎右衛門以前の破扇にて受留め、槍の傳授手負の立廻り宜しくあつて、

會得なせしか。

お竹　はつ、會得致してござりまする。（トお竹棹を下へ置く、彦助直に棹を取り）

彦助　御會得あらば、

〽突出す棹をてうと受け、

ト彦助お竹へ突いて掛る、お竹扇を持ち受留める、又右の鳴物になり鸚鵡返しの立廻りの中お竹忘れし所を次郎右衛門に聞く、次郎右衛門差圖をなす仕組、始終彦助かなはずをかしみの立廻り、トヾ杖を捨て平伏なす。

恐入つてござります。

次郎　おゝ、出かす〳〵、其手練を見る上は敵を討つに氣遣ひなし、然し女のことなれば、彦助そちへ助太刀賴む。

彦助　心得ましてござりまする。

次郎　まつたお竹は、梅之助が十五歳にもなつたなら、今敎へた左振の極意、

お竹　敎へまするでござりまする。（ト此時本釣鐘を打込み、）

次郎　最早近付く此身の知死期、

お竹　そんなら、これが。

彦助　此の世のお名殘、

次郎　來國行の差添は、敵討の則ち餞別、（ト件の一腰を出す。）

お竹　えゝ有難うござりまする。

〽︎押頂いて打悦ぶ、後に窺ふ下男の九助、（ト下手より以前の九助窺ひ出て、）

九助　其の一腰を、

〽︎取りに掛るを彦助が、屑籠取つて打冠せば、中より落つる金包、

ト九助取りにかゝるを彦助突廻し、側にある屑籠を冠せる、中より金包み出る、それをお竹取つて、

お竹　や、屑の中より出たる金に、

彦助　秋葉講と記せしは、

九助　己が隠して置いた金、

お竹　扨は、此身が疑ひ受けし、

彦助　金はおのれが盗みしよな、

次郎　それにて娘が汚名も晴れ、

お竹　これより敵の行衛を尋ね、

彦助　本望とげて、

九助　何を、（ト刎返すを押へ付ける。）

次郎　修羅の苦艱を、（ト次郎右衛門腹帯を解き、がつくりとなる。本釣鐘。）晴らしてくれよ。

〽哀れはかなや、

ト次郎右衛門落入る。梅之助ワツト縋り泣く、お竹一腰を持ち顔を背け泣く、彦助は九助と立廻り、引ばりの見得、宜しく本釣鐘、三重にて、

幕

ト時の鐘のツナギにて、直に引返す。

本舞臺一面の黒幕、流行唄にて幕明く。ト花道より前幕の○△□の乞食長い竹の先へ提灯を付け、落し物を拾ふ思入にて出て來り、

○　八や、もう七ツを打つたかして、吉原歸りの駕籠が通るな。

△　今し方がや〳〵と女連で通つたのは、猿若町の芝居へ行く、遠方から來た見物だな。

□　丁度芝居と女郎買は、行歸りとも同じ時刻だ。

○　こう、もう夜明に間もねえのに、あの騷ぎは何所だらう。

△　ありやア向う河岸の寄合茶屋に、米問屋の參會があつて、夜明しに騷いで居るのだ。

□　明日はおあまりはしつかりだな。

○　先づ肴の當があるから、呑代を拵へてえが、今朝は何にも拾はねえ。

△　どうでも拾ひ物は、夏のことだ。

□　おつと、其所に紙入があつた。

○　馬鹿ア言へ、子供等が粘土で拵へた紙入だ。

△　さうとは知りつゝ此間、己も拾つて手を汚した。

○　あんまり手前達は慾張るせいだ。

□　何にしろ十六文の蠟燭を、一挺費やして、まだ四文にもありつかねえ。

△　早く二三百が物を拾つて、迎ひ酒にいつぺいやりてえ。

○　それぢやア、もう一遍廻らうか。

兩人　おゝ、三べん廻つて煙草にしよう。

　ト　わや／＼と手臺を搜しながら上手へ入る。知せに附き黒幕を切つて落す。

（天王橋の場）――本舞臺三間の間正面黒幕、正面に二ツ並べし眞向の橋、天王橋といふ札打ちあり、上手戸の締りたる髪結床、柳の立木、下手番小屋、此後ろ駒寄せ、總て藏前天王橋夜更の體。かすめて波の音にて道具納まる。ト本釣鐘誂への合方になり、前幕のお竹一本差しにて出て來る。後

より彦助尻端折り一本差し、梅之助を紐にて背負ひ、竹槍を持出て來て、花道にて、

お竹　これ彦助、今の駕屋の話しでは、昨夜あれより吉原の廓へ行つた樣子なれば、爰に待受け居つたなら、一筋道故、逢ふは必定、

彦助　荷擔人共は幾人あるとも、及ばずながらわたくしが引受けますれば、あなたには目ざす敵の丈五郎、彼奴をお討ちなされませ。

お竹　假令勝れし手者なりとも、倶に天を戴かぬ親の敵の丈五郎、やはか討たいで置くべきか。

梅之　これぢいやあ、おれにも敵を討たしてくれいよ。

彦助　おゝ討たせますとも〳〵、此のぢいやあが討たせます。

梅之　嬉しい〳〵。

お竹　最早歸りの時刻なれば、

彦助　向うへ參つて待合さん。

ト兩人舞臺へ來る、此時橋の向うにて駕籠の掛聲して、駕舁四手駕を擔ぎ、橋を渡り出て來り、駕籠の内にて、

軍　これ、駕屋、ちよつとおろしてくれ。

駕昇兩人 へい〳〵畏りました。

ト駕籠を中央へ下す、お竹彦助は下手に窺ひ居る。駕籠の垂を上げ、内に軍藏乘つて居て、

軍藏 丈五郎殿や傳藏殿の駕籠は、先だと思つたら、後だな。

駕一 左樣でござります若い者が草鞋を切りまして、少し後へおくれました。

駕二 それにあなたのお宅とは參る道が違ひますから、先へ駈拔けて參りました。

軍藏 それぢやア少し待つてくれ、丈五郎どのに用事があれば、一言申して參りたい。

駕屋 へい〳〵畏りました。（ト此内お竹、彦助身拵へして前へ出で、）

彦助 もし、ちよつと承りたうござりまする、平岡丈五郎樣はまだお後でござりますか。

軍藏 おゝ丈五郎殿は後からござるが、さういふこなたは、

お竹 昨夜そち達が手を負はせし、橋本次郎右衞門が娘竹、

梅之 同じく孫の梅之助、

彦助 譜代の家來葉山彦助、

軍藏 むう、して又わいらは何でこれへ、

お竹 親の敵を討たうと思ひ、

彦助　最前より待つて居たのだ。

軍藏　こいつはたまらぬ。（ト駕籠より迯出ようとする。）

お竹　敵の片われ、おのれは血祭り、

ト　お竹拔いて切つてかゝる、是にて軍藏是非なく拔合せ立廻り、駕舁息杖にて打つてかゝる、彦助竹槍にて立廻り宜しくあつて、駕舁は人殺し〳〵と言ひながら花道へ迯げて入る、お竹軍藏を切倒し止めを差しきつと思入、彦助よく討つたといふ思入、又橋向うにて駕籠の聲する、是にて兩人來たといふ思入、彦助急くなといふこなし、下手に窺ひ居る、橋を渡り、又四ツ手駕籠一挺來る、お竹ツカツカと行き、駕籠の提灯を切落す、駕舁びつくりなし、

駕舁　はあゝ、人殺しだ、（ト駕籠を捨て迯げて入る、垂を上げると内に傳藏乘つて居る。）

傳藏　なに、人殺しだ、

ト刀を持出る、鼻の先へお竹ひらりと白刃を出す、傳藏びつくりなし、

や、われはお竹か、

お竹　敵の荷擔人覺悟なせ。

ト切つてかゝる、傳藏拔合せ立廻り、きつと見得、誂への鳴物になり、お竹傳藏と立廻る、此内彦助

竹槍にて支へることあつて、お竹傳藏の首を切落す。仕掛にて欄干へ首出る、お竹是を見てにつたり思入、此時橋の上より九助出て、

九助 うぬ、さつきの金を、

ト後から組附く、振ほどいて一刀あびせる、ワツト倒れ起上つて駕籠に附いて居る傘を取つて打つてかゝる、是にて傘にて立廻り、トゞ九助を切倒す、仕掛にて體二つに割れ倒るゝ、お竹白刃の血を振ひ息をつく、彦助下手より柄杓の附きし番手桶を持出て、お竹に水を呑せる。又橋向うにて駕籠の聲するお竹きつとなる、彦助今度は丈五郎だといふ思入、橋の向うより四ツ手駕二挺、駕舁擔ぎ出て來る。お竹ツカ〱と行き駕籠の棒鼻をとらへる。

駕舁 えゝ、何をしやアがる。(トお竹白刃を突出す、駕舁びつくりなし、駕籠をよき所へ下し、)それ、拔いて居るぞ。

駕舁三人 合點だ。

ト駕舁四人息杖にて打つてかゝる、お竹ちよつと立廻り、彦助竹槍にて四人を相手に立廻つて花道へ追込み梅之助と共に入る。此の内お竹駕籠の垂を上る、内より典六出てお竹に打つてかゝり、兩人烈しき立廻り、トゞ切倒し思入あつて殘りの駕籠の側へ行き垂を上げる、内に丈五郎ゐてびつくりなし垂を下す、お竹思入あつて窓より突込む、此内丈五郎後へ拔ける、お竹垂を上げる、内に丈五郎居ぬ故びつくりなす、丈五郎は下手へ來る、お竹は上手の方へ行き尋ね、いすかに行く仕組、駕籠を小

柝に宜しくあつて、きつと見得、是にて知せに附き、後の黒幕を切つて落す、向う藏前通り、切出しの遠見になる。

お竹　卑怯未練な丈五郎、逃隱れずと親の仇、名乘り合して勝負なせ。

丈五　むゝはゝゝ、敵なぞとはしやらツくせえ、われが親父の次郎右衞門へ情ごかしに十兩貸し、五の字を一字書入れて、五十兩と高をのぼせ、それをかせに槍術の傳書の一巻まき上げようと思ひの外に金が出來、仕組んだ巧みもいすかとなりしに、折よく瘧の病ひにて五體の利かぬを幸ひに、殺害なして奪ひ取り、立退んと思ふ折、おのれが歸つたばつかりに止めをさゝずに逃げたが過り、傳書の一巻五十兩いかにも己が奪ひ取つた、斯く名乘る上からは、一旦女房に貰はうと思つた念も今日限り、可愛さ餘つて憎さが百倍、返り討だ覺悟なせ。

お竹　おゝ、よくぞ名乘つた丈五郎、一巻渡して勝負なせ。

丈五　傳書もこゝに持つて居るが、めつたに渡してなるものか。

お竹　何をこしやくな、

ト誂への鳴物になりお竹丈五郎立廻り、よき程にばたばたになり花道より紺看板一本差の下男箱提灯を持ち、後より以前の勘右衞門羽織袴一本差し、是に續いて彦助梅之助を連出來り、花道にて舞臺

ト見て、

勘右　あれ見られよ彦助どの、あれにてお竹が打合ひゐるは、敵にてはあらざるか。

彦助　おゝ、あれぞ敵の丈五郎、

勘右　女一人で心もとない、助太刀致しやれ。

彦助　心得ました。

トばた〱にて舞臺へ來り、勘右衛門上手へ控へる、彦助竹槍にて丈五郎を支へる立廻りあつて足を突く、これにて丈五郎たぢ〱となる、懐より傳書の一卷と金包を落す、お竹は一卷彦助は金包みを取上げ、

お竹　嬉しや、是ぞ傳書の一卷、

彦助　掠め取られし金包、

丈五　南無三、それを、

ト取にかゝるを彦助隔てる、梅之助砂を取つて、丈五郎に打附ける、目へ入りし思入にて、たぢ〱となる、お竹切附け、是より手負の立廻りあつて、丈五郎の脇腹へ突込みゑぐる、丈五郎宜しく苦痛の思入あつて、ばつたり倒れる。お竹ホツト思入。勘右衛門扇にてあふぎ、

勘右　ほゝお。出來たく、猶豫致さず、とゞめく。
　　ト是にてお竹乘り掛り、彦助は梅之助の手を持添へ、
お竹
梅之　親の敵、
彦助　お主の仇、
お竹　天命思ひ、
三人　知つたるか。（ト止めをさす。）
勘右　只今これなる彦助殿より、敵の樣子は具に聞く、我より上へ言上なせば、後には決してお祟りなきぞ。
三人　えゝ有難うござります。
勘右　かゝる忠孝全きもの召抱へしは家の規模、末世末代世の鑑。（ト本釣鐘、烏笛。）
お竹　最早夜明に、橫雲晴れ。
彦助　空に輝く朝日の光。
　　トお竹よき所に立つと此の後より灯入の日の出を出し、光明のさすをお竹より光りのさす樣に見える仕掛け。

梅之　敵を討ちしも。
勘右　天の惠み、
三人　ちえゝ忝ない、
　　トお竹一巻を持ち大日如來の思入、梅之助彦助朝日を拜む心にて、お竹を拜むやうに見える仕掛、勘右衞門扇にてあふぎ立てる、此の見得引張り宜しく明六ツの時の太鼓、カケリにて、

幕

　　ト引附けると、辻打の鳴物にてつなぎ、打扮出來次第幕の引附より、駒吉、おたの、三吉、文治の四人編笠を冠り、大形揃ひの世話裝、讀賣の扮裝にて敵討の次第書を持出て來り、
駒吉　これは此の度淺草天王橋にて、親の敵を打つたる次第、
たの　並びにお竹大日如來の由來。
三吉　繪圖面と平がなにて、事明細、
文治　紙代版行代、上下にて八文、
　　ト東西へ別れ、土間棧敷へ右の次第書を配り、花道へ入る。知せに附き、跡シャギリ。

孝女お竹（終り）

《附錄》 主なる興行年表

鉢の木

年時	座名	名題	源左衛門	藤六	最明寺	白妙	玉章	出雲坊	五郎藏
安政五年十月	市村座	小春宴三組杯觴	市川小團次	市川小團次	市川海老藏	尾上菊五郎	中村歌女之丞	淺尾與六	市川米五郎
明治八年十一月	新富座	初深雪佐野鉢木	坂東彦三郎	尾上菊五郎	市川左團次	澤村訥升	中村喜代三郎	尾上梅五郎	坂東竹二郎
明治廿三年十二月	新富座	佐野經世譽免狀	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川團十郎	澤村源之助	尾上榮之助	尾上松助	尾上幸藏
明治三十四年三月	明治座	佐野經世譽免狀	市川左團次	市川左團次	市川權十郎	澤村源之助	市川莚女	市川荒次郎	市川左傳次

縮屋新助

年時	座名	名題	新助	美代吉	佐吉	源左衛門	作助	六兵衛	おつゆ	新三郎	みろ杭
萬延元年七月	市村座	八幡祭小望月賑	市川小團次	岩井条三郎	市村羽左衛門	關三十郎	市川米十郎	關三十郎	吾妻市之丞	河原崎權十郎	市川白猿
明治二月四年	中村座	百音鳥雨夜簑笠	（清七）尾上菊五郎	坂東三津五郎	（五郎吉）市川九藏	（丈左衛門）坂東龜藏	中村仲太郎	坂東龜藏	澤村其答	（清十郎）尾上菊五郎	なし

年時	座名	名題								
明治十七年七月	中島座	八幡祭宵宮遷物（まんまつりよみやのねりもの）	中村壽三郎	市川鬼丸	尾上幸藏	片岡市藏	勝川又吉	片岡市藏	坂東三津之助	片岡仁三郎	嵐璃久三郎
明治十九年六月	千歲座	三五夜中色新月（さんごやちういろのしんげつ）	市川九藏	澤村田之助	市川九藏	市川荒五郎	中村福助	坂東彥十郎	澤村千鳥	市川新藏	中村勘五郎
明治二十八年五月	市村座	帝國萬歲八幡祭（ていこくばんざいはちまんまつり）	市川九藏	市川女寅	中村芝鶴	市川八百藏	市川猿之助	市川八百藏	市川團三郎	中村芝鶴	市川喜猿
明治三十七年七月	東京座	八幡祭禮宵宮賑（はちまんまつりよみやのにぎはひ）	市川猿之助	市川女寅	尾上榮三郎	中村勘五郎	澤村訥升	中村勘五郎	尾上扇糸	市川團吉	不明
大正十二年六月	御國座	縮屋新助（ちゞみやしんすけ）	市川猿之助	中村歌門	なし	中村翫右衞門	市川段猿	澤村源十郎	澤村清之助	市川八百藏	市川八百五郎
大正十三年九月	邦樂座	八幡祭小望月賑（まんまつりよみやのにぎはひ）	中村吉右衞門	中村時藏		市川新十郎	坂東三津五郎	市川紅若	市川紅若	澤村源之助	阪東吉之丞

白浪五人男

年時	座名	名題	駄右衛門	辨天小僧	忠信	赤星	南郷	幸兵衛	宗之助	與九郎	鳶の者
文久二年三月	市村座	青砥稿花紅彩畫（あをとざうしはなのにしきゑ）	關三十郎	市村羽左衞門	河原崎權十郎	岩井粂三郎	中村芝翫	市川團藏	關花助	片岡十藏	坂東吉六
明治三年一月	守田座	館扇曾我訥芝玉（ごしよあふぎそがのとしだま）	中村芝翫	尾上菊五郎	澤村訥升	岩井紫若	市川左團次	中村仲藏	尾上多賀之丞	中村雁八	坂東喜知六
明治十七年一月	守田座	白浪五人男（しらなみごにんをとこ）	坂東彥三郎	尾上菊五郎	中村芝翫	中村翫雀	市川左團次	中村翫雀	市川小團次	坂東喜知六	尾上梅五郎
明治二十二年十月	新富座	辨天娘女男白浪（べんてんむすめめをのしらなみ）	市川團十郎	尾上菊五郎	中村壽三郎	市川小團次	市川左團次	中村福助	尾上榮之助	中村鶴藏	尾上松助
明治二十三年十月	春木座	白浪五人男（しらなみごにんをとこ）	中村芝翫	尾上菊之助	中村勘五郎	岩井松之助	市川八百藏	市川宗三郎	中村芝雀	尾上梅樹	尾上音二郎
明治三十四年三月	東京座	辨天娘女男白浪（べんてんむすめめをのしらなみ）	市川猿之助	市村家橘	中村雀三郎	實川延二郎	中村勘五郎	中村雀三郎	實川延二郎	不明	不明

村井長庵

明治三十四年八月	明治卅五年十一月	明治三十八年五月	明治四十一年三月	明治四十四年四月	明治四十四年十一月	大正三年四月	大正四年六月	大正七年四月	大正七年四月	大正七年十二月	大正十一年一月	大正十二年四月
末廣座	歌舞伎座	歌舞伎座	市村座	歌舞伎座	明治座	市村座	本郷座	歌舞伎座	帝國劇場	市村座	新富座	市村座
辨天娘女男白浪	江島育兒生兒菊	辨天娘女男白浪	青砥稿花紅彩畫	辨天小僧	辨天娘女男白浪	音菊辨天小僧	辨天娘女男白浪	辨天娘女男白浪	辨天娘女男白娘	辨天娘女男白浪	辨天娘女男白浪	辨天娘女男白浪
市川九團次	市川八百藏	尾上高麗藏	尾上榮三郎	片岡仁左衞門	市川小團次	坂東彦三郎	片岡仁左衞門	市川八百藏	松本幸四郎	中村吉右衞門	市川中車	坂東彦三郎
市川小團次	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	市村羽左衞門	澤村源之助	尾上菊五郎	市村羽左衞門	市村羽左衞門	澤村宗十郎	市川男女藏	市村羽左衞門	尾上菊五郎
尾上幸藏	市川染五郎	尾上梅幸	守田勘彌	中村芝翫	中村又五郎	守田勘彌	市川壽美藏	澤村源之助	尾上梅幸	坂東彦三郎	市村龜藏	市川男女藏
岩井松之助	尾上榮三郎	尾上榮三郎	岩井粂三郎	市川女寅	坂東秀調	坂東三津五郎	中村又五郎	中村福助	澤村宗之助	坂東三津五郎	市村竹松	尾上榮三郎
尾上菊四郎	市村家橘	市村家橘	中村駒助	市川八百藏	市川壽美藏	中村吉右衞門	市川左團次	市川左團次	尾上松助	尾上菊五郎	中村吉右衞門	大谷友右衞門
澤村村右衞門	尾上松助	尾上松助	市川新十郎	市川段四郎	淺尾工左衞門	尾上菊三郎	中村芝鶴	中村芝鶴	尾上菊四郎	市川新十郎	中村傳九郎	市川新十郎
市川莚女	尾上英造	坂東八十助	市川雷藏	市川九藏	市川鯱九	尾上芙雀	市川新之助	市村龜藏	助高屋高丸	中村おもちや	中村時藏	坂東竹三郎
中村翫太郎	片岡市藏	片岡市藏	中村竹三郎	中村翫助	澤村宇十郎	中村翫助	中村翫太郎	中村鶴藏	尾上幸藏	中村翫助	坂東村右衞門	中村翫助
不明	尾上幸藏	市川八百藏	市川高麗三郎	片岡市藏	市川左升	中村東藏	市川權三郎	片岡市藏	澤村長十郎	坂東彦三郎	中村鶴藏	尾上伊三郎

年時	文久二年八月	明治元年四月	明治十一年十月	明治十七年十一月	明治三十三年十月	明治三十二年六月	大正三年八月	大正四年三月	大正九年一月
座名	守田座	守田座	大阪戎座	新富座	東京座	明治座	演伎座	新富座	市村座
名題／役割	勸善懲惡覗機關（くわんぜんちようあくのぞきがらくり）	小田館靜涙草紙（をだのやかたしづなみざうし）	勸善懲惡覗機關（くわんぜんちようあくのぞきがらくり）	時雨雲村井破傘（しぐれぐもむらゐのやれがさ）	勸善懲惡覗機關（くわんぜんちようあくのぞきがらくり）	勸善懲惡覗機關（くわんぜんちようあくのぞきがらくり）	村井長庵（むらゐちやうあん）	村井長庵巧破傘（むらゐちやうあんたくみのやれがさ）	村井長庵（むらゐちやうあん）
長庵	市川小團次	坂東太郎	坂東太郎	市川團十郎	市川猿之助	市川左團次	市川猿之助	市川左團次	尾上菊五郎
久八	市川小團次	坂東太郎	坂東太郎	市川左團次	市川猿之助	市川左團次	市川猿之助	市川左團次	尾上菊五郎
三次	中村鶴藏	松本錦升	中村芝藏	市川左團次	實川延二郎	市川小團次	市川新之助	市川猿之助	中村吉右衛門
六右衛門	中村鶴藏	中村翫太郎	實川鴈正	市川團右衛門	中村勘五郎	市川權十郎	不明	市川團右衛門	尾上菊三郎
道十郎	嵐雛助	中村福助	坂東壽三郎	坂東家橘	市川猿之丞	市川壽美藏	市川新之助	市川壽美藏	中村東藏
千太郎	中村福助	中村福助	嵐璃笑	坂東家橘	市川猿之丞	市川米藏	市川都喜拔	市川壽美藏	坂東三津五郎
おりよ	尾上菊次郎	尾上菊次郎	中村紫琴	市川團十郎	實川延二郎	澤村源之助	岩井粂三郎	坂東秀調	市川米升
忠藏	市川市藏	市川九藏	坂東壽三郎	中村芝翫	中村勘五郎	市川壽美藏	市川升三郎	中村又五郎	坂東三津五郎
小夜衣	坂東三津五郎	嵐德之丞	嵐璃幸	中村福助	市川三壽之丞	澤村訥升	岩井松之助	市川松蔦	中村時藏

腕の喜三郎

年時	文久三年八月
座名	市村座
名題／役割	茲江戸小腕達引（こゝがえどこうでのたてひき）
喜三郎	市川小團次
おいそ	尾上菊次郎
源太	市村家橘
甚三	澤村訥升
佐吉	坂東三津五郎
十三郎	澤村訥升
長藏	市川九藏
甚内	市川團藏
逸平	片岡十藏

年時	明治七年十月	明治二十八年四月	明治三十三年五月	明治四十四年九月	大正八年十一月	大正十年一月
座名	澤村座	市村座	明治座	市村座	明治座	市村座
名題	昔江戸小腕達引（むかしえどこうでのたてひき）	兹江戸小腕達引（こゝかえどこうでのたてひき）	兹江戸小腕達引（こゝかえどこうでのたてひき）	兹江戸小腕達引（こゝかえどこうでのたてひき）	兹江戸小腕達引（こゝかえどこうでのたてひき）	兹江戸小腕達引（こゝかえどこうでのたてひき）
	中村壽三郎	市川九藏	市川左團次	中村吉右衛門	市川中車	中村吉右衛門
	市川門之助	岩井松之助	澤村源之助	尾上芙雀	坂東秀調	岩井条三郎
	坂東家橘	中村芝鶴	市川小團次	守田勘彌	市川壽美藏	坂東三津五郎
	澤村百之助	市川猿之助	市川小米	中村駒助	市川三升	大谷友右衛門
	市川女寅	澤村訥升	市川米藏	坂東三津五郎	市川小太夫	市川男女藏
	坂東家橘	市川紅若	市川左傳次	尾上紋三部	市川八百藏	市川男女藏
	澤村鈲二郎	澤村訥子	澤村訥升	尾上菊五郎	市川猿之助	尾上菊五郎
	澤村しやばく	市川八百藏	市川權十郎	中村歌六	市川段四郎	大谷友右衛門
	市川荒次郎	市川宗三郎	市川壽美藏	市川新十郎	中村鶴藏	市川新十郎

孝女お竹

年時	明治元年十月	明治十六年三月
座名	守田座	市村座
名題／役名	讐蝶色成曙（ふたつてふいろのできあき）	旭影光明暁（あさひかけくわうみやうはなし）
お竹	澤村田之助	嵐璃寛
勘右衛門	中村芝翫	澤村高助
丈五郎	市川九藏	助高屋訥子
治郎右衛門	關三十郎	市川壽美藏
彦助	市川小文次	片岡我童

大正十三年十二月十日印刷
大正十三年十二月十三日發行

『默阿彌全集第四卷』
非賣品

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　上村新輔

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷所　博文館印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂